

北斗市

# 館野6遺跡(2)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第1分冊

I 諸言

II 調査の方法

III-1 遺構の調査

V 自然科学的分析

VI 成果と問題点

引用・参考文献

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

北斗市

# 館野6遺跡(2)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

## 第1分冊

I 諸言

II 調査の方法

III-1 遺構の調査

V 自然科学的分析

VI 成果と問題点

引用・参考文献

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター





東から館野6遺跡全景 丸山を望む（東から）



東から館野6遺跡全景（東から）



調査範囲西端 H58・H61・P54・TP7等（東から）



75～77-Q～R区 削平の可能性がある地区（東から）



62R区 M2上面遺物出土状況（南から）



63R区 H38覆土 遺物出土状況（東から）



61～63-Q～R区 M2上面遺物出土状況（北から）



62S区 H29覆土遺物出土状況（東から）



60T区 M2-2下位遺物出土状況 H21覆土上位 (南から)



60T区 M2-2下位遺物出土状況 H21覆土上位  
(南から)



60T区 H21覆土下位遺物出土状況 (南から)





60S区 H21周辺 M4-6遺物出土状況（西から）



60R・S区 H21脇 Sライトレンチ土層堆積状況（南から）



62S区 H29床面検出状況（北から）



58S区 M4-6検出状況（東から）



57～59S区 Sライントレンチ土層堆積状況（南東から）



58～59R区 M4-6検出状況（南から）



59R区付近 M4-6調査状況（南東から）





60・61S区 M4-3～M4-6調査状況（西から）



58R区 M4-3～6調査状況（南から）



51～60Q区 調査範囲北壁土層堆積状況（東から）



47S区 H45覆土中M5-2遺物検出作業状況（東から）



47S区 H45覆土中M5-2点取り土器出土状況（北から）



44~46-W~Y区周辺 H19・H25~27・H40検出状況およびM6作業状況（北西から）



44a区周辺 M6-2遺物出土状況（西から）



45T区周辺 沢地形作業状況（南西から）



45T区周辺 F82・沢地形検出状況（南西から）

## 例 言

1. 本書は国土交通省北海道開発局開発建設部が行う高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事に伴い、同建設部の委託を受けて財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成21年度に実施した北斗市館野6遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地の発掘調査は第1調査平成21年度に第2調査部第4調査課が担当し、第1調査部第1調査課、第2調査部第3調査課が補佐した。
3. 現地の写真撮影は大泰司 統、吉田裕史洋、村田 大、佐藤 剛、袖岡 淳子が行い、室内での写真撮影は吉田（土器を主体）、中山 昭大（石器を主体）が行った。
4. 遺物水洗作業は袖岡・佐藤が行った。遺物整理は大泰司が行った。フローテーション作業を佐川俊一が行った。
5. 本書全体の編集は、大泰司が行った。本書の執筆は大泰司、村田、佐藤、佐川、袖岡が行い文責は文末に丸括弧で示した。現場写真図版編集を村田が、遺物写真図版編集と写真図版調整は吉田が行った。
6. 当センターにおいて当遺跡担当外の職員からも協力を得た。近世陶磁器についての観察は、鈴木信に依頼した。石器の類例については坂本尚史、遺跡が立地する段丘を自然地理的観点からの分析に藤井 浩、遺構・遺物の観点から周辺遺跡について分析に立田 理の協力を得た。
7. 現地での基本基準杭設定業務は株式会社ノース技研に委託した。
8. 現地での空中写真撮影業務は株式会社トラスト技研に委託した。
9. 炭化材樹種同定、種実同定、動物遺存体同定は 株式会社 パレオ・ラボに委託した。
10. 放射性炭素年代測定は 炭化木材については 株式会社 加速器分析研究所、土器付着炭化物については中央大学小林謙一教授に委託した。
11. 土器胎土分析は 株式会社 第四紀地質研究所に委託した。遺跡周辺土壌に含まれる珪藻化石、海綿骨針のプレバート作成と検鏡にあたって、北海道博物館 添田 雄二氏、苫小牧博物館美術館 宮地 鼓氏から指導・助言を受けた。
12. 骨の加工品について、素材となった骨の同定は 金子 浩昌氏に御指導いただいた。
13. 調査にあたっては下記の諸機関に御協力・御指導を頂いた。（順不同・敬称略）

北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課	北斗市教育委員会 森 靖裕
木古内町教育委員会 木元 豊	市立函館博物館 佐藤 智雄 大矢 京石
函館市教育委員会 野村 祐一 福田 裕二	七飯町教育委員会 山田 央
弘前大学 関根 達人 上條 信彦	厚沢町町教育委員会 石井 淳平
上ノ国町教育委員会 塚田 直哉	洞爺湖町教育委員会 角田 隆志 三谷 智広
伊達市教育委員会 青野 友哉 永谷 幸人	

## 記号等の説明

1. 遺構は下記の記号を略称として用い、確認順にアラビア数字を順に付した。  
堅穴住居：H                      堅穴住居の付属遺構 柱穴・土坑：HP 焼土・炉跡：HF  
土坑：P                      Tピット：TP                      焼土：F                      集石：S                      剥片集中：FC
2. 土層の表記は基本層序をローマ数字で、遺構の層序をアラビア数字で示した。
3. Ko-d: 駒ヶ岳d火山灰(1640年降下)・B-Tm: 白頭山—苫小牧火山灰(10世紀降下)の略号を用いた。
4. 土色の判定と、粒径(直径、径、粒径と調査者により使い分け)の表示[極小粒径(径1mm以下)、小粒径(径1~2mm)、中粒径(径2~5mm)、大粒径(径5~10mm)、極大粒径(径10mm以上)]は「新版標準土色帖」(小山・竹原 2004)を使用した。また、「A+B: AとBがほぼ同量混じる。A>B: AにBが少量混じる。A>B: AにBが微量混じる。」といった記載を用いる場合もある。調査者の意図を尊重した。
5. 挿入中の方位は真北を示す。位置は調査区(調査グリッド)で標記した。
6. 遺跡・遺構の挿入にはスケールを付した。主に堅穴住居は60分の1、土坑・焼土・Tピット・遺物集中は40分の1だが、焼土・遺物集中・補足図等で別スケールの図が混在している。
7. 遺構で出土地点を記録した遺物は、土器等：×、剥片石器等：△、礫・礫石器等：○で示し、取り上げ番号を付した。大型なものの形状に特徴のあるものはそれを図示し、取り上げ番号を付けて、図の脇に番号別に遺物の種類名を記した。まとめて出土した土器について、直線を用いて簡略に垂直分布を示したこともある。
8. 遺構図で「Na1」など「Na」付きの数字は発掘現場で用いた出土地点取り上げ番号である。文章中で「点取りNa」とした。図上で、堅穴住居跡に盛土遺構がからむ場合、盛土側を「盛」の字を付けて「盛Na1」、盛土遺構に堅穴住居の点取り遺物がからむ場合、住居番号を付加「H29Na1」などとした。さらにこれが掲載遺物だった場合は「土1」などとさらに付記した。「土1」とあるのは「その遺構の掲載番号1」の土器・土製品。「石1」は同様に石器・石製品の場合である。「盛1」とあるのは「盛土遺構・包含層の掲載番号1」。「盛石1」は同様に石器・石製品である。
9. 遺構平面図で、焼土の様に酸化した鉄分等を含む土や、砂ピットの覆土を網掛け(アマカケ)あるいは色調で示した図もある。酸化の度合いが強い場合、網掛けあるいは色調の濃淡で示した場所もある。
10. 床面や底面の極めて浅い窪みで下端が不明瞭な場所はその上端を不整な円形○、自然営力か人為か不明だが、棒状の細い杭が刺さったような痕跡も同様に示した。
11. 遺構の規模は以下の方法で「一覧表」に示した。攪乱・遺構の重複等で破壊されている場合は、現存長を丸括弧( )を付けて、不明の場合は一で示した。(単位：m)  
堅穴住居跡・土坑・Tピットおよび底面が明瞭な付属遺構：  
確認面の長軸長×短軸長/床面あるいは土坑底面の長軸長×短軸長/最深部の深さ  
焼土・遺物集中・底面が不明瞭な付属遺構：確認面の長軸長×短軸長×最深部の深さ
12. 掲載遺物については下記の縮尺を用いた。また、各々にはスケールを付してある。  
復元土器・土器拓影図：三分の一。剥片石器・石斧類・石製品：二分の一(ただし石核で大型のものは四分の一、石製品で石棒に類するものは三分の一とした)。礫・礫石器：三分の一(ただし大型の石皿・台石は六分の一)。
13. 復元土器には、口径×底径×器高(単位：cm)の計測を行った。欠損部を有する復元土器について、現存長を丸括弧を付けて表記した。
14. 掲載した石器には実測図上の正面を基準として、最大長×最大幅×最大厚(単位：cm)重さ(単位：g)の計測を行った。欠損があるものは丸括弧を付けて表示した。
15. 掲載した石器で、擦り面があるものは|—|、叩打痕にはV—Vでその範囲を示した。

## 分冊項目

### 第1分冊 本文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ-1、Ⅴ、Ⅵ

カラー図版

例言・記号等の説明

分冊項目・第一分冊 目次・挿図目次・表目次・写真目次

Ⅰ 諸言

Ⅱ 調査の方法

Ⅲ 遺構の調査と出土遺物-遺構の調査（遺構は盛土遺構以外のものをさす I章参照）

1 遺構の調査

Ⅴ 自然科学的分析

Ⅵ 成果と問題点

引用・参考文献

### 第2分冊 本文Ⅲ-2・3

第二分冊 目次・挿図目次・表目次

Ⅲ 遺構の調査と出土遺物-遺構出土の遺物（遺構は盛土遺構以外のものをさす I章参照）

2 遺構出土の土器・土製品

3 遺構出土の石器・石製品

4 表

### 第3分冊 本文Ⅳ

第三分冊 目次・挿図目次・表目次

Ⅳ 盛土遺構・包含層出土の遺物（盛土トレンチ検出の焼土F66~78関連遺物はこちらに図示した。）

1 土器・土製品

2 石器・石製品

3 骨角器

4 遺物分布図

5 表

### 第4分冊 写真図版

目次

写真図版

# 第1分冊（本文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ-1、Ⅴ、Ⅵ）目次

カラー図版	
例言	
記号等の説明	
目次・表目次・挿図目次・写真図版目次	
I 諸言	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 調査の概要	10
5 遺跡の位置と環境	16
6 周辺の遺跡	19
II 調査の方法	21
1 調査区の設定と座標値	21
2 発掘調査の方法と経過	21
3 整理作業の方法	24
4 遺物の分類	25
5 土層の区分	31
6 盛土遺構の調査	31
III 遺構の調査と出土遺物	67
1 遺構の調査（遺構は盛土遺構以外のものをさす I章参照）	67
(1) 竪穴住居	67
(2) 土坑	219
(3) Tピット	233
(4) 焼土	234
(5) 集石	251
(6) 遺物集中	251
表	253
V 自然科学的分析	275
1. 館野6遺跡から出土した動物遺体	275
2. 館野6遺跡出土の炭化種実	282
3. 館野6遺跡出土炭化材の樹種同定	288
4. 館野6遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	292
5. 北斗市館野6遺跡胎土分析 X線回折試験及び化学分析試験	299
6. 館野6遺跡出土土器付着試料の <sup>14</sup> C年代測定と較正年代	329
VI 成果と問題点	333
1. 遺構	333
2. 土器	340



3. 石器	374
4. 館野～矢不來地区の遺跡	393
引用・参考文献	400
抄録	

## 第1分冊（本文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ-1、Ⅴ、Ⅵ）挿図目次

図Ⅰ-1	両館江差自動車道にかかる発掘調査	3	図Ⅱ-24	Sライントレンチ遺物出土状況Ⅰ (62~64ライン) F78	50
図Ⅰ-2	遺跡周辺の地形分類図	5	図Ⅱ-25	Sライントレンチ遺物出土状況Ⅱ (60~62ライン) F74~77	51
図Ⅰ-3	遺跡周辺の地形(館野6遺跡、矢不來館、矢不來砲台跡)	5	図Ⅱ-26	Sライントレンチ遺物出土状況Ⅲ (58~60ライン) F67・68・70・73・74・77	52
図Ⅰ-4	館野6遺跡、本線部分(調査区設定時の基準杭)と補償道路部分(Ⅲ層上面等高線)	6	図Ⅱ-27	Sライントレンチ遺物出土状況Ⅳ (56~58ライン) F67・71・77	53
図Ⅰ-5	館野6遺跡補償道路部分の調査範囲	7	図Ⅱ-28	Sライントレンチ遺物出土状況Ⅴ (54~56ライン) F66・72	54
図Ⅰ-6	館野6遺跡 遺構配置図	7	図Ⅱ-29	Sライントレンチ土層断面図および遺物垂直分布Ⅰ(62~69ライン) H29・F78	55
図Ⅰ-7	館野6遺跡 遺構配置図24~65ライン	8	図Ⅱ-30	Sライントレンチ土層断面図および遺物垂直分布Ⅱ(54~61ライン) F66~68・70~77	56
図Ⅰ-8	館野6遺跡 遺構配置図49~88ライン	9	図Ⅱ-31	調査範囲北壁土層断面図(47~51ライン) 51ラインCトレンチ土層断面図(M5関連)	59
図Ⅰ-9	海綿骨針 海棲柱藻はか	17	図Ⅱ-32	調査範囲北壁土層断面図 (52~59ライン・M5関連)	60
図Ⅰ-10	館野6遺跡周辺遺跡地図	18	図Ⅱ-33	調査範囲北壁土層断面図(60~66ライン)	61
図Ⅱ-1	盛土とトレンチの位置関係図	22	図Ⅱ-34	M5点取り平面図・エレベーション図 (47~48-R-S[K])	62
図Ⅱ-2	遺構の位置関係図	22	図Ⅱ-35	M6分布状況(M6-1・2、H26内廃棄層1・2)	63
図Ⅱ-3	円筒下層式土器文様解説図	26	図Ⅱ-36	M6周辺住居掘り上げ土分布状況・堆積状況	64
図Ⅱ-4	円筒下層式土器部位名称	27	図Ⅱ-37	aラインM6盛土土層断面図	65
図Ⅱ-5	扁平打製石器形態分類模式図	28	図Ⅲ-1-1	H18平面図	68
図Ⅱ-6	基本土層柱状図・73ライン付近基本土層	30	図Ⅲ-1-2	H18ベンチと拡張部分	69
図Ⅱ-7	盛土分布Ⅰ(全体・M2・M5・M6)	32	図Ⅲ-1-3	H18土層断面図	70
図Ⅱ-8	盛土分布Ⅱ(M3・M4)	33	図Ⅲ-1-4	H18エレベーション図	71
図Ⅱ-9	盛土柱状Ⅰ	34	図Ⅲ-1-5	H18ベンチ部分土層断面図	72
図Ⅱ-10	盛土柱状Ⅱ	35	図Ⅲ-1-6	H18HP-1~13土層断面図	73
図Ⅱ-11	盛土推定分布Ⅰ(全体)	39	図Ⅲ-1-7	H18HP-14~29土層断面図	74
図Ⅱ-12	盛土推定分布Ⅱ(M2)	39	図Ⅲ-1-8	H18HP-30~44土層断面図	75
図Ⅱ-13	盛土推定分布Ⅲ(M3)	40	図Ⅲ-1-9	H18覆土1 遺物出土状況	76
図Ⅱ-14	盛土推定分布Ⅳ(M4)	40	図Ⅲ-1-10	H18覆土2・3 遺物出土状況	77
図Ⅱ-15	盛土推定分布Ⅴ(M5)	41			
図Ⅱ-16	盛土推定分布Ⅵ(M6)	41			
図Ⅱ-17	Aトレンチ土層断面図 F69・76	43			
図Ⅱ-18	Aトレンチ遺物出土状況Ⅰ F69・76	44			
図Ⅱ-19	Aトレンチ土層断面図および遺物垂直分布Ⅰ F69・76	45			
図Ⅱ-20	Bトレンチ土層断面図・遺物出土状況Ⅰ	46			
図Ⅱ-21	Sライントレンチ土層断面図Ⅰ (62~69ライン) F78	47			
図Ⅱ-22	Sライントレンチ土層断面図Ⅱ (54~61ライン) F66~68・70~77	48			
図Ⅱ-23	Sライントレンチおよび盛土顕出面遺物出土状況Ⅰ(62~64ライン) F78	49			

Ⅲ-1-11	H18床面遺物出土状況	78	Ⅲ-1-38	H21点取り遺物出土状況平面図 (覆土7層・床面)	122
Ⅲ-1-12	H18掘り上げ土分布状況	79	Ⅲ-1-39	H22平面図・遺物出土状況図・土層断面 図・付属遺構土層断面図	124
Ⅲ-1-13	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況1 (I群b類・II群b類土器)	80	Ⅲ-1-40	H23平面図・遺物出土状況図	125
Ⅲ-1-14	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況2 (III群a類・III群b類・IV群a類土器)	81	Ⅲ-1-41	H23土層断面図・付属遺構土層断面図	126
Ⅲ-1-15	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況3 (焼成粘土塊・土器類全般)	82	Ⅲ-1-42	H23遺物出土状況図	127
Ⅲ-1-16	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況4 (石鏝・ドリル)	83	Ⅲ-1-43	H24平面図	128
Ⅲ-1-17	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況5 (石槍又はナイフ・つまみ付きナイフ)	84	Ⅲ-1-44	H24土層断面図・付属遺構土層断面図	129
Ⅲ-1-18	H18器種別遺物覆土1～3層層位別 遺物出土状況6 (スクレイパー・両面調整石器)	85	Ⅲ-1-45	H24遺物出土状況図・炭化物出土状況 図	130
Ⅲ-1-19	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況7 (石核・Uフレイク)	86	Ⅲ-1-46	H25平面図	131
Ⅲ-1-20	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況8 (Rフレイク・剥片石器全般)	87	Ⅲ-1-47	H25遺物出土状況図	132
Ⅲ-1-21	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況9 (フレイク・石斧)	88	Ⅲ-1-48	H25土層断面図・付属遺構土層断面 図	133
Ⅲ-1-22	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況10 (北海道式石冠・扁平打製石器)	89	Ⅲ-1-49	H26平面図・土層断面図・遺物出土状況 垂直分布図	135
Ⅲ-1-23	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況11 (すり石・たたき石)	90	Ⅲ-1-50	H26遺物出土状況平面図	136
Ⅲ-1-24	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況12 (石鏝・砥石)	91	Ⅲ-1-51	H26遺物出土状況図	137
Ⅲ-1-25	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況13 (石皿・台石)	92	Ⅲ-1-52	H26付属遺構土層断面図	138
Ⅲ-1-26	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況14 (礫石器全般・礫)	93	Ⅲ-1-53	H27平面図・土層断面図・付属遺構土層 断面図	139
Ⅲ-1-27	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況15 (被熱罐・石製品)	94	Ⅲ-1-54	H27遺物出土状況図	140
Ⅲ-1-28	H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物 出土状況16 (石器全般・遺物全般)	95	Ⅲ-1-55	H28平面図	142
Ⅲ-1-29	H19平面図	110	Ⅲ-1-56	H28土層断面図・付属遺構土層断面 図	143
Ⅲ-1-30	H19土層断面図・H19付属遺構土層 断面図	111	Ⅲ-1-57	H28遺物出土状況図	144
Ⅲ-1-31	H19点取り遺物出土状況図	112	Ⅲ-1-58	H29平面図・エレベーション図	146
Ⅲ-1-32	H20平面図・土層断面図	115	Ⅲ-1-59	H29土層断面図・遺物出土状況垂直 分布図	147
Ⅲ-1-33	H20付属遺構土層断面図	116	Ⅲ-1-60	H29遺物出土状況図 (M2盛土基底部・H29覆土上位)	148
Ⅲ-1-34	H20遺物出土状況図	117	Ⅲ-1-61	H29遺物出土状況図 (H29覆土下位・覆土最下位・床面)	149
Ⅲ-1-35	H21平面図・土層断面図	119	Ⅲ-1-62	H29付属遺構断面図	150
Ⅲ-1-36	H21付属遺構土層断面図	120	Ⅲ-1-63	H30平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	152
Ⅲ-1-37	H21点取り遺物出土状況垂直分布図	121	Ⅲ-1-64	H30遺物出土状況図	153
			Ⅲ-1-65	H31平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	154
			Ⅲ-1-66	H31遺物出土状況図	155
			Ⅲ-1-67	H32平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	156
			Ⅲ-1-68	H33平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	158
			Ⅲ-1-69	H33遺物出土状況図	159
			Ⅲ-1-70	H34平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	160
			Ⅲ-1-71	H34遺物出土状況図	161
			Ⅲ-1-72	H35平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	163
			Ⅲ-1-73	H35遺物出土状況図	164

図Ⅲ-1-74	H36平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	165	図Ⅲ-1-110	H60平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	207
図Ⅲ-1-75	H36遺物出土状況図	166	図Ⅲ-1-111	H61平面図・土層断面図	208
図Ⅲ-1-76	H37平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	167	図Ⅲ-1-112	H62平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	210
図Ⅲ-1-77	H37遺物出土状況図	168	図Ⅲ-1-113	H63平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	212
図Ⅲ-1-78	H38平面図・土層断面図	169	図Ⅲ-1-114	H64平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	213
図Ⅲ-1-79	H38付属遺構土層断面図	170	図Ⅲ-1-115	H64遺物出土状況図	214
図Ⅲ-1-80	H38遺物出土状況図	171	図Ⅲ-1-116	H65平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	215
図Ⅲ-1-81	H39平面図・土層断面図	173	図Ⅲ-1-117	H66平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	217
図Ⅲ-1-82	H39付属遺構土層断面図・遺物出土状況 平面図(覆土上位)	174	図Ⅲ-1-118	H67平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	218
図Ⅲ-1-83	H39遺物出土状況平面図 (覆土下位, 覆土最下位)	175	図Ⅲ-1-119	P43平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・P44平面図・土層断面図	220
図Ⅲ-1-84	H39遺物出土状況垂直分布図	176	図Ⅲ-1-120	P45平面図・土層断面図・P46平面図・ 土層断面図・P47平面図・土層断面図・ 遺物出土状況図	222
図Ⅲ-1-85	H40平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	177	図Ⅲ-1-121	P48平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・P49平面図・土層断面図・ 遺物出土状況図・P50平面図・土層 断面図	223
図Ⅲ-1-86	H41平面図・土層断面図	178	図Ⅲ-1-122	P51とF81平面図・土層断面図・ P52平面図・土層断面図	224
図Ⅲ-1-87	H41付属遺構土層断面図・遺物出土 状況図	179	図Ⅲ-1-123	P53平面図・土層断面図・P54平面図・ 土層断面図・遺物出土状況図	227
図Ⅲ-1-88	H42平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	181	図Ⅲ-1-124	P55平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・P56平面図・土層断面図・ 遺物出土状況図	228
図Ⅲ-1-89	H43・H44平面図	182	図Ⅲ-1-125	P57平面図・土層断面図・P58平面図・ 土層断面図	231
図Ⅲ-1-90	H43・H44土層断面図・付属遺構土層 断面図	183	図Ⅲ-1-126	P59平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・P60平面図・土層断面図	232
図Ⅲ-1-91	H45平面図・土層断面図	185	図Ⅲ-1-127	TP7平面図・土層断面図	233
図Ⅲ-1-92	H45遺物出土状況図	186	図Ⅲ-1-128	F63上遺物集中8平面図・土層断面図・ F64平面図・土層断面図・73ライン 基本層序	234
図Ⅲ-1-93	H46平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	187	図Ⅲ-1-129	F65平面図・土層断面図・周辺遺物 出土状況図	236
図Ⅲ-1-94	H47平面図・土層断面図・付属遺構土層 断面図	188	図Ⅲ-1-130	F79平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・F80平面図・土層断面図・ 遺物出土状況図・F81平面図・ 土層断面図	248
図Ⅲ-1-95	H48平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	189	図Ⅲ-1-131	F82平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	249
図Ⅲ-1-96	H49平面図・土層断面図	190	図Ⅲ-1-132	S5平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・S6平面図	250
図Ⅲ-1-97	H50平面図・土層断面図・遺物出土 状況図	191	図Ⅴ-3-1	樹種同定依頼試料一覧	291
図Ⅲ-1-98	H51平面図・土層断面図・付属遺構土層 断面図	192	図Ⅴ-4-1	年代測定依頼試料一覧 1	297
図Ⅲ-1-99	H51遺物出土状況図	193			
図Ⅲ-1-100	H52平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	195			
図Ⅲ-1-101	H53平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	196			
図Ⅲ-1-102	H54平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	197			
図Ⅲ-1-103	H55平面図・土層断面図	199			
図Ⅲ-1-104	H56平面図・土層断面図	200			
図Ⅲ-1-105	H56遺物出土状況図・付属遺構土層 断面図	201			
図Ⅲ-1-106	H57平面図・土層断面図・遺物出土 状況図・付属遺構土層断面図	202			
図Ⅲ-1-107	H58平面図・土層断面図・付属遺構 土層断面図	204			
図Ⅲ-1-108	H58遺物出土状況図	205			
図Ⅲ-1-109	H59平面図・土層断面図	206			

図V-4-2	年代測定依頼試料一覧2	298
図V-5-1	三角ダイヤグラム位置分類図	319
図V-5-2	菱形ダイヤグラム位置分類図	319
図V-5-3	Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム	320
図V-5-4	Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム	321
図V-5-5	Qt-Pl図	322
図V-5-6	SiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図	322
図V-5-7	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> -TiO <sub>2</sub> 図	323
図V-5-8	K <sub>2</sub> O-CaO図	323
図V-5-9	館層採取位置図	324
図V-5-10	胎土分析依頼試料一覧	325
図V-5-11	化学分析チャート(1)	327
図V-5-12	化学分析チャート(2)	327
	X線回折チャート	328
図V-6-1	測定試料付着土器と校正年代 確率分布	332
図VI-1-1	遺構1 石囲炉を持つ堅穴住居	333
図VI-1-2	遺構2 遺構の時期変遷	334
図VI-1-3	遺構3 遺構の時期変遷	335
図VI-1-4	遺構4 遺構の時期変遷	336
図VI-1-5	遺構5 遺構の時期変遷	337
図VI-1-6	遺構6 遺構の時期変遷	338
図VI-1-7	遺構7 遺構の時期変遷	339
図VI-2-1	土器1 円筒下層d2式	342
図VI-2-2	土器2 円筒下層d2式	343
図VI-2-3	土器3 円筒下層d1式から下層d2式	346
図VI-2-4	土器4 円筒下層d1式古段階	347
図VI-2-5	土器5 円筒下層d1式から下層d2式	348
図VI-2-6	土器6 円筒下層d1式	349
図VI-2-7	土器7 円筒下層c式	352
図VI-2-8	土器8 円筒下層b2新段階・b2~c式・ c式	353
図VI-2-9	土器9 円筒下層式 意図的な打ち 欠き 羽状縄文対向による菱形	356
図VI-2-10	土器10 円筒下層b2新段階・b2~c 円形刺突列 I緑部磁区面 多輪絡条 体地紋	357

図VI-2-11	土器11 円筒下層式 鋸歯状文の起源 と変化	358
図VI-2-12	土器12 円筒下層b2式新段階	360
図VI-2-13	土器13 円筒下層b2式	362
図VI-2-14	土器14 円筒下層b2式とその古段階	363
図VI-2-15	土器15 円筒下層b1式	366
図VI-2-16	土器16 円筒下層b1式	367
図VI-2-17	土器17 円筒下層b1式	368
図VI-2-18	土器18 土器計測結果グラフ1	372
図VI-2-19	土器19 土器計測結果グラフ2	373
図VI-3-1	石器1 石鏃・石槍又はナイフ・ ドリル・スクレイパー	376
図VI-3-2	石器2 石槍又はナイフ・ドリル・ 両面調整石器	378
図VI-3-3	石器3 石槍又はナイフ・スクレイパー・ 石鏃・石製品	380
図VI-3-4	石器4 スクレイパー・石核・ 両面調整石器・接合資料	382
図VI-3-5	石器5 石斧・石鏃・石製品	384
図VI-3-6	石器6 石製品	385
図VI-3-7	石器7 細分可能扁平打製石器分布図	387
図VI-3-8	石器8 細分可能扁平打製石器分布図	388
図VI-3-9	石器9 細分可能扁平打製石器分布図・ 扁平打製石器細分模式図	389
図VI-3-10	石器10 細分可能扁平打製石器分布図	390
図VI-3-11	両館市南茅部地区八木A遺跡出土つまみ 付きナイフ(プロベラ状に調整)伊達市 北黄金貝塚出土土骨角器(ドリルの類例と して)	391
図VI-4-1	北斗市館野〜矢不来にかけての遺跡分布	394

# 第1分冊(本文I、II、III-1、V、VI) 表目次

表I-1	函館江差自動車道の発掘調査	4			名一覽(1~52)
表I-2	館野6遺跡検出遺構敷一覽	6	表III-1-20	H24点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~88)	
表I-3	館野6遺跡出土遺物点数表	14	表III-1-21	H25点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~41)	
表I-4	館野6遺跡周辺遺跡一覽	18	表III-1-22	H26点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~85)	
表II-1	円筒下層式土器文様要素消長表(北斗市館野6遺跡の場合)	27	表III-1-23	H27点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~65)	
表II-2	注記略称例	29	表III-1-24	H28点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~111)	
表II-3	M2・M2-2・堅穴住居の相関関係	36	表III-1-25	H29点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~65)	
表II-4	盛土遺構土層注記(Sライントレンチ)	57	表III-1-26	H30点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~63)	
表II-5	盛土遺構土層注記(調査範囲北壁)	58	表III-1-27	H31点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~39)	
表III-1-1	H18覆土1層調査区別出土遺物点取り番号一覽(覆土1層)	96	表III-1-28	H32点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~22)	
表III-1-2	H18覆土1層調査区別出土遺物点取り番号一覽(覆土2・3層・床面)	97	表III-1-29	H33点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~49)	
表III-1-3	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽1(1~376)	98	表III-1-30	H34点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~21)	
表III-1-4	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽2(377~743)	99	表III-1-31	H35点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~25)	
表III-1-5	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽3(744~1115)	100	表III-1-32	H36点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~19)	
表III-1-6	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽4(1116~1486)	101	表III-1-33	H37点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~123)	
表III-1-7	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽5(1487~1862)	102	表III-1-33	H38点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~21)	
表III-1-8	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽6(1863~2242)	103	表III-1-34	H39点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~62)	
表III-1-9	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽7(2243~2621)	104	表III-1-35	H40点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~5)	
表III-1-10	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽8(2622~2995)	105	表III-1-36	H41点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~10)	
表III-1-11	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽9(2996~3375)	106	表III-1-37	H42点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~7)	
表III-1-12	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽10(3376~3753)	107	表III-1-38	H43点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~25)	
表III-1-13	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽11(3754~4131)	108	表III-1-39	H44点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~49)	
表III-1-14	H18点取り遺物出土層位および器種名一覽12(4132~4313)	109	表III-1-40	H45点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~22)	
表III-1-15	H19点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~255)	113	表III-1-41	H46点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~14)	
表III-1-16	H20点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~28)		表III-1-42	H48点取り遺物出土層位および器種名一覽(1)	
表III-1-17	H21点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~34)		表III-1-43	H50点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~3)	
表III-1-18	H22点取り遺物出土層位および器種名一覽(1~9)				
表III-1-19	H23点取り遺物出土層位および器種				

表III-1-16~68は紙面の都合上、图中的「表名」を略した。

表Ⅲ-1-44	H51点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~18)	表Ⅲ-1-63	P56点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~10)
表Ⅲ-1-45	H52点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~45)	表Ⅲ-1-64	P59点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~2)
表Ⅲ-1-46	H53点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~7)	表Ⅲ-1-65	F79点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~3)
表Ⅲ-1-47	H54点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~20)	表Ⅲ-1-66	F80点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~3)
表Ⅲ-1-48	H56点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~16)	表Ⅲ-1-67	F82点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~13)
表Ⅲ-1-49	H57点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~10)	表Ⅲ-1-68	S5点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~9)
表Ⅲ-1-50	H58点取り遺物出土層位および器種名一覧(一括土器①~⑯)	表Ⅲ-2	検出遺構一覧……………253
表Ⅲ-1-51	H60点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~26)	表Ⅲ-3	検出遺構規模一覧……………256
表Ⅲ-1-52	H62点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~36)	表Ⅲ-4	遺構別出土遺物集計一覧……………262
表Ⅲ-1-53	H63点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~34)	表V-1-1	館野6遺跡出土動物遺体分類群一覧 276
表Ⅲ-1-54	H64点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~85)	表V-1-2	遺構別動物遺体出土数量……………277
表Ⅲ-1-55	H65点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~20)	表V-1-3	動物遺体一覧……………277
表Ⅲ-1-56	H66点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~62)	表V-1-4	動物遺体分析依頼試料一覧……………281
表Ⅲ-1-57	H67点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~75)	表V-2-1-3	館野6遺跡から出土した炭化種実……………283
表Ⅲ-1-58	P43点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~28)	表V-2-4	炭化種実分析依頼試料一覧……………287
表Ⅲ-1-59	P47点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~20)	表V-3-1	樹種同定結果……………288
表Ⅲ-1-60	P48点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~6)	表V-3-2	樹種同定依頼試料一覧……………291
表Ⅲ-1-61	P49点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~3)	表V-4-1	年代測定依頼試料一覧1……………297
表Ⅲ-1-62	P55点取り遺物出土層位および器種名一覧(1~6)	表V-4-2	年代測定依頼試料一覧2……………298
		表V-5-1	胎土性状表……………307
		表V-5-2	化学分析表……………310
		表V-5-3	タイプ分類表……………313
		表V-5-4	組成分類表……………316
		表V-5-5	胎土分析依頼試料一覧……………325
		表VI-3-1	石器 接合資料一覧……………379
		表VI-3-2	細分可能扁平打製石器出土点数一覧 386
		表VI-4-1	館野~矢不來地区の遺跡一覧 ……393

# 第1分冊写真目次

## カラー写真図版目次

カラー図版1	館野6遺跡全景 丸山を望む(東から)
	館野6遺跡全景(東から)
カラー図版2	調査範囲西端 H58・H61・P54・TP7等(東から)
	75~77-Q~R区 削平の可能性がある地区(東から)
カラー図版3	62R区 M2上面遺物出土状況(南から)
	63R区 H38覆土 遺物出土状況(東から)
カラー図版4	61~63-Q~R区 M2上面遺物出土状況(北から)
	62S区 H29覆土遺物出土状況(東から)
カラー図版5	60T区 M2-2下位遺物出土状況H21覆土上位(南から)
	60T区 M2-2下位遺物出土状況H21覆土上位(南から)
	60T区 H21覆土下位遺物出土状況(南から)
カラー図版6	60S区 H21周辺 M4-6遺物出土状況(西から)
	60R・S区 H21脇 Sライントレンチ土層堆積状況(南から)
カラー図版7	62S区 H29床面検出状況(北から)
	58S区 M4-6検出状況(東から)
カラー図版8	57~59S区 Sライントレンチ土層堆積状況(南東から)
	58~59R区 M4-6検出状況(南から)
	59R区付近 M4-6調査状況(南東から)
カラー図版9	60・61S区 M4-3~M4-6調査状況(西から)
	58R区 M4-3~6調査状況(南から)
	51~60Q区 調査範囲北壁土層堆積状況(東から)
カラー図版10	47S区 H45覆土中M5-2遺物検出作業状況(東から)
	47S区 H45覆土中M5-2点取り土器出土状況(北から)
カラー図版11	44~46-W~Y区周辺 H19・H25~27・H40検出状況およびM6作業状況(北西から)
	44a区周辺 M6-2遺物出土状況(西から)
カラー図版12	45T区周辺 沢地形作業状況(南西から)
	45T区周辺 F82・沢地形検出状況(南西から)

## V章関連図版目次

図版V-1-1	館野6遺跡出土の動物遺体	280
図版V-2-1	館野6遺跡から出土した炭化種実	286
図版V-3-1	館野6遺跡1出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	290
図版V-5-1	館野6遺跡分析土器断面写真(1)	326
図版V-5-2	館野6遺跡分析土器断面写真(2)	327

# I 諸言

## 1 調査要項

- 事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査  
 委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部  
 受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター（平成24年3月31日まで）  
           公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター（平成24年4月1日から）  
 遺跡名：館野6遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-06-79）  
 所在地：北斗市館野91ほか  
 調査面積：5,763㎡  
 調査期間：平成21年6月8日から11月13日  
           平成22年5月7日から10月31日（遺物水洗作業）  
 整理期間：平成23年8月1日から平成24年3月30日（一次整理）  
           平成24年4月1日から平成25年3月30日（一次整理、二次整理）  
           平成25年4月1日から平成26年3月30日（二次整理）  
           平成26年4月1日から平成27年3月30日（二次整理）  
           平成27年4月1日から平成28年3月30日（二次整理）

## 2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター	理事長	坂本 均（平成20年6月1日から）
	専務理事	佐藤 俊和（平成21年5月31日まで） 松本 昭一（平成21年6月1日から）
	常務理事	畑 宏明（平成19年4月1日から）
	総務部長	松本 昭一（平成21年5月31日まで） 中田 仁（平成21年6月1日から）
	第1調査部長	越田賢一郎（平成22年3月31日まで）
	第2調査部長	千葉 英一（平成22年4月1日から） 西田 茂（平成23年3月31日まで） 三浦 正人（平成23年4月1日から）
平成21年度	第2調査部第4調査課	課長 村田 大（発掘担当者） 主査 袖岡 淳子（発掘担当者） 主任 佐藤 剛（発掘担当者） 主任 大泰司 統（発掘担当者）
	第2調査部第3調査課	課長 佐川 俊一
	第1調査部第1調査課	主任 吉田裕吏洋
平成22年度	第2調査部第2調査課	課長 佐川 俊一 主査 袖岡 淳子 主任 佐藤 剛



平成23年度	第2調査部第3調査課	課長	村田 大
		主査	大泰司 統
公益財団法人北海道埋蔵文化財センター	理事長		坂本 均 (平成24年から平成26年度)
			越田賢一郎 (平成27年度から)
	副理事長		畑 宏明 (平成24年から平成26年度)
			中田 仁 (平成27年度から)
	専務理事・事務局長		中田 仁 (平成24年から平成26年度)
			山田 寿雄 (平成27年度から)
	常務理事・第1調査部長		千葉 英一 (平成24年から平成26年度)
			長沼 孝 (平成27年度から)
平成24年度	第2調査部第3調査課	課長	村田 大
		主査	大泰司 統
平成25～28年度	第1調査部第4調査課	課長	皆川 洋一
		主査	大泰司 統

### 3 調査に至る経緯

この調査の原因である高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事は、北海道開発局函館開発建設部が実施している。函館市を起点とし、北斗市・木古内町を經由、江差町に至る延長約70kmの一般国道自動車専用道路として国土交通省北海道開発局により整備が進められている。この道路は北海道縦貫道・函館新道と接続し、函館都市圏の新たな環状道路として地域の交通混雑の解消や地域経済の活性化のために計画されたものである。(図I-1)

当該地域における調査の経緯については、当センターおよび近隣町村刊行の調査報告書に詳しい。(表I-1)

館野6遺跡は、北を矢不來川、南を下矢不來川に挟まれた、函館湾に面する海岸段丘上に拡がる遺跡である。函館江差道路の本線部分については、平成20年度に調査が行われた。(図I-3・4)

今回の調査範囲は、海岸部を走る国道229号から本線予定範囲を超え、山側の植林地などへ至る市道の機能補償道路部分に相当する。現地調査および整理作業の際は、本線部分の館野6遺跡と区別するため、館野6遺跡補償道路と呼称して作業を実施した。(図I-4)

館野6遺跡補償道路部分の調査範囲に関しては、平成17年10月19日・20日に、上磯町教育委員会(当時、現・北斗市教育委員会)と財団法人北海道埋蔵文化財センター(当時)が、試掘調査を約4,800㎡について実施し、北海道教育委員会(以下、道教委)へ埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告を提出した。その結果、市道を挟み、その両側の4,400㎡について、発掘調査が必要と判断された。

当センターは、試掘調査の結果から、発掘調査計画を策定する上で、対象地区をA、B、Cの3地区に分けた(図I-5)。B地区では、試掘時に、二か所のテストピットから600点以上の遺物が出土している。C地区では、テストピット二か所について壁面から掘り上げ土あるいは遺構と思われる土層を検出した。後にB地区は、B-1地区とB-2地区に細分した(図I-5)。B-2地区は先述の出土遺物量が多いテストピット二か所の側である。

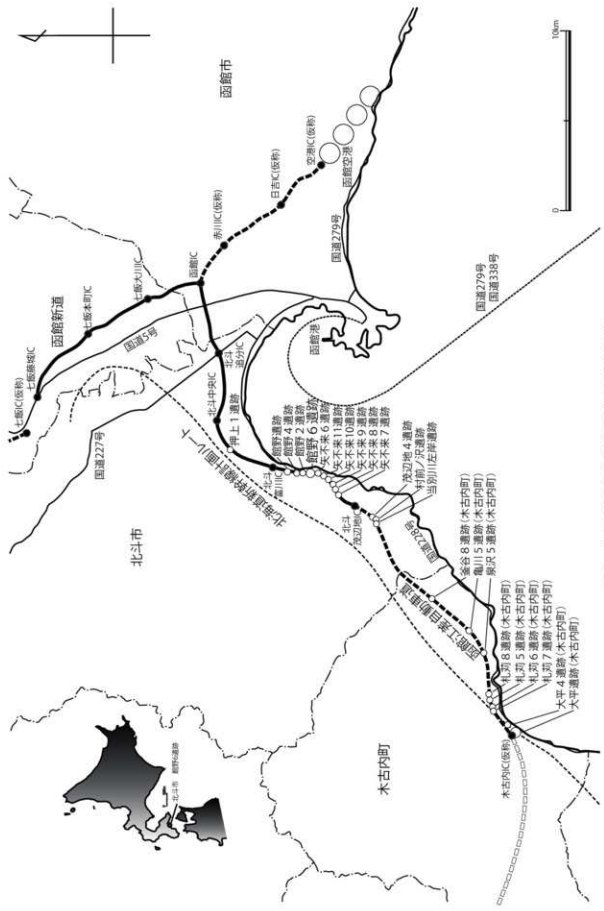
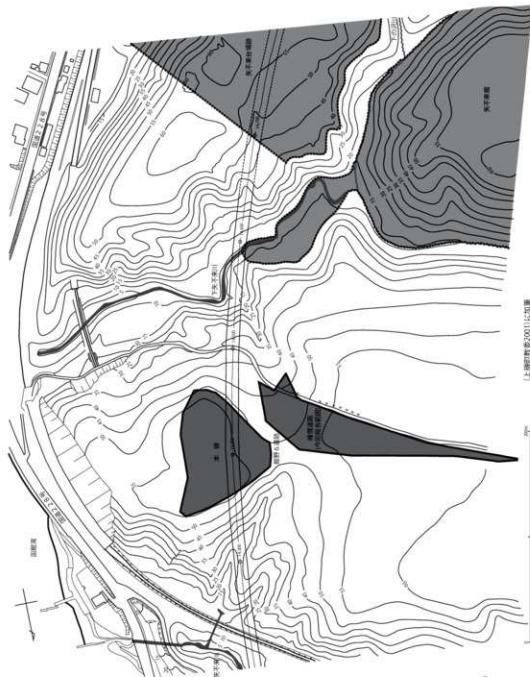


図 1-1 函館江差自動車道にかかるとる発掘調査

表 I - 1 函館江差自動車道の発掘調査

遺跡名	調査主体	調査面積	現地調査期間	調査の結果	報告書・ほか
押上 1 遺跡	上磯町(現北斗市)教育委員会	2,000㎡	平成14年7月16日～12月12日	縄文時代中期末～後期初頭	既刊
		3,800㎡	平成15年5月8日～10月9日	縄文時代後期初頭	
		10,890㎡	平成16年5月1日～10月31日	縄文時代後期初頭	
		2,665㎡	平成17年5月1日～10月31日	縄文時代中期末～後期前葉	
館野遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	5,750㎡	平成15年5月6日～10月31日	縄文時代中期後半～後期初頭の集落跡	北壇図報237集
		2,815㎡	平成16年5月6日～11月16日	縄文時代後期初頭の配石遺構	北壇図報282集
館野 2 遺跡A地区	新北海道埋蔵文化財センター	953㎡	平成19年5月7日～10月31日	旧石器時代・縄文時代後期前葉	北壇図報283集
館野 2 遺跡B地区		3,406㎡	平成19年5月7日～10月31日	縄文時代中期前半の集落	
館野 2 遺跡C地区	(公財)北海道埋蔵文化財センター	2,231㎡	平成19年5月7日～10月31日	縄文時代中期の集落	北壇図報303集
		2,076㎡	平成20年5月12日～10月1日		
館野 4 遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	7,100㎡	平成17年9月1日～10月27日	縄文時代中期前半～後期前葉	北壇図報235集
館野 6 遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター	5,768㎡	平成20年5月12日～11月28日	縄文時代前期後半～中期前半	北壇図報295集
		5,763㎡	平成21年5月12日～11月13日	縄文時代前期後半の集落・盛土遺構	本書
矢不束 6 遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	4,660㎡	平成17年5月12日～8月31日	縄文時代前期後半の小集落・後期前葉の配石	北壇図報235集
		587㎡	平成19年9月7日～10月31日	縄文時代中期前半?・後期前葉	北壇図報257集
矢不束 7 遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	2,141㎡	平成16年10月4日～10月29日	縄文時代後期後葉の集落跡	北壇図報232集
		6,482㎡	平成17年5月9日～10月28日		
矢不束 8 遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	6,196㎡	平成17年8月8日～10月28日	縄文時代後期中葉	北壇図報232集
		82㎡	平成18年10月3日～10月27日	縄文時代中期後半～後期前葉・後期中葉	北壇図報244集
		1,791㎡	平成20年5月12日～7月18日	縄文時代中期後半～後期前葉・後期中葉	北壇図報272集
矢不束 9 遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	2,030㎡	平成19年8月1日～10月31日	縄文時代中期前半～後期前葉	北壇図報257集
		1,514㎡	平成20年5月12日～8月4日	縄文時代中期前半～後期前葉・近世	北壇図報272集
		7,607㎡	平成18年7月10日～10月27日	縄文時代早期前半・後期前葉・後期後葉	北壇図報244集
矢不束10遺跡	新北海道埋蔵文化財センター	1,907㎡	平成20年5月12日～7月18日	縄文時代早期前半・後期前葉・後期後葉	北壇図報272集
		5,300㎡	平成17年5月12日～8月31日	縄文時代後期前葉	北壇図報235集
		246㎡	平成19年9月7日～10月31日	縄文時代後期前葉	北壇図報257集
		1,349㎡	平成21年5月12日～6月30日	縄文時代後期前葉	北壇図報272集
窪田地 4 遺跡	北斗市教育委員会	99㎡	平成22年5月12日～6月4日	縄文時代中期前半～後期前葉	未刊
		6,800㎡	平成23年7月12日～11月17日		
		8,465㎡	平成24年5月7日～11月2日	縄文時代中期末～後期初頭	
		8,645㎡	平成25年7月25日～11月7日		
		1,131㎡	平成26年5月28日～11月26日		
村前ノ沢遺跡	北斗市教育委員会	1,443㎡	平成25年7月25日～11月7日	縄文時代中期後半	未刊
		2,804㎡	平成26年5月28日～11月26日	縄文時代中期中葉～後半を主体	
当別川左岸遺跡	(公財)北海道埋蔵文化財センター	1,816㎡	平成23年8月1日～9月9日	縄文時代後期前半～後期前葉	北壇図報310集
番谷 8 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	786㎡	平成23年9月5日～11月11日	縄文時代早期・中期末・後期前葉	北壇図報305集
		8,414㎡	平成24年5月7日～10月31日		
亀川 5 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	6,474㎡	平成26年7月22日～10月30日	縄文時代後期前半を主体	未刊
泉沢 5 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	8,984㎡	平成26年9月1日～10月30日	縄文時代中期～後期	未刊
札岡 8 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	832㎡	平成26年5月15日～8月8日	後期旧石器時代・縄文時代前期後半	未刊
札岡 5 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	3,393㎡	平成23年5月9日～10月28日	旧石器時代・縄文時代前期後半	北壇図報294集
札岡 6 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	2,758㎡	平成23年5月9日～10月28日	縄文時代中期前半～後期前葉	北壇図報301集
札岡 7 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	10,690㎡	平成25年5月13日～11月8日	縄文時代後期前葉・後葉を主体	未刊
		1,295㎡	平成26年5月15日～10月30日		
		7,054㎡	平成24年5月7日～10月31日		
大平 4 遺跡(木古内町)	(公財)北海道埋蔵文化財センター	1,420㎡	平成25年5月13日～7月30日	縄文時代中期後半	未刊
		7,119㎡	平成26年5月14日～8月6日		
		1,700㎡	平成25年5月13日～11月8日		

2015年12月現在



(上図は標高200mに加重)

図 I-3 遺跡周辺の地形 (錦野の溝跡、矢不來館、矢不來館台跡)

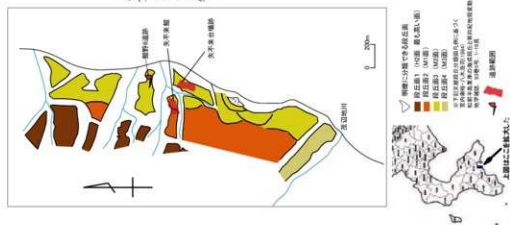


図 I-2 遺跡周辺の地形分類図

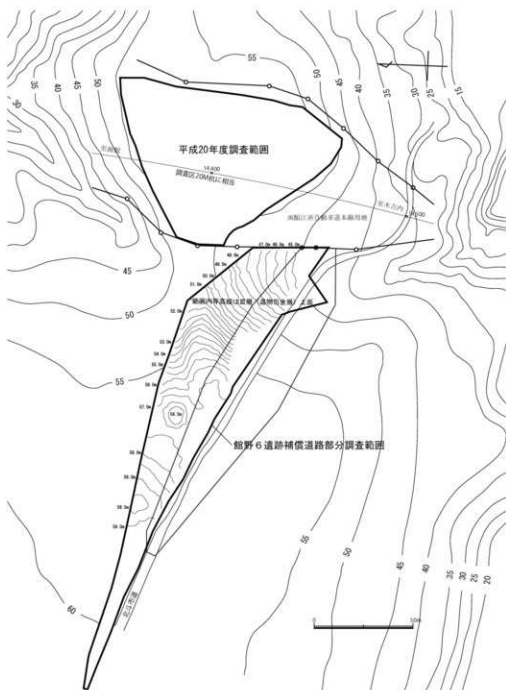
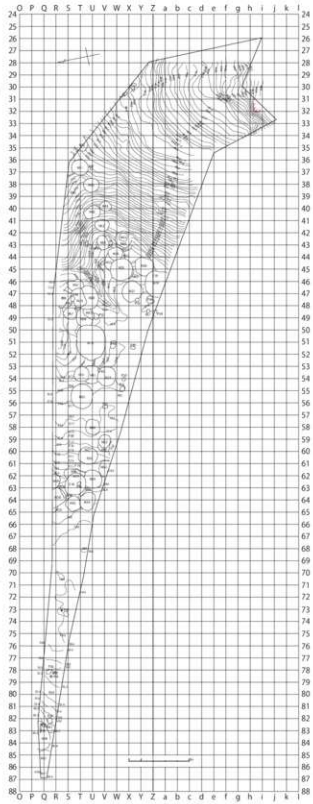
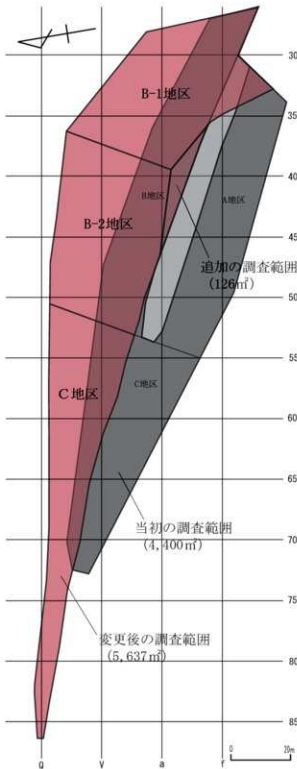


図1-4 館野6遺跡、本線部分(調査区設定時の基準杭)と補償道路部分(Ⅲ層上面等高線)

表1-2 館野6遺跡検出遺構数一覧

検出年度	平成20年本線部分		平成21年補償道路部分	
	遺構番号	遺構数	遺構番号	遺構数
竪穴住居	H-1~H-17	17	H18~H67	50
埴土	F-1~F-62	62	F63~F82	20
集石	S-1~S-4	4	SS~S6	2
フレイクチップ集中	FC-1~FC-14	14	—	—
遺物集中	遺物集中1~7	7	遺物集中8	1
土坑	P-1~P-42	42	P43~P60	18
重力厩	TP-1~TP-6	6	TP7	1
柱穴状の小土坑	SP	198	—	—



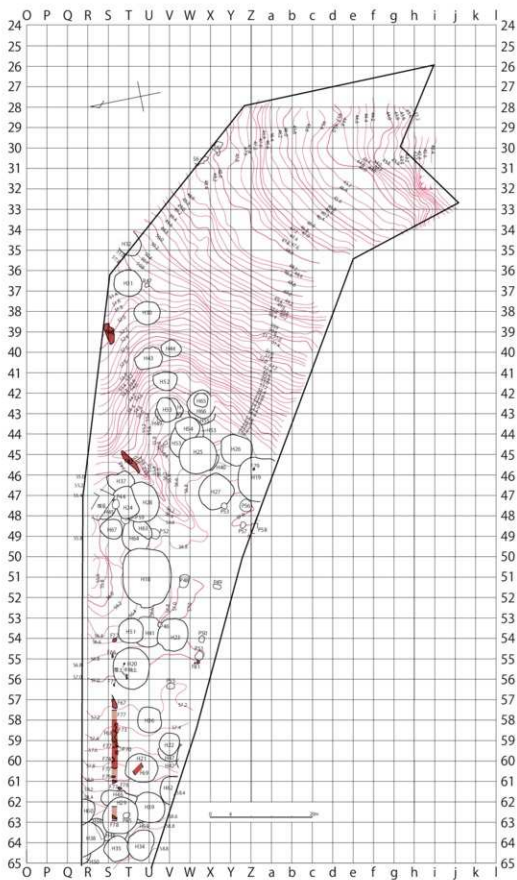


図1-7 館野6遺跡 遺構配置図24~65ライン

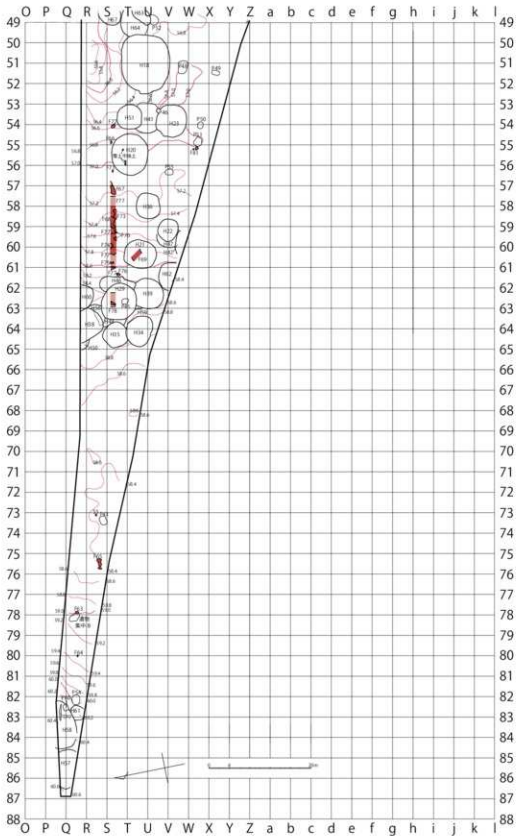


図 I - 8 館野 6 遺跡 遺構配置図49~88ライン



この調査計画をもとに実施計画を策定したが、市道を挟んだ南側部分の用地取得が不調となった。そのため、補償道路は市道の北側に移設して設計することとなった。移設後の範囲の一部は、試掘調査が未了であった。この部分について、関係機関が協議した結果、当初予定範囲に隣接するB-1、B-2、Cの各地区の試掘データを適用し、再度発掘調査計画を策定した(図I-5)。発掘調査を必要とする面積は5,637㎡となり、平成21年に当センターが調査した。

平成21年度の調査は、5月の連休明けから着手予定であったが、調査範囲の大半が植林地で、この木材の伐採、抜根、搬出などの作業がずれ込み、調査の着手は、6月8日となった。

調査着手直後のトレンチ調査で、当初想定にはない、縄文時代前期後半頃の盛土遺構が確認され、相当数の遺構の検出と遺物の出土が予想された。盛土遺構の大半は、試掘調査未実施範囲で確認された。(図I-5・図II-1)

工事工程の都合上、次年度に調査を繰り越すことは難しく、関係機関と協議の結果、現地の一次整理作業人工を現地調査にあて、一次整理作業のうち遺物水洗作業などを次年度以降に実施すること。調査期間の延長および調査員の増員で対応することとなった。

また、道路の設計上、市道と北側へ移設された補償道路範囲の間に、三角形に残る範囲があった。今回の工事の大半が切土工事のため、残存部の遺物包含層の崩落は免れない状態が予想され、関係機関の調整により、この範囲126㎡についても発掘調査を実施することとなり、最終的な面積は、これを加え5,763㎡となった。(図I-5)

調査は、11月13日に終了した。出土した遺物は、現地のユニットハウスに残置し、翌平成22年5月から10月に遺物水洗作業を実施した。遺物分類や台帳作成などの一次整理作業は、平成23年8月から、江別センターの整理作業棟で実施した。

二次整理作業は、平成24年度から実施し、平成28年度以降に調査報告書を刊行することとなった。

(村田)

## 4 調査の概要

本報告書では盛土遺構についての記載が多い。しかし慣例として盛土遺構以外の堅穴住居・土坑・Tピット・焼土・集石・遺物集中を単に「遺構」と称しているくだりがある。平成21年度の調査館野6遺跡補償道路部分では、遺構として、堅穴住居跡50軒、土坑18基、Tピット1基、を検出した。他に焼土二十か所、集石二か所、遺物集中一か所を検出した。また、円筒下層b1式から下層c式にかけて形成された盛土(M4、M5、M6)、円筒下層d2式の盛土(M2)、円筒上層a式の盛土的な廃棄場所(H57・H58廃絶後のくほみ)、サイベ沢Ⅷ式がまとめて廃棄された沢地形(F82)など、廃棄物を伴う盛土遺構および類するものが確認された。以下「(1)住居跡」「(2)土坑」「(3)焼土・その他の遺構」にわけて(図I-6～8)概略を記す。またⅡ章(図II-1～2)とⅥ章の挿図(図VI-1～2～7)に詳細を示す。盛土遺構については調査過程を踏まえながら、Ⅱ章で記述する。

### (1) 住居跡

堅穴式住居はほとんどが縄文時代前期後半円筒下層式のものである。大型住居・H18は床面近くで潰れていた土器から円筒下層d2式の住居と考える。これら以外の住居はおおむね円筒下層b1式から下層d1式にかけてのもので、円筒下層b式期の範疇のものが多く、一部、円筒下層d1式の可能性があるものもある。その内訳は、

H40・H41は円筒下層b1式の頃。

H26・H37・H43・H56・H67は円筒下層b2式の頃。(H26は円筒下層b2～c式直前)

H45・H46・H47・H48・H50・H51・H55・H60・H63・H64は円筒下層b式の範疇。

H30・H31・H32・H44・H62は円筒下層b式以後の住居。

H33・H49・H53・H54・H66は円筒下層b式から下層c式にかけての頃。

H36は円筒下層b2～c式の頃。(この型式名については第二章4項で解説)

H20・H23・H27・H28・H34・H35・H39・H52は円筒下層c式の頃。

H59・H61は円筒下層c式より古い。

H21・H22・H25・H29・H38・H65は円筒下層d1式の頃。

H42は円筒下層d1式から下層d2式にかけての頃。

H18・H19は円筒下層d2式の頃。

H57・H58は円筒上層a式最古段階の頃。

H24は縄文時代中期前半。

H24は焼失家屋の可能性があり、放射性炭素年代から縄文時代中期前葉の可能性がある。型式的には、三内丸山遺跡の成果(青森県史編さん考古部会 2002・日本植生史学会 2006)を参照にすると円筒上層b式前後の可能性もある。また、H57とH58は床面出土遺物から、縄文時代前期末葉・円筒下層d2式最新段階、あるいは縄文時代中期初頭・円筒上層a式最古段階(報告ではこちらの時期と判断した)の住居であり、先述の円筒上層a式の盛土のな廃棄場所はこの二軒を埋めるように堆積した覆土中を指す。この廃棄場を貝塚に見立てるならば、地点貝塚の様相を呈している。

特徴的な構造としてH25～27・H33は石囲炉を有する(図VI-1-2)。これらは遺物出土状況からは円筒下層b2式から下層d1式の間で、下層c式前後の時期である。しかし形状の類例を踏まえるとH25・26・33は縄文時代中期後半の可能性もある。VI章1項で検討する。

「H18と19」、「H57とH58」は時期と規模・柱穴の配置といった構造から同時期の可能性が高い。

「H27と28」、「H25・26・33」、「H30・31・32」、「H35と39」、「H29と38」もその可能性がある。

また住居の分布をおおよそ下記のa～cの三か所にまとめることができた(図II-1)。

a区:F82が立地する沢地形[39S→50Y区]の南東側、北東向きの斜面に住居が分布する。斜面を登り切った、平坦面には円筒下層d2(H19)→斜面際に下層cから下層d1(H27・H25)→斜面降り際に下層b式から下層d1式にかけての可能性もあるものの切りあい(H25・H53・H54・H65・H66ほか)→斜面中腹(調査範囲内において)円筒下層b2式の可能性を持つもの(H43)→斜面ふもと(調査範囲内において)円筒下層b式の可能性もあるもの(H30・H31・H32・H44)と続く。

b区:F82が立地する沢地形[39S→50Y区]の北西側、[50R→54V区]にかけては円筒下層b式の住居が並び、部分的に切りあう(H37・H41・H45・H63・H64・H67)上に円筒下層cから下層d1式の住居が切りあったり並んだりする(H20・H23・H51・H28)新しい円筒下層d2式のH18が際立って目立ち、中期の住居H24は焼失家屋である。沢地形[39S→50Y区]F82も縄文時代中期の遺構であるが、時期が若干新しい。

c区:M2盛土が分布する緩斜面[57～65ライン]は円筒下層b式の住居が並び(H46・H47・H48・H50・H60)上に円筒下層cから下層d1式の住居が切りあったり並んだりする(H21・H22・H29・H34・H35・H36・H38・H39・H42・H56・H62)「[39S→50Y区]～[50R→54V区]」より円筒下層cから下層d1式の住居の軒数が多い。

## (2) 土坑

土坑は用途を特定したいものが多い中で、石鏃が17点まとまって出土したP43については青森市の石江遺跡、新町野遺跡、稲山遺跡、秋田県大館市池内遺跡に類似があり、墓の可能性が高い。墓の可能性のあるものとしてもう1基、P54がある。土坑底面に小型の付属土坑を2基持つ。1基は壁際、もう1基はほぼ中央でそこから土坑長軸にそって溝が伸びる。中央の土坑をふさぐように円筒下層b式が潰れていた。これも本来の用途から墓への転用という可能性がある。

P50・51・53・56はフラスコ状土坑である。P56は比較的大型で中央に溝が掘られる形状である。坑底面から遺物がまとまって出土した。人骨等は確認できなかったが、墓への転用という可能性がある。

また覆土中から、縄文時代中期前半円筒上層d式の同一個体の土器片が複数出土したP47についても特徴がある。土器は復元に至らなかった。

時期について、列記すると、

P58は不明であるが、縄文時代前期後半の可能性もある。

P54・P55・P59は円筒下層b式の時期。(P59は下層b1式以降で下層b2式以前。)

P50・P51・P57は円筒下層b式以降の土坑という可能性がある。

P43・P53・P56は円筒下層b式からc式にかけての時期。

P46・P49は円筒下層c式以降の土坑の可能性もある。

P48は円筒下層d1式以降の土坑という可能性がある。

P45・P52は円筒下層d2式以降の時期。

P44・P60は縄文時代中期前葉以降のもの。

P47は縄文時代中期前半、円筒上層d式の時期。

## (3) 焼土・その他の遺構

F66~78は盛土の堆積を確認するため設定した、Sライントレンチ・Aライントレンチを掘削中に検出した焼土である(図II-1)。いずれも盛土遺構の中の焼土で、縄文時代前期後半、円筒下層式土器のころのものである。F77はM4-6層そのもの、F71~74・76もそれに関連する焼土である。F66~68・75・78はM4-6より上位の土層で焚かれた盛土中の焼土である。

F71・75・76は円筒下層b式の前半、F66・F68・F70・F72・F73・F74・F77は円筒下層b2式、F67は円筒下層c式、F69は円筒下層d1式、F78は円筒下層d2式のものである。トレンチ内で出土した点取り土器との対比関係から時期を決定した。

なかでもF78はH29が埋没する過程でその凹み部分で焚かれた焼土である。M3より上位である。F69はH21が埋没する過程でその凹み部分で焚かれた焼土である。

F79はH19覆土中から検出された。円筒下層d2式以降のものである。H19が埋没する過程でその凹み部分で焚かれた焼土である。

F80は斜面において基本層序Ⅲ層下位~Ⅳ層から検出された。H31・30・43・44・52といった堅穴住居跡が連なる尾根筋の北側斜面からの検出である。

F81はP51検出時に同時に見つかったものである。

F82とは先述のサイベ沢Ⅷ式がまとめて廃棄された沢地形[39S-50Y区]の廃棄に伴う沢の埋土である。

65~81ライン付近について基本層序Ⅳ層、いわゆる漸移層が調査範囲内の他の調査区と比較して

発達していない(図Ⅱ-6・Ⅲ-1-128)。土坑墓の可能性があるP43・P54はこの付近に立地する。F63~64はこのあたりに立地する。Ⅳ~Ⅴ層付近での確認である。酸化した鉄分が赤く発色したものと考える。焼土の可能性も考慮して記録したが、水分により流出した鉄分の固着等も考慮すべきである。この地域のⅣ層が薄い理由として削平された可能性を挙げる。土坑墓の時期からM4盛土の形成と関連する可能性もある。

S5は木根跡に埋められていた礫である。8点の礫が埋められていた。円筒上層d式の土器と同時に検出された。人為の可能性があったので8点のうち1点の叩打痕のある礫を台石に分類、遺構とした。ただしS6、F63に伴う遺物集中8のように人為というより基本層序Ⅵ層より下位の礫層が、風倒木の作用により掘り上がってきた可能性も考慮すべきである。

F63・64・65・81・遺物集中8は縄文時代前期後半以降、F80は縄文時代中期前半以降の可能性がある。いずれも風倒木による掘り上がり、あるいはそこへの水による作用といった、自然の営力の可能性がある。おとし穴TP7やS5は縄文時代中期前葉以降、S6は縄文時代前期後半以降の可能性を指摘したが、いずれも時期は不確定である。

#### (4) 出土遺物

遺物点数は土器が碎片も含めると、1,452,407点、石器が礫も含めると194,015点である。合計1,646,422点である。(表I-3)

土器については盛土・包含層からの出土点数は1,384,584点であるが碎片が746,743点を占める。堅穴住居、土坑といった凹みのある遺構からは67,823点出土している。主体は碎片も含めて縄文時代前期後半円筒下層式である。円筒下層b1式から下層d2式の範疇に収まるものである。次に縄文時代中期前半が多い。円筒上層a式がほとんどで次にサイベ沢Ⅶ式が多い。次に多いのは縄文時代後期前葉である。型式名が不明なものが多いが、涌元式からトリサキ式にかけての範疇におさまるものと考えられる。次に縄文時代早期が多い。コッタロ式、東銅路Ⅳ式を主とする。中期後半については大安在B式が型式としてわかる程度である。Ⅲ群b1類としたものもの直前くらいのものである。縄文時代晩期は大洞BC~C2式段階のものが少量出土している。

矢不來台場跡が下矢不來川を挟んで当遺跡の対岸にある。それとほぼ同時期の陶磁器が、少量出土している。近現代の陶磁器も若干出土している。遺跡の調査範囲外、矢不來川側の斜面に残された、人工池のある庭園跡や、調査範囲内、北西半分側の耕作痕跡が、近現代の作為と思われる。

土製品では、鐙型土製品や小型舟形器が出土している。焼成粘土塊が886点出土している。土器の中で三番目の出土量である後期前葉の土器が538点なので、点数的にはより多い。

土器の層位的な出土量を見ると、Ⅱ群b類土器、円筒下層式土器以外は包含層Ⅲ層からの出土がほとんどである。Ⅱ群b類土器について、盛土の焼土層M4-6が111,338点の出土であり、これは円筒下層b式が多く出土しているのがわかる。次にM4-3、M4-5と続く、円筒下層b式からc式にかけてが多く出土しているのがわかる。その次に多いのがM2-3、住居出土の土器と続く。

M2とM2-2については、Ⅱ群b類土層すべてを合計しても72,319点である。これはM4-3より少なく、円筒下層d1式から下層d2式にかけての土器出土量がそれ以前の土器型式に比べて、少ない事を示す。

石器については盛土・包含層からの出土点数は158,593点である。堅穴住居、土坑等の凹系遺構からは35,422点出土している。以下、分類別の出土比率を示すがこれは「盛土・包含層」と「凹系遺構」で出土比率の差はほとんど無かった。

出土石器類のうちで、フレイク・チップが圧倒的に多く121,135点、次に礫・礫片が多い。三番目

表1-3 館野6遺跡出土遺物点数表

土器類出土点数

	I群b類 土器	II群b類 土器	III群b類 土器	IV群b類 土器	V群土器	VI群土器	近世 陶磁器	土製品	粘土塊	焼片(土群 外土器)	合計
基本層序上層集計	0	389	0	0	0	0	0	1	0	0	391
基本層序中層集計	121	221	22	0	17	0	0	0	0	0	260
基本層序下層集計	30693	10292	24	0	445	66	0	1	4	77	41,733
基本層序並之層集計	67	887	0	0	4	0	0	0	0	0	958
基本層序並下位層集計	0	79	3	0	6	0	0	0	0	0	88
基本層序並下位層集計	0	37	0	0	0	0	0	0	0	0	37
VI層集計	3	49166	40	1	27	3	4	0	0	0	56,357
M1層集計	0	18133	10	0	0	0	0	0	0	84	9,568
M2層集計	0	48492	125	0	5	3	0	0	0	180	25,014
M2-下位層集計	0	1852	0	0	0	0	0	0	0	6	1,106
M2-下位層集計	9	1225	0	0	0	0	0	0	0	7,000	132
M2-下位層集計	0	1337	3	0	0	0	0	0	0	81	6,822
M2-下位層集計	0	6337	0	0	0	0	0	0	0	4	5,914
M2-下位層集計	0	1280	0	0	0	0	0	1	0	0	1,281
M3層集計	0	1009	0	0	0	0	0	0	1	133	1,143
M3-2層集計	0	454	0	0	0	0	0	0	0	0	454
M4層集計	0	14178	0	0	0	0	0	0	8	8,760	22,936
M4-2層集計	0	668	0	0	0	0	0	0	0	0	668
M4-2層集計	0	76	0	0	0	0	0	0	0	0	76
M4-2層集計	2	1101	0	0	0	0	0	0	0	0	1,103
M4-2層集計	0	6292	0	0	0	0	1	0	0	0	6,293
M4-5層集計	5	11338	0	0	0	0	0	0	32	134,069	245,444
M5層集計	0	5711	0	0	0	0	0	0	0	0	5,711
M5-2層集計	0	39008	0	0	0	0	0	0	4	0	39,012
M5-2層集計	0	3762	0	0	0	0	0	0	0	0	3,762
M5-2層集計	21	39732	0	0	0	0	0	0	14	0	39,817
M5-2層集計	0	539	0	0	0	0	0	0	1	0	540
M5-2層集計	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
M5-2層集計	0	245	0	0	0	0	0	0	6	16	267
M5-2層集計	1	346	0	0	0	0	0	0	0	1	355
M5-2層集計	2	221	0	0	0	0	0	0	2	0	225
M5-2層集計	0	119	0	0	0	0	0	0	0	0	119
M5-2層集計	0	119	0	0	0	0	0	0	0	0	119
M5-2層集計	0	634	0	0	0	0	0	0	4	91	1,292
M5-2層集計	0	733	0	0	0	0	0	0	6	62	702
M5-2層集計	2	593	0	0	0	0	0	0	9	94	836
M5-2層集計	0	272	0	0	0	0	0	0	0	7	753
M5-2層集計	0	334	0	0	0	0	0	0	4	42	318
M5-2層集計	0	464	0	0	0	0	0	0	0	18	357
M5-2層集計	1	464	0	0	0	0	0	0	0	0	465
M5-2層集計	0	8681	1	0	0	0	0	0	2	80	8,744
M5-2層集計	0	95	0	0	0	0	0	0	5	0	987
M5-2層集計	0	46	0	0	0	0	0	0	0	80	176
M5-2層集計	0	118	0	0	0	0	0	0	0	0	118
M5-2層集計	0	698	0	0	0	0	0	0	0	0	698
M5-2層集計	0	6388	1	2	0	0	0	0	0	0	6,391
M5-2層集計	0	37	0	0	0	0	0	0	0	0	37
M5-2層集計	242	62909	10925	26	1	34	479	106	2	4	811
M5-2層集計	18	68974	341	0	0	0	5	0	0	0	48992
M5-2層集計	0	1228	845	0	0	0	59	0	4	0	1,836
M5-2層集計	0	928	845	0	0	0	0	0	0	0	1,773
M5-2層集計	19	63298	4297	0	0	0	0	0	1	0	1,774
M5-2層集計	261	68907	14892	26	2	34	538	106	2	8	886
M5-2層集計											746,743
M5-2層集計											1,452,407
M5-2層集計											45,992
M5-2層集計											64,600
M5-2層集計											1,774
M5-2層集計											6,723
M5-2層集計											4,520,407

石器類出土点数

調査区画	調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画
	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画		
1	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

出土遺構以外の遺構出土遺物点数

調査区画	調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画		調査区画
	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画	調査区画		
1	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	

にスクレイパー・スクレイパー片が多く出土し6,311点で、被熱燼、Uフレイクと続く。スクレイパーには形状、刃部調整について各種含めたために剥片石器としては量が多くなった。

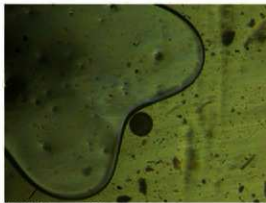
その次に多い、扁平打製石器・扁平打製石器片が典型的な石器の中では1,649点と最も多い。その次には、たたき石・たたき石片が904点と続く。不定形なたたき石に対して典型的な扁平打製石器の量の多さは際立っている。石核、つまみ付きナイフ・つまみ付きナイフ片が800点強、石斧・石斧片、両面調整石器・両面調整石器片、台石・台石片が400点前後、石鎌・石鎌片、石槍又はナイフ・石槍又はナイフ片が300点前後、北海道式石冠・北海道式石冠片、石皿・石皿片、石鋸・石鋸片が150点前後と続く。北海道式石冠と石皿が円筒下層式の遺跡であるため多く出土する予想を立てていたが外れた。典型的な石器で出土量が少ないものは石錘の5点である。前段階の前期前半縄文尖底土器の頃、地域は違うが、北海道尖部などでは石錘の出土量は多い。同じ前期でも相反する結果となった。

遺物水洗を停滞させる原因となったのは、盛土の土が基本層序V層土の混在率が高く、粘質が強いいため、Ⅱ群b類円筒下層式土器に圧着することである。これを洗い落とす際にⅡ群b類土器の胎土のもろさゆえ、細かく割れた破片が発生する。この数字が水洗の作業量の手間に反映される。復原・接合作業の計画をたてる際には見込まれる数字ではない。ただ、実際問題として水洗作業の停滞が今回あった。そこで、数値として復原・接合作業に有効な破片に対してどのくらいの比率が含まれるのか算出した。まず全体の3割5分の袋ごとに、破片の点数を数えた。袋数は遺物収集帳の遺物番号の単位である。残り6割5分についてはその結果の数値で算出した。算出破片数を出すため数えた袋に入っていた破片の作業合計点数は233,275点であった。算出破片数を出すため数えた袋に入っていた破片に対してより細破片の点数262,751点であった。次に二種類の比率を用意した。「比率A：それぞれの「袋ごと」の総細破片数/総破片数(%)の平均1.353463」と「比率B：数えたすべての総細破片数/総破片数(%)1.126357」である。盛土遺構と包含層から出土したⅡ群b類の合計点数は623,620点である。合計点数623,620点から作業合計点数233,275点を引くと未作業合計点数は390,345点である。未作業合計点数390,345点に比率Aをかけると528,317,5147点である。次に未作業合計点数390,345点に比率Bをかけると439,667,8231点である。簡単ではあるが偏りを極力少なくするため双方の平均をとると483,992点となった。

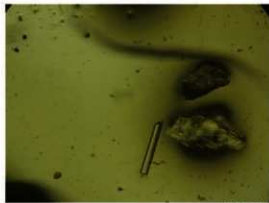
## 5 遺跡の位置と環境

館野6遺跡は海岸線から約200m離れている。函館湾に面した海岸段丘上に立地する。湾の対岸に函館山を望む。遺跡が立地するのは標高52~58mの段丘である。遺跡両側は河川によって開析されている。南は下矢不來川、北は矢不來川である。本線部分は補償道路部分とは沢地形によって分断されているため、それぞれが独立した平坦面となっている。(図I-3・4)

遺跡周辺の地形は海岸段丘によって構成される。本線部分報告書(2013)において、藤井 浩が宮内・八木(1984)を用いて、段丘面を四面に分類している(図I-2に再掲載)。段丘面1(高度60~120m)は宮内・八木分類H2面相当、段丘面2(高度50~80m)は同分類M1面、段丘面3(高度15~70m)はM2面、段丘面4(高度10~38m)はM3面に相当する。当遺跡は段丘面3に立地する。これは、もっとも低い海よりの段丘面で、周辺の遺跡(縄文から現代にいたるまで)もこの面に立地するとした。遺跡の多くはこの面が細かく開析されて部分的になった平坦面上に位置し、背後には段丘面1にいたる緩やかな斜面が続いている(図I-2・3)。地質図で確認すると、H面・M面相当部分には礫・砂及び泥といった中位段丘堆積物(第四紀のもの)が分布している。その丘陵背面には泥岩、泥質砂



海棲珪藻 (Thalassirostris類か)



海綿骨針か

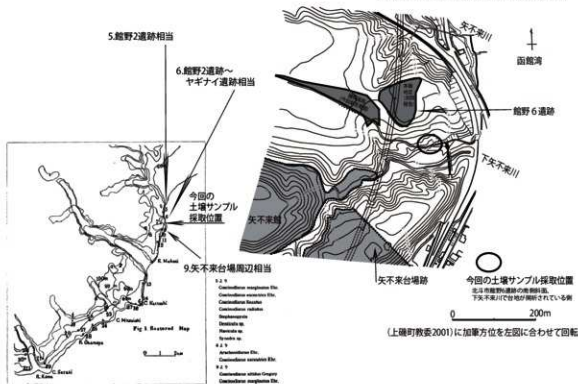


羽根珪藻属か *Pinnularia borealis*か 混っている土壌や砂丘からよく産出



海綿骨針か

×100の顕微鏡で撮影し、デジタルカメラを接眼レンズに押しつけて撮影



5.6.9を茂辺地図としたうえで・・・

「*Castanidium*系のもは何れも海棲であり、又 *Stephanopsis* sp. も *Arachnoidiscus* Ehr. も海棲であるから、茂辺地図は海成段丘と云う事が出来る」

「北海道松前半島東岸の海岸段丘について」瀬川秀良1959「東北地理」を改変  
・・・と本文に記載がある。

図 I - 9 海綿骨針 海棲珪藻ほか



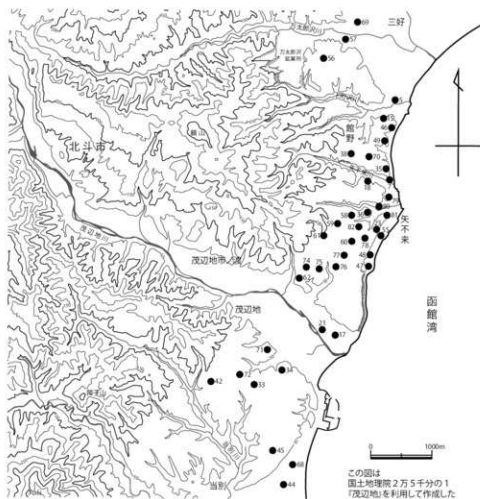


図1-10 館野6遺跡周辺遺跡地図

表1-4 館野6遺跡周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	年代	規模(m)	時期	調査年
館-109-1	寺野遺跡	遺物付遺跡	郡山 寺野	50~80	楕圓	縄文中期・前期	国土地理院2000
館-108-7	ウツボ遺跡	遺物付遺跡	郡山 寺野	50~111	楕圓	縄文中期・前期・前期	津島文2006/2006
館-108-15	榎野遺跡	遺物付遺跡	榎野 榎野台	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-109-17	茂野遺跡	墓跡	茂野	20~15	楕圓	縄文中期・前期	津島文2006/2017
館-108-18	茂野1遺跡	遺物付遺跡	茂野 寺野台	50~60	楕圓	縄文中期	国土地理院2000/2000
館-108-21	茂野2遺跡	墓跡	茂野	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-23	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	晩期古墳	50	楕圓	津島文2006/2017
館-108-23	茂野3遺跡	遺物付遺跡	茂野	40~50	楕圓	縄文中期・前期	津島文2006/2017
館-108-34	茂野4遺跡	遺物付遺跡	茂野	50~65	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-35	榎野1遺跡	遺物付遺跡	榎野	50~17	楕圓	縄文中期・前期	津島文2006/2017
館-108-36	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50~60	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-38	榎野2遺跡	遺物付遺跡	榎野	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-42	館野川沿岸遺跡	遺物付遺跡	館野	75	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-44	館野川沿岸遺跡	遺物付遺跡	館野	75	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-45	茂野5遺跡	遺物付遺跡	茂野	50~60	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-46	館野川沿岸遺跡	遺物付遺跡	館野	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-47	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-48	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	45~49	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-49	榎野4遺跡	墓跡	榎野	50~15	楕圓	縄文中期・前期	津島文2006/2017
館-108-50	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-50	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-51	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-52	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-53	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-54	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-55	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-56	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-57	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-58	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-59	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-60	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-61	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017
館-108-62	赤下宮台遺跡	館跡	赤下宮	50	楕圓	縄文中期	津島文2006/2017

岩及び酸性凝灰岩（鮮新世）館層が分布している。

館層には海棲の珪藻化石が多く含まれている。土器胎土に含有する生物起源粒との関連を考察すべきである、と、当センター所属の花岡正光・大沼忠春によって、新道4遺跡（1987）報告に述べられている。またM2面とM3面相当の段丘構成層から海棲珪藻が確認されている。館野2遺跡、矢不來台場付近採取の二か所の試料から検出されている（瀬川 1959）（図I-9）。

本線の館野6遺跡本線地区南側に北斗市道が通っている。補償道路の対象となった市道の国道あるいは鉄道よりの部分である。そこは下矢不來川に面した台地脇部分が削られて造成されていた。その露頭から土壌試料を採取した。35%過酸化水素水に土壌試料を24時間浸して、有機物を除去した。それから薬品を洗浄し、保管した。プレバートはその洗浄後の沈殿物の細かいものをホットプレートに置いたカバーガラスにピペットで滴下、水分をとばした。スライドガラスに和光純薬工業株式会社製「マウントメディア」を滴下し、カバーガラスについた試料を封入した。顕微鏡で100倍にして検鏡した。珪藻らしきもの、海綿骨針らしきものを見つけたため、その顕微鏡画像をデジタルカメラで撮影した。したがって撮影画像にスケールは入っていない。

撮影画像を、北海道博物館の添田雄二氏に鑑定を依頼した。以下、氏の知見を交えての記載である。『スケールがわからないため断言はできない。すべて「可能性がある」という前提』である。海綿骨針と海生の珪藻*Thalassiosira*類、加えて*Pinnularia borealis*と思われるとのことである。*Pinnularia borealis*は、浸っていれば陸地でも生きることができ、遺跡の土壌や砂丘砂から普通に産出する（図I-9）。当遺跡出土の土器胎土には海綿骨針が含まれるものがほとんどである。周辺から採取された粘土を用いて、土器を制作している可能性がある。資料蓄積のため胎土分析等も行った（第V章5項）が、確定的な結果を導く途中段階といえる。

## 6 周辺の遺跡（図I-10・図VI-4-1）

平成20年度調査、館野6遺跡本線部分（平成24年度報告）からは竪穴住居17軒、土坑42基、Tピット6基、小ピット198基、焼土六十二か所、フレイク集中十四か所、遺物集中七か所、集石四か所、埋設土器5基を検出し、遺構として報告書に記載した。本線部分調査区中央には断層を伴う地すべり痕が浅い沢状地形を呈する。この沢より北側には縄文時代前期後半の遺構があり、中には円筒下層b式土器がまとまって出土した遺物集中4がある。住居と離れた沢地形そばでは当該期のフラスコ状土坑P-14および同時期の埋設土器が5基検出されている。一方で、沢地形の南側では縄文時代中期後半の遺構が目立つ。出土遺物の総点数は119,462点である。遺構出土遺物は43,686点（土器22,612点、石器等21,074点）、包含層出土遺物は75,766点（土器49,585点、石器等26,191点）である。時期は縄文時代早期から統縄文時代にかけてである。縄文時代前期後半、円筒下層b式期のものを主体とする。ついで縄文時代中期中葉、サイベⅦⅢ式期のものが多い。今回、調査・報告の館野6遺跡補償道路部分においては、縄文時代前期後半の盛土遺構と、同時期の竪穴住居跡を主として検出している。

館野6遺跡と同じ段丘の矢不來川上流側、山側には矢不來遺跡がある。縄文時代中期の遺物包蔵地とされる。国立歴史民俗博物館落合計策コレクションにも同名の遺跡出土遺物がある。一方、下矢不來川側、削平されてより低位となった斜面部分に、館野7遺跡がある。縄文時代前期の遺物包蔵地とされる。

下矢不來川を挟んで対岸には海側のM2面（宮内・八木1984、以下の「M」も同様段丘の名称・図I-2参照）に近世（18世紀）の矢不來台場跡、山側のM2-3面にかけて中世（15世紀後半～16世

紀初頭)の矢不來館跡がある。さらに、削平されてより低位となった斜面部分に、矢不來13遺跡がある。ここは縄文時代後期の遺物包蔵地とされる。

矢不來台跡は函館湾を挟んで押付台跡と向い合う。矢不來台跡は矢不來館跡とともに、上磯町教育委員会が国庫補助事業によりトレンチ調査を行った。この結果にもとづいて平成13年7月、国土交通省北海道開発局函館開発建設部によって道路工法変更がなされ両遺跡の保存が決定した。

矢不來川を挟んで対岸にはヤギナイ遺跡、館野2遺跡、館野3遺跡がある。

ヤギナイ遺跡はM2面の開析された低位部分、標高10～11mにある。縄文時代中期から晩期の遺跡とされる。中国製の青磁片が採集されたこともある。包蔵地の上方には、旧福山街道と思われる小道が残るという。2009年の北斗市教育委員会の調査では縄文時代後期から晩期にかけての遺構・遺物が出土した。

館野2遺跡はM2面にある。遺跡内には2本の沢があり、遺跡を分断している。これまでに1980年に上磯町教育委員会が、2007年に当センターが発掘調査している。2007年の調査では、沢で分断された遺跡について北側からA地区、B地区(1980年のA地区に相当)、C地区(1980年のB地区)としている。1980年の調査では、縄文時代早期、中期～後期初頭にかけての遺物が出土しており、B地区(報告ではA地区)は後期前葉を主体とする。C地区(報告ではB地区)から中期後半の住居が5軒検出されている。2007年、当センターのA地点の調査では、旧石器のブロッカーか所が検出された。他に縄文時代早期～後期前葉の遺物が出土した。遺構は縄文時代中期前半、後期前葉のものと考えられ、後期の大津式～白坂3式が主体である。同年のB地点の調査では縄文時代中期前半から後期前葉の遺構が検出された。遺物もやはり縄文時代中期から後期のものが出土しており、後期前葉の土器が主体となる。C地区の調査では縄文時代早期中葉、中期、後期前葉、晩期、統縄文前半の遺物が出土している。遺構としては縄文時代中期前半円筒上層b式土器の集落が主なもので、中期全般の堅穴住居が検出されている。シャチ形土製品に加えて石冠椀石器などの中期の石製品等が豊富である。

館野2遺跡と同じ段丘上、矢不來川上流側、山側には館野3遺跡がある。標高80m程で、ここはM1面である。縄文時代中期の包蔵地だが、道路断面に堅穴住居とみられる黒土の落ち込みがあるという。また、ここにはかつて長方形の土塁があった。大正～昭和初期初期の火薬庫に付属する土堤と考えられた。松前江差線(昭和11年開通)のトンネル工事に使用した火薬類の貯蔵庫とする説が有力である。ここでは館野6遺跡周辺の遺跡のみについての概説にとどめ、以下、Ⅵ章4.「館野～矢不來地区の遺跡」において近年の調査動向を踏まえた様相を述べる。函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査の総括とする。(大泰司)

## II 調査の方法

### 1 調査区の設定と座標値

館野6遺跡のグリッド設定にあたっては、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が作成した「函館江差自動車道上磯町館野矢不來間用地測量用地平面図」1/1,000図を基本図として使用し、路線内の測点SPを基準点として用いる。測点SPを二か所直線で結びグリッドラインの基軸とし、それに直交するラインを設け4m×4mの方眼を発掘区に設定している。測点SPに平行するラインにアラビア文字を用い、直交するラインにはアルファベットの大文字を使用した。なお、測量成果は平面直角座標系X I系の値（世界測地系）である。以下に測点と設定の基準を示す。

測点SP14,400-SP14,500間を「20」ライン、SP14,400に直交するラインを「M」として発掘区にグリッドを設定（調査区設定 図I-3・4）。なおSP14,400及びSP14,500の測量成果および水準測量に使用した基準点は次の通りである。

SP14,400 (20M杭)	X = -245,525.262	Y = 30,528.574
SP14,500	X = -245,623.291	Y = 30,508.914

### 2 発掘調査の方法と経過

北斗市道は調査区内を30g区付近から35d区付近にかけて横切っており道路切り替えを伴う調査が必要とされた。さらに、この市道は、地図上においては調査区南側に沿っている筈であった。しかし、ここは無舗装の道路であり、地形なりに走りやすい部分を車両が通行した結果、68U区付近から70R区付近へかけて調査範囲を横切っていた。そのため道路切り替えの工程が加わった。

表土除去は5月18日から開始された。そこで、杭打設は5月28～29日頃から開始できる見込みとなった。5月22日に伐採は終了した。

調査に伴い、雨天時など濁水が発生する可能性があった。そこで、濁水対策を講じた。調査範囲縁辺の外側に土嚢を積み、そのすぐ内側に溝を設けて濁水が流れるようにした。溝を流れた水は、調査範囲の斜面下側に掘り込まれた沈砂池に流れ込む。沈砂池には濁水をろ過するためのろ過材（バイオと呼ばれていた）が備え付けられた。

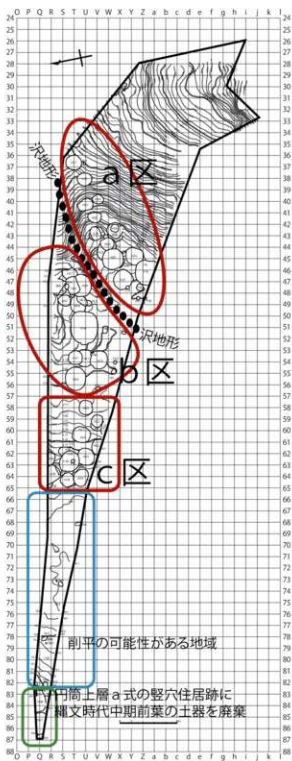
表土除去前、現地確認の段階から、51U区周辺は木がまばらであったことから、明瞭な窪みが確認できた。表土除去後、周辺を精査した。すると直径8m前後のいびつな円形をした深さ50cm以上の窪みを検出した。窪みの周りを取り囲むようにして灰黄褐色土が分布する（図Ⅲ-1-12）。その幅4mほど、ところどころではそれ以上あった。灰色黄褐色土は基本層序Ⅲ層とⅤ層が混在し、Ⅴ層の方が多い土であった。遺構の掘り上げ土と思われた。大型堅穴住居が埋没、そしてその周囲に掘り上げ土が周堤状に残されたと考えた。H18の名称を付けた。

表土除去時に63R区のあたりに丸型スコップの幅で、正方形の試し掘りを行った。すると、65ラインより東側のいびつな黄褐色土が深く続いており、50cmほど掘り下げても、まだ連続していた。これは盛土の可能性があると考えた。表面から採取できる土器片は円筒下層d2式土器であったため、この時期の盛土があると想定していた。

表土除去後、遺跡の状況が若干見えてきた。36S区から48Z区にかけて尾根状の地形があっ



図Ⅱ-1 盛土とトレンチの位置関係図



図Ⅱ-2 遺構の位置関係図

た。ここに堅穴住居跡を思わせる窪みが検出された。またこのすぐ北側、45S区から49X区にかけて沢地形が走っていた。後にサイベ沢Ⅶ式の廃棄場所であるF82を検出した沢〔39S→50Y区〕の一番深い部分である。この沢のさらに北側、斜面を登り切った台地縁46～50ライン付近にも堅穴住居跡を思わせる窪みが検出された。盛土が想定できる場所に、堅穴住居らしき窪みが無かったため、盛土部分に堅穴があっても盛土で覆われている可能性があった。逆に63R区近辺の盛土はここまで伸びていない可能性があった。

堅穴住居跡と思われる窪みや、盛土の性格を知るためにトレンチ調査をする必要があったが、まず、調査を展開するにあたっては、広い廃土場が必要であった。

68U区付近から70R区付近へ向かって斜めに調査区を横切る北斗市道路西側は現代の耕作を受けていた。まずはその68～81ラインの間の調査区を先行して行った。

調査当初の廃土場が無い段階では、廃土で土嚢を作った。そして、雨天時に、調査範囲内で濁水が発生した場合に備えて、その土嚢で調査範囲の縁辺をとり囲んだ。

道路に近い側から6～7つの調査区をひとまとまり、2～3ラインごとに調査を進めていった。終了した調査区を廃土場とした。廃土場が満杯になった段階で、道路を利用して、重機による廃土搬出を行った。このようにして廃土場を広げて行き、調査範囲西側の廃土場を確保した。(この部分の道路切り替えは9月19日に行った。午前中に廃土処理、午後道路切り替え工事。)

また同時に、調査範囲内の南東側33h区付近および26～30-d～j区について、市道の道路切り替え、そして、濁水対策の設備機能を完璧にするために、ここを掘削せねばならなかった。そのため、優先して調査する必要があった。

さらに加えて、発掘調査計画策定B-1地区の25%調査(隣接する4調査区のうち1調査区を掘り下げて遺跡の傾向、遺物の出土状況、遺構の有無、を調べる調査)を行った。遺物が少ないことが想定でき、調査を優先的に、効率よく進めることで廃土場を確保、その後の作業のさらなる効率化を望めたためである。その結果、31W杭—35W杭—35X杭—37X杭—37c杭を結んだラインの南側に遺物が少なく、遺構も検出されなかった。そこでこの場所を一気に掘り下げて遺構確認を行い、調査を終了した。調査範囲内東側の廃土場を確保となった。

次に、H18の調査、および36～50ライン近辺の堅穴住居らしき窪みの調査、および盛土のトレンチ調査を同時に開始した。(図Ⅱ-1)この頃、雨ががりの調査範囲内表土除去後表面に、円筒下層c式頃の土器破片が洗い出されるようになってきた。円筒下層d2式の盛土の下に円筒下層c式以前の遺構がある可能性が出てきた。Sライントレンチ調査が進むと、円筒下層d2式の下に円筒下層b式からc式にかけての盛土遺構があることが確認できた。その盛土には堅穴住居が複数軒、掘り込まれている状況も判明してきた。

盛土の性格が見えてきた段階で、調査範囲の西端、81～87ラインの間、H57、H58の調査を開始した。堅穴住居跡覆土中の縄文時代中期の廃棄場、住居跡そのものとそれらと切り合う遺構群の調査である。

盛土のトレンチは当初3本設定した。広く全体の様子を知るための調査区Sラインに沿って設定したSライントレンチ、形状と土層堆積の関係を観察するため、地形を反映して設定したAトレンチ、盛土の分布範囲を確認するため盛土の縁と思われる場所に設定したBトレンチである。(図Ⅱ-1)

H18掘り込み面、H18掘り上げ土、その下の盛土といった、H18北側の堆積状況を知るために、H18平面形短軸断面観察用土手から51ライン沿いにトレンチを伸ばして、掘り下げた。これをCトレンチと称した。(図Ⅱ-1)

加えて、53R区から54R区にある黒色土入り込みの性格を確認するためのDトレンチを掘り下げた。

最初、H18のような大型住居を想定したが、壁面・床面が検出できず、自然地形と判断した。(図Ⅱ-1)

Sライントレンチは65～69ラインまでをSライン上で、54～65ラインまでをSラインより南側に1mの幅で土層観察用ベルトを設けて記録した。

Aトレンチは61T杭と59V杭を結んだラインを北側はSライントレンチにぶつかるまで、南側は59V区にあるH22の南側壁面にぶつかるまで延長して設定したものである。表土除去後の地形から盛土の形状の短軸断面形状を反映させて設定した。

Bトレンチは盛土の広がりを確認するためSライントレンチに平行なトレンチを平面的な土色の分布から、盛土の縁と思われた54U杭から56U杭にかけて設定した。そのままH18掘り上げ土分布を確認するトレンチを拡張、基本層序V層ローム層まで掘り下げた。最終的に53U杭から56U杭の間に加えて、52U区はH18まで拡張とした。

Cトレンチ(51ライントレンチ)はもともとH18の掘り上げ土の土層断面を確認するために設定したトレンチである。51-Q～S区にまたがる。土層観察が急務であった遺物はまとめて取り上げた。

Dトレンチは、53R区と54R区はH18のような大型住居を想定したものである。住居トレンチを想定したためMTD(盛土のトレンチD)という層位(注記)でまとめて遺物を取り上げた。土層は調査範囲北壁の土層図中に記録がある(図Ⅱ-32)

51ライン以东は調査範囲北側の壁にトレンチを開けて土層を確認し、盛土調査の目安とした。最終的には調査区北側壁47～66ラインにかけての土層堆積を記録して盛土遺構の理解に努めた。

現場での写真撮影は主に以下の機材を使用した。

カメラ	マミヤ RZ67Pro II
レンズ	マミヤ・セコール50mmF4.5 マミヤ・セコール60mmF4L-A マミヤ・セコール90mmF3.5mmF3.5W マミヤ・セコールマクロM140mmF4.5m/L-A
フィルム	FUJIFILM NEOPAN 400 FUJIFILM PROVIA 400X

### 3 整理作業の方法

#### 1. 一次整理

平成21年度は写真整理、図面整理を中心に行った。平成22年度は遺物水洗を中心作業した。加えて土壌水洗、図面整理等を行った。平成23～24年度は遺物整理台帳付けおよび遺物注記を中心に行った。また、土壌水洗の結果を選別し、植物遺存体、動物遺存体を抽出した。

#### 2. 二次整理

平成24～27年度は、土器片の接合、その結果を反映させての復元を主体として行った。土器および石器について、実測遺物の抽出を行い、図化を行った。また撮影できる遺物については随時、写真撮影を行った。

#### 3. 室内撮影

二次整理後の報告書掲載遺物は室内にて撮影をし、写真図版を作成した。室内での写真撮影は以下の撮影機材を使用した。

## 土器撮影 吉田担当

カメラ	サカイマシントール TOYO-VIEW45G II
レンズ	ニコン NIKKOR-W210F5.6
撮影台	サカイマシントール 無影撮影台 及び ウェイトスタンド
ストロボ	コメットCA3200 発光部 (32H)
デフューザー	ライトバンク・アンブレラ
フィルム	FUJIFILM NEOPAN100ACROS FUJIFILM PROVIA 100F

## 石器撮影 主に中山担当

カメラ	サカイマシントール TOYO-VIEW45G II
レンズ	ニコン NIKKOR-AM ED210F5.6
撮影台	サカイマシントール 無影撮影台 及び ウェイトスタンド
ストロボ	コメットCS-2400T II 発光部 (25H)
フィルム	FUJIFILM NEOPAN100ACROS FUJIFILM PROVIA 100F
デジタルカメラ	シグマDP3メリル

スタジオ撮影した台帳はパソコンに入力した。その結果について、吉田が主体となって、被写体による検索が可能なデジタルデータベースとして管理している。

## 4 遺物の分類

## (1) 土器等

縄文時代の各期について、a・b類に分けたものは前半と後半の二段階、a・b・c類に分けたものは前葉と中葉、後葉の三段階に区分したものである。

## I群 縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻復縁文・条痕文・沈線文のある土器群。(今回は出土していない。)

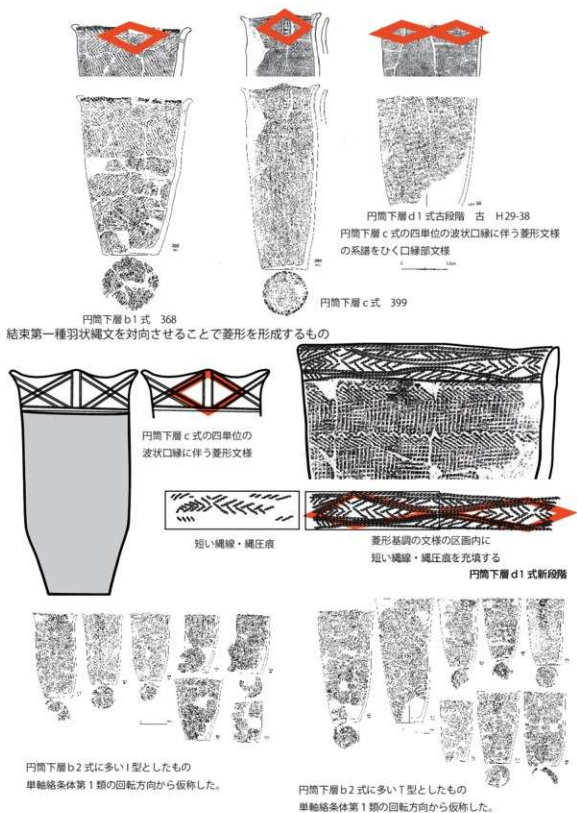
b類：熱糸文・絡糸体匝痕文・短縄文のある土器群。コッタロ式、中本格式、東銘路IV式などに相当するもの。

## II群 縄文時代前期に属する土器群

a類：縄文尖底・丸底土器など。春日町式・石川野式・静内中野式などに相当するもの。(今回は出土していない。)

b類：「円筒土器下層式」とも言われる型式である。今回の出土のほとんどであり、当遺跡の調査範囲において円筒下層b式から円筒下層d式までが出土した。これらに加えて、次段階の縄文時代中期円筒上層a式にかけて連続性が高かった。時期細分(表II-1)するにあたりVI章2項に記載した手順で作業を行った。要約すると、まず円系遺構廃絶後の覆土中廃棄のまともりから、円筒下層c式、円筒下層d1式、円筒下層d2式、縄文時代中期円筒上層a式について基準を定めた。次に盛土遺構出土遺物について、検討した。円筒下層c式の定義を円筒下層b2式新段階と円筒下層c式の間に一段



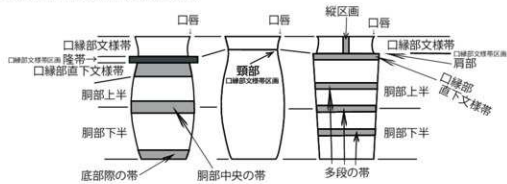


図Ⅱ-3 円筒下層式土器文様解説図

表Ⅱ-1 円筒下層式土器文様要素消長表(北斗市館野6遺跡の場合)

土器の部位	口縁部文様		口縁部文様帯		連続文様		口縁部文様帯区画		地文		帯		縁部	
口縁部文様(口縁部文様帯区画)	有	少	有	少	有	有								
口縁部文様帯														
連続文様														
口縁部文様帯区画														
地文														
帯														
縁部														
隆部														
肩部														
胴部上半														
胴部下半														
底部際														

円筒下層b1式最古段階は円筒下層b2式と円筒下層d1式最古段階の過渡期



図Ⅱ-4 円筒下層式土器部位名称

階、設けなければ変遷が急激になるため、「円筒下層b2～c式」を設ける事とした。円筒下層b2式はM5盛土点取り遺物を基準として円筒下層b2式新段階を設けた。円筒下層b2式の新段階については円筒下層b1式のまとまりで円筒下層b2式の要素を多く持つ一群との線引きが、明確とは言い難い。円筒下層b1式、円筒下層b2式、円筒下層b2式新段階、円筒下層b2～c式を設定した。やや補足気味に円筒下層b2式古段階を設定した。遺構の時期の記述で、円筒下層b1式から円筒下層b2式古段階にかけてを「円筒下層b2式古手」この古手に近いまとまりを伴うものを「円筒下層b2式前半」、これより新しい下層b2式のまとまりを伴うものを「円筒下層b2式後半」とした。円筒下層b2式について古段階に近いものを「円筒下層b2式前半」、新段階に近いものを「円筒下層b2式後半」とした。

作業的には一旦すべてⅡ群b類土器で分類、整理した。この時、周辺の遺跡遺物を参考におおまかに円筒下層b1式、円筒下層b2式、円筒下層c式、円筒下層d1式、円筒下層d2式に分けて接合の目安とした。これは報告書とは無関係だが、整理時の遺物収集帳(遺物台帳)にはこちらの型式名が記載されている。破片段階での判断でありおおまかな傾向のみの反映である。

出土時に、その場にまとまって潰れている、一個体分と思われた土器破片群は、なるべく復元して、復元し終わった段階で、復元個体を先述のように型式分類した。掲載は出土層位と出土調査区別にして、掲載表で整理の結果導き出された型式名を付した。

各型式について文様要素等の変遷内容は表Ⅱ-1にまとめた。その補足図として図Ⅱ-3とⅡ-4を示した。盛土遺構出土遺物を出土層位別・調査区別に掲載したため、Ⅵ章で当遺跡における土器編年観を説明する形となった。Ⅵ章の図は円筒下層d2式から型式順をおって円筒下層b1式まで下る。た

だし同一出土地点の堆積順遺物出土状況や文様要素の集成図が所々挟まる。

### Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

- a類：円筒土器上層式およびサイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの。
- b類：榎林式、大安在B式、ノダツブⅡ式に相当するもの。

### Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

- a類：天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。
- b類：ウサクマイC式、手稲式、鯉調式、エリモB式に相当するもの。(今回は出土していない。)
- c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式、湯の里3式に相当するもの。(今回は出土していない。)

### Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群。大洞BC式、C1式、C2式が出土している。

### Ⅵ群 統縄文時代に属する土器群。(今回は出土していない。)

### Ⅶ群 擦文時代に属する土器群。(今回は出土していない。)

**中世から近世・近代にかけての陶磁器** 今回は江戸時代末期の陶磁器が出土した。

**土製品** 鐮形土製品、小型の舟形土器、焼成粘土塊そして深鉢形土器の割れたものを加工したもの、等が出土している。

## (2) 石器等

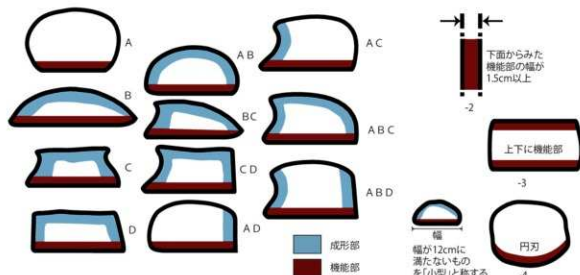
### 剥片石器

**石鏃**：弓矢の先端、鏃と考えられるもの。全体を扁平に加工し、端部に尖頭部を作り出したおおよそ5cm以下の石器。おおよそ線対称の形状である。

**石槍又はナイフ**：素材の両面を加工し、全体を扁平にして、尖頭部を作り出した石器。おおよそ5cm以上で、おおよそ線対称の形状をしている。槍先を連想させる形状のもの。

**ドリル**：素材の端部に錐の機能を連想させる先頭部を作り出した石器。「石錐(せきすい)」と「石錘(せきすい)」とで音が紛らわしいのでドリルの呼称を用いた。

**つまみ付きナイフ**：平面観の正中線、中心線など軸をはさんでふたつの挟りが対応して「つまみ」状の顕著な装着部を有する石器。スクレイパー的な機能を持つものをここに分類した。線対称でも厚みのあるものはここに分類したのに対して、線対称で扁平に加工されたものは「石鏃」や「石槍又はナイフ」に分類した。また錐状の尖頭部が顕著なものは「ドリル」に分類した。



図Ⅱ-5 扁平打製石器形態分類模式図

**スクレイパー**：素材の縁辺に、刃部と想定される、連続した加工を施した石器。

**石核**：石器の素材を剥離したと考えられる石器。

**両面調整石器**：素材の両面を加工したもの。石核的な要素が強い。線対称な形状であっても、尖頭部が不明瞭、厚みがある、あるいは舟形状に近い等、石楯に分類し難いもの。

**Rフレイク**：素材に二次加工を施したもので、典型的な石器に分類されない剥片。

**Uフレイク**：素材に微細な剥離痕が見られる剥片で、使用したものとみられる剥片。

**ピエス・エスキュー (楔形石器)**：両極技法による剥離が行われた、あるいは同様な状況下で使用されたと思われる石器。

**フレイク (剥片)**：石核から、あるいは原石から、石器作成時に剥離された不定形な石の破片。

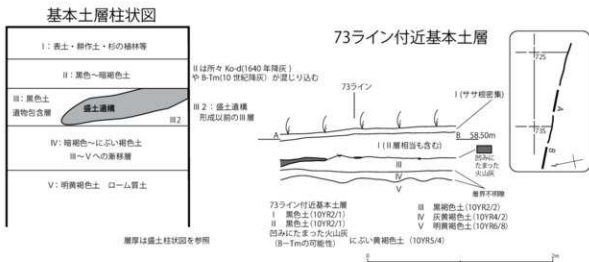
## 礫石類

**石斧**：打ち欠き・叩打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器。石のみも今回小型の石斧・石斧片が多かったため石斧として取り扱った。

**石斧未成品のうち擦り切り残片**：石斧を制作するにあたって特徴的に選択される石材がある。それらは往々にして石鋸により擦り切りにより分割される。石斧素材特有の若干の粘性に適した方法であり、石斧の正面観が直線的で、断面観にふくらみをも有する独特な側縁形状を、素材の両面から対応させて擦り切る事で作出しやすいという利点があるためと考える。石斧製作時に石斧に加工しきれなかった、あるいは石斧を取り出した残片が遺物として残ったものである。緑色泥岩が多い。ただ従来「緑色泥岩」とされてきた岩石が、「アオトラ石」という変成岩ではないかという指摘が出てきた。近年「アオトラ石」が交易の視点から、注目されつつある。素材が石斧制作に適した性質を持ち、その産地も平取町に限定されるためである。それゆえ、これを意識して緑色片岩、緑色岩等の記載も試みられている。今回、試料の切片をとっての観察は出来なかった。そこで、当センターにおいて、道央・道南地区の遺跡報告で、従来用いてきた呼称、「緑色泥岩」をそのまま用いるものとした。だが三内丸山遺跡の成果（前川 2006）から鑑みて、産地が限定的であることから、今のところは俗称の「アオトラ石」が岩石名となる可能性もある。以上、平成27年度12月19日に平取町で行われた「特別シンポジウムアオトラ石の不思議」の内容を踏まえて記述した。

表Ⅱ-2 注記略称例

出土場所の略称	出土状況例	対応する注記	注記略称	略称	解説	略称	注記略称
近畿遺跡出土土遺物	館野4遺跡H20床面より中上の土層遺物番号25	98M20.3.25	遺物番号	物質と遺物	物質	物質	
近畿遺跡出土土遺物、土層観察用土(中上)から出土	館野4遺跡H1ヘルド西端出土土層番号22	98M21-W022	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
近畿遺跡出土土遺物	館野4遺跡H25層土7層遺物番号41	98M25.27.7.41	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
近畿遺跡の付着遺跡出土土遺物	館野4遺跡H18H1の遺物出土遺物番号8	98M18H1.8	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
近畿遺跡の盛り上げ出土土遺物	館野4遺跡H18層より上げ43付着出土遺物番号9	98M18.43.9	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
縄土のレンダ片取り遺物	館野4遺跡M4・(縄土)遺物(注記番号多記)No.53	98M4-53	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
縄土のレンダ片取り遺物(注記番号多記)No.53	館野4遺跡M4・(縄土)遺物(注記番号多記)No.53	98M75.62515	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
OHレンダ出土土遺物	館野4遺跡M4・(縄土)遺物(注記番号多記)No.53	98M75.62515	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
縄土遺物番号取り上げ	館野4遺跡M4・(縄土)遺物(注記番号多記)No.53	98M4-5.56724	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
付着層出土土遺物	館野4遺跡基本層序直層40付着出土遺物番号9	94M10H12	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
高度収(埋)土遺物	館野4遺跡表層遺物番号6	94C.26	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物



**たたき石**：礫に、叩打痕と思われる顕著な潰れ部分が観察される石器。複数の叩打痕が複合するものが多い。そのため、凹み石もここに分類した。

**擦り石**：礫の一部、主に側縁に、顕著な擦痕を持ち、それが使用痕と考えられるもの。

**扁平打製石器**：扁平な礫を素材とし、直線的な側縁部に使用痕を持つもの。使用痕は叩打痕と擦り面が複合したものが多い。使用痕以外の縁辺に打ち欠き等の加工を施したものが多い。

**北海道式石冠**：上面観が楕円形で、側面に持ち手と思われる叩打による溝を作出する。底面を有し、そこに使用痕を持つ。使用痕は擦り面に叩打痕が複合したものが多い。

**石鋸**：「擦り切り残片」の項で述べた石斧加工時に擦り切る際用いた石器。扁平な素材の縁辺に、正面観が直線的で、機能部の断面観がU字形ないしはJ字形をした、特有の擦り痕を持つ。

**石錘**：扁平で楕円形をした礫の、長軸両端に抉り状の加工を施した石器。錘としての機能が想定されるもの。長軸両端に抉りがほどこされていても形状によっては扁平打製石器未成品としたものがある。

**砥石**：礫の片面、あるいは両面、ときには複数の側縁にも砥面を持つ石器。

**台石・石皿**：平坦面を持つ大型礫に打撃痕や擦り痕が観察される石器。主に擦り痕主体で凹面を持つものを石皿とした。

**加工痕のある礫**：礫に加工を施したもので、定型的な石器に分類されないもの。

#### 礫

礫そのもの以外に以下の関連するものがある。

**被熱礫**：熱を受けたと思われる痕跡がある礫。

**有孔礫**：礫に自然形成とみられる貫通孔があるもの。

#### 石製品

**異形石器**：連続した剥離によってスクレイパー等の実用品とは思われない特異な形状をしたもの。

他に、球状耳飾り、軽石を加工したもの、線対称な形状で石鋸の機能部のような側縁を両側に持つもの、石棒、石棒に準ずると思われる礫、全面研磨で石斧を思わせるが刃部を持たないもの、等がある。

### (3) 自然遺物

骨角器、焼骨片、炭化材、炭化種実などがある。遺構の事実記載に反映すべく努力した。分析結果はV章にまとめてある。

**出土遺物の注記作業について**：土器は碎片以外、石器は極力、注記作業を行った。遺跡名・出土位置・

出土土層位・遺物番号(台帳の番号)を遺物の観察に支障がないと思われる場所に記入した。その略称等は表Ⅱ-2の通りである。

## 5 土層の区分(図Ⅱ-6)

基本土層については平成20年度、本線部分での調査を踏襲した。しかしⅠ層とⅡ層の差異が判然としなかった。火山灰が面的に入り込んでいないことに起因するものと思われる。まばらにレンズ状の火山灰入り込みがあるのみであった。顕著なものは、H18覆土中のみであった。以下、調査範囲内の最大公約数的な傾向である。

**Ⅰ層**：表土。層厚はⅡ層と合わせて20~30cm前後。近現代に行われた耕作、植林、整地等の影響を受ける。Ⅲ層の遺物がそれにより混在する。

**Ⅱ層**：黒色土~褐色土層。Ⅰ層と区別のつかない場所が多い。黒色土と、駒ヶ岳d火山灰(Ko-d 1,670年降灰)、白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm 10世紀降灰)の二次堆積層。Ⅰ層同様攪乱の影響を受ける。Ⅲ層の遺物がそれにより混在する。

**Ⅲ層**：黒色土。遺物包含層。Ⅲ2層とした層位は盛土遺構の下に分布していたⅢ層である。縄文時代早期の遺物が若干入り込むが、非常に少ない。

**Ⅳ層**：暗褐色土~にぶい褐色土。漸移層。遺物包含層。

**Ⅴ層**：明黄褐色土。本線部分においてはⅤ層上面の一部に濁川火砕流堆積物(12,000年降灰)の二次堆積と思われる層が見られる。

次に73ライン付近で観察した基本土層を図示する。調査区の盛土が無い部分の具体例である。ただしこの土層図付近は縄文時代前期前半に削平された可能性がある(Ⅰ章4(3)参照)

**Ⅰ層**：黒色土笹根が密集する上部とⅡ層相当と混在する下部がある。下面には地形の凹みには降下火山灰の堆積がたまっている。北斗市矢不來11遺跡(当センター2009年刊行、第Ⅷ章総括に近隣の遺跡の土層対比表あり)など近隣の遺跡と対比すると、白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm 10世紀降灰)と思われる。

**Ⅲ層**：黒褐色土でⅣ層との境界は平坦であるが、不明瞭である。不明瞭とはいえ本来の漸移的な変化が見受けられなかった事、Ⅲ層の堆積が調査区内の他か所と異なる事から、このあたりの平坦面について人為的な削平の可能性を考えた。

**Ⅳ層**：灰色黄褐色土。漸移層。Ⅴ層との境界は不明瞭である。土質のせいか、Ⅲ層とⅣ層に比べるとやや明瞭であるが、かなり層界の凹凸が激しい。

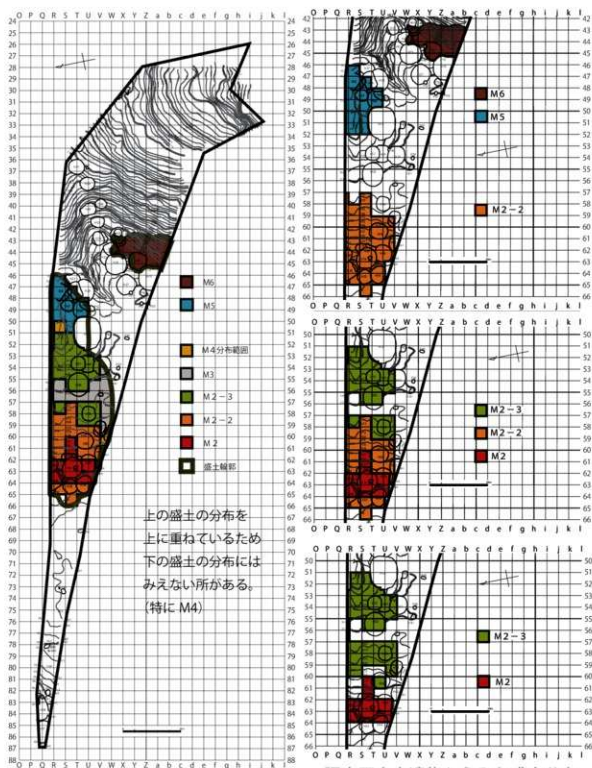
**Ⅴ層**：明黄褐色土。

## 6 盛土遺構の調査

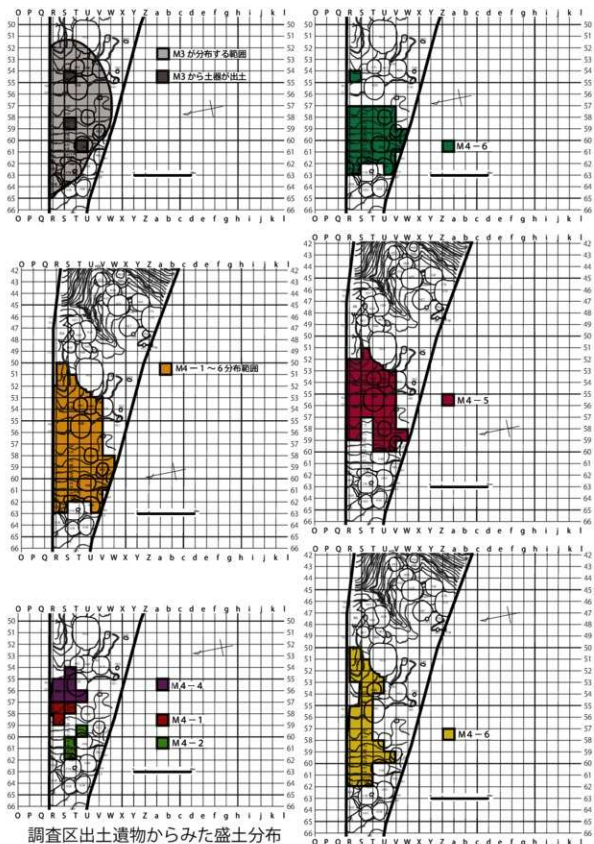
### (1) 各盛土遺構の特徴(図Ⅱ-1・2・6~38)

盛土遺構、M1~M4はSライントレンチ・Bトレンチ・Aトレンチによって設定された(図Ⅱ-1)。M2とM2-2はⅠ章住居の項で示したc区(図Ⅱ-2)に分布し、出土遺物は円筒下層d2式が目立つ。M2-3はb区の52~57ラインに分布する。

M4はM2の下位にある盛土で円筒下層b式が目立つ。M4は明らかなどころでは、円筒下層b2~c式(H36)以降、竪穴住居が掘り込まれ始める。Ⅰ章で示したb区からc区にかけて分布する。盛土

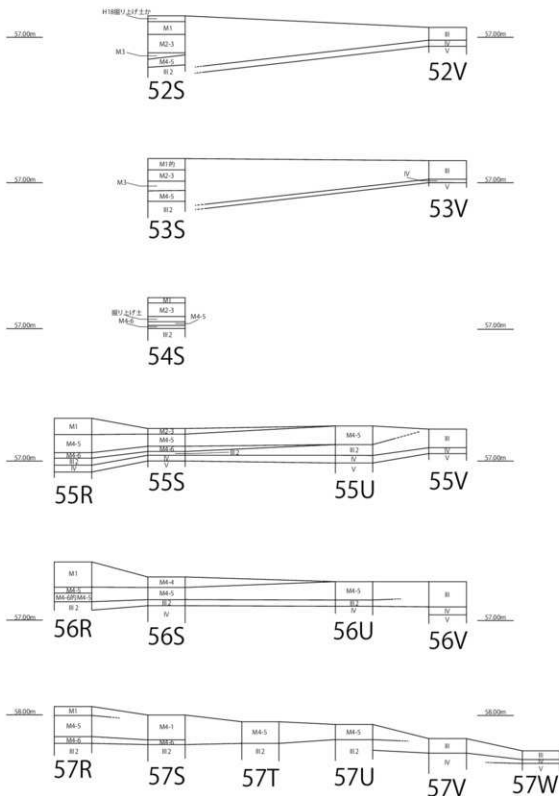


図Ⅱ-7 盛土分布図1 (全体・M2・M5・M6)





盛土柱状図 52~57ライン  $\frac{0.2m}{10}$



図Ⅱ-9 盛土柱状図 1

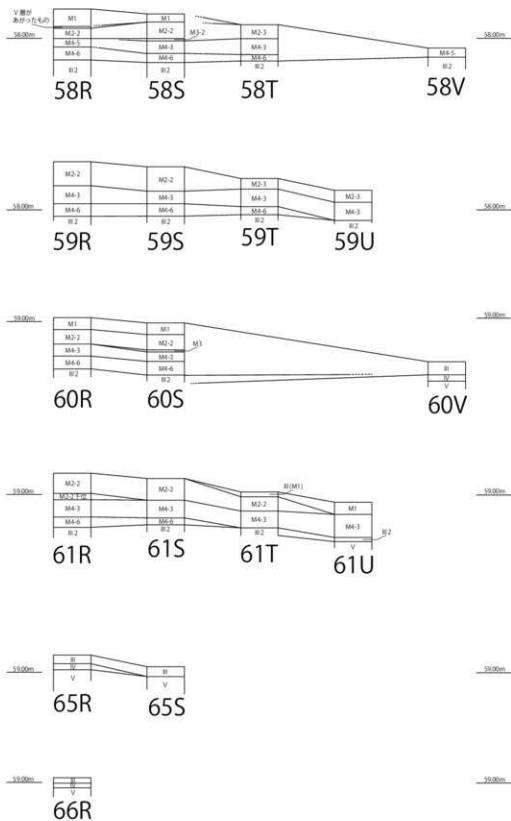
盛土柱状図 58～66ライン  $\frac{0.2m}{10}$ 

図 II-10 盛土柱状図 2

表Ⅱ-3 M2・M2-2・竪穴住居の相関関係。土器出土層位(図Ⅵ-1-4~7参照)

	円筒下層c式が廃棄	円筒下層d1式 最古段階が廃棄	円筒下層d1式古段階 古が廃棄	円筒下層d1式古段階 新が廃棄	円筒下層d1式 新段階が廃棄	円筒下層d2式が廃棄
H21		H21覆土下位	H21覆土下位		覆土上位のF99・M2-2	覆土上位M2-2
H29			H29覆土下位	H29覆土上位		覆土上位のF78・M2(盛る)
H34					H34覆土	覆土上位のM2
H35・H56	H35・H56覆土					覆土上位のM2
H38					H38覆土	覆土上位のM2
H39	H39床面近く				H39覆土	H39覆土上位
M2						M2(土を盛り上げる)
M2-2				M2-2	M2-2	M2-2

M2とM4は基本層序Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層が混じりあった土から成る。Ⅴ層起源の土が主体であるため、多少の程度の差こそあれ、黄褐色味を帯びた土から成る。現世の表土に近い部分において顕著であるが、盛土そのものも、時間と共に黒色土化が進む。

M1としたものは盛土の上面の黒色化がすすみ、基本層序Ⅲ層と変わらない土色となったものである。その場所によって、下に連続する盛土と同じ遺物が多く含まれる。直下の盛土(M2、M2-3、M4-1等)が黒色化したもので、平面的な区別がつかなかったため取り上げの便宜上M1を使用した。一部は耕作等の攪乱を受けている。

M3はM2とM4の間にはさまるⅤ層主体で、断続的に分布する薄い土層である。M2とM2-2としてM2-3の分布を併せた分布と同じ分布をするが、全面にM3があるわけではない。水で掘り上げ土が流出、窪みに堆積したものか。Ⅴ層起源土あるいはそれがグライ化したものである。

M5はM4の東側・b区に分布し、M4からそのまま連続する盛土である。海岸段丘が矢不來川に開析された斜面下方へ、言い換えるとRラインより北側の斜面へ、M4、M5盛土は調査範囲外に広がっている。また両盛土とも、円筒下層bから下層c式の竪穴式住居が掘り込まれている。M4は円筒下層b2～c式(H36)以降、M5は円筒下層c式(H28)以降の竪穴式住居が掘り込まれ始める。時期的にも立地的にも類する盛土である。M5盛土は円筒下層b2式から下層b2～c式のところに形成されたもので、円筒下層b2式新段階の出土量が目立つ。

M6は、時期的にM4やM5に近いが、分布位置が調査範囲中央の平坦面から東側の斜面にかけて検出された。したがって他の盛土と立地が異なる。調査範囲内の分布状況は、北斗市道側へのひろがりがあった事を示す。I章でa区とした36～50ライン近辺の竪穴式住居らしき窪みを調査中に、東側の斜面42～46-W～b区のⅢ層をところどころ下げたところ、円筒下層b式土器を主体とする廃棄のまとまりを検出した。ベルトを設定して約15cm面的に掘り下げると、にぶい黄褐色土の土層を検出した。斜面を登り切った平坦面に立地する住居群の掘り上げ土とも考えたが、平坦面の住居H19-25-54・66の覆土からも同様に検出されたことから、盛土とした。盛土は円筒下層式d2段階のH19、円筒下層d1式のH25・H65、円筒下層b2式新段階のH26に掘り込まれている。また盛土は円筒下層b式以後、円筒下層d1式以前の住居H53・H54・H66や円筒下層b式の頃のH55に流入している。

M4は円筒下層b2～c式のころ、M5は円筒下層c式、M6は円筒下層b2式新段階から竪穴式住居が掘り込まれる。またその頃円筒下層b2～c式以降、比較的平坦部に位置する竪穴式住居廃絶後の窪み(H26・H36)へ廃棄が始まる。M5においては円筒下層b式期への廃棄があるが、斜面際の住居であることから、やや性格を異とする。

## (2) 盛土の細分(図Ⅱ-1・2・6～38)

本来ならば「M2」は「M2-1」と表記すべきであるが、最初に検出した盛土であるため「-1」を略して表記してきた。しかし、整理が進むにつれて、M4-1、M5-1、M6-1と異なり、基底部上の盛土

の分層というより、「M2-2」、「M2-3」それぞれが、独自の特徴・時期を持つため、「M2」として扱った。

M2は円筒下層c式期のH39、円筒下層d1式古段階の時期の竪穴住居H29・H38、下層d1式最古段階のH21の廃絶後のくほみへの円筒下層d1式古段階の廃棄層がそれぞれを埋めるようにして発生、そこからさらに円筒下層d1式新段階の廃棄土層が成立し、さらには円筒下層d2式廃棄時には盛り上げたものである。

M2およびその分布域である、60～64ラインのM1において円筒下層d2式が目立つ。M2の上位から下位にかけて同様である。M2の発生に伴って、M2から周辺にあふれ出るように分布する土層をM2-2とした。57ライン付近まで分布する。円筒下層d2式に下層d1式が混在する。

またH21の場合円筒下層d1式古段階の廃棄層を覆下位に廃棄、そのうえのM3から連続する、円筒下層d1式新段階の廃棄をM2-2としたためこのような結果になったものである。つまり、H21覆土上部に相当する、F69 (M3から連続) やM2-2最下位において、円筒下層d1式新段階のまとまりが出土した。盛土全体としては、60ラインを主として復元個体が多く、58～63ラインまで復元個体は分布する。

M2やM2-2と直接関連するかどうかは層位的に不明確であったが、M3やM4より新しく、M2-2の縁辺に分布するものをM2-3とした。Rラインならば51ラインまで分布する。円筒下層c式、円筒下層d1式が目立つ。一部、H22以南や57～61ラインでもM2-2と別個の土層をM2-3とした。平面的にみると主な分布は52～56ラインのb区である。調査当初は竪穴住居がM4を掘り込んだ際の「掘り上げ土」的要素が強いと考えていたが、51ライン付近では円筒下層d1式が目立つ。53ライン付近では円筒下層b式とd1式が目立つ。57ライン付近では円筒下層c式が各種出土した。そこに下層d1式が混じる。円筒下層c式のうち四単位の波頂部に対応する、菱形基調の口縁部文様の時期がまとまって出土した。調査範囲内では複数個体にわたる破片の割に復元個体は少ない。

M2-3において特徴的な出土状況を図IV-1-7に示した。凹系遺構を時期別に塗り分けた右図について凹系遺構が分布しない51R区、57R区のM2-3について、51R区では円筒下層d1式古段階のまとまった出土、57R区では円筒下層c式の波頂部に対応した菱形文様を持つ個体の出土がまとまってあった。いずれも円筒下層c式のM4-6での分布の中心は57R区に連続した調査区で傾斜的に斜面の下側に位置する58～59-R区にある。一方、円筒下層d2式古段階が盛土基底部焼土層に伴うのは51R区の49～50R区である。これも、51R区に連続した調査区で傾斜的に斜面の下側に位置する。盛土の形成の結果基底部には焼土層が存在する。そして肉眼観察では一枚にみえるが、斜面の下方に向かって伸びていく様子が後述する事実記載にも示す。つまり一時期に形成されたというより、複数回の廃棄の結果、下の焼土層は延伸していくのである。このM2-3と基底部で同一時期の土器について出土傾向にずれがあるのはその状況の一端を示している可能性がある。

M3はM2とM4の間にはさまるV層主体の土である。b～c区にかけて、M2・M2-2・M2-3と分布をほぼ同じくするが、断続的で全面にあるわけではない。「M3(-1)」はV層起源でグライ化が著しい。M3-2はV層起源でグライ化していないものを「-2」をつける事で示した。

盛土というより、竪穴住居掘削時の掘り上げ土、又はM2盛り上げに際して発生したV層主体土が流出、とどこどころ窪み部分に溜まったような状況である。顕著なところでは土器出土を伴う。

H21覆土に分布する60T区M3出土掲載番号67 (点取りNo.89) 68・69がからは円筒下層d1式新段階のまとまりがあった。54S区M3-2からは、掲載番号54 (点取りNo.58) 円筒下層b2式が復元できた。58S区M3からM4-3の遺物が接合した掲載番号43 (点取りNo.54) は円筒下層b2～c式である。

M3は縄文時代前期後半のものだが、検出場所によって伴う土器型式に新旧差がある。M2とM4の間に堆積することから、円筒下層b1式から下層d1式の間と考える。地点貝塚的な場所もあれば、単なる水の作用による堆積のところもある。盛土の定義上、盛土と呼ぶに難しい側面もあるが、便宜的に用いた。

M4は円筒下層b式から下層c式にかけての盛土である。M4-6とした焼土層が基底部に広がる。M4-1～5については焼土層上の盛土層である。土色や混在物等の構成内容から五種類に細分した。M4-1はぶい黄褐色土である。M4-2は褐色土だが暗めの色調である。大ブロック状に基本層序Ⅲ層起源土が混じる。M4-3は褐色土で基本層序V層がブロック状に混在する。M4-4は暗褐色土で、基本層序Ⅲ層とⅣ層が混在したものである。M4-5は褐色土で、基本層序Ⅲ層とⅣ層が混在したものである。Ⅲ層の方がやや多く含まれる。M4-6は褐色～ぶい橙色土で基本層序V層がブロック状に混在する。基本的には焼土層で、一部がまだらに焼け残る。骨片が混在する。

後続の調査となったM5、M6についても、基底部に明瞭な焼土層を確認し、M5-2、M6-2とした。その上部の土層はM4の調査成果を踏まえて、単純にM5-1、M6-1とした。

M4-1は58R区・57R・S区を中心として分布する。斜面の際の平坦部に立地する。「円筒下層b2～c式」の土器が多く復元された。またSライントレンチの土層のみから言うと、その平面的な位置は、下層に焼土層M4-6を伴うM4-3と伴わないM4-5の間でもある。円筒下層b2～c式の廃棄場所と考える。ただし平面的な土層の把握が難しかったため、一部、M2-3又はM4-5で取り上げた遺物もある。48・49のような円筒下層b1式はM4-1下位からの出土である。レベル的にM4-6のような基底部相当であるため、上位と異なり斜面際から盛土がのびる。つまり古いものが廃棄された場所と考えられる。平坦部・斜面際にこのような現象がみられるのは後述するM4-3でも同様である。

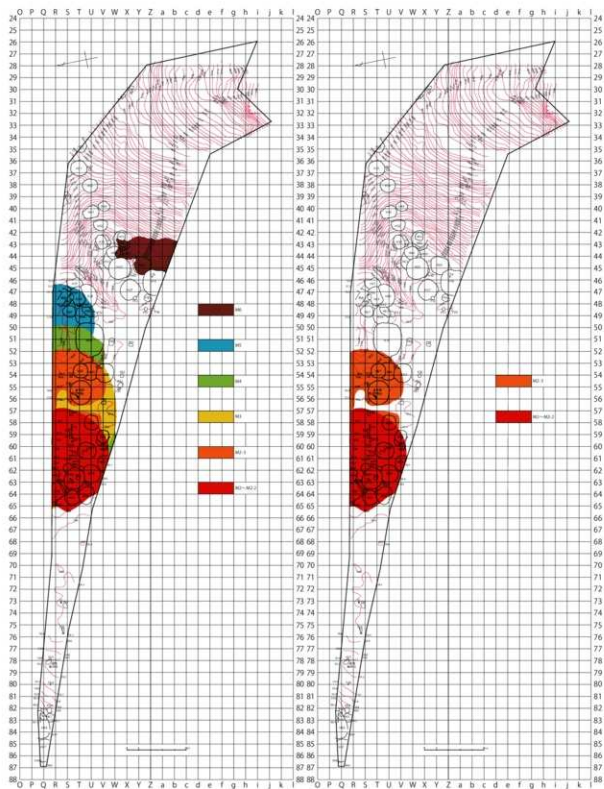
M4-2は60S区付近に分布する。SライントレンチのセクションからはM4-3と入り組むように堆積する。層界は不明瞭だが、60～61ラインの間と思われる。復元個体の分布をみるとちょうど円筒下層b1式と円筒下層b2式古段階の廃棄の境界である。円筒下層b2式古段階の盛土と考える。ただし平面的な土層の把握が難しかったため一部M4-3で取り上げられた遺物もある。

M4-3は主に57～62-Q～U区に分布する。復元個体を多く立ち上げることができた。下の土層には焼土層M4-6が発達する。円筒下層b1式から下層c式までが出土しており、その時間幅の中で、57～60ラインについては、Uラインくらいが古い、S～Tラインで古めのが出土してくる。Q～Rラインは新しいものが目立つ。ただし、60T区から円筒下層d2式(掲載番号76)が出土しているが、M2-2とまたがって接合しており、小型深鉢破片がまぎれたものと考えられる。

61ラインになるとこの様相が変わる。61R区は円筒下層b1式、調査範囲の中でも古い段階の土器が主体である。61S区・61T区についても同様で、復元個体の中に、円筒下層b1式が混じってくる。この傾向は62R区についても同様である。

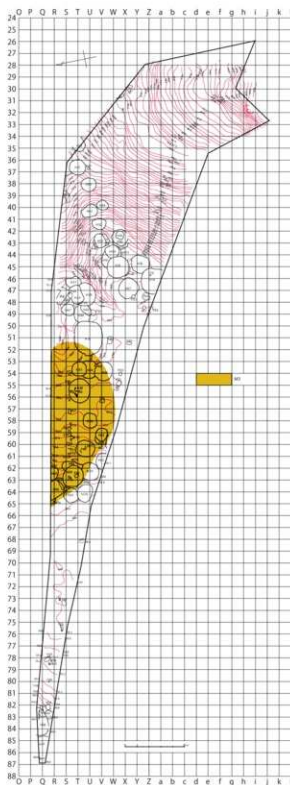
62R区から60T区、56V区にかけて斜面の傾斜変換点がある。台地のへりにH46がある。これについて周囲の竈穴住居との切り合い関係から最も古く、円筒下層b式段階という可能性がある。そこから円筒下層b1式土器を廃棄し始めている。61ラインが古く、58ライン側が新しい事から斜面下側に向けて新しいものが廃棄されている可能性がある。また57～60ラインについて、Uラインくらいが古く、Q～Rラインに向かっては新しい土器が目立つという傾向も、この地形の手前から廃棄していく様子が反映されていると考える。以上の遺物出土の傾向はM4-3下位での出土が多い事からその下のM4-6の特徴を反映していると思われる。

M4-3が分布する場所は、H21・H22・H29・H36・H38・H39のように円筒下層c式以降の可能性が

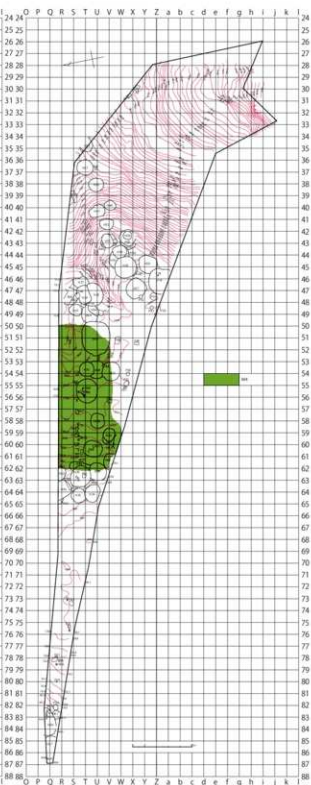


図Ⅱ-11 盛土推定分布図1 (全体)

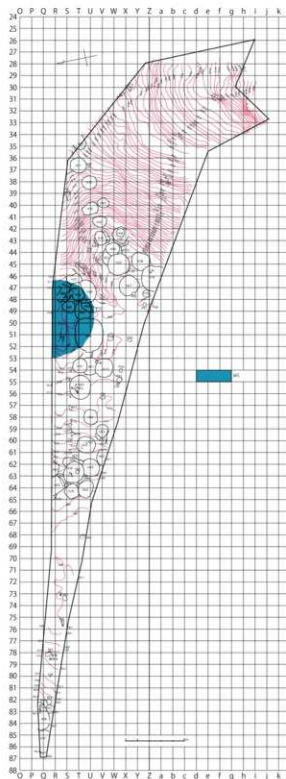
図Ⅱ-12 盛土推定分布図2 (M2)



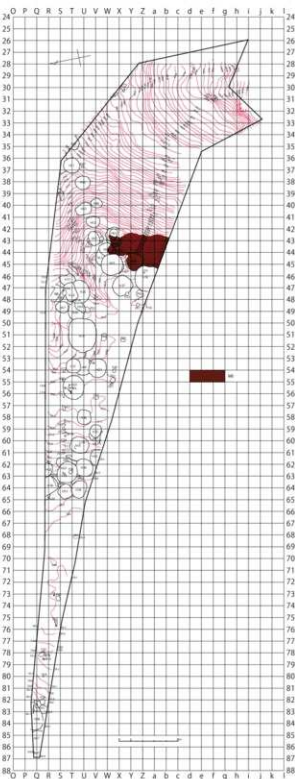
図Ⅱ-13 盛土推定分布図3 (M3)



図Ⅱ-14 盛土推定分布図4 (M4)



図Ⅱ-15 盛土推定分布図5 (M5)



図Ⅱ-16 盛土推定分布図6 (M6)



ある住居が掘り込まれている。飛び地のように分布する54R区ではH51が脇にある。調査状況として明らかなのはH21であるがM4-6を掘り込んで構築している。M4-3は褐色土で基本層序V層がブロック状に混在する。土層に紛れるブロック状のV層は、堅穴住居の土葺屋根に掘り上げ土を用いたとしてその残土も混じっている可能性がある。

M4-4は54～56S区付近に分布する。盛土に混在する土器から、円筒下層b2式後半から円筒下層b2～c式の盛土である。漸移層IV層と黒色土Ⅲ層の混在である。ロームブロックV層は混在しない。H20覆土遺物とまったく接合しなかった。H20のほうが新しい。出土遺物も新しい。そのためH20の「掘り上げ土」的な意味合いは無いと考える。それ以前の土砂の廃棄と土器の廃棄による盛土である。ただし平面的な土層の把握が難しかったため一部M2-3で取り上げられた遺物もある。

M4-5は主に54～58-Q～U区に分布する。M4-5は褐色土で、基本層序Ⅲ層とⅣ層が混在したものであるⅢ層の方がやや多く含まれる。Sライントレンチ壁面について、M4-5の直下にはM4-6(焼土層)の発達はその下には無い。55～57-S～T区に焼土層が途切れるためである。Qラインでも下位に焼土層を伴わない。52～55S区の一部、およびRラインでは下位に焼土層を伴う。ただし平面的な土層の把握が難しかったため一部M2-3、M4-3、M4-4で取り上げられた遺物もある。

T～Uラインについては古い要素が目立つ。R～Sライン付近では縦区画を口縁部を持つ土器が見受けられる。古い要素の土器の廃棄に加え、新しい要素を持つ円筒下層b2～c式の廃棄が混在する。M4-5の中ではまとまった一段階新しい土器の一群である。全体的にみられる傾向でもあるが、矢不來川に面した斜面側に向けて盛土が伸びていく状況を示していると考えられる。

M4-6は主に50～62-R～T区に分布する。61-Q～R区では円筒下層b1式や円筒下層b2式古段階など調査範囲内で古い時期のものが復元されている。58～60-Q～R区出土の円筒下層c式が最新の要素である。53～56-R～S区は円筒下層b2式の要素が強くなり56～59-S～T区は円筒下層b1式の要素が強い。一部混在する様相がある。大きくはTラインからRラインに向けて土器が新しくなる。全体的にみられる傾向でもあるが、矢不來川に面した斜面側に向けて盛土が伸びていく状況を示していると考えられる。

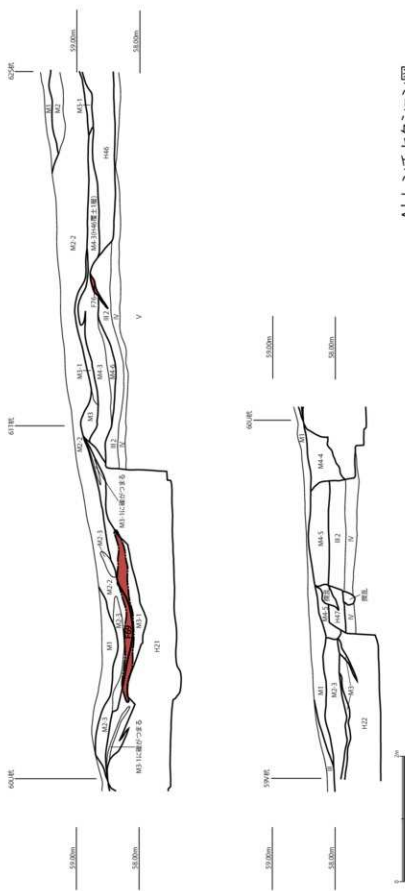
F66・F67の項で述べるが、周辺の遺物出土状況にM4-6及びM4-6相当M4-1下位においても伴う遺物に時期差が見られた。M4-6層が一度に形成されたものではない可能性がある。

M5は46～52-R～T区に主に分布する。M5-1と基底部焼土層M5-2に分けられた。51R区、50S区のみM5-2からは後述する、M5点取り段階、円筒下層b2式新段階の土器が出土している。

M5-1・MTDいずれも円筒下層b2～c式、M5点取りの土器群以降のものが出土している。M5-2からは上面楕円形の深鉢が多く出土している。顕著なものについては掲載表の口径にふたつの数字が記載されている。成形調整後、粘土が適度に柔軟な時を見計らって、側面側から潰したものと考える。M5点取り土器661はその例である。ただし胴部にかけて顕著に変形しているのは図示した684のみであった。

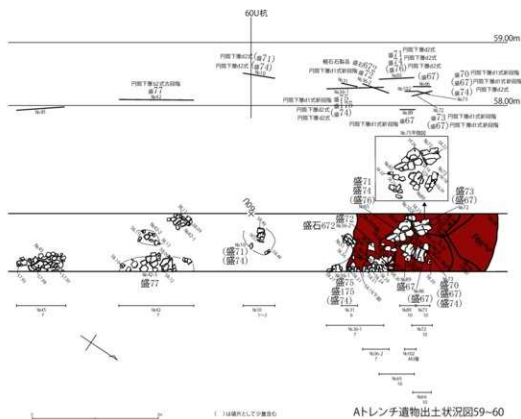
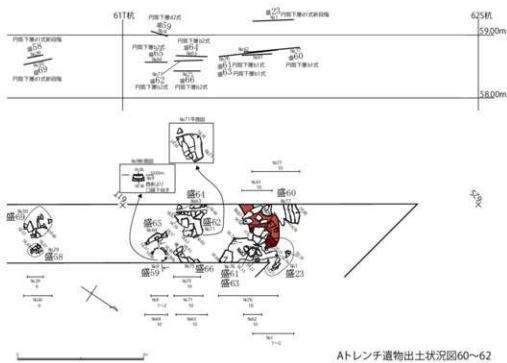
基本的にM5はM5点取り(図Ⅱ-34)段階、円筒下層b2式新段階が主体である。49～51R区は円筒下層d1式古段階ないしは円筒下層c式が混在する。矢不來川側の斜面下方に向かって盛土が伸びる状況を示していると考えられる。

M6は43～45-W～b区に分布(図Ⅱ-35-37)する。M6-1時底部焼土層M6-2に分けられた。層境は明瞭である。南東側では厚みがあるものの、調査範囲内の他の盛土と比べて、あまり厚みがなく分布も狭い。ただし分布が狭かったため範囲を明確に記録できた。M6-1は炭化物粒と焼土粒、骨片はほとんど目立たず、遺物の出土は少量である。M6-2はM6-1より分布範囲は狭い。炭化物粒と焼土粒、

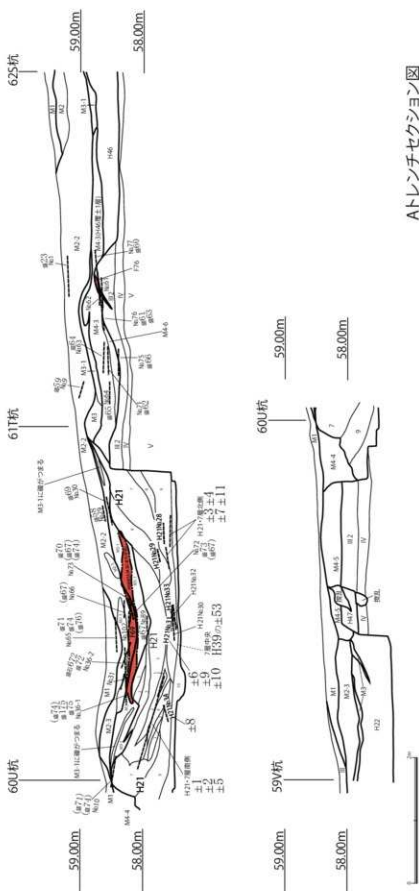


アトレンチセクション図

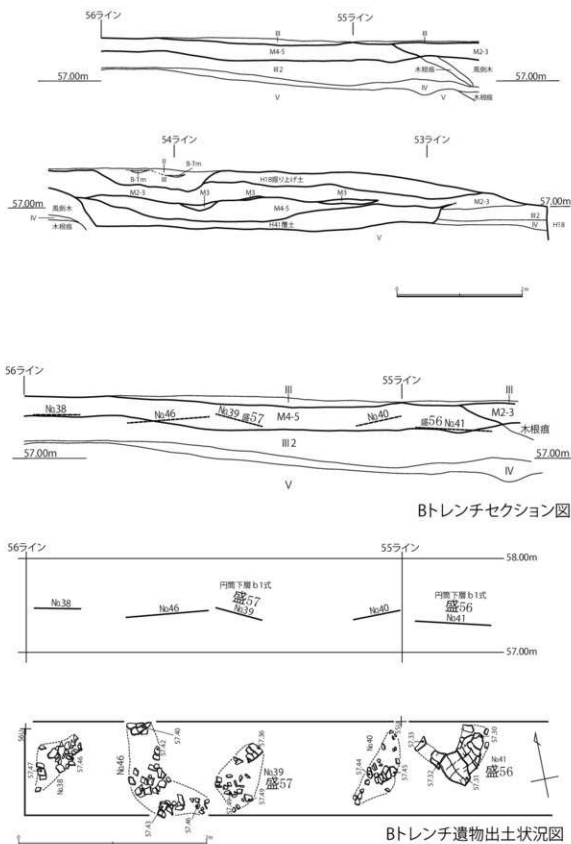
図Ⅱ-17 アトレンチ土層断面図 F69・76



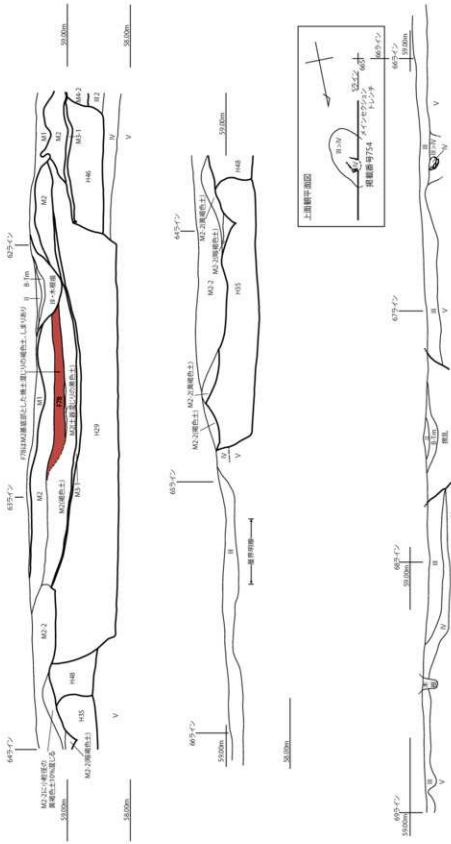
図Ⅱ-18 Aトレンチ遺物出土状況図 F69・76



図Ⅱ-19 Aトレンチ土層断面図および遺物垂直分布図 F69・76



図Ⅱ-20 Bトレンチ土層断面図・遺物出土状況図



STレンチメインセクション62~69

図Ⅱ-21 Sライントレンチ土層断面図1 (62~69ライン) F78

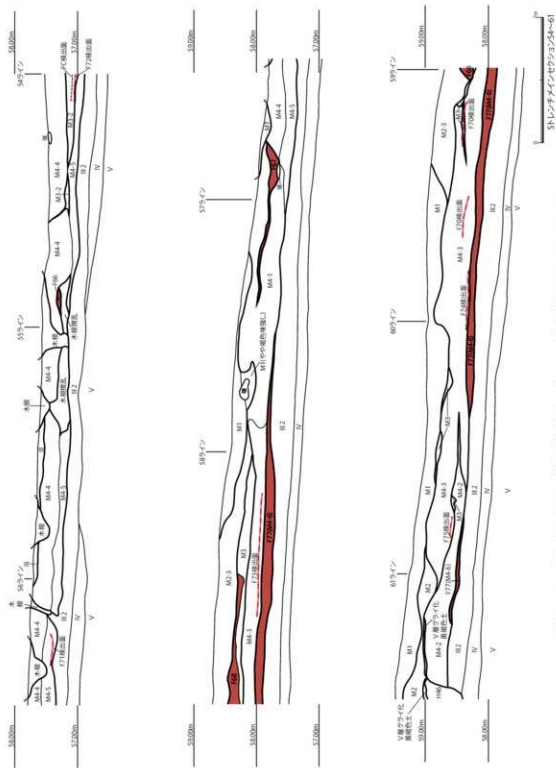
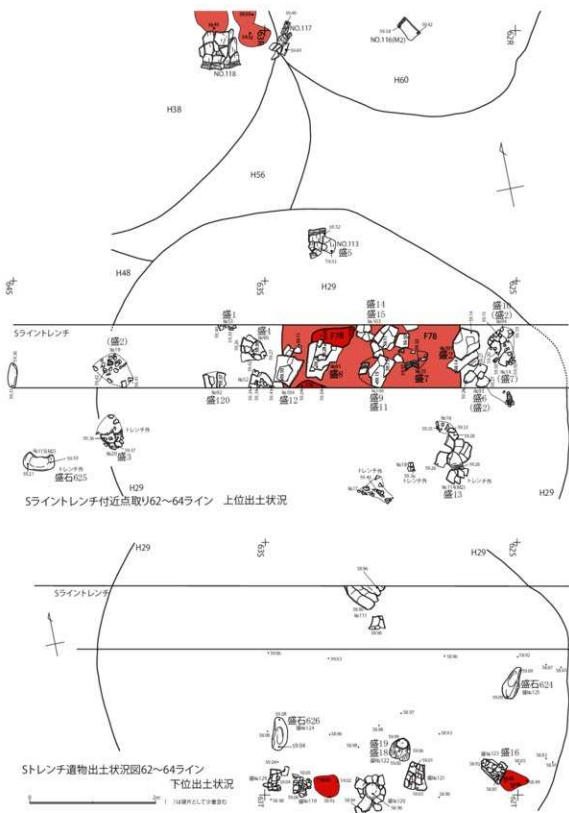
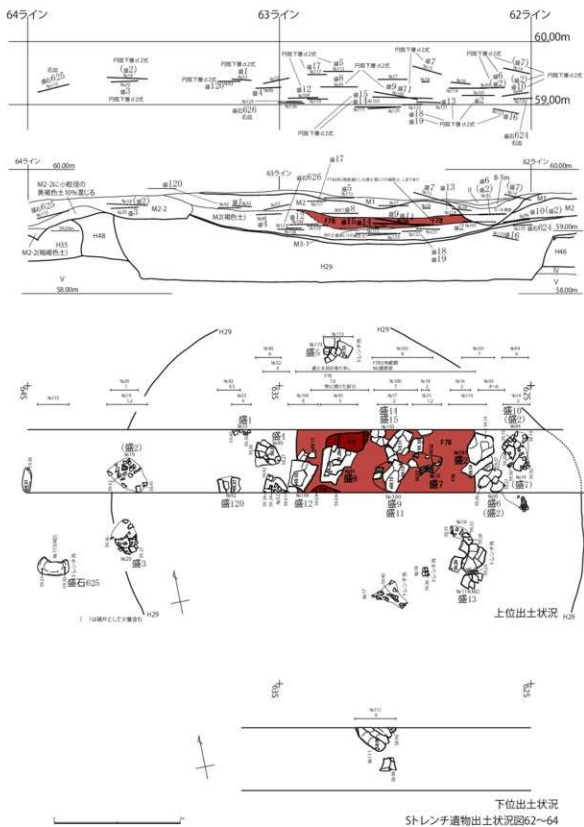


図 II-22 Sライントレンチ土層断面図2 (54~61ライン) F66~68・70~77

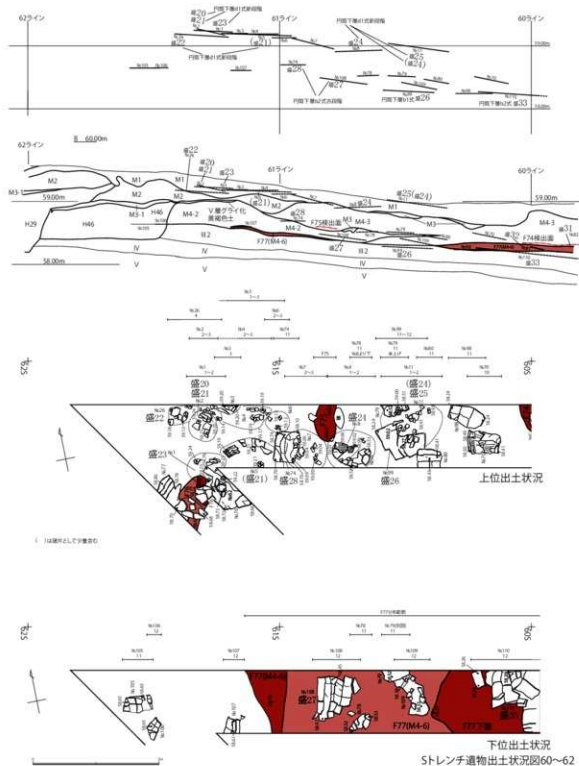


図Ⅱ-23 Sライントレンチおよび盛土顕出面遺物出土状況図(62~64ライン) F78

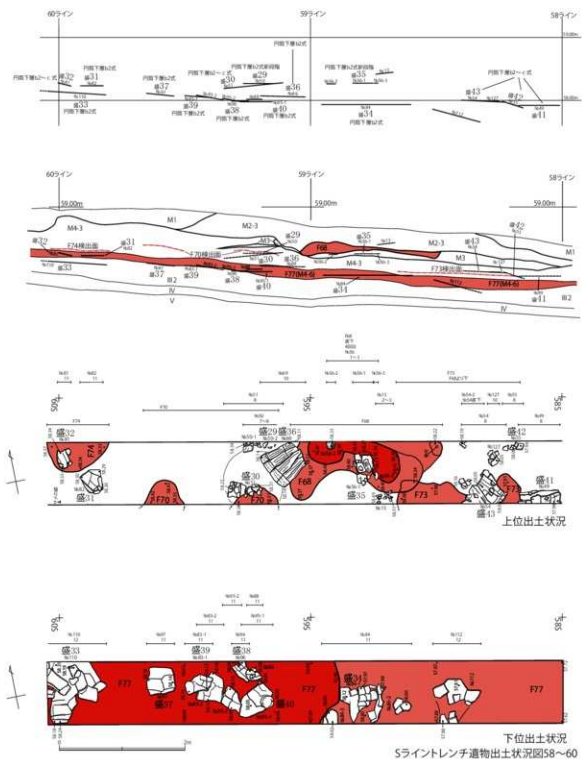




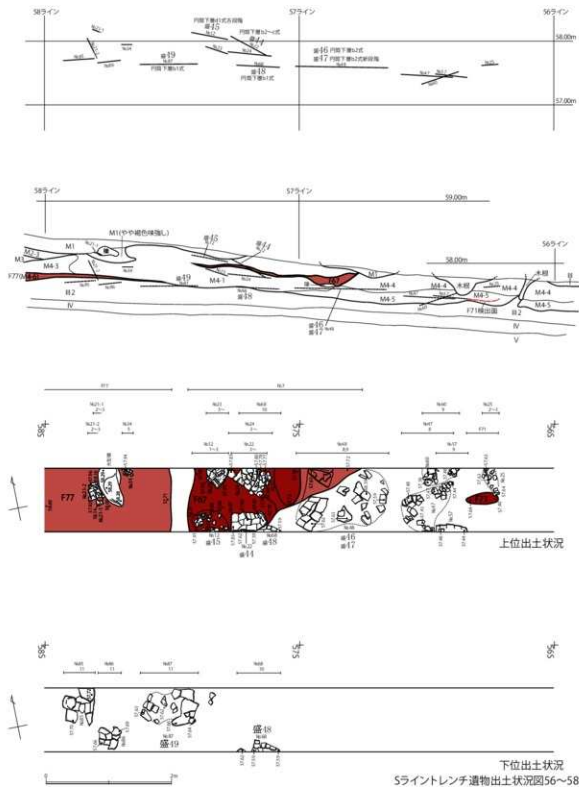
図Ⅱ-24 Sライトレンチ遺物出土状況図1(62~64ライン)F78



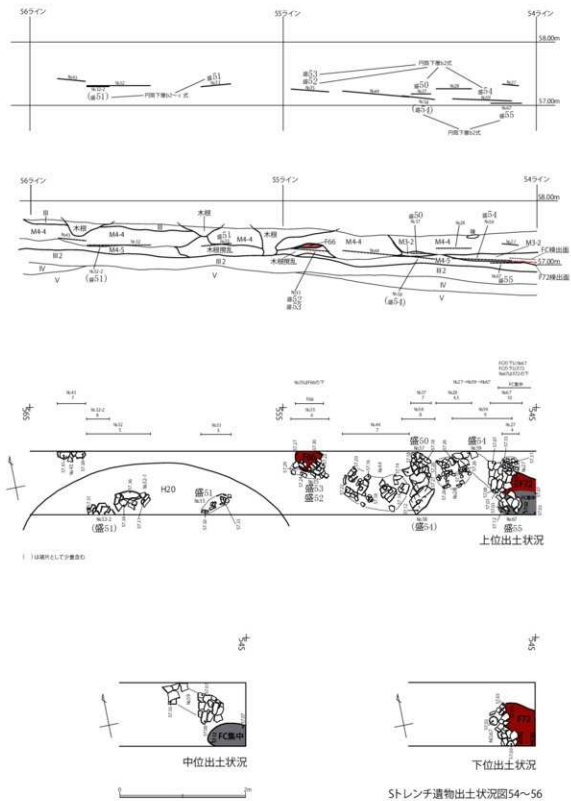
図Ⅱ-25 Sライトレンジ遺物出土状況図2 (60~62ライン) F74~77



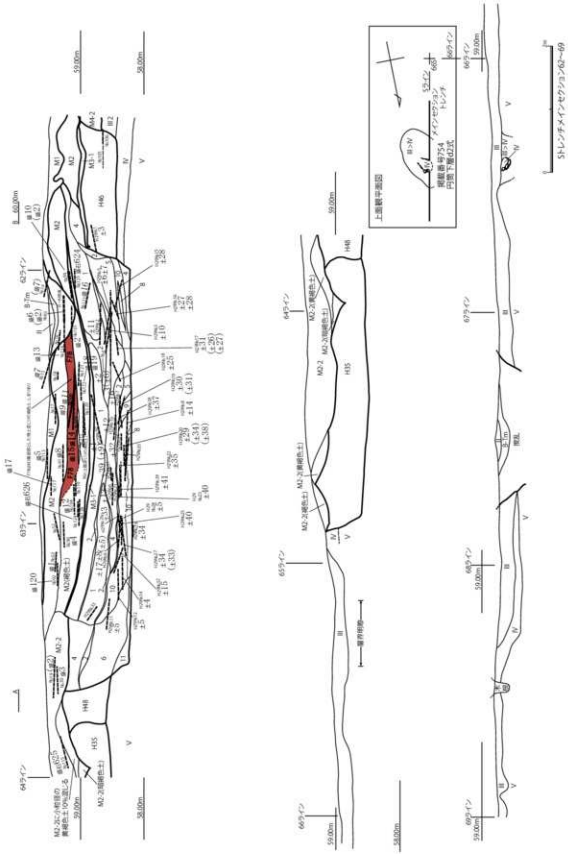
図Ⅱ-26 Sライントレンチ遺物出土状況図3 (58~60ライン) F67・F68・F70・F73・F74・F77



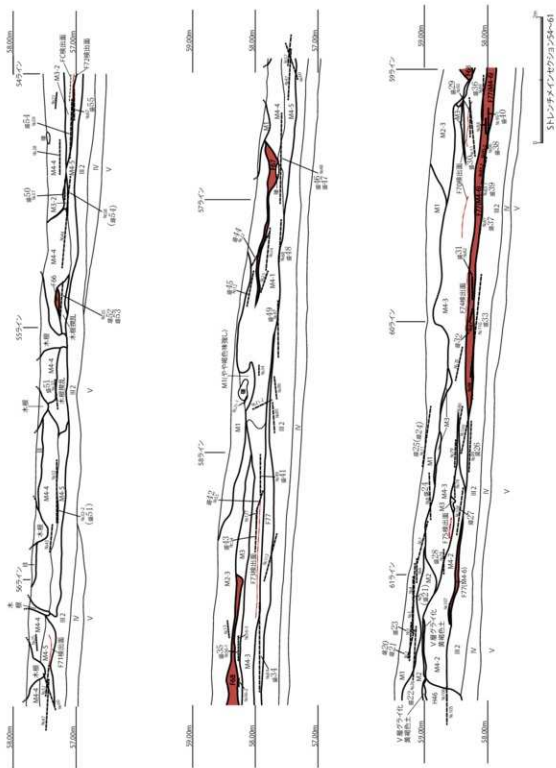
図Ⅱ-27 Sラインレンチ遺物出土状況図4 (56~58ライン) F67・71・77



図Ⅱ-28 Sライントレンチ遺物出土状況図5(54~56ライン) F66・72



図II-29 Sライントレンチ土層断面図および遺物垂直分布図1 (62~69ライン) H29・F78



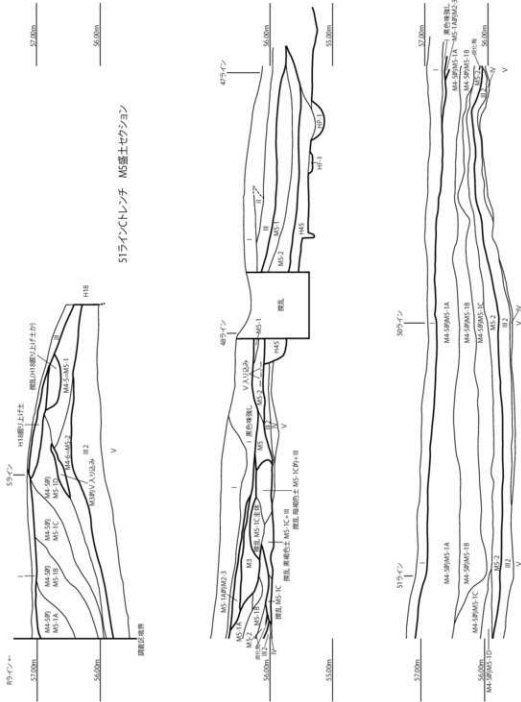
図Ⅱ-30 Sライントレンチ土層断面図および遺物垂直分布図2 (54~61ライン) F66~68・70~77

表Ⅱ-4 盛土遺構土層注記 (スライントレンチ)

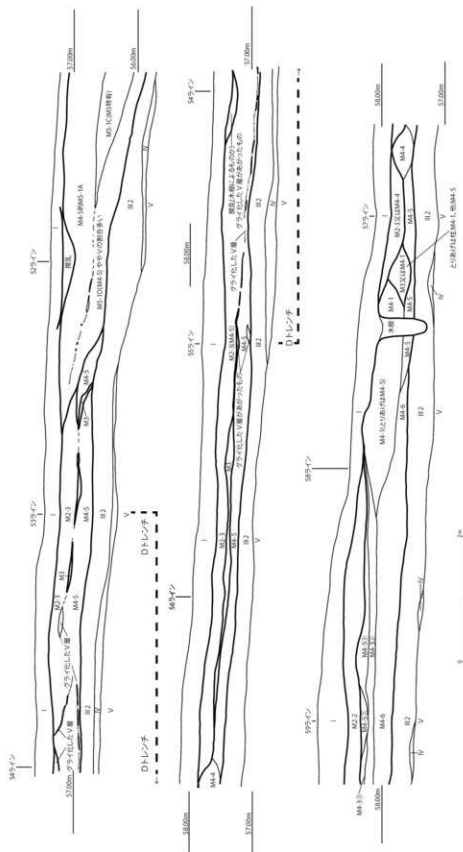
性質	大分類	中分類	小分類	色	色	性質	注記	備考
黒色土包層	Ⅱ層 (基本層序)	—	—	黒色土	幅あり	遺土が無い場合はⅡ層と判別がつかない	Ⅱ	基本層序
内側下層の式様の遺土を主体とするが盛り込み等により異なる	M1	—	—	黒褐色土	Hue10YR 3/2	M2の上層が黒色化したものをメインとするが、M4の盛り上がった土層 (M4-S) が黄色化したものも含む	M1	
内側下層の式様の遺土を主体とするが盛り込み等により異なる	M2	—	—	茶褐色土	Hue10YR 5/4	住居 (H2) への廃棄を主体とした土	M2	あえて1をつけない
		-2	—	にぶい黄褐色土	Hue10YR 4/3	住居 (H2) への廃棄を主体とした土だがやや粗んでいる。平面的に下げて確認したところ汎用性が低いと判断	M2-2	
		-3	—	M4 (特にM4-S) の残渣残色幅あり	色幅あり	Ⅱ層と紛らわしいときもある。M1とした。	M2-2	
内側下層の式様の遺土M4を主に構成していた住居の盛り上げ土を想定した土層。このM4がある層はM2とM4の明瞭に区別される	M3	-1	—	黄褐色土のグレイ化したもの	M3-2のグレイ化したもの	V層起源グレイ化している	M3-1	注記はすべて「M2」
		-2	—	黄褐色土	Hue10YR 4/6	V層起源	M3-2	
内側下層の式様の遺土	M4	-1	—	にぶい黄褐色土	Hue10YR 5/4	程度10m以下のへり入層に	M4-1	
		-2	—	褐色土	Hue10YR 4/4	褐色の色調 大ブロック状に互層起源土が混じる	M4-2	
		-3	—	褐色土	Hue10YR 4/4	M2-2 (V層ブロック) が混在する	M4-3	
		-4	—	緑褐色土	Hue10YR 3/4	Ⅲ+Ⅳ層	M4-4	
		-5	—	褐色土	Hue10YR 4/6	Ⅲ>Ⅳ層	M4-5	
		-6	—	褐色土へにぶい緑色	Hue10YR 4~6/4	M2-2 (V層ブロック) が混在する・M4-3に似るが、より土が固じりしまりがある。遺土や骨片が混じる (スライントレンチではF-1が関連する)	M4-6	
		F-	—	にぶい緑色	Hue10YR 6/4	塊土	F ( )	( ) 内はそれぞれの番号・63層目の遺土ならF6)
M4に近く関連・連続する遺土	M5	-1 (M4-S)	A	にぶい黄褐色土	Hue10YR 4/3	M4-Sに相当。	M5-1	M5-1が東から西へ傾斜する中でためM4-Sでとりあげた土層がなければM5-1と注記 (遺土CABに区別はできない) の土層での取り上げは基本的には無い
			B	にぶい黄褐色土	Hue10YR 5/3	M4-Sに相当。小〜中粒位の (グレイ化した) V層土層に3%混じる		
			C	にぶい黄褐色土	Hue10YR 5/3	M4-Sに相当。小〜中粒位の (グレイ化した) V層土層に25%混じる		
			D	緑褐色土	Hue10YR 3/3	M4-Sに相当。小〜中粒位の (グレイ化した) V層土層に50%混じる		
		-2	—	緑褐色土	Hue10YR 4~6/4	M2-2 (V層ブロック) が混在する・M4-3に似るが、より土が固じりしまりがある。遺土や骨片が混じる。M4-6とほぼ同じ。土層を多く含む。M5-1Dとは土層の多さが異なる。	M5-2	M5遺土事例から、M5-1Eとして西へ傾斜した。
M4とM5に関連	H-1B 盛り上げ土	—	—	灰黄褐色土	Hue10YR 4/2	基本層序Ⅱ層とⅣ層が混在。V層の方が多い。		他の住居の盛り上げ土と同じ扱い。
現在、内側下層の式様の遺土としている (2010.11.17) が、発掘で洗浄した層片に炭ヤシホ式起源の模様を認めた層片があった為、時期が古くなる可能性がある	M6	-1	a	黒褐色土	Hue12YR 3/1	基本層序1層的なものか 細か (中) が10~20%混じる	M6-1	
			b	明褐色土	Hue12YR 3/1	基本層序1層的なもの グレイ化したV層混じり		
			c	にぶい褐色土	Hue12YR 5/4	aとbが1:1で混じったものと考えられる小〜中粒位のV層土が程度1~5%混じる		
		-2	d	褐色土	Hue12YR 4/3	遺土 (焼残層) Ⅲ>Ⅳの割合で混じる。多くの遺物が出た。所々塊層に「M6-a」や炭化物が混じる	M6-2	
			e	赤赤褐色土	Hue12YR 5/8	酸化した鉄分によって染まったM4-S層。遺土と混ざる。層境が不明瞭		
			f	緑赤褐色土	Hue10YR 3/3	層境が不明瞭M4-Sに似るM6-aの赤みの発色がにぶくなったものか。微量な骨片 (程度1mcG以下) を2%ほど含む		
			l	褐色土	Hue10YR 4/8	遺構と思われる擾乱の土層		
Ⅲ主体土	この土層直下の基本層序Ⅲ層2層も褐色	—	—	黒褐色土	Hue10YR 3/1	遺構と思われる擾乱の土層		層境上の土層注記なので、この土層表での取り上げは無し
V	—	—	—	にぶい黄褐色土	Hue10YR 5/4	基本層序		
壁土下のⅡ層	Ⅱ層 (基本層序)	—	—	主に黄褐色土 (場所によっては緑色の混り)	幅あり	遺土が無い場合はⅡ層と判別がつかない。基本的に遺物はない (壁土に遺物が多いのは壁土のものが混在している場合がある)。	Ⅱ	
階段層	Ⅳ層 (基本層序)	—	—	黄褐色土・黄褐色の混り	幅あり	遺土が無い場合、遺物が出たことがある	Ⅳ	
地山	V層 (基本層序)	—	—	黄褐色をベース	幅あり	いわゆるローム層	V	



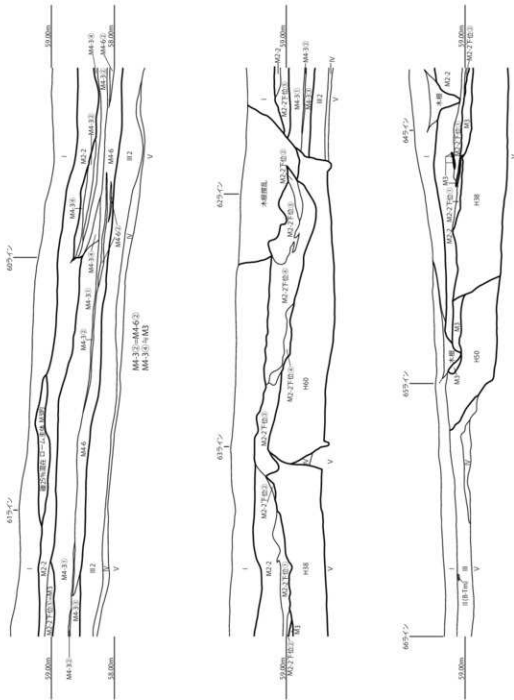




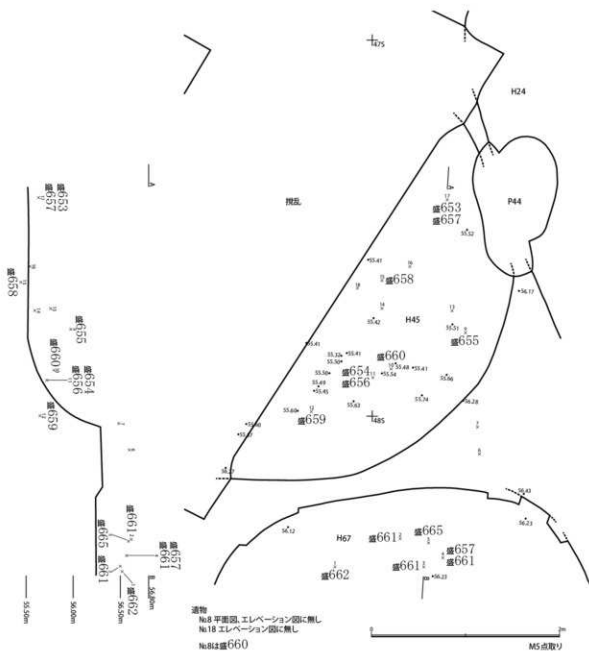
調査区北壁セクション(47~51) 調査区北壁セクション(47~51)  
 図Ⅱ-31 調査範囲北壁土層断面図 (47~51ライン) 51ラインCトレンチ土層断面図 (M5関連)



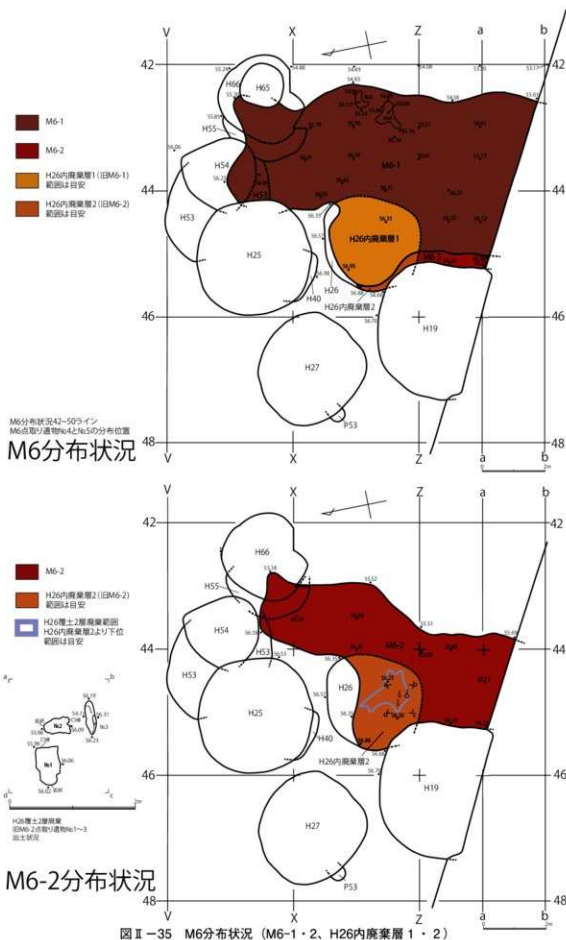
図Ⅱ-32 調査範囲北壁土層断面図 (52~59ライン・M5関連)  
調査区北壁セクション52~59

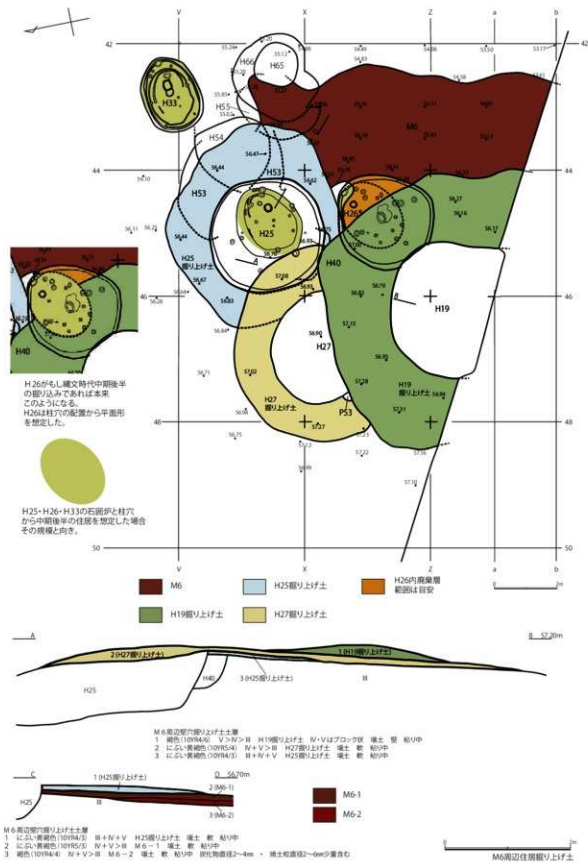


調査区北壁セクション60~66  
 図Ⅱ-33 調査範囲北壁土層断面図 (60~66ライン)

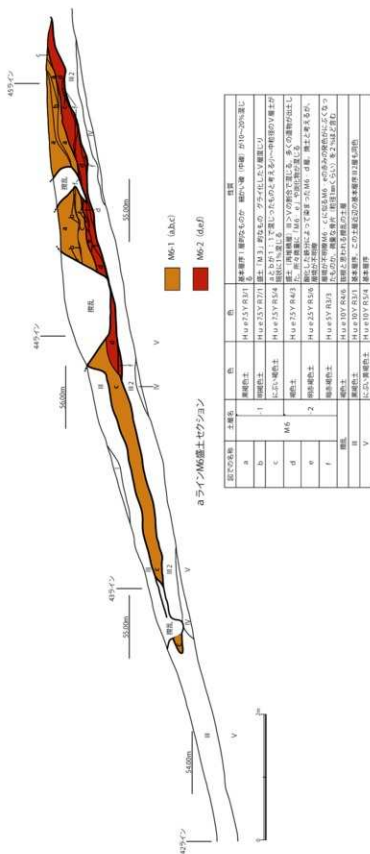


図Ⅱ-34 M5点取り平面図・エレベーション図(47~48-R~S区)





図Ⅱ-36 M6周辺住居掘り上げ土分布状況・堆積状況



a ラインM6盛土メインセクション図

図 1-37 a ラインM6盛土層断面図



骨片を多く含み、残存率の高い土器が多く出土する。

当初H26はM6より古く、覆土中にまでM6が分布しているものとして遺物を取り上げた。M6の点取り土器として取り上げたNo.1～3についても同様である。だが調査後に精査したところ、H26はM6より新しく、覆土中に地点貝塚のような廃棄層を持つとわかった。M6の点取りNo.1～3はH26の点取り遺物と同じ状況から出土したものとわかった。しかし主にM6扱いの44Y区出土遺物がこれに該当するであろうという目算はたつたが台帳上での現状復元は不可能であった。

M6で取り上げた遺物のうち、44Y区を除く、43～45-Y～Z区からは円筒下層b1式が出土している。しかし44Y区については円筒下層d1式の混在が目立つ。斜面際の埋まり切らない窪みが周辺から遺物が流入しやすかったためと考える。

写真と図から明らかにH26廃棄層出土のNo.1～2の土器についてはH26のものとして掲載した。しかしNo.3の石器については盛土の項目でM6出土635として掲載した。しかしH26の石囲炉がH26廃絶後に掘り込まれて設置された可能性が出てきた。そこで遺物の垂直分布について詳細に検討したところ、覆土2層にもう一枚廃棄層があり、H26内廃棄層とは別なもの、さらに下位の覆土から出土していると判明した。No.3の石器はM6出土635としたが、H26の覆土2層出土遺物ということになる。H26の他の点取り遺物と同様の出土状況である。

H26覆土2層出土土器は、48R区のM5点取り段階より新しい文様要素を持つ。複数の縄線によって鋸歯状を表現した口縁部文様帯、隆帯を縁取る沈線、径に対して器高が高い、といった円筒下層c式の要素が強い。胎土等を勘案すると、円筒下層b2式の範疇で新しいものだが、文様要素上、円筒下層c式の古いものである。円筒下層c式の文様要素が見受けられるので特に「円筒下層c式古段階」とした。時間軸的には円筒下層b2～c式とした段階と変わらないと考える。

M6-2の土器を検討すると、本来のM6盛土は円筒下層b1式のころに形成され始め、円筒下層b2式の前半まで継続、H26が掘り込まれて、そこにH26覆土2層に円筒下層c式古段階(円筒下層b2～c式)が廃棄され、さらに埋った時点で、円筒下層d1式期を主としてH26廃棄層が形成されたと想定する。

(大泰司)

## Ⅲ 遺構の調査と出土遺物

### 1 遺構の調査

遺物は第2分冊に図示解説した。ただしF66～78については第3分冊に図示解説した。掲載番号もそれぞれに対応する。記号等の説明でも述べたが、遺物出土状況図中の「土1」とは各遺構における「土器掲載番号1」のことであり、同様に「石1」とは「石器掲載番号1」の事である。「Na1」は「点取りNa1」のことであり、「盛1」とは「第3分冊盛土出土遺物の項での掲載番号1」である。記号による略称について、「土器等を×」、「剥片・剥片石器等を△」、「礫・礫石器等を○」で示した。付随する番号は点取り番号である。位置を落とした際に付した番号で、H58以外は遺物番号と対応させた。本文記載においては土器に関連する項の数字は第2分冊第三章2項の掲載番号、石器は同じく第三章3項の掲載番号である。各遺構に付した表には点取り遺物の出土方位と遺物分類を示した。各遺構の規模について、計測値は表Ⅲ-2 検出遺構規模一覧に示した。動・植物遺体については、遺構ごとに記載し、全体の概要はV章に記した。

#### (1) 竪穴住居

今回竪穴住居は50軒検出した。縄文時代中期のものが3軒、前期後半のものが47軒である。住居付属遺構について、青灰色砂が密に埋積した土坑を砂ピットと称した。住居の中央に分布する事が多い。縄文時代前期後半に特徴的である。

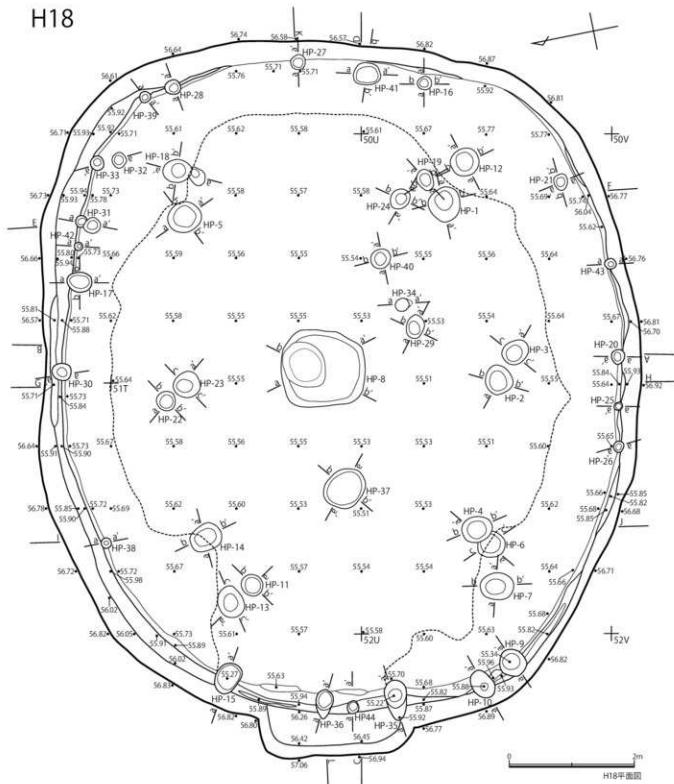
**H18** (図Ⅲ-1-1-28、-2-1、3-1-3、図版6・7・54・55・123)

**位置・立地** 49-52-T-V区 調査区のほぼ中央、矢不來川に向かって伸びる沢に面した段丘の縁、標高57.0m前後

**確認・調査** 調査区内の杉の植林を伐採後、大きな落ち窪みとして確認した。重機による表土除去後、人力による精査を行った。窪みの上面はKo-dやB-T火山灰で覆われており、中・近世の遺構ではないことを確認した。落ち窪みの周囲は掘り上げ土と考えられる、暗褐色土を主体としたドーナツ状の高まりがみられた(図Ⅲ-1-12)。このことにより縄文時代の遺構であることが想定されたため、窪みの長軸と短軸に土層観察用のベルトを設定、トレンチ調査を行った。これにより、Ⅲ層中から掘り込まれている竪穴住居で、急で明瞭な壁の立ち上がりと床を検出した。床面については、中心部分が平坦であるが、トレンチ調査段階では壁際にローム質土主体の硬く締めりのある土が、西側先端部を除いて長軸の東側と短軸の両側三か所で検出した。これは土葺き屋根の崩落か、もしくはベンチ構造を持つ床面であることの二つの可能性が考えられたため、ベルトと壁際のローム質土を残し覆土を掘り下げた。調査の結果、住居の壁際から1m前後の幅を平坦にめぐるので、土で葺いた屋根が崩落して堆積した土とは考え難く、ローム質土が床面に平坦に廻るベンチ状の遺構であると判断した。この貼ベンチの平・断面の実測を行なった後に掘り下げ、住居跡床面の精査を行った。

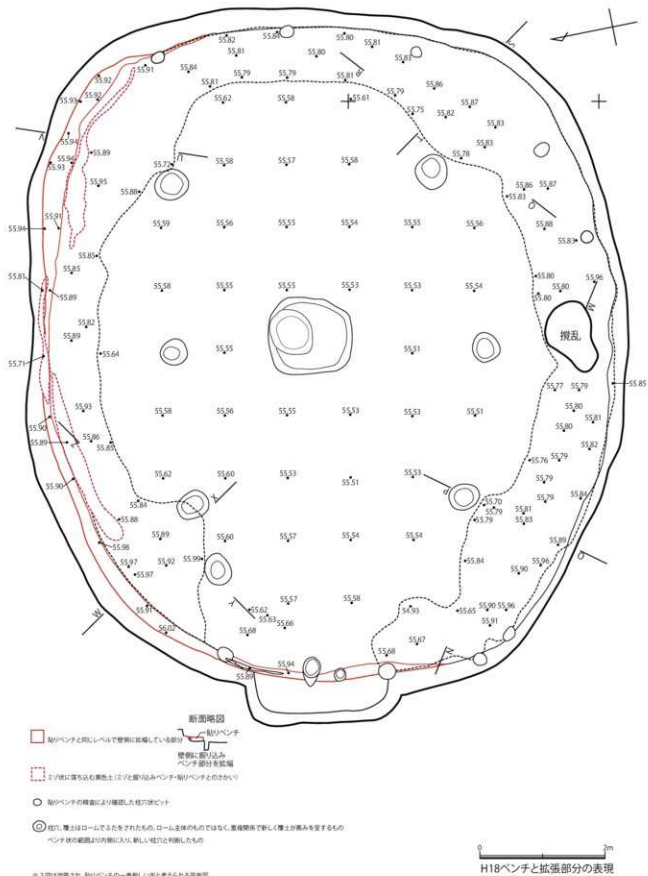
**構造** 平面は楕円形である。確認面から床面までの深さは1m20～60cmである。長軸は東西方向を向く。長軸の西側先端部、上場が外側に突出する形でテラス状に張り出す。この壁際には段差と微弱な溝があり、壁柱が6か所(HP-9・10・15・35・36・39)確認されている。床面は2段になるベンチ構造の住居跡と考えられ、壁際から1m前後内側をローム質土で硬く平坦に貼られている。ベンチは先端のテラス状付近の床面には無く、平面がUの字状になっている。このベンチの面の高さに合わせ、北壁は約40cm拡幅している。ベンチの内側、床面に6本の主柱穴とみられる。これらは柱穴の重複(HP-4・6)や、検出状況でみられた、床面と同じ高さに、ローム質土で旧柱穴の開口部を塞いで

## H18

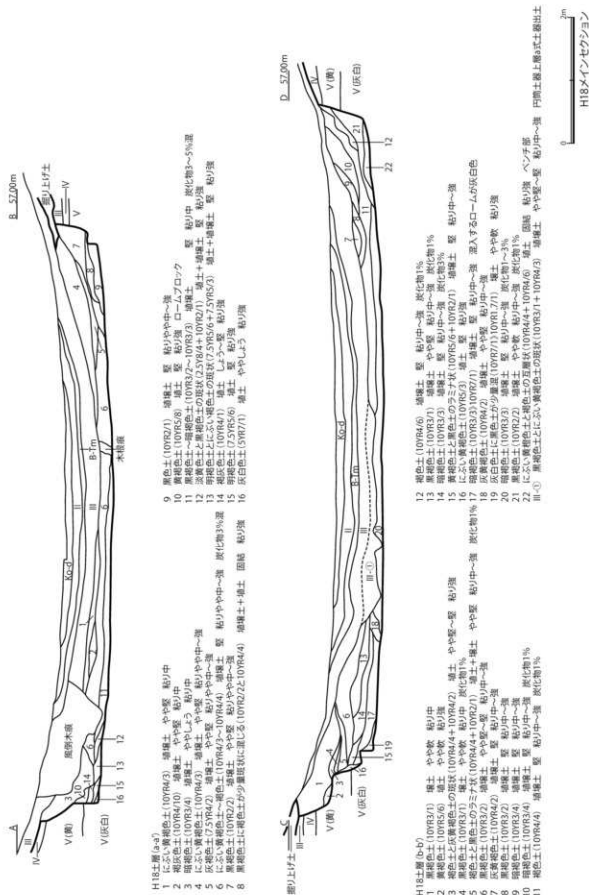


図Ⅲ-1-1 H18平面図

いるもの(HP-3・6・7・12・18)がある。柱穴の検出状況とベンチ、北壁の調査状況から、1～2回は改築が行なわれ、幅幅は改築時に行かない、貼りベンチと同じ高さに北壁を拡張したと考えられる。また、拡張部分と貼りベンチの境はやや浅く溝状となっており、黒色土の堆積が見られた。ベンチ部分を取り外すと、床面の西側半部、東西の床と壁の境に緩い溝が検出された。明瞭な周溝ではなく、



Ⅲ-1-2 H18ベンチと拡張部分



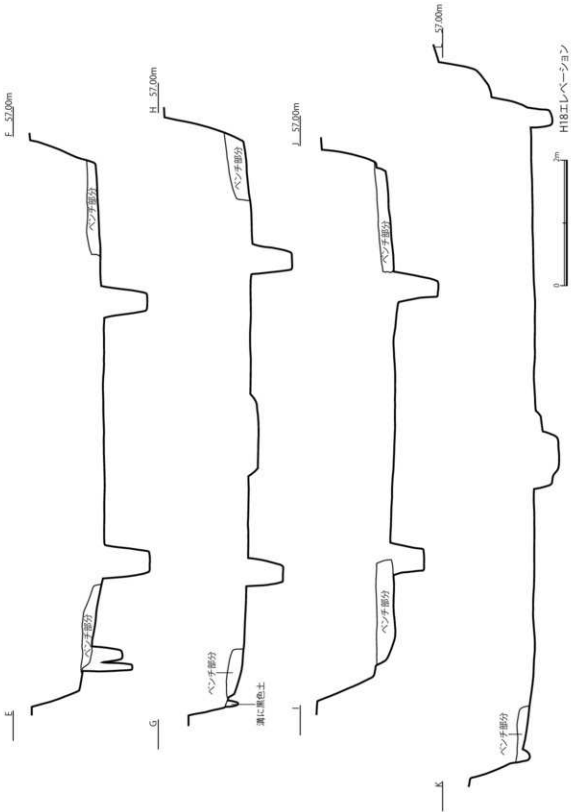
- H18土層(a-b)
- 0 黒色土(10YR2/1) 埴埴土 堅 粘りや中～強
  - 1 黒褐色土(10YR5/6) 埴埴土 堅 粘り強
  - 2 黒褐色土(10YR4/10) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 3 黒褐色土(10YR3/3) 埴埴土 ややしよ 粘り中
  - 4 にぶい黒褐色土(10YR4/3) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 5 灰褐色土(7.5YR4/2) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 6 にぶい黄褐色土～褐色土(10YR4/9～10YR4/4) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 7 黒褐色土(10YR2/2) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 8 黒褐色土に褐色土が少量混在している(10YR2/2C) 埴埴土+埴埴土 固結 粘り強
  - 9 黒色土(10YR2/1) 埴埴土 堅 粘りや中～強
  - 10 黒褐色土(10YR5/6) 埴埴土 堅 粘り強
  - 11 黒褐色土～黒褐色土(10YR3/2～10YR3/3) 埴埴土 堅 粘り中 炭化物3～5%混
  - 12 深褐色土と黒褐色土の混在(2.5YR4/4+10YR2/1) 埴埴土+埴埴土 堅 粘り強
  - 13 明褐色土(10YR4/7) 埴埴土 堅 粘り強
  - 14 灰褐色土(10YR4/6) 埴埴土 やや堅 粘り強
  - 15 明褐色土(7.5YR5/6) 埴埴土 堅 粘り強
  - 16 灰白色土(5YR7/1) 埴埴土 ややしよ 粘り強

- H18土層(3a-b)
- 1 黒褐色土(10YR4/3) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 2 灰褐色土(10YR4/10) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 3 黒褐色土(10YR3/3) 埴埴土 ややしよ 粘り中
  - 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 5 灰褐色土(7.5YR4/2) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 6 にぶい黄褐色土～褐色土(10YR4/9～10YR4/4) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 7 黒褐色土(10YR2/2) 埴埴土 やや堅 粘りやや中～強
  - 8 黒褐色土に褐色土が少量混在している(10YR2/2C) 埴埴土+埴埴土 固結 粘り強

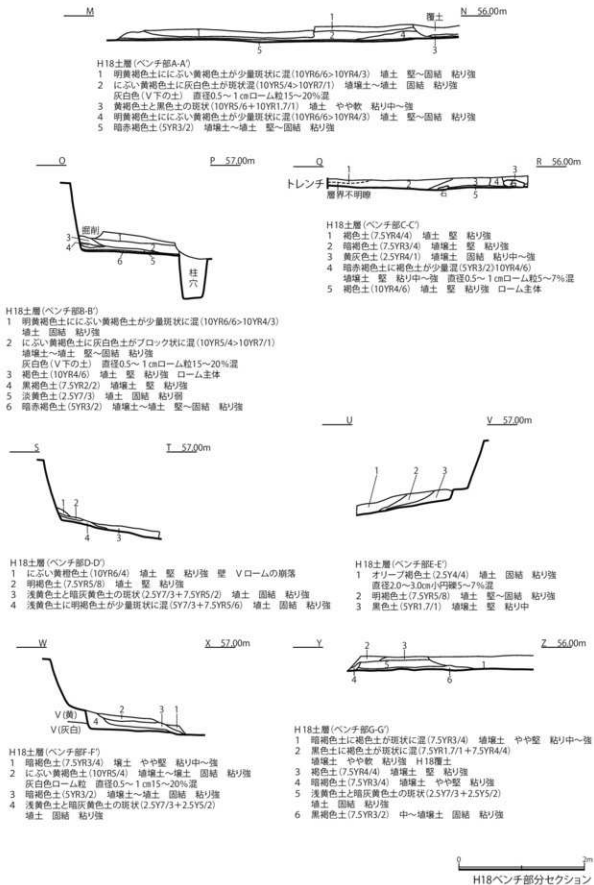
- H18土層(3a-b)
- 12 褐色土(10YR4/6) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 13 黒褐色土(10YR3/1) 埴埴土 やや堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 14 黒褐色土(10YR3/3) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物3%
  - 15 黒褐色土(10YR3/1) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 16 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 埴埴土 堅 粘り強
  - 17 暗褐色土(10YR3/3) 埴埴土 やや堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 18 灰褐色土(10YR4/2) 埴埴土 やや堅 粘り中～強
  - 19 灰白色土に褐色土が少量混在(10YR2/1)(10YR1/7) 埴埴土 やや堅 粘り中～強
  - 20 暗褐色土(10YR2/2) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物1～3%
  - 21 灰褐色土(10YR2/2) 埴埴土 やや堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 22 黒褐色土にぶい黄褐色土の混在(10YR3/1+10YR4/3) 埴埴土 やや堅～堅 粘り中～強 円筒土層上層が粘土層出土

- H18土層(3a-b)
- 1 黒褐色土(10YR2/1) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 2 黒褐色土(10YR5/6) 埴埴土 やや軟 粘り強
  - 3 黒褐色土(10YR3/1) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 4 黒褐色土(10YR3/1) 埴埴土 やや堅 粘り中
  - 5 黒褐色土と黄褐色土の混在(10YR4/4+10YR2/1) 埴埴土+埴埴土 やや堅 粘り中～強
  - 6 黒褐色土(10YR3/2) 埴埴土 やや堅～堅 粘り中～強
  - 7 灰褐色土(10YR4/2) 埴埴土 堅 粘り中～強
  - 8 黒褐色土(10YR3/2) 埴埴土 堅 粘り中～強
  - 9 暗褐色土(10YR3/4) 埴埴土 堅 粘り中～強
  - 10 黒褐色土(10YR3/3) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物1%
  - 11 褐色土(10YR4/4) 埴埴土 堅 粘り中～強 炭化物1%

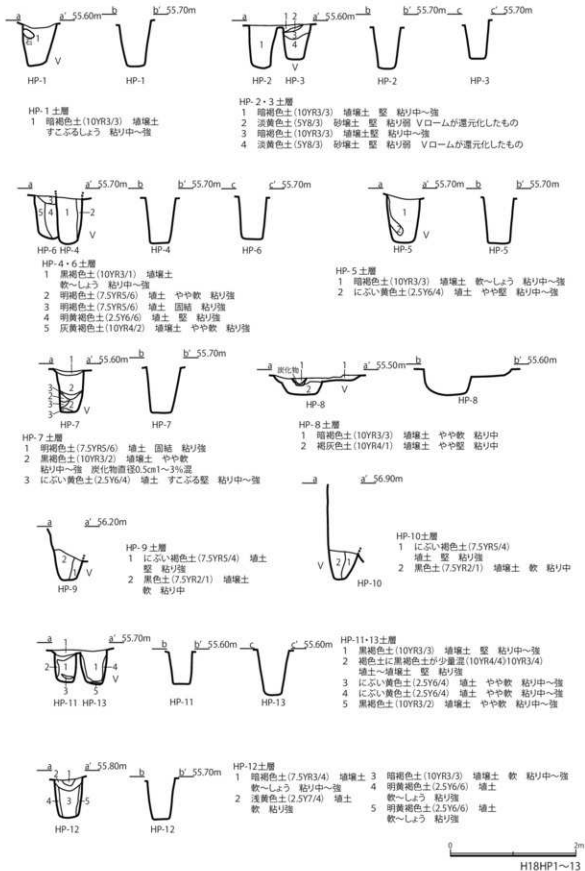
図一 1-3 H18土層断面図



図Ⅲ-1-4 H18エレベーション図

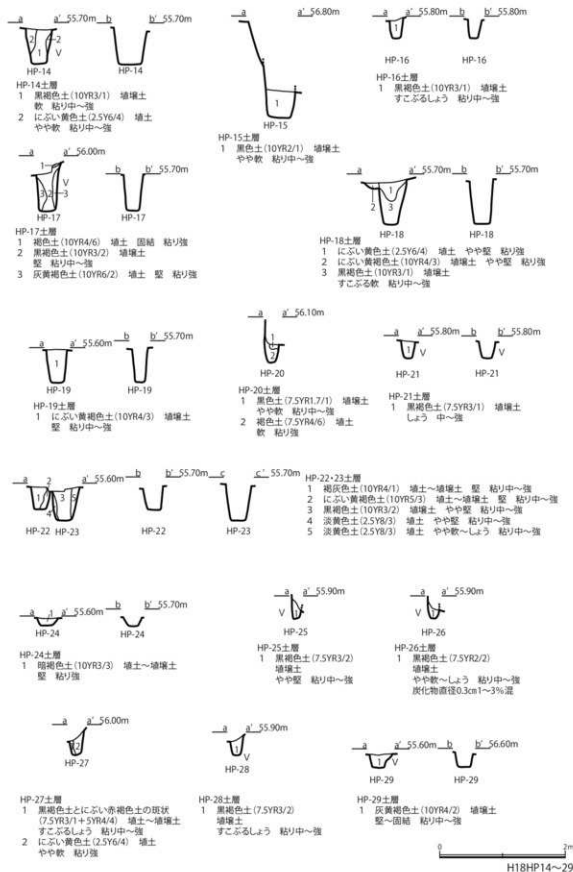


図Ⅲ-1-5 H18ベンチ部分土層断面図

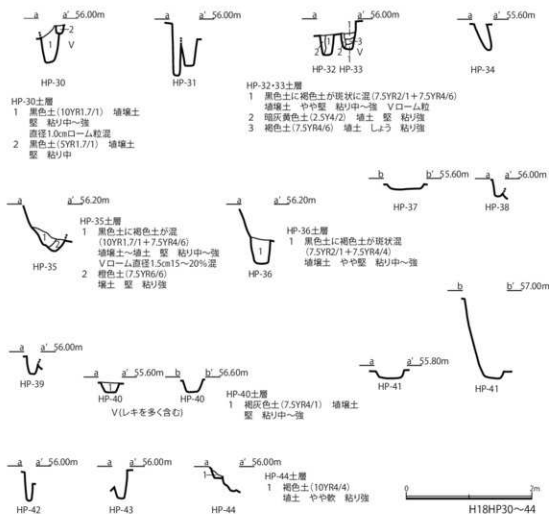


図Ⅲ-1-6 H18HP-1～13土層断面図





図Ⅲ-1-7 H18HP-14～29土層断面図



図Ⅲ-1-8 H18HP-30~44土層断面図

浅く途切れ途切れのものである。

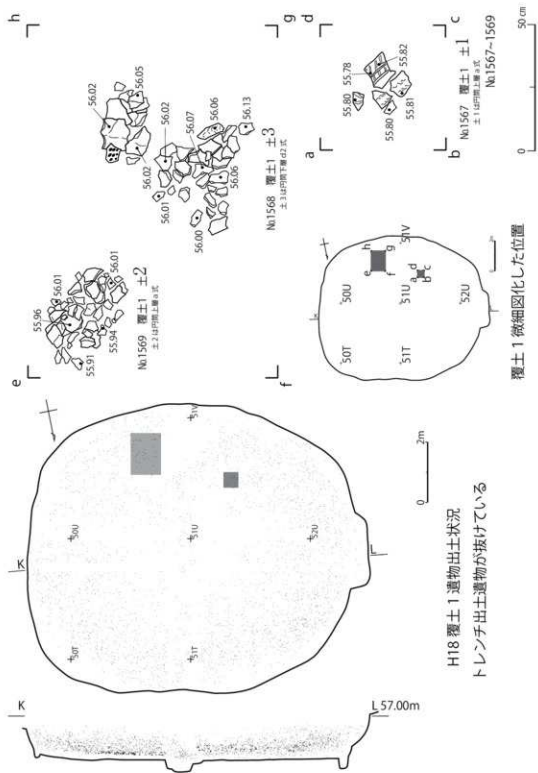
**覆土** 自然堆積によるものである。

**付属遺構** 柱穴、四十四か所、住居床面中央より浅い土坑2基（HP-8・37）を検出している。焼土は検出していない。

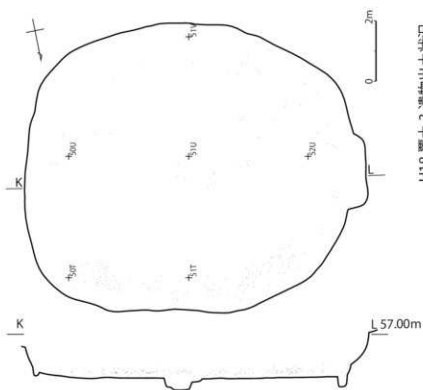
柱穴は床面の内側にある主柱穴と、長軸の西側に壁柱穴、南北の壁に並ぶものがある。主柱穴は前述の通り、重複しているもの・覆土中にローム質土が詰められているもの・床面と同一高さでローム質土で蓋がされたもの3種類があり、新しいものはベンチに伴う、覆土が黒褐色土や重複で新しいもの（HP-1・2・4・5・13・14・23）である。

**遺物出土状況** H18からは5,863点の遺物が出土した。トレンチ調査で、遺物は覆土上位の、黒色味を帯びる土を「覆土1」、覆土下位の褐色を帯びる土を「覆土2」、貼りベンチからの遺物を「覆土3」と区分し、遺物は住居跡を覆うプライマリーのⅢ層出土のものは包含層遺物としてグリッド単位で取り上げた。覆土のものについては平板測量で位置と標高を記録し取り上げた。（袖岡）

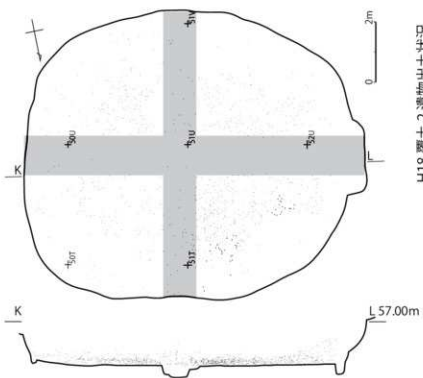
覆土1より3,670点、覆土2より1,279点、覆土3より198点、床面より87点出土している。目立って多いのは縄文時代前期後半、円筒下層式土器である。焼成粘土塊も出土する。この時期の盛土を掘り



図Ⅲ-1-9 H18覆土1 遺物出土状況



H18 覆土 3 遺物出土状況

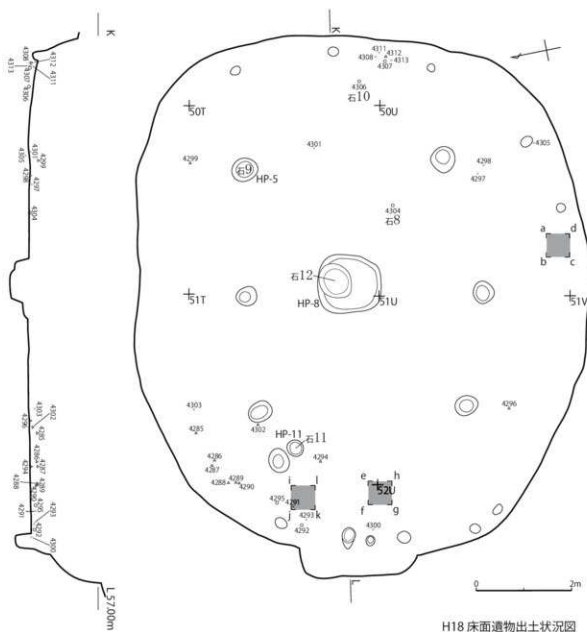


H18 覆土 2 遺物出土状況

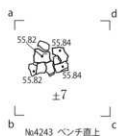
トレンチ出土遺物が抜けている

■ 土層間のトレンチの位置  
 ※おおよそのメインセクション

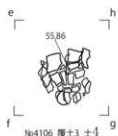
図Ⅲ-1-10 H18覆土2・3遺物出土状況



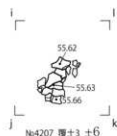
H18床面遺物出土状況図



No.4243 ペンチ直上  
No.4106, 4207, 4243  
S=1/30



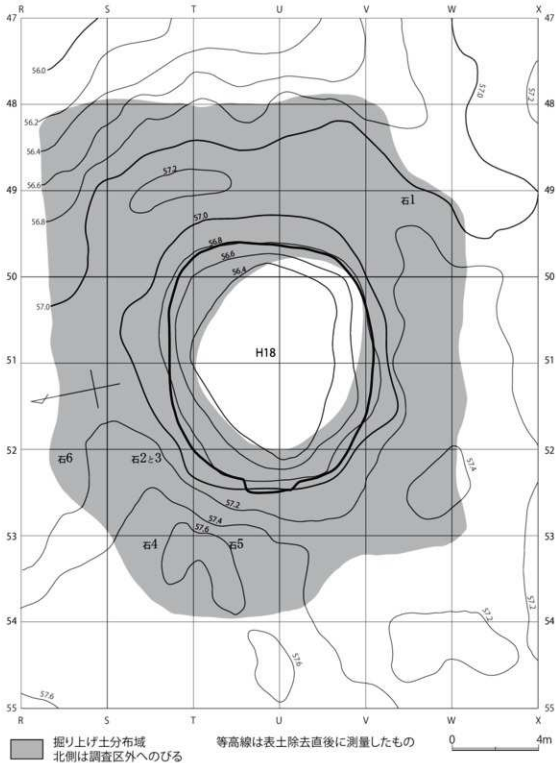
No.4106 覆土 ±4



No.4207 覆土 ±6

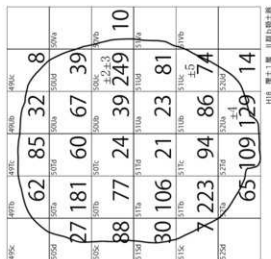
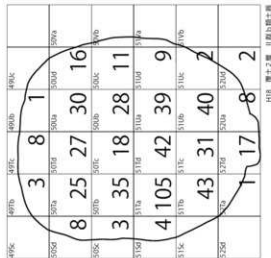
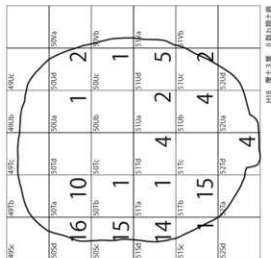
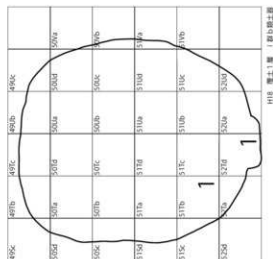
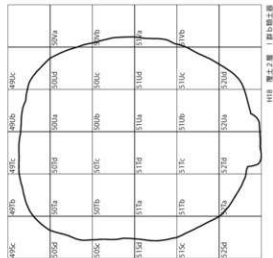
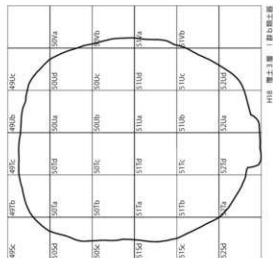
±4・6・7は円筒下層d2式 ±6と±7は同一個体が  
0 50cm

図三-1-11 H18床面遺物出土状況

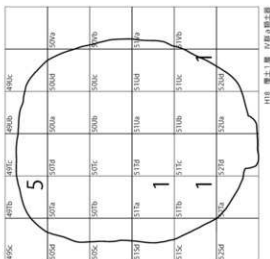
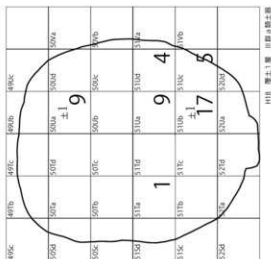
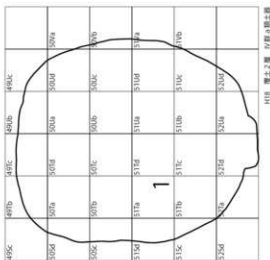
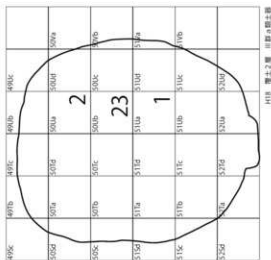
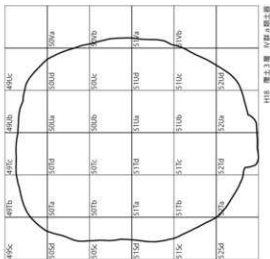
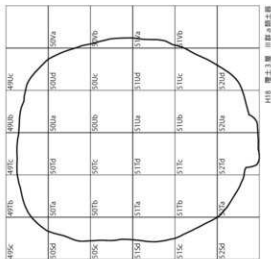


図Ⅲ-1-12 H18掘り上げ土分布状況

込んで構築しているため、掘り上げたあと、再度盛土由来の遺物が流入している。そのため磨減がひどく、破片どうしの接合はままならなかった。それに加えて少量ではあるが、盛土より新しい縄文時代中期、後期のものが覆土3層まで混在する。その中で、円筒土器上層a式とおもわれるものは比較的多い。床面とベンチ直上から同一個体の円筒下層d2式が出土している。

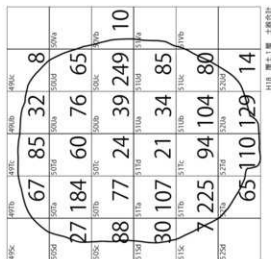
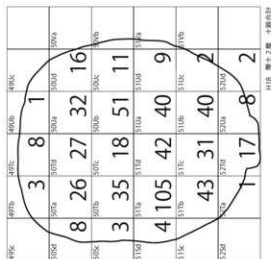
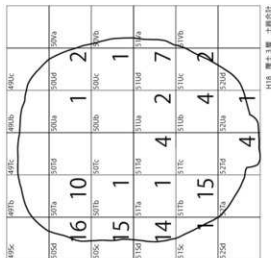
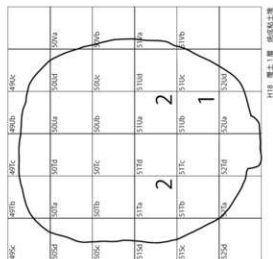
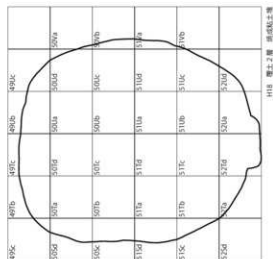
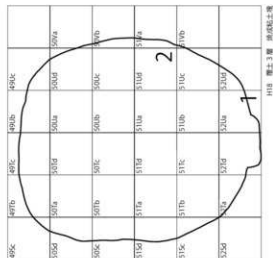


図Ⅲ-1-13 H18路種別遺物覆土 1~3層層位別遺物出土状況 1 (I群b類・II群b類土器)

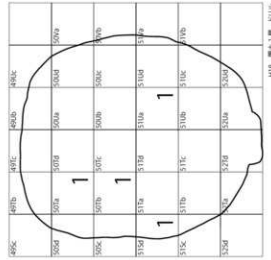
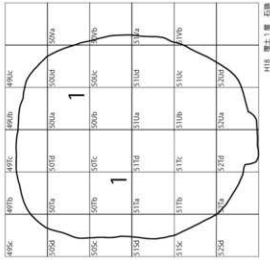
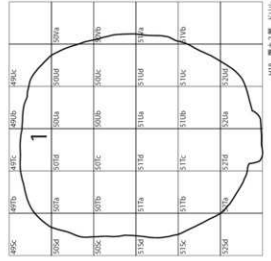
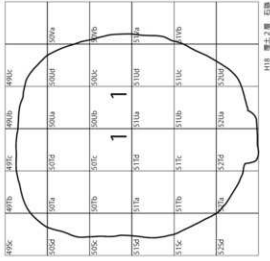
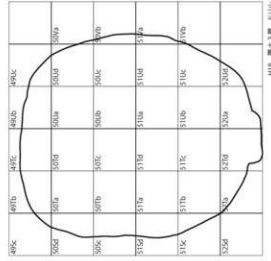
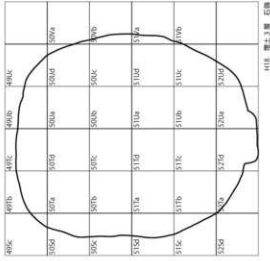


図一-1-14 H18器種別遺物出土状況 (Ⅲ群a類・Ⅱ群b類・Ⅳ群a類土器)

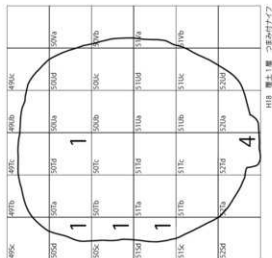
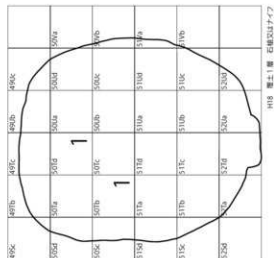
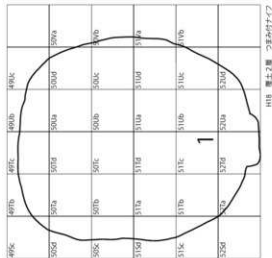
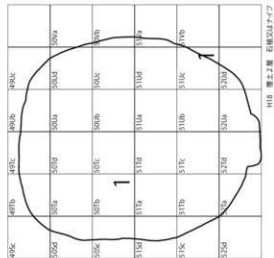
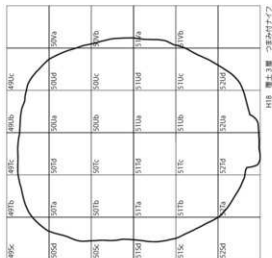
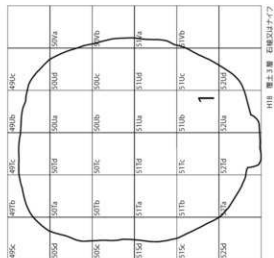




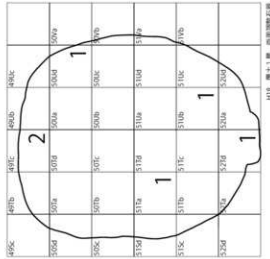
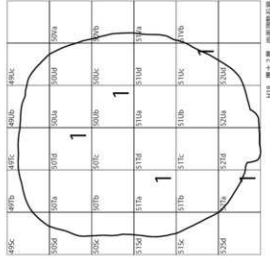
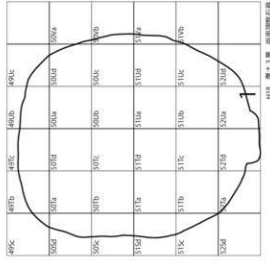
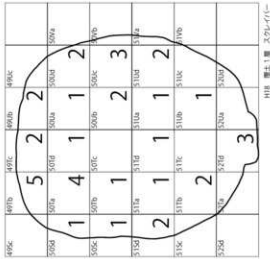
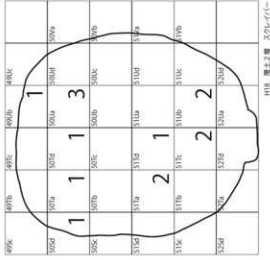
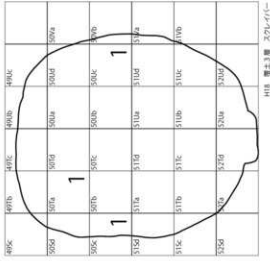
図Ⅲ-1-15 H18器種別遺物覆土1~3層層位別遺物出土状況3(焼成粘土層・土器類全般)



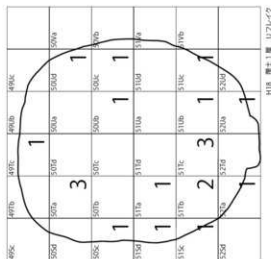
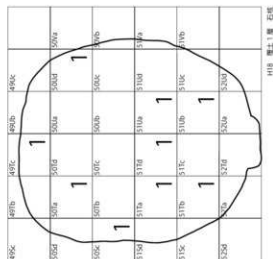
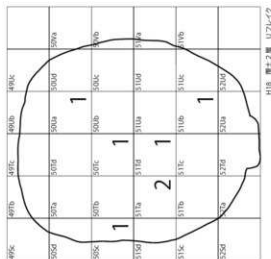
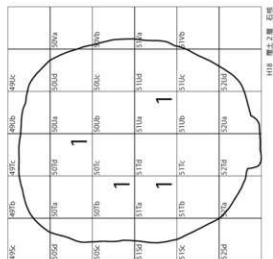
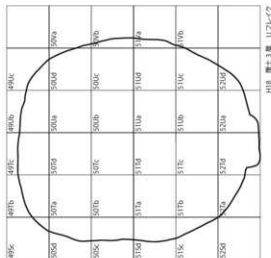
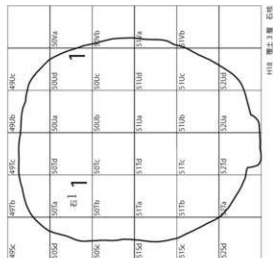
図Ⅲ-1-16 H18器種別遺物覆土1～3層層位別遺物出土状況4 (石構・ドリル)



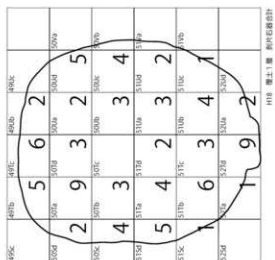
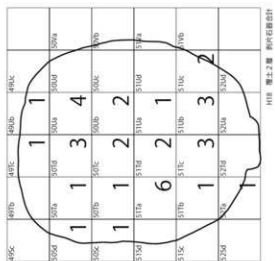
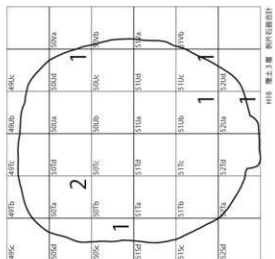
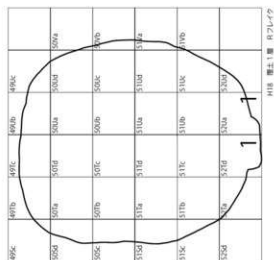
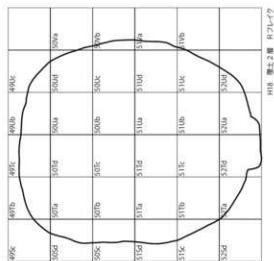
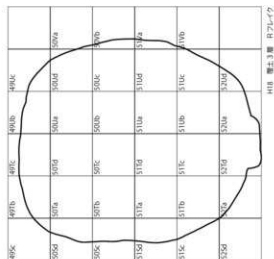
図一〇一17 H18器種別遺物出土状況5 (石槌又はナイフ・つまみ付きナイフ)



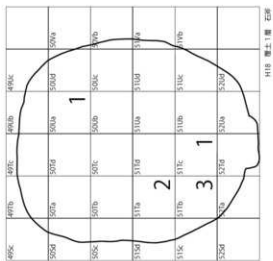
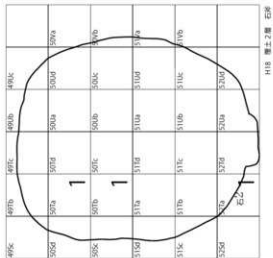
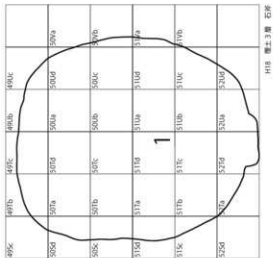
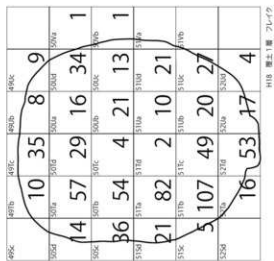
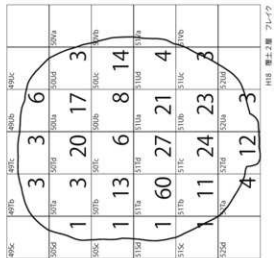
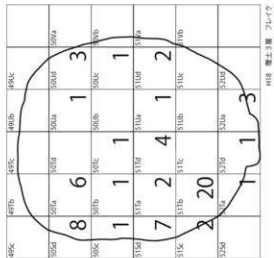
図Ⅲ-1-18 H18器種別遺物層土1～3層層位別遺物出土状況6 (スクレイパー・両面調整石版)



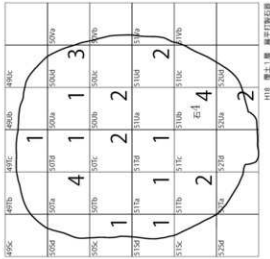
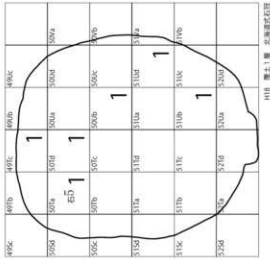
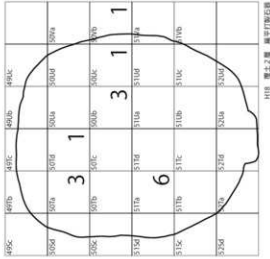
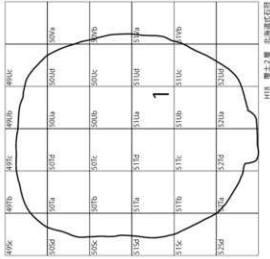
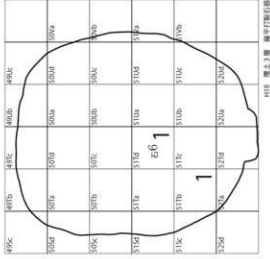
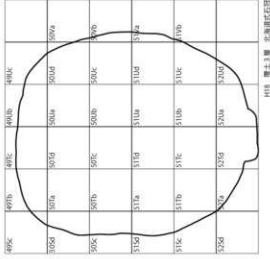
図一 1-19 H18器種別遺物掘土1~3層層別遺物出土状況7 (石堀・Uフレイク)



図Ⅲ-1-20 H18器種別遺物出土状況8 (Rフレイク・剥片石器全般)

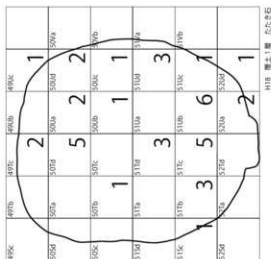
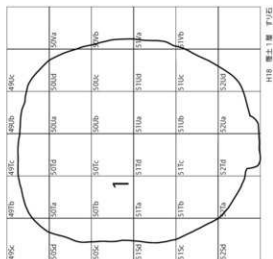
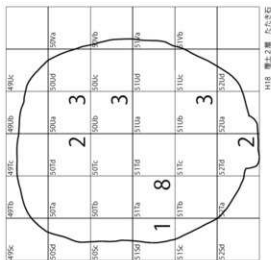
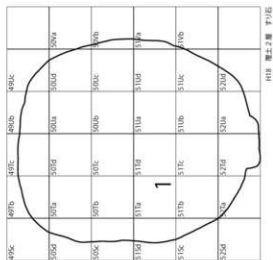
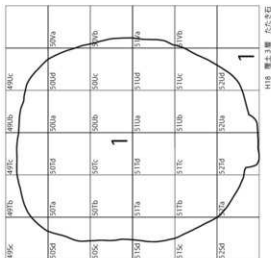
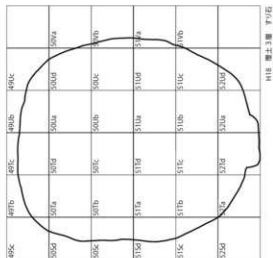


図Ⅲ-1-21 H18器種別遺物覆土1～3層層別遺物出土状況9 (フレイク・石斧)

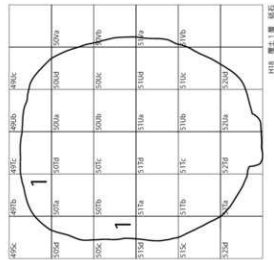
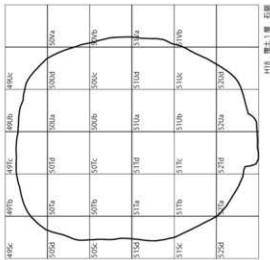
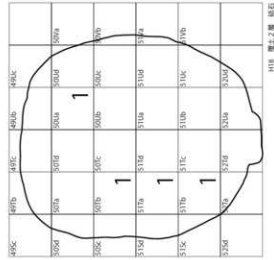
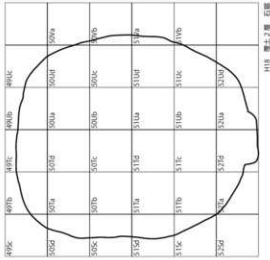
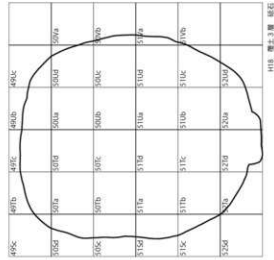
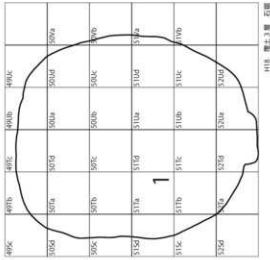


図Ⅲ-1-22 H18器種別遺物覆土1～3層位別遺物出土状況10 (北海道式石葺・扁平打家石葺)

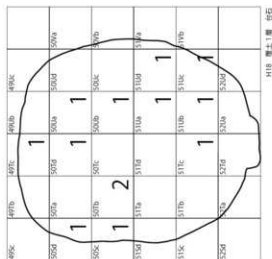
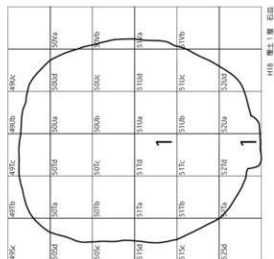
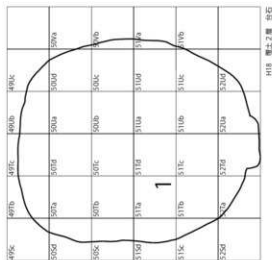
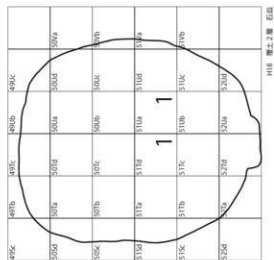
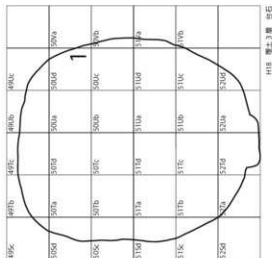
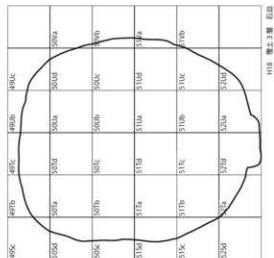




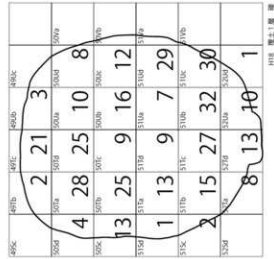
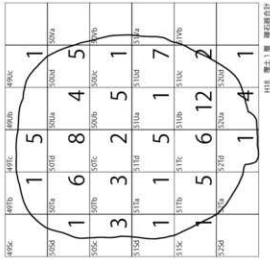
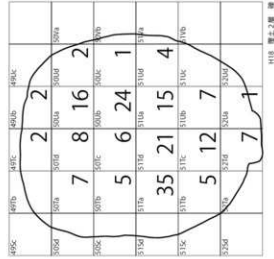
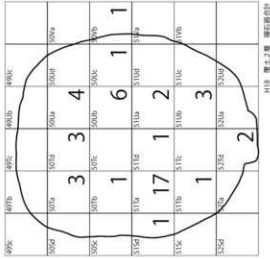
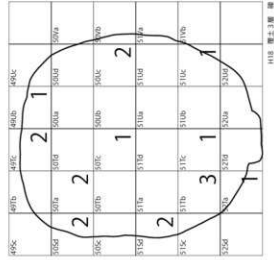
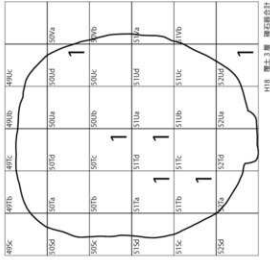
図Ⅲ-1-23 H18器種別遺物出土状況11 (すり石・たたき石)



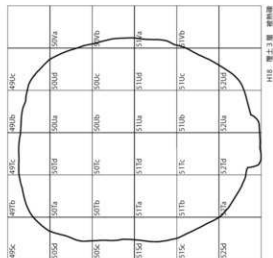
図Ⅲ-1-24 H18器種別遺物覆土1～3層位別遺物出土状況12 (石鏡・磁石)



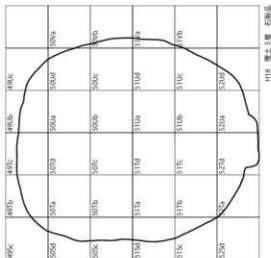
図Ⅲ-1-25 H18器種別遺物覆土1~3層位別遺物出土状況13 (石皿・台石)



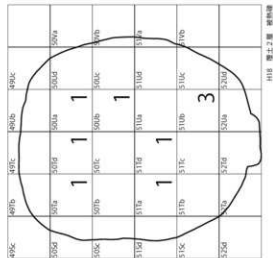
図III-1-26 H18器種別遺物層土1～3層層位別遺物出土状況14 (礫石器全般・礫)



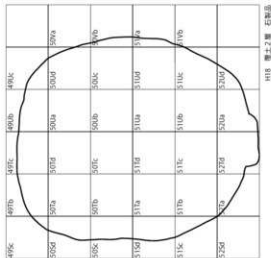
H18 層土3層 被熱燻



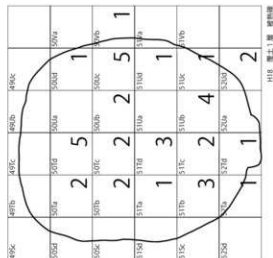
H18 層土3層 石製品



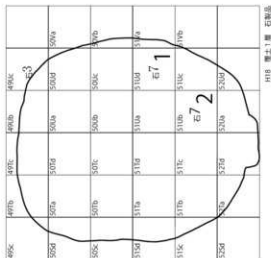
H18 層土2層 被熱燻



H18 層土2層 石製品



H18 層土1層 被熱燻



H18 層土1層 石製品

図Ⅲ-1-27 H18器種別遺物出土状況15 (被熱燻・石製品)

495C	497b	497C	498b	498C	499A
	18	67	13	10	
505d	21	102	70	33	53
506c	56	87	17	47	35
515d	28	103	21	21	60
515c	9	139	88	72	61
525d	26	77	33	8	
H18 覆土1層 石器合計					

495C	497b	497C	498b	498C
	3	6	9	
505d	2	16	35	42
506c	2	21	14	41
515d	2	119	52	39
515c	1	18	39	39
525d	6	21	4	
H18 覆土2層 石器合計				

495C	497b	497C	498b	498C
	85	152	45	18
505d	48	286	130	109
506c	144	164	41	86
515d	58	210	42	55
515c	16	364	182	176
525d	91	187	162	22
H18 覆土1層 遺物合計				

495C	497b	497C	498b	498C
	2	1		
505d	26	20	2	7
506c	17	2	3	4
515d	23	4	10	3
515c	3	39	1	5
525d	2	5	5	1
H18 覆土1層 遺物合計				

495C	497b	497C	498b	498C
	6	14	10	
505d	10	42	62	74
506c	5	56	32	92
515d	6	224	94	79
515c	1	61	70	79
525d	7	38	12	2
H18 覆土2層 遺物合計				

495C	497b	497C	498b	498C
	2	1		
505d	26	20	2	7
506c	17	2	3	4
515d	23	4	10	3
515c	3	39	1	5
525d	2	5	5	1
H18 覆土2層 遺物合計				

図III-1-28 H18器種別遺物覆土1～3層層別遺物出土状況16 (石器全般・遺物全般)











表Ⅲ-1-5 H18点取り遺物出土層位および器種一覧3(744~1115)

遺物番号	分類	層位	数量	調査区名	遺物番号	分類	層位	数量	調査区名	遺物番号	分類	層位	数量	調査区名	
744	クレーク	遺土層	1312b	831	クレーク	遺土層	1497c	931	2号	遺土層	3003a	1034	クレーク	遺土層	967a
745	土器	遺土層	1312b	832	土器	遺土層	1497c	932	2号	遺土層	3003a	1035	土器	遺土層	967a
746	磁器	遺土層	1312b	831	磁器	遺土層	1497c	931	2号	遺土層	3003a	1034	クレーク	遺土層	967a
747	磁器	遺土層	1312a	838	クレーク	遺土層	1307a	930	クレーク	遺土層	3001a	1037	2号	遺土層	967a
748	土器	遺土層	1305a	836	クレーク	遺土層	1307a	930	2号	遺土層	3001a	1037	クレーク	遺土層	967a
749	クレーク	遺土層	1305a	836	2号	遺土層	1307a	930	2号	遺土層	3001a	1037	クレーク	遺土層	967a
750	土器	遺土層	1305a	841	クレーク	遺土層	1307a	930	クレーク	遺土層	3001a	1030	クレーク	遺土層	967a
751	土器	遺土層	1305a	842	磁器類	遺土層	1307a	930	2号	遺土層	3001a	1031	クレーク	遺土層	967a
752	クレーク	遺土層	1305a	841	クレーク	遺土層	1307a	930	2号	遺土層	3001a	1032	クレーク	遺土層	967a
753	土器	遺土層	1307a	842	2号	遺土層	1307a	930	2号	遺土層	3001a	1032	クレーク	遺土層	967a
754	磁器類	遺土層	1307a	844	磁器	遺土層	1307a	930	クレーク	遺土層	3001a	1034	クレーク	遺土層	967a
755	土器	遺土層	1307a	845	2号	遺土層	1307a	940	磁器	遺土層	3001a	1035	2号	遺土層	967a
756	土器	遺土層	1307a	846	2号	遺土層	1499b	941	磁器	遺土層	3001a	1036	2号	遺土層	967a
757	土器	遺土層	1307a	847	2号	遺土層	1499b	942	2号	遺土層	3001a	1037	2号	遺土層	967a
757	クレーク	遺土層	1307a	848	磁器	遺土層	1499b	943	2号	遺土層	3001a	1038	2号	遺土層	967a
758	土器	遺土層	1305a	848	たたくぎ	遺土層	1308a	944	2号	遺土層	3001a	1039	2号	遺土層	967a
759	土器	遺土層	1305a	850	2号	遺土層	1309a	945	2号	遺土層	3001a	1040	クレーク	遺土層	967a
760	土器	遺土層	1305a	851	クレーク	遺土層	1309a	946	クレーク	遺土層	3001a	1041	クレーク	遺土層	967a
761	土器	遺土層	1305a	852	2号	遺土層	1309a	947	2号	遺土層	3001a	1042	クレーク	遺土層	967a
762	土器	遺土層	1305a	853	2号	遺土層	1309a	948	たたくぎ	遺土層	3001a	1043	たたくぎ	遺土層	967a
763	土器	遺土層	1305a	854	たたくぎ	遺土層	1309a	949	クレーク	遺土層	3001a	1044	クレーク	遺土層	967a
764	土器	遺土層	1307a	855	2号	遺土層	1309a	950	2号	遺土層	3001a	1045	2号	遺土層	967a
764	クレーク	遺土層	1307a	856	2号	遺土層	1309a	951	2号	遺土層	3001a	1046	2号	遺土層	967a
765	土器	遺土層	1307a	857	2号	遺土層	1309a	952	2号	遺土層	3001a	1047	2号	遺土層	967a
766	土器	遺土層	1307a	858	2号	遺土層	1309a	953	2号	遺土層	3001a	1048	2号	遺土層	967a
767	土器	遺土層	1307a	859	2号	遺土層	1309a	954	2号	遺土層	3001a	1049	2号	遺土層	967a
768	土器	遺土層	1307a	860	2号	遺土層	1309a	955	クレーク	遺土層	3001a	1050	クレーク	遺土層	967a
769	土器	遺土層	1307a	861	2号	遺土層	1309a	956	2号	遺土層	3001a	1051	クレーク	遺土層	967a
770	土器	遺土層	1307a	862	2号	遺土層	1309a	957	クレーク	遺土層	3001a	1052	クレーク	遺土層	967a
771	クレーク	遺土層	1307a	863	2号	遺土層	1309a	958	クレーク	遺土層	3001a	1053	クレーク	遺土層	967a
772	土器	遺土層	1307a	864	2号	遺土層	1309a	959	クレーク	遺土層	3001a	1054	2号	遺土層	967a
773	クレーク	遺土層	1305a	865	クレーク	遺土層	1309a	960	クレーク	遺土層	3001a	1055	2号	遺土層	967a
774	クレーク	遺土層	1305a	866	クレーク	遺土層	1309a	961	クレーク	遺土層	3001a	1056	クレーク	遺土層	967a
775	クレーク	遺土層	1305a	867	クレーク	遺土層	1309a	962	クレーク	遺土層	3001a	1057	クレーク	遺土層	967a
776	クレーク	遺土層	1305a	868	クレーク	遺土層	1309a	963	クレーク	遺土層	3001a	1058	クレーク	遺土層	967a
777	クレーク	遺土層	1305a	869	クレーク	遺土層	1309a	964	クレーク	遺土層	3001a	1059	クレーク	遺土層	967a
778	土器	遺土層	1307a	870	2号	遺土層	1309a	965	クレーク	遺土層	3001a	1060	クレーク	遺土層	967a
779	土器	遺土層	1307a	871	2号	遺土層	1309a	966	2号	遺土層	3001a	1061	2号	遺土層	967a
780	土器	遺土層	1307a	872	クレーク	遺土層	1309a	967	クレーク	遺土層	3001a	1062	2号	遺土層	967a
781	土器	遺土層	1307a	873	2号	遺土層	1309a	968	クレーク	遺土層	3001a	1063	クレーク	遺土層	967a
782	土器	遺土層	1307a	874	2号	遺土層	1309a	969	クレーク	遺土層	3001a	1064	クレーク	遺土層	967a
783	土器	遺土層	1307a	875	2号	遺土層	1309a	970	2号	遺土層	3001a	1065	クレーク	遺土層	967a
784	土器	遺土層	1307a	876	クレーク	遺土層	1309a	971	2号	遺土層	3001a	1066	クレーク	遺土層	967a
785	土器	遺土層	1307a	877	クレーク	遺土層	1309a	972	2号	遺土層	3001a	1067	クレーク	遺土層	967a
786	土器	遺土層	1307a	878	クレーク	遺土層	1309a	973	2号	遺土層	3001a	1068	クレーク	遺土層	967a
787	土器	遺土層	1307a	879	クレーク	遺土層	1309a	974	2号	遺土層	3001a	1069	クレーク	遺土層	967a
788	土器	遺土層	1307a	880	2号	遺土層	1309a	975	クレーク	遺土層	3001a	1070	2号	遺土層	967a
789	土器	遺土層	1307a	881	2号	遺土層	1309a	976	2号	遺土層	3001a	1071	2号	遺土層	967a
790	土器	遺土層	1307a	882	2号	遺土層	1309a	977	2号	遺土層	3001a	1072	2号	遺土層	967a
791	土器	遺土層	1307a	883	2号	遺土層	1499b	978	クレーク	遺土層	3001a	1073	クレーク	遺土層	967a
792	土器	遺土層	1305a	884	2号	遺土層	1499b	979	クレーク	遺土層	3001a	1074	2号	遺土層	967a
793	土器	遺土層	1305a	885	2号	遺土層	1499b	980	クレーク	遺土層	3001a	1075	2号	遺土層	967a
794	土器	遺土層	1305a	886	2号	遺土層	1499b	981	2号	遺土層	3001a	1076	クレーク	遺土層	967a
795	土器	遺土層	1307a	887	2号	遺土層	1499b	982	2号	遺土層	3001a	1077	2号	遺土層	967a
796	クレーク	遺土層	1307a	888	クレーク	遺土層	1499b	983	2号	遺土層	3001a	1078	2号	遺土層	967a
797	土器	遺土層	1307a	889	2号	遺土層	1499b	984	2号	遺土層	3001a	1079	クレーク	遺土層	967a
798	クレーク	遺土層	1307a	890	クレーク	遺土層	1499b	985	クレーク	遺土層	3001a	1080	クレーク	遺土層	967a
799	土器	遺土層	1307a	891	クレーク	遺土層	1499b	986	クレーク	遺土層	3001a	1081	2号	遺土層	967a
800	土器	遺土層	1307a	892	2号	遺土層	1499b	987	クレーク	遺土層	3001a	1082	2号	遺土層	967a
801	土器	遺土層	1307a	893	2号	遺土層	1499b	988	2号	遺土層	3001a	1083	2号	遺土層	967a
802	クレーク	遺土層	1307a	894	2号	遺土層	1499b	989	2号	遺土層	3001a	1084	2号	遺土層	967a
803	土器	遺土層	1307a	896	2号	遺土層	1499b	991	たたくぎ	遺土層	3001a	1085	2号	遺土層	967a
804	土器	遺土層	1307a	897	2号	遺土層	1499b	992	たたくぎ	遺土層	3001a	1086	2号	遺土層	967a
805	土器	遺土層	1307a	898	クレーク	遺土層	1499b	993	クレーク	遺土層	3001a	1087	2号	遺土層	967a
806	土器	遺土層	1307a	899	クレーク	遺土層	1499b	994	2号	遺土層	3001a	1088	2号	遺土層	967a
807	土器	遺土層	1307a	900	クレーク	遺土層	1499b	995	2号	遺土層	3001a	1089	2号	遺土層	967a
807	土器	遺土層	1307a	901	スクレイパー	遺土層	1499b	996	磁器類	遺土層	3001a	1090	2号	遺土層	967a
808	土器	遺土層	1307a	902	2号	遺土層	1309a	997	クレーク	遺土層	3001a	1091	クレーク	遺土層	967a
809	土器	遺土層	1307a	903	2号	遺土層	1309a	998	2号	遺土層	3001a	1092	クレーク	遺土層	967a
810	土器	遺土層	1307a	904	クレーク	遺土層	1309a	999	2号	遺土層	3001a	1093	2号	遺土層	967a
811	クレーク	遺土層	1307a	905	クレーク	遺土層	1309a	1000	クレーク	遺土層	3001a	1094	クレーク	遺土層	967a
812	クレーク	遺土層	1307a	906	2号	遺土層	1309a	1001	2号	遺土層	3001a	1095	クレーク	遺土層	967a
813	土器	遺土層	1307a	907	2号	遺土層	1309a	1002	2号	遺土層	3001a	1096	クレーク	遺土層	967a
814	土器	遺土層	1307a	908	2号	遺土層	1309a	1003	クレーク	遺土層	3001a	1097	クレーク	遺土層	967a
815	土器	遺土層	1307a	909	クレーク	遺土層	1309a	1004	クレーク	遺土層	3001a	1098	クレーク	遺土層	967a
816	土器	遺土層	1307a	910	クレーク	遺土層	1309a	1005	2号	遺土層	3001a	1099	クレーク	遺土層	967a
817	土器	遺土層	1307a	911	クレーク	遺土層	1309a	1006	2号	遺土層	3001a	1100	クレーク	遺土層	967a
818	土器	遺土層	1307a	912	2号	遺土層	1499b	1007	クレーク	遺土層	3001a	1101	2号	遺土層	967a
819	土器	遺土層	1307a	913	クレーク	遺土層	1499b	1008	クレーク	遺土層	3001a	1102	クレーク	遺土層	967a
820	クレーク	遺土層	1307a	914	2号	遺土層	1499b	1009	2号	遺土層	3001a	1103	2号	遺土層	967a
821	土器	遺土層	1307a	915	2号	遺土層	1309a	1010	2号	遺土層	3001a	1104	クレーク	遺土層	967a
822	土器	遺土層	1497c	916	クレーク	遺土層	1300a	1011	クレーク	遺土層	3001a	1105	クレーク	遺土層	967a
823	土器	遺土層	1497c	917	クレーク	遺土層	1300a	1012	2号	遺土層	3001a	1106	クレーク	遺土層	967a
824	土器	遺土層	1497c	918	磁器	遺土層	1300a	1013	2号	遺土層	3001a	1107	クレーク	遺土層	967a
825	クレーク	遺土層	1497c	919	クレーク	遺土層	1300a	1014	2号	遺土層	3001a	1108	2号	遺土層	967a
826	土器	遺土層	1497c	920	2号	遺土層	1300a	1015	クレーク	遺土層	3001a	1109	クレーク	遺土層	967a
827	クレーク	遺土層	1497c	921	クレーク	遺土層	1300a	1016	2号	遺土層	3001a	1110	クレーク	遺土層	967a
828	土器	遺土層	1497c</												









表Ⅲ-1-10 H18点取り遺物出土層位および器種名一覧表(2622~2995)

遺物番号	分類	層位	割合	調査区名	遺物番号	分類	層位	割合	調査区名	遺物番号	分類	層位	割合	調査区名	遺物番号	分類	層位	割合	調査区名
2622	線	遺土層	1.05%	2717	横線溝片	遺土層	1.02%	2717	溝片	遺土層	1.01%	2705	溝片	遺土層	2677	溝片	遺土層	1.61%	
2623	片	遺土層	1.43%	2718	溝片	遺土層	1.01%	2718	溝片	遺土層	1.01%	2706	溝片	遺土層	2678	溝片	遺土層	1.61%	
2624	線	遺土層	1.43%	2719	片	遺土層	1.01%	2719	溝片	遺土層	1.01%	2707	片	遺土層	2679	片	遺土層	2.02%	
2625	片	遺土層	1.49%	2720	片	遺土層	2.01%	2720	片	遺土層	1.01%	2708	溝片	遺土層	2680	片	遺土層	1.01%	
2626	溝	遺土層	1.49%	2721	溝	遺土層	1.01%	2721	溝	遺土層	1.01%	2709	溝	遺土層	2681	溝	遺土層	1.01%	
2627	片	遺土層	1.49%	2722	溝	遺土層	1.01%	2722	溝	遺土層	1.01%	2710	溝	遺土層	2682	溝	遺土層	1.01%	
2628	片	遺土層	1.49%	2723	片	遺土層	1.01%	2723	溝	遺土層	1.01%	2711	溝	遺土層	2683	溝	遺土層	2.02%	
2629	片	遺土層	1.49%	2724	片	遺土層	1.01%	2724	溝	遺土層	1.01%	2712	溝	遺土層	2684	溝	遺土層	1.01%	
2630	線	遺土層	1.49%	2725	片	遺土層	2.01%	2725	溝	遺土層	1.01%	2713	溝	遺土層	2685	溝	遺土層	1.01%	
2631	溝	遺土層	1.49%	2726	片	遺土層	1.01%	2726	溝	遺土層	1.01%	2714	溝	遺土層	2686	溝	遺土層	1.01%	
2632	溝	遺土層	1.49%	2727	片	遺土層	4.00%	2727	溝	遺土層	1.01%	2715	溝	遺土層	2687	溝	遺土層	1.01%	
2633	溝	遺土層	1.49%	2728	溝	遺土層	1.01%	2728	片	遺土層	1.01%	2716	溝	遺土層	2688	溝	遺土層	1.01%	
2634	溝	遺土層	1.49%	2729	溝	遺土層	1.01%	2729	溝	遺土層	1.01%	2717	溝	遺土層	2689	溝	遺土層	1.01%	
2635	溝	遺土層	1.49%	2730	溝	遺土層	1.49%	2730	溝	遺土層	1.01%	2718	溝	遺土層	2690	溝	遺土層	1.01%	
2636	線	遺土層	1.49%	2731	溝	遺土層	1.01%	2731	溝	遺土層	1.01%	2719	溝	遺土層	2691	溝	遺土層	1.01%	
2637	片	遺土層	1.49%	2732	片	遺土層	1.01%	2732	溝	遺土層	1.01%	2720	溝	遺土層	2692	溝	遺土層	1.01%	
2638	溝	遺土層	1.49%	2733	片	遺土層	1.01%	2733	溝	遺土層	1.01%	2721	溝	遺土層	2693	溝	遺土層	1.01%	
2639	溝	遺土層	1.49%	2734	溝	遺土層	1.01%	2734	溝	遺土層	1.01%	2722	溝	遺土層	2694	溝	遺土層	1.01%	
2640	溝	遺土層	1.49%	2735	溝	遺土層	1.01%	2735	溝	遺土層	1.01%	2723	溝	遺土層	2695	溝	遺土層	1.01%	
2641	溝	遺土層	1.49%	2736	片	遺土層	1.01%	2736	溝	遺土層	1.01%	2724	溝	遺土層	2696	溝	遺土層	1.01%	
2642	溝	遺土層	1.49%	2737	溝	遺土層	1.01%	2737	溝	遺土層	1.01%	2725	溝	遺土層	2697	溝	遺土層	1.01%	
2643	溝	遺土層	1.49%	2738	溝	遺土層	1.01%	2738	溝	遺土層	1.01%	2726	溝	遺土層	2698	溝	遺土層	1.01%	
2644	溝	遺土層	1.49%	2739	溝	遺土層	1.01%	2739	溝	遺土層	1.01%	2727	溝	遺土層	2699	溝	遺土層	1.01%	
2645	本葉漢字石	遺土層	1.49%	2740	溝	遺土層	1.01%	2740	溝	遺土層	1.01%	2728	溝	遺土層	2700	溝	遺土層	1.01%	
2646	溝	遺土層	1.01%	2741	片	遺土層	1.01%	2741	溝	遺土層	1.01%	2729	溝	遺土層	2701	溝	遺土層	1.01%	
2647	片	遺土層	1.01%	2742	たなき石	遺土層	1.01%	2742	溝	遺土層	1.01%	2730	溝	遺土層	2702	溝	遺土層	2.01%	
2648	片	遺土層	1.02%	2743	溝	遺土層	1.01%	2743	溝	遺土層	1.01%	2731	溝	遺土層	2703	溝	遺土層	1.01%	
2649	片	遺土層	1.02%	2744	横線溝片	遺土層	1.01%	2744	溝	遺土層	1.01%	2732	溝	遺土層	2704	溝	遺土層	1.01%	
2650	片	遺土層	1.02%	2745	溝	遺土層	1.01%	2745	溝	遺土層	1.01%	2733	溝	遺土層	2705	溝	遺土層	1.01%	
2651	溝	遺土層	1.02%	2746	溝	遺土層	1.01%	2746	溝	遺土層	1.01%	2734	溝	遺土層	2706	溝	遺土層	1.01%	
2652	石	遺土層	1.01%	2747	溝	遺土層	1.01%	2747	溝	遺土層	1.01%	2735	溝	遺土層	2707	溝	遺土層	1.01%	
2653	溝	遺土層	1.01%	2748	溝	遺土層	1.01%	2748	溝	遺土層	1.01%	2736	溝	遺土層	2708	溝	遺土層	1.01%	
2654	溝	遺土層	1.01%	2749	溝	遺土層	1.01%	2749	溝	遺土層	1.01%	2737	溝	遺土層	2709	溝	遺土層	1.01%	
2655	溝	遺土層	1.01%	2750	片	遺土層	1.01%	2750	溝	遺土層	1.01%	2738	溝	遺土層	2710	溝	遺土層	1.01%	
2656	溝	遺土層	1.01%	2751	溝	遺土層	1.01%	2751	溝	遺土層	1.01%	2739	溝	遺土層	2711	溝	遺土層	1.01%	
2657	溝	遺土層	1.01%	2752	溝	遺土層	1.01%	2752	溝	遺土層	1.01%	2740	溝	遺土層	2712	溝	遺土層	1.01%	
2658	溝	遺土層	1.01%	2753	溝	遺土層	1.01%	2753	溝	遺土層	1.01%	2741	溝	遺土層	2713	溝	遺土層	1.01%	
2659	片	遺土層	1.05%	2754	片	遺土層	1.01%	2754	溝	遺土層	1.01%	2742	溝	遺土層	2714	溝	遺土層	1.01%	
2660	片	遺土層	1.05%	2755	片	遺土層	1.01%	2755	溝	遺土層	1.01%	2743	溝	遺土層	2715	溝	遺土層	1.01%	
2661	片	遺土層	1.05%	2756	片	遺土層	1.01%	2756	溝	遺土層	1.01%	2744	溝	遺土層	2716	溝	遺土層	1.01%	
2662	溝	遺土層	1.05%	2757	溝	遺土層	1.01%	2757	溝	遺土層	1.01%	2745	溝	遺土層	2717	溝	遺土層	1.01%	
2663	溝	遺土層	1.05%	2758	溝	遺土層	1.01%	2758	溝	遺土層	1.01%	2746	溝	遺土層	2718	溝	遺土層	1.01%	
2664	片	遺土層	1.05%	2759	溝	遺土層	1.01%	2759	溝	遺土層	1.01%	2747	溝	遺土層	2719	溝	遺土層	1.01%	
2665	溝	遺土層	1.05%	2760	溝	遺土層	1.01%	2760	溝	遺土層	1.01%	2748	溝	遺土層	2720	溝	遺土層	1.01%	
2666	片	遺土層	1.05%	2761	たなき石	遺土層	1.01%	2761	溝	遺土層	1.01%	2749	溝	遺土層	2721	溝	遺土層	1.01%	
2667	溝	遺土層	1.05%	2762	たなき石	遺土層	1.01%	2762	溝	遺土層	1.01%	2750	溝	遺土層	2722	溝	遺土層	1.01%	
2668	溝	遺土層	1.05%	2763	溝	遺土層	1.01%	2763	溝	遺土層	1.01%	2751	溝	遺土層	2723	溝	遺土層	1.01%	
2669	溝	遺土層	1.05%	2764	溝	遺土層	1.01%	2764	溝	遺土層	1.01%	2752	溝	遺土層	2724	溝	遺土層	1.01%	
2670	溝	遺土層	1.05%	2765	溝	遺土層	1.01%	2765	溝	遺土層	1.01%	2753	溝	遺土層	2725	溝	遺土層	1.01%	
2671	溝	遺土層	1.05%	2766	溝	遺土層	1.01%	2766	溝	遺土層	1.01%	2754	溝	遺土層	2726	溝	遺土層	1.01%	
2672	溝	遺土層	1.49%	2767	片	遺土層	1.01%	2767	溝	遺土層	1.01%	2755	溝	遺土層	2727	溝	遺土層	1.01%	
2673	溝	遺土層	1.49%	2768	溝	遺土層	1.01%	2768	溝	遺土層	1.01%	2756	溝	遺土層	2728	溝	遺土層	1.01%	
2674	溝	遺土層	1.49%	2769	溝	遺土層	1.01%	2769	溝	遺土層	1.01%	2757	溝	遺土層	2729	溝	遺土層	1.01%	
2675	片	遺土層	1.49%	2770	溝	遺土層	1.01%	2770	溝	遺土層	1.01%	2758	溝	遺土層	2730	溝	遺土層	1.01%	
2676	片	遺土層	1.49%	2771	溝	遺土層	1.01%	2771	溝	遺土層	1.01%	2759	溝	遺土層	2731	溝	遺土層	1.01%	
2677	片	遺土層	1.49%	2772	溝	遺土層	1.01%	2772	溝	遺土層	1.01%	2760	溝	遺土層	2732	溝	遺土層	1.01%	
2678	溝	遺土層	1.49%	2773	片	遺土層	1.01%	2773	溝	遺土層	1.01%	2761	溝	遺土層	2733	溝	遺土層	1.01%	
2679	片	遺土層	1.49%	2774	溝	遺土層	1.01%	2774	溝	遺土層	1.01%	2762	溝	遺土層	2734	溝	遺土層	1.01%	
2680	片	遺土層	1.49%	2775	片	遺土層	1.01%	2775	溝	遺土層	1.01%	2763	溝	遺土層	2735	溝	遺土層	1.01%	
2681	溝	遺土層	1.49%	2776	たなき石	遺土層	1.01%	2776	溝	遺土層	1.01%	2764	溝	遺土層	2736	溝	遺土層	1.01%	
2682	片	遺土層	1.49%	2777	溝	遺土層	1.01%	2777	溝	遺土層	1.01%	2765	溝	遺土層	2737	溝	遺土層	1.01%	
2683	溝	遺土層	1.49%	2778	溝	遺土層	1.01%	2778	溝	遺土層	1.01%	2766	溝	遺土層	2738	溝	遺土層	1.01%	
2684	溝	遺土層	1.49%	2779	溝	遺土層	1.01%	2779	溝	遺土層	1.01%	2767	溝	遺土層	2739	溝	遺土層	1.01%	
2685	溝	遺土層	1.49%	2780	溝	遺土層	1.01%	2780	溝	遺土層	1.01%	2768	溝	遺土層	2740	溝	遺土層	1.01%	
2686	溝	遺土層	1.49%	2781	溝	遺土層	1.01%	2781	溝	遺土層	1.01%	2769	溝	遺土層	2741	溝	遺土層	1.01%	
2687	溝	遺土層	1.49%	2782	溝	遺土層	1.01%	2782	溝	遺土層	1.01%	2770	溝	遺土層	2742	溝	遺土層	1.01%	
2688	溝	遺土層	1.49%	2783	溝	遺土層	1.01%	2783	溝	遺土層	1.01%	2771	溝	遺土層	2743	溝	遺土層	1.01%	
2689	溝	遺土層	1.49%	2784	溝	遺土層	1.01%	2784	溝	遺土層	1.01%	2772	溝	遺土層	2744	溝	遺土層	1.01%	
2690	溝	遺土層	1.49%	2785	溝	遺土層	1.01%	2785	溝	遺土層	1.01%	2773	溝	遺土層	2745	溝	遺土層	1.01%	
2691	溝	遺土層	1.49%	2786	溝	遺土層	1.01%	2786	溝	遺土層	1.01%	2774	溝	遺土層	2746	溝	遺土層	1.01%	
2692	溝	遺土層	1.49%	2787	溝	遺土層	1.01%	2787	溝	遺土層	1.01%	2775	溝	遺土層	2747	溝	遺土層	1.01%	
2693	溝	遺土層	1.49%	2788	溝	遺土層	1.01%	2788	溝	遺土層	1.01%	2776	溝	遺土層	2748	溝	遺土層	1.01%	
2694	溝	遺土層	1.49%	2789	溝	遺土層	1.01%	2789	溝	遺土層	1.01%	2777	溝	遺土層	2749	溝	遺土層	1.01%	
2695	溝	遺土層	1.49%	2790	溝	遺土層	1.01%	2790	溝	遺土層	1.01%	2778	溝	遺土層	2750	溝	遺土層	1.01%	
2696	溝	遺土層	1.49%	2791	溝	遺土層	1.01%	2791	溝	遺土層	1.01%	2779	溝	遺土層	2751	溝	遺土層	1.01%	
2697	溝	遺土層	1.49%	279															



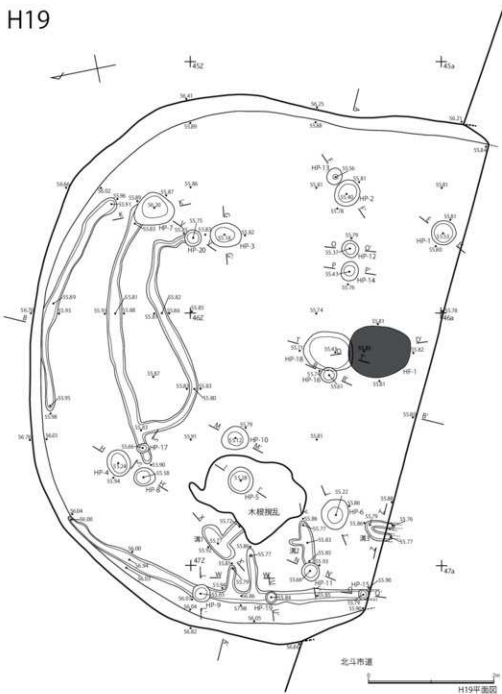






表Ⅲ-1-14 H18点取り遺物出土層位および器種名一覧12 (4132~4313)

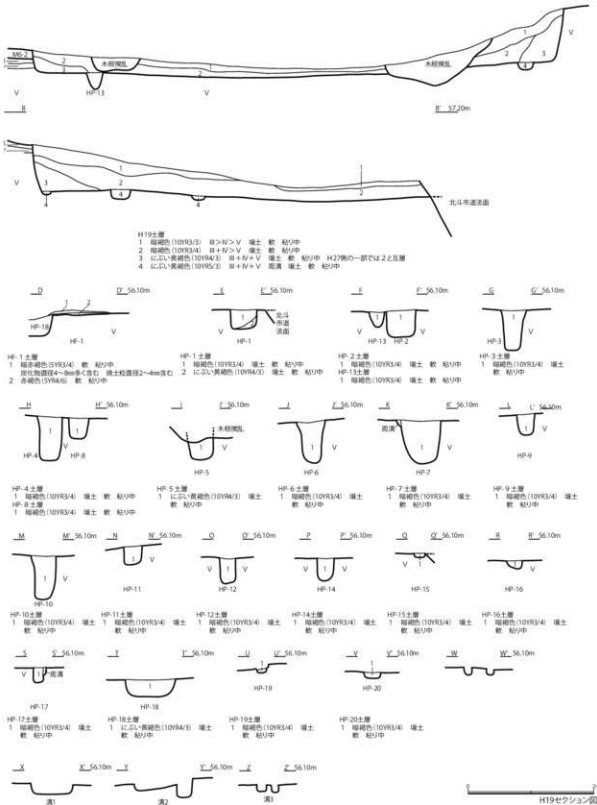
遺物 番号	分類	層位	数量	調査 品名	遺物 番号	分類	層位	数量	調査 品名	遺物 番号	分類	層位	数量	調査 品名	遺物 番号	分類	層位	数量	調査 品名
4132	瓦	遺土層	1017g		4171	フレイク	遺土層	1050g		4274	瓦	遺土層	1001g		4275	鏝	遺土層	1017g	
4133	フレイク	遺土層	1015g		4172	瓦	遺土層	1000g		4275	フレイク	遺土層	1000g		4276	フレイク	遺土層	1017g	
4134	フレイク	遺土層	1015g		4180	フレイク	遺土層	1050g		4276	鏝	遺土層	1001g		4277	フレイク	遺土層	1017g	
4135	瓦	遺土層	1005g		4181	フレイク	遺土層	1050g		4277	粘土片	遺土層	1007g		4278	鏝	遺土層	1017g	
4136	スラレイバー	遺土層	1005g		4182	石	遺土層	1000g		4278	フレイク	遺土層	1007g		4279	鏝	遺土層	1017g	
4137	瓦	遺土層	1005g		4183	瓦	遺土層	1000g		4279	鏝	遺土層	1007g		4280	瓦	遺土層	1017g	
4138	瓦	遺土層	4005g		4184	鏝	遺土層	1000g		4280	瓦	遺土層	4017g		4281	フレイク	遺土層	1017g	
4139	瓦	遺土層	1005g		4185	鏝	遺土層	1000g		4281	フレイク	遺土層	1017g		4282	瓦	遺土層	1017g	
4140	瓦	遺土層	4005g		4186	フレイク	遺土層	1050g		4282	フレイク	遺土層	1017g		4283	瓦	遺土層	1017g	
4141	瓦	遺土層	1015g		4187	瓦	遺土層	1000g		4283	瓦	遺土層	1017g		4284	フレイク	遺土層	1017g	
4142	フレイク	遺土層	1005g		4188	瓦	遺土層	1015g		4284	石片	遺土層	1017g		4285	フレイク	遺土層	1017g	
4143	瓦	遺土層	6005g		4189	フレイク	遺土層	1015g		4285	フレイク	遺土層	1017g		4286	フレイク	遺土層	1017g	
4144	フレイク	遺土層	1005g		4190	フレイク	遺土層	1015g		4286	鏝	遺土層	1017g		4287	瓦	遺土層	1017g	
4145	瓦	遺土層	2005g		4191	瓦	遺土層	1005g		4287	瓦	遺土層	1017g		4288	瓦	遺土層	1017g	
4146	フレイク	遺土層	1005g		4192	瓦	遺土層	1015g		4288	瓦	遺土層	1017g		4289	フレイク	遺土層	1017g	
4147	鏝	遺土層	1007g		4193	瓦	遺土層	2015g		4289	鏝	遺土層	1017g		4290	フレイク	遺土層	1017g	
4148	フレイク	遺土層	1005g		4194	瓦	遺土層	1015g		4290	瓦	遺土層	1017g		4291	フレイク	遺土層	1017g	
4149	鏝	遺土層	1005g		4195	瓦	遺土層	1005g		4291	フレイク	遺土層	1017g		4292	フレイク	遺土層	1017g	
4150	瓦	遺土層	1005g		4196	瓦	遺土層	1005g		4292	瓦	遺土層	1017g		4293	スラレイバー	遺土層	1017g	
4151	瓦	遺土層	1005g		4197	瓦	遺土層	2005g		4293	瓦	遺土層	1017g		4294	スラレイバー	遺土層	1017g	
4152	瓦	遺土層	1005g		4198	フレイク	遺土層	1007g		4294	鏝	遺土層	1017g		4295	スラレイバー	遺土層	1017g	
4153	フレイク	遺土層	1005g		4199	フレイク	遺土層	1005g		4295	瓦	遺土層	1017g		4296	瓦	遺土層	1017g	
4154	フレイク	遺土層	1005g		4200	瓦	遺土層	1005g		4296	瓦	遺土層	1017g		4297	鏝	遺土層	1017g	
4155	瓦	遺土層	1005g		4201	瓦	遺土層	1005g		4297	スラレイバー	遺土層	1017g		4298	瓦	遺土層	1017g	
4156	瓦	遺土層	1005g		4202	瓦	遺土層	1005g		4298	スラレイバー	遺土層	1017g		4299	スラレイバー	遺土層	1017g	
4157	鏝	遺土層	1005g		4203	瓦	遺土層	1005g		4299	スラレイバー	遺土層	1017g		4300	スラレイバー	遺土層	1017g	
4158	瓦	遺土層	1005g		4204	瓦	遺土層	1005g		4300	スラレイバー	遺土層	1017g		4301	スラレイバー	遺土層	1017g	
4159	フレイク	遺土層	1005g		4205	瓦	遺土層	1005g		4301	スラレイバー	遺土層	1017g		4302	スラレイバー	遺土層	1017g	
4160	瓦	遺土層	1007g		4206	瓦	遺土層	1005g		4302	スラレイバー	遺土層	1017g		4303	スラレイバー	遺土層	1017g	
4161	瓦	遺土層	1007g		4207	フレイク	遺土層	1017g		4303	スラレイバー	遺土層	1017g		4304	スラレイバー	遺土層	1017g	
4162	鏝	遺土層	1007g		4208	瓦	遺土層	1015g		4304	スラレイバー	遺土層	1017g		4305	スラレイバー	遺土層	1017g	
4163	フレイク	遺土層	1007g		4209	瓦	遺土層	1015g		4305	スラレイバー	遺土層	1017g		4306	スラレイバー	遺土層	1017g	
4164	フレイク	遺土層	1007g		4210	瓦	遺土層	1015g		4306	スラレイバー	遺土層	1017g		4307	スラレイバー	遺土層	1017g	
4165	フレイク	遺土層	1007g		4211	鏝	遺土層	1015g		4307	スラレイバー	遺土層	1017g		4308	スラレイバー	遺土層	1017g	
4166	フレイク	遺土層	1007g		4212	フレイク	遺土層	1017g		4308	スラレイバー	遺土層	1017g		4309	スラレイバー	遺土層	1017g	
4167	瓦	遺土層	1007g		4213	フレイク	遺土層	1017g		4309	スラレイバー	遺土層	1017g		4310	スラレイバー	遺土層	1017g	
4168	瓦	遺土層	1007g		4214	瓦	遺土層	1017g		4310	スラレイバー	遺土層	1017g		4311	スラレイバー	遺土層	1017g	
4169	瓦	遺土層	1007g		4215	瓦	遺土層	1017g		4311	スラレイバー	遺土層	1017g		4312	スラレイバー	遺土層	1017g	
4170	瓦	遺土層	1007g		4216	鏝	遺土層	1017g		4312	スラレイバー	遺土層	1017g		4313	スラレイバー	遺土層	1017g	
4171	スラレイバー	遺土層	1007g		4217	鏝	遺土層	1017g		4313	スラレイバー	遺土層	1017g						
4172	フレイク	遺土層	1005g		4218	瓦	遺土層	2015g		4314	スラレイバー	遺土層	1017g						
4173	フレイク	遺土層	1007g		4219	瓦	遺土層	1017g		4315	スラレイバー	遺土層	1017g						
4174	瓦	遺土層	1007g		4220	フレイク	遺土層	1015g		4316	スラレイバー	遺土層	1017g						
4175	フレイク	遺土層	1007g		4221	フレイク	遺土層	1015g		4317	スラレイバー	遺土層	1017g						
4176	瓦	遺土層	1007g		4222	瓦	遺土層	1017g		4318	スラレイバー	遺土層	1017g						
4177	瓦	遺土層	1005g		4223	フレイク	遺土層	1017g		4297	瓦	遺土層	1017g						



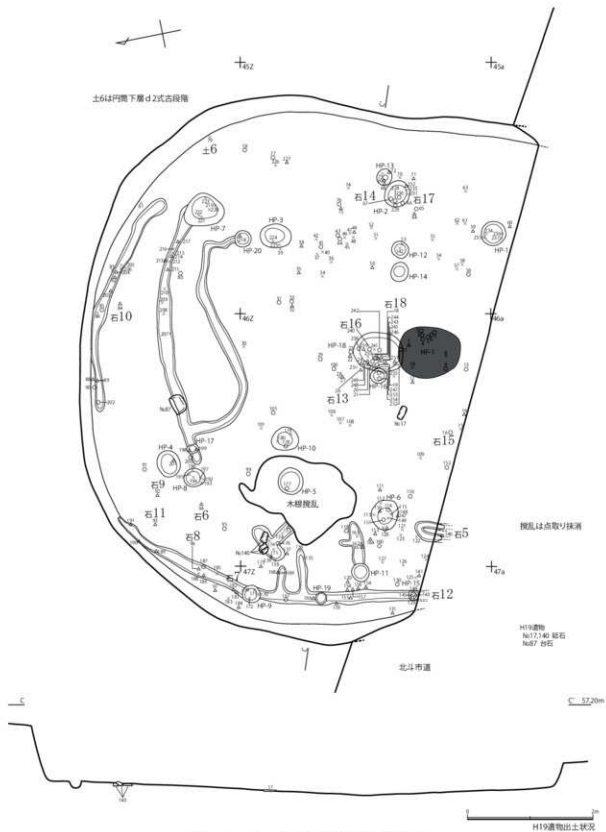
H19 (図Ⅲ-1-29-31、-2-2、-3-4・5、カラー図版11、図版8・55・123・124)

位置・立地 45-47-Y-a区 調査区中央の平坦面

確認・調査 Ⅲ層上面を精査した際に褐色土の高まりとⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約30cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝、掘り上げ土を確認し、住居跡と判断した。範囲は調査区外に広がるが、道路の反対側の切土断面には続かない。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。周辺の住居跡の周辺の住居の掘り上げ土を含めた土層の観察から、M6盛土やH25-27より新しい。



図Ⅲ-1-30 H19土層断面図・H19付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-31 H19点取り遺物出土状況図

表Ⅱ-1-15 H19点取り遺物出土層位および器種名一覧（1～255）

遺物番号	器種	分類	層位	遺物番号	器種	分類	層位	遺物番号	器種	分類	層位	遺物番号	器種	分類	層位	遺物番号	器種	分類	層位	遺物番号	器種	分類	層位
1	1	フレイク	HP-1層土1	68	たたき石	燧石	1	130	鏝	燧石	1	193	瓦	燧石	HP-17層土1	3							
2	燧石	HP-1層土1	1	69	片割れ石	燧石	1	131	石	燧石	1	194	瓦	燧石	HP-17層土1	3							
3	燧石	HP-1層土1	1	88	フレイク	燧石	1	132	フレイク	燧石	1	197	瓦	燧石	HP-17層土1	3							
4	縄手打製石器	HP-1層土1	1	90	フレイク	燧石	1	133	フレイク	燧石	1	198	フレイク	燧石	HP-17層土1	1							
5	HP-1層土1	1	70	瓦	燧石	1	134	瓦	燧石	2	199	フレイク	燧石	HP-17層土1	1								
6	燧石	HP-1層土1	1	71	フレイク	燧石	1	135	瓦	燧石	1	200	燧石	燧石	HP-17層土1	1							
7	燧石	HP-1層土1	1	72	フレイク	燧石	1	136	瓦	燧石	1	201	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
8	瓦	HP-1層土1	1	73	瓦	燧石	1	137	フレイク	燧石	1	202	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
9	燧石	HP-1層土1	4	74	瓦	燧石	1	138	瓦	燧石	3	203	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
10	燧石	HP-1層土1	1	75	フレイク	燧石	1	139	フレイク	燧石	1	204	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
11	燧石	HP-1層土1	1	76	燧石	燧石	1	140	燧石	燧石	3	205	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	2						
12	フレイク	燧石	1	77	燧石	燧石	1	141	フレイク	燧石	1	206	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	3						
13	燧石	燧石	1	78	燧石	燧石	1	142	瓦	燧石	1	207	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
14	フレイク	燧石	1	79	瓦	燧石	10	143	スライス	燧石	1	208	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
15	瓦	燧石	1	80	燧石	燧石	1	144	フレイク	燧石	1	209	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
16	片割れ石	燧石	1	81	燧石	燧石	1	145	瓦	燧石	1	210	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
17	燧石	燧石	1	82	フレイク	燧石	1	146	ワタ	燧石	1	211	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
18	たたき石	燧石	1	83	瓦	燧石	1	147	フレイク	燧石	1	212	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
19	たたき石	燧石	1	84	スライス	燧石	1	148	瓦	燧石	1	213	板石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
20	瓦	燧石	1	85	燧石	燧石	1	149	瓦	燧石	1	214	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
21	燧石	燧石	1	86	燧石	燧石	1	150	フレイク	燧石	1	215	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
22	フレイク	燧石	1	87	石	燧石	1	151	燧石	HP-17層土1	1	216	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
23	燧石	燧石	1	88	フレイク	燧石	1	152	石	燧石	1	217	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
24	フレイク	燧石	1	89	フレイク	燧石	1	153	フレイク	燧石	1	218	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
25	瓦	燧石	1	90	燧石	燧石	1	154	フレイク	燧石	1	219	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
26	片割れ石	燧石	1	91	たたき石	燧石	1	155	フレイク	燧石	1	220	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
27	フレイク	燧石	1	92	スライス	燧石	1	156	フレイク	燧石	1	221	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
28	瓦	燧石	1	93	スライス	燧石	1	157	フレイク	燧石	1	222	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
29	燧石	燧石	1	94	ワタ	燧石	1	158	フレイク	燧石	1	223	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
30	瓦	燧石	3	95	たたき石	燧石	1	159	フレイク	燧石	1	224	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
31	燧石	燧石	1	96	スライス	燧石	1	160	燧石	燧石	1	225	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
32	フレイク	燧石	1	97	スライス	燧石	3	161	フレイク	燧石	1	226	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
33	燧石	燧石	1	98	瓦	燧石	2	162	フレイク	燧石	1	227	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
34	瓦	燧石	13	99	燧石	燧石	1	163	瓦	燧石	1	228	たたき石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
35	フレイク	燧石	1	100	燧石	燧石	3	164	燧石	燧石	2	229	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
36	瓦	燧石	1	101	瓦	燧石	2	165	瓦	燧石	1	230	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
37	瓦	燧石	6	102	燧石	燧石	1	166	フレイク	燧石	1	231	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
38	フレイク	燧石	1	103	瓦	燧石	1	167	燧石	燧石	1	232	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
39	瓦	燧石	4	104	瓦	燧石	1	168	フレイク	燧石	1	233	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
40	瓦	燧石	1	105	燧石	燧石	1	169	瓦	燧石	1	234	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	2						
41	燧石	燧石	1	106	瓦	燧石	2	170	瓦	燧石	2	235	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	2						
42	燧石	燧石	2	107	瓦	燧石	1	171	瓦	燧石	1	236	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	2						
43	燧石	燧石	1	108	燧石	燧石	1	172	燧石	燧石	1	237	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
44	燧石	燧石	1	109	瓦	燧石	1	173	フレイク	燧石	1	238	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
45	瓦	燧石	1	110	燧石	燧石	1	174	瓦	燧石	1	239	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
46	瓦	燧石	2	111	フレイク	燧石	1	175	燧石	燧石	1	240	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
47	瓦	燧石	2	112	瓦	燧石	5	176	燧石	燧石	1	241	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
48	瓦	燧石	2	113	瓦	燧石	1	177	燧石	燧石	1	242	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
49	フレイク	燧石	1	114	燧石	燧石	3	178	縄手打製石器	HP-17層土1	1	243	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
50	フレイク	燧石	1	115	瓦	燧石	1	179	燧石	燧石	1	244	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
51	瓦	燧石	5	116	燧石	燧石	3	180	瓦	燧石	3	245	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
52	瓦	燧石	1	117	燧石	燧石	1	181	フレイク	燧石	1	246	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	2						
53	瓦	燧石	1	118	燧石	燧石	1	182	つぎみ付ナイフ	燧石	1	247	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
54	瓦	燧石	6	119	燧石	燧石	1	183	燧石	燧石	1	248	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
55	瓦	燧石	1	120	フレイク	燧石	1	184	フレイク	燧石	1	249	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
56	たたき石	燧石	1	121	瓦	燧石	1	185	瓦	燧石	6	247	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
57	瓦	燧石	1	122	瓦	燧石	1	186	フレイク	燧石	1	248	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
58	燧石	燧石	3	123	瓦	燧石	1	187	石	燧石	1	249	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	10						
59	フレイク	燧石	1	124	瓦	燧石	1	188	瓦	燧石	1	250	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
60	フレイク	燧石	1	125	瓦	燧石	2	189	フレイク	燧石	1	251	フレイク	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
61	瓦	燧石	3	126	瓦	燧石	1	190	フレイク	燧石	1	252	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
62	瓦	燧石	2	127	瓦	燧石	10	191	フレイク	燧石	1	253	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
63	瓦	燧石	3	128	瓦	燧石	3	192	瓦	燧石	3	254	燧石	燧石	燧石	HP-17層土1	1						
64	フレイク	燧石	1	129	フレイク	燧石	1	193	瓦	燧石	1	255	瓦	燧石	燧石	HP-17層土1	3						
65	燧石	燧石	1	129	燧石	燧石	1	194	燧石	燧石	1												

覆土 自然堆積である。溝1～3は周溝1層で点取りした。

構造 平面形は隅丸方形または隅丸長方形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。周囲には掘り上げ土がリング状に分布する。

付属遺構 HF-1は中央に位置する楕円形の地床炉である。HP-1～8-10は主柱穴で、HP-1・2・3または7・5・6の6本柱と考える。HP-3・7とHP-4・8、HP-5・10は柱穴を改変した可能性がある。HP-12～14は支柱穴で、HP-13は先端が尖る杭状である。HP-16はHF-1に伴う柱穴の可能性がある。HP-9-15-17-19-20は周溝に伴う柱穴である。HP-11はT字状の溝に伴う柱穴である。HP-18は土坑である。坑底はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。覆土は埋め戻しである。周溝は壁際に沿って北側に3条、西側に1条巡る。北側の3条のうち、内側の2本は西側でつながっている。溝1と溝2はT字形の溝である。この溝1と溝2に向かって周溝が内側に向かって伸びており、何らかの内部施設または出入り口の可能性がある。また、溝3は南半が削平されて全形は不明であるが、U字形の溝である。溝1～3は周溝の一部が途切れたものの可能性もある。（佐藤）



**遺物出土状況** 3,331点出土した。石器類は、覆土1層と覆土2層いずれも同一個体のまとまりはなかった。縄文時代前期後半円筒下層b式から円筒下層d2式、さらに一部は中期円筒上層a式まで出土している。また円筒下層b式については磨滅が著しい破片ばかりである。床面から円筒下層d2式の最古段階が出土している。焼成粘土塊も出土する。

石器類はフレイク、礫の覆土出土が目立つ、次にスクレイパー、Uフレイク、北海道式石冠、扁平打製石器、台石、たたき石の覆土出土が目立つ。

掘り上げ土出土遺物には掘り上げ作業時の混乱のため、他住居掘り上げ土の遺物が入った袋が混入している可能性があった。調査区が付記されているものについては集計時に適正を心掛けた。縄文時代前期後半円筒下層式石器が目立つ。石器類ではフレイクと礫が多く、次にスクレイパー、扁平打製石器が目立つ。

**時期** M6盛土より新しい、遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層d2式の時期である。

(大泰司)

**H20** (図Ⅲ-1-32~34、-2-3~5、-3-5、図版9・56~58・124)

**位置・立地** 54-56-S・T区 標高57.0m付近の平坦面

**確認・調査** Sラインに設定した土層観察用のベルトで確認した。遺構が想定される位置に土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行なった。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がりが見られたので住居跡と判断した。遺物は遺構覆土出土のものを覆土で、床面出土のものは床面で掘り上げ位置を記録した。

**覆土** 土葺きの屋根土と考えられる黒褐色土が、壁の立ち上がり付近に厚く堆積している。中央付近では、M4盛土の再堆積土、V層の掘り上げ土と考えられる黄褐色土、M2盛土の再堆積土、Ⅲ層の流入土などが互層となる。

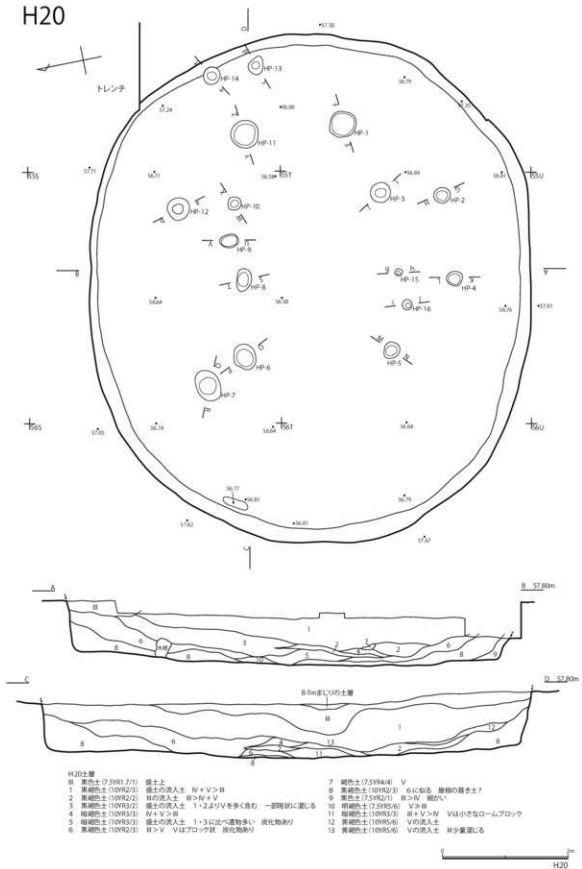
**構造** 掘り込みはM4盛土中と考えられ、V層を若干掘り込んで平坦な床面を構築している。壁は急に立ち上がる。平面形は円形である。

**付属遺構** 柱穴状のピットは14基確認した。径の大きさと深さから、HP-1・3・7・11は主柱穴と考えられるが、規則的な配列は見られない。東側の壁際で検出したHP-13・14は出入り口施設に関連する柱穴跡の可能性が高い。北側の壁際に周溝状の窪みを一か所検出した。

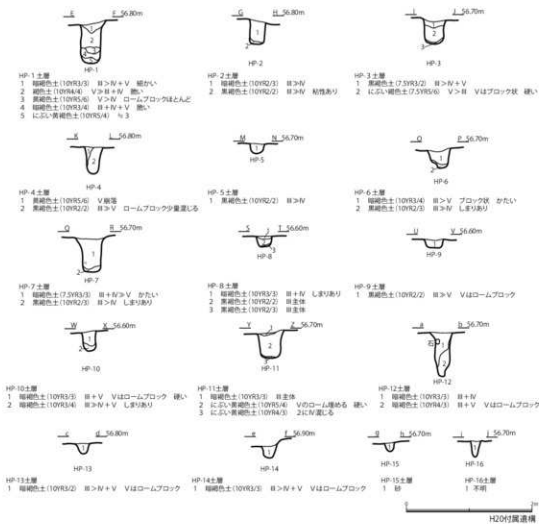
**遺物出土状況** 床面出土の遺物は、中央付近から北海道式石冠、たたき石、石皿などの礫石器類が出土している。(村田)

7,678点の遺物が出土した。石器類は縄文時代前期後半が主体だが、少量の早期後半の石器が混在する。焼成粘土塊も出土する。床面の点取りどうしは接合しなかった。復元土器1~4は住居廃絶後のくぼみの中央部から出土した。円筒下層b2式から円筒下層d1式にかけての時期であった。これらの遺物は床面よりやや上の遺物(床土と命名)と接合しなかった。これらは円筒下層b式主体である。H20は脇にあるSトレンチの点取り遺物とは接合しなかった。石器は覆土から礫、フレイクが多く出土し、次に覆土出土のスクレイパーの多さが際立つ。つまみ付きナイフ、Uフレイク、扁平打製石器、被熱礫・礫片の覆土出土が目立つ。住居廃絶後、石器が廃棄されている様子がうかがえる。石器についても同様なため、覆土から定型的な石器が多く出土するものとする。

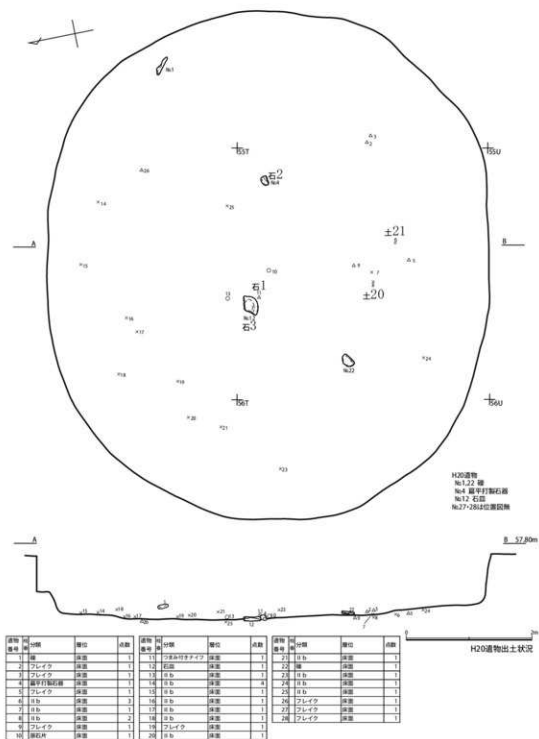
**時期** 出土遺物から、縄文時代前期後半、円筒下層c式土器頃の時期である。



図Ⅲ-1-32 H20平面図・土層断面図



図Ⅲ-1-33 H20付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-34 H20遺物出土状況図

**H21** (図Ⅲ-1-35~38、-2-6~12、-3-6、カラー図版5・6、図版10・58~63・124・125)

**位置・立地** 59-61-T・U区 標高58.0m付近の斜面。緩斜面から急斜面に移行した傾斜変換部分  
**確認・調査** Aトレンチ60T区を掘り下げたところM2盛土からV層主体のM3盛土に土層が移行した後その下から礫層を検出した。さらに掘り下げ、M2盛土と時期差のない土器が焼土(F69)とともにまとまって検出された。Aトレンチにおいて60T区を挟む61S・59U区ではM3の下からM2より古い土器がまとまっているM4盛土が検出されたのは異なる様相であった。穴への廃棄と判断し、穴の規模と掘り上げ土の落ち込みを思わせる土層堆積状況から堅穴住居H21への複数回の廃棄を想定した。

F69を伴う白色粘土層がすり鉢状に落ち込んでいる。遺構覆土について覆土上半部、下半部、覆土9層、床直のおおよそ4回にわけて取り上げた。覆土上半部はM2盛土形成時に窪みとしてあったH21痕跡に廃棄したものと考えられる。覆土下半部も同様であるが、グライ化したM3盛土をはさんで上半部よりは古い可能性があった。覆土9層はすり鉢を形成する土層であり、覆土下半部に対して若干の古い可能性があった。床直としたものは厳密には構築時の床面より上の土層からの出土遺物であり、そこが生活面ないしは住居廃絶時の床面である可能性がある。覆土下半部および覆土9層について遺構中央部についてはすり鉢の底であり、堆積が他の場所と比べて薄い。この場所については床直との高低差はほとんどない事から床面遺物と覆土への廃棄遺物が一部混在している可能性がある。

まずAトレンチの東側半分を掘り下げた。まず覆土上半部を掘り下げた後、Aトレンチに直行する位置に土層観察用の土手を残し、床面を検出した。遺物を取り上げた後メインセクションと直行する土手はらずし、西側も同様の手順で床面を検出した。住居の東側は傾斜の変換点よりすぐ下にあり、廃棄し易かったのか出土遺物量は多い。またAトレンチの土手より西側の覆土は、M3盛土の分布範囲が不明瞭であり、覆土中の遺物取り上げ時に覆土上半、下半分、覆土9層といった3段階にわけることは出来なかった。西側を掘り下げた段階でベンチを検出した。すると平面形が当初円形のプランを予想していたことに対して、南北方向に長軸を持つ楕円形となった。ベンチを持つ1軒の楕円形の住居か、2軒の円形をした住居か、覆土における遺物出土状況の濃淡も分かれており、両方の可能性はあったが、覆土土層断面に古い方の住居壁面は検出されなかった。また完掘後、支柱穴と考えられる太い柱痕跡はすべてベンチ内側の窪んだ部分にある事から、1軒の堅穴住居と判断した。

掘り込み面は、遺構壁際が崩れているため、土層からの識別もむずかしいが、周囲のM4盛土について基底部の土器が残っていたためM4形成の後に構築された住居である。

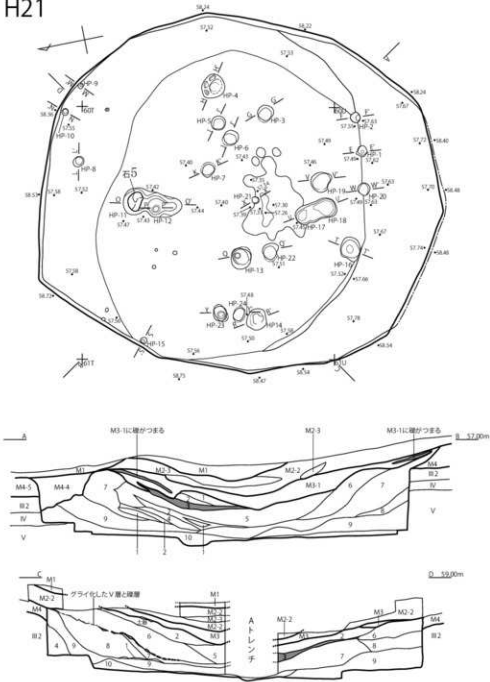
**覆土** 窪みに対する遺物廃棄を含むと考えられた土層には、土器がまとまって出土した以外に、亜円の礫の出土が目を引いた。同じ大きさでまとまっているものもあった。堅穴住居構築時にV層起源の礫を廃棄した可能性もある。また、覆土7・8層といったV層主体の土が、穴の縁辺より中央にまとまっている堆積状況は土葺屋根の崩落を思わせる。

**構造** 平面形は八角形に近い不整形な円形。低いベンチ構造を持ち、中央はさらにくぼむ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

**付属遺構** 楕円形をした住居平面形に対してベンチ部分は長軸側が幅広く、短軸側の幅がより狭く作られている。またベンチに囲まれた床面中央部分は浅く窪む。その平面形は不整形な形状で、取り囲むように砂ビットHP-21・22がある。

支柱穴の可能性のある柱穴が8か所ある。平面形に対して短軸を対称軸として、HP-3・4に対してHP-16・19・20が、HP-11に対してHP-13・14が対となる。HP-11はHP-12に連続し、大型の柱穴である。HP-20は比較的深いが、ベンチの段差に対して密接して掘り込まれる。同じくベンチ際にあるHP-1・2と等間隔に並ぶ事から、支柱穴以外の機能を持った柱である可能性もある。したがって4本一組の

H21



- H21土層
- |                               |  |
|-------------------------------|--|
| 1 黒褐色土 (10YR5/6) V主体土         | 6 暗褐色土 (10YR3/4) 黒主体土に (M+V)土が小~大粒径で10%混入      |
| 2 黒褐色土 (10YR2/2) 黒主体土         | 7 にぶみ黄褐色土 (10YR4/3) 黄土Sに小粒径で5%V土が混入            |
| 3 黄褐色土 (10YR5/5) 暗褐色土のV主体土    | 8 にぶみ黄褐色土 (10YR4/3) 黄土Sに粘土中量粒径50μmV土が混入        |
| 4 明黄褐色土 (10YR6/6) Vブロック状の落ち込み | 9 暗褐色土 (10YR3/4) 黒 (黄褐色土)主体 小~中粒径の黄褐色土10%混入    |
| 5 褐色土 (10YR4/6) V>H よく混在する    | 10 暗褐色土 (10YR3/4) 黒 (黄褐色土)主体 小~中粒径の黄褐色土10%以上混入 |



図Ⅲ-1-35 H21平面図・土層断面図

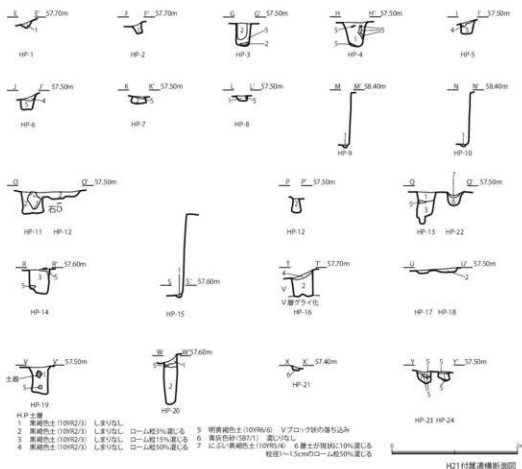


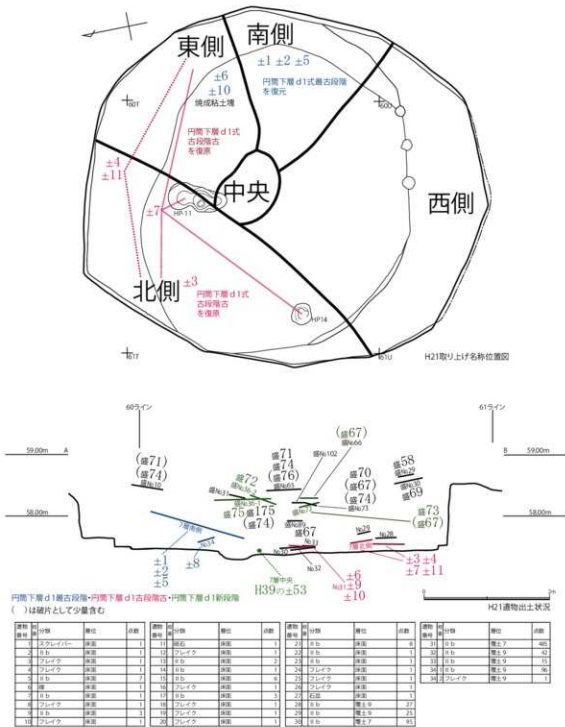
図3-1-36 H21付属遺構土層断面図

主柱穴が二時期分あるいはそれ以上の時期使用された、とも推測できる。だとすると、ロームで蓋がされたHP-16が古く、掘りかたと柱痕跡がはっきり分かれた土層断面を示すHP-3については新しい、そして位置的にHP-11が長期にわたって用いられたものであろう。

**遺物出土状況** 8703点の遺物が出土した。土器については、まとまった円筒下層c式(1・2・3)が出土するが、円筒下層d1式と比べると残存率は良好ではない。M4の遺物出土状況から、59ラインで円筒下層c式の破片がまとまって検出されている。M4に円筒下層c式が廃棄された時期あるいは直後に掘り込まれて、円筒下層d1式古段階古の頃に廃絶して廃棄場所になったと考える。焼成粘土塊も出土する。石器は覆土中から、フレイクと礫の出土が目立つ。次に、スクレイパー、つまみ付きナイフ、Uフレイク、Rフレイク、扁平打製石器、被熱礫の覆土出土が目立つ。住居廃絶後、土器が廃棄されている様子がうかがえる。石器についても同様のため、覆土から定型的な石器が多く出土するものとする。

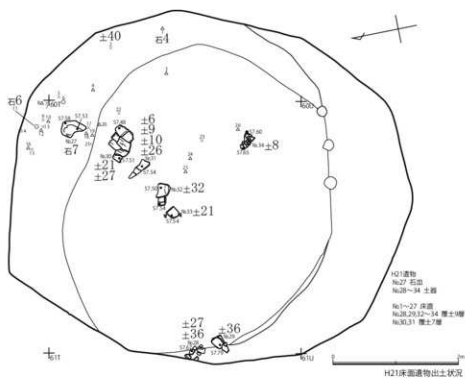
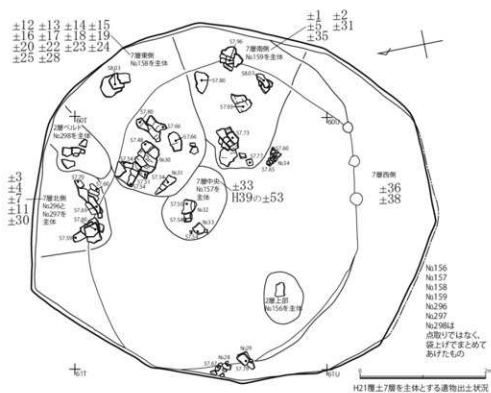
床面として取り上げた遺物については、覆土最下位遺物覆土9・10層の遺物を含むと考える。北側の主柱穴HP-11には人頭大の礫が詰め込まれていた。覆土調査中、目立った骨片を検出、洗浄したところ、海生哺乳類の焼骨片を1点検出した。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半円筒下層c式が廃棄された時期あるいは直後に掘り込まれて、円筒下層d1式古段階古の頃廃絶したと考える。(大森司)



図Ⅲ-1-37 H21点取り遺物出土状況垂直分布図





図Ⅲ-1-38 H21点取り遺物出土状況平面図(覆土7層・床面)

## H22 (図Ⅲ-1-39、-2-13、図版11・64)

**位置・立地** 58・59-U・V区 標高57.6m付近の緩斜面

**確認・調査** Aトレンチの南端、59U区を掘り下げた。M4盛土の下のⅢ2層さらに漸移層を下げて、V層上面にて、暗褐色土の入り込みを検出した。その平面形の縁は明瞭な線であった。大きさから堅穴住居の平面形の一部と判断して、Aトレンチの西側壁面を一部延長し、そしてそれに直行するように十文字の土層観察土手を残して、Ⅲ層および盛土が黒色化した土層を掘り下げて現れた褐色土のひろがりから、遺構の平面規模を把握し、その上で、覆土の掘り下げへと転じて、床面を検出した。

掘り込み面は、遺構壁際が崩れているため、土層からの識別もむずかしいが、周囲の盛土M4盛土について基底部の土器が残っていたことから、M4形成後に構築された住居である。

**覆土** 覆土から出土した土器のまともは、盛土M4盛土からの流入と考える。また、M2盛土が分布していない調査区において、覆土2層のようなV層主体の土が、穴の縁辺より中央にまとまっている堆積状況は土葺屋根の崩落を思わせる。

**構造** 平面形は不整な円形である。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

**付属遺構** 主柱穴の可能性のある柱穴が七か所ある。平面形に対して長軸を対称軸として、HP-2・3に対してHP-6・7が、HP-1に対してHP-4・5が対となる。二回以上の建て替えがあり、HP-1が二時期以上にわたって用いられた柱とも推測できるが、HP-5は脇にあるHP-4が浅く、HP-2・6についてもそれぞれ脇に位置するHP-3・7が小規模であるため主柱とその補助柱という見方も可能である。強いて覆土の土色から時期変遷を言うならば、HP-[1 (浅い方) ⇔ 2 ⇔ 6 ⇔ 5] の時期があり、次に覆土が黒色土主体のHP-[1 (深い方) ⇔ 3 ⇔ 7 ⇔ 5] か。HP-8は対称軸のほぼ中央、つまり遺構中央に位置する。

**遺物出土状況** 4,184点の遺物が出土した。覆土における遺物出土状況は前述の通りである。床面として取り上げた遺物だが、覆土遺物、のうち覆土最下位にあったものも含むと考える。北側の主柱穴HP-1には大型礫が4つ詰め込まれていた。

覆土下位から、円筒下層d1式古段階およびHP-2から円筒下層d1式が出土している。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半円筒下層d1式の頃と考える。 (大森司)

## H23 (図Ⅲ-1-40~42、-2-14・15、-3-6・7、図版12・64~66・124・125)

**位置・立地** 52・53-U・V区 調査区のはほぼ中央、矢不來川に向かって伸びる沢に面した段丘の平坦面、標高57.0m前後

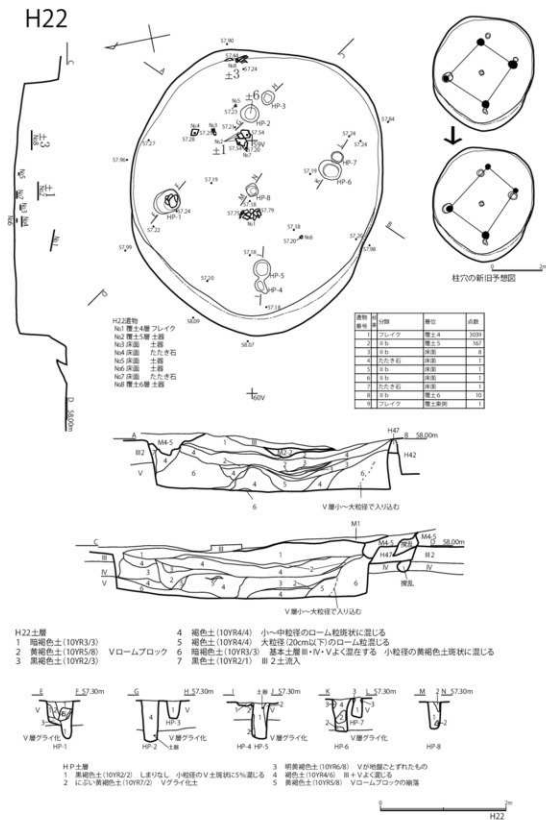
**確認・調査** 包含層調査により黒色土の落ち込みとして確認した。土層観察用のベルトを設定し掘り下げ、平坦な床面と急で明瞭な壁を検出し遺構と判断した。

**構造** 平面は角が丸い四角形に近い。床面に4本の主柱穴がある。床面中央では焼土を検出した。

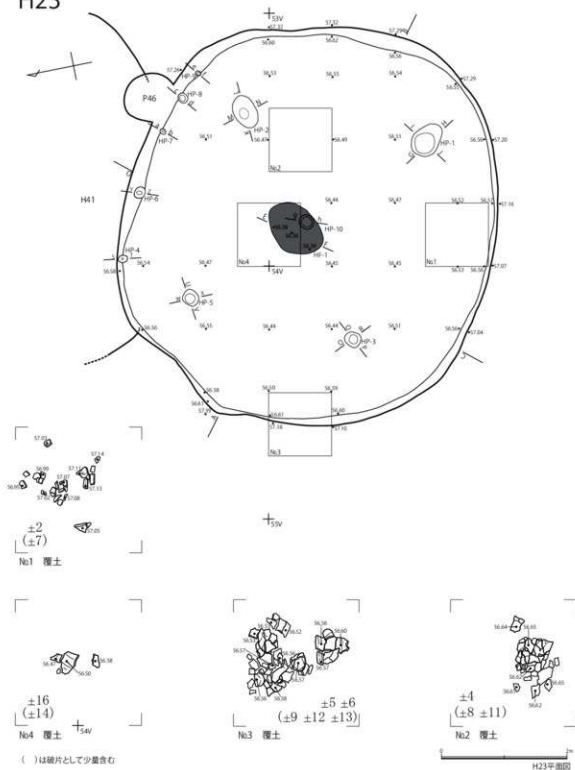
**覆土** 自然堆積によるものである。

**付属遺構** 中央に地床炉がある。中央部分が10cm程度窪む。炉の下からは更に柱穴状のビット (HP-10) を検出した。 (袖岡)

**遺物出土状況** 3,803点の遺物が出土した。土器については、覆土中からは、縄文時代前期後半、円筒土器下層d1式の土器二個体、一個体は円筒下層c式に近く、もう一個体は円筒下層d2式に近い。円筒下層d2式が一個体、縄文時代後期前葉が一個体出土している。焼成粘土塊も出土する。自然堆積に伴う、覆土中に点在していた遺物はH23の覆土出土土器として、まとめて取り上げている。付属遺構HP-2の覆土から円筒下層d1式土器が出土している。石器については、覆土中からフレイク、礫



H23

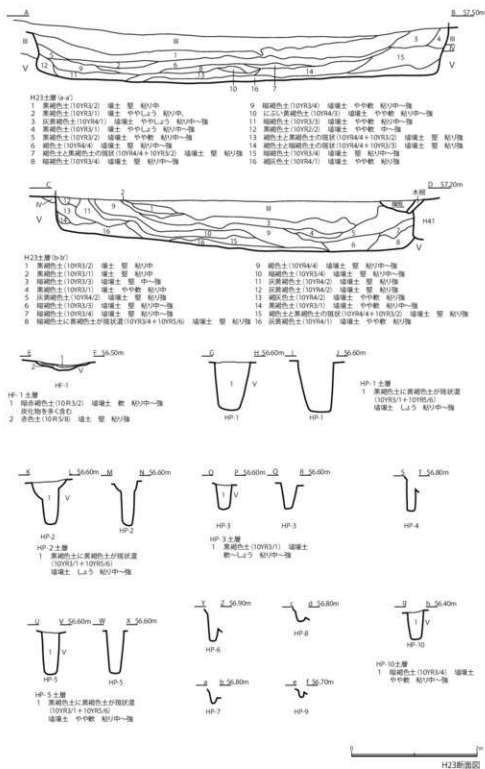


図Ⅲ-1-40 H23平面図・遺物出土状況図

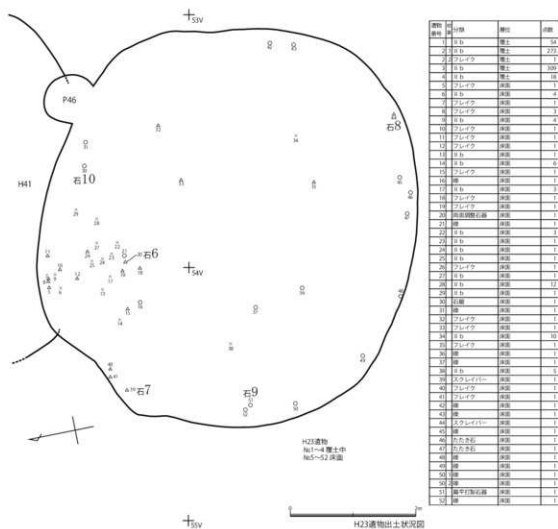
の出土が多い。次にスクレイパー、被熱礫の出土が目立つ。

時期 縄文時代前期後半、円筒下層c式から円筒下層d1式直前の時期の堅穴住居跡と判断する。

(大泰司)



図Ⅲ-1-41 H23土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-42 H23遺物出土状況図

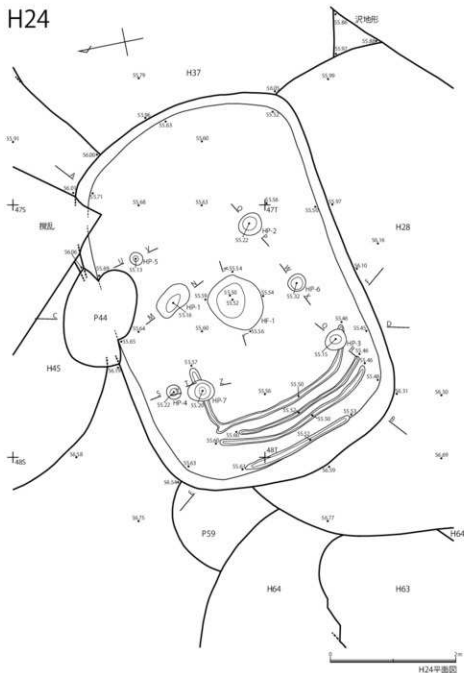
H24 (図Ⅲ-1-43-45、-2-16、-3-8、図版13・67・125)

位置・立地 46-48-S・T区 調査区北東側の緩斜面

確認・調査 Ⅲ層上面を精査した際にⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。西側の3層中位で炭化材を検出した。炭化材は3層中位で面的に広がり、上位のものは壁に直行するものが多く、中位から下位のものは平行するものが多い。太さは直径または幅で細いもの(3~4cm)、中間のもの(5~7cm)、太いもの(8~10cm)がある。3層には明瞭な焼土や焼土粒が見られず、他の覆土中にも見られない。これらのことから焼失住居とは考えず、3層は地面に近い屋根の葺土で、炭化材は葺土で覆われた屋根材と考える。土層の観察から、M5盛土とH28より新しく、P44より古い。

覆土 自然堆積である。西側の3層中位で炭化材を検出した。

構造 平面形は隅丸長方形である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。東側の壁面は斜面に流出したと考える。

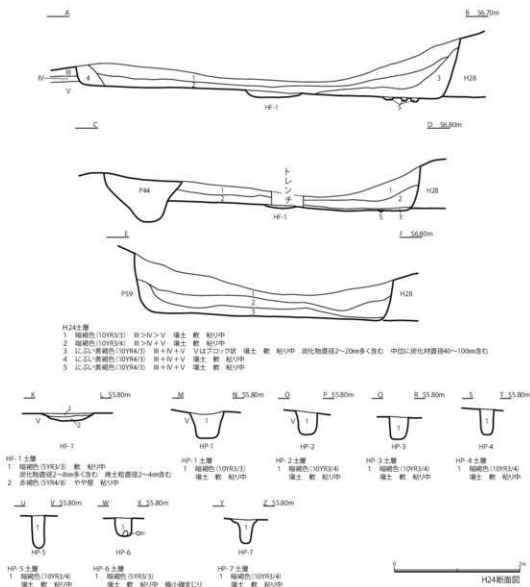


図Ⅲ-1-43 H24平面図

**付属遺構** HF-1は中央に位置する円形の浅い掘り込みのある地床である。HP-1～7は主柱穴で、HP-1～3・4または7・5・6の6本柱と考える。HP-3・7は柱穴を改変した可能性がある。周溝は西側の短軸側の壁際に沿って4条巡る。一番中央寄りのものはHP-3・4を越える位置まで伸びる。

(佐藤)

**遺物出土状況** 1,625点の遺物が出土した。土器については、覆土に円筒下層c式から円筒下層d式が入り込むのに加えて、Ⅲ群a類土器のうち、円筒上層d式やサイベ沢Ⅷ式が覆土に混ざり込む点で周辺の住居と異なっている。床面からサイベ沢Ⅷ式の口縁部が出土している。覆土には大安在B式土器も混在する。石器については、礫、フレイクの出土が多い。次にスクレイパーの覆土出土が目立つ。また、HF-1覆土1層を土壤水洗したところ、哺乳網の焼骨片を2点検出した。



図Ⅲ-1-44 H24土層断面図・付属遺構土層断面図

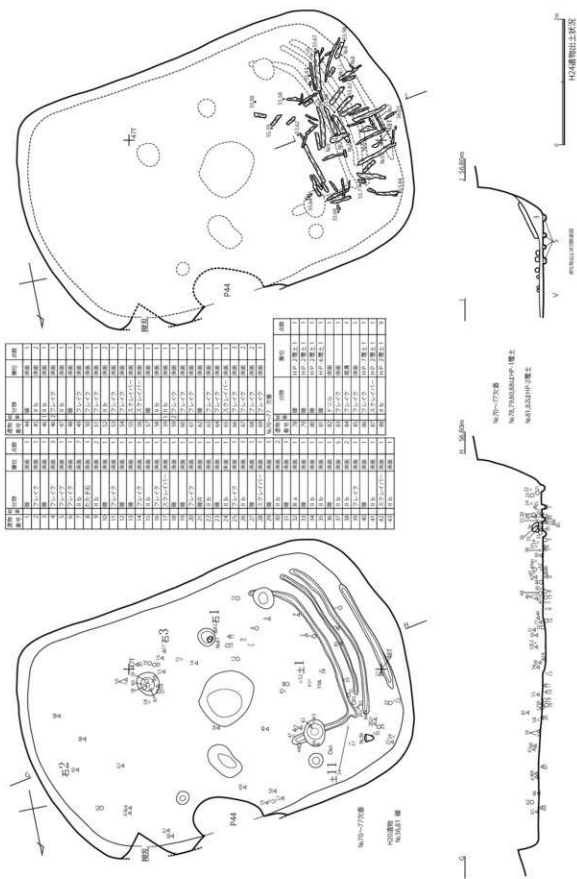
覆土3層中位出土木炭について樹種同定と放射性炭素年代測定を分析依頼した。その結果、樹種についてNo.7は同定不能、No.8とした半割らしき木片がコナラ属だった他はクリ材であった。

これら木炭の14C年代は、No.1が4500±30yrBP、No.2が4430±30yrBP、No.6が4510±30yrBPである。No.1とNo.6の値は誤差(±1σ)の範囲で重なり、近い年代を示すが、No.2はこれらよりも若干新しい値となっている。暦年較正年代(1σ)は、No.1が3336~3105cal BC、No.2が3263~2944cal BC、No.6が3338~3106cal BCの間に各々複数の範囲で示される。No.1とNo.6が縄文時代中期前葉頃、No.2が中期中葉頃に相当すると見られるとの見解を得た。詳細はV章に記載がある。

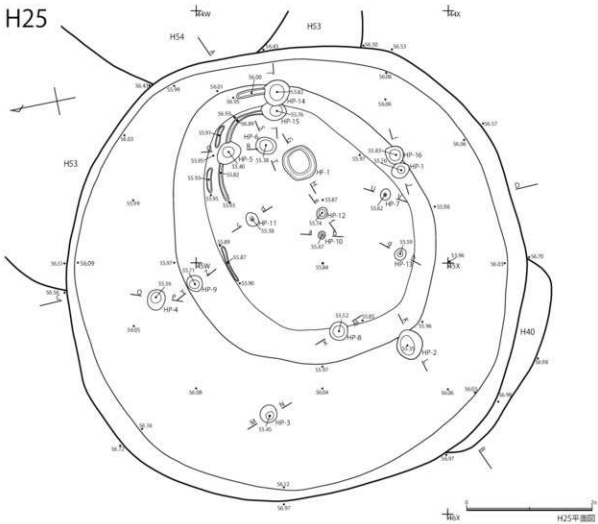
分析に提出した段階では、遺物の分析および覆土土層の整合性の検討がなされていない。当初は前期後半の住居跡で覆土4層下位として分析依頼を行った。編集時に訂正に努めた。

**時期** M5盛土より新しい、床面出土のⅢ群A類土器、および炭化材の分析結果から縄文時代中期前半である。円筒土層d式~サイベⅧ式あるいはその直前の時期か。(大泰司)





図一 1-45 H24遺物出土状況図・炭化物出土状況図



図Ⅲ-1-46 H25平面図

**H25** (図Ⅲ-1-46~48、-2-17、-3-8・9、カラー図版11、図版14・67・125・126)

**位置・立地** 44・45-V~X区 調査区中央の平坦面

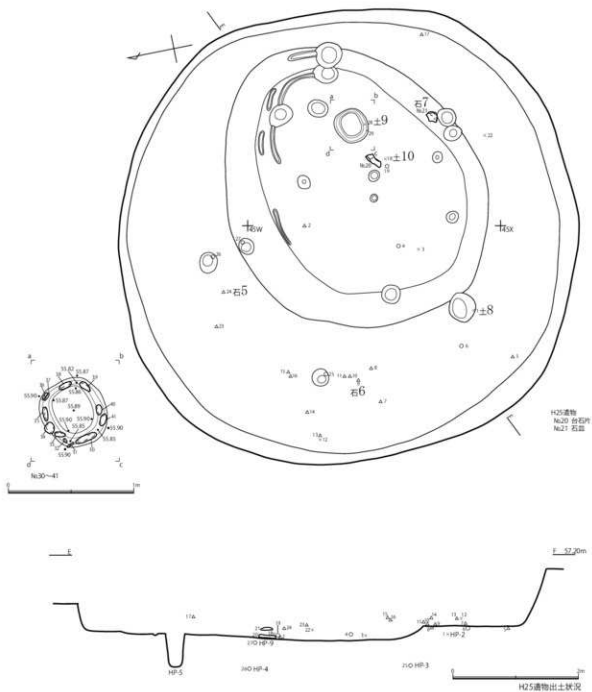
**確認・調査** Ⅲ層上面を精査した際に、ぶい黄褐色土の高まりとⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝、掘り上げ土を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。住居周辺の土層の観察と遺物出土状況から、M6盛土とH26・27より新しく、H19より古い。

床面の中央が大きく卵形に段状に低くなることから、住居跡が切り合っていた可能性もある。この点についてはH33の項目に記載する。

**覆土** 自然堆積である。

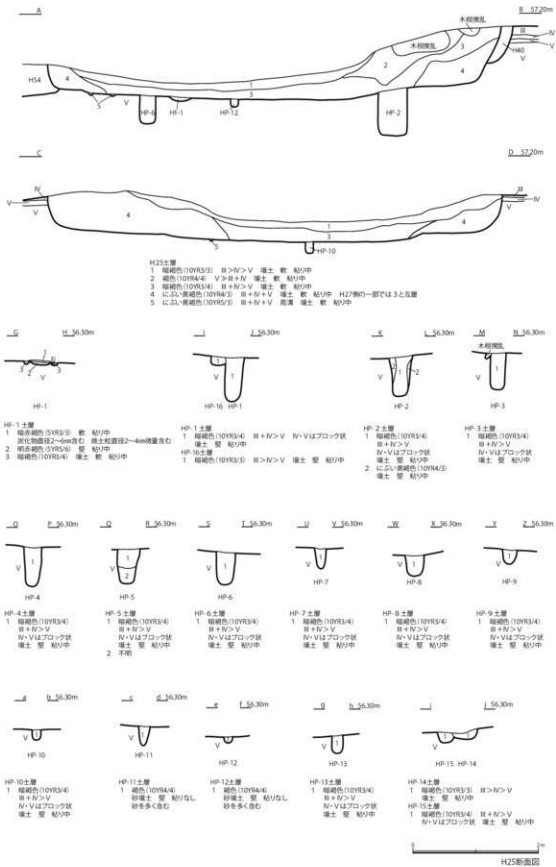
**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で中央が大きく卵形に段状に低くなる。壁はやや急角度に立ち上がる。周囲には掘り上げ土がリング状に分布する。

**付属遺構** HF-1は段状の低まりの東側に位置する方形の石囲炉である。石組は浅い溝を作り、そこに偏平な10cm程度の楕円形の円礎を、長軸をそろえて立つように並べて構築している。HP-1~6・9・16は主柱穴で、HP-1・16とHP-5・6、HP-4・9のまとまりがHP-2~4と組み合わせる5本柱と考える。HP-1・16とHP-5・6、HP-4・9は柱穴を改変した可能性がある。HP-1とHP-16は切り合い関係があり、



発掘 層別	区分	層位	点数	発掘 層別	区分	層位	点数	発掘 層別	区分	層位	点数	発掘 層別	区分	層位	点数
1	石5	HP-2	3	13	スライバー	保蓋	1	20	石6	保蓋	2	31	磁片類	HP-1層土3	1
2	フレイク	保蓋	1	15	石6	保蓋	21	25	フレイク	保蓋	1	30	磁片類	HP-1層土3	2
3	石6	保蓋	1	13	フレイク	保蓋	1	26	石6	保蓋	1	32	磁片類	HP-1層土3	3
4	粘土団	保蓋	1	14	フレイク	保蓋	1	29	HP-3	HP-3	1	33	磁片類	HP-1層土3	1
5	フレイク	保蓋	1	13	フレイク	保蓋	3	26	HP-4	HP-4	1	37	磁片類	HP-1層土3	1
6	HP-2	保蓋	1	18	フレイク	保蓋	1	27	HP-5	HP-5	1	38	磁片類	HP-1層土3	1
7	フレイク	保蓋	1	17	フレイク	保蓋	1	28	石6	HP-1層土3	1	39	磁片類	HP-1層土3	1
8	フレイク	保蓋	1	18	石6	保蓋	1	28	石6	HP-1層土3	1	40	磁片類	HP-1層土3	1
9	スライバー	保蓋	1	19	HP-2	保蓋	1	30	磁片類	HP-1層土3	1	41	磁片類	HP-1層土3	1
10	フレイク	保蓋	1	20	HP-2	保蓋	1	31	磁片類	HP-1層土3	1				
10	スライバー	保蓋	1	21	石5	保蓋	1	32	磁片類	HP-1層土3	1				

図Ⅲ-1-47 H25遺物出土状況図



図Ⅲ-1-48 H25土層断面図・付属遺構土層断面図

HP-1が新しい。HP-8は支柱穴と考える、やや浅いものである。HP-7・11は先端が尖る杭状であることから、内部施設に伴う柱穴の可能性がある。HP-14・15は周溝に伴う浅い柱穴である。切り合い関係があり、HP-14はHP-15より新しい。HP-10・12は小型で浅い柱穴である。周溝は断続的に壁際に沿って1条巡る。

**遺物出土状況** 床面から台石片(点取り№20)石皿(点取り№21)が出土した。(佐藤)

1,016点の遺物が出土した。土器については、覆土からは円筒下層b式から円筒下層d2式までが出土している。明らかに円筒下層c式段階で、磨滅してはいるがまとまった破片が目立つ。これは切りあっているH25より古いH40、53、54と違う点である。また覆土1層からは円筒下層d2式が一個体まとまって出土している。床から円筒下層d1式が出土している。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパーの出土が目立つ。石囲炉の石を埋め込む際の掘りかたから円筒下層d1式がⅢ群a類か判断に迷う小型の底部9が出土している。

掘り上げ土からは105点が出土する。縄文時代前期後半の土器が目立つ。(大泰司)

**時期** M6盛土より新しい、床面出土の土器から縄文時代前期後半、円筒下層d1式あるいはその直前の時期である。石囲炉を伴う住居に関してはH33で総括するものとする。場合によっては時期変更の可能性もある。掲載土器9もその根拠足りうる。(佐藤・大泰司)

**H26** (図Ⅲ-1-49-52、-2-18-20、-3-9・10、カラー図版11、図版15・68・69・126)

**位置・立地** 44・45-X-Z区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、にぶい褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位およびM6-2より上位と考える。周辺の土層の観察から、M6盛土より新しく、H19・25・27より古い。

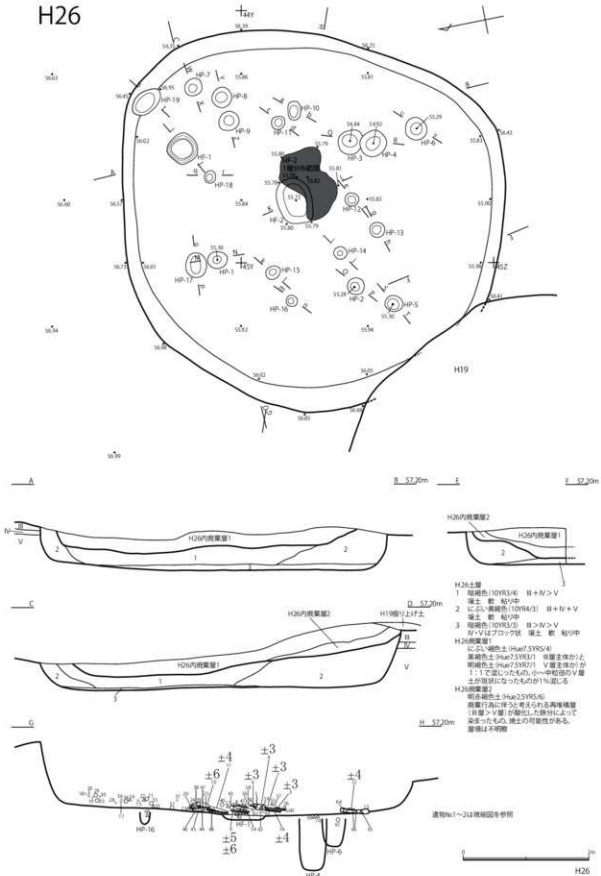
**覆土** 上部には廃棄層が確認できる。

**構造** 平面形は方形または卵形である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。

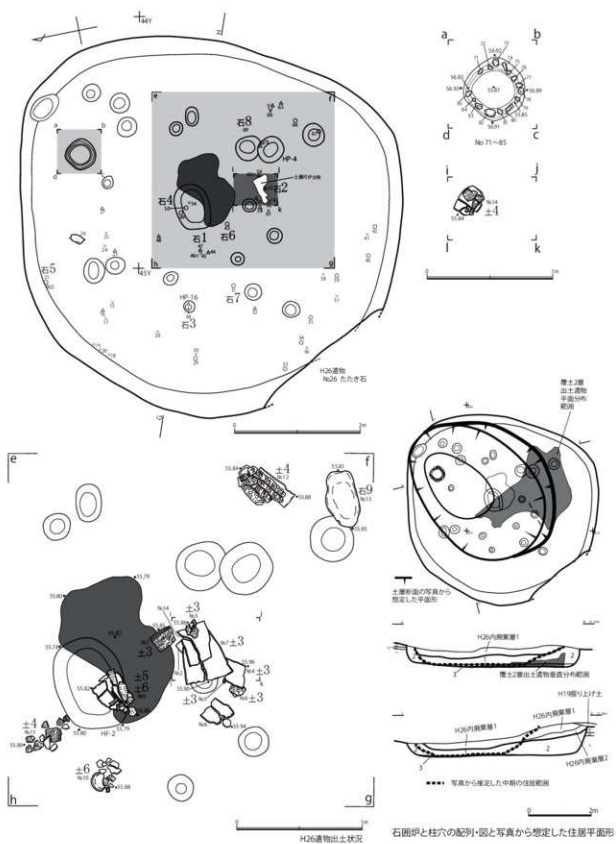
**付属遺構** HF-1は北東側の壁近くに位置する方形の石囲炉である。石組は浅い溝を作り、そこにやや厚みのある6cm程度の円礫を中心に並べて構築している。HF-2は中央に位置する隅丸長方形の浅い掘り込みをもつ地床炉である。HP-1~9は主柱穴で、HP-1・17とHP-2・5、HP-3・4・6、HP-7~9のそれぞれのまとまりで組み合う4本柱と考える。HP-1・17とHP-2・5、HP-3・4・6は柱穴を改変した可能性がある。HP-10~16・18は支柱穴である。HP-10・12~14は深いもの、HP-11・15・16・18は浅いものである。HP-14は先端が尖る杭状であることから、内部施設に伴うものの可能性もある。HP-19は北東側の壁際に位置する浅い楕円形の土坑である。出入り口に関連する土坑の可能性もある。(佐藤)

M6分布範囲を参考にして単純に置き換えて、「H26内廃棄層は概略この範囲」として示す(図Ⅱ-35)ものとした。ところが、H26の石囲炉が入れ子状に切り合う住居の可能性を検討(図Ⅱ-36)していくうちに、M6点取り遺物№1~3について他のH26点取り遺物と共に、「H26覆土2層」廃棄としてそれより下位の廃棄層として扱う事が適切と判断した。すでに台帳化された段階であり、44Y区M6出土遺物について、これらを二枚の廃棄層に振り分けることは現状では不可能であった。M6出土遺物と区別できたものはこの点取りされた二個体の土器と一点の石皿である。土器はH26出土遺物として掲載した。同時に図化した石皿はM6盛土関連遺物として石器掲載番号635として図化した。これは上の「H26内廃棄層」出土遺物と考察した時点で図版を作成したため、基準が確立していなかったためである。実際は石皿も「H26覆土2層」出土遺物である。

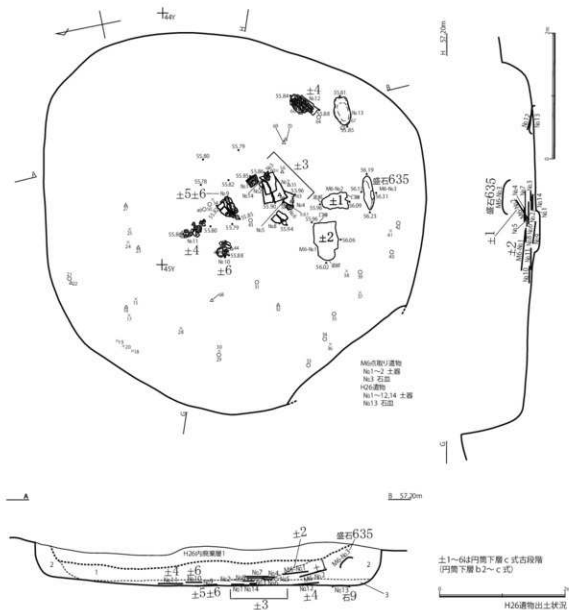
H26



図Ⅲ-1-49 H26平面図・土層断面図・遺物出土状況垂直分布図



図Ⅲ-1-50 H26遺物出土状況平面図



遺物番号	品名	単位	点数	遺物番号	品名	単位	点数	遺物番号	品名	単位	点数	遺物番号	品名	単位	点数
1	石	体	4	26	石	体	1	51	石	体	1	70	銅線	H26-1層土 1	1
2	石	体	18	27	フレイク	体	2	34	石	体	3	81	銅線	H26-1層土 1	1
3	石	体	28	28	石	体	1	35	滑石片(テラコッタ)	体	1	82	銅線	H26-1層土 1	1
4	石	体	8	29	体	体	1	52	フレイク	体	1	83	銅線	H26-1層土 1	1
5	石	体	1	30	石	体	1	53	石	体	10	84	銅線	H26-1層土 1	1
6	石	体	7	31	滑石片(テラコッタ)	体	1	58	フレイク	体	1	86	銅線	H26-1層土 1	1
7	石	体	62	32	フレイク	体	1	59	フレイク	体	1	87	銅線	H26-1層土 1	1
8	石	体	39	33	体	体	1	60	石	体	1				
9	石	体	237	34	体	体	1	61	石	体	3				
10	滑石片(テラコッタ)	体	1	35	体	体	1	62	石	体	1				
11	石	体	36	36	石	体	1	63	石	体	12				
12	石	体	61	37	石	体	1	64	体	体	1				
13	石	体	114	38	石	体	1	65	フレイク	体	1				
14	石	体	1	39	体	体	1	66	滑石片(テラコッタ)	体	1				
15	石	体	1	40	体	体	1	66	石	体	1				
16	石	体	101	41	石	体	1	67	体	体	1				
17	石	体	103	42	石	体	1	68	体	体	1				
18	フレイク	体	1	43	滑石片(テラコッタ)	体	1	69	石	体	1				
19	石	体	63	44	フレイク	体	1	70	滑石片(テラコッタ)	H26-1層土 1	1				
20	石	体	1	45	石	体	1	71	銅線	H26-1層土 1	1				
21	石	体	1	46	石	体	1	72	銅線	H26-1層土 1	1				
22	石	体	1	47	石	体	1	73	銅線	H26-1層土 1	1				
23	フレイク	体	1	48	石	体	1	74	銅線	H26-1層土 1	1				
24	石	体	1	49	石	体	1	75	銅線	H26-1層土 1	1				
25	石	体	5	50	石	体	1	76	銅線	H26-1層土 1	1				

図Ⅲ-1-51 H26遺物出土状況図



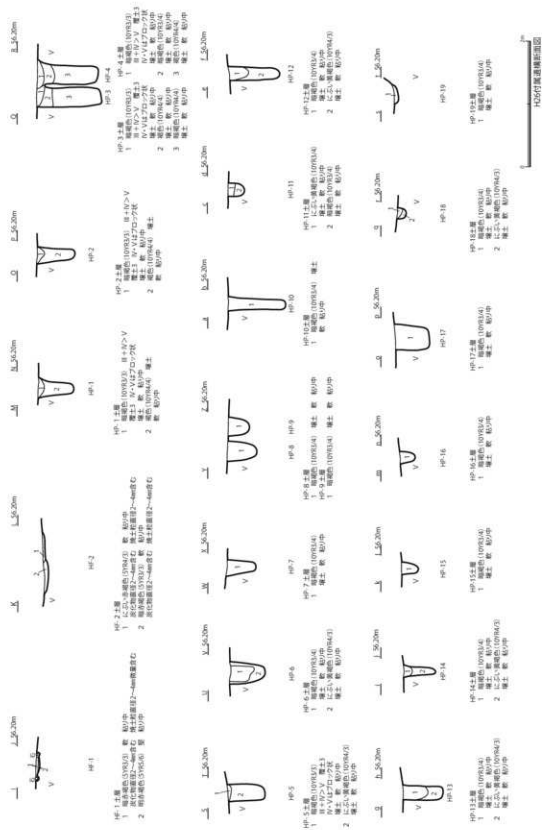
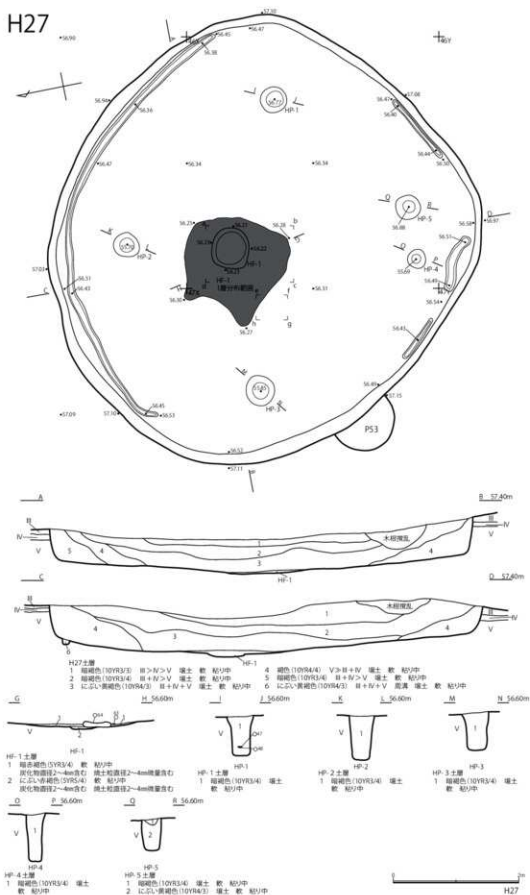
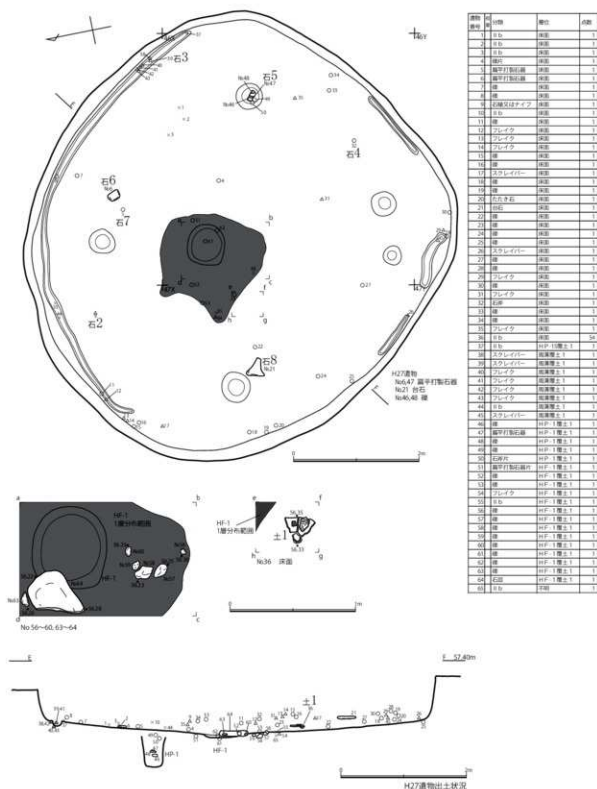


図 1-1-52 H26付瓦遺構土層断面図

H27



図Ⅲ-1-53 H27平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-54 H27遺物出土状況図

二次整理段階で、上部の廃棄層を二枚確認した。M6点取り遺物について、H26覆土出土遺物と同時期性が高いと判断、図面・写真等を検討しながら、二次整理段階で再検討したところ、H26がM6より新しいと結論づけた。そこで当初はH26の存在する44Y区にM6出土遺物は「H26内廃棄層出土遺物」として定義し直すものとしたが、その分布範囲、性格等については明瞭ではなかった。当初はH26点

取り遺物と同じく「H26廃棄層」出土遺物とした。

HP-19と石囲炉HF-1を長軸と想定した場合、小型の楕円形住居が想定できる。この点についてはH33の項目に記載する。図Ⅲ-1-50に想定図を示した。写真等の記録からH26の土層観察によって掘り込みを想定した。しかし、図Ⅲ-1-49や図Ⅱ-36で示した、「H26内廃棄層出土遺物」や「H19掘り上げ土」についてつじつまが合わなくなる。可能性として示すにとどめたい。図Ⅱ-36には柱穴から想定した平面形、図Ⅲ-1-50・図Ⅵ-1-1には写真の掘り込みから想定した平面形を示した。長軸方向および規模は類似している。詳細はH33の項、Ⅵ章1項に述べる。

**遺物出土状況** 849点の遺物が出土した。土器については、覆土の廃棄層から円筒下層c式の文様要素を持つ土器がまとまって出土している。胎土等からは円筒下層b2式に近い要素がある。円筒下層b2～c式とした段階の一群と考える。床出土とした復元土器も、円筒下層c式古段階ともいうべきまとまりである。沈線と隆帯によって口縁部区画を加飾する。M6-2点取り遺物も床面点取り遺物も覆土2層のものである。床面のものも検討の結果、厳密には床面から浮いていると判断した。石器については披熱礫とフレイクの出土が目立つ。(大泰司)

**時期** 覆土中廃棄層層の土器群から判断して、縄文時代前期後半、円筒下層b2～c式の時期あるいはその直前の時期である。石囲炉を伴う住居に関してはH33で総括するものとする。場合によっては時期変更の可能性もある。(佐藤・大泰司)

## H27 (図Ⅲ-1-53・54、-2-21、-3-10・11、カラー図版11、図版16・69・126・127)

**位置・立地** 45～47-W～Y区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** Ⅲ層上面を精査した際ににぶい黄褐色土の高まりとⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝、掘り上げ土を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。住居周辺の土層の観察と遺物出土状況から、M6盛土とH26より新しく、H19・25より古い。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は隅丸方形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。周囲には掘り上げ土がリング状に分布する。

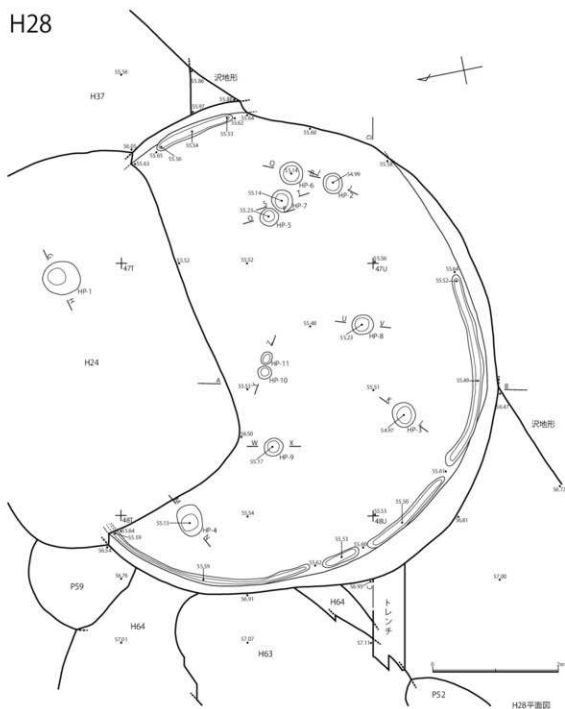
**付属遺構** HF-1は中央に位置する浅い掘り込みのある隅丸方形の地床炉である。HF-1の1層上には掘り込みから離れる位置に厚みのある小型の円礫がコの字状に置かれていたが、掘り込みは検出しなかった。礫を置いただけの石囲炉の可能性もある。HP-1～5は主柱穴で、HP-1～3とHP-4・5が組み合う4本柱と考える。HP-4・5は柱穴を改変した可能性がある。

周溝は北側では連続するが、南側では断続的に壁際に沿って巡る。東側と西側では大きく途切れる。**遺物出土状況** HF-1からは石皿(点取りNo64)と小型の礫が出土した。HF-1に近接して土器(1・点取りNo36)が1個体潰れた状態で出土した。(佐藤)

2,156点の遺物が出土した。土器については、覆土中からは円筒下層c式から円筒下層d1式のまとまりが出土している。ひどく磨滅している。円筒上層a式の破片が1点だが混在していた。床面から小型の円筒下層c式が一個体出土、先述の(1・点取りNo36)である。焼成粘土塊も出土する。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパーの出土が目立つ。石皿(点取りNo64)は「もろい凝灰岩製」で取り上げ時は形状をとどめていたが、取り上げ後に乾燥して粉々になってしまっていた。そのため図化できなかった。掘り上げ土からは60点が出土する。フレイクが目立つ。

**時期** M6盛土より新しい、床面出土の土器から縄文時代前期後半、円筒下層c式の時期。(大泰司)

# H28



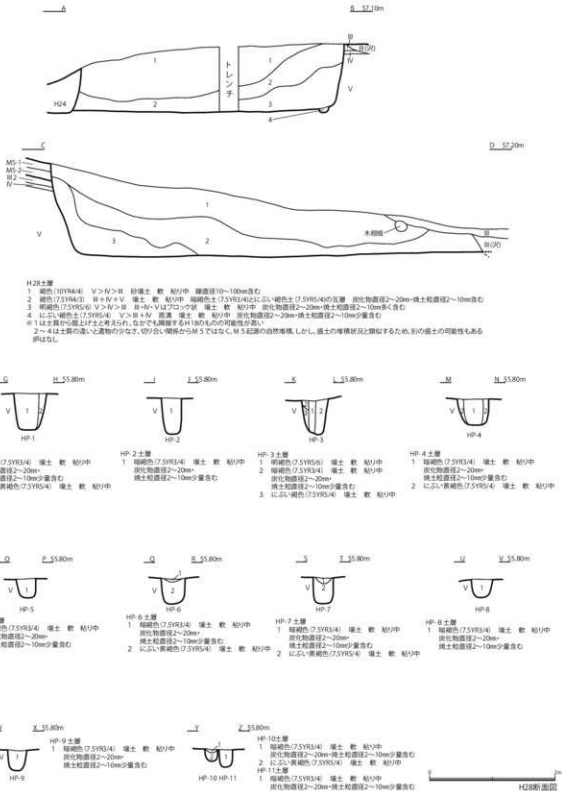
図Ⅲ-1-55 H28平面図

H28 (図Ⅲ-1-55-57、-2-22、-3-11-13、図版17・70・127・128)

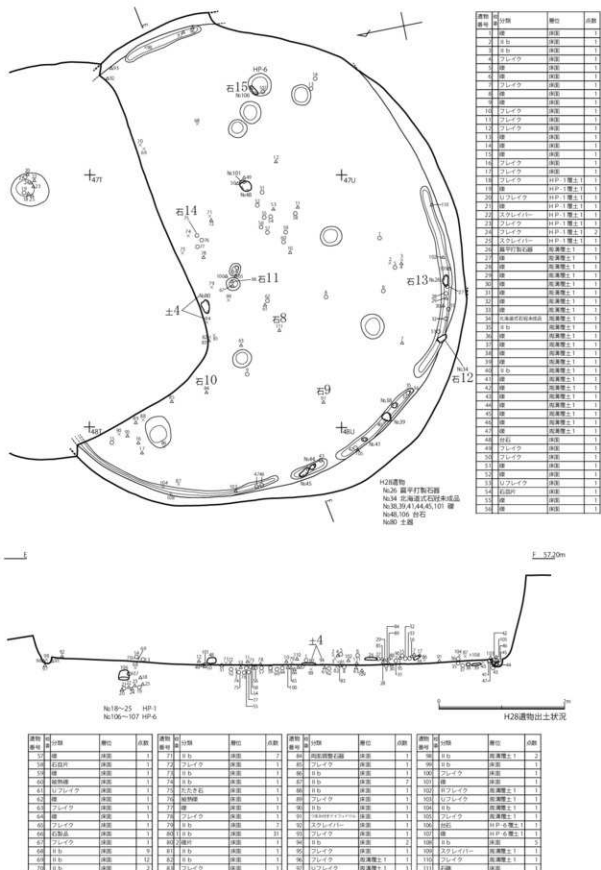
位置・立地 46-48-S-U区 調査区北東側の緩斜面

確認・調査 Ⅲ層上面を精査した際にⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約15cm掘り下げたところ、褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層の観察から、M5盛土より新しく、H24より古い。

覆土 自然堆積である。1層は土質と遺物の少なさから掘り上げ土と考えられ、H18由来の可能性



図Ⅲ-1-56 H28土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-57 H28遺物出土状況図

が高い。2～4層は土質の違いと遺物の少なさ、切り合い関係からM5盛土ではなく、M5盛土起源の自然堆積と考えた。しかし、盛土層の堆積と類似するため、M5盛土ではない別の再堆積層の可能性もある。

**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側の壁面は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HP-1～9は主柱穴で、HP-1～4の4本柱と考える。HP-1～4は掘方がある。HP-2と周辺のHP-5～7は柱穴を改変した可能性がある。HP-8・9は支柱穴の可能性がある。HP-10・11は内部施設に伴う柱穴の可能性がある。周溝は断続的に壁際に沿って1条巡る。(佐藤)

**遺物出土状況** 2,156点出土した。土器については、円筒下層d1式の破片が多数出土した。床からは円筒下層c式のまとまりが出土した。焼成粘土塊も出土する。石器は礫、フリイクの出土が目立つ。次にスクレイパーの出土が目立つ。

**時期** 遺構の検出状況および遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層c式の時期である。

(大泰司)

**H29** (図Ⅱ-29、Ⅲ-1-58～62、-2-23～31、-3-14・15、カラー図版4・7、図版18・19・71～79・128・129)

**位置・立地** 61～63-R～T区 標高58.6m付近の緩斜面

**確認・調査** Sライントレンチ62～63S区においてトレンチセクションに堅穴住居の土層断面を検出した。少なくとも2軒以上が切り合ってV層を掘り込んでいる状況であった。そのうち土層断面に現れた切り合い関係から、一番新しい堅穴住居を判断した。結果、SライントレンチとAトレンチの交差する地点の西側、傾斜変換点の平坦な側の縁に位置するものをH29として調査を開始した。SライントレンチのメインセクションからM2盛土はこの堅穴住居を埋めた土を主体として構成される事が明らかであった。また斜面の傾斜変換点際という住居の立地もM2盛土の成立に関連していると考えられた。

**覆土** トレンチ内で床面を検出後、62S区のSライントレンチ以南側を5cmずつ掘り下げた。この調査区について、M2盛土は上面と基底部そしてH29覆土上半部、下半部と、四回のまとまりを認識した。土層断面には、遺構の縁辺について土葺屋根部分が崩落したかのような流入層があり、覆土中央には「薄いV層土主体土層」と「Ⅲ層とV層土が混在する土層」によって縞状の土層断面が観察できた。遺物が多く出土する層と、この縞状構造の対応関係は確認できなかった。むしろ土の色構成とは無関係にも見受けられた。縞状構造の覆土で埋没後も窪みがありそこから盛土が主に斜面下側である、北側へと広がっていく状況がSライントレンチの土層に加えて、平面的にも確認できた。

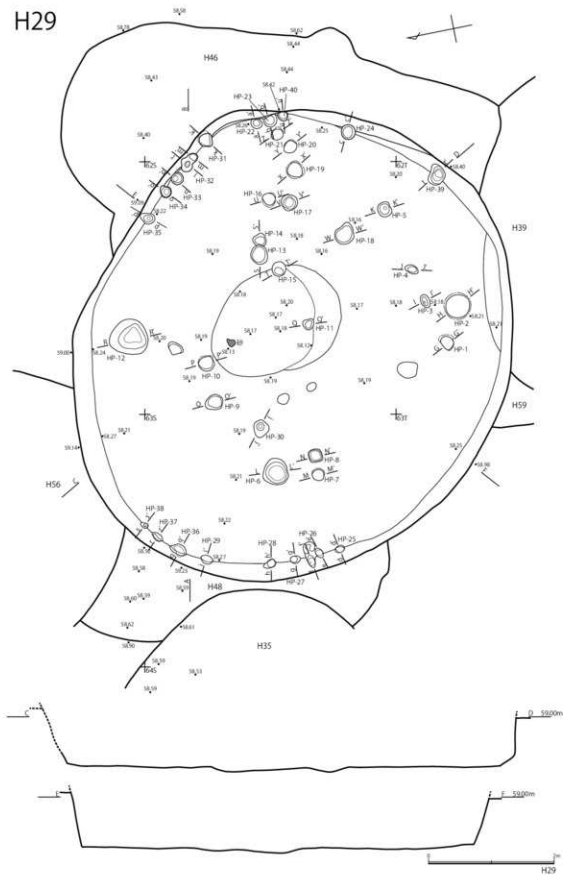
**構造** 平面形は不整な楕円形である。床面は平坦だが、中央部分がいびつに窪む。壁面は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 主柱穴は楕円形をした住居平面形に対して長軸を対称軸とすると、HP-3にはHP-6が対となる。HP-2に対してはHP-16・19・20・21の柱穴群が対となる。しかしHP-19・20・21は密接しており、なにか機能的な側面を持つ可能性がある。また深く掘り込まれて柱穴の可能性があるものにHP-18と39があり、これは対称軸上に位置する。また同規模の壁柱穴が遺構の東-北-西側に巡る。

また主柱穴に囲まれた床面中央部分は楕円形に浅く窪む。その平面形は不整な形状で、取り囲むように砂ピットHP-15と、砂が薄くこびりついていた場所(図Ⅲ-1-61右図)がある。この窪みからは大型の砥石と石皿が出土している。砂ピットに関連して、HP-22・23・40の覆土上部にはごくまば



H29



図Ⅲ-1-58 H29平面図・エレベーション図

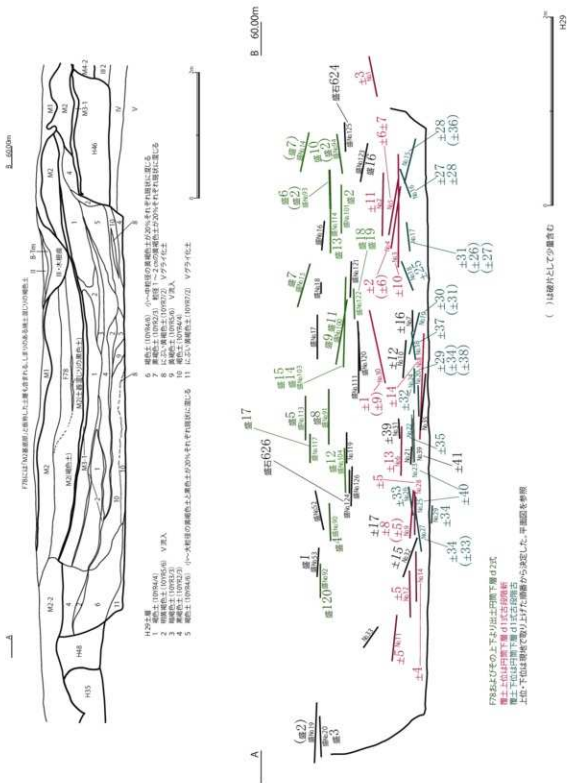


図 1-1-59 H29土層断面図・遺物出土状況垂直分布図

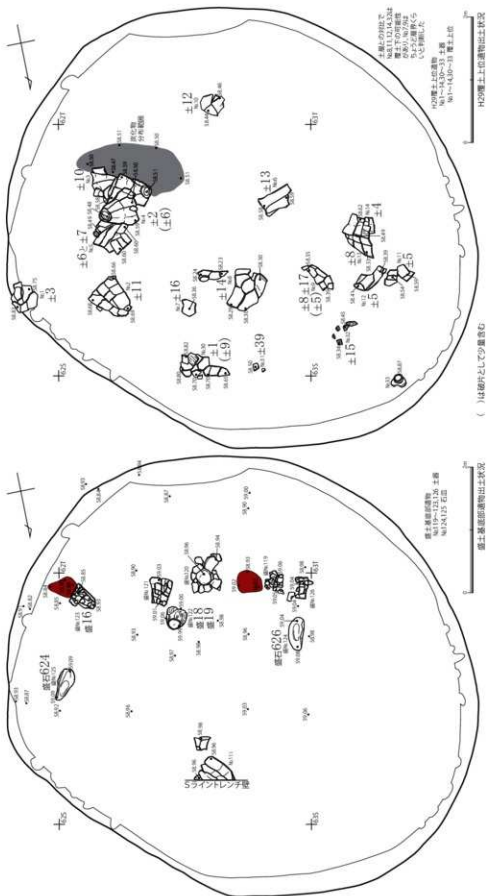
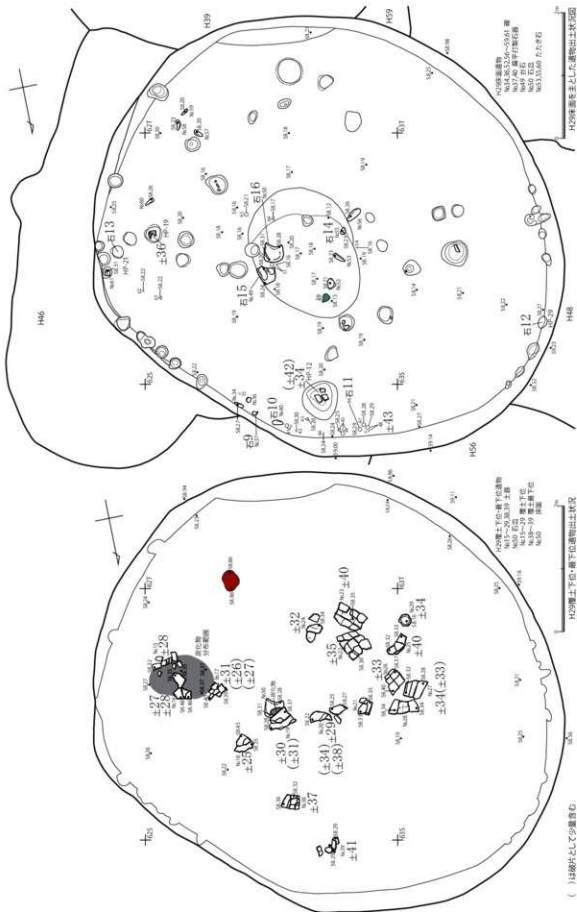
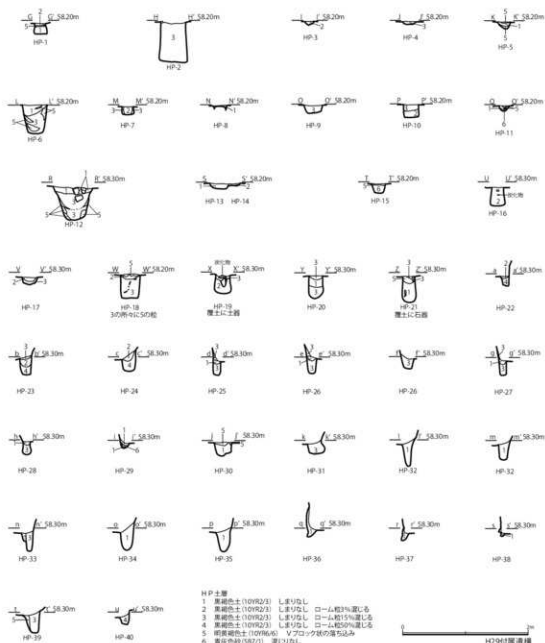


図 III-1-60 H29 遺物出土状況図 (M2 基底部・H29 覆土上位)



図Ⅲ-1-61 H29遺物出土状況図 (H29遺土下位・覆土最下位・床面)

遺構番号	形状	部材	点数	遺物	形状	部材	点数	遺物	形状	部材	点数	遺物	形状	部材	点数
1	円形	礎土上段	67	円形	礎土下段	300	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
2	円形	礎土上段	195	円形	礎土下段	155	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
3	円形	礎土上段	230	円形	礎土下段	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
4	円形	礎土上段	168	円形	礎土下段	20	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
5	円形	礎土上段	120	円形	礎土下段	153	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
6	円形	礎土上段	22	円形	礎土下段	2	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
7	円形	礎土上段	41	円形	礎土下段	26	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
8	円形	礎土上段	38	円形	礎土下段	27	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
9	円形	礎土上段	43	円形	礎土下段	7	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
10	円形	礎土上段	107	円形	礎土下段	60	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
11	円形	礎土上段	27	円形	礎土下段	18	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
12	円形	礎土上段	3	円形	礎土下段	37	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
13	円形	礎土上段	84	円形	礎土下段	3	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
14	円形	礎土上段	46	円形	礎土下段	17	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
15	円形	礎土上段	78	円形	礎土下段	3	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
16	円形	礎土上段	55	円形	礎土下段	30	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
17	円形	礎土上段	6	円形	礎土下段	17	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
18	円形	礎土上段	133	円形	礎土下段	7	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1
19	円形	礎土上段	34	円形	礎土下段	4	円形	礎土	1	円形	礎土	1	円形	礎土	1



図Ⅲ-1-62 H29付属遺構断面図

らに、HP-29覆土には明瞭に、砂ビット覆土に混在する砂が入り込んでいたが、これはそれぞれH46とH48に起因するものと考える。

主柱穴の可能性のある柱穴が七か所ある。平面形に対して長軸を対称軸として、HP-2・3に対してHP-6・7が、HP-1に対してHP-4・5が対となる。HP-8は対称軸のほぼ中央、つまり遺構中央に位置する。HP-5は脇にあるHP-4が浅いため、そしてHP-1はその位置から二時期以上にわたって用いられた可能性がある。またHP-2・6についてもそれぞれ脇に位置するHP-3・7の大きさが小さいため主柱とその補助柱などの関係があるかもしれない。

**遺物出土状況** 7,533点の遺物が出土した。覆土の、そして中央窪み部分の、それぞれ特徴的な遺物出土状況は前述の通りである。床面として取り上げた遺物については、覆土最下位にあったものが主体と考える。土器については、縄文時代前期後半の土器が主体である。焼成粘土塊も出土する。「円筒下層d1式 古段階」の廃棄が確認できた。覆土の上位と下位で、顕著ではないがこれについてさらに新旧関係があった。

「H29覆土上位」出土遺物の特徴は、「口縁部文様帯区画に刺突列。」そして「口縁部文様帯の縄線文様に、縄線押圧を交差させる文様構成の顕在化。」の2点である。「口縁部文様帯の縄線文様に、縄線押圧を交差させる文様構成の顕在化。」については、前段階「円筒下層c式の四単位の波状口縁部に伴う菱形文様の伝統を残す文様例」は「H29覆土下位」28、38のように存在する。ただし割合としては少なく、他の「円筒下層d1式古段階 古」一括土器群に復元例は無い。

「H29覆土上位」においての4や14のように曲線的で波状の要素をもつ鋸歯状のもの、11のように規則性に欠くものも出現する。これらの傾向は「円筒下層d1式新段階」の施文傾向につながる。最終的には覆土上位を「円筒下層d1式古段階 新」と覆土下位を「円筒下層d1式古段階 古」とした。

時期判断に関連する遺物として、36はH29のHP-19と覆土下位の点取りNa15が接合したものである。北側の主柱穴HP-12には大型の土器破片が詰め込まれていた(34と42が混在する)。H29はM3を切っているの、より新しい。H21はM3が流れ込んでいるので、より古い。H39の2層がM3相当と考えられる。またH39はH29に切られているため、H39とH21はH29より古い。H39が床面に近い円筒下層c式の時期とすると、H29は柱穴の時期をとって円筒下層d1式である。

石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパー、たたき石の出土が目立つ。覆土からはUフレイク、石核の出土が目立つ。

覆土調査中、目立った骨片を検出、洗浄したところ、硬骨魚網の部位不明焼骨片が数点、海生哺乳動物部位不明骨片が複数点、検出された。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層d1式と考える。(大泰司)

### H30 (図Ⅲ-1-63・64、-2-32、-3-16、図版20・80・129)

**位置・立地** 37・38-U・V区 調査区北東側の尾根

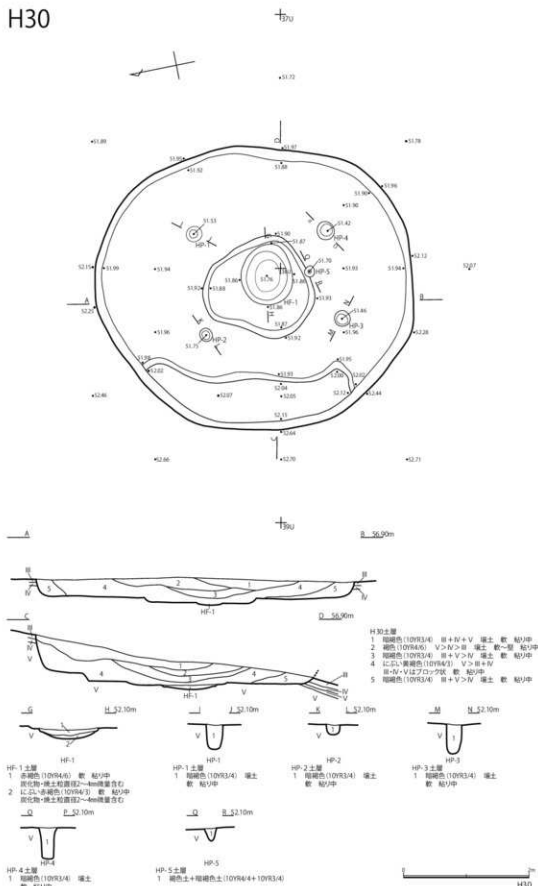
**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、ベンチ状構造を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。

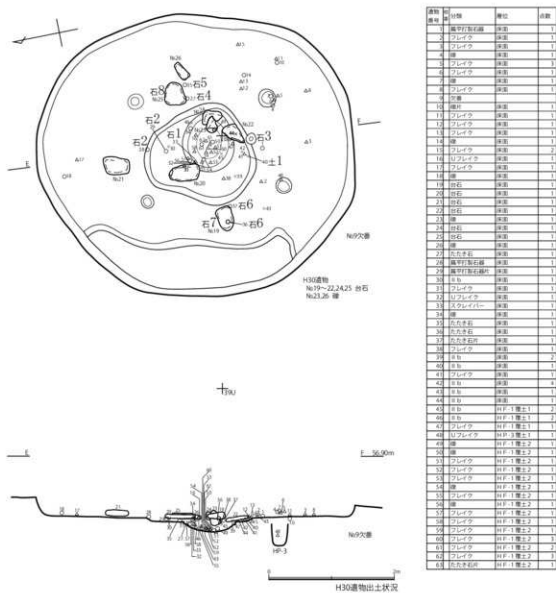
**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、炉跡周辺は段状に低くなる。壁は急角度に立ち上がる。東側の壁面の上部は斜面に流出したと考える。ベンチ状構造は西側に位置し、V層を掘り残して構築している。

**付属遺構** HP-1は中央に位置する段状の掘り込みがある楕円形の地床炉である。HP-1~4は主柱穴

H30





図Ⅲ-1-64 H30遺物出土状況図

で、4本柱と考える。HP-2は他の主柱穴に比べて浅いものである。HP-5は先端が尖る杭状の浅いものである。内部施設に伴う柱穴の可能性はある。

**遺物出土状況** HP-1周辺と床面から大型の礫(点取りNa19~25)がまとまって出土した。床面から大型の扁平な礫がまとまって出土する状況はH52・67の出土状況と類似する。(佐藤)

482点の遺物が出土した。土器は覆土、床面いずれも磨滅した円筒下層b式が流入する。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。

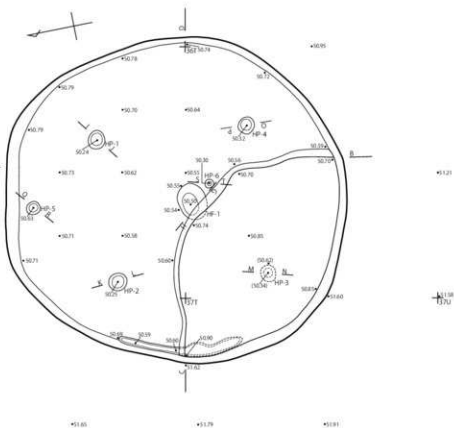
**時期** 遺物の出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期。(大泰司)



H31

±95.85

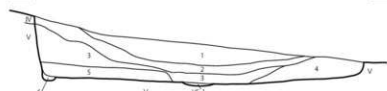
±91.17  
B.75



A B 51.90m



C D 51.90m



- H31土層
- 1 凝結色(10YR3/4) Ⅱ+Ⅲ<Ⅴ 壤土 軟弱中
  - 2 凝結色(10YR3/3) Ⅱ>Ⅲ<Ⅴ 壤土 軟弱中
  - 3 凝結色(10YR4/4) Ⅴ>Ⅲ+Ⅴ 壤土 軟弱中
  - 4 紅土・赤凝結色(10YR4/3) Ⅱ+Ⅲ+Ⅴ Ⅲ+Ⅲ+Ⅴはブロック状 壤土 軟弱中
  - 5 凝結色(10YR4/6) Ⅴ>Ⅲ+Ⅴ 礫中 壤土 軟弱中
  - 6 紅土・赤凝結色(10YR4/3) Ⅱ+Ⅲ+Ⅴ 高液 壤土 軟弱中

G H 30.90m



- HP-1土層
- 1 赤凝結色(5YR4/6) 軟弱中  
炭化物及び焼土和直径2~4mm以内  
土層に石灰質片径2mm少量含む

I J 50.90m



- HP-1土層
- 1 凝結色(10YR3/4) 壤土 軟弱中

K L 30.90m



- HP-2土層
- 1 紅土・赤凝結色(10YR4/3) 壤土 軟弱中
  - 2 凝結色(10YR4/6) 壤土 軟弱中

M N 50.90m



- HP-3土層
- 1 凝結色(10YR3/4) 壤土 軟弱中

O P 50.90m



- HP-4土層
- 1 凝結色(10YR3/4) 壤土 軟弱中

Q R 30.90m



- HP-5土層
- 1 凝結色(10YR3/3) 壤土 軟弱中
  - 2 凝結色(10YR4/4) 壤土 軟弱中

S T 50.90m

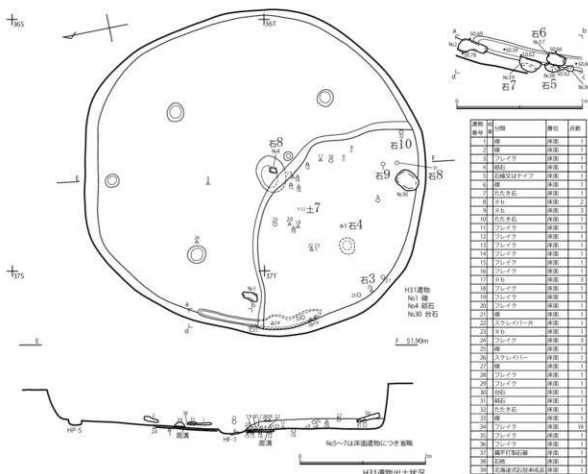


- HP-6土層
- 1 紅土・赤凝結色(10YR4/3) 壤土 軟弱中
  - 2 凝結色(10YR4/4) 壤土 軟弱中



H31

図Ⅲ-1-65 H31平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-66 H31遺物出土状況図

H31 (図Ⅲ-1-65・66、-2-32、-3-17・18、図版21・80・129・130)

位置・立地 35~37・S・T区 調査区北東側の尾根

確認・調査 Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、ベンチ状構造、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。HF-1とHP-4、周溝の一部はベンチ状構造の貼床の下から検出したことから、住居跡の改築が行われた可能性がある。

覆土 自然堆積である。

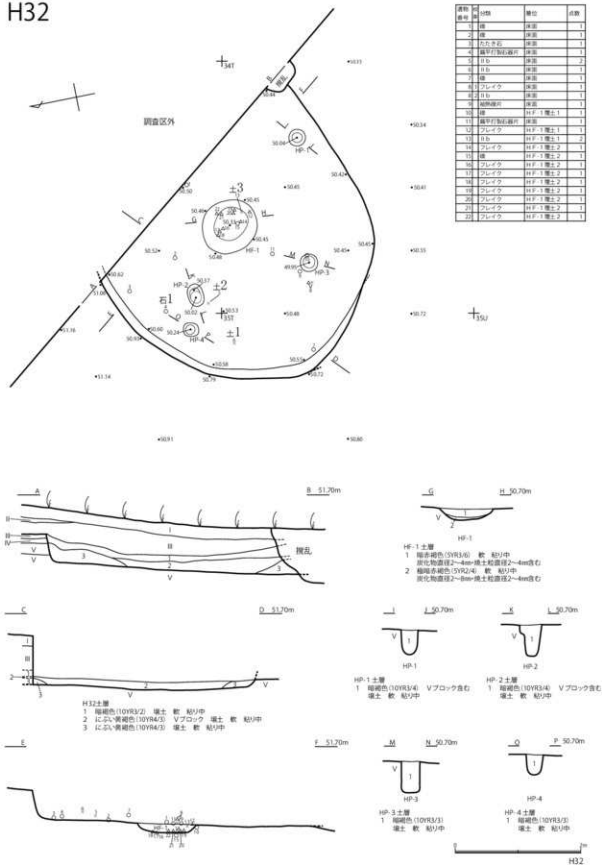
構造 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。南東側の壁面は斜面上に流出したと考える。

付属遺構 HF-1は掘り込みのある円形の地床炉である。HP-1~4は主柱穴で、4本柱と考える。ベンチ状構造は床面にV層を中心とする土を厚さ約15cmに貼って平坦に構築している。周溝は西側の壁際に沿って1条巡る。

遺物出土状況 ベンチ状構造の床面から大型の台石(点取りNo30)が出土した。周溝からまとまって礫石器及び礫が出土した。(佐藤)

544点の遺物が出土した。土器はⅢ群a類、円筒上層d式とⅡ群b類、円筒下層b式から円筒下層d2式までが出土した。円筒下層d1式は一個体の半分ほどが、磨滅しているがまとまっていた。床面

H32



図三-1-67 H32平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

からは磨滅した円筒下層b式のみが出土した。まともにはない。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパー、たたき石の出土が目立つ。覆土からはUフレイクの出土が目立つ。台石（点取りNo30）はもうい凝灰岩製で図化できなかった。

**時期** 土器遺物の出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期。（大泰司）

**H32** (図Ⅲ-1-67、-2-32、-3-18、図版22・80・130)

**位置・立地** 34・35-S・T区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。範囲は調査区外に広がる。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** HP-1~4は主柱穴で、HP-1とHP-2・4、HP-3、他に調査区外に想定する1本が組み合う4本柱と考える。HP-2・4は柱穴を改変した可能性がある。HF-1覆土1層を土壤水洗したところ、炭化物の中からタニソバ果実1点、子囊菌の炭化子囊2点が検出された。

**遺物出土状況** HF-1の1層からは小礫・礫片が多く出土した。（佐藤）

25点の遺物が出土した。土器は床および付属遺構から円筒下層b式の破片。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物の出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期。（大泰司）

**H33** (図Ⅲ-1-68・69、-2-32、-3-19、図版23・80・130)

**位置・立地** 42・43-U・V区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層上面を精査中にⅢ層の落ち込みを確認した。さらにⅢ層を約10cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH49との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層中位と考える。土層の観察から、H49より新しい。

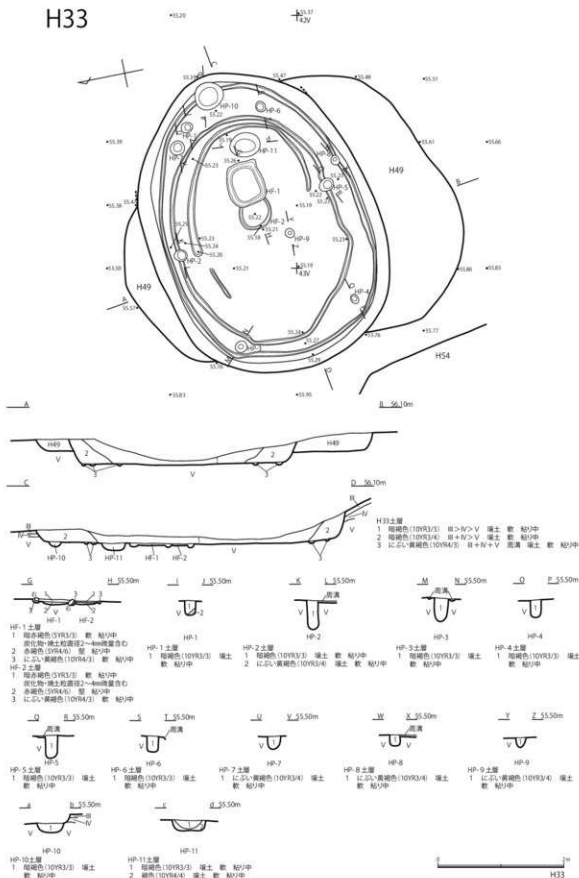
**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は卵形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側の壁面の上部は斜面に流出したと考える。

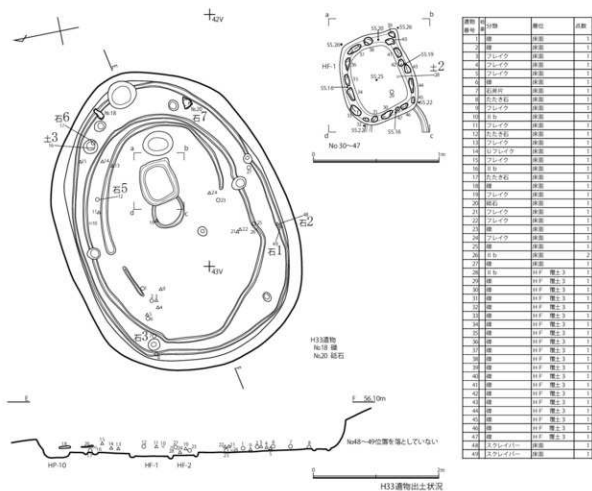
**付属遺構** HF-1は中央からやや北東寄りに位置する隅丸長方形の石囲炉である。石組は浅い溝を作り、そこに扁平な5~10cm程度の楕円形の円礫を、長軸をそろえて並べて構築している。円形のものから作り替えられている。HP-1~7は主柱穴で、HP-1・7とHP-2~6が組み合う6本柱と考える。HP-1・7は柱穴を改変した可能性がある。HP-9は先端が尖る杭状のもので、HF-1に近接することからHF-1に伴う柱穴の可能性がある。HP-8は浅く小さいもので周溝に伴う柱穴である。HP-10は浅い土坑で、先端ビットである（遺物の時期を確認する）。HP-11は浅い土坑である。周溝は壁際に沿って全周するものが2条、その内側に東側の半分を中心に途切れるものが1条巡る。（佐藤）

**遺物出土状況** 235点の遺物が出土した。覆土、床およびHF-1から円筒下層b式で、同一個体のまともが無い破片が出土している。円筒下層b式~円筒下層c式にかけての時期。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。掘り上げ土からは45点が出土する。礫が目立つ。土器は縄文時代前期後半のものである。（大泰司）

# H33



図Ⅲ-1-68 H33平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-69 H33遺物出土状況図

**時期** 遺物の出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期。

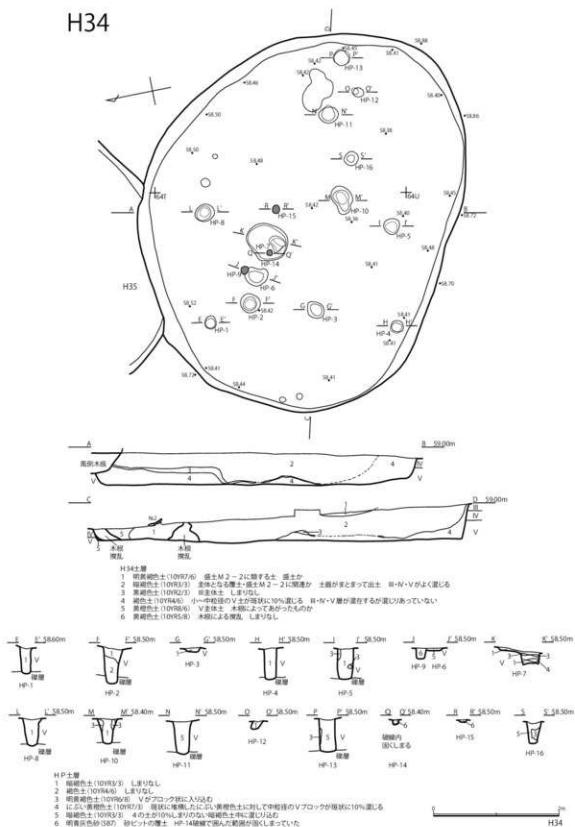
石囲炉を持つ住居は他にも検出されている。H25、H26、H27である。H27については、石の配置が不整で、石組といえなくもないという状況で、かつ平面形が他の3軒と共通せず、周辺の前期の堅穴住居と類似するため、ここでは取り上げない。

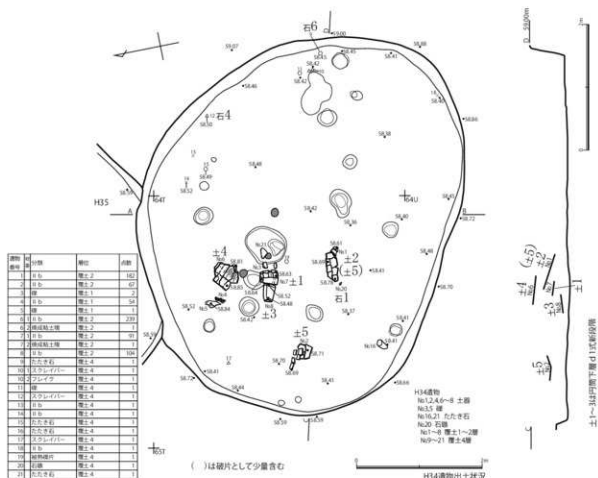
H25はその内部施設、H26は残存する付属遺構、H33はその掘り込まれた形状から、類する規模の、卵型ないしは楕円形をした平面形を想定できる。掘り込みの根拠が弱いH26について、これはまとまった土器廃棄がみられる廃棄層を持つ住居であるが、まとまった遺物の分布が石囲炉周辺に無い。H25については調査者が指摘している通り、またH26は複雑な土層のため現場で認知できなかった可能性がある。この3軒は立地も似ている。長軸、あるいは想定できる長軸の方向もほぼ同じである。図Ⅵ-1-1に立地等を示した。

卵型に近い楕円形の平面形とその長軸上に石囲炉を持つ形状からは、縄文時代中期後半Ⅲ群b3類の住居を思わせる。(2006 館野遺跡 北埋調報 237)。ただしいずれの住居に関しても、周辺の出土遺物および遺物の出土状況からは縄文時代前期後半の住居の可能性が調査者から指摘されている。

(佐藤・大泰司)

# H34





図Ⅲ-1-71 H34遺物出土状況図

H34 (図Ⅲ-1-70・71、-2-33、-3-20、図版24・80・81・131)

位置・立地 63・64-S~U区 標高58.8m付近の緩斜面

確認・調査 63・64-S~U区において、楕円形の暗褐色土入り込みを検出した。土層断面観察用の土手を残して、掘り下げたところ、ところどころ木根によって破壊されていたが、明瞭な床面と壁面を確認した事から竪穴住居跡と判断した。H35より新しい。

覆土 覆土1・2層はM2盛土との連続性があり、そこから出土した遺物1~8についてもM2の遺物の可能性がある。覆土の西半分について木根による攪乱が著しい。M2盛土よりは古い住居である。M4盛土はこの住居周辺には分布していない。

構造 平面形は不整な楕円形である。床面はおおよそ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

付属遺構 遺構平面形である楕円形の短軸を30度左回りに回転させると、おおよそ支柱穴の対称軸となる。HP-8に対してHP-2、HP-11に対してHP-5、対称軸上にHP-10が位置する。またHP-13に対してHP-4があるが、HP-18・11・16・5・4はいずれも柱穴を思わせる形状をしており、かつ一直線上に並ぶ。ほかに柱穴の可能性のあるものとしてはHP-1があり、位置的にはHP-2の補助的な役割が想定される。また支柱穴に囲まれた床面中央部分は楕円形に浅く窪む。その平面形は不整な形状で、取り囲むように砂が薄くこびりついていた場所(図Ⅲ-1-70・71アミカケ部分)がある。この窪みからはたたき石が出土している。

柱穴に囲まれ、かつ対称軸上に不整な円形をしたHP-7がある。この土坑には縞状の堆積をしめす



穴がさらに掘られておりV層土と混じりのある土が互層を成している。またHP-7の内部および周辺には砂ピットHP-9・14・15がある。

**遺物出土状況** 1,751点の遺物が出土した。土器は覆土1・2層には盛土起源の土器がそれぞれ個体ごとにまとまっていたが、1層と2層でわかれている状況は確認できなかった。床面として取り上げた遺物については、覆土の遺物で、覆土最下位にあったものが混在すると考える。覆土から円筒下層b式からc式にかけて出土。覆土上部の2層に円筒下層d1式新段階を廃棄。焼成粘土塊も出土する。石器は覆土から礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパー、扁平打製石器の出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半円筒下層下c式以降、円筒下層d1式新段階以前の時期。  
(大森司)

### H35 (図Ⅲ-1-72・73、-2-34、-3-20・21、図版25・82・131)

**位置・立地** 63・64-R~T区 標高58.8m付近の緩斜面

**確認・調査** Sライトトレンチ62~63S区においてトレンチセクションに堅穴住居の土層断面を検出した。少なくとも2軒以上が切り合ってV層を掘り込んでいる状況であった。そのうち土層断面に現れた切り合いH29を調査終了後、63・64-R~T区を掘り下げたところ、いびつな円形の褐色土入り込みを検出した。土層断面観察用の土手を残して、掘り下げたところ、ところどころ木根によって破壊されていたが、明瞭な床面と壁面を確認したことから堅穴住居跡と判断した。南側の端はH34によって掘り込まれ壊されていた。東端はH29に壊されているもうひとつの住居を掘り込んでいた。HP-16とした付属遺構はこの住居の壁柱穴に準ずる溝の可能性が高い。M2盛土よりは古い住居である。M4盛土はこの住居周辺には分布していない。

**覆土** M2盛土がかぶっていた。その下に褐色土である覆土1・2層が堆積している。盛土より古い。覆土の北東部分については木根による攪乱が著しい。

**構造** 平面形は、不整な円形で五角形に近い。床面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 遺構平面形である円形の長軸を称軸として主柱穴が分布する。HP-11・14に対してHP-7・8、HP-21に対してHP-4・6がある。主柱穴を4本ひと組と想定するならば建て替えの可能性があるものの、覆土からは引き抜き、埋め戻しの明瞭な痕跡はない。対称軸上にHP-3・9・12・13が並ぶ。またHP-9の脇に位置するHP-10も明瞭な形状をしており、なにか付属施設の構造を示している可能性がある。HP-12・13は長軸中央にある直径40cmほどの窪み中に並んで位置し、砂ピットである。

**遺物出土状況** 1,105点の遺物が出土した。床面として取り上げた遺物については、覆土最下位にあったものが主体と考える。潰れた状況で検出した土器についても同様である。土器については、円筒下層c式が床面から二個体分まとまって出土している(1と2、点取り№6)。石器はフレイクの出土が目立つ。

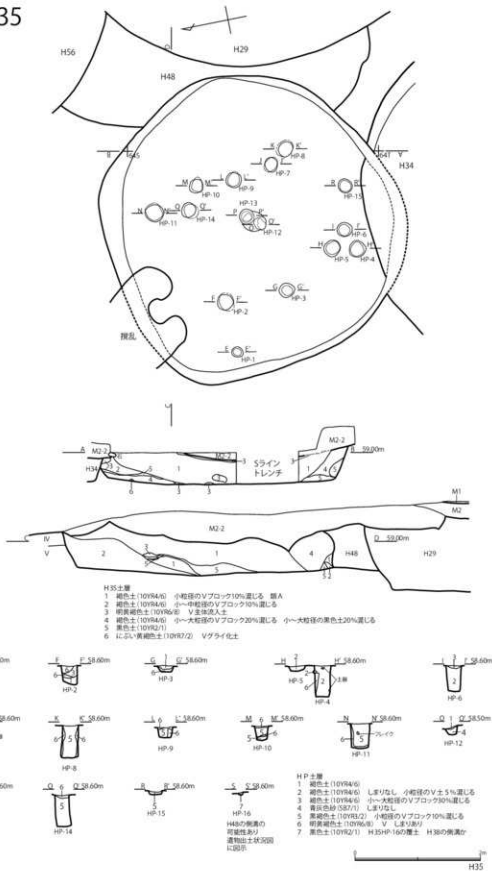
**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層c式の時期。  
(大森司)

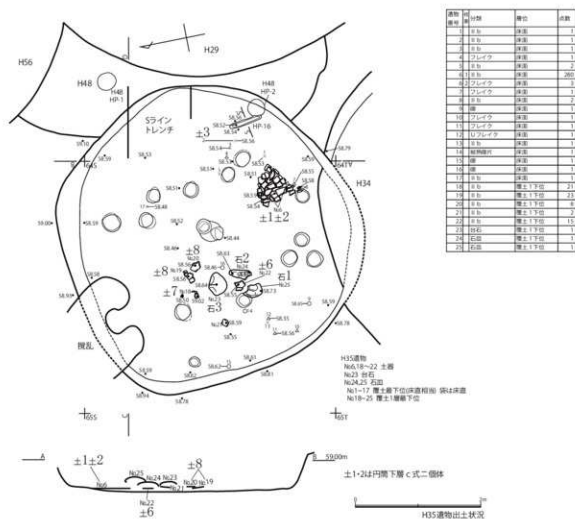
### H36 (図Ⅲ-1-74・75、-2-35・36、-3-21、図版26・82・84・131・132)

**位置・立地** 57・58-T・U区 標高57.4m付近の緩斜面

**確認・調査** 58-T・U区のM4盛土調査中、明黄褐~暗褐色土の入り込みを検出した。平面形はいびつな半円で、57-T・U区に連続している可能性が高かった。調査の展開上、57-T・U区側は着手できなかったためまず58ライン以西を調査した。明瞭な床面と壁面を検出し、規模と柱穴、砂ピットといった付属遺構から、堅穴住居跡と判断し、その後58ライン以東の調査も行った。床面中央、長軸中央

H35





図Ⅲ-1-73 H35遺物出土状況図

のやや西よりは窪んでいる。そして窪みの西よりに砂ピットが分布している。床面の北側から西側にかけて壁際には溝が巡る。

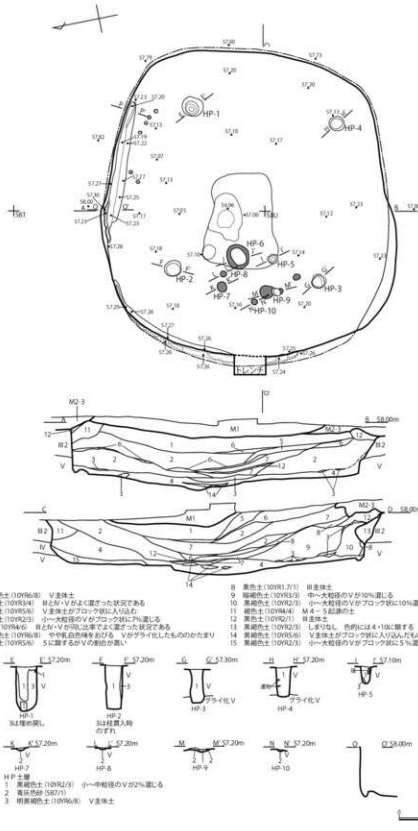
**覆土** 住居の縁には、M4盛土が一旦掘りあがったM2-3盛土が入り込んでいた。また遺構中央の窪み部分にはM2-3が黒色化したM1層が入り込んでいた。床面に近い部分には覆土4・15層のような黒褐色土、そしてへりから中央にむけてすり鉢状に覆土2・9層といった褐色土が堆積している。そしてすり鉢を埋めるようにして覆土1・6・7層といったV層土を主体とする覆土が埋めている。中央の窪み部に落ち込んでいる覆土7層には砂ピットに混じりがちな青灰色砂が混在しているが、床面よりは10cmほど高い部分から下への分布である。中央窪みの東側に砂ピットはないが、大型の礫が分布している。M4盛土を掘り込んで構築した住居である。

**構造** 平面形は不整な円形で四角形に近い。床面はおおむね平坦で、中央がいびつにくぼむ。壁は急角度に立ち上がる。

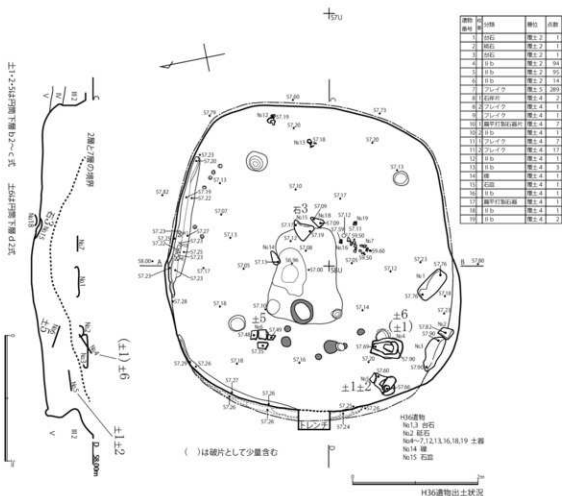
**付属遺構** 長軸を対称軸として主柱穴が四か所ある。HP-1にはHP-4が対応する。HP-2にはHP-3が対応する。HP-6~10は砂ピットである。HP-3の中央側のわきにも薄く砂ピットと同質の砂が貼り付いている(図Ⅲ-1-74・75にアミカケで表示)。床面中央の窪みについては、長軸上に位置するHP-6を挟んで両側にHP-5と浅い窪みが存在する。壁際の溝については、C字に配された溝の丁度真

H36

75.0



図Ⅲ-1-74 H36平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図



図Ⅲ-1-75 H36遺物出土状況図

中で溝痕が不明瞭となる。また、東側については連続して並べられた板の痕跡らしき単位が確認できたが、北側は不明瞭であった。北側は溝の床面側、中央側が明瞭に盛り上がる。

**遺物出土状況** 4,120点の遺物が出土した。覆土上半部から大型の土器破片がまとまり、剥片の集中を検出した。これらの土器石器等は廃絶後の窪みへ直接廃棄した可能性があるが、M4盛土掘り上げ後の流入である、M2-3層がさらに流入した可能性もある。床面として取り上げた遺物については、覆土最下位にあったものが主体と考える。

潰れた状況で検出した土器についても同様である。屋根葺土の流入と思われる覆土2層から円筒下層b2~c式が出土し、三個体復元できた。円筒下層d2式の肩部より下のみ復元できた。円筒下層b1式から下層d2式が破片レベルで混在する。覆土下位である覆土4層から円筒下層c式の底部が出土。焼成粘土塊も出土する。

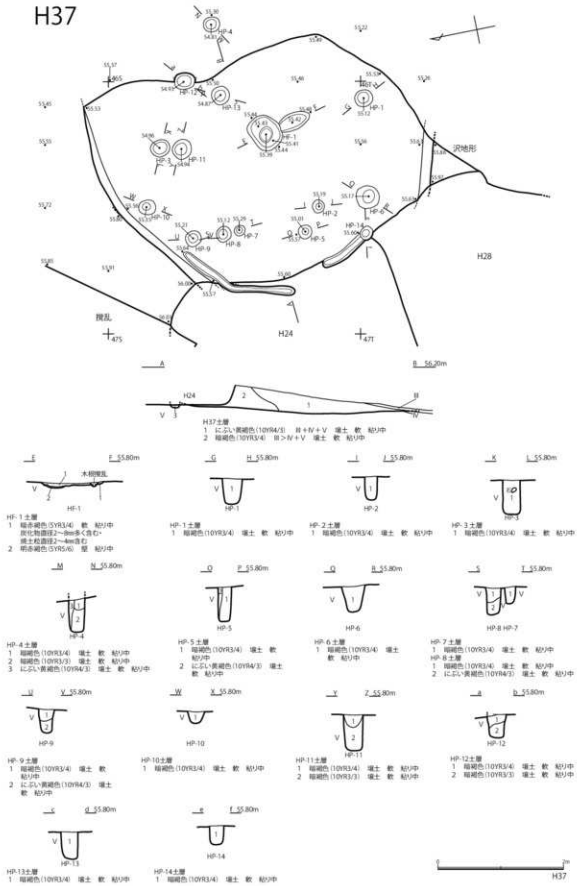
石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次に被熱礫、スクレイパー、Uフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b2~c式段階ないしはその直前の時期。

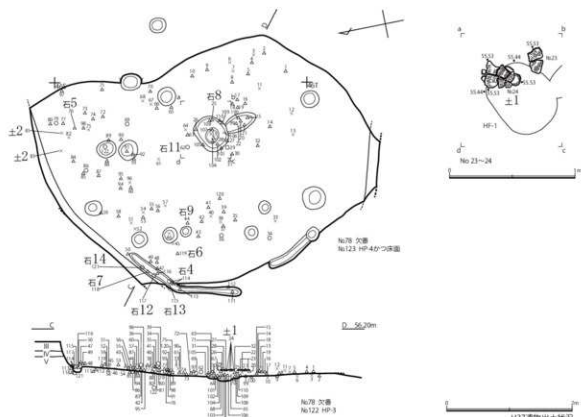
(大森司)

H37 (図Ⅲ-1-76・77、-2-37、-3-21・22、図版27・84・132)

**位置・立地** 45~47-R~T区 調査区北東側の緩斜面



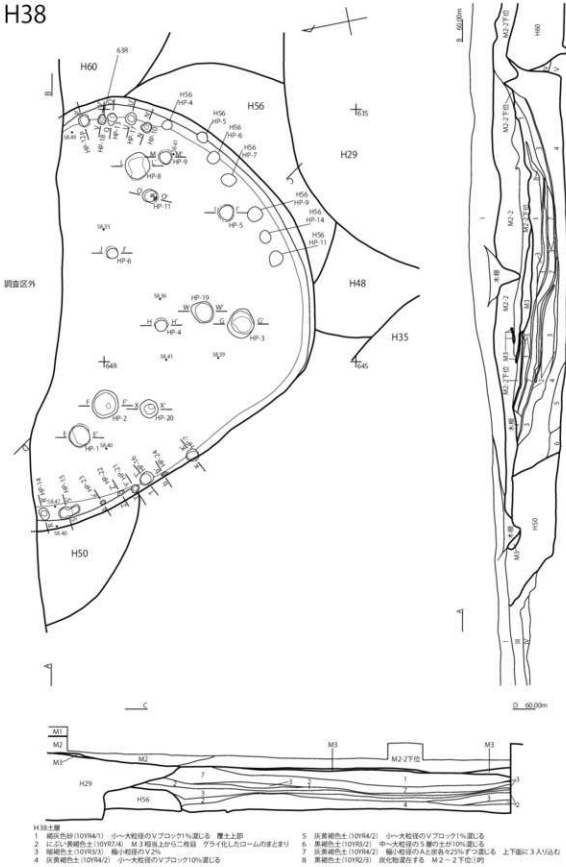
図Ⅲ-1-76 H37平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図



遺物 番号	分類	単位	数量	遺物 番号	分類	単位	数量	遺物 番号	分類	単位	数量	遺物 番号	分類	単位	数量
1	3ヶ刈ヘビロー	漆器	1	32	フレイク	石器	1	90	石臼	漆器	1	96	石臼	漆器	1
2	フレイク	漆器	1	33	石臼	漆器	1	91	フレイク	漆器	2	97	フレイク	漆器	1
3	石臼	漆器	1	34	漆	漆器	1	92	フレイク	漆器	2	98	フレイク	漆器	1
4	フレイク	漆器	1	35	フレイク	漆器	1	93	石臼	漆器	1	99	フレイク	漆器	1
5	フレイク	漆器	2	36	石灰質片	漆器	1	100	フレイク	漆器	1	101	フレイク	漆器	1
6	石臼	漆器	1	37	フレイク	漆器	1	102	石臼	漆器	1	103	フレイク	漆器	1
7	石臼	漆器	1	38	石臼	漆器	1	104	フレイク	漆器	1	105	フレイク	漆器	1
8	フレイク	漆器	1	39	フレイク	漆器	1	106	石臼	漆器	1	107	フレイク	漆器	1
9	フレイク	漆器	1	40	石臼	漆器	1	108	フレイク	漆器	1	109	フレイク	漆器	1
10	フレイク	漆器	1	41	フレイク	漆器	1	110	フレイク	漆器	1	111	石灰質砂石織	漆器	1
11	石臼	漆器	1	42	フレイク	漆器	1	112	フレイク	漆器	1	113	フレイク	漆器	1
12	石臼	漆器	1	43	フレイク	漆器	1	114	フレイク	漆器	1	115	フレイク	漆器	1
13	石臼	漆器	1	44	石灰質砂石織	漆器	1	116	フレイク	漆器	1	117	石臼	漆器	1
14	石灰質砂石織	漆器	1	45	石臼	漆器	1	118	フレイク	漆器	1	119	フレイク	漆器	1
15	フレイク	漆器	2	46	石臼	漆器	1	120	フレイク	漆器	1	121	フレイク	漆器	1
16	フレイク	漆器	1	47	フレイク	漆器	1	122	フレイク	漆器	1	123	石臼	漆器	1
17	フレイク	漆器	1	48	フレイク	漆器	1	124	フレイク	漆器	1	125	石臼	漆器	1
18	フレイク	漆器	1	49	フレイク	漆器	1	126	フレイク	漆器	1	127	フレイク	漆器	1
19	フレイク	漆器	1	50	フレイク	漆器	1	128	フレイク	漆器	1	129	フレイク	漆器	1
20	フレイク	漆器	1	51	石臼	漆器	1	130	フレイク	漆器	1	131	フレイク	漆器	1
21	フレイク	漆器	1	52	石臼	漆器	1	132	フレイク	漆器	1	133	フレイク	漆器	1
22	石臼	漆器	1	53	フレイク	漆器	1	134	フレイク	漆器	1	135	フレイク	漆器	1
23	石臼	漆器	1	54	フレイク	漆器	1	136	フレイク	漆器	1	137	フレイク	漆器	1
24	石臼	漆器	20	55	石臼	漆器	1	138	フレイク	漆器	1	139	フレイク	漆器	1
25	フレイク	漆器	1	56	フレイク	漆器	1	140	フレイク	漆器	1	141	フレイク	漆器	1
26	フレイク	漆器	1	57	フレイク	漆器	1	142	フレイク	漆器	1	143	フレイク	漆器	1
27	フレイク	漆器	1	58	フレイク	漆器	1	144	フレイク	漆器	1	145	フレイク	漆器	1
28	石臼	漆器	20	59	フレイク	漆器	1	146	フレイク	漆器	1	147	フレイク	漆器	1
29	石灰質砂石織	漆器	1	60	石臼	漆器	1	148	フレイク	漆器	1	149	フレイク	漆器	1
30	フレイク	漆器	1	61	石臼	漆器	1	150	フレイク	漆器	1	151	フレイク	漆器	1
31	フレイク	漆器	1	62	石灰質砂石織	漆器	1	152	フレイク	漆器	1	153	フレイク	漆器	1
32	フレイク	漆器	1	63	フレイク	漆器	1	154	フレイク	漆器	1	155	フレイク	漆器	1

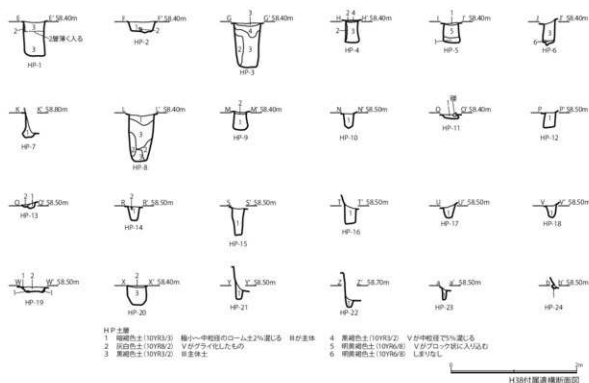
図Ⅲ-1-77 H37遺物出土状況図

H38



図Ⅲ-1-78 H38平面図・土層断面図





図Ⅲ-1-79 H38付属遺構土層断面図

**確認・調査** H24・28周辺のⅢ層を約15cm掘り下げたところ、にぶい黄褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層の観察から、H24・28より古い。

**覆土** 自然堆積である。1層はH24またはH28の掘り上げ土の可能性が高い。

**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HP-1～9・11～13は主柱穴で、HP-1～4の4本柱またはHP-1～5・10・12の7本柱と考える。HP-1～5・10・12の7本柱の場合、東側が沢地形で流出していることから、8本の可能性もある。HP-4・5は掘りかたがある。HP-2・5とHP-3・11、HP-12・13は柱穴を改変した可能性がある。HP-7～9は支柱穴の可能性が高い。HP-14は周溝に関連する柱穴と捉える。HP-6はやや大きめの柱穴である。周溝は西側で断続的に壁際に沿って1条巡る。(佐藤)

**遺物出土状況** 979点の遺物が出土した。土器については、覆土から床にかけて円筒下層b式が再流入。地紋が網目状條条体の円筒下層b2式のころのまとまりもある。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 縄文時代前期後半、円筒下層b2式またはより古い時期。(大森司)

**H38** (図Ⅲ-1-78～80、-2-38～41、-3-22・23、カラー図版3、図版28・84～88・132)

**位置・立地** 63・64-R・S区 標高58.6m付近の緩斜面

**確認・調査** 63・64-R・S区のM2盛土調査中、暗褐色土の入り込み検出した。平面形は楕円形で一部発掘区外へ延びているようであった。長軸と発掘区壁際に土層観察用の土手を残し、掘り下げたところ、5軒の竪穴住居と考えられる遺構が切り合っている状況と判断した。そのうち切り合い上一番新しい2軒の1軒であるH29を調査終了後、もう1軒の住居の調査に着手した。まず覆土の上に被っ



図Ⅲ-1-80 H38遺物出土状況

ているM2盛土を調査した後、覆土上部中央からNo.1・3~7までの六個体の土器を検出し、取り上げた。床面を検出し、南東-北西を長軸とする隅丸方形に近い楕円形の堅穴住居であることが判明した。M2盛土より古いが、周辺の住居H48・50・56・60よりは新しい。

**覆土** 覆土下半部にはV層主体の土が堆積し、住居掘り上げ土によって土葺きとした屋根の崩落を思わせる。その上の覆土中央部はV層とⅢ層主体の土層が交互に入り込み、断面は縞状を呈している。

**構造** 平面形は不整な楕円形で四角形に近いと想定。床面はほぼ平坦だが、中央が浅く窪む。壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 長軸を対称軸として四か所の支柱穴が想定できる。HP-3iに対応するHP-8、HP-1に対応する柱穴は発掘区外にあると考える。壁際には壁柱穴が巡る。H38より古いH56の調査時に、床をはがすとH56HP-4~7・9・11・14を検出したが、これはこのH38壁柱穴の可能性が高い。発掘区内の

H38について南角のみ壁柱穴が分布しない。H56HP-6上部には砂ピット特有の砂が入り込むが、H56起源の可能性もあり、砂ピットとは明言し難い。HP-4・6や深さが浅いHP-11・19はそれぞれ長軸を対称とした位置に対応する。HP-2・20も明瞭に掘り込まれた穴である。

**遺物出土状況** 3,343点出土した。覆土上半部出土のまとまった土器破片は、廃絶後の窪みへ直接廃棄した可能性があるが、M4盛土掘り上げ後の流入である、M2-3層がさらに流入した可能性もある。床面として取り上げた遺物については、覆土最下位にあったものが主体と考える。床面近くから台石を思わせる大型の礫が出土しているが、H56に絡んだ柱穴の埋没した上に位置することから、この住居床面かどうかは判断出来なかった。覆土上半部から大型の円筒下層d1式古段階である。床面近くからは口縁部文様帯の幅が狭く、区画帯を持たない円筒下層d1式古段階の破片が出土している。焼成粘土塊も出土する。石器は礫、フリイクの出土が目立つ。次にスクレイパー、ドリルの出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層d1式古段階あるいは直前。(大森司)

### H39 (図Ⅲ-1-81~84, -2-42~53, -3-23~25, 図版29・88~99・133)

**位置・立地** 61・62-T・U区 標高58.4m付近の緩斜面

**確認・調査** 61・62-T・U区においてM2盛土調査中、にぶい黄褐色～浅黄褐色土の入り込みを検出した。入り込みは長楕円形を呈しており、62T区には黒～黒褐色土の入り込みを検出したため風倒木によって堅穴住居の覆土上部が攪乱を受けている状況を想定した。そこで南北と東西、直行する2本の土層観察用土手を残して覆土を掘り下げた。62U杭の周りを中心として、土器がまとめて複数個体検出された。これは黄褐色～浅黄褐色土の分布範囲と同じである。床面・壁面を検出した事から、1軒の堅穴住居と判断した。平面形は不整な円形でH29より古い。南東壁にはベンチを有する。

**覆土** 覆土下半部南半分はV層土主体である。北半分は掘り込みより上部からの木根の影響によって乱れている。覆土上半分はM2盛土に類似するV層土主体の土の堆積であるM3盛土に相当するグライ化したV層と礫がからんだ土層が2層である。この土層がすり鉢状になった覆土下半部の土層に入り込む。遺物はこの土層と一緒に覆土に混じり込む。覆土の上部から下部まで連続して遺物が出土しており、覆土最上部、覆土上部、覆土中部、覆土下部、覆土最下部と区別して取り上げた。覆土下半部のV層主体の土の堆積は、住居掘り上げ土によって土葺きとした屋根の崩落を思わせる。

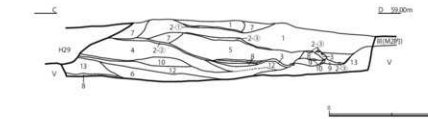
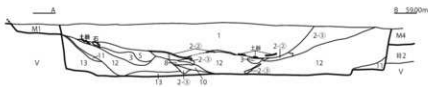
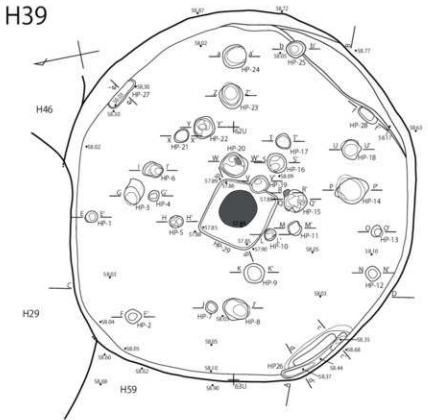
**構造** 平面形は不整な円形である。南縁と西縁に浅いベンチがある。東西端に短い溝溝がある。床面はおおよそ平坦で中央が窪む。壁面は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** ベンチの中心、そしてHP-26と27の中心を通る軸を対称軸として想定すると、四か所の主柱穴とみなされる大型の柱穴は対称性がある。HP-23に対応するHP-14、HP-3に対応するHP-8がそれである。ベンチ際にはHP-18・25といった柱があり、HP-28については側溝を思わせる穴である。HP-26は住居南西壁際にある側溝で、溝内側が盛り上がる。HP-27は覆土中にフリイクチップが入り込んでいたため一括して取り上げた。住居中央、四角形の窪みHP-29があり、中央が酸化した鉄分によるものか、橙色に色づいている。この土坑の対象軸上南側には円形の窪みHP-19があり、これを中央として挟むようにして砂を含んだ土坑HP-15・16がある。またHP-29西脇には砂ピットHP-10もある。平面形が円形の浅い小土坑が、おおよそ軸に対して線対称に複数展開する。

**遺物出土状況** 10,672点の遺物が出土した。覆土上半部から覆土最下部までのまとまった土器群については前述の通りである。破片は、廃絶後の窪みへ直接廃棄した可能性がある。また、床面として取り上げた遺物については、覆土の最下位にあったものが主体と考える。

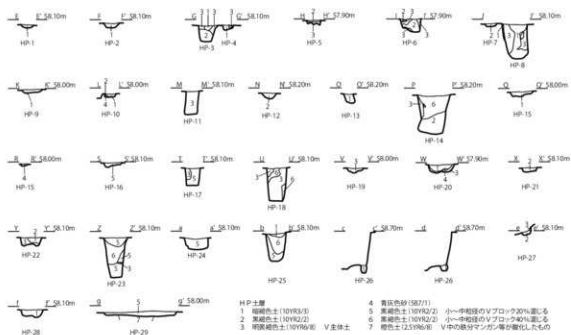
覆土最下位での円筒下層c式のまとまり63~65(点取り№40~42)が床面に近い一群と言える。そ

H39

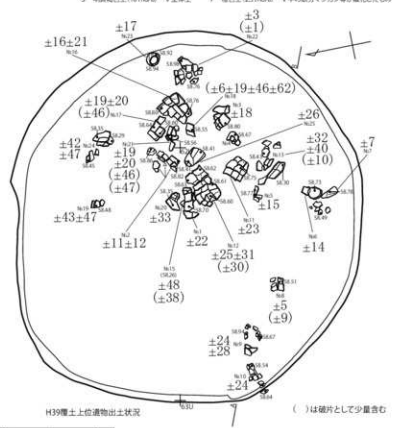


- H39土層
- |                                      |                                    |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| 1 IC-25-黄褐色土(10YR5/3) 砂+Vよく混じる M2-2的 | 6 黄褐色土(10YR2/2)                    |
| 2-1 淡黄褐色土(10YR8/3) Vクライ化土 砂多し        | 7 黄褐色土(10YR1.2/1)                  |
| 2-2 淡黄褐色土(10YR8/3) Vクライ化土 砂土混じり      | 8 黄褐色土(10YR3/2)                    |
| 2-3 淡黄褐色土(10YR8/3) Vクライ化土            | 9 褐色土(10YR4/6)                     |
| 3 暗黄褐色土(10YR7/6) V土                  | 10 黄褐色土(10YR6/6) 小〜大粒径のVブロック20%混じる |
| 4 黄褐色土(10YR3/2)                      | 11 黄褐色土(10YR5/6) 小〜大粒径のVブロック20%混じる |
| 5 褐色土(10YR4/4)                       | 12 褐色土(10YR4/6) 小粒径のVブロック5%混じる     |
|                                      | 13 褐色土(10YR4/6) 小粒径のVブロック15%混じる    |

図Ⅲ-1-81 H39平面図・土層断面図



層別	層番号	層名	厚
1	1	土	1.08
2	2	土	1.43
3	3	土	1.2
4	4	土	0.92
5	5	土	2.7
6	6	土	4.2
7	7	土	4.3
8	8	土	1.63
9	9	土	2.7
10	10	土	4.1
11	11	土	1.2
12	12	土	2.03
13	13	土	2.57
14	14	土	2.6
15	15	土	2.4
16	16	土	2.76
17	17	土	1.92
18	18	土	1.41
19	19	土	3.27
20	20	土	1.1
21	21	土	1
22	22	土	36
23	23	土	2.2
24	24	土	5.8
25	25	土	1.77
26	26	土	1.1
27	27	土	1.92
28	28	土	1
29	29	土	2.9
30	30	土	2.62
31	31	土	1.06
32	32	土	1
33	33	土	3.3
34	34	土	3.3
35	35	土	7.4
36	36	土	3.1
37	37	土	3.1
38	38	土	3.1
39	39	土	3.1
40	40	土	3.1
41	41	土	3.1
42	42	土	3.1
43	43	土	3.1
44	44	土	3.1
45	45	土	3.1
46	46	土	3.1
47	47	土	3.1
48	48	土	3.1
49	49	土	3.1
50	50	土	3.1

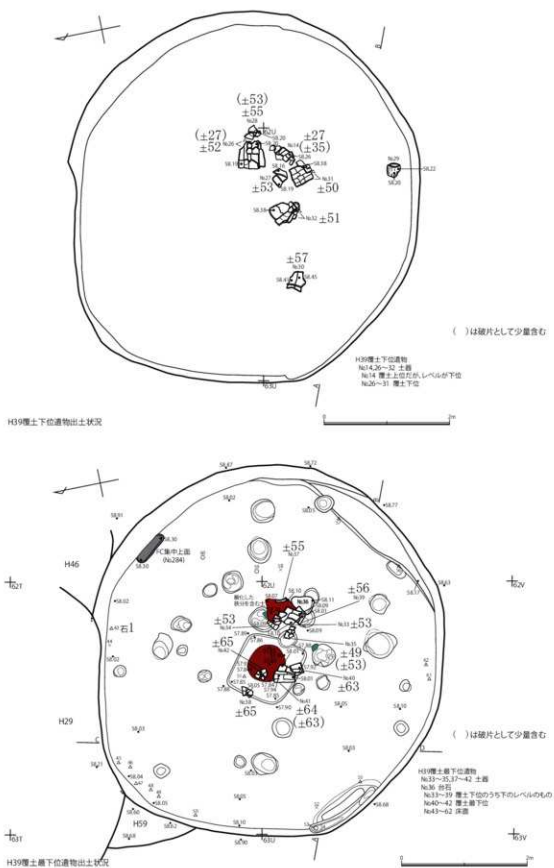


H39層上位遺物出土状況

層番号	層名	種別	数量
31	土	土	1
32	土	土	1
33	土	土	1
34	土	土	1
35	土	土	1
36	土	土	1
37	土	土	1
38	土	土	1
39	土	土	1
40	土	土	1
41	土	土	1
42	土	土	1
43	土	土	1
44	土	土	1
45	土	土	1
46	土	土	1
47	土	土	1
48	土	土	1
49	土	土	1
50	土	土	1

H39層上位遺物  
 No1~115~25 土器  
 No1~12 甕土器  
 No13~21, No24 甕土器  
 No14 甕土器  
 No2~2 甕土器  
 No25 甕土器

図Ⅸ-1-82 H39付属遺構土層断面図・遺物出土状況平面図(覆土上位)



図Ⅲ-1-83 H39遺物出土状況平面図(覆土下位・覆土最下位)

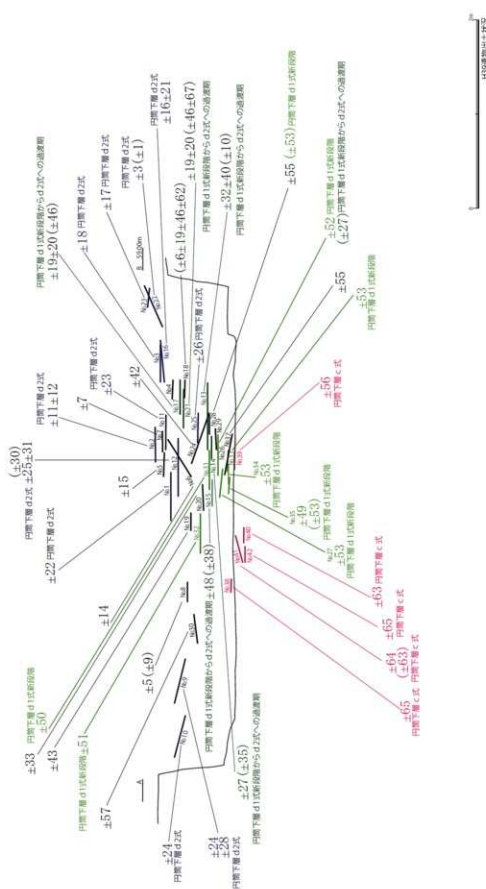
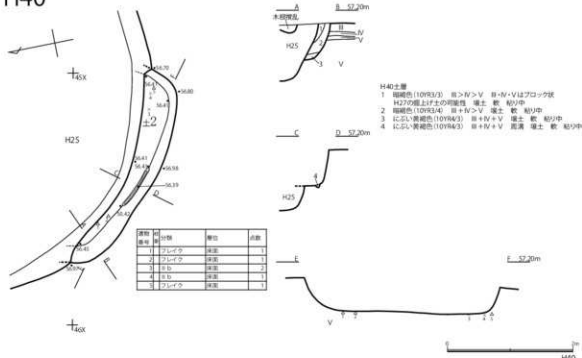


図 1-84 H39遺物出土状況垂直分布図

## H40



図III-1-85 H40平面図・土層断面図・遺物出土状況図

して覆土上位から出土する円筒下層c式が多いことから、この時期に掘り込まれて、この時期に廃絶した可能性がある。覆土出土の円筒下層d1式新段階は口縁部文様帯内に縄線で直線構成の山形ないしは菱形文を施し、円筒下層d2式に近い。H34とH38もこの段階である。加えて、円筒下層d1式古段階の新、と円筒下層d2式が混じる。焼成粘土塊も出土する。

石器は礫、フレイクの出土が目立つ。次にスクレイパーが目立つ。

覆土調査中、目立った骨片を検出、洗浄したところ、焼骨片が複数点、検出された。覆土下部からは、エイ・サメ類の椎骨1点、エイ類の椎骨2点、ツノザメ目の椎骨1点、サバ属の尾椎1点、硬骨魚類の椎骨2点、硬骨魚類の不明破片複数点、小型哺乳類の頭蓋骨破片が1点、哺乳類の不明破片が1点検出された。壁際の崩落部分からは海生哺乳類の不明破片が1点、見つかった。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層c式段階である。(大泰司)

**H40** (図III-1-85、-2-53、-3-25、カラー図版11、図版27・99・133)

**位置・立地** 45-W・X区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** H25で設定した土層観察用のベルトのトレンチの断面で暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。周辺の住居跡の掘上げ土を含めた土層の観察から、H19・25・27より古い。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

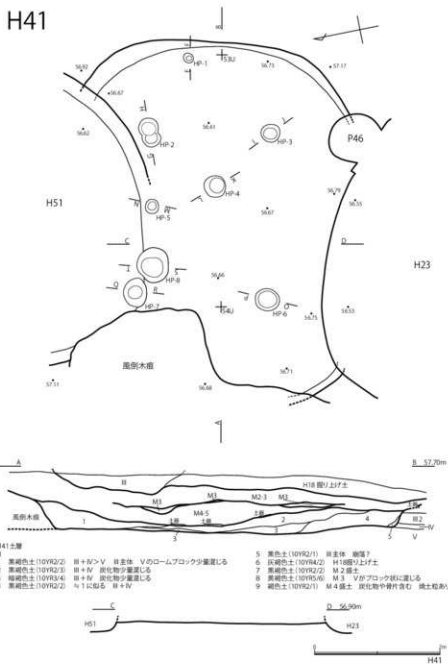
**付属遺構** 周溝は壁際の一部で検出した。

(佐藤)

**遺物出土状況** 60点の遺物が出土した。覆土、床面いずれからも磨滅した円筒下層b1式の破片が出土。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物の出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式かその直後の時期。(大泰司)





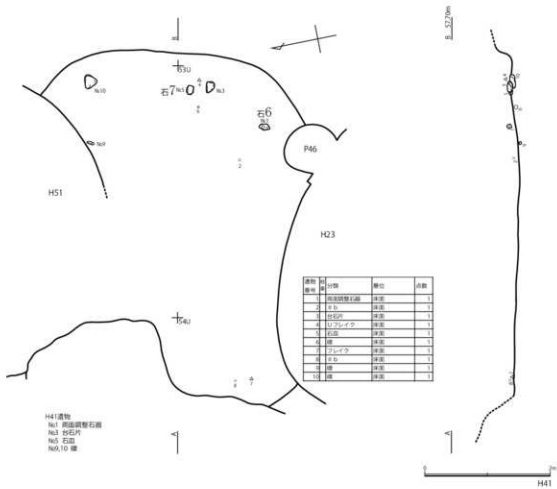
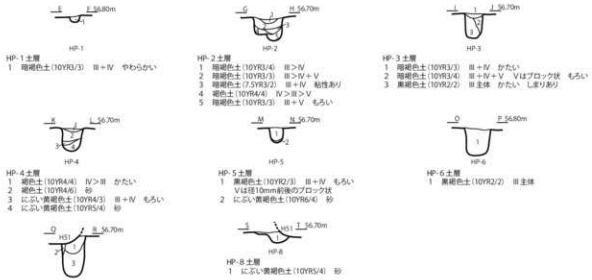
図Ⅲ-1-86 H41平面図・土層断面図

H41 (図Ⅲ-1-86・87、-2-54~56、-3-26、図版30・100~102・133・134)

位置・立地 53・54-T・U区 標高56.8m付近の平坦面

確認・調査 H23の壁面で遺構覆土と思われる黒褐色土が確認されたため、遺構が想定される位置に土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行なった。その結果、平坦な面と明瞭な立ち上がりが認められたので、住居跡と判断した。遺物は遺構覆土出土のものを覆土で、床面出土のものは床面で取り上げ位置を記録した。

覆土 壁付近は、III層が主体でV層のロームブロックが少量混じる黒褐色土が厚く堆積している。



図Ⅲ-1-87 H41付属遺構土層断面図・遺物出土状況図

中央付近は、炭化物が少量混じる暗褐色土が見られる。これら覆土1～4層堆積後の窪みに、Ⅱ群b類の土器が大量に廃棄され、その後周囲の盛土層が流入し厚く堆積している。覆土5は、炭化物や骨片が多く混じることから、M4盛土層が主体と思われる。V層の掘り上げ土と考えられる覆土6層を挟み、上部にM2盛土層主体の覆土7層が堆積している。H18の掘り上げ土の暗褐色土がこれらを覆っている。

**構造** 掘り込みは、M2盛土層中と考えられ、V層をわずかに掘り込んで床を構築している。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。平面形は円形である。

**付属遺構** 柱穴状の小ピットは8基確認した。径の大きさや深さから、HP-2・3・6・7は主柱穴と考えられる。4本柱の住居跡である。中央付近のHP-4・5・8にはぶい黄褐色を呈する砂が充填されている、いわゆる「砂ピット」である。

**遺物出土状況** 床面出土の遺物は、東側の壁付近から、両面調整石器、Uフレイク、石皿が出土している。(村田)

2912点の遺物が出土した。円筒下層b1式が出土。円筒下層b2式のころ形成されたM4盛土が覆土に入り込む。この盛土より古い。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式から円筒下層b2式古段階くらいの時期。(大森司)

#### H42 (図Ⅲ-1-88、-2-57、図版31・102)

**位置・立地** 59・60-V区 標高57.6m付近の緩斜面

**平面形** 不整な円形で四角形に近い形状を想定

**確認・調査** H21の土層断面について、メインセクションのトレンチを延長したところ、南端に、ぶい黄褐色土の入り込みを検出した。住居の可能性を想定し、59・60-V区を掘り下げたところ平面形の一部を検出した。その大部分は発掘区の外側に延びる。

**覆土** 床面直上の西半分にはⅢ層起源の黒色土4層が分布する。覆土下半部北半分から覆土上面にかけてはV層土主体である。

**構造** 平面形は不整な円形で四角形に近い形状を想定。床面はほぼ平坦で、壁は垂直から、急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 今回検出した範囲にはなかった。

**遺物出土状況** 222点の遺物が出土した。土器については、覆土から円筒下層b式と円筒下層d2式の破片が出土している。円筒下層b式から下層d1式にかけての住居・H47より新しい。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺構周辺の遺物出土状況から判断すると縄文時代前期後半、円筒下層b式以後、かつ、円筒下層d1式以後で下層d2式以前と考える。(大森司)

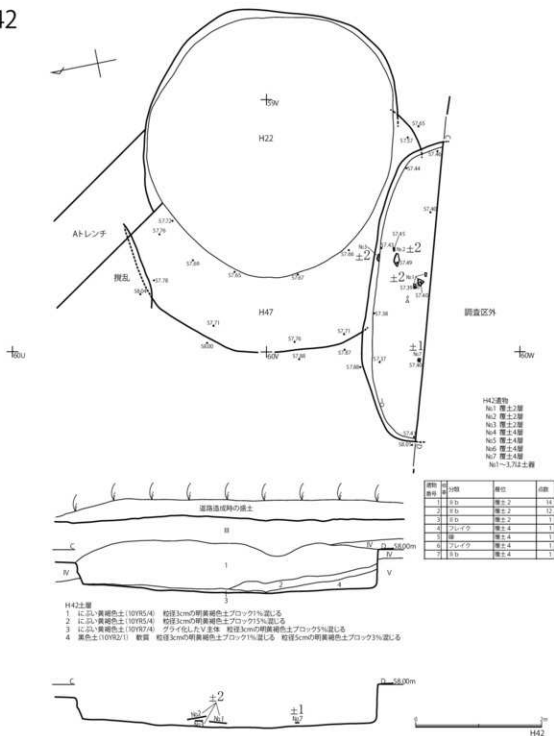
#### H43 (図Ⅲ-1-89・90、-2-57、-3-27、図版32・102・134)

**位置・立地** 39・40-T・U区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、ぶい黄褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。1層のぶい黄褐色土はH44の掘り上げ土の可能性が高いことから、H44より古い。

**覆土** 自然堆積である。

H42



図Ⅲ-1-88 H42平面図・土層断面図・遺物出土状況図

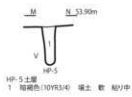
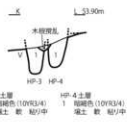
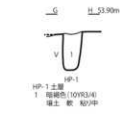
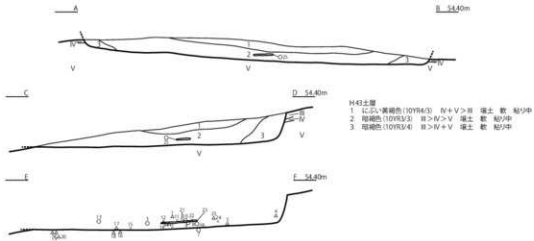
**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。東側は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HP-1~5は支柱穴で、HP-1とHP-2、HP-3・4、HP-5が組み合う4本柱と考える。HP-3・4は柱穴を改変した可能性がある。HP-6・7は先端が尖る杭状で、内部施設に伴う柱穴の可能性がある。

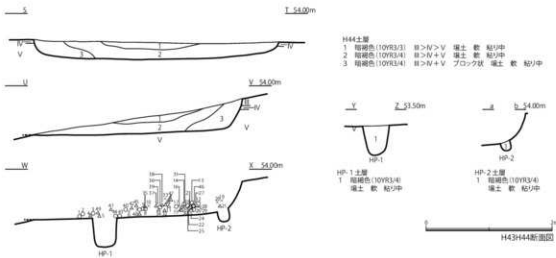
(佐藤)



# H43



# H44



図Ⅲ-1-90 H43・H44土層断面図・付属遺構土層断面図

**遺物出土状況** 92点の遺物が出土した。覆土および床面から、円筒下層b式が出土した。古手のものから円筒下層c式に近いものにかけて時期幅がある。床面から、円筒下層b2式土器片の加工品が出土した。礫、フレイクの出土が目立つ、次にスクレイパー、Uフレイクの出土が目立つ。台石(点取り№25)は「もろい凝灰岩裂」で図化できなかった。

**時期** 遺物出土状況から土器から縄文時代前期後半、円筒下層b2式の頃と考える。(大森司)

**H44** (図Ⅲ-1-89・90、-2-57、-3-27、図版33・102・134)

**位置・立地** 39・40-U・V区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。H43の1層のにおい黄褐色土はH44の掘り上げ土の可能性が高いと判断することから、H44より新しい。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。東側は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HP-1は支柱穴で、1本柱と考える。HP-2は角度のある浅い小型の柱穴で、支柱穴の可能性もある。(佐藤)

**遺物出土状況** 94点の遺物が出土した。覆土および床面から円筒下層b式が出土する。石器は礫、フレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期である。(大森司)

**H45** (図Ⅲ-1-91・92、-2-57、-3-28、カラー図版10、図版34・102・134)

**位置・立地** 47・48-R・S区 調査区北東側の緩斜面

**確認・調査** Ⅲ層上面を精査した際にⅢ層の落ち込みを確認した。そこからⅢ層を約15cm掘り下げたところ、M5盛土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、土坑、ベンチ状構造、周溝を確認し、住居跡と判断した。遺構は攪乱により大きく掘り込まれ、一部の検出である。範囲は調査区外に広がる。堆積状況から、掘り込み面はⅢ2層上面と考える。土層の観察から、M5盛土とP44より古い。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** HF-1は楕円形の浅い掘り込みのある地床炉である。HP-1は土坑である。円形基調で、坑底はやや丸みを帯びるが平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。ベンチ状構造は西側で2段検出し、貼床を行っている。段と段の間に溝がある。周溝は断続的に壁際に沿って西側に1条巡る。(佐藤)

**遺物出土状況** 174点の遺物が出土した。覆土、周溝、炉から磨滅した円筒下層b式が出土する。同一個体のまとまりは無い。M5点取り土器群が覆土の上位より出土した。

石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** M5盛土より古い、遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b2式古段階あるいは下層b1式の頃と考える。

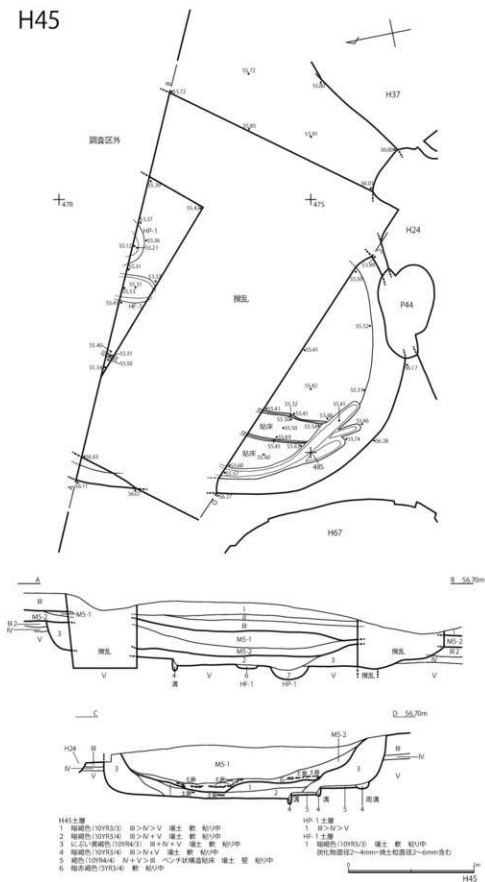
(大森司)

**H46** (図Ⅲ-1-93、-2-58、-3-28、図版35・103・134)

**位置・立地** 61・62-R・S区 標高58.2m付近の緩斜面、緩斜面から急斜面に移行する手前

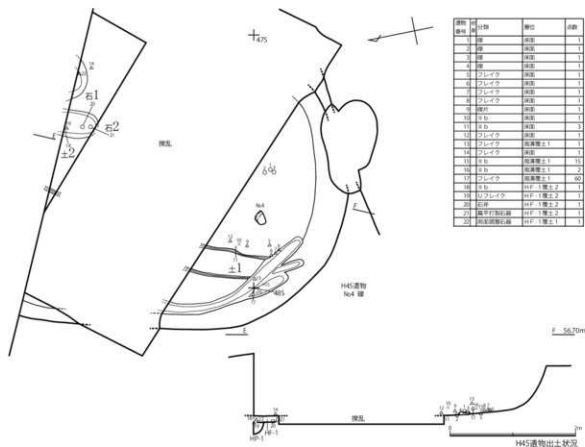
**確認・調査** Sライントレンチの土層断面において、H29の東側に褐色土の入り込みの断面があった。

H45



図Ⅲ-1-91 H45平面図・土層断面図





図Ⅲ-1-92 H45遺物出土状況

褐色土入り込みはH29より古く、M4盛土を掘り込んで構築されている。M2・M3盛土はこの入り込み覆土に覆い被さっているためより新しいものである。H29調査終了後、東側壁面には後にHP-9となる砂ピットの断面が検出されていた。そこでここにH29に切られた住居があると判断し、平面形が検出できるまで掘り下げた。すると長楕円形がH29に掘り込まれている状況を検出した。そこで土層観察用の土手をSライトレンチに加えて二本設定し、掘り下げた。

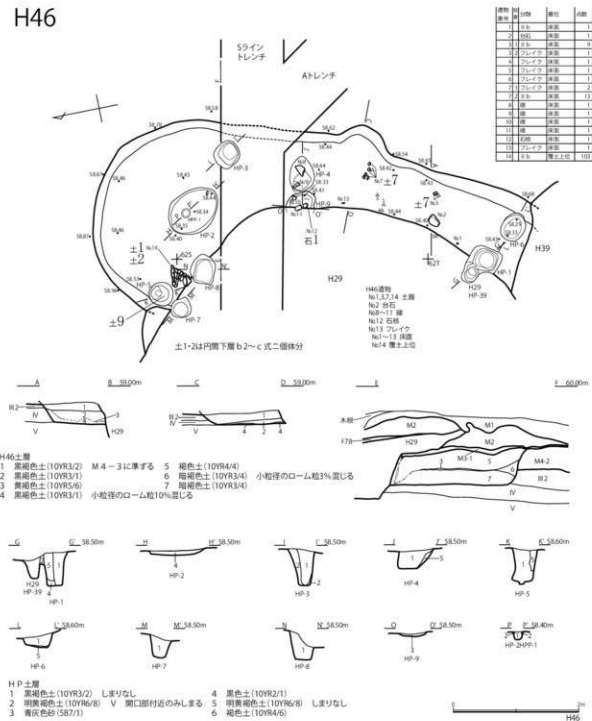
**覆土** 床面直上の南半分にはⅢ層起源の黒色土4層が分布し、V層起源土の薄い流入を挟んでさらに上に黒色土が堆積する。この付近はM4盛土の分布域西端であり、Ⅲ層の流入である可能性が高い。また遺構の北半分は断面から判断すると明らかにM4盛土を掘り込んでいた。

**構造** 平面形は不整な長楕円形である。残存する床面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

**付属遺構** 今回検出した範囲から、主柱穴は楕円形長軸を挟んでHP-3と5が対応し、4本柱とする、HP-1が相当する柱と考える。この三本は柱の掘りかた部分にV層土が入り込んでいる。HP-7・8もその形状から柱穴の可能性が高い。当初H29の壁柱穴の可能性を考えたが、一旦埋められたH46の柱穴と判断した。H29HP-1についても判断を迷ったがH29のものとした。H46長軸上には浅い皿状のHP-2と砂ピットHP-9がある。HP-2については用途不明だが、中央付近に小土坑HPP-1を伴う。

**遺物出土状況** 2,041点の遺物が出土した。覆土でまともだった点取り番号No14とM4並行の覆土上部からまともに出土した土器片群(遺物番号31)の接合結果が1である。円筒下層b2～c式である。同じくNo14に混在していた土器片と覆土出土の土器片が接合して2となった。1, 2共にかなり近い時期と考える。いずれも円筒下層b2～c式段階とするのが妥当という可能性がある。7が床面、9

H46



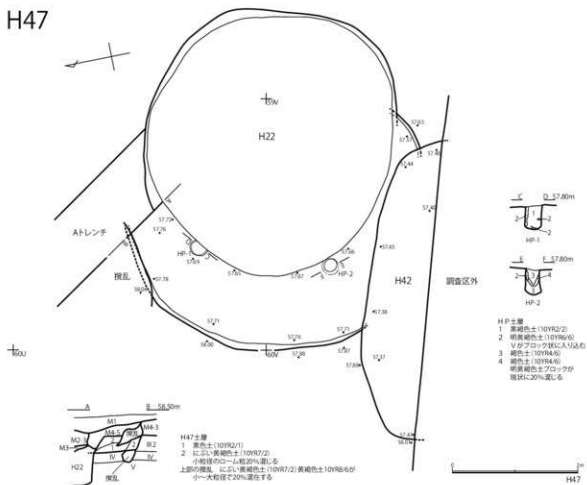
図Ⅲ-1-93 H46平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

が付属遺構HP-5出土である。いずれも円筒下層b2式である。

H46は切りあっている住居の中で、一番古い住居のひとつである。まとまりのない破片について、円筒下層b2式から円筒下層d1式(覆土壁際63がM2-2下位~M4-3.62R区・M1.62Q区と接合)と覆土上位30(M1~M2-2.62Q区と接合)までが覆土から出土している。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b2式前半の住居である。(大泰司)

# H47



図Ⅲ-1-94 H47平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図

H47 (図Ⅲ-1-94、-2-59、図版31・104)

位置・立地 58・59-V区 標高57.6m付近の緩斜面

確認・調査 H21の西側壁面について、黒色土の入り込みを検出した。入り込みとV層の境界線は明瞭で、床面・壁面を思わせた。そこで土層観察用の土手を残して掘り下げたところ、堅穴住居がH21と42より古い遺構と判断した。また、外形線から遺構は大型で、主柱穴と考えられる柱穴を持つことから、堅穴住居跡とした。

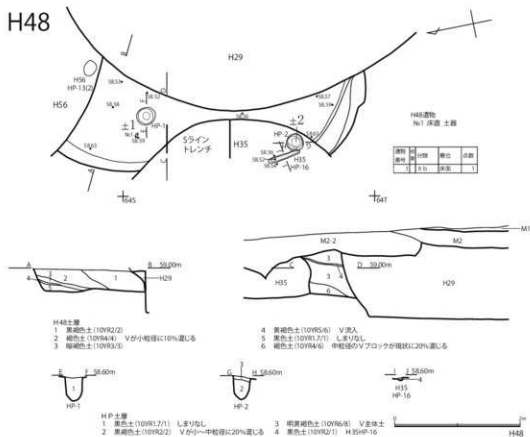
覆土 床面直上にはⅢ層起源の黒色土1層が分布する。覆土中部から覆土上面にかけてはV層土主体である。

構造 平面形は不整な円形で多角形に近い形状を想定。床面は中央に向かって窪む。壁はおおよそ垂直に立ち上がる。

付属遺構 今回検出した範囲に主柱穴が二か所あった。

遺物出土状況 259点の遺物が出土した。土器は、覆土から円筒下層b式が出土している。円筒下層b式段階の流入である。石器はフレイクの出土が目立つ。

時期 円筒下層b式以後のH42より古い。H22より古いため円筒下層d1式よりは古い。遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式前後の住居と考える。(大泰司)



図Ⅲ-1-95 H48平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

**H48** (図Ⅲ-1-95、-2-59、図版35・104)

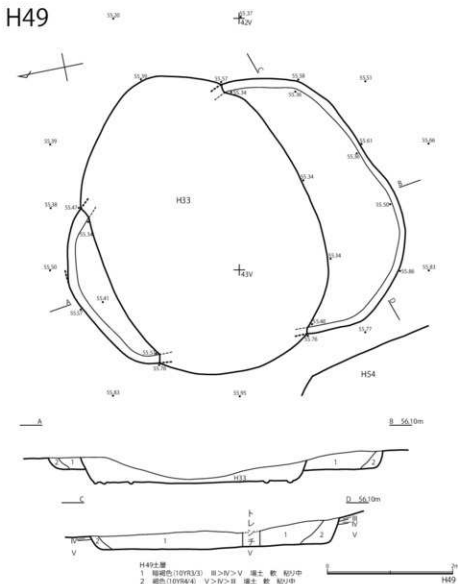
**位置・立地** 62・63-R区 標高58.8m付近の緩斜面

**確認・調査** スライントレンチの土層断面において、H29の西側に褐色～暗褐色土の入り込みの断面があった。褐色土入り込みはH29およびH35より古い。M2盛土が覆土の上に覆い被さっている。H29・35の調整終了後、H56を検出、調査を行った。H56の調査中土層断面に対応する褐色～暗褐色土の入り込みの平面をさらに検出した。H56よりさらに古い遺構を想定した。メインセクションに加えてもう一本土層観察用の土手を残して掘り下げた。遺構そのものの規模と、支柱穴と思われる明らかな柱穴を伴っている事から堅穴住居跡と判断した。

**覆土** スライントレンチに現れた土層はV層主体土が覆土を構成しているが、スラインよりやや北よりにおいて観察した土層断面には床面の壁際および中央にⅢ層主体の黒色土ないしは黒褐色土が入り込んでいた。

**構造** 平面形は不整な円形を想定する。床面はおおよそ平らである。壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 今回検出した範囲から、支柱穴は楕円形長軸を挟んでHP-1と2が対応し、規模と形状の兼ね合いから4本柱の可能性もある。H35HP-16とした溝はこのH48の個溝と判断し直した。H35に掘り込まれていたせいもあるが、溝の立ち上がりから連続性が感じられないためもともと短い溝の可能性もある。また南壁側に幅の狭いベンチ状の張り出しがある。H56HP-13(2)に示した柱穴は元来H48の柱穴がH56構築時に埋められた可能性もある。



図Ⅲ-1-96 H49平面図・土層断面図

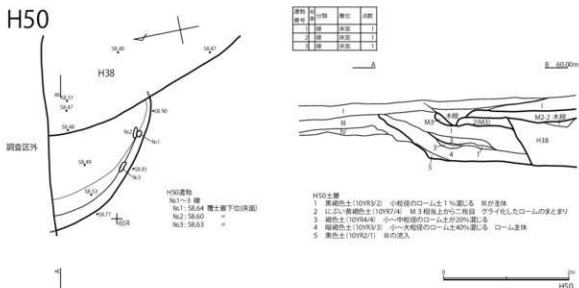
**遺物出土状況** 193点の遺物が出土した。覆土、床面、付属遺構HP-2覆土から遺物が出土した。H48は覆土から円筒下層b式が出土している。特に円筒下層b2式の破片が目立つ。同一個体のまとまりは無い。石器は礫、フレイクが目立つ。

**時期** H48はH29(円筒下層d1式段階)・H35(円筒下層c式段階)・H56(円筒下層b2式段階)より古い。遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期と考える。(大森司)

**H49** (図Ⅲ-1-96、-2-59、-3-28、図版36・104・134)

**位置・立地** 42・43-U・V区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層上面を精査中にⅢ層の落ち込みを確認した。さらにⅢ層を約10cm掘り下げたところ、H33の暗褐色土の落ち込みを検出した。その周辺を精査したところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH33との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層の観察から、H33より古い。



図Ⅲ-1-97 H50平面図・土層断面図・遺物出土状況図

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は卵形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 検出しなかった。

(佐藤)

**遺物出土状況** 75点の遺物が出土した。覆土から磨滅した円筒下層b式〜下層c式と思われる土器破片が出土する。石器はフレイクが目立つ。

**時期** 調査範囲内の遺物出土状況から相対的に判断すると、縄文時代前期後半、円筒下層b式〜下層c式あるいはその直後の可能性がある。H33より古いことから中期後半よりは古い。(大森司)

#### H50 (図Ⅲ-1-97、-2-59、図版36・104)

**位置・立地** 64-Q・R区 標高58.6m付近の緩斜面

**確認・調査** 64-Q・R区においてH38の土層堆積状況を確認するため発掘区壁面に沿ってトレンチをいれたところ、H38の西側壁面が他の遺構を切っている状況が断面から読み取れた。そこでH38調査終了後、西側の縁の検出面について精査したところ、黒褐色土の入り込みを検出した。それは発掘区外へ広がっている状況であった。掘り下げたところ明瞭な壁面と床面を検出した。発掘区内の平面形を考慮すると堅穴住居の可能性が高いと判断した。残存部分の東側はM2盛土が覆い被さるが、西側は盛土とからんでいない。しかし、堅穴の縁からⅢ層が落ち込んでいるため掘り込み面は不明である。

**覆土** 残存する覆土について、土層断面を観察した。Ⅲ層起源の黒色土にV層の土が混在したものが堆積している。最上部にはM3盛土相当と思われる土がM2盛土との境を為している。

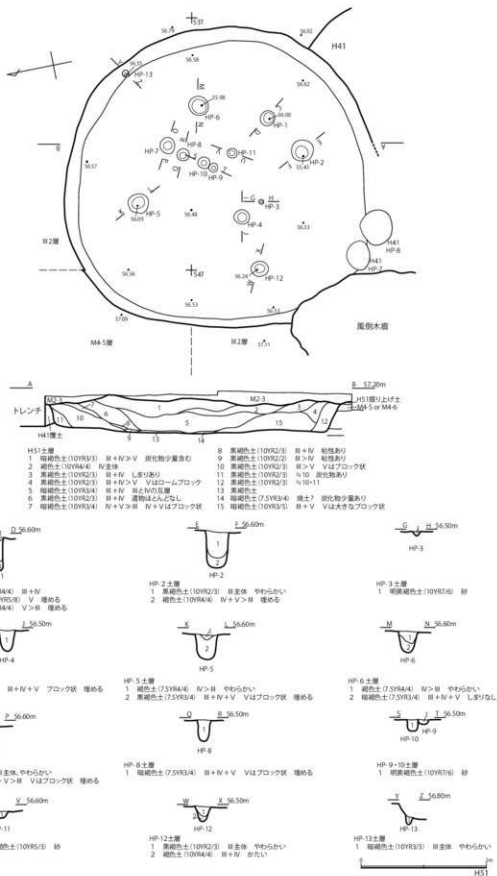
**構造** 平面形は不整な楕円形を想定する。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

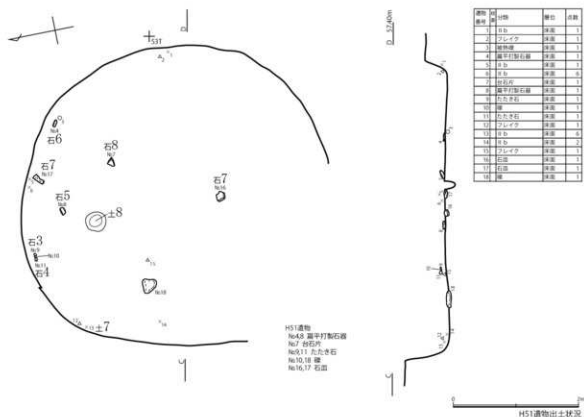
**付属遺構** 今回検出した範囲から、付属遺構は検出されなかった。

**遺物出土状況** 10点の遺物が出土した。覆土最下位とした壁際の遺物は層位的には床面ともいえるが、調査時に上から連続する覆土の遺物と判断した。土器については、覆土から円筒下層b式土器が出土する。いずれも磨滅しており同一個体のまとまりは無い。石器はフレイク、礫が出土する。

**時期** 遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期と考える。H38(円筒下層d1式古段階あるいはより古い時期)より古い。(大森司)

# H51





図Ⅲ-1-99 H51遺物出土状況図

H51 (図Ⅲ-1-98・99、-2-59、-3-28・29、図版37・104・134・135)

位置・立地 53・54-T・V 標高56.6m付近の平坦面

確認・調査 M2盛土層の調査中に、V層がブロック状に混じる暗褐色土が、直径5m前後の円形に分布する範囲を確認した。遺構が想定される位置に土層観察用のベルトを設定し、M2盛土層を掘り下げた。Ⅲ層上面でⅢ層の黒色土と暗褐色土の明瞭な境を確認できたので、遺構と認定した。平坦な面と明瞭な立ち上がりが見られ、柱穴状の小ピットを検出したので住居跡と判断した。遺物は遺構覆土出土のものを覆土で、床面出土のものは床面で取り上げ位置を記録した。

覆土 M2盛土層の再堆積層が主体で、一部にⅢ層の流入土やⅣ層・Ⅴ層がブロック状に混入する暗褐色土が混じる。

構造 掘り込みはM2盛土層中と考えられ、Ⅲ層を掘り込み、床はⅣ層・Ⅴ層をわずかに掘り込んだ程度で構築している。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。平面形は円形である。

付属遺構 柱穴状の小ピットは11基確認した。径の大きさから、HP-2・5・6は主柱穴と考えられる。中央付近のHP-3・9・10・11にはぶい黄褐色土を呈する砂が充填されている、いわゆる「砂ピット」である。

遺物出土状況 床面出土の遺物は、北側の壁付近から扁平打製石器、たたき石、石皿、台石などの礫石器類が出土している。

(村田)

1,582点の遺物が出土した。土器については、円筒下層b式から円筒下層c式までが出土する。焼成粘土塊も出土する。円筒下層d1式が入っていない。床面からは円筒下層b式のみが出土する。覆土から円筒下層c式の同一個体がままとまっていたが、復元には至らなかった。円筒下層b式の同一個体のままとまりは無かった。石器はフレイクが目立つ。



**時期** 出土遺物から、縄文時代前期後半、円筒下層c式直前と考える。H41(円筒下層b式古手)の時期より新しい。(大泰司)

**H52** (図Ⅲ-1-100、-2-60、-3-29・30、図版38・105・135)

**位置・立地** 40・41-U・V区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HF-1は隅丸方形の浅い掘り込みのある地床炉である。掘り込みは2段となる。1層は2層より被熱の度合いが強いことから、最終的に1層上で焚かれていたと考える。HP-1~3は主柱穴である。東側の崩落と床面の攪乱により組み合わせは不明であるが、4本または6本柱の可能性がある。HP-4は深い先端が尖る杭状の柱穴で、内部施設に伴う柱穴の可能性がある。HP-5は浅い柱穴である。

**遺物出土状況** 床面から台石(3、点取り№38)、と大型の偏平な礫・台石(点取り№39~43)がまともに出て出土した。床面から大型の偏平な礫がまともに出て出土する状況はH30・H67の出土状況と類似する。(佐藤)

380点の遺物が出土した。土器は、円筒下d1式古段階が一個体復元できた(1)。覆土1層と2層から出土した土器が接合した。覆土および床面から円筒下層b式から円筒下層c式のころと思われる破片が出土している。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** M5より古い。土器から縄文時代前期後半、円筒下層c式以後で円筒下層d1式古段階以前である。(大泰司)

**H53** (図Ⅲ-1-101、-2-60、-3-30、図版38・105・135)

**位置・立地** 43・44-U~W区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH54との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。周辺の住居跡の掘り上げ土を含めた土層の観察から、M6-2層とH25・54・55より古い。H53平面図はH54調査後の輪郭図であり、実際の切り合い関係はH25の図Ⅲ-1-46の通りである。

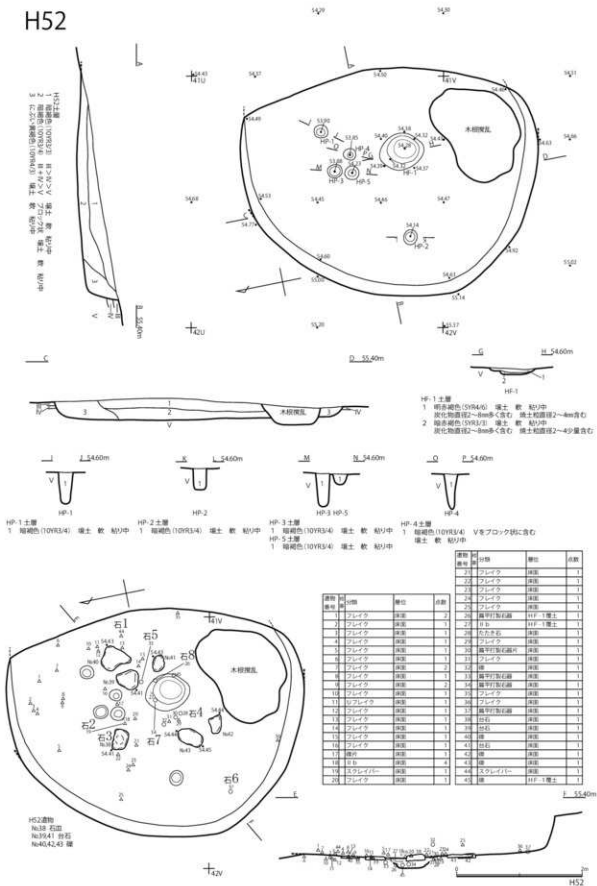
**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は楕円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** HF-1は中央からやや北西側に寄る浅い掘り込みのある円形の地床炉である。HP-1・2・4~6は主柱穴で、HP-1・2とHP-4・5、HP-6が組み合う3本柱またはH25・54により削平されているそれ以上の複数本柱と考える。HP-1・2とHP-4・5は柱穴を改変した可能性がある。HP-3は先端が尖る杭状の柱穴である。(佐藤)

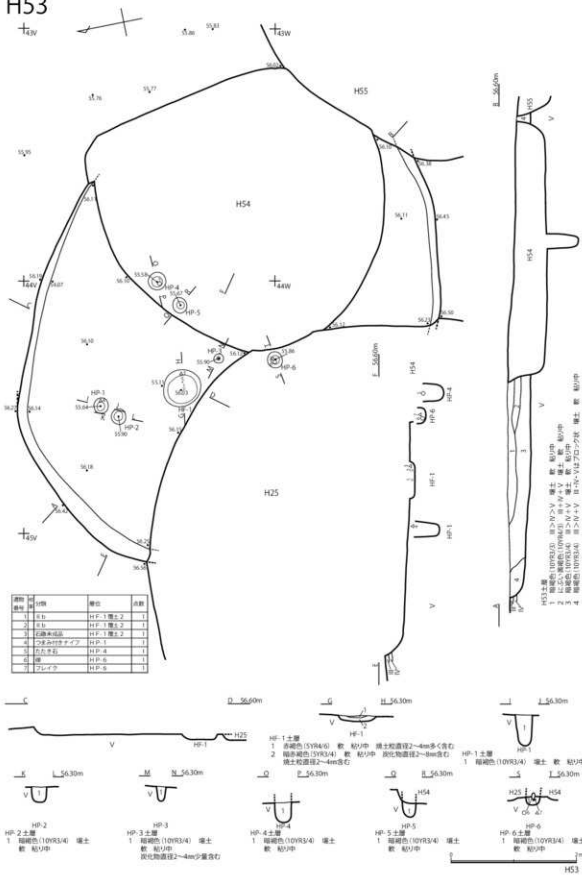
**遺物出土状況** 755点の遺物が出土した。土器は、HF-1覆土2層出土の点取り土器については円筒下層b式から下層c式にかけてのものと思われる土器破片である。覆土からも円筒下層b式から円筒下層c式にかけての土器片が流入している。円筒下層b式が主体であり、円筒下層c式の可能性があるものについても円筒下層b2式に近い古手のものである。石器は、フレイクが目立つ。

H52

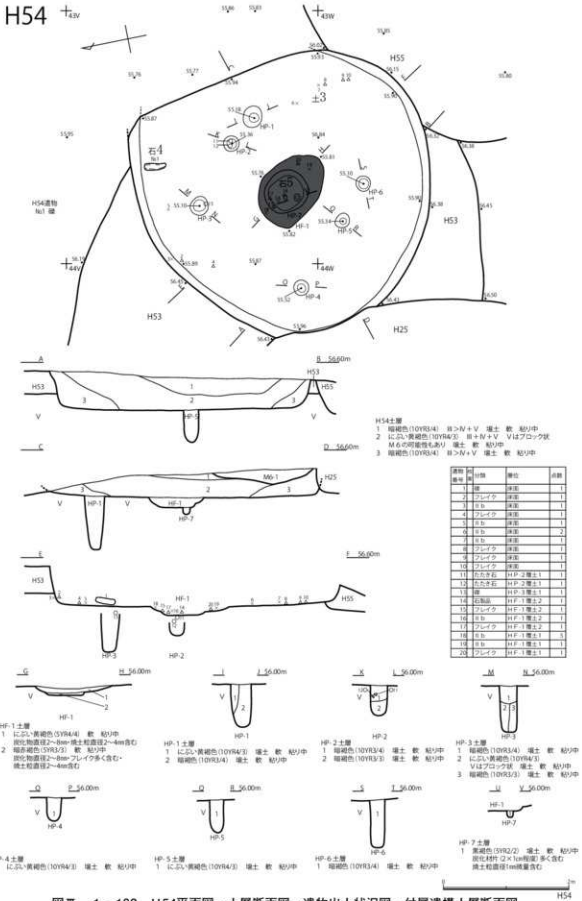


図Ⅲ-1-100 H52平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

# H53



図Ⅲ-1-101 H53平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図



**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の住居という可能性がある。H25より古いため、円筒下層d1式以前である。H54(円筒下層b式以後、円筒下層d1式以前)・H55(円筒下層b式の頃)より古い。円筒下層b式の住居である。(大泰司)

**H54** (図Ⅲ-1-102、-2-60、-3-31、図版39・105・135・136)

**位置・立地** 43・44-V・W区 調査区北東側の尾根

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH53との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。周辺の竪穴住居の掘り上げ土を含めた土層の観察から、M6-1層とH25より古く、H53・55(円筒下層b式)の頃より新しい。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側は斜面に流出したと考える。

**付属遺構** HF-1は中央からやや北西側に寄る浅い掘り込みのある方形の地床炉である。HP-1~6は主柱穴で、6本柱と考える。HP-7は浅く小さい柱穴で、HF-1に伴うと考える。

**遺物出土状況** 床面から礫(点取り№1)が出土した。(佐藤)

4.674点の遺物が出土した。土器は、床面、覆土いずれからも円筒下層b式の破片が出土している。石器は、フレイクの出土が目立つ。HF-1覆土2層を土壌水洗したところ、炭化物の中から中い1点、子囊菌の炭化子囊6点が検出された。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半である。縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の住居という可能性がある。H25より古いため、円筒下層d1式以前である。H53より新しい。(大泰司)

**H55** (図Ⅲ-1-103、-2-60、-3-32、図版39・105・136)

**位置・立地** 42・43-V~X区 調査区東側の斜面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、H53・54・65・66の周辺を精査中に、M6盛土の下から暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH66との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層の観察から、M6-2層とH54・65・66より古く、H53より新しい。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は不明である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。東側の大部分は斜面に流出したと考える。

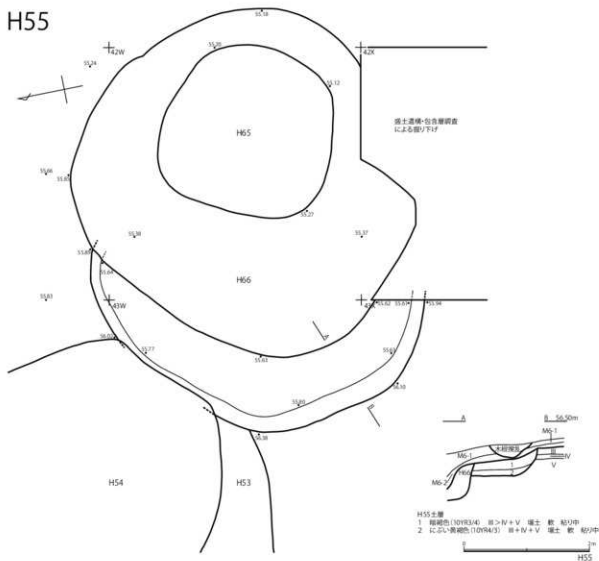
**付属遺構** 検出しなかった。(佐藤)

**遺物出土状況** 493点の遺物が出土した。覆土から円筒下層b式から円筒下層d1式にかけての破片が出土している。同一個体のまとまりは無い。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半である。円筒下層d1式古段階以前の住居である。M6-2(円筒下層b式の時期)より古く、H53(円筒下層b式の時期)より新しいことから、円筒下層b式段階の住居である。(大泰司)

**H56** (図Ⅲ-1-104・105、-2-61・62、-3-32、図版40・106・107・136)

**位置・立地** 63-R・S区 標高58.8m付近の緩斜面



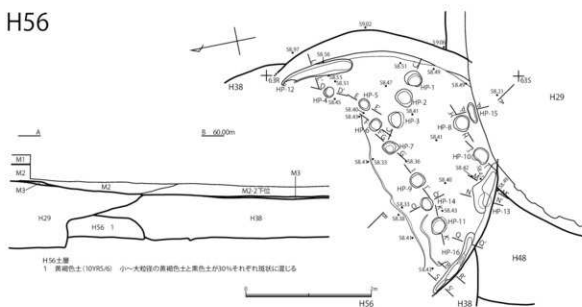
**確認・調査** M2盛土調査中、暗褐色土の入り込みを検出した。平面形は楕円形で一部発掘区外へ延びているようであった。長軸と発掘区壁に沿って土層観察用の土手を残し、掘り下げたところ、5軒の竪穴住居と考えられる遺構が切り合っている状況と判断した。そのうち切り合い土、一番新しい2軒であるH29・38を順に調査した。これらの間について土層断面を観察した段階で、黄褐色土の入り込みがあった。そこで2軒の調査終了後、この入り込みを精査し、掘り下げた。すると明瞭な床面と壁面際を巡る柱穴と溝を検出したため竪穴住居と判断した。H29・38より古く、H48より新しい。

**覆土** 残存する覆土について、観察した土層断面、V層起源の黄褐色土が床面から上面にかけて堆積している。

**構造** 平面形は不整な楕円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**付属遺構** 今回検出した範囲から、主柱穴は判然としなかった。南西壁と北東壁に溝が巡る。また南隅には柱穴を埋めるかのように掘られた溝HP-13がある。ただしこのH56HP-13(2)に示した柱穴は元来H48の柱穴がH56構築時に埋められた可能性も考えられる。また溝HP-12は上面観で覆土に変化が観察できたためそれを図示した。

## H56



図Ⅲ-1-104 H56平面図・土層断面図

また床面を掘り下げた段階で、貼り床と考えて調査した部分について、剥がしたところ柱穴HP-4～7・9・11・14が並んでいた。これはH38の壁際にあたる部分に並んでいたため、H38の壁柱穴と判断した。このうちHP-6上面に砂ピットの砂が分布していたのはH56平面形中央に位置することからH56起源の砂と考える。支柱穴が検出できなかったのはH38に所属するとした付属遺構に含まれているものを弁別できなかった。H38HP-5は覆土が半分以上V層土で埋められていることと、H56平面形における位置関係からH56付属遺構とも考えられる。また加えて、構築時に埋められたものを検出できなかった可能性もある。また南壁側に幅の狭いベンチ状の張り出しがある。

**遺物出土状況** 903点の遺物が出土した。覆土上部から出土した点取りNo.1～4(1～4・6)についてはM4盛土からの流入と考える。覆土下部点取りNo.5(5)と時期差がある可能性がある。床直については厳密には覆土最下部と考える。

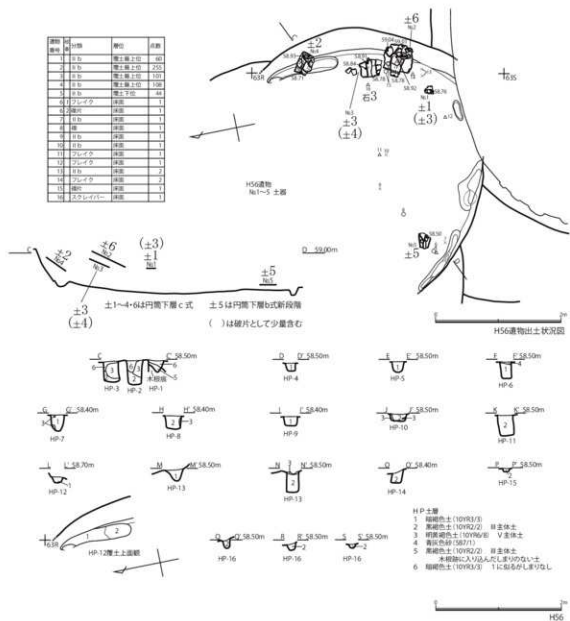
土器については、覆土最上部では1～3・6の四個体が復元可能であった。円筒下層c式のまとまりとして判断した。覆土下位、床面近くで、底部が欠損した円筒下層b式の新段階のものが出土している。円筒下層c式直前、円筒下層b2式新段階あるいは円筒下層b2～c式と並行している可能性がある。調査範囲内で類例が無い。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺構周囲の遺物出土状況から縄文時代前期後半と考える。円筒下層c式直前、円筒下層b2式後半の時期。(大森司)

## H57 (図Ⅲ-1-106、-2-62・63、-3-33、図版40・107・108・137)

**位置・立地** 84～86・P・Q区

**確認・調査** 82～86ラインのV層上面で黒色土の落ち込みを確認、調査区の北壁側にトレンチを設定して調査を開始した。調査区は幅1～2m程度と狭くなっているためトレンチ調査と並行してグリッドを掘り下げた。途中、調査区の奥(西端)で階段状にV層を検出したが、手前(東側)では検出できないため断層のずれによる段差の可能性もある。その後、段状の低い部分でもトレンチ内でV層を検出し、グリッド全体を掘り下げたところ付属ピットや灰跡の掘り込みを確認したのでベンチ構造を



図Ⅲ-1-105 H56遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

伴う84～86ラインにかけてと82～84ラインにかけてを2軒の竪穴式住居跡と認定した。84～86ラインをH57、もう一方をH58とした。調査は床面及びベンチを検出した後、付属ピット、炉跡の調査を行い、調査区北壁のセクション図を作成し終了した。

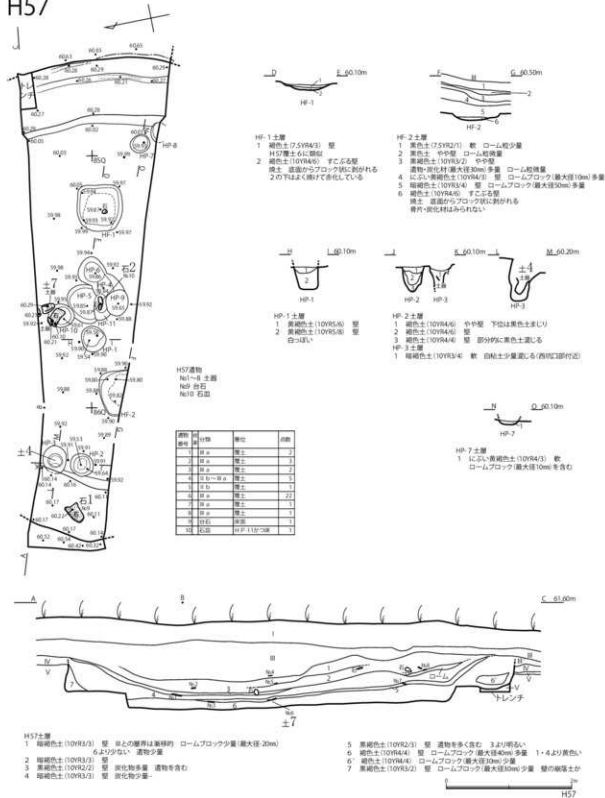
**覆土** 1～7層に分層した。住居廃絶後、6層(褐色土)で埋まり、その後二回にわたり腐植土(3層及び5層)が堆積した。上位の3層(黒褐色土)は炭化物を多く含み、下位の5層(黒褐色土)は遺物を多く含んでいた。3層の上位は1・2層(暗褐色土)でロームブロックと遺物を少量含む。

**構造** ベンチ構造をもち、床面及びベンチからの立ち上がりは急である。平面形は不明である。長軸方向は南-北と考えられる。重複は無い。

**床面** 東西の床面レベルを比較すると西側が約10cm低い。掘り込み面から床面までの深さは約90cmである。



## H57



図Ⅲ-1-106 H57平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

**ベンチ** 東西で幅約1mのベンチを確認した。床面との比高差は約25cmである。

#### 付属遺構

- ・地床炉 HP-1・2の二か所検出した。地床炉は約70cm四方で深さ約10cmの方形の掘り込みを伴っている。東側のHP-1は全体を検出したが、西側のHP-2は南側が調査区域外に延びており全体の約1/2を検出した。炉跡二か所の新旧関係は不明である。調査中の肉眼観察では覆土中に骨片などはみられなかった。HP-1覆土1層を土壌水洗したところ、炭化物の中から中えい破片2点、子囊菌の炭化子囊1点が検出された。
- ・柱穴 付属ピットは11基検出した（HP-1～11）。これらは深さにより2種類に分けられる。一つは深さ30cm以上で円筒状に掘られたものが6か所ある（HP-1～3、8～10）。このうちHP-3では完形土器一個体が口縁を上にして住居の内側に向けやや斜めに埋められていた。もう一つは深さ10cm以下の浅い皿状ピットが床面中央部に重複して4基検出された（HP-4～6、11）。なお、HP-2・3は西側の床とベンチ際に、HP-8は東側の床とベンチ際に検出された。
- ・周溝 東側のベンチ上で2条確認された。壁側のものは幅約5cm、西側のものは幅約10cm、深さ約8cmである。

**遺物出土状況** 床面出土の遺物は少ないが、西側のベンチ上面で長方形の台石1点。付属ピットHP-3の中に埋設された完形土器一個体。HP-10・11の検出面で礫が各1点出土した。HP-10の上面から浅鉢が一個体出土している。（佐川）

1,118点の遺物が出土した。土器は縄文時代前期後半、中期前半の土器片、焼成粘土塊が出土している。HP-3の埋設土器とHP-10上面出土の浅鉢は、縄文時代中期初頭、円筒上層a式最古段階と判断した。石器はフレイク、礫の出土が目立つ。

**時期** HP-3の埋設土器及びHP-10の上面から出土した浅鉢により、縄文時代中期初頭、円筒上層a式最古段階の頃と考えられる。（大森司）

**H58** (図Ⅲ-1-107・108、-2-64～69、-3-33、カラー図版2、図版41・108～113・137)

**位置・立地** 82～84・P・Q区

**確認・調査** H57と同様に82～86ラインのV層上面で黒色土の落ち込みを確認、調査区の北壁側沿いにトレンチを設定して調査を開始した。トレンチ調査により住居跡H58の壁面および床面を確認後、遺構全体の覆土を掘り下げた。覆土中からは同一個体の土器が多く出土したことから、その個体ごとに出土状況（または出土範囲）を実測し、遺物を取り上げながら覆土を掘り下げた。覆土中から出土した土器は少なくとも十六個体を数えた。これらの土器は西側に多く分布し、付属ピットHP-1上面などから多く出土した。なお、トレンチ調査中、東側で溝状の落ち込みを検出、調査の結果Tピット（TP7）であることを確認した。

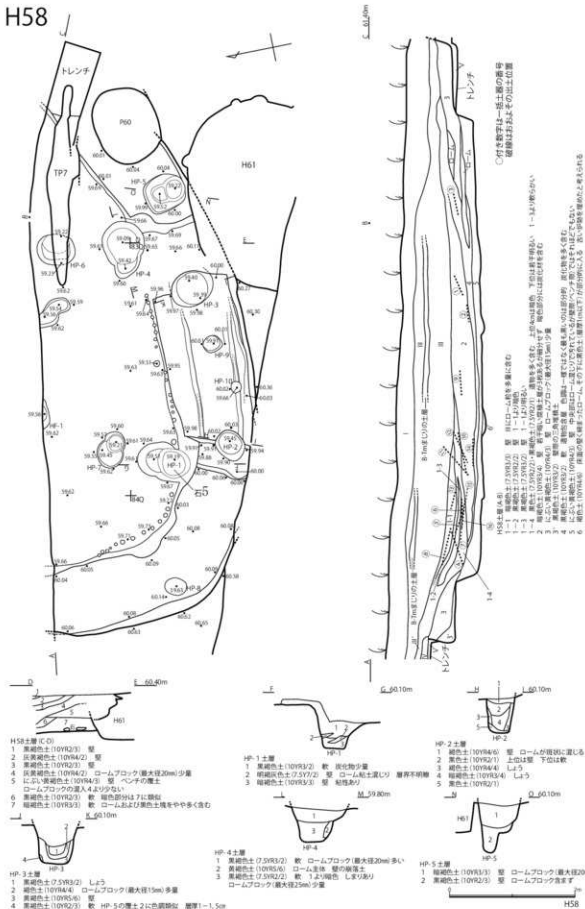
床面およびベンチ、壁面を検出後、付属ピット、北壁のセクションを実測、最後に床面を精査し調査を終了した。調査によって検出したのは竪穴の南端部分である。

**覆土** 1～5層に分層した。住居跡廃絶後、3.5層（にぶい黄褐色土）で埋まり、5層の直上に4層（黒褐色土）が堆積、その上に腐植土の2層（暗褐色土）、そして遺物を多く含む1層（黒色・黒褐色土）がある。

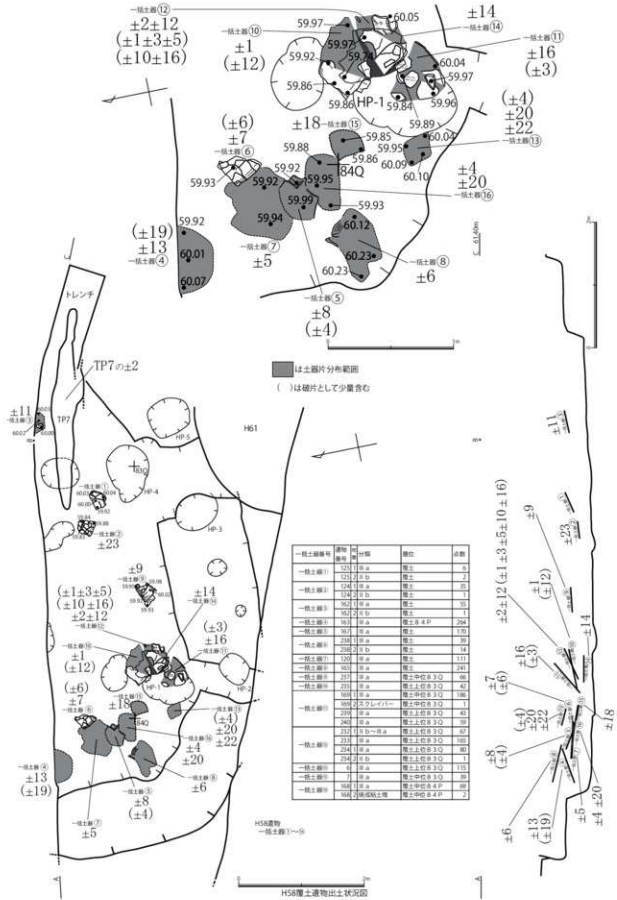
**構造** ベンチ構造をもち、立ち上がりは急である。東側ではP60とH61、TP7に切れ、南西側では壁面の一部が調査区域外に延びている。平面形は不明である。長軸方向は南南東-北北西。

**床面** 床及びベンチ上面は平坦である。掘り込み面から床面までの深さは約90cmである。

H58

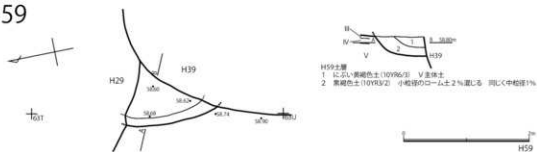


図Ⅲ-1-107 H58平面図・土層断面図・付帯遺構土層断面図



図Ⅲ-1-108 H58遺物出土状況図

## H59



図Ⅲ-1-109 H59平面図・土層断面図

## 付属遺構

- ・地床炉 北壁のセクションにかかる古い炉跡と考えられるものを一か所検出した(HF-1)。深さ約6cmの掘り込みをもち、覆土は堅くしまった褐色ローム土である。その覆土を取り除いたところ底面は被熱により橙褐色に赤化している。
- ・柱穴 付属ピットは10基検出した。床面上で4基(HP-1・4・6・7)、ベンチ上で6基(HP-2・3・5・8~10)である。このうち柱穴の可能性のあるものは7基である(HP-1~7)。HP-1,4は床面とベンチの際にあり、径50~70cm、床面からの深さは約50cmである。底面では砂利が検出された。HP-1・4と対応するように約1m内側でHP-6・7が検出された。深さは床面から約40cmである。ベンチ上面の付属ピットで柱穴の可能性のあるものは3基ある(HP-2・3・5)。これらは径約40~70cm、深さは58~82cm(ベンチ上面から)である。この他に床面を精査した際に壁際から径4~10cm程度の小柱穴状ピットが10~20cm間隔で30基検出された。このうち5基について半截したところ深さは平均16cmである。
- ・周溝 南側のベンチ上面で3条検出した。壁面側に2条、ベンチ内側に1条である。周溝の大きさは3条とも上端の幅約8cm、下端の幅は約4cmである。
- ・ベンチ 幅1.1~1.35mで全周めぐっている。ベンチは途中二か所で分断されている。西側の溝はHP-2にかかり、幅約50cm、深さ15cmである。東側はHP-3,4にかかり、幅約100cm、深さ約35cmである。この溝の性格については不明である。床面との比高差は約40cmである。

**遺物出土状況** ベンチ上の西側の溝上面から北海道式石冠が1点出土した。(佐川)

4268点の遺物が出土した。覆土からは土器が十六個体復元可能であった。焼成粘土塊も出土する。石器はフレイク、礫の出土が目立つ。次にスクレイパーが目立つ。

**時期** 覆土から出土した同一個体の土器はほとんど円筒上層a式古段階である。また隣接するH57と形状がよく似ることから縄文時代中期初頭、円筒上層a式最古段階と考える。(大泰司)

## H59(図Ⅲ-1-109、-2-69、図版41・113)

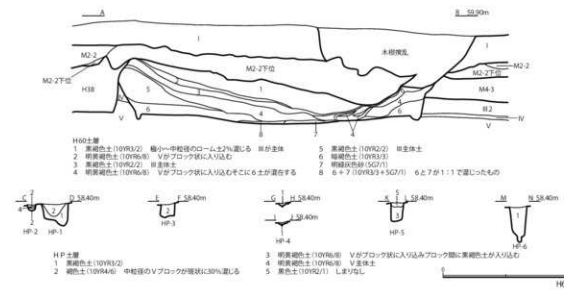
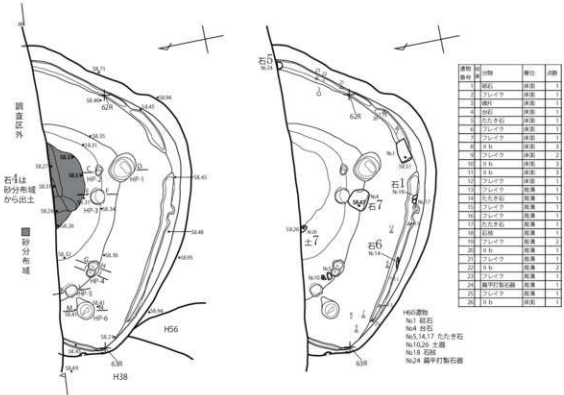
**位置・立地** 61・62-T区 標高58.6m付近の緩斜面

**確認・調査** 61・62-T区においてH39を調査中、壁面南側に、黒褐色土の入り込みを検出した。入り込みとV層の境界線は明瞭で、床面・壁面を思わせた。そこで土層観察用の土手を残して掘り下げたところ、堅穴住居がH29と39より古い遺構と判断した。また、外形線から遺構は大型と判断、堅穴住居跡とした。

**覆土** 覆土下半部南半分はⅢ層土主体である。中央にはV層土が入り込む。

**構造** 平面形は不整な円形を想定する。残存する床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

H60



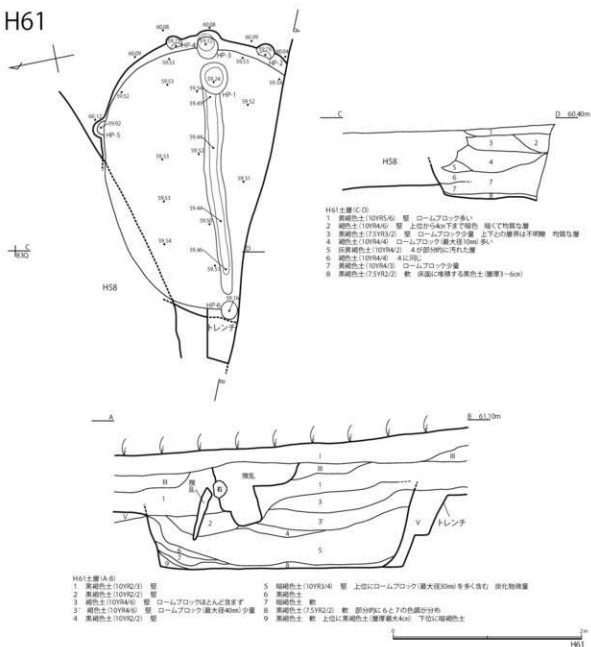
図Ⅲ-1-110 H60平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

付属遺構 今回検出した範囲では検出してない。

遺物出土状況 34点の遺物が出土した。覆土から遺物が出土した。磨滅した円筒下層b式が出土した。流入と思われる。石器は、フレイク、礫、スクレイパーが出土した。

時期 遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期と考える。H29(円筒下層d1式古段階)・H39(円筒下層c式)より古いため、円筒下層c式より古い住居である。(大泰司)

## H61



H60 (図Ⅲ-1-110、-2-70、-3-34、図版42・114・137)

位置・立地 61・62-Q・R区 標高58.6m付近の緩斜面

確認・調査 H38の土層堆積状況を確認するため発掘区壁面に沿ってトレンチをいれたところ、H38の東側壁面が他の遺構を切っている状況が断面から読み取れた。そこでH38調査終了後、両調査区を掘り下げたところ楕円形に黒褐色味のあるM4盛土中に黄褐色味のあるM2盛土が入り込んで、一部は発掘区外に延びている状況であった。M2盛土部分を掘り下げて、トレンチを延長し、床面を確認した。そこから壁面を検出した事から、竪穴住居と判断した。

覆土 上部はⅢ層起源の黒褐色土とV層起源の黄褐色土が互層となっている。下部にはⅢ～V層が混在した褐色土が堆積している。床面中央部の窪みには青灰色砂が薄く溜まっている。

構造 平面形は不整な円形で四角形に近い形状を想定。残存する床面は平坦で、中央が浅く窪む。

周溝が巡るが、隅で途切れがちである。壁は急に立ち上がる。

**付属遺構** 柱穴と思われるもの、そうでないもの、いずれの付属遺構も中央部窪みの際に並ぶ。中央部窪みには青灰色砂が溜まる。砂ピットは検出できなかった。HP-3と5はそれぞれHP-1と6際があり、形状は小型の柱穴を思わせる。主柱穴に対して補助的な柱の可能性もあるHP-2・4は浅い。それぞれHP-1と6近くにあり、そのことや、窪みの縁にあることに機能上の意味があるかどうかは不明である。壁際には側溝がめぐるが住居の角隅には溝が無い。

**遺物出土状況** 959点の遺物が出土した。床直とした遺物は厳密には覆土最下位である。側溝からの遺物出土については比較的多くまとまっている。土器について、円筒下層c式から下層d1式の出土は無い。これはH48やH50、H59、H62も同じ状況である。いずれも同時期、円筒下層b式以後の時期と考える。石器はフレイクの出土が多い。

**時期** 遺構周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の時期と考える。M4-3を掘り込んでいる。H38（円筒下層d1式以前）、H56（円筒下層b式前半より新しい）より古い。円筒下層b2式後半より古い。（大泰司）

#### H61（図Ⅲ-1-111、カラー図版2、図版41）

**位置・立地** 82・83-Q区

**確認・調査** 82Q区のV層上面で長円形の落ち込みを確認、調査区南壁に設定したトレンチにより、壁の立ち上がり及び床面を検出した。また、北側に隣接するH58との重複関係を確認するため83ラインに沿ってトレンチを設定した。2本のトレンチにより壁面及び床面を検出したので覆土を掘り下げた。その後、床面の溝状遺構と壁際に掘られた付属ピットを確認して調査を行った。なお、南側は遺構全体の1/4程度が調査区域外に延びている。

**覆土** 1～9層に分層した。大まかには床面に堆積する軟らかい8層（黒褐色土）とその直上に堅くしまった5層（暗褐色土）がある。

**壁面** 全周ともに立ち上がりは急である。平面形は長円形で、軸は東-西方向である。H58を切る。

**床面** はほぼ平坦である。遺構の長軸と同一方向で長さ2.2m、幅15～20cm、深さ5～8cmの溝がある。溝の西端は閉じているが、東端には径30×34cm、深さ29cmの円形ピット（HP-1）がある。

**付属ピット** 全部で6基ある（HP-1～6）。HP-1は床面の項で説明したものである。残り5基はいずれも壁際に掘られ、東側に4基（HP-2～5）、西側に1基（HP-6）ある。溝状遺構の両端にある2基（HP-3・6）は、径20～30cm、確認面から深さ約1mで床面を掘り込んでいる。他の3基は径16～22cm、深さ20～37cm、ピットの底面は床面より上位にある（HP-2・4・5）。（佐川）

**遺物出土状況** 133点の遺物が出土した。覆土から円筒下層c式～下層d2式の破片が混在して出土する。流入と思われる。いずれも磨滅著しい。あるいは砕片のため、図化できなかった。石器はフレイクが目立つ。

**時期** H58より古く、遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層c式以前の可能性がある。

（大泰司）

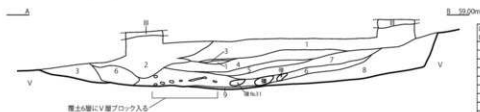
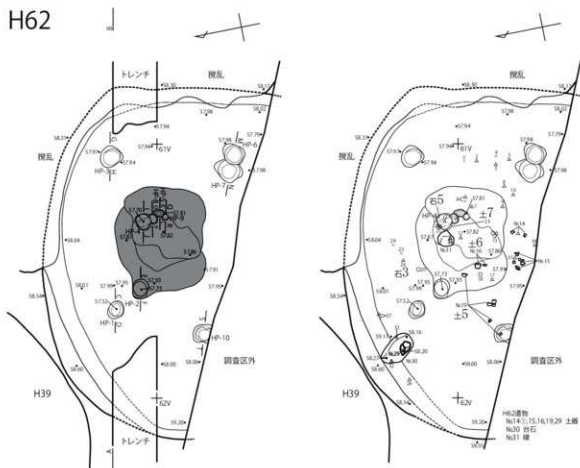
#### H62（図Ⅲ-1-112、-2-71、-3-35、図版43・115・138）

**位置・立地** 60・61-U・V区 標高58.2m付近の緩斜面

**確認・調査** 60・61-U・V区においてにぶい黄褐色～褐色土の入り込みを検出した。その平面形は楕円形に近かったが、周辺の木根痕によって不明瞭だった為、中央にトレンチを入れた。遺構底面らし



H62



H62土層

- 1 以上の黄褐色土(109R7/4) M3層相当上二枚層 グラビティ化したロームのままとり
- 2 褐色土(109R4/6) 小~中粒種のVブロックが埋込に5%混入
- 3 黄褐色土(109R2/1) 柱主体土、風乾水・水痕による腐敗
- 4 黄褐色土(109R2/2)

- 5 黄褐色土(109R5/4) V主体土
- 6 黄褐色土(109R3/3) 大粒種のVブロックが埋込に20%混入
- 7 黄褐色土(109R3/3)
- 8 黄褐色土(109R3/2)
- 9 黄褐色砂(SB7/1)

V主体土  
大粒種のVブロックが埋込に  
20%混入



- HP土層
- 1 黄褐色土(109R3/2) しまりなし
  - 2 黄褐色土(109R3/3) 大粒種のVブロックが埋込に20%混入 H62遺土6

- 3 明黄褐色土(109R6/6) V主体土
- 4 黄褐色土(109R3/2) Vが埋込に5%混入 H62遺土6
- 5 黄褐色砂(SB7/1)

遺物番号	層	種類	層の 占数
1	1	土層	3
2	2	フレイク	1
3	3	フレイク	1
4	4	土層	5
5	5	土層	1
6	6	フレイク	1
7	7	フレイク	1
8	8	フレイク	1
9	9	フレイク	1
10	10	フレイク	1
11	11	フレイク	2
12	12	ガラス片	1
13	13	フレイク	1
14	14	土層	3
15	15	フレイク	1
16	16	土層	2
17	17	土層	4
18	18	土層	1
19	19	土層	14
20	20	土層	1
21	21	フレイク	1
22	22	フレイク	1
23	23	フレイク	2
24	24	土層	2
25	25	土層	10
26	26	土層	1
27	27	フレイク	1
28	28	フレイク	1
29	29	土層	2
30	30	土層	1
31	31	土層	1
32	32	フレイク	1
33	33	土層	1
34	34	フレイク	1
35	35	フレイク	1
36	36	フレイク	1

図Ⅲ-1-112 H62平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

きしまりのあるV層面を検出したが、木根痕が著しいため多少強めに掘りぬいた。するとその規模から堅穴住居と思われる遺構が発掘区境界に位置しており、その東側壁面が木根によって破壊されている状況が明らかとなった。発掘区内の遺構を掘り下げ、壁面残存部分を検出し、木根によって破壊されている場所については、極力残存部の確認をした上で、想定できる壁面を復元するように調査した。西側壁面についても新移層の乱れた面を掘り下げているため掘り込み面は不明瞭である。

**覆土** 上部～覆土最下位にかけてはV層起源の黄褐色土が主体であり、覆土中位にⅢ層起源の黒褐色土が入り込んでいる。ただし堅穴住居西側については覆土最下位から上面にかけてⅢ層起源の黒褐色土が入り込んでいる。床面中央部は窪んでおり、そこには砂ビットの砂、青灰色砂が溜まっている。

**構造** 平面形は不整な円形で四角形に近い形状を想定。残存する床面はおおよそ平坦だが、中央にむかって窪む。中央部分がさらに窪む。残存する壁は急に立ち上がる。

**付属遺構** 東—西方向の長軸を対称軸として主柱穴の可能性が高いものが4本配される。いずれも中央部窪みの外側に並ぶ。HP-3に対して7、HP-1に対して10がある。HP-7の脇には浅いHP-6があるが用途は不明である。中央部窪みには青灰色砂が溜まる。窪みの中、西側にHP-2があり、東側にHP-4・5・8・9がある。HP-2はV層土が覆土中に挟まっている。HP-4と8は砂ビットであり、HP-5・9は砂ビットと連続した細長い穴である。柱というよりは、砂ビットに関連する作業に必要な可能性があるが不明である。

**遺物出土状況** 1,628点の遺物が出土した。床面出土とした遺物は厳密には覆土最下位からの出土と考える。土器は、覆土から円筒下層d2式新段階と円筒下層b式が出土する。円筒下層d2式は覆土上位からの出土で周囲の盛土出土遺物と接合する。床面からは円筒下層b式が出土する。石器はフレイク、礫の出土が目立つ。次にスクレイパー、Uフレイクが目立つ

**時期** 遺構周辺の遺物出土状況と形状から縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の住居と考える。

(大泰司)

#### H63 (図Ⅲ-1-113、-2-71、-3-35、図版44・115・138)

**位置・立地** 48・49-T・U区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** H18の掘り上げ土とM5盛土のトレンチ調査中に、断面で検出した。その後、M5盛土を掘り下げると、Ⅲ2層上面で、M5盛土の落ち込みを検出した。当初はH64との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ2層上面と考える。土層の観察から、M5盛土とP22より古く、H64より新しい。H64→H63→M5盛土→H28→H24→P44

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は楕円形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

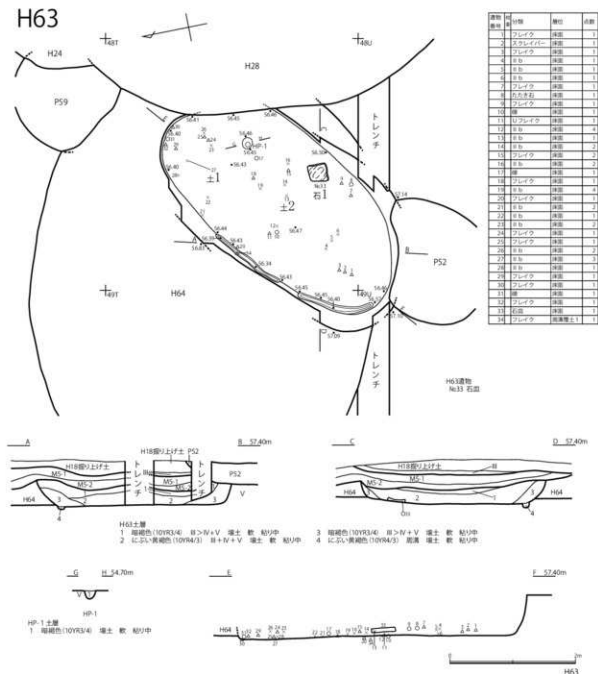
**付属遺構** HP-1は主柱穴で、1本柱と考える。HP-1は浅いものである。周溝は西側の長軸側を中心に、壁際に沿って1条巡る。

**遺物出土状況** 床面から石皿(1・点取りNo33)が出土した。(佐藤)

48点の遺物が出土した。土器は、床面から円筒下層b式が出土する。同一個体のまともは無い。石器はフレイクが目立つ。

**時期** M5より古い。遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期。(大泰司)

#### H64 (図Ⅲ-1-114・115、-2-72、-3-36、図版44・115・138)



図Ⅲ-1-113 H63平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

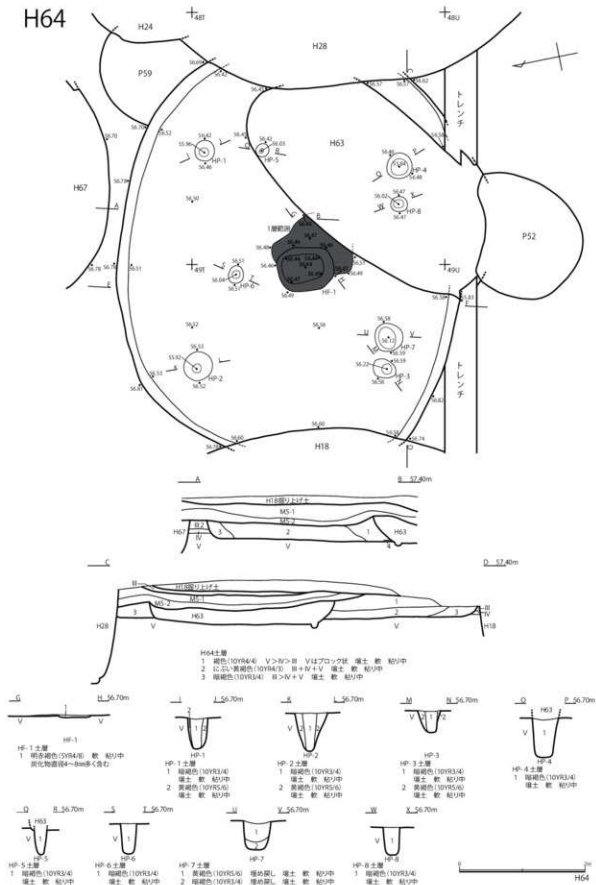
位置・立地 48・49-S-U区 調査区中央の平坦面

確認・調査 H18の掘り上げ土とM5盛土のトレンチ調査中に、断面で検出した。その後、M5盛土を掘り下げると、Ⅲ2層上面で、M5盛土の落ち込みを検出した。当初はH63との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ-2層上面と考える。土層の観察から、M5盛土とH63より古く、P59より新しい。

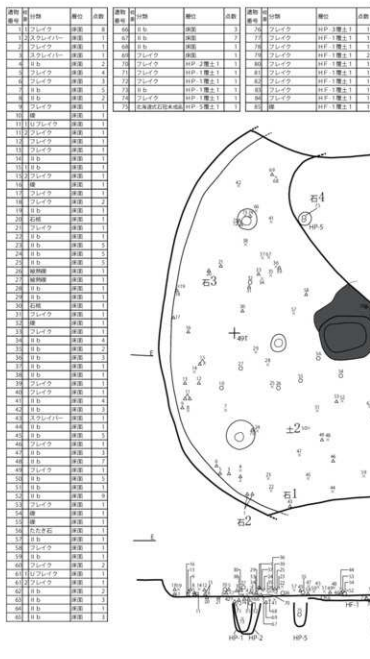
覆土 自然堆積である。

構造 平面形は隅丸長方形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

付属遺構 HF-1は隅丸長方形の浅い掘り込みのある地床炉である。HP-1~4・7は主柱穴で、HP-1~3・



図Ⅲ-1-114 H64平面図・土層断面図・付属遺構土層断面図

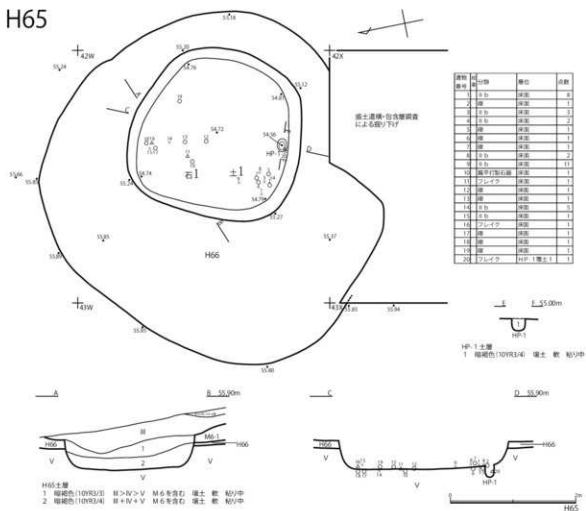


図Ⅲ-1-115 H64遺物出土状況図

7またはHP-1~4の4本柱と考える。HP-1~3は掘りかたがある。HP-7は覆土が埋め戻しであることから、HP-4・7は柱穴を改変した可能性がある。HP-5・6・8は支柱穴の可能性があり、HP-5は先端がやや尖る杭状である。(佐藤)

**遺物出土状況** 217点の遺物が出土した。土器は、覆土や床面から円筒下層b式が出土する。石器はフレイクが目立つ。

**時期** M5より古い、遺物出土状況から縄文時代前期後半円筒下層b式の時期。H64はH63よりも古い。(大泰司)



図Ⅲ-1-116 H65平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図

H65 (図Ⅲ-1-116、-2-72、-3-36、図版45・115・138)

位置・立地 41・42-W 調査区東側の斜面

確認・調査 Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、H53～55・66の周辺を精査中に、Ⅲ層の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを設定し掘り進めると、M6盛土の落ち込みを確認した。さらに掘り進めると暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH66との切り合い関係が不明瞭だったが、平坦な床面と柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層観察から、M6盛土とH53・55・66より新しい。

覆土 自然堆積である。

構造 平面形は方形である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。

付属遺構 HP-1は主柱穴で、1本柱と考える。南側の壁近くに位置する。

(佐藤)

遺物出土状況 81点の遺物が出土した。土器は、床面および覆土から円筒下層b式から下層d1式が出土している。しかし磨滅が著しい。石器はフレイク、礫が目立つ。

時期 M6盛土より新しく、H66より新しい。遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層d1式の時期という可能性がある。

(大泰司)

**H66** (図Ⅲ-1-117、-2-72、-3-36・37、図版45・115・138・139)

**位置・立地** 41-43-V~X 調査区東側の斜面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、H53-55・65の周辺を精査中に、Ⅲ層の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを設定し掘り進めると、M6盛土の落ち込みを確認した。さらに掘り進めると暗褐色土の落ち込みを検出した。当初はH55・65との切り合い関係が不明瞭であったが、平坦な床面と炉跡、柱穴、周溝を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ層下位と考える。土層の観察から、H53・55より新しく、M6-2層とH65より古い。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は隅丸方形である。床面はほぼ平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。

**付属遺構** HF-1はほぼ中央に位置する浅い掘り込みのある隅丸方形または隅丸長方形の地床炉である。HP-1~5は主柱穴で、HP-1・2とHP-3・4、HP-5、さらに1本はH65により削平されたと考え、4本柱と考える。HP-1・2とHP-3・4は柱穴を改変した可能性がある。HP-6は浅く小さい先端が尖る杭状の柱穴で、HF-1に伴うと考える。(佐藤)

**遺物出土状況** 102点の遺物が出土した。土器は、覆土から円筒下層b式のみ出土し、床面からは円筒下層b式から円筒下層d1式が出土している。そのうち円筒下層d1式についてはH65覆土中とM6-1、42Wの土器片と同一個体の可能性が高い。円筒下層d1式の古手は42Yにも類例ある。円筒下層d1式が出土しているが、M6より古いので混在の可能性が高い。柱穴覆土から円筒下層b式が出土している。石器は、フリイクが目立つ。次に扁平打製石器が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から縄文時代前期後半、円筒下層b式から円筒下層d1式の直前という可能性がある。(大森司)

**H67** (図Ⅲ-1-118、-2-72、-3-37・38、図版46・116・139・140)

**位置・立地** 48・49-R・S 調査区中央の平坦面

**確認・調査** Ⅲ2層上面を精査中に、M5盛土の落ち込みを検出した。平坦な床面、炉跡、柱穴を確認し、住居跡と判断した。堆積状況から、掘り込み面はⅢ2層上面と考える。土層の観察から、M5盛土より古い。

**覆土** 自然堆積である。

**構造** 平面形は卵形である。床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

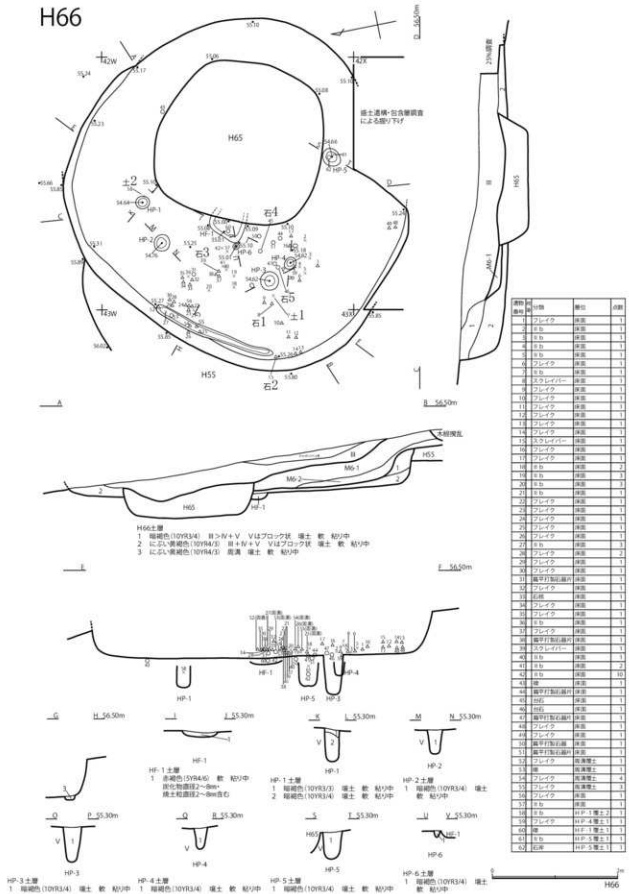
**付属遺構** HF-1は隅丸長方形の浅い掘り込みのある地床炉である。1層は砂質が強く、遺跡内の他の炉跡と異なる。HP-1・2は主柱穴で、2本柱と考える。HP-3は浅いもので、支柱穴または内部施設に伴う柱穴の可能性が高い。

**遺物出土状況** 床面から砥石・点取りNo62(6)と大型の扁平な台石・点取りNo58・64(8・7)とNo63がまとまって出土した。床面から大型の偏平な礫がまとまって出土する状況はH30・52の出土状況と類似する。(佐藤)

252点の遺物が出土した。土器は、床面および付属遺構HP-1から出土した破片が接合し、一個体復元できた。古い要素を持つ円筒下層b2式土器である。石器は、フリイクの出土が目立つ。

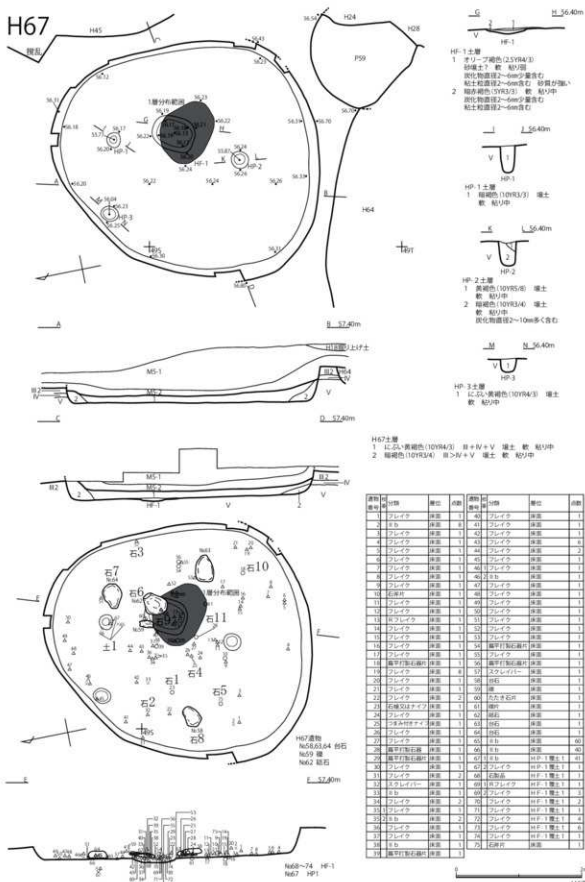
**時期** M5より古い。床面出土の土器から縄文時代前期後半、円筒下層b2式前半である。(大森司)

H66



図Ⅲ-1-117 H66平面図・土層断面図・遺物出土状況図・付属遺構土層断面図





## (2) 土 坑

P43 (図Ⅲ-1-119、-3-39、図版47・140)

位置・立地 73-R・S区 標高58.4m付近の平坦面

**確認・調査** V層上面で、灰黄褐色土の入り込みとして確認した。その平面形は隅丸方形に近い楕円形をしている。土坑の可能性を認め、長軸に土層観察用の土手を残し、入り込みを掘り下げたところ、坑底面と壁面を検出した。土層断面上半はV層主体の覆土1層、下半はⅢ層起源なのか黒色土混じりの覆土2層である。いずれもV層起源の偽礫が多い部分（それぞれ1層・2層）が混在する。埋め戻された遺構の可能性が高いと判断した。土層観察用土手を掘り下げたところ、17本の石鏝がまとまって出土した。あまりに密に集中していたため、掘りだした際に、一部の石鏝について先端の向きがずれた可能性がある。点取り№25～28（掲載番号2・6・5・3）は明らかに動いたため図化せずそのまま取り上げたものである。ただし、現場での観察では、仮に動かなかつたとしても、先端の向きが、もともと不揃いであった可能性が高い。形態・規模から判断して土坑墓と推定した。覆土上部から散点的に11点の遺物が出土した。そのうち、覆土1層（覆土上半）から円筒下層b式から下層c式の破片が出土した。同一個体のまとまりは無い。合計で29点の遺物が出土した。まとまって出土した石鏝は覆土2層最下位からの出土であり、土坑底面に相当すると考える。他は流入の可能性もある。平面形は楕円形である。

**時期** 遺構の確認状況と、周辺の出土遺物から判断するならば、縄文時代前期後半～中期前葉の可能性はある。縄文時代前期後半青森市石江遺跡、秋田県大館市池内遺跡において類似した遺構が検出されている。石鏝がまとまって取められており、墓の可能性があるとされている。覆土の状況から当該遺構もその可能性が高い。類例を踏まえると、円筒下層b2式から下層c式の時期である。（大泰司）

P44 (図Ⅲ-1-119、図版47)

位置・立地 47S 調査区北東側の緩斜面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、にぶい黄褐色土の落ち込みを検出した。平面形は楕円形である。坑底は平坦面があり、中央がさらに円形の土坑状に落ち込む。壁はなだらかに立ち上がる。土層の観察からH24より新しい。

**覆土** 覆土は埋め戻しと考える。（佐藤）

**遺物出土状況** 20点の遺物が出土した。土器については、覆土2層と3層から円筒下層b式が出土。同一個体のまとまりは無い。石器はフレイクが目立つ。扁平打裂石器の出土がある。

**時期** 遺物出土状況から、少なくとも円筒下層b式以後の遺構である。中期前半の住居より新しいため、縄文時代中期前葉以降の土坑である。（大泰司）

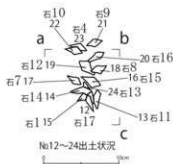
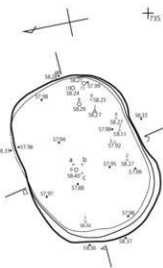
P45 (図Ⅲ-1-120、-2-73、図版47・116)

位置・立地 63-R・S区 標高59.1m付近のM2盛土下でH29覆土中

**確認・調査** M2盛土層を掘り下げ、H29の平面形が明瞭となる面を検出した。するとH29覆土とした範囲内に楕円形をした、ややしまりのあるにぶい黄褐色土の入り込みを検出した。短軸北側を半截したところしまった坑底とそれに連続する壁面を検出した。完掘し、底面・壁面ともに明瞭な土坑と判断した。平面形は楕円形である。用途は不明である。

**覆土** 覆土中の遺物は流入と考えられる。また土坑底面西側部分は堅く締まっている。覆土はV層起源であるが、覆土にしまりはなく、盛土中からの掘り込みで、盛土由来の土が流入した覆土と考える。

P43

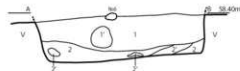


遺物No1~11 礎土  
 遺物No12~28 礎土2だが、厚が異なる(土相断面に近い)  
 遺物No25~26は12~23の直上、表示せず  
 No25は石2, No26は石6, No27は石5, No28は石3  
 No12=154457961m  
 No16=194457362m  
 No20=234457969m

遺物番号	分類	層位	遺跡
1	石	礎土1	1
2	石	礎土1	1
3	石	礎土1	1
4	石	礎土1	1
5	ブロンズ	礎土1	1
6	礎土	礎土1	1
7	石	礎土1	2
8	石	礎土1	1
9	石	礎土1	1
10	礎土	礎土1	1
11	礎石	礎土1	1
12	礎土	礎土2	1
13	礎土	礎土2	1
14	礎土	礎土2	1
15	礎土	礎土2	1
16	礎土	礎土2	1
17	礎土	礎土2	1
18	礎土	礎土2	1
19	礎土	礎土2	1
20	礎土	礎土2	1
21	礎土	礎土2	1
22	礎土	礎土2	1
23	礎土	礎土2	1
24	礎土	礎土2	1
25	礎土	礎土2	1
26	礎土	礎土2	1
27	礎土	礎土2	1
28	礎土	礎土2	1

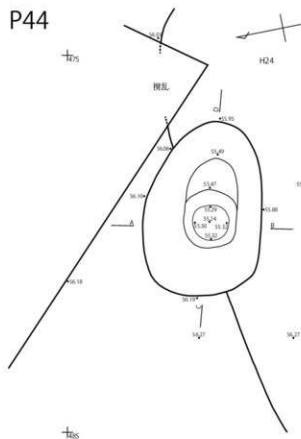
P43土層

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりなし ややねばる 粒径1~3cmのロームブロック残骸は5%混入
- 1' 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりなし ややねばる 粒径1~3cmのロームブロック残骸は20%混入
- 2 暗灰褐色土(10YR4/1) 非団体の土 黄褐色土(10YR3/1)が混在する 粒径1~3cmのロームブロック残骸は5%混入
- 2' 暗灰褐色土(10YR4/1) 非団体の土 黄褐色土(10YR3/1)が混在する 粒径1~3cmのロームブロック残骸は40%混入



P43平面図(断面図)

P44



P44土層(断面図)  
 1 比色黄褐色(10YR5/6) V>B>H 礎土 粘り中  
 2 黄褐色(10YR2/3) B>H+V 礎土 粘り中  
 3 暗褐色(10YR3/1) B 礎土 粘り中



P44平面図(断面図)

図Ⅲ-1-119 P43平面図・土層断面図・遺物出土状況図・P44平面図・土層断面図

**遺物出土状況** 87点の遺物が出土した。土器は、流入と思われる覆土から、円筒下層b式と円筒下層d2式が出土する。同一個体のまとまりは無い。円筒下層d2式の破片には木目状燃糸文風の単軸絡条体第一類と多軸絡条体を組合せた個体や、単軸絡条体第四類のものが含まれる。今回調査範囲内で、単軸絡条体第四類地紋の個体について、口縁から底部まで一個体分の復元に至るものは無かった。石器はフレイクの出土が目立ち、礫、スクレイパーなども出土している。

**時期** H29より新しく、また遺物出土状況から判断するならば、縄文時代前期後半、円筒下層d2式以降の時期と考える。(大泰司)

#### P46 (図Ⅲ-1-120)

**位置・立地** 53V区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** H23の壁面で確認した。この面を土層断面として設定し調査を行なった。坑底は丸く、壁は急に立ちあがる。性格は不明。平面形は円形である。

**覆土** Ⅲ層とM2盛土層の流入土を主体とする、自然堆積層である。

**遺物出土状況** 坑底付近から、砂岩製の円礫が1点出土している。(村田)  
土器の出土は無い。

**時期** 遺構の検出状況から、縄文時代前期後半、Ⅱ群b類土器の時期である。H23より新しいことから、円筒下層c式あるいは下層d1式より新しい。(大泰司)

#### P47 (図Ⅲ-1-120、-2-73、図版48・116)

**位置・立地** 36U区 調査区東側の斜面

**確認・調査** 遺構確認範囲のV層上面を精査中に、暗褐色土の落ち込みを検出した。

平面形は楕円形である。坑底は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

**覆土** 覆土は埋め戻しである。(佐藤)

**遺物出土状況** 49点の遺物が出土した。遺物は覆土2層を中心に出土した。土器は覆土2層から円筒上層d式土器破片が出土した。胎土等からこれらの破片はほとんどが同一個体由来のものと考えた。まとまった出土は無く、もとの器形がわからない状態であった。接合したが、復元には至らなかった。石器は礫、スクレイパーが出土した。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代中期前半、円筒上層d式の時期の土坑と考える。(大泰司)

#### P48 (図Ⅲ-1-121、図版48)

**位置・立地** 51V区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した。長軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。性格は不明。平面形は不整である。

**覆土** Ⅲ層とV層を主体とする、自然堆積層である。

**遺物出土状況** 覆土から、砥石や石皿などが出土している。(村田)

28点の遺物が出土した。覆土から円筒下層d1式が出土している。同一個体のまとまりは無い。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層d1式以降の可能性がある。(大泰司)

### P45



**P45土層**

- 1 灰色黄褐色土(10YR5/4) やや粗まる
- 2 灰色黄褐色土(10YR5/4) かたくしまる

- A 灰色黄褐色土(10YR7/4) H29層土1~2相層 図CLまる M.2に相当する
- B 黄褐色土(10YR2/3) H29層土4相層 遺跡はしるすが壁面はしまっていない
- C 灰色黄褐色土(10YR4/3) 住居(H.26)への開扉を主体とした土がやや粗んでいる

↑CL15



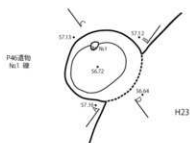
### P46

↑CL3U

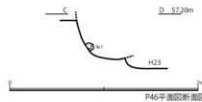


**P46土層**

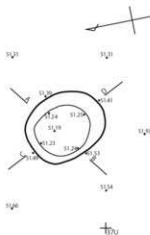
- 1 黄褐色土(10YR3/3) 目+IV+V Vはロームブロック
- 2 黄褐色土(10YR2/2) 目+IV 隙間
- 3 褐色土(10YR4/4) IVの隙間
- 4 黄褐色土(10YR5/4) V+IV しまりなし
- 5 灰色黄褐色土(10YR4/3) 目+IV もろみ



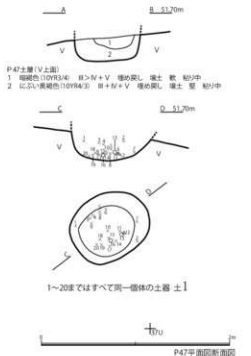
遺物番号	種類	単位	数量
1	土	遺	1



### P47



遺物番号	種類	単位	数量
1	土	埋土	4
2	土	埋土	2
3	土	埋土	3
4	土	埋土	2
5	土	埋土	1
6	土	埋土	1
7	土	埋土	1
8	土	埋土	2
9	土	埋土	3
10	土	埋土	4
11	土	埋土	1
12	スライパ	埋土	1
13	土	埋土	1
14	土	埋土	1
15	土	埋土	1
16	土	埋土	1
17	土	埋土	2
18	土	埋土	4
19	土	埋土	2
20	土	埋土	1



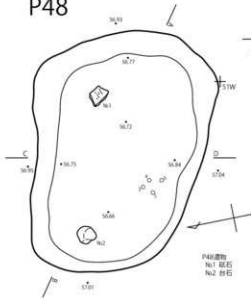
**P47土層(V上面)**

- 1 黄褐色土(10YR3/4) 目+IV+V 埋込なし 隙土 軟 砂中
- 2 灰色黄褐色土(10YR4/3) 目+IV+V 埋込なし 隙土 硬 砂中

1~20mまではすべて同一団体の土層 土1

図Ⅲ-1-120 P45平面図・土層断面図・P46平面図・土層断面図・P47平面図・土層断面図・遺物出土状況図

P48



P48土層  
1 緑褐色土 (10YR 5/3) H+V Vはローム下の砂利層が少量混入。しまりあり



遺物 番号	品名	層位	数量
1	磁土	層土	1
2	磁土	層土	1
3	磁土	層土	1
4	磁土	層土	1
5	磁土	層土	1
6	磁土	層土	1



P48平面図断面図

P49



P49土層  
1 暗褐色土 (10YR 3/4) H+V Lしまりあり 粘り強い  
2 灰色-黄褐色土 (10YR 6/5) H>H+V Vはロームブロック 硬い  
3 褐色土 (10YR 4/4) H+H Vは硬質  
4 褐色土 (10YR 4/6) H>H 硬い 粘り強い

遺物 番号	品名	層位	数量
1	磁土	層土	1
2	磁土	層土	1
3	磁土	層土	1
4	磁土	層土	1



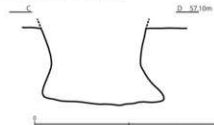
P49平面図断面図



P49遺物  
No.1 磁

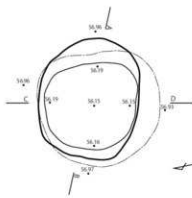


P50土層  
1 緑褐色土 (10YR 3/5) H+H 粘り強い  
2 褐色土 (7.5YR 4/3) H>H+H 2層土 砂利物少量混入  
3 褐色土 (7.5YR 4/3) H>H+V 砂10mm程度のロームブロック少量混入  
4 緑褐色土 (10YR 3/5) H>H+V  
5 褐色土 (10YR 4/6) V>H+H+H+H 2層土 Vは硬2~3cmのロームブロック  
6 褐色土 (7.5YR 4/4) H+H+V 砂を伴ふ  
7 暗褐色土 (7.5YR 4/6) Vの硬質  
8 暗褐色土 (7.5YR 4/6) H>V Vの硬質  
9 褐色土 (7.5YR 4/4) H+V>H 砂を伴ふ  
10 暗褐色土 (10YR 2/5) H>H しまりなし  
11 暗褐色土 (10YR 3/5) H>H しまりなし  
12 黄褐色土 (10YR 5/6) V>H しまりあり



P50平面図断面図

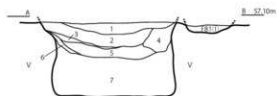
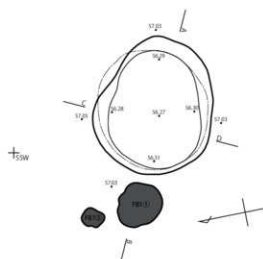
P50



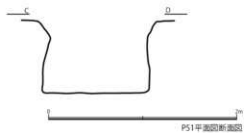
↑ 54Y

図Ⅲ-1-121 P48平面図・土層断面図・遺物出土状況図・P49平面図・土層断面図・遺物出土状況図・P50平面図・土層断面図

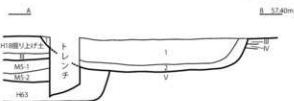
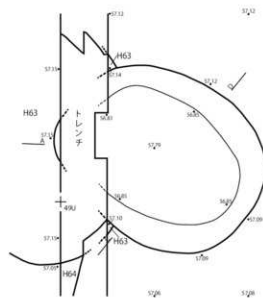
P51



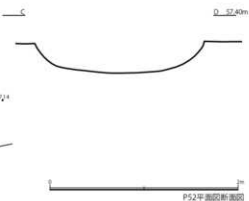
- P51土層
- 1 稲褐色土(10YR3/3) Ⅱ>Ⅳ 粘土細かい
  - 2 濃い黄褐色土(10YR4/3) Ⅳ少Ⅲ 粘土細かい
  - 3 稲褐色土(10YR5/4) Ⅱ>Ⅳ+Ⅴ ⅤはⅢ+Ⅳのロームブロック少量混じる
  - 4 黄褐色土(10YR5/6) Ⅳ+Ⅴ ⅤにⅤの礫等
  - 5 黄褐色土(10YR5/8) Ⅱ+Ⅲ ⅡにⅤのロームブロック混じる
  - 6 稲褐色土(10YR5/4) Ⅱ+Ⅲ ⅢがⅢが少し混じる
  - 7 稲褐色土(10YR5/4) Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ ⅣはⅣ少量混じる Ⅴのロームブロック少量に混じる



P52



- P52土層(Ⅱ中～上段)
- 1 濃い黄褐色土(10YR5/4) Ⅱ+Ⅳ+Ⅴ 壤土 粘り中
  - 2 稲褐色土(10YR5/4) Ⅱ>Ⅳ+Ⅴ 壤土 粘り中



図Ⅲ-1-122 P51とF81平面図・土層断面図・P52平面図・土層断面図

## P49 (図Ⅲ-1-121、図版48)

**位置・立地** 51X区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した。長軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で、壁は急に立ち上がる。性格は不明。平面形は長方形である。

**覆土** Ⅲ層・Ⅳ層を主体とする自然堆積層である。一部、V層がブロック状に混入している。

**遺物出土状況** 覆土中から、つまみ付ナイフ、スクレイパーなどの剥片石器が出土した。(村田)

43点の遺物が出土した。覆土から円筒下層c式土器片が出土している。同一個体のまともは無い。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層c式以降の土坑の可能性ある。(大泰司)

## P50 (図Ⅲ-1-121、図版49)

**位置・立地** 53・54-W区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した長軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で、壁はオーバーハングしている。遺構の形態から貯蔵穴と考えられる。平面形は円形である。

**覆土** 坑底付近はⅢ層を主体とする黒色土が堆積している。中層はⅢ層・Ⅳ層の流入土とオーバーハング部の崩落土であるV層が互層となる部分が見られた。上層はⅢ層・Ⅳ層とM2盛土層の褐色土が少量混じって堆積している。

**遺物出土状況** 安山岩製の石鋸、頁岩製の両面調整石器やスクレイパーなどの剥片石器類が覆土上部から出土している。大半はM2盛土層の流入土からの出土である。(村田)

80点の遺物が出土した。覆土から円筒下層b式土器片が出土している。同一個体のまともは無い。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑の可能性ある。(大泰司)

## P51 (図Ⅲ-1-122、-3-39、図版49・140)

**位置・立地** 54・55-W区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した長軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦である。壁はややオーバーハングしているが、土層にV層の崩落土がほとんど見られないため、断面形はフラスコ型より円筒型に近い。性格は形態から貯蔵穴と考えられる。西側の坑口部付近に焼土が二か所検出された。F81である。この土坑とはほぼ同時期のものと考えられる。平面形は円形である。

**覆土** 坑底から土坑の中位までは、Ⅲ・Ⅳ層とM2盛土層が混じった褐色土が堆積している。自然堆積と考えられるが、土質がほぼ均質なため比較的短時間で堆積したのと考えられる。

**遺物出土状況** 覆土から石錐、石斧などの石器類が少量出土した。(村田)

135点の遺物が出土した。覆土から円筒下層b式土器片が出土している。同一個体のまともは無い。新段階のものも含まれる。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑の可能性ある。(大泰司)

## P52 (図Ⅲ-1-122、図版49)

**位置・立地** 48・49-T・U区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、にぶい黄褐色土の落ち込みを検出した。平面形は楕



円形である。坑底は平坦で壁はなだらかに立ち上がる。M5(円筒下層b式新段階)やH18の掘り上げ土(円筒下層d2式)を切っている。よってH18よりは新しい。

**覆土** 覆土は埋め戻しと考える。当初、覆土1層はH28の掘り上げ土の可能性もあった。しかし、H28が円筒下層c式の時期の住居と判断された。円筒下層d2式の住居・H18の掘り上げ土を切っていることからその可能性は無くなった。(佐藤)

**遺物出土状況** 171点の遺物が出土した。土器は、覆土から円筒下層b式が出土している。同一個体のまとまりは無い。新段階のものも含まれる。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑という可能性があった。周辺遺構との新旧関係から円筒下層d2式以降の土坑である。(大泰司)

### P53 (図Ⅲ-1-123、図版50)

**位置・立地** 47X区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** H27の壁近くを調査中に暗褐色土の落ち込みを検出した。平面形は円形である。坑底は平坦で壁はオーバークラフするフラスコ状である。土層の観察からH27より古い。

**覆土** 覆土は自然堆積である。(佐藤)

**遺物出土状況** 36点の遺物が出土した。土器は、覆土から円筒下層b式が出土している。同一個体のまとまりは無い。新段階のものも含まれる。円筒下層b式以降の土坑という可能性がある。覆土から円筒下層b式が出土している。同一個体のまとまりは無い。新し手のものも含まれる。石器はフレイクの出土が目立つ。

**時期** H27(円筒下層c式)の時期より古い。周辺遺構との新旧関係と遺物出土状況から 縄文時代前期後半、円筒下層b式以降で、円筒下層c式以前の土坑という可能性がある。(大泰司)

### P54 (図Ⅲ-1-123、-2-74、カラー図版2、図版50・116・117)

**位置・立地** 81・82-Q区

**確認・調査** V層上面で長円形の落ち込みを確認したので、東西の長軸方向にセクションベルトを設定して覆土を掘り下げた。底面近くで土器一個体が出土したのでそれを残しながら底面まで掘り下げた。土層断面を実測後、セクションベルトの除去と底面の精査を行い調査を終了した。平面形は隅丸長方形、軸の方向は、東一西である。重複はない。

**覆土** 1~9層に分層した。覆土は人為的な埋め戻しではなく、ほとんど自然堆積によるものと考えられる。1層は付近の包含層でも確認されている中期前葉の盛土的土層と考える。

**壁面** 立ち上がりは急である。

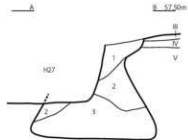
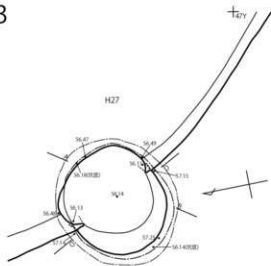
**底面** ほほ平坦である。

**付属ピット** 溝状遺構1条とピット2基(PP-1・2)がある。溝状遺構は遺構の長軸方向と同じく底面中央から西側の壁面下端まで掘られている。大きさは長さ1.3m、幅12cm、深さ1.6~9.0cmで、東端から約13cmのところ長円形のピットが1基ある(PP-2)。規模は径34cm、深さ21cmである。また、南東端の壁際から長円形のピットが1基検出されている(PP-1)。大きさは径48×41cm、深さは底面から約27cmである。

**遺物出土状況** 底面中央のPP-2上面では土器一個体が口縁部を北東に向け横倒しの状態で出土した。(佐川)

273点の遺物が出土した。土坑底面の土器は円筒下層b2式古段階と考える。石器は礫一点を除いて、

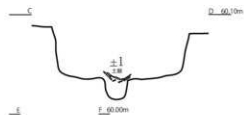
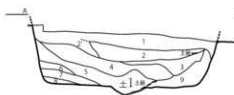
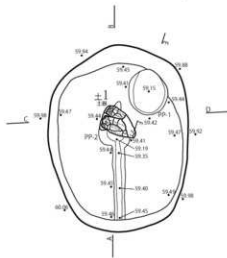
P53



P53土層 (井中位~下位)  
 1 黒褐色(10YR3/4) 土 > 1/2 埋め戻し 壤土 軟 粘)中  
 2 暗赤黒褐色(5YR2/4) 埋め戻し 壤土 軟 粘)中 現土粒直径2~6mm程度を含む  
 3 暗赤褐色(5YR3/6) 埋め戻し 壤土 軟 粘)中 現土粒直径2~10mm多く含む



P54

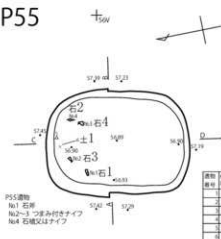


P54土層  
 1 灰色~黄褐色土(10YR4/3) 堅 均質な層  
 2 黒褐色土(10YR2/3) 堅  
 2' 灰色~黒褐色土(10YR4/3) 2との境界は不明確  
 コーム目(最大1.5cm)少量  
 3 黒褐色土(10YR2/2) 堅 コーム少量  
 全より粗い心(全より粗平明か)  
 4 暗褐色土(10YR3/4) 軟  
 コーム目(最大2.5cm)多い  
 5 黒褐色土(10YR3/1) 軟 全より粗い  
 コーム目少量  
 6 黒褐色土(10YR2/3) 軟 2より若干粗い  
 5~9と同い性質  
 7 褐色土(10YR4/6) 軟  
 8 黒褐色土(10YR2/2) 軟  
 9 黒褐色土(10YR2/2) 堅 3と同い性質  
 コーム目少量

P54遺跡小ピット土層  
 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 軟 炭化物少量  
 コーム目(最大20mm)を含む  
 2 黒褐色土(7.5YR3/2) 軟  
 白く硬い粘土(10YR5/0)とコーム目(最大20mm)を含む

図Ⅲ-1-123 P53平面図・土層断面図・P54平面図・土層断面図・遺物出土状況図

P55

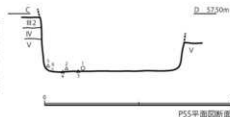


P55遺物  
No1 石  
No2 トフまみ付キナイフ  
No4 石槌又はナイフ

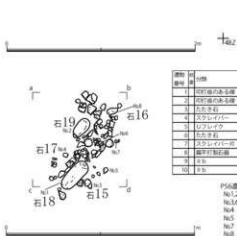
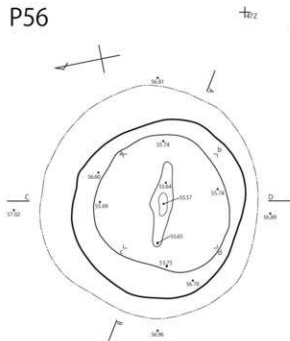
遺物番号	品名	層位	出所
1	石	遺跡 1	
2	トフまみ付キナイフ	遺跡 1	
3	トフまみ付キナイフ	遺跡 1	
4	石槌又はナイフ	遺跡 1	
5	コシロフタ	遺跡 1	
6	土	遺跡 10	



P55土層  
1 褐色土(10YR4/6) Ⅱ+Ⅴ しまりあり 周辺層7の層上げ土  
2 黒褐色土(10YR2/3) Ⅱ2主体 Ⅴ少量含む 径1cmのブロック状 塊め戻し  
3 黒褐色土(10YR3/3) Ⅱ2+Ⅱ+Ⅴ 塊め戻し  
4 黒褐色土(10YR4/4) Ⅱ2+Ⅱ+Ⅴ Ⅴはブロック状 塊め戻し

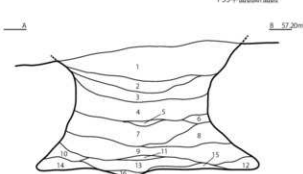


P56

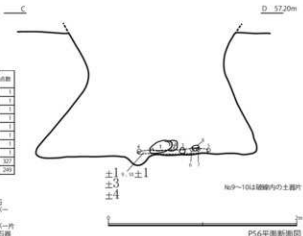


遺物番号	品名	層位	出所
1	穴打痕のある土	遺跡 1	
2	穴打痕のある土	遺跡 1	
3	穴打痕	遺跡 1	
4	スラレナイフ	遺跡 1	
5	コシロフタ	遺跡 1	
6	石	遺跡 1	
7	スラレナイフ	遺跡 1	
8	扁平打製石	遺跡 1	
9	土	遺跡 10	
10	土	遺跡 20	

P56遺物  
No1 土層  
No16 たたき石  
No4 スラレナイフ  
No5 コシロフタ  
No7 スラレナイフ  
No8 扁平打製石



P56土層  
1 褐色土(10YR3/3) H19の層上げ土  
2 黒褐色土(10YR2/2) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ  
3 褐色土(10YR4/6) Ⅱ+Ⅴ  
4 褐色土(10YR3/3) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ Ⅴはブロック状 炭化物含む M4盛土相当  
5 黒褐色土(10YR4/6) Ⅴ主体 塊め戻し  
6 黒褐色土(7.5YR3/4) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 塊め戻し  
7 黒褐色土(7.5YR2/2) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 炭化物少量含む 塊め戻し  
8 褐色(7.5YR6/3) Ⅴの層上げ土とⅤ Ⅴはブロック状 塊め戻し  
9 黒褐色土(10YR3/4) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 炭化物少量含む 塊め戻し  
10 黒褐色土(10YR6/6) Ⅴ+Ⅱ+Ⅴ 塊め戻し  
11 黒褐色土(10YR3/3) Ⅱ主体 塊め戻し  
12 黒褐色土(10YR6/6) Ⅴ+Ⅱ+Ⅴ 塊め戻し  
13 黒褐色土(10YR3/4) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 炭化物少量含む 塊め戻し  
14 黒褐色土(10YR2/2) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 塊め戻し  
15 褐色土(7.5YR4/4) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ Ⅴはブロック状 炭化物少量含む  
16 褐色土(7.5YR4/4) Ⅱ+Ⅱ+Ⅴ 粒状 毛入り



図Ⅲ-1-124 P55平面図・土層断面図・遺物出土状況図・P56平面図・土層断面図・遺物出土状況図

覆土からの出土である。フレイクと礫、たたき石の出土が目立つ。(大泰司)

**時期** 底面出土の土器の時期と考える。縄文時代前期後半、円筒下層b2式の時期。(佐川)

**P55** (図Ⅲ-1-124、-2-74、-3-39、図版50・117・140)

**位置・立地** 56-U・V区 標高57.2m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した短軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で、壁は急に立ち上がる。埋め戻しの覆土と遺物の出土状況から土坑墓と考えられる。平面形は長方形である。

**覆土** 覆土1層は周辺の遺構の掘り上げ土と思われる褐色土である。覆土2～3層はⅢ2層を主体としⅣ・V層が混入する埋め戻しの土である。

**遺物出土状況** 長軸方向の北側の坑底から、石鏃1点、石槍またはナイフ2点、つまみ付ナイフ2点、スクレイパー1点などの剥片石器類と緑色泥岩製の石斧1点がまとまって出土している。また、北側壁付近の土坑底面から、Ⅱ群b類土器が一個体(1・点取りNa6)出土した。(村田)

171点の遺物が出土した。覆土からは、円筒下層b式から下層d式にかけての土器が出土した。覆土中での同一個体のまとまりは無かったが、一部Na6に接合した。円筒下層b2式土器と考える。

**時期** 坑底出土の遺物から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式の時期である。新しい時期の遺物が覆土に混在していると考える。(大泰司)

**P56** (図Ⅲ-1-124、-2-74、-3-40・41・42、図版51・117・141・142)

**位置・立地** 47Y区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認した東西方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で中央に溝状の窪みがある。壁はオーバーハングし、断面の形態はフラスコ状を呈する。形態および覆土の状況と坑底の遺物出土状況から、貯蔵穴を転用した土坑墓と考えられる。平面形は長方形である。

**覆土** 覆土5～16は埋め戻しの覆土で、Ⅲ・Ⅳ層に炭化物が少量混じる暗褐色土が主体である。覆土6～8層は褐色の焼土粒を大量に含んでいる。坑底部を埋め戻した後に散布されたものと考えられる。上層は、周辺の遺構の掘り上げ土と思われる暗褐色土やⅢ・Ⅳ層を主体とする黒褐色土が流入している。最上部にH19の掘り上げ土と考えられる暗褐色土が見られる。

**遺物出土状況** 939点の遺物が出土した。大半が坑底部からの出土である。土器はⅡ群b類のものが少なくとも二個体がまとまって出土した。石器は剥片石器類の石槍ナイフ1点、スクレイパー8点が、石斧類は石斧1点と未成品2点が、礫石器類は扁平打製石器7点、たたき石3点、砥石2点が出土した。そのほかに石棒状を呈する敲打痕のある礫が2点と石製品が1点出土している。(村田)

整理の結果、覆土からは円筒下層b2～c式が比較的まとまって出土していた。磨滅がひどい。底からはほぼ一個体分の円筒下層b2～c式が出土した。おおよそ復元できたが、底部はあったが、打ち欠かれたためか胴部との接点が無かった。調査時に確認できた二個体とは1と3・4の事と思われる。

**時期** 坑底出土の遺物から、縄文時代前期後半、円筒下層b2～c式期の土坑と考える。(大泰司)

**P57** (図Ⅲ-1-125、図版51)

**位置・立地** 47Z区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 盛土層調査後に遺構確認調査を行い、V層上面で確認し短軸方向で半割し掘り下げた。

覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で壁は急に立ち上がる。埋め戻しの覆土から土坑墓の可能性はある。平面形は楕円形である。

**覆土** 覆土1層はⅢ・Ⅳ層を主体とする自然堆積層。覆土2層～4層は、Ⅳ・Ⅴ層を主体とする埋め戻しの土層である。覆土5層は崩落。

**遺物出土状況** 覆土からスクレイパー、Uフレイクなどの剥片石器類と砂岩製の石鋸が1点出土している。(村田)

19点の遺物が出土した。同じく覆土からは磨滅した円筒下層b式土器が出土している。

**時期** 遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の可能性はある。(大泰司)

#### P58 (図Ⅲ-1-125)

**位置・立地** 48乙区 標高57m付近の平坦面

**確認・調査** 調査区に隣接する市道の法面で確認した。短軸方向で半割し掘り下げた。覆土の堆積と断面の形態から遺構と判断した。坑底は平坦で壁は急に立ち上がる。市道工事により半分ほど欠損している。埋め戻しの覆土から土坑墓の可能性はある。平面形は隅丸長方形である。

**覆土** 遺構の中位までⅢ・Ⅳ・Ⅴ層それぞれがブロック状の混じる褐色土で埋められている。しまりのある暗褐色土層を挟んで、上層はほぼⅤ層の明黄褐色土で覆われている。

**遺物出土状況** 覆土から頁岩製の剥片が散見される程度である。8点の遺物が出土した。(村田)

覆土から土器の出土が無い。スクレイパーとした遺物も調整、使用痕ともに不明瞭である。

**時期** 時期は不明だが、周囲の遺物出土状況から、円筒下層式に関連する土坑の可能性もある。(大泰司)

#### P59 (図Ⅲ-1-126、図版52)

**位置・立地** 48-S・T区 調査区中央の平坦面

**確認・調査** H64周辺のⅢ2層上面を精査中に、暗褐色土の落ち込みを検出した。平面形は円形である。坑底は平坦で壁は急角度に立ち上がる。平面での切り合い関係により、H64より古い。

**覆土** 覆土は自然堆積である。(佐藤)

**遺物出土状況** 19点の遺物が出土した。覆土から円筒下層b2式が出土している。他にフレイクが1点出土している。

**時期** H28 (円筒下層c式の時期)より古い。円筒下層b2式新段階を主体とするM5より古い。周囲の遺構との戦後関係から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式以降で円筒下層b2式新段階以前の可能性がある。(大泰司)

#### P60 (図Ⅲ-1-126、-2-75、図版52・118)

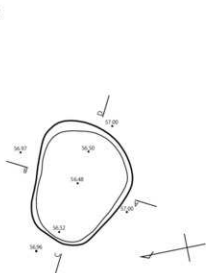
**位置・立地** 82-P・Q区

**確認・調査** H58東側の壁面を調査中に長円形の落ち込みを確認した。東西方向に半載したところ長円形のビットであることを確認した。平面形は長方形である。長軸方向は、東南東-西北西である。H58の壁面及びベンチを掘り込んでいる。

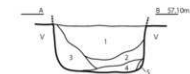
**覆土** 1～4層に分層した。2層(褐色土)、3層(暗褐色土)は炭化物を微量含む。また3層ではロームブロックを少量含んでいる。

**壁面** 全周ともに急である。

P57



±462

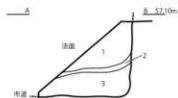


- P57土層
- 1 暗褐色土(10YR3/3) Ⅱ+Ⅲ/ しまり層
  - 2 濃い黄褐色土(10YR5/4) V主体 粘質土
  - 3 褐色土(10YR4/6) Ⅱ+Ⅲ>Ⅱ Vはブロック状が少量混じる
  - 4 褐色土(10YR4/4) Ⅱ+Ⅲ
  - 5 暗褐色土(10YR4/5) V 崩落

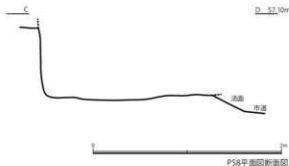


P57平面図断面図

P58



- P58土層
- 1 暗黄褐色土(10YR6/6) V>Ⅱ
  - 2 暗褐色土(10YR3/3) Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ/ しまり層
  - 3 褐色土(10YR4/4) Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ/ まべてブロック状



P58平面図断面図

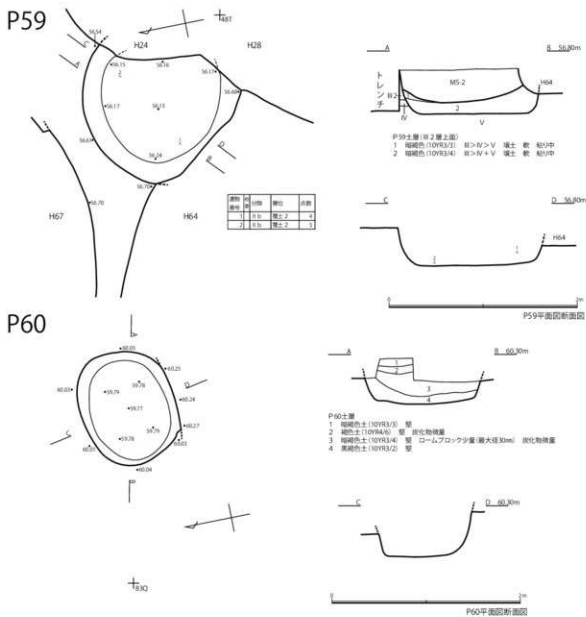
図Ⅲ-1-125 P57平面図・土層断面図・P58平面図・土層断面図

底面 平坦である。

遺物出土状況 遺物は出土しているが点取り遺物は無い。

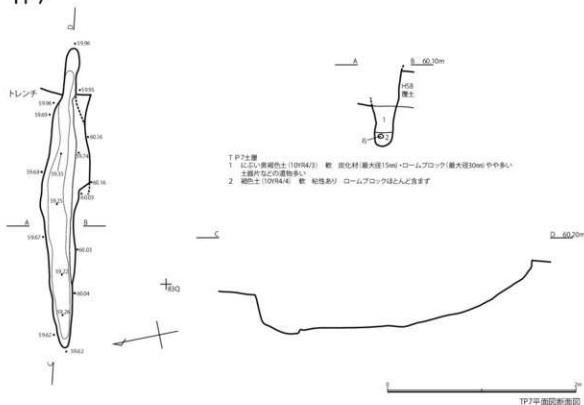
時期 H58を掘り込んでいることから縄文時代中期初頭より新しい。

(佐川)



図Ⅲ-1-126 P59平面図・土層断面図・遺物出土状況図・P60平面図・土層断面図

## TP7



図Ⅲ-1-127 TP7平面図・土層断面図

## (3) Tピット

TP7 (図Ⅲ-1-127、-2-75、カラー図版2、図版52・118)

位置・立地 82・83-P区

確認・調査 H58調査のために北壁に沿って開けたトレンチ内の東側で溝状の落ち込みを検出した。覆土を掘り下げたところH58のベンチと床面を掘り込むTピットであることを確認した。西側ではH58の柱穴HP-6を掘り込んでいる。

覆土 覆土上部はH58調査のためのトレンチにより掘り上げてしまった。このためセクションを実測できたのは底面から約40cm上までである。覆土は2層に分層した。1層には濃い黄褐色土で、流れ込みの炭化材と遺物を多く含んでいる。2層は褐色土でロームブロックをほとんど含まない。TP7からは173点の遺物が出土した。平面形は溝状で、軸は、東-西方向。H58覆土を掘り込んでいる。

壁面 西側の立ち上がりは急であるが、東側に向かって緩やかに立ち上がっている。

底面 西端の浅い落ち込みはH58HP-6の底面である。

遺物 173点の遺物が出土した。覆土から円筒下層d2式と円筒上層a式が出土している。掲載遺物はいずれも覆土出土遺物と遺構立地する82P区出土遺物が接合した。

時期 縄文中期初頭のH58を掘り込んでいることからそれより新しい。

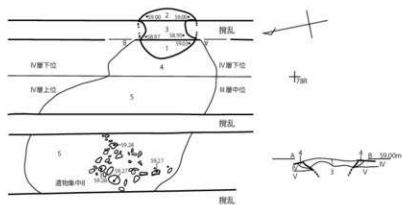
(佐川)

円筒上層a式以降のものとする。

(大泰司)



## F63 遺物集中8



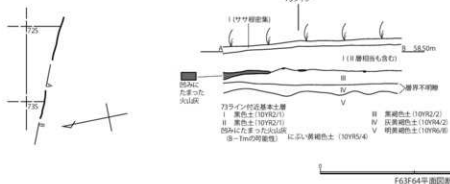
- F63土層
- 1 赤褐色土(S19R5/6) 4が酸化したもの 酸化層(Ⅲ) 粒径1~2cmのロームブロック層状に5%混じる
  - 2 濃い赤褐色土(S19R5/4) 4が酸化したもの やや酸化 粒径1~2cmのロームブロック層状に5%混じる
  - 3 褐色土(S19R6/6) Vが酸化したもの 粒径0.5~2cmの酸化した軽い土粒が5%混じる
  - 4 暗灰色土(S19R6/1) 柱主体 本層腐乱
  - 5 黒色土(S19R1/7/1) 柱主体 本層腐乱
  - V 暗黒褐色土(S19R6/8)
  - Ⅳ 灰黒褐色土(S19R4/2)

## F64



- F64土層
- 1 赤褐色土(S19R5/6) Ⅳが酸化したもの 酸化層(Ⅲ)
  - 2 暗赤褐色土(S19R3/6) Ⅳが酸化したもの やや酸化
  - 3 黒色土(S10R2/1) 柱主体 本層腐乱

## 73ライン基本層序



図Ⅲ-1-128 F63と遺物集中8平面図・土層断面図、F64平面図・土層断面図、73ライン基本層序

### (4) 焼土

今回調査範囲内で確認した焼土には、通常の調査で検出した焼土(F63~65・F79~82遺物は第2分冊に図示)と盛土のトレンチ調査で確認した焼土の二種類がある。後者はF66~78(遺物は第3分冊に図示)である。F77はM4-6相当である。F69はH21堅穴住居廃絶後の窪み、F78はH29堅穴住居廃絶後の窪みに位置する焼土である。F69は円筒下層d1式新段階、F78は円筒下層d2式のまとまった廃棄を伴う。いずれも焼土の下位に円筒下層d1式古段階、焼土の上に円筒下層d2式のまとまった廃棄が確認された。層位と出土遺物の関連については第Ⅴ章2項にまとめた。F69とH21については図Ⅵ-2-5~6、F78とH29については図Ⅵ-2-1と図Ⅵ-2-4にまとめた。盛土には掲載した

以外にも、不整な範囲・形状で分布する小規模な焼土があったが、トレンチ内で出土したものを精査し、他は特徴的なものや目立った焼骨等の確認に努めるものとした。基底部の焼土はM4-6、M5-2、M6-2等の土層名をつけた。

盛土のトレンチでは遺物の位置を記録して取り上げを行った。一個体がその場で潰れていると思われた土器（洗ってみるとそうではないものも多々あったが）や石皿・台石を対象とした。図Ⅱ-18～30においてNa付き数字は、その際の遺物点取り番号である。点取り土器で、それが復元できた場合には、Na付き数字のわきに第3分冊の掲載番号を付した。点取り番号68で掲載番号48ならば「Na68盛48」となる。若干の破片が混在していた場合は「Na66（盛67）」のように（ ）が付く。

本文中では点取りNaの後に掲載番号を（ ）付で示した。「Na68（48）」のようになる。（ ）のない本文記載中の数字も第3分冊の掲載番号である。

### F63（図Ⅲ-1-128）

**位置・立地** 77Q区 標高 59.0m付近の緩斜面

**特徴** 77Q区IV層下位から78Q区IV層上位にかけて黒色土の入り込みを確認した。その平面形は不整な円形で、木根痕の可能性があった。そして77Q区のその平面形東端には連続して明赤褐色土が楕円形に入り込んでいた。また、78Q区の黒色土平面形西側半分には礫や土器が目立って分布していた。

黒色土入り込みには、耕作時の約20cm幅の犁と思われる農具跡が60～80cm間隔で入り込んでおり、そのうち1本が明赤褐色土の平面形中央を横切っていた。明赤褐色土の土層断面を観察するため、その農具痕の攪乱土を120cmほど抜きとった。攪乱土内にも農具がその場で上下反転の作業をしたためか、偽礫化した明赤褐色土が多く含まれていた。断面を観察したところ、明赤褐色土の下は橙色土になっていた。木根起源の攪乱中に酸化した鉄分がIV層主体土を着色したのか、あるいは木根起源による窪地においてIV層の面で火を焚いたためその場の土が酸化したのか、どちらかの可能性があった。焼土の可能性が否定できなかったため、焼土として記録した。ただし、灰層あるいは炭化物層は無い。焼土であったとしても、人為的なものか、自然の営力によるものかはわからない。尚、礫と土器が散らばっていた部分は遺物集中8として遺物分布範囲を記録した。焼成面は不明だが、検出面とほぼ同じか、やや上である。F63そのものからの遺物出土は無かった。

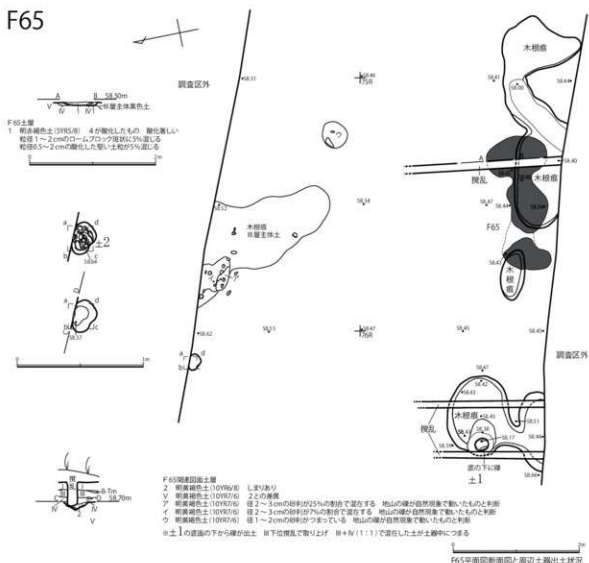
**時期** 不明である。遺構は遺物集中8と同一面で検出された。遺物集中8を主とする周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後半以降の可能性もある。（大泰司）

### F64（図Ⅲ-1-128）

**位置・立地** 79・80-Q区 標高 59.4m付近の緩斜面

**特徴** 79・80-Q区IV層上面から黒色土の入り込みを確認した。その平面形は不整な円形で、木根痕の可能性があった。そしてその中央には明赤褐色土が入り込んでいた。

黒色土入り込みは、耕作時の約20cm幅の犁と思われる農具跡によって乱されていた。明赤褐色土の土層断面を観察するため、その農具痕の攪乱土を120cmほど抜きとった。断面を観察したところ、橙色味が中心が濃く、外側へ向かって薄くなっていった。木根起源の攪乱中に酸化した鉄分がIV層主体土を着色したのか、あるいは木根起源による窪地においてIV層の面で火を焚いたためその場の土が酸化したのか、どちらかの可能性があった。焼土の可能性が否定できなかったため、焼土として記録した。ただし、灰層あるいは炭化物層は無い。焼土であったとしても、人為的なものか、自然の営力によるものかはわからない。焼成面は不明だが、検出面とほぼ同じか、やや上である。F64そのものか



図Ⅲ-1-129 F65平面図・土層断面図・周辺遺物出土状況

らの遺物出土は無い。

時期 不明である。周辺からは円筒下層b式から下層d2式、円筒上層a式から上層d式が出土している。縄文時代前期後半以降の可能性もある。(大森司)

### F65 (図Ⅲ-1-129、-2-76)

位置・立地 75R区 標高 58.4m付近の平坦面

特徴 75R区V層上面から不整形をした黒色土の入り込みを確認した。その平面形の最長部は2m以上あり、調査区外へ広がっていた。その入り込みへりには明赤褐色土が入り込んでいた。黒色土入り込みは、耕作時の約20cm幅の犁と思われる農具跡によって乱されていた。入り込みが遺構かどうかを確認する為、そして明赤褐色土の土層断面を観察するため、その農具痕の掘乱土を120cmほど抜きとった。また一部黒色土を掘りぬいた。その結果入り込みは人為ではなく、木根痕の可能性があった。そして明赤褐色土については、木根起源の掘乱中に酸化した鉄分がIV層主体土を着色したのか、あるいは木根起源による窪地においてIV層の面で火を焚いたためその場の土が酸化したのか、どちら

かの可能性があった。焼土の可能性が否定できなかったため、焼土として記録した。ただし、灰層あるいは炭化物層は無い。焼土であったとしても、人為的なものか、自然の営力によるものかはわからない。焼成面は不明だが、検出面とはほぼ同じか、やや上である。

F65周辺から出土した遺物を図化した。1は76R区の風倒木と思われる攪乱から出土した土器である。掘え置いた後に、木の根が入り込んだ可能性があった。口縁部が大きく欠損しており接合しなかった。取り上げ時に土器の下から礫が出土したが、使用痕などなくV層より下位の礫層起源のものと考える。2は木の根に掘えられていたあるいは入り込んでいた土器底部である。76Q区のa b c dで囲んだ範囲から出土した。いずれも円筒下層b2～c式頃の遺物と考える。

**時期** 不明である。周辺からは円筒下層b式から下層d2式、円筒上層a式から上層d式にかけて出土する。F65そのものについては縄文時代前期後半以降の可能性がある。(大泰司)

**F66** (図Ⅱ-22・28・30、遺物は第3分冊に図示、図版53)

**位置・立地** 54S区 標高 56.8m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、54S区を5cmずつ3回掘り下げた時点で、明赤褐色土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。北側はトレンチ外へ広がっている。

遺構の上にはM4-4が堆積する。当調査区において、M2、M4盛土ともに、円筒下層b式から下層c式にかけて(ほとんどがb)が出土している。円筒下層d式はⅢ層からのみの出土である。M4-4は調査時にM2-3と見分けがつかず、遺物はM2-3として取り上げられているものが多い。これはM4-5の掘りあがり等による再堆積がM2-3やM4-4の主体であることに起因すると考える。この調査区についてM2-3として取り上げた土層に復元にいたる土器の個体は無かった。そのM4-4直下からの検出であり、F66はM4盛土形成時その場で焚かれた焼土として記録した。この焼土直下の木根攪乱はM4盛土形成時のものである。

後に判明したが、この54S区においてM4-6はまばらに分布する。M4-5のセット368・369に比べて、M4-6のセット628・630は新しい要素を持つ土器である。本来基底部である焼土層M4-6から新しい土器が出土しているのは、傾斜の下側(Rライン側、53ライン側)から古い土器が出土するためである。盛土形成の過程に関連する事象と考える。

F66は点取り土器No35のはほぼ同一検出面である。No35は円筒下層b式の一括土器で三個体が混在していた。ひとつめの53は底部まで残存。もう一個体の52は底部が欠損する。もう一個体は口縁部の一部であった。

52と53について52はM4-6出土628・630・633、F72と関連する54と類する。層位的にF66と同時期である52・53は円筒下層b2式である。

灰層は無い。土壌水洗の結果、硬骨魚網の焼骨片が検出されたが、種別部位とも不明である。炭化物の中からはオニグルミの炭化核片と種類不明の炭化種実片が1点ずつ出土した。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式の前半頃の時期である。(大泰司)

**F67** (図Ⅱ-22・26・27・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 57S区 標高 57.2m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、57S区を5cmずつ四回掘り下げた時点で、明赤褐色土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。北側はトレンチ外へ広がっている。遺構の

上下にはM4-1が堆積する。M4-1中の焼土である。

この57S区において、M2盛土はM2-3で円筒下層b式から下層d1式が出土する。M4盛土はM4-1で、円筒下層b～c式が出土し、M4-3又は-6で円筒下層b式が出土している円筒下層d2式は皿層あるいはM1からのみの出土である。M4-1は平面的な調査時において、M4-3と一部厳密な区別ができなかったが、遺物は円筒下層c式が混じる。礫の浮き上がりおよびM1と酸化土との対応からM4盛土形成時の木根攪乱に起因する窪みへの、廃棄行為が考えられる。F67はM4盛土形成時その場で焚かれた焼土として記録した。

F67は点取り土器№12(45)円筒下層d1式よりは下位である。点取り土器№22(44)円筒下層b2～c式、№23、№24のほぼ同一検出面である。№18(46・47)は円筒下層b2式である。46は隆帯上に指頭斑痕を連続し、47は多軸絡条地紋に貝殻条痕の口縁部文様帯を持つ。

№22(44)は円筒下層b2～c式。同じく№23は円筒下層b2～c式であった。残存状態が悪く図化しなかった。また№24は円筒下層b2式二個体分である。(M4-3 57S区3と接合したが、残存状態が悪く図化しなかった。なお、上位から出土した№12は円筒下層d1古段階一個体であった(45))

F67より下、M4-1下位からは、№68(48)と№87(49)はF67より下位である。いずれも円筒下層b1式である。M4-3から出土している9月30日取り上げの339と346はこれらと同時期である。同じM4-3でも341(円筒下層b2式古段階)と349(円筒下層b2式新段階)は9月29日取り上げでより上位の出土である。これらは焼土層M4-6(F77と連続している)から出土した618(円筒下層b2式古段階)と623(円筒下層b2式新段階)と類する。623は多軸絡条体が口縁部を横走り、618よりやや新しい様相を持つが10月5日で同時に出土する。

M4-1は同一面で236円筒下層b1式の要素を持つ円筒下層b2式と237円筒下層b2～c式が同じ10月2日に出土している。より上面から円筒下層b式でも新しい範疇である238が出土している。これは盛土形成過程になんかの時期差がからんでいると考えるM4-6がある部分が新しい時期(円筒下層b2式)という可能性がある。

灰層は無い。土壌水洗の結果、哺乳網の焼骨片が検出されたが、種別部位とも不明である。炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が68点と、クリの炭化子葉片が4点、そして種類不明の炭化種実片が4点出土した。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式よりは新しく、円筒下層b2式から円筒下層b2～c式にかけての時期である。円筒下層d1式より古い。(大泰司)

#### F68(図Ⅱ-22・26・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 58S区 標高 57.5m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、58S区を5cmずつ五回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、明赤褐色土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。これは七回目まで連続して検出された。北側はトレンチ外へ広がっている。セクション的にF68は点取り土器№56-1(35・円筒下層b2式新段階)と№56-2(残存状態が悪く図化せず)のほぼ同一検出面である。№13(残存状態が悪く図化せず)よりは下位である。№69(36・円筒下層b2式)よりは上位である。36より新しく、35と同一ないしは、より古い。遺構の上にはM2-3が堆積する。直下にはM3があり連続している。M2-3は周囲の調査区と並行して掘り下げていたのでM2-2として取り上げた遺物もある。平面的な土色差が判然としなかったためである。

この58S区において、M2-2～3としてあげた土器には円筒下層b式から円筒下層d2式までの土器が

含まれており、主体は円筒下層c式から下層d1式である。円筒下層b式は周辺の堅穴住居掘り上げ時にあがってきたものと考えられる。M4-3、6からは円筒下層b式から下層c式までが含まれており、M4-6では円筒下層b1式が目立つ。円筒下層c式は少なく、木の根などの攪乱によって下がったもの可能性がある。M3からの遺物出土は無かった。

F68と同一検出面出土の点取り土器No56-1(35)は円筒下層b2式新段階の胴より上である。同じくNo56-2の円筒下層b2式はほぼ一個体分である。底部が欠落している。残存状態が悪く図化しなかった。F68より上位のNo13は円筒下層b2式から下層c式にかけての土器であり、胴の上半分の四分の一が残存してまとまっている。磨滅もひどく堅穴住居掘削時にほりあがったものという可能性もある。残存状態が悪く図化しなかった。F68より下位のNo69(36)はその場で潰れていた円筒下層b2式一個体分である。

F68はM3盛土形成直後にその場で焚かれた焼土として記録した。灰層は無い。土壌水洗の結果、焼けた骨片と炭化した種子を検出した。

焼骨片として、サメ類椎骨椎体が2点、エイ・サメ類椎骨椎体が1点、マイワシ第二椎骨椎体2点、ニシン科腹椎 椎体15点、ニシン科尾椎 椎体28点、コイ科尾椎 椎体1点、サケ科椎骨椎体破片が複数点、フサカサゴ科方骨左関節1点、フサカサゴ科の椎骨椎体と思われるもの1点、アイナメ属前上顎骨左前端1点、同じく方骨左関節1点、基後頭骨破片1点、第一椎骨椎体7点、尾椎 椎体92点、アイナメ科腹椎 椎体47点、硬骨魚類顎骨左右不明破片8点、同じく尾部棒状骨破片2点、硬骨魚類部位不明破片無数、哺乳綱部位不明破片無数が複数点検出された。アイナメ科腹椎 椎体にはホッケ属が混じっている可能性がある。

炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が82点、クリの炭化子葉が23点、そして種類不明の炭化種実片が8点出土した。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式新段階の時期である。  
(大泰司)

#### F69 (図Ⅱ-17~19、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 60T区 標高 58.0m付近の緩斜面

**特徴** Aライントレンチを調査中、60T区を5cmずつ七回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチを掘り下げて、土層断面で確認したところ、M3とその直上のM2-2からまたがって橙色味をおびていた。H21廃絶後のくぼみであるため場所にもよるが十回掘り下げた段階層位まで連続していた。ただし層界は不明瞭である。複数の土層をまたがっていたことから粘質の強いM3の作用が関係した水の影響による鉄分等の沈着を想定したが、人為の可能性もあったことから土壌を採取し、フローテーション法にて処理した。

この60T区において、M2-2は円筒下層d式が含まれている。H21廃絶後のくぼみで、M3との境目M2-2下位から最下位とした層位からは円筒下層d1式新段階から円筒下層d2式古段階が出土している。M3からは円筒下層b式から円筒下層d1式までが出土するが円筒下層d1式が主体である。M2-3には円筒下層d式が含まれているが、円筒下層b式も混じり込む。M4-3は円筒下層b式を主体とする。

F69周辺の点取り土器との検出状況、特に層位的な上下関係を検討した。結果は以下の通り。

No72(73)はF69とほぼ同じ時期か。円筒下層d1式新段階一個体分、5cm十回目M2-2相当出土。

No73(70)はF69とほぼ同じ時期か。円筒下層d1式新段階一個体分、5cm十回目M2-2相当出土。

H39覆土上位(H39-27・32・34・35・48)と同じ段階で円筒下層d1式から下層d2式への移行期を示し、器形からより円筒下層d2式に近い可能性がある。

No36-1はF69とほぼ同じ時期か。円筒下層d2段階(175)の一部と円筒下層d1式新段階(75)の一部で、5cm七回目M2-2～M2-3～M3相当出土。

No36-2はF69とほぼ同じ時期か。円筒下層d1式新段階一個体分(72)と円筒下層c式口縁部など5cm七回目M2-2～M2-3～M3相当出土。

No66は5cm十回目、H21廃絶後の深さを勘案すると、M2-2～M2-3相当出土。No89は5cm十回目で、M3相当出土。いずれもF69とほぼ同じ時期か。これらは円筒下層d1新段階(67)と接合した。

F69は、M3盛土形成直後の、円筒下層d1式新段階から円筒下層d2式段階にかけての廃棄場所に立地する。

焼土と想定した場合、灰層は確認できなかったが、土壌水洗の結果、焼けた骨片と炭化した種子を検出した。

焼骨片として、エイ類の椎骨 椎体が6点、サメ類の椎骨 椎体が4点、ツノザメ目の椎骨 椎体が3点、ニシン科腹椎 椎体が2点、ニシン科尾椎 椎体が4点、タイ科の歯が12点、ブリ属の角骨左関節が1点、サバ属の第一椎骨 椎体が1点、サバ属尾椎 椎体が1点、硬骨魚網の椎骨 椎体が2点、硬骨魚網部位不明破片が複数点、鳥網の四肢骨 骨幹が2点、鳥網四肢骨片が2点、哺乳網の指骨が1点、海生哺乳網の肋骨中間部破片が1点、哺乳網部位不明骨片が複数点検出された。

炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が76点、クリの炭化子葉が3点、ワトコの炭化核が1点、種類不明の炭化種実片が5点、そして子囊菌の炭化子葉が5点出土した。

土層断面と、確認した焼骨片や炭化種子からその場で焚かれた焼土と考える

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層d1式新段階から円筒下層d2式にかけての期間に段階を経て形成されたものとする。(大森司)

#### F70 (図Ⅱ-22・26・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 59S区 標高 57.6m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、59S区を5cmずつ八回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、オレンジ色を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチを掘り下げて、土層断面で確認したところ、この調査区から一部明瞭に検出されたM3と、標高的にほぼ同一検出面であった。ただしこの土層に関してM3としたが、土層断面から他のM3とした土層より古い可能性がある。右に位置するF68がらみのM3と堆積状況について連続性が異なるためである。M3が何等かの作用で動いたか、M4-3形成途中のV層土の掘りあがりである。トレンチ外南側にのびている。

検出面はM4-3中位であり、F70からは点取り土器No51、M3としたV層土の掘りあがりにはNo50が伴って出土している。

No51は検出面から、F70と同じ時期と考えられる。円筒下層b2式、三個体分が不完全な形でまともに出土した二個体は円筒下層b2式で復元できなかった。復元できた30は円筒下層b2～c式である。5cm八回目M4-3相当出土。

No50-1は検出面から、F70とほぼ同じ時期と考えられる。円筒下層b2式の口縁部破片。残存状態が悪く図化しなかった。5cm七～八回目M4-3相当出土。

No50-2は検出面から、F70とほぼ同じ時期と考えられる。円筒下層b2式新段階の29が復元できた。

小型深鉢一個体分である。三単位で後部部にサルボウ条痕横走。5cm七八回目M4-3相当出土。

当調査区において、M2-2、M4-3、M4-6が確認されており、いずれも円筒下層b式から円筒下層d式にかけて出土している。M2-2は円筒下層d2式が目立つ。M4-3は円筒下層b2式、M4-6は円筒下層b1式が目立つ。

焼骨片として、エイ類の歯がほぼ完体で2点、メジロザメ科と考えられる歯の破片が2点、サバ属の腹椎 椎体が1点、カツオ・マグロ属の尾椎（尾柄部）椎体が2点、硬骨魚尾椎（尾柄部）椎体が1点、硬骨魚網の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点検出された。

炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が6点検出された。

遺構検出状況と、確認した焼骨片や炭化種子から、M4-3の形成途中にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式新段階から円筒下層b2～c式にかけて形成されたものと考えられる。 (大泰司)

**F71** (図Ⅱ-22・27・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 56S区 標高 57.0m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、56S区を5cmずつ八回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。

検出面はM4-5中～下位であり、より上位のM4-5上位～M4-4にかけて点取り土器No25がF71わきから出土している。平面では確認できなかったが、F71北東側、56ライン付近のセクションに酸化土を確認した。標高的にはほぼ同一検出面と考える。

No25は検出面から、F70より新しい時期と考えられる。円筒下層b2式新段階一個体分のおよそ半分がまとまって出土した。残存状態が悪く円化しなかった。5cm二～三回目M4-4相当、一部M4-5上位相当から出土。

この56S区において、M4-5、M4-6が確認されており、いずれも円筒下層b式から円筒下層d式が出土している。M4-5は円筒下層d2式が目立つ。M4-5は円筒下層b2式、M4-6は円筒下層b1式が目立つ。Ⅲ層からは円筒下層d2式が出土しており、ほかに各層位に縄文時代早期後半、東銅路Ⅳ式前後の土器が混じる。

焼骨片として、硬骨魚網の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点検出された。F71から出土した炭化物の中から炭化種子は確認できなかった。

まとまって検出した焼骨片やからM4-5の形成途中にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層c式以前の円筒下層b式の段階に形成されたものと考えられる。 (大泰司)

**F72** (図Ⅱ-22・28・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 54S区 標高 56.6m付近の急斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、54S区を5cmずつ十回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ外東側にのびている。

検出面はM3-2下位からM4-5上位にかけてである。F72は点取り土器No27（残存状態が悪く円化せ



ず)より下位、No59(54)直下から検出された。No67(55)とはほぼ同一検出面からの出土である。またF72直上No59(54)とはほぼ同一面からはフレイクチップが1,000点以上まとまって出土している。

No27(残存状態が悪く図化せず)は5cmずつ四回掘り下げた段階で検出した。M4-4相当である。円筒下層b式の下半分であり、磨滅の程度から勘案して掘りあがったものの可能性がある。

No59(54)は5cmずつ九回掘り下げた段階で検出した。M3-2下位相当である。円筒下層b2式二個体の破片が混在していた。54は横から検出されたNo58の一部と接合した。

No67(55)は5cmずつ十回掘り下げた段階で検出した。M3-2下位からM4-5上位相当である。円筒下層b2式三個体の破片が混在していた。

焼骨片として、スケトウダラあるいはマダラの腹椎 椎体が1点出土した。硬骨魚綱の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点検出された。炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が4点検出された。まとまって検出した焼骨片や検出状況からM4-5の形成後にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式段階に形成されたものとする。(大泰司)

### F73(図Ⅱ-22・26・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 58S区 標高 57.4m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、58S区を5cmずつ十回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ外南側にのびている。検出面はM4-3中である。

点取り土器No54(43)はF73より上位で出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点で、M3~M4-3相当での検出である。円筒下層b2~c式一個体だが底部欠損。No54のうち1点は、より下位の焼土M4-6相当F77出土のNo84-1(34)と接合した。

No54-2はF73と同一検出面より出土した。5cmずつ十回掘り下げた時点で、M3~M4-3相当で出土。円筒下層b2式が数個体混在。一個体は多軸絡条地紋。残存状態が悪く図化しなかった。

No49(41)はF73より上位から出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点で、M4-3相当での検出である。円筒下層b2~c式である。

No55(42)はF73のすぐ北側で、より上位から出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点で、M4-3相当での検出である。円筒下層b2~c式縦半分のみ。円形刺突文が二列口縁に連続する。

No112はF73より下位から検出した。5cmずつ八回掘り下げた時点で、M4-6相当、F77からの出土。円筒下層b1および二個体分。残存状態が悪く図化しなかった。

No.84-1は58S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1縦半分のみ円筒下層b2縦半分のみと大破片バラ、円筒下層b1式から下層c式頃と思われる破片が混在していた。5cmずつ十一回掘り下げた時点で、M4-6相当、F77からの出土。うち円筒下層b2式でおおよそ縦半分が残存する34を復元した。より上位のNo54とNo84が1点接合しているが、No54が混在したとみる。胴部下半分が合地地紋で、隆帯には縄端圧痕が並ぶ。文様構成は円筒下層b1式を思わせる。

焼骨片として、ニシン科腹椎 椎体2点、コイ科尾椎 椎体1点、硬骨魚綱の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点、鳥綱脛足根骨右側遠位端が1点、鳥綱足根中足骨左近位端が1点、鳥綱四肢骨片が複数点、検出された。

炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が22点、クリ炭化子葉片が4点検出された。

まとまって検出した動物や植物の遺存体や、検出状況からM4-3の形成途中にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2～c式より古く、古段階までいかないが古い要素を持った円筒下層b2式より新しい。円筒下層b2式の焼土。(大泰司)

**F74** (図Ⅱ-22・25・26・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 59・60-S区 標高 57.8m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、59～60S区を5cmずつ十回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ外北側にのびている。検出面はM4-6上面である。

点取り土器No81はF74上面直下で出土した。5cmずつ十一回掘り下げた時点で、M4-6相当での検出である。32を復元した。口縁部の縦区画から円筒下層b2～c式とした。

点取り土器No82はF74上面直下で出土した。5cmずつ十一回掘り下げた時点で、M4-6相当での検出である。31を復元した。口縁部の単軸絡条体第5類横回転から、円筒下層b2式とした。

焼骨片、炭化種子類は検出されなかった。

検出状況からM4-6の形成直後にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式の新しい段階から円筒下層b2～c式の直後に焚かれた可能性がある。(大泰司)

**F75** (図Ⅱ-22・25・30、図版53、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 60S区 標高 58.2m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、60S区を5cmずつ十一回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ外北側にのびている。検出面はM4-3下位である。

点取り土器No8はF75より上位で出土した。5cmずつ一～二回掘り下げた時点で、M1相当での検出である。円筒下層d1式縦半分のみ二個体分が出土した。円筒下層d1式新段階に相当する。一個体は残存状態が悪く図化せず。もう一個体24は復元した。これはNa11とも接合した。

点取り土器No74はF75のわき、やや高い標高から出土した。5cmずつ十二回掘り下げた時点で、M4-2～M4-6相当での検出である。円筒下層b2式古段階、28を復元した。

点取り土器No108はF75より下位で出土した。5cmずつ十二回掘り下げた時点で、M4-2～M4-6相当での検出である。円筒下層b2式古段階、27を復元した。

焼骨片として、硬骨魚網の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点検出された。

炭化物の中からは子囊菌の炭化子囊が3点検出された。

まとまって検出した動物や植物の遺存体や、検出状況からM4-3の形成途中にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b2式古段階以降で、円筒下層d2式より古い。周辺状況から円筒下層b2式古段階に近い。(大泰司)

**F76** (図Ⅱ-17～19・22・25・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 61S区 標高 58.2m付近の緩斜面

**特徴** Aトレンチを調査中、60S区を5cmずつ十一回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ断面を観察したところ、トレンチ外南側にのびている。検出面はM4-3直下である。なにかの攪乱から入っている。

点取り土器No.1はF76より上位で出土した。5cmずつ一〜二回掘り下げた時点、M1〜M2-2相当である。円筒下層d1式新段階23を復元した。これに加えて円筒下層d式の破片が混在していた。ただし同一個体の復元に至るまとは無かった。

No.61はF76と同一検出面で出土した。5cmずつ十回掘り下げた時点、M4-3相当である。円筒下層b1式胴部中央より下半分が出土した。残存状態が悪く図化しなかった。

No.62はF76より上位で出土した。5cmずつ十回掘り下げた時点、M4-3相当である。円筒下層b式が出土した。同一個体で、復元に至るまとは無かった。残存状態が悪く図化しなかった。

No.76はF76と同一検出面より出土した。5cmずつ十回掘り下げた時点、M4-3相当である。円筒下層b1式から下層b2式古段階にかけての破片が複数個体まとまっていた。そのうち状態のいい61と63を復元した。61は鋸歯状の沈線文が入っており、円筒下層b2式古段階に分類した。63は円筒下層b1式とした。

No.77はF76と同一検出面で出土した。5cmずつ十回掘り下げた時点、M4-3相当である。円筒下層b1式が縦半分のみ残っていた。60として復元した。胴部中央に帯が無いなど新しい要素を持つ。

焼骨片として、硬骨魚網の部位不明片が数点検出された。炭化物の中からはオニグルミの炭化核片が16点検出された。

まとめて検出した動物や植物の遺存体や、検出状況からM4-6の形成時にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式新段階から円筒下層b2式古段階に形成されたものとする。文様構成等から二型式に分かれたが、出土状況から、かなり近い時期のものとする。これらは本線道路部分の調査、館野6遺跡、遺物集中4の時期に近いと考える。(大泰司)

**F77** (図Ⅱ-22・25・26・27・30、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 57〜61-S区 標高 57.2〜58.2m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、59S区を5cmずつ十一回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではあるが、橙色味を帯びた土の入り込みを検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。トレンチ外北側と南側の両方にのびている。トレンチを掘り広げていくと57〜61S区まで分布が確認できた。

検出面はM4-1〜3の下である。その後Sライントレンチの調査が進むにつれてM4盛土の基底部には焼土層がほぼ普遍的に存在することがわかった。M4盛土と時期の近いM5、M6盛土についても同様であった。M4の場合M4-6であり、F77はトレンチ内で検出したM4-6である事がわかった。

点取り土器No.83-1は59S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1式ないしはb2式古段階の上半縦半分のみが二種類と下半縦半分が混じっていた。残存状態が悪く図化しなかった。そして円筒下層b2式39を一個体復元できた。縞条体圧痕により鋸歯状文を施文する。5cmずつ十一回掘り下げた時点である。

No.83-2は59S区、F77と同一検出面で、円筒下層b1式の上半分のみが出土した。5cmずつ十一回掘り下げた時点である。残存状態が悪く図化しなかった。

No.84-1は58S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1式ないし下層b2式古段階の縦半分のみ出土した、加えて円筒下層b2式の縦半分および復元・図化に至らない多個体の破片が混在していた。5 cmずつ十一回掘り下げた時点、F77からの出土。そのうち円筒下層b2式34を復元した。これにはより上位のNo54が一点接合しているが、混在とみる。

No.84-2は58S区、F77と同一検出面で、円筒下層b1式の上半で縦半分のみが出土した。5 cmずつ十一回掘り下げた時点である。残存状態が悪く図化しなかった。

No.84-3は58S区、F77と同一検出面で、円筒下層b1式縦半分のみが出土した。5 cmずつ十一回掘り下げた時点である。残存状態が悪く図化しなかった。

No.95-1は59S区、F77と同一検出面で、円筒下層b2式古段階縦半分および複数個体の破片が出土した。40を復元した。円筒下層b2式である。No.95-2とは別個体であった。5 cmずつ十一回掘り下げた時点である。

No.95-2は59S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1式の破片があった。5 cmずつ十一回掘り下げた時点での出土である。残存状態が悪く図化しなかった。

No.96は59S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b2式38と複数個体のまとまりのない破片があった。5 cmずつ十一回掘り下げた時点で出土した。復元した38にはNo.83からも類似する個体が出土している。

No.97は59S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b2式37と複数個体のまとまりのない破片があった。5 cmずつ十一回掘り下げた時点である。

No.98は60S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1式あるいは下層b2式古段階のころと思われる下半分の縦半分のみがあった。5 cmずつ十一回掘り下げた時点である。残存状態が悪く図化しなかった。

No.110は60S区、F77と同一検出面からの出土である。円筒下層b1式から、円筒下層b2式にかけての破片が複数個体分出土している。円筒下層b2式、33を復元した。5 cmずつ十二回掘り下げた時点である。

焼骨片として、エイ・サメ類の椎骨不明破片が1点、メジロザメ科の歯が1点、ニシン科の腹椎椎体5点、ニシン科の尾椎椎体10点、コイ科の尾椎椎体3点、アイナメ属の前上顎骨左前端1点、タイ科の歯が1点、硬骨魚綱顎骨片が1点、硬骨魚綱の椎骨椎体1点、硬骨魚綱の不明破片が複数点、アイナメ属の腹椎椎体1点、ヒトの後臼歯破片が1点、海生哺乳綱不明破片複数点、哺乳綱不明破片複数点が検出された。

炭化物の中からはオニグルミ炭化核片が192点、クリの炭化子葉片233点、キハダ炭化種子片1点、同定不能炭化種実片8点が検出された。

まとめて検出した動物や植物の遺存体や、検出状況からM4盛土の形成時にその場で焚かれた焼土と考える。灰層は確認できなかった。F77としたこの焼土も含めて、M4盛土ではM4-6層に相当する。

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式段階に形成されたものとする。円筒下層b2式の可能性が高い。M4-6が一枚の土層と肉眼観察では受け取れるため、33・34・37・38・39・40は同時期の円筒下層b2式の多様性とも受け取れる。ただし遺物整理の結果M4-6は時間をかけて段階を経て形成される状況もわかってきた。(大森司)

**F78** (図Ⅱ-21・23・24・29、遺物は第3分冊に図示)

**位置・立地** 62S区 標高 58.6m付近の緩斜面

**特徴** Sライントレンチを調査中、62S区を5cmずつ七回掘り下げた時点で、層界不明瞭ではるが、橙色味を帯びた土の入り込みを二か所検出した。酸化した鉄分等が発色したものである。一方はトレンチ外南側にのびている。周辺はしまりのある土が分布しており、遺物も比較的まとまっていた。M2基底部として一部遺物を取り上げた。八回掘り下げた時点で焼骨片の出土が目立った。トレンチ壁面で確認すると周辺の土層も含めて、焼土混じりで、しまりのある褐色土の分布が明らかであった。検出面はM2中である。調査中、H29覆土より上位で、M2の一番下と考えた部分を基底部と称して取り上げた。最初基底部だと思った上位を基底部Aとした。ところが上位の土層と連続して土器を中心とした廃棄層が検出できたため基底部Bとして取り上げた。遺物整理を行ったところ、M2基底部AとしたのはF78のことである。盛土基底部Bとしたのは実際の基底部で、F78より下位のM2の褐色土部分である。

点取り土器No14はF78より上位から出土した。5cm二回掘り下げた時点で、M1相当。円筒下層d2式でまとまりのない破片群であった。うち1点が、円筒下層d2式の7と接合した。

No15はF78より上位から出土した。5cmずつ一～二回掘り下げた時点で、M1相当。円筒下層d2の上半分、でほとんどが円筒下層d2式の7となった。

No16はF78より上位から出土した。5cmずつ二回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式の口縁部である。残存状態が悪く図化しなかった。

No7はF78より上位から出土した。5cmずつ二回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式でまとまりのない破片群である。円筒下層d2新段階である。残存状態が悪く図化しなかった。

No18はF78より上位から出土した。5cmずつ二回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2口縁部である。円筒下層d2式である。残存状態が悪く図化しなかった。

No19はF78より上位から出土した。5cmずつ一～二回掘り下げた時点で、M2-2相当である。円筒下層d2式の一部とまとまりのない破片群である。円筒下層d2式2である。これはNo93・No94とも接合した。

No91はF78より上位から出土した。5cmずつ五回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式、8で口縁部に頸部をもたずそのまま外反する。

No92はF78より上位から出土した。5cmずつ五回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式下半の縦半分が出土し、120と接合した。これは「M2 63S区16」を主体とする、単軸絡条体縦回転地紋の円筒下層d2式である。他にはまとまりのない破片群が出土した。

No93はF78より上位から出土した。5cmずつ四～六回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式、下半の縦半分のみとまとまりのない破片群である。破片群から1点が6と接合した。7点が2と接合した。いずれも円筒下層d2式である。

No94はF78より上位から出土した。5cmずつ四～六回掘り下げた時点で、M2相当である。円筒下層d2式一個体と下半の縦半分のみである。ひとつは10と、もうひとつは2と接合した。いずれも円筒下層d2式である。

No114はNo91との対比から、F78より上位から出土した。M2相当である。円筒下層d2式上半は13に接合した。これに同一個体の可能性があるものとしてNo117から未接合の破片が出土している。円筒下層d2式である。

No100はF78と同一検出面から出土した。5cmずつ七回掘り下げた時点で、M2基底部A相当である。円筒下層d2式一個体と残存状態のいい破片が出土した。9と11である。いずれも円筒下層d2式である。

No101はF78と同一検出面から出土した。5cmずつ七回掘り下げた時点で、M2基底部A相当である。

円筒下層d2縦半分のみ二個体分である。2である。円筒下層d2式新段階である。もう一個体もd2新段階である。残存状態が悪く圿化しなかった。

No103はF78と同一検出面から出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点で、M2底部部Aの下位相当である。円筒下層d2式の下半分が二個体分である。14と15に接合した。いずれも円筒下層d2式である。

No104はF78の直下から出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点であり、M2底部部B相当である。円筒下層d2式である。円筒下層d2式、12である。

No111はF78の直下から出土した。5cmずつ八回掘り下げた時点であり、M2底部部B相当である。円筒下層d式の上半分で縦半分である。円筒下層d1新段階から円筒下層d2式にかけての土器である。残存状態が悪く圿化しなかった。

No119はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式縦半分のみである。残存状態が悪く圿化しなかった。

No120はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式下半分である。円筒下層d2式で、肥厚した口縁部を持つ。残存状態が悪く圿化しなかった。

No121はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式上半縦半分のみである。円筒下層d2式で複数個体の破片が混じていた。残存状態が悪く圿化しなかった。

No122はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式、19とまとまりのない破片である。破片から円筒下層d2式、18を復元した。

No123はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式上半分である。円筒下層d1式古段階、16である。

No126はNo104、111との対比から、F78の直下、M2底部部B相当出土である。円筒下層d2式の縦半分のみである。残存状態が悪く圿化しなかった。

F78より下からNo124・No126が出土している。石皿で掲載番号624・626である。

焼骨片として、エイ・サメ類の椎骨 椎体5点、サメ類椎骨 椎体3点、ツノザメ目椎骨 椎体6点、ニシン科腹椎 椎体3点、ニシン科尾椎 椎体14点、コイ科尾椎 椎体1点、サケ科のものか歯が2点、カレイ科腹椎 椎体1点、アイナメ属腹椎 椎体1点、アイナメ属尾椎 椎体1点、アイナメ科腹椎 椎体1点、タイ科の歯6点、サバ属の腹椎 椎体2点、硬骨魚網の顎骨片1点、硬骨魚網の椎骨 椎体4点、硬骨魚網の部位不明片が数点、哺乳綱部位不明骨片が複数点、検出された。炭化物の中からはオニグルミ炭化核片111点、スギナ近似地下茎1点および同地下茎片5点、同定不能炭化種実片9点が検出された。

まとめて検出した動物や植物の遺存体や、検出状況からM4-3の形成途中にその場で焚かれた焼土と廃棄された焼土が両方混在している可能性がある。灰層は確認できなかった

**時期** 遺構の確認状況と遺物出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層d2式段階に形成されたものと考えられる。(大泰司)

#### F79 (図Ⅲ-1-130、-3-43、図版53・142)

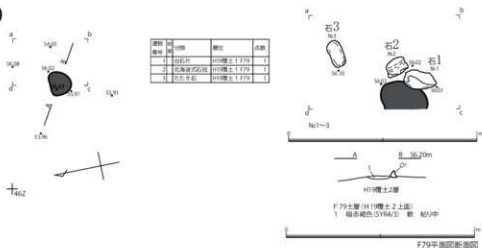
**位置・立地** 45Z区 調査区中央の平坦面のH19内

**確認・調査** H19の2層上面を精査中に焼土を検出した。平面形は不整形である。焼成部分のみの検出で、その場で焚かれた焼土である。

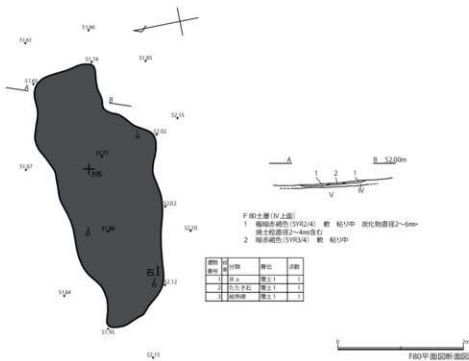
**覆土** 下限が漸移的な焼成部分を確認した。

**遺物出土状況** F79からは3点の遺物出土があった。いずれもH19覆土中から、北海道式石冠、礫、

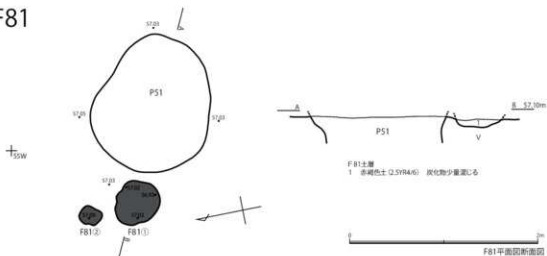
### F79



### F80

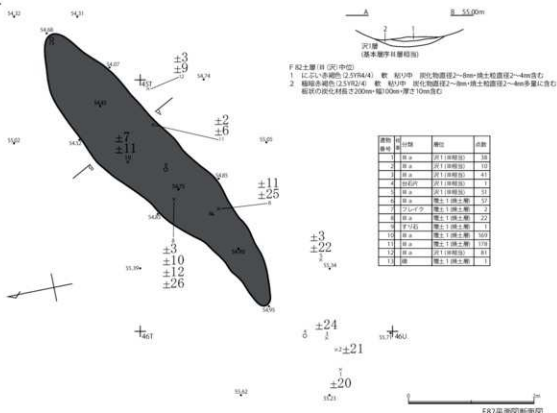


### F81



図一 1-130 F79平面図・土層断面図・遺物出土状況図・F80平面図・土層断面図・遺物出土状況図・F81平面図・土層断面図

## F82



図Ⅲ-1-131 F82平面図・土層断面図・遺物出土状況

北海道式石冠未成品の可能性がほぼ焼土と同一検出面から出土した。

時期 H19より新しい。(佐藤)

縄文時代前期後半、円筒下層d2式古段階以降。(大泰司)

### F80 (図Ⅲ-1-130)

位置・立地 38・39-R・S区 調査区北東側の斜面

確認・調査 III層を約15cm下げたところ、焼土を検出した。平面形は不整形である。焼成部分の検出状況から、その場で焚かれた焼土である。

覆土 下限が漸移的な焼成部分を確認した。

遺物出土状況 3点関連している。III群a類土器、たたき石、被熱曝が出土した。

時期 確認状況と出土遺物から縄文時代中期前半以降の可能性がある。

(佐藤)

### F81 (図Ⅲ-1-122・130)

位置・立地 55W区 標高 57m付近の平坦面

特徴 IV層下位からV層上面で赤褐色土を確認した。炭化物が少量みられたのと被熱した土壌が確認できたので、焼土と判断した。大小二か所からなる。炭化物が少量みられるが、明確な灰層または炭化物層はない。焼成面はIV層下位と考えられ、V層が被熱し赤褐色化している。

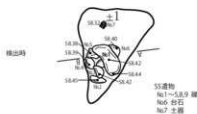
時期 不明であるが、遺構周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後半の焼土と推定される。(村田)

F82 (図Ⅲ-1-131、-2-77~80、-3-43、カラー図版12、図版53・119~122・142)

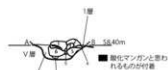


## S5

173h

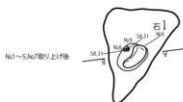


173s



S5土層  
 1 灰黄緑色土(10YR5/2) 厚とVが1:1で存在する  
 範囲1~2cmの2~ムアコンク層状に7%混じる  
 2 黄緑色土(10YR2/3) 木根擾乱  
 V 黄褐色土(10YR7/8)

173h

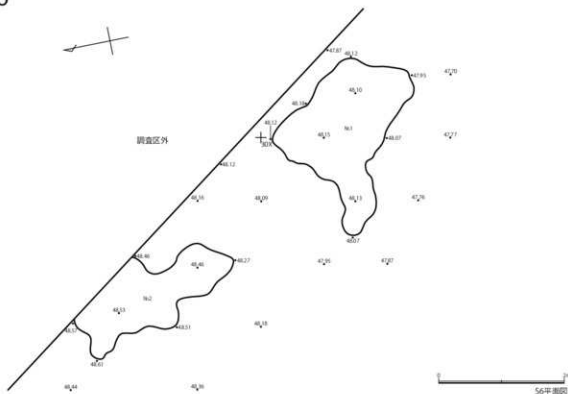


173s

遺物 層位	土層	層位	点数
1	1層	埋土1	1
1	2層	埋土1	1
2	1層	埋土1	1
4	1層	埋土1	1
1	2層	埋土1	1
4	1層	埋土1	1
7	1層	埋土1	1
4	2層	埋土1	1
9	1層	埋土1	1

55平面図断面図

## S6



図Ⅲ-1-132 S5平面図・土層断面図・遺物出土状況図・S6平面図

位置・立地 44・45-S・T区 調査区北東側の沢地形

確認・調査 沢地形のⅢ層相当を約20cm下げたところ、焼土を検出した。平面形は沢地形に沿って帯形である。焼成部分がみられないことから動かされた焼土である。

**覆土** 炭化物粒と焼土粒を含み、層境は明瞭である。(佐藤)

**遺物出土状況** 2043点の遺物出土があった。F82は縄文時代中期中葉サイベ沢Ⅶ式土器廃棄である。口径9～22cm、器高12～20cm、底径4～9cmと小型の深鉢で構成される。また中空の台付鉢や、丸底に成形した浅鉢に台をこしらえた器もある。小型の特殊器形の廃棄である。1点だけ、円筒上層d式大型深鉢を意図的に割って形を整えた可能性があるものが混じる(12)。

**時期** 確認状況と出土遺物から縄文時代中期中葉サイベ沢Ⅶ式の時期である。(大泰司)

## (5) 集石

**S5** (図Ⅲ-1-132、-2-75、-3-43、図版53・119・142)

**位置・立地** 73-R・S区 標高58.4m付近の平坦面

**特徴** V層上面で、P43を確認した。その同じ面において60cm東に灰黄褐色土の入り込みには礫がまとまって入り込んでいた。その平面形は不整な三角形をしている。載ち割ったところ中礫が九個入り込んでいた。人為的な埋め戻しかどうか判然としなかった。周辺を調査した際、下の礫層からの礫がV層面まで上がっている状況がいくつかあったが、木根がらみの自然現象であった。今回は三角形の入り込みが下部の礫層まで到達していなかったため、人為の可能性があり、記録した。そばには円筒下層bから下層c式にかけての土坑墓P43がある。円筒上層d式の土器口縁部と同時に検出された。周辺からは、円筒下層b式から下層d式そして、円筒上層a式から上層d式が出土している。縄文時代前期後半から中期前半の可能性はある。

**時期** 遺構の確認状況と、周辺の出土遺物から判断するならば、縄文時代前期後半～中期前半の可能性はある。(大泰司)

**S6** (図Ⅲ-1-132、図版53)

**位置・立地** 29・30-W・X区 調査区東側の斜面

**確認・調査** Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ、近接する小礫のまとまりを二か所検出した。周辺に類似する遺構がないことから関連するものと考え、同一の遺構とした。(佐藤)

**遺物出土状況** S6はⅢ層に2866点の遺物が分布していた。円筒下層b式と思われる破片が混在していた。周辺からは円筒下層d式やⅣ群a類も出土している。

**時期** 混在する円筒下層b式の破片から、縄文時代前期後半以降の可能性はある。(大泰司)

## (6) 遺物集中

**遺物集中8** (図Ⅲ-1-128)

**位置・立地** 78Q区 標高59.0m付近の緩斜面

**特徴** 77Q区Ⅳ層下位から78Q区Ⅳ層上位にかけて黒色土の入り込みを確認した。その平面形は不整な円形で、木根痕の可能性があった。また、78Q区のこの黒色土の平面形について西側半分には礫や土器が目立って分布していた。尚、礫と土器が散らばっていた部分は遺物集中8として遺物分布範囲を記録した。検出面はF63よりは上である。人為的に集められた遺物か、倒木時に遺物が集まるように動いたもの等自然の営力によるものかは判断できなかった。70点の遺物が分布していた。円筒下層d2式ないしはⅢ群a類円筒上層a式、又は上層d式と思われる破片が同時に検出されている。

**時期** 不明である。人為的なものであれば、遺構の確認状況と遺物集中8の遺物出土状況から判断すると、縄文時代前期後半以降の可能性はある。(大泰司)

表Ⅲ-2 検出遺構一覧

遺構種類	遺構名	時期(土器型式細分)	調査開始日	調査区	確認あるいは確認状況	備考
竪穴住居	H18	縄文時代前期後半、円筒下層b1式の頃。	7月9日	49~52-S ~V	I層	
竪穴住居	H19	縄文時代前期後半、円筒下層b1式の頃。	8月3日	46Z	I層からII層下位にかけて	道路路面にて確認
竪穴住居	H20	縄文時代前期後半、円筒下層c1式の頃。	8月5日	55S	M4盛土を掘り込む	5トレンチにて検出・P45が同じ位置にあるH-20層土盛土の面がある
竪穴住居	H21	縄文時代前期後半、円筒下層c1式、あるいは、円筒下層d1式古段階古。	8月5日	59T	M4盛土を掘り込む	Aトレンチにて検出
竪穴住居	H22	縄文時代前期後半、円筒下層d1式の時期。	8月5日	59U	M4盛土を掘り込む	Aトレンチにて検出。H47より新しい。
竪穴住居	H23	縄文時代前期後半、円筒下層c1式から下層d1式の直前の時期。	8月17日	54V	II層	H41より新しい。P46より古い。
竪穴住居	H24	縄文時代中期前半、円筒上層d1式~サイベ塚式あるいはその直前の時期。	8月18日	47T	I層からII層下位にかけて	焼失家屋の材の年代から中期前半か(中央大 小林謙一氏のご教授による。P44より古い。
石囲炉を有する竪穴住居	H25	縄文時代前期後半、円筒下層d1式直前の時期。石囲炉の属性によっては時期の変更もある。H33の記載参照。	8月18日	45W	I層からII層下位にかけて	H40・53・54より新しい。石囲炉を有する。
石囲炉を有する竪穴住居	H26	縄文時代前期後半、円筒下層b2~c1式の時期。あるいはその直前の時期。石囲炉の属性によっては時期の変更もある。H33の記載参照。	8月18日	45X	I層からII層下位にかけて	石囲炉を有する。
石囲炉を有する竪穴住居	H27	縄文時代前期後半、円筒下層c1式の時期	8月18日	46X	I層からII層下位にかけて	P53の方が新しい。石囲炉を有する。
竪穴住居	H28	縄文時代前期後半、円筒下層c1式の時期。	8月31日	47U	II層上面からII層下位にかけて	
竪穴住居	H29	縄文時代前期後半、円筒下層d1式古段階の時期。	9月1日	62S	M4-2層	M2層はこの住居の遺土Vから派生しているM4-2層およびV層上から掘り込み
竪穴住居	H30	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後の時期。	9月2日	37T	IV層上面	
竪穴住居	H31	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後の時期。	9月2日	36T	IV層上面	
竪穴住居	H32	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後の時期。	9月2日	35S	V層上面	
石囲炉を有する竪穴住居	H33	遺物の出土状況から、縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後の時期。形状からは縄文時代中期後半。石囲炉の属性によってはH25・H26についても時期の変更がある。	9月3日	42U	II層上面	H49より新しい。石囲炉を有する。
竪穴住居	H34	縄文時代前期後半、円筒下層下c1式以降で円筒下層d1式新段階以前の時期か。	9月3日	64T	M2直下からV層にかけて	M2層がしたら検出。平面形の一部V層上面で確認。H35より新しい。
竪穴住居	H35	縄文時代前期後半、円筒下層c1式の時期。	9月6日	64S	M2直下からV層にかけて	M2層がしたら検出。平面形の一部V層上面で確認。H34より古い。
竪穴住居	H36	縄文時代前期後半、円筒下層b2~c1式段階ないしはその直前の時期。	9月9日	58-T~U	M2直下	
竪穴住居	H37	縄文時代前期後半、円筒下層b2式またはより古い時期。	9月14日	46S	II層下位	H24やH28より古い
竪穴住居	H38	縄文時代前期後半、円筒下層d1式古段階あるいは直前。	9月15日	63~64-R	M2-2下位検出	M2-2掘り下げ時に検出。H50より新しい。
竪穴住居	H39	縄文時代前期後半、円筒下層c1式段階である。	9月16日	62U	M2-2直下、IV層中	M2-2を削がしたら検出。一部、IV層より検出。H46より新しく、H29より古い。
竪穴住居	H40	縄文時代前期後半、円筒下層下b1式かその直後の時期。	9月17日	45X	II層下位	H25より古い
竪穴住居	H41	縄文時代前期後半、円筒下層b1式から下層b2式古段階までの時期。	9月22日	53-T~U	M2-3中	H23壁で確認。H51より古い。H23・51、P46より古い。M3・H18掘り上げ土より古く、M4土以前。
竪穴住居	H42	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後、かつ、円筒下層d1式以後で下層d2式以前の時期。	9月28日	59~60-V	II層中位	H47より新しい。
竪穴住居	H43	縄文時代前期後半、円筒下層b2式と考える。	9月29日	40T	II層下位	
竪穴住居	H44	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以後の時期である。	9月29日	39~40-V	II層下位	
竪穴住居	H45	縄文時代前期後半、円筒下層b1式と考える。	10月1日	48S	II層下位	捜査に切られる H24より古い。M5直取りの土器群より古い。
竪穴住居	H46	縄文時代前期後半、円筒下層b1式の前半と考える。	10月2日	61S	M2より下からM4下位	M4-3掘り出しに確認。
竪穴住居	H47	縄文時代前期後半、円筒下層b1式ころの住居。円筒下層d1式よりは古い。	10月5日	59V	M4下位からIII層下位にかけて	M4下位 Ⅱ2層上面。H22、H42より古い。H22壁面確認。
竪穴住居	H48	縄文時代前期後半、円筒下層c1式の時期と考える。	10月12日	63S	M2-2より下	H35検出時に確認。H29・H35・H56より古い

遺構種類	遺構名	時期	調査開始日	調査区	確認面	備考
竪穴住居	H49	縄文時代前期後半、円筒下層b式から下層c式にかけての時期あるいはその直後と考える。中期後半よりは古い。	10月13日	42V	II層下位	H33より古い。
竪穴住居	H50	縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期と考える。	10月13日	65R	V層上面で、M2-2より下	H38より古い。M2-2掘り下げ直後に検出
竪穴住居	H51	縄文時代前期後半、円筒下層c式直前と考える。円筒下層b式古手より新しい。	10月14日	53S	II 2層上面からM4-5にかけて	H41より新しい
竪穴住居	H52	縄文時代前期後半、円筒下層c式以後で、円筒下層d1式古段階以前。	10月15日	41-U~V	V層上面	
竪穴住居	H53	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後、円筒下層d1式以前。	10月15日	44V	II層下位	H25・H54より古い
竪穴住居	H54	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後、円筒下層d1式以前である。	10月19日	43-V~W	II層下位	H25より古い。H53より新しい
竪穴住居	H55	縄文時代前期後半、円筒下層b式の頃。	10月19日	42W	II層下位	M6-2とH4・65・66より古く、H63より新しい
竪穴住居	H56	縄文時代前期後半、円筒下層c式直前、円筒下層下b2式後半の時期。	10月19日	63R	M2-2下位	H29・39より古い。H48より新しい。
竪穴住居	H57	縄文時代中期初頭、円筒上層c式最古段階。	10月20日	84~86-P ~Q	V層上面	調査区最西端
竪穴住居	H58	縄文時代中期初頭、円筒上層c式最古段階と考える。	10月20日	82~84-P ~Q	V層上面	H57の東に隣接
竪穴住居	H59	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後で、円筒下層c式より古い。	10月23日	62T	II層下位	H29・39より古い H39壁面より検出
竪穴住居	H60	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後だが、円筒下層b2式後半より古い。	10月23日	62Q	M2-2より下、M4-3より新しい	H38・56より古い
竪穴住居	H61	縄文時代前期後半、円筒下層下c式以前の可能性がある。	10月24日	82~83-Q	II層下位	H58より古い。
竪穴住居	H62	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後。	10月25日	61V	II 2層	風倒木によって壊される
竪穴住居	H63	縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期。	10月27日	48T	II層下位	H64より新しい。M5より古い。H24・28、P44より古い。
竪穴住居	H64	縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期。	10月27日	48~49-T	II層下位	M5より古い。H24・28・63、P44より古い。P59図と一緒に検出
竪穴住居	H65	縄文時代前期後半、円筒下層d1式の時期という可能性がある。	10月28日	42W	II層下位	H66より新しい。M6壁土より新しい。
竪穴住居	H66	縄文時代前期後半、円筒下層b式から下層d1式直前の時期という可能性がある。	10月28日	42~43-W	II層下位	M6-9層流れ込みあり H55より新しい。H65より古い。
竪穴住居	H67	縄文時代前期後半、円筒下層b2式だが前半である。	10月29日	48~49-S	II層下位	M5より古い。

遺構種類	遺構名	時期	調査開始日	調査区	確認面	備考
土坑	P43	縄文時代前期後半、円筒下層b式から下層c式にかけての時期。	8月16日	73R	V層上面	
土坑	P44	縄文時代中期前半以降のもの。	8月31日	47S	II層上面	H24より新しい
土坑	P45	縄文時代前期後半、円筒下層c式以降の時期。	9月4日	63T	M2直下からII 2層中位にかけて	H29より新しい。
土坑	P46	縄文時代前期後半、円筒下層c式、あるいは下層d1式より新しい。	10月1日	53U	M2-3上面	H23より新しい。H23はH41より新しい
土坑	P47	縄文時代中期前半、円筒上層c式の時期。	10月7日	37T	V層上面	底に土器
土坑	P48	縄文時代前期後半、円筒下層d1式以降の土坑という可能性がある。	10月7日	51V	V層上面	重機による遺構確認によって検出 P50F-8図と一緒に検出
土坑	P49	縄文時代前期後半、円筒下層c式以降の土坑の可能性がある。	10月7日	51X	V層上面	重機による遺構確認によって検出 P51図と一緒に検出
土坑	P50	縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑という可能性がある。	10月7日	53~54-W	V層上面	重機による遺構確認によって検出、フラスコ状土坑
土坑	P51	縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑という可能性がある。	10月8日	54W	V層上面	重機による遺構確認によって検出、フラスコ状土坑
土坑	P52	縄文時代前期後半、円筒下層b式以降の土坑で、円筒下層c式中段階以降である。	10月22日	48~49-U	II層下位	M5やH18層より土を切っている。H63より新しい。
土坑	P53	縄文時代前期後半、円筒下層b式以降で、下層c式以前の土坑という可能性がある。	10月26日	47X	II層下位	H27(円筒下層c式の時期)より古い
土坑	P54	縄文時代前期後半、円筒下層b2式古段階の時期。	10月28日	81~82-Q	V層上面	H61の東側
土坑	P55	縄文時代前期後半、円筒下層b式の時期。	10月28日	56-U~V	V層上面	重機による遺構確認によって検出 P57-58図と一緒に検出
土坑	P56	縄文時代前期後半、円筒下層b2~c1式の土坑と考える。	10月28日	47Y	V層上面	H19層より土より下
土坑	P57	縄文時代前期後半、円筒下層b式以後の可能性があり、	10月28日	48Y	V層上面	重機による遺構確認によって検出

遺構種類	遺構名	時期	調査開始日	調査区	確認面	備考
土坑	P58	不明である。縄文時代前期後半の可能性もある。	10月28日	4B2	V層上面	遺跡法面に確認・IV層
土坑	P59	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以降で円筒下層b2式新段階以前の可能性がある。	10月28日	4B3	円筒下位	H28(円筒下層b2式の時期)より古い。M5より古い。
土坑	P60	縄文時代中期初期、円筒上層a式より新しい時期の遺構。	11月4日	B2-P-O	円筒下位	H58層より新しい。

遺構種類	遺構名	時期(土器型式細分)	調査開始日	調査区	確認面	備考
おとし穴	TP7	円筒上層c式以降の時期。	10月21日	B2~B3-P	H58層土中	H58の東壁を切る
焼土	F63	縄文時代前期後半以降の可能性もある。	6月25日	77Q	IV層下位	
焼土	F64	周辺からは縄文時代前期後半、円筒下層b式から下層d2式、円筒上層a式から上層d式が出土している。縄文時代前期後半以降の可能性もある。	6月25日	79Q	IV層上面	
焼土	F65	縄文時代前期後半以降の可能性もある。	6月25日	75R	V層上面	
焼土	F66	縄文時代前期後半、円筒下層b2式前半頃の時期。	7月28日	54S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 3 回目。M4-4 直下からの検出であり、F66 直下の木椀攪乱は M4 層土形成時のもので、より古いものもある。
焼土	F67	縄文時代前期後半、円筒下層b2式から円筒下層b2~c式にかけての時期。円筒下層d1より古い。縄文時代前期後半、円筒下層b1式より新しい。	7月29日	57S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 4 回目。焼土の上下には M4-1 が堆積する。
焼土	F68	縄文時代前期後半、円筒下層b2式新段階の時期。	7月29日	58S	M3層土に関連。ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 5 ~ 7 回目。上には M2-3 が堆積。直下には M3 が連続。M2-3 は周囲の調査区と直行して掘り下げたので M2-2 として取り上げた遺物もある。平面的な差がなかった。
焼土	F69	縄文時代前期後半、円筒下層d1式新段階から、円筒下層d2式にかけて形成されたものと考えられる。複数回出土された可能性がある。	7月29日	60T	M2層土より下から検出した貯穴付近 H21 層土への遺物集束に伴う焼土。H21 は M4 層土を掘りこんで構築。	Aトレッチ 5cm 掘りで 7 ~ 10 回目。M3とその直上の M2-2 にはまだがつて彩色味をおびていた。H21 層焼土のくぼみ。
焼土	F70	縄文時代前期後半、円筒下層b2式の新段階から円筒下層b2~c式にかけて形成された可能性がある。	7月30日	59S	M3からM4にかけての焼土部分。ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 8 回目。一部明確に検出された M2 と、横断的にほぼ同一様相であった。ただしこの土層に関して M3 とした土層より古い可能性。
焼土	F71	縄文時代前期後半、円筒下層c式以前、円筒下層b式の段階に形成された可能性がある。	7月30日	56S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 8 回目。M4-5 層下位。
焼土	F72	縄文時代前期後半、円筒下層b2式段階に形成された可能性がある。	8月3日	54S	M3からM4にかけての焼土部分。ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 10 回目。M3-2 下位から M4-5 上位。
焼土	F73	縄文時代前期後半、円筒下層b2~c式より古い。円筒下層b2式古手より新しいものと考えられる。	8月3日	58S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 10 回目。M4-3 層の上。
焼土	F74	縄文時代前期後半、円筒下層b2式新段階から円筒下層b2~c式にかけて形成されたものと考えられる。	8月3日	59~60S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 10 回目。M4-6 上面。
焼土	F75	縄文時代前期後半、円筒下層b1式以降で、土層から縄文時代前期後半、円筒下層b2式古段階に近い。	8月3日	60S	M4層土ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 11 回目。M4-3 下位。
焼土	F76	縄文時代前期後半、円筒下層b1式新段階~縄文時代前期後半、円筒下層b2式古段階(遺物集束 4 に近い時期)に形成されたものと考えられる。	8月3日	61S	M4層土ライントレンチ中の焼土	Aトレッチ 5cm 掘りで 11 回目。M4-3 直下。攪乱にからむ。
焼土	F77	縄文時代前期後半、円筒下層b2式段階に形成された可能性がある。円筒下層b2式の可能性が高い。	8月4日	59S	M4層土ライントレンチ中の焼土。M4-6 相当	ストレッチ 5cm 掘りで 11 回目。57 ~ 60S 区にまたがっていた。M4-1 ~ 5 層下。M4 の基底部に普遍的に存在する焼土層 M4-6 をライントレンチで確認したもの。
焼土	F78	縄文時代前期後半、円筒下層d2式段階に形成されたものと考えられる。	8月4日	62S	M2層土下位から検出。H29層土の遺物集束に伴う焼土。H29はM4層土を掘りこんで構築。ライントレンチ中の焼土	ストレッチ 5cm 掘りで 7 回目
焼土	F79	H19より新しい。縄文時代前期後半、円筒下層d2式古段階以降のもの。	8月31日	45Z	H19層土 2 層上面	伊石的遺物出土状況
焼土	F80	縄文時代中期前半以降の可能性もある。	9月29日	38S	円筒下位~IV層	封蓋
焼土	F81	縄文時代前期後半の可能性もある。	10月7日	55W	V層上面	
焼土	F82	縄文時代中期中量。サイバ沢式式の時期。	10月8日	45~46-S	沢 1 層(遺層相当)	
薬石	S5	縄文時代前期後半から中期前半以降の可能性もある。	6月10日	73R	V層上面	
薬石	S6	混在している円筒下層b2式の破片から、縄文時代前期後半以降の可能性もある。	6月25日	30W	円筒下位~IV層上面	
遺物集束	遺物集束 8	縄文時代前期後半以降の可能性もある。	6月25日	78Q	円筒中位	

表Ⅲ-3 検出遺構規模一覧

		〔〕内数字は不明					
遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)		
	長軸	短軸	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	11.380	9.540	10.420	9.120	1.368		
HP-1	0.514	0.514	—	—	0.670		
HP-2	0.452	0.416	—	—	0.672		
HP-3	0.434	0.372	—	—	0.560		
HP-4	0.484	0.418	—	—	0.734		
HP-5	0.518	0.466	—	—	0.688		
HP-6	0.450	0.394	—	—	0.747		
HP-7	0.536	0.428	—	—	0.674		
HP-8	1.334	1.216	1.224	1.022	0.410		
HP-9	0.456	0.416	—	—	0.748		
HP-10	0.468	0.316	—	—	(0.484)		
HP-11	0.342	0.330	—	—	0.538		
HP-12	0.442	0.424	—	—	0.618		
HP-13	0.510	0.408	—	—	0.534		
HP-14	0.500	0.418	—	—	0.570		
HP-15	0.528	0.366	—	—	(0.224)		
HP-16	0.230	0.216	—	—	0.228		
HP-17	0.390	0.318	—	—	0.772		
HP-18	0.660	0.366	—	—	0.704		
HP-19	0.346	0.254	—	—	0.534		
HP-20	0.230	0.204	—	—	(0.608)		
HP-21	0.248	0.200	—	—	0.280		
HP-22	0.314	0.306	—	—	0.364		
HP-23	0.432	0.406	—	—	0.484		
HP-24	0.332	0.296	—	—	0.734		
HP-25	0.144	0.126	—	—	0.354		
HP-26	0.162	0.162	—	—	0.282		
HP-27	0.234	0.234	—	—	0.394		
HP-28	0.252	0.226	—	—	0.308		
HP-29	0.364	0.288	—	—	0.214		
HP-30	0.308	0.276	—	—	(0.588)		
HP-31	0.400	0.234	—	—	0.558		
HP-32	0.250	0.230	—	—	0.294		
HP-33	0.224	0.198	—	—	0.432		
HP-34	0.210	0.202	—	—	0.482		
HP-35	0.674	0.358	—	—	0.422		
HP-36	0.462	0.270	—	—	0.430		
HP-37	0.720	0.594	0.590	0.500	0.668		
HP-38	0.162	0.148	—	—	0.430		
HP-39	0.172	0.172	—	—	0.282		
HP-40	0.308	0.288	—	—	0.186		
HP-41	0.444	0.352	—	—	1.286		
HP-42	0.144	0.124	—	—	0.144		
HP-43	0.190	0.166	—	—	0.454		
HP-44	0.214	0.174	—	—	0.268		

遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(6.340)	6.500	(6.200)	6.120	1.302
HP-1	0.394	0.324	—	—	0.692
HP-1	0.376	0.376	—	—	0.282
HP-2	0.428	0.366	—	—	0.404
HP-3	0.502	0.388	—	—	0.618
HP-4	0.428	0.342	—	—	0.700
HP-5	0.458	0.388	—	—	(0.316)
HP-6	0.500	0.428	—	—	0.678
HP-7	0.564	0.514	—	—	0.702
HP-8	0.336	0.266	—	—	0.316
HP-9	0.280	0.272	—	—	0.338
HP-10	0.402	0.386	—	—	0.694
HP-11	0.296	0.272	—	—	0.290
HP-12	0.282	0.260	—	—	0.402
HP-13	0.272	0.222	—	—	0.230
HP-14	0.308	0.260	—	—	0.336
HP-15	0.162	0.152	—	—	0.652
HP-16	0.270	0.264	—	—	0.118
HP-17	0.184	0.138	—	—	0.230
HP-18	0.300	0.420	0.646	0.500	0.260
HP-19	0.194	0.168	—	—	0.116
HP-20	0.266	0.266	—	—	0.696
床の溝幅最大値	—	0.260	—	0.176	0.290

遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	8.050	7.000	7.660	6.680	0.840
HP-1	0.432	0.404	—	—	0.684
HP-2	0.258	0.244	—	—	0.384
HP-3	0.342	0.308	—	—	0.408
HP-4	0.246	0.230	—	—	0.424
HP-5	0.258	0.254	—	—	0.168
HP-6	0.420	0.340	—	—	0.308
HP-7	0.500	0.380	—	—	0.556
HP-8	0.374	0.248	—	—	0.176
HP-9	0.296	0.228	—	—	0.128
HP-10	0.232	0.200	—	—	0.310
HP-11	0.462	0.440	—	—	0.430
HP-12	0.366	0.334	—	—	0.696
HP-13	0.316	0.244	—	—	0.160
HP-14	0.312	0.258	—	—	0.218
HP-15	0.116	0.116	—	—	0.142
HP-16	0.152	0.150	—	—	0.250

遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.320	5.920	6.260	5.400	1.140
ペンチの内側	—	—	4.870	4.160	0.150
HP-1	0.172	0.156	—	—	0.112
HP-2	0.172	0.164	—	—	0.160
HP-3	0.236	0.232	—	—	0.360
HP-4	0.396	0.336	—	—	0.244
HP-5	0.232	0.220	—	—	0.200
HP-6	0.236	0.220	—	—	0.244
HP-7	0.208	0.164	—	—	0.104
HP-8	0.164	0.140	—	—	0.064
HP-9	0.064	0.060	—	—	0.048
HP-10	0.112	0.100	—	—	0.024
HP-11	0.412	0.324	—	—	0.312
HP-12	0.568	0.376	—	—	0.248
HP-13	0.332	0.268	—	—	0.484
HP-14	0.364	0.296	—	—	0.376
HP-15	0.104	0.096	—	—	0.052
HP-16	0.392	0.308	—	—	0.400
HP-17	0.288	0.256	—	—	0.052
HP-18	0.376	0.324	—	—	0.056
HP-19	0.352	0.308	—	—	0.408
HP-20	0.196	0.204	—	—	0.800
HP-21	0.108	0.108	—	—	0.052
HP-22	0.272	0.248	—	—	0.208
HP-23	0.244	0.200	—	—	0.188
HP-24	0.212	0.156	—	—	0.144

遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.384	3.966	4.104	3.856	0.756
主柱穴の内側	—	—	1.516	1.184	—
HP-1	0.444	0.364	—	—	0.592
HP-2	0.304	0.284	—	—	0.648
HP-3	0.244	0.196	—	—	0.276
HP-4	0.128	0.096	—	—	0.036
HP-5	0.288	0.256	—	—	0.556
HP-6	0.356	0.296	—	—	0.516
HP-7	0.200	0.152	—	—	0.320
HP-8	0.188	0.180	—	—	0.428

遺構名	確認検出面(m)		床面なしは杭置(m)		高さ(m・構内寸法)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.660	5.820	6.240	5.560	0.804
HP-1	0.952	0.702	—	—	0.118
HP-1	0.584	0.434	—	—	0.782
HP-2	0.540	0.350	—	—	0.736
HP-3	0.260	0.222	—	—	0.412
HP-4	0.142	0.112	—	—	0.486
HP-5	0.252	0.234	—	—	0.686
HP-6	0.184	0.160	—	—	0.434
HP-7	0.104	0.056	—	—	0.172
HP-8	0.168	0.140	—	—	0.144
HP-9	0.074	0.072	—	—	0.148
HP-10	0.226	0.210	—	—	0.458

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.200	4.020	5.660	3.700	0.970
HF-1	0.908	0.816	0.482	0.452	0.108
HP-1	0.592	0.382	0.344	0.174	0.398
HP-2	0.372	0.324	—	—	0.386
HP-3	0.332	0.318	—	—	0.370
HP-4	0.222	0.198	—	—	0.414
HP-5	0.262	0.194	—	—	0.512
HP-6	0.298	0.268	—	—	0.294
HP-7	0.420	0.334	—	—	0.408
床の溝幅最大値	—	0.134	—	0.072	0.052

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	7.500	7.200	6.860	6.660	1.172
HF-1	0.522	0.522	0.358	0.302	0.052
HP-1	0.306	0.230	—	—	0.630
HP-2	0.482	0.440	—	—	0.624
HP-3	0.270	0.260	—	—	0.572
HP-4	0.336	0.280	—	—	0.620
HP-5	0.394	0.310	—	—	0.558
HP-6	0.328	0.282	—	—	0.520
HP-7	0.180	0.168	—	—	0.348
HP-8	0.298	0.274	—	—	0.334
HP-9	0.258	0.222	—	—	0.232
HP-10	0.112	0.094	—	—	0.158
HP-11	0.236	0.196	—	—	0.314
HP-12	0.194	0.158	—	—	0.106
HP-13	0.194	0.178	—	—	0.284
HP-14	0.414	0.406	—	—	0.148
HP-15	0.390	0.296	—	—	0.180
HP-16	0.276	0.272	—	—	0.130
床の溝幅最大値	—	0.090	—	0.052	0.012

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	8.000	5.900	5.660	5.360	1.008
HF-1	0.460	0.456	0.304	0.304	0.052
HF-2	0.728	0.512	0.528	0.336	0.064
HF-2壁土規模	1.142	0.762	—	—	0.022
HP-1	0.304	0.266	—	—	0.556
HP-2	0.272	0.252	—	—	0.610
HP-3	0.418	0.388	—	—	1.028
HP-4	0.420	0.384	—	—	0.992
HP-5	0.278	0.266	—	—	0.600
HP-6	0.368	0.332	—	—	0.590
HP-7	0.308	0.274	—	—	0.482
HP-8	0.330	0.304	—	—	0.470
HP-9	0.334	0.314	—	—	0.354
HP-10	0.320	0.194	—	—	0.824
HP-11	0.224	0.198	—	—	0.288
HP-12	0.212	0.202	—	—	0.558
HP-13	0.244	0.240	—	—	0.656
HP-14	0.210	0.198	—	—	0.520
HP-15	0.250	0.204	—	—	0.268
HP-16	0.188	0.172	—	—	0.252
HP-17	0.402	0.320	—	—	0.584
HP-18	0.230	0.172	0.380	—	0.188
HP-19	0.530	0.324	—	0.210	0.104

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.300	6.320	6.500	6.020	0.684
HF-1	0.656	0.606	0.524	0.480	0.076
HF-1壁土規模	1.740	1.676	—	—	0.018
HP-1	0.430	0.402	—	—	0.600
HP-2	0.408	0.380	—	—	0.696
HP-3	0.468	0.436	—	—	0.598
HP-4	0.300	0.284	—	—	0.754
HP-5	0.386	0.386	—	—	0.500
床の溝幅最大値	—	0.156	—	0.100	0.084

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	7.800	7.100	7.260	6.700	1.480
HP-1	0.598	0.276	—	—	(0.560)
HP-2	0.318	0.234	—	—	0.572
HP-3	0.398	0.268	—	—	0.560
HP-4	0.508	0.242	—	—	0.422
HP-5	0.270	0.188	—	—	0.302
HP-6	0.384	0.248	—	—	0.408
HP-7	0.354	0.242	—	—	0.418
HP-8	0.360	0.252	—	—	0.298
HP-9	0.316	0.198	—	—	0.318
HP-10	0.230	0.144	—	—	0.198
HP-11	0.208	0.154	—	—	0.262
床の溝幅最大値	—	0.200	—	0.090	0.106

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	7.680	6.910	7.200	6.160	1.020
支柱穴の内側	—	—	3.456	2.924	—
HP-1	0.232	0.200	—	—	0.172
HP-2	0.392	0.372	—	—	0.832
HP-3	0.208	0.140	—	—	0.056
HP-4	0.224	0.120	—	—	0.028
HP-5	0.232	0.204	—	—	0.108
HP-6	0.436	0.400	—	—	0.452
HP-7	0.180	0.160	—	—	0.132
HP-8	0.220	0.200	—	—	0.048
HP-9	0.300	0.244	—	—	0.128
HP-10	0.252	0.228	—	—	0.196
HP-11	0.172	0.164	—	—	0.096
HP-12	0.588	0.588	—	—	0.532
HP-13	0.304	0.264	—	—	0.068
HP-14	0.208	0.192	—	—	0.036
HP-15	0.228	0.208	—	—	0.148
HP-16	0.260	0.716	—	—	0.272
HP-17	0.248	0.248	—	—	0.412
HP-18	0.324	0.288	—	—	0.372
HP-19	0.252	0.236	—	—	0.300
HP-20	0.212	0.192	—	—	0.360
HP-21	0.192	0.184	—	—	0.392
HP-22	0.196	0.184	—	—	0.152
HP-23	0.224	0.188	—	—	0.300
HP-24	0.220	0.212	—	—	0.328
HP-25	0.128	0.112	—	—	0.412
HP-26(1)	0.172	0.112	—	—	0.452
HP-26(2)	0.200	0.124	—	—	0.248
HP-27	0.164	0.116	—	—	0.446
HP-28	0.118	0.100	—	—	0.212
HP-29	0.204	0.218	—	—	0.176
HP-30	0.276	0.228	—	—	0.220
HP-31	0.212	0.212	—	—	0.184
HP-32(1)	0.220	0.176	—	—	0.464
HP-32(2)	0.140	0.124	—	—	0.320
HP-33	0.172	0.172	—	—	0.300
HP-34	0.268	0.156	—	—	0.456
HP-35	0.256	0.172	—	—	0.376
HP-36	0.280	0.148	—	—	0.508
HP-37	0.200	0.100	—	—	0.196
HP-38	0.136	0.076	—	—	0.120
HP-39	0.324	0.244	—	—	0.356
HP-40	0.152	0.152	—	—	0.256

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する高さ)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.020	4.440	4.800	4.440	7.820
HF-1	1.788	1.612	1.602	1.384	0.196
HP-1	0.242	0.224	—	—	0.392
HP-2	0.204	0.176	—	—	0.160
HP-3	0.246	0.246	—	—	0.462
HP-4	0.288	0.274	—	—	0.484
HP-5	0.168	0.158	—	—	0.204

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.420	5.140	5.060	4.820	0.952
HP-1	0.598	0.448	0.370	0.240	0.042
HP-1	0.258	0.260	—	—	0.482
HP-2	0.290	0.278	—	—	0.350
HP-3	0.256	0.216	—	—	0.286
HP-4	0.260	0.244	—	—	0.304
HP-5	0.220	0.194	—	—	0.092
HP-6	0.138	0.136	—	—	0.250
床の溝幅最大値	—	0.106	—	0.068	0.138

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(3.500)	(4.260)	(3.360)	(4.140)	0.546
HP-1	0.904	0.818	0.556	0.484	0.180
HP-1	0.258	0.250	—	—	0.278
HP-2	0.358	0.234	—	—	0.480
HP-3	0.280	0.280	—	—	0.490
HP-4	0.242	0.206	—	—	0.318

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.900	3.600	4.640	3.200	0.496
HP-1	0.702	0.582	0.522	0.388	0.076
HP-2	(0.384)	0.532	(0.328)	0.408	0.028
HP-1	0.178	0.142	—	—	0.224
HP-2	0.205	0.188	—	—	0.438
HP-3	0.174	0.170	—	—	0.384
HP-4	0.152	0.108	—	—	0.276
HP-5	0.234	0.184	—	—	0.354
HP-6	0.172	0.146	—	—	0.240
HP-7	0.222	0.202	—	—	0.188
HP-8	0.152	0.126	—	—	0.168
HP-9	0.150	0.140	—	—	0.152
HP-10	0.470	0.428	0.302	0.212	0.152
HP-11	0.480	0.368	0.312	0.204	0.158
床の溝幅最大値	—	0.134	—	0.106	0.018

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.896	4.856	5.824	4.668	0.512
主柱穴の内側	—	—	2.300	1.368	—
HP-1	0.216	0.184	—	—	0.428
HP-2	0.304	0.296	—	—	0.568
HP-3	0.304	0.240	—	—	0.060
HP-4	0.208	0.180	—	—	0.498
HP-5	0.260	0.256	—	—	0.480
HP-6	0.316	0.296	—	—	0.052
HP-7	0.660	0.580	—	—	0.208
HP-8	0.320	0.260	—	—	0.420
HP-9	0.136	0.120	—	—	0.168
HP-10	0.452	0.328	—	—	0.392
HP-11	0.320	0.248	—	—	0.540
HP-12	0.168	0.136	—	—	0.124
HP-13	0.260	0.244	—	—	0.516
HP-14	0.092	0.088	—	—	0.080
HP-15	0.140	0.120	—	—	0.040
HP-16	0.216	0.204	—	—	0.344

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.712	4.612	4.408	4.224	0.664
主柱穴の内側	—	—	1.496	1.204	—
HP-1	0.184	0.160	—	—	0.036
HP-2	0.244	0.244	—	—	0.030
HP-3	0.252	0.216	—	—	0.092
HP-4	0.264	0.248	—	—	0.500
HP-5	0.256	0.252	—	—	0.080
HP-6	0.248	0.220	—	—	0.400
HP-7	0.240	0.200	—	—	0.552
HP-8	0.248	0.224	—	—	0.486
HP-9	0.232	0.228	—	—	0.144
HP-10	0.236	0.212	—	—	0.228
HP-11	0.300	0.260	—	—	0.396
HP-12	0.188	0.184	—	—	0.144
HP-13	0.236	0.224	—	—	0.196
HP-14	0.248	0.224	—	—	0.500
HP-15	0.236	0.220	—	—	0.044
HP-16	0.540	0.092	—	—	0.044

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.800	4.390	5.044	4.510	0.960
主柱穴の内側	—	—	0.232	0.209	—
HP-1	0.336	0.296	—	—	0.712
HP-2	0.284	0.298	—	—	0.700
HP-3	0.220	0.196	—	—	0.532
HP-4	0.244	0.240	—	—	0.452
HP-5	0.160	0.136	—	—	0.268
HP-6	0.404	0.360	—	—	0.116
HP-7	0.184	0.148	—	—	0.040
HP-8	0.088	0.080	—	—	0.012
HP-9	0.372	0.216	—	—	0.040
HP-10	0.096	0.088	—	—	0.032

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.400	—	5.100	(3.800)	0.410
HP-1	0.900	0.568	0.864	0.484	0.078
HP-1	0.262	0.246	0.176	0.154	0.410
HP-2	0.188	0.182	0.088	0.102	0.372
HP-3	0.308	0.262	0.216	0.176	0.518
HP-4	0.252	0.228	0.182	0.154	(0.542)
HP-5	0.222	0.224	0.106	0.110	0.554
HP-6	0.362	0.358	0.204	0.192	0.418
HP-7	0.174	0.166	0.106	0.116	0.260
HP-8	0.250	0.242	0.180	0.150	0.440
HP-9	0.284	0.252	0.152	0.152	0.394
HP-10	0.266	0.216	0.124	0.112	0.192
HP-11	0.334	0.306	0.196	0.200	0.588
HP-12	0.326	0.258	0.216	0.184	0.368
HP-13	0.302	0.276	0.190	0.180	0.452
HP-14	0.218	0.194	0.122	0.110	0.304
床の溝幅最大値	—	0.142	—	0.052	(0.032)

遺構名	確認検出面(m)		床面ないしは坑底(m)		高さ(m・溝 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(3.816)	5.556	(3.832)	5.244	0.852
主柱穴の内側	—	—	2.728	2.524	—
HP-1	0.312	0.308	—	—	0.524
HP-2	0.432	0.432	—	—	0.158
HP-3	0.476	0.420	—	—	0.704
HP-4	0.180	0.180	—	—	0.364
HP-5	0.220	0.220	—	—	0.320
HP-6	0.176	0.152	—	—	0.416
HP-7	0.200	0.188	—	—	0.412
HP-8	0.408	0.368	—	—	0.768
HP-9	0.196	0.180	—	—	0.284
HP-10	0.172	0.164	—	—	0.236
HP-11	0.232	0.220	—	—	0.068
HP-12	0.168	0.144	—	—	0.220
HP-13	0.200	0.136	—	—	0.076
HP-14	0.184	0.116	—	—	0.224
HP-15	0.340	0.176	—	—	0.416
HP-16	0.232	0.176	—	—	0.328
HP-17	0.180	0.176	—	—	0.196
HP-18	0.160	0.116	—	—	0.188
HP-19	0.364	0.324	—	—	0.096
HP-20	0.292	0.276	—	—	0.300
HP-21	0.128	0.108	—	—	0.296
HP-22	0.124	0.060	—	—	0.168
HP-23	0.100	0.056	—	—	0.200
HP-24	0.088	0.020	—	—	0.048



遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.040	5.724	5.788	5.278	0.972
主柱穴の内側	—	—	2.160	1.990	—
HP-1	0.216	0.200	—	—	0.432
HP-2	0.260	0.244	—	—	0.552
HP-3	0.380	0.284	—	—	0.256
HP-4	0.164	0.160	—	—	0.072
HP-5	0.324	0.168	—	—	0.620
HP-6	0.324	0.252	—	—	0.200
HP-7	0.180	0.176	—	—	0.028
HP-8	0.428	0.344	—	—	0.528
HP-9	0.328	0.320	—	—	0.648
HP-10	0.208	0.204	—	—	0.048
HP-11	0.220	0.200	—	—	0.356
HP-12	0.220	0.204	—	—	0.088
HP-13	0.180	0.164	—	—	0.152
HP-14	0.536	0.384	—	—	0.620
HP-15	0.408	0.344	—	—	0.084
HP-15(白磁ビツト)	0.152	0.084	—	—	0.032
HP-16	0.352	0.296	—	—	0.032
HP-17	0.256	0.216	—	—	0.284
HP-18	0.284	0.268	—	—	0.536
HP-19	0.308	0.272	—	—	0.076
HP-20	0.408	0.336	—	—	0.140
HP-21	0.240	0.208	—	—	0.048
HP-22	0.336	0.320	—	—	0.128
HP-23	0.376	0.360	—	—	0.644
HP-24	0.376	0.360	—	—	0.156
HP-25	0.308	0.260	—	—	0.432
HP-26	1.220	1.136	—	—	0.128
HP-27	0.576	0.164	—	—	0.112
HP-28	0.344	0.168	—	—	0.116
HP-29	1.320	1.004	—	—	0.080

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	3.280	0.440	2.800	0.240	0.582
床の遺構最大値	—	0.038	—	0.014	0.034

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(4.950)	4.790	4.540	4.420	0.910
HP-1	0.160	0.156	—	—	0.104
HP-2	0.448	0.202	—	—	0.368
HP-3	0.320	0.276	—	—	0.392
HP-4	0.392	0.328	—	—	0.384
HP-5	0.230	0.220	—	—	0.236
HP-6	0.428	0.332	—	—	0.436
HP-7	0.454	0.392	—	—	0.628
HP-8	0.530	0.518	—	—	0.178

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.748	(0.964)	4.608	(0.832)	0.904

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.440	(4.120)	5.260	(3.940)	0.482
HP-1	0.324	0.300	—	—	0.604
HP-2	0.270	0.244	—	—	0.596
HP-3	0.280	0.280	—	—	(0.418)
HP-4	0.518	0.342	—	—	(0.478)
HP-5	0.280	0.278	—	—	0.584
HP-6	0.288	0.250	—	—	0.484
HP-7	0.218	0.196	—	—	0.304

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	3.960	3.300	3.640	3.100	0.490
HP-1	0.400	0.358	—	—	0.480
HP-2	0.128	0.114	—	—	0.172

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(4.600)	(4.940)	(4.140)	(4.660)	0.902
HF-1	(0.522)	(0.438)	(0.478)	(0.318)	0.654
HP-1	(0.678)	(0.192)	(0.344)	(0.090)	0.220
床の遺構最大値	—	0.200	—	0.140	0.100

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(6.760)	(3.200)	(6.600)	2.680	0.760
主柱穴の内側	—	—	1.384	3.804	—
HP-1	0.492	0.284	—	—	0.536
HP-2	0.904	0.664	—	—	0.072
HHP-2HPP-1	0.148	0.140	—	—	0.122
HP-3	0.404	0.364	—	—	0.592
HP-4	0.552	0.392	—	—	0.276
HP-5	0.388	0.352	—	—	0.540
HP-6	0.456	0.368	—	—	0.256
HP-7	0.348	0.320	—	—	0.360
HP-8	0.468	0.396	—	—	0.472
HP-9	0.476	(0.376)	—	—	0.036

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.860	(3.700)	4.736	(3.596)	0.432
主柱穴の内側	—	—	1.708	—	—
HP-1	0.280	0.238	—	—	0.380
HP-2	0.216	0.198	—	—	0.420

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(4.748)	(1.780)	(4.544)	(1.630)	0.732
主柱穴の内側	—	—	2.116	—	—
HP-1	0.360	0.280	—	—	0.384
HP-2	0.274	0.268	—	—	0.380

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	0.112	0.430	4.900	4.080	0.400

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(1.972)	(1.694)	(1.456)	(1.584)	0.700

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.270	—	5.660	—	0.650
HP-1	0.246	0.214	—	—	0.524
HP-2	0.362	0.332	—	—	0.590
HP-3	0.092	0.088	—	—	0.072
HP-4	0.260	0.232	—	—	0.334
HP-5	0.338	0.298	—	—	0.400
HP-6	0.302	0.300	—	—	0.338
HP-7	0.262	0.248	—	—	0.370
HP-8	0.268	0.182	—	—	0.330
HP-9	0.152	0.118	—	—	0.064
HP-10	0.174	0.174	—	—	0.168
HP-11	0.158	0.150	—	—	0.100
HP-12	0.272	0.230	—	—	0.244
HP-13	0.106	0.104	—	—	0.142

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.700	3.620	4.400	3.440	0.544
HF-1	0.722	0.562	0.356	0.300	0.086
HP-1	0.232	0.200	—	—	0.484
HP-2	0.244	0.212	—	—	0.334
HP-3	0.228	0.200	—	—	0.526
HP-4	0.196	0.176	—	—	0.556
HP-5	0.232	0.218	—	—	0.164

遺構名	確認検出量 (m)		床面なしは杭底 (m)		深さ (m・掘 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(7.880)	6.100	(7.600)	(5.940)	0.360
HF-1	0.592	0.592	0.450	0.446	0.076
HP-1	0.260	0.222	—	—	0.486
HP-2	0.254	0.238	—	—	0.234
HP-3	0.160	0.146	—	—	0.236
HP-4	0.288	0.274	—	—	(0.310)
HP-5	0.260	0.216	—	—	(0.220)
HP-6	0.260	0.232	—	—	(0.120)

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.820	4.600	4.540	4.320	0.562
HF-1	0.694	0.632	0.530	0.490	0.024
HF-1焼土規模	1.252	0.890	—	—	0.088
HP-1	0.358	0.294	—	—	0.678
HP-2	0.252	0.238	—	—	0.492
HP-3	0.312	0.262	—	—	0.720
HP-4	0.350	0.238	—	—	0.390
HP-5	0.242	0.208	—	—	0.510
HP-6	0.240	0.230	—	—	0.782
HP-7	0.104	0.092	—	—	0.088

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
H55 住居本体	5.300	(1.200)	4.940	(0.900)	0.426

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.320	( 2.828)	3.984	( 2.524)	0.338
主柱穴の内側	—	—	—	—	—
HP-1	0.280	0.240	—	—	0.184
HP-2	0.296	0.264	—	—	0.376
HP-3	0.238	0.212	—	—	0.336
HP-4	0.172	0.164	—	—	0.112
HP-5	0.200	0.184	—	—	0.152
HP-6	0.192	0.168	—	—	0.236
HP-7	0.268	0.216	—	—	0.248
HP-8	0.272	0.252	—	—	0.216
HP-9	0.232	0.232	—	—	0.140
HP-10	0.252	0.204	—	—	0.112
HP-11	0.288	0.216	—	—	0.328
HP-12	(1.156)	0.232	—	—	0.080
HP-13(1)	0.584	0.172	—	—	0.180
HP-13(2)	0.252	0.176	—	—	0.328
HP-14	0.204	0.188	—	—	0.212
HP-15	0.332	0.120	—	—	0.068
HP-16	(1.130)	0.184	—	—	0.140

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(1.800)	(7.700)	(1.600)	(5.600)	0.880
HF-1	0.736	0.718	0.574	0.814	0.102
HF-2	0.698	0.400	0.652	0.384	0.088
HP-1	0.402	0.394	—	—	0.378
HP-2	0.376	0.342	—	—	0.394
HP-3	0.450	0.334	—	—	0.448
HP-4	0.410	—	0.220	(0.248)	0.699
HP-5	0.852	(0.466)	0.538	(0.400)	0.368
HP-6	(0.444)	0.412	(0.418)	0.284	0.006
HP-7	0.298	0.278	—	—	(0.688)
HP-8	0.320	0.108	—	—	0.550
HP-9	0.410	0.334	—	—	0.278
HP-10	0.420	0.374	—	—	0.342
HP-11	0.302	(0.184)	—	—	0.086

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	(3.250)	(9.100)	(1.900)	(6.300)	0.900
HF-1	(0.498)	(0.114)	—	—	0.054
HP-1	0.844	0.580	0.344	0.366	0.678
HP-2	0.494	0.412	0.348	0.322	(0.562)
HP-3	0.704	0.542	0.500	0.494	(0.828)
HP-4	0.826	0.642	0.370	0.432	(0.560)
HP-5	0.874	0.556	0.268	0.260	(0.794)
HP-6	0.616	0.506	0.442	0.328	0.399
HP-7	0.598	0.430	0.250	0.222	0.352
HP-8	0.340	0.282	—	—	0.510
HP-9	0.296	0.262	—	—	0.096
HP-10	0.180	0.154	—	—	0.355

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
H59 住居本体	(1.460)	(1.040)	(1.200)	(0.910)	0.300

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.300	3.908	4.000	3.440	0.836
主柱穴の内側	—	—	1.948	(1.200)	—
砂分布断面	—	—	1.388	(0.524)	—
HP-1	0.488	0.364	—	—	0.356
HP-2	0.170	0.124	—	—	0.108
HP-3	0.232	0.220	—	—	0.196
HP-4(1)	1.840	1.560	—	—	0.068
HP-4(2)	1.440	0.120	—	—	0.040
HP-5	1.920	1.320	—	—	0.300
HP-6	0.380	0.276	—	—	0.532

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	3.060	(1.800)	2.800	(1.500)	0.570
HP-1	0.336	0.278	—	—	0.292
HP-2	0.168	(0.144)	—	—	0.330
HP-3	0.202	0.218	—	—	0.412
HP-4	0.166	(0.116)	—	—	0.370
HP-5	0.212	(0.114)	—	—	0.200
HP-6	0.176	0.156	—	—	0.350
溝	( 2.186)	0.198	(1.908)	0.098	0.081

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.912	(3.656)	5.128	(2.668)	0.868
主柱穴の内側	—	—	2.088	1.424	—
砂分布断面	—	—	1.692	1.424	—
HP-1	0.304	0.238	—	—	0.504
HP-2	0.284	0.240	—	—	0.200
HP-3	0.340	0.316	—	—	0.504
HP-4	0.252	0.232	—	—	0.184
HP-5	0.188	0.112	—	—	0.156
HP-6	0.372	0.300	—	—	0.092
HP-7	0.460	0.356	—	—	0.424
HP-8	0.164	0.116	—	—	0.040
HP-9	0.104	0.094	—	—	0.208
HP-10	0.260	0.284	—	—	0.516

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.560	2.380	4.300	2.140	0.386
HP-1	0.166	0.156	0.072	0.066	0.128
床の溝幅最大値	—	—	0.114	—	0.074

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	6.700	5.300	6.340	5.000	0.280
HF-1	0.676	0.702	0.662	0.438	0.014
HF-1焼土規模	1.282	0.964	—	—	0.012
HP-1	0.328	0.308	0.140	0.156	0.472
HP-2	0.472	0.436	0.150	0.150	0.494
HP-3	0.384	0.294	0.166	0.160	0.606
HP-4	0.404	0.404	0.268	0.256	0.344
HP-5	0.224	0.200	0.078	0.070	(0.630)
HP-6	0.276	0.222	0.132	0.122	0.384
HP-7	0.452	0.432	0.432	0.254	0.476
HP-8	0.284	0.216	0.156	0.134	(0.458)

遺構名	確認検出量 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・浅 存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	2.704	2.658	2.376	2.364	0.548
HP-1	0.218	0.136	—	—	0.180

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	5.400	(5.140)	5.120	(4.940)	0.688
HF-1	0.554	(0.312)	0.420	(0.248)	0.054
HP-1	0.224	0.196	—	—	0.536
HP-2	0.266	0.244	—	—	0.382
HP-3	0.298	0.290	—	—	0.538
HP-4	0.198	0.176	—	—	0.342
HP-5	0.304	0.264	—	—	0.418
HP-6	0.104	0.092	—	—	0.088
床の溝幅最大値	—	0.150	—	0.094	0.054

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
住居本体	4.420	3.880	4.120	3.660	0.548
HF-1	0.862	0.508	0.530	0.382	0.042
HF-1壁土規模	1.024	0.798	—	—	0.028
HP-1	0.021	0.028	0.104	0.128	0.420
HP-2	0.280	0.258	0.260	0.156	0.382
HP-3	0.258	0.232	0.202	0.166	0.210

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
P43	1.800	1.640	1.280	1.230	0.450
P44	1.888	1.264	0.960	0.568	0.960
P45	1.390	1.090	1.240	0.920	0.160
P46	0.830	(0.630)	0.620	0.480	0.510
P47	0.842	0.684	0.592	0.510	0.244
P48	2.730	1.860	2.280	1.390	0.280
P49	1.570	0.870	0.920	0.710	0.280
P50	1.270	1.080	1.220	1.300	0.770
P51	1.450	1.250	1.210	1.020	0.780
P52	(1.958)	1.792	(1.748)	1.274	0.350
P53	1.142	1.024	1.438	1.250	1.070
土坑本体	1.980	1.560	1.870	1.330	0.570
PP-1	0.450	0.410	0.432	0.338	0.302
PP-2	0.342	0.342	0.240	0.188	0.230
溝	1.252	0.128	1.122	0.056	0.090
P55	1.520	1.080	1.370	0.930	0.510
土坑本体	1.950	1.270	2.400	2.350	0.860
溝	0.930	0.232	—	—	0.128
P57	1.280	0.990	1.190	0.870	0.490
P58	2.033	(1.210)	1.930	(1.210)	0.810
P59	1.680	(1.312)	1.276	(1.102)	0.420
P60	1.200	1.000	1.070	0.830	0.480

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
TP7	3.170	0.500	2.840	0.170	0.940

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
遺物集中8	0.880	0.600	—	—	—

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
F63	0.680	0.520	—	—	0.700
F64	0.480	0.400	—	—	0.100
F65	2.120	0.960	—	—	0.060
F66	0.410	0.400	—	—	0.070
F67	2.780	1.000	—	—	0.150
F68	2.420	0.490	—	—	0.180
F69	2.560	1.900	—	—	0.160
F70	2.200	0.400	—	—	0.090
F71	0.500	0.190	—	—	0.050
F72	0.800	0.800	—	—	0.050
F73	1.970	0.460	—	—	0.050
F74	0.980	0.470	—	—	0.050
F75	0.600	0.360	—	—	0.050
F76	0.460	0.170	—	—	0.050
F77	12.540	1.000	—	—	0.150
F78	2.840	1.900	—	—	0.170
F79	0.264	0.254	—	—	0.028
F80	4.160	1.710	—	—	0.018
F81①	0.480	0.460	—	—	0.080
F81②	0.240	0.210	—	—	0.080
F82	5.520	1.110	—	—	0.154

遺構名	確認検出面 (m)		床面ないしは坑底 (m)		深さ (m・残存する最深)
	長軸	短軸	長軸	短軸	
集石本体	6.700	(2.090)	—	—	—
S6-1	2.790	1.428	—	—	—
S6-2	2.690	(1.292)	—	—	—
S5	0.420	0.360	—	—	0.220





	H10出土遺物数計				H9出土遺物数計				合計
	遺土1	遺土2	遺土3	遺土4	H9-1 遺土	H9-2 遺土	H9-3 遺土	H9-4 遺土	
目録外遺土類	5	0	0	0	0	0	0	0	5
目録内遺土類	2432	36	53	1	0	2	0	0	2729
石鏃	9	0	0	0	0	0	0	0	9
石鏃小片	31	0	0	0	0	0	0	0	31
石鏃小片群	4	0	0	0	0	0	0	0	4
石鏃小片群	2	0	0	0	0	0	0	0	2
石鏃小片群	22	0	0	0	0	0	0	0	22
石鏃小片群	4	1	0	0	0	0	0	0	5
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	165	0	0	0	0	0	0	0	165
石鏃小片群	490	7	17	1	0	3	7	0	505
石鏃小片群	11	0	1	0	0	0	0	0	12
石鏃小片群	2	0	0	0	0	0	0	0	2
石鏃小片群	10	0	1	0	0	0	0	0	11
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	9	0	0	0	0	0	0	0	9
石鏃小片群	41	2	0	0	0	0	0	0	43
石鏃小片群	340	2	13	0	0	3	0	1	358
石鏃小片群	1941	20	190	2	1	8	2	0	2162
合計	3223	43	164	1	0	3	7	1	3442

	H10出土遺物数計				H9出土遺物数計				合計
	遺土1	遺土2	遺土3	遺土4	H9-1 遺土	H9-2 遺土	H9-3 遺土	H9-4 遺土	
目録外遺土類	192	2466	23	2	3	0	0	0	489
目録内遺土類	0	0	1	0	0	0	0	0	1
石鏃	14	11	3	0	0	0	0	0	28
石鏃小片	2	1	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	7	0	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	2	4	0	0	0	0	0	0	6
石鏃小片群	3	4	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	0	2	0	0	0	0	0	0	2
石鏃小片群	100	90	10	0	0	0	0	0	199
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	3	4	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	1	2	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	2	1	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	3	3	1	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	0	0	1	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	10	0	1	0	0	0	0	0	11
石鏃小片群	141	67	2	0	0	1	1	1	209
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	425	473	38	14	3	1	1	1	1014

H10出土遺物数計  
H9出土遺物数計  
合計

	H10出土遺物数計				H9出土遺物数計				合計
	遺土1	遺土2	遺土3	遺土4	H9-1 遺土	H9-2 遺土	H9-3 遺土	H9-4 遺土	
目録外遺土類	192	2466	23	2	3	0	0	0	489
目録内遺土類	0	0	1	0	0	0	0	0	1
石鏃	14	11	3	0	0	0	0	0	28
石鏃小片	2	1	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	7	0	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	2	4	0	0	0	0	0	0	6
石鏃小片群	3	4	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	0	2	0	0	0	0	0	0	2
石鏃小片群	100	90	10	0	0	0	0	0	199
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	3	4	0	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	1	2	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	2	1	0	0	0	0	0	0	3
石鏃小片群	3	3	1	0	0	0	0	0	7
石鏃小片群	0	0	1	0	0	0	0	0	1
石鏃小片群	10	0	1	0	0	0	0	0	11
石鏃小片群	141	67	2	0	0	1	1	1	209
石鏃小片群	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	425	473	38	14	3	1	1	1	1014

M101出土遺物集計	遺構 1		遺構 2		遺構 3		遺構 4		M101-1 遺構 1		M101-8 遺構 1	
	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2
土師製土器	690	1820	53	1	1	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	2	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	162	125	6	4	1	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	8	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	3	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	146	121	17	0	10	0	5	0	23	0	0	0
土師製土器	1027	1192	89	6	14	1	5	1	232	0	0	0
合計	891	564	682	144	32	6	2	2165				

M101出土遺物集計	遺構 1		遺構 2		遺構 3		遺構 4		M101-1 遺構 1		M101-8 遺構 1	
	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2
土師製土器	132	1833	2479	1272	147	62	1	2	6	0	0	0
土師製土器	2	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	462	29	9	1	1	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	5	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	2	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	9	345	212	462	27	22	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	24	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	7	217	17	16	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	195	2415	2002	1387	166	108	1	3	6	2	6	2
合計	185	2415	2002	1387	166	108	1	3	6	2	6	2

M101出土遺物集計	遺構 1		遺構 2		遺構 3		遺構 4		M101-1 遺構 1		M101-8 遺構 1	
	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2	遺構 1	遺構 2
土師製土器	132	1833	2479	1272	147	62	1	2	6	0	0	0
土師製土器	2	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	462	29	9	1	1	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	5	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	2	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	9	345	212	462	27	22	0	0	0	0	0	0
土師製土器	1	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	24	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	7	217	17	16	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土師製土器	195	2415	2002	1387	166	108	1	3	6	2	6	2
合計	185	2415	2002	1387	166	108	1	3	6	2	6	2









H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	0	4	29	35			68
石製土器類	0	0	2	2			4
銅製土器類	0	0	1	1			2
鉄製土器類	1	0	0	0			1
ガラス製土器類	0	0	1	1			2
漆器類	0	0	1	1			2
金属製土器類	0	0	1	1			2
土製土器類	0	0	1	1			2
石製土器類	0	0	0	0			0
銅製土器類	0	0	0	0			0
鉄製土器類	0	0	0	0			0
ガラス製土器類	0	0	0	0			0
漆器類	0	0	0	0			0
金属製土器類	0	0	0	0			0
合計	0	4	32	38			74

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	42	4	0	1	17	0	64
石製土器類	1	0	0	0	0	0	1
銅製土器類	1	0	0	0	0	0	2
鉄製土器類	3	0	0	0	0	0	3
ガラス製土器類	0	0	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0	0	0
合計	47	4	0	1	17	0	69

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	410	110	20	37	110	1	678
石製土器類	4	0	0	0	0	0	4
銅製土器類	1	0	0	0	0	0	1
鉄製土器類	18	3	0	0	0	0	21
ガラス製土器類	126	104	28	105	7	1	361
漆器類	0	0	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	1	0	0	0	0	1
合計	669	228	56	142	24	2	1071

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	16	15	1	1	1	1	34
石製土器類	0	0	0	0	0	0	0
銅製土器類	0	0	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0	0	0
合計	16	15	1	1	1	1	34

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	1	0	0	0	1
石製土器類	0	0	0	0	0
銅製土器類	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0
合計	1	0	0	0	1

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	191	1	1	1	194
石製土器類	0	0	0	0	0
銅製土器類	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0
合計	191	1	1	1	194

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	156	1100	0	0	2	1119	1682
石製土器類	0	0	0	0	0	0	0
銅製土器類	0	0	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0	0	0
合計	156	1100	0	0	2	1119	1682

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		遺構3		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	135	70	4	0	0	0	205
石製土器類	0	0	0	0	0	0	0
銅製土器類	0	0	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0	0	0
合計	135	70	4	0	0	0	205

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	17	0	0	0	17
石製土器類	4	0	0	0	4
銅製土器類	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0
合計	21	0	0	0	21

H41出土遺物種別	遺構1		遺構2		合計
	遺構1	遺構2	遺構1	遺構2	
土製土器類	5	0	0	0	5
石製土器類	2	0	0	0	2
銅製土器類	0	0	0	0	0
鉄製土器類	0	0	0	0	0
ガラス製土器類	0	0	0	0	0
漆器類	0	0	0	0	0
金属製土器類	0	0	0	0	0
合計	7	0	0	0	7

H16出土動物骨計	
種別	骨数
野鳥の骨	202
スズクビ	4
スズクビ	1
スズクビ	3
スズクビ	1
スズクビ	23
スズクビ	3
スズクビ	37
合計	432

種別	H16出土動物骨計		H16-1 野鳥	H16-2 野鳥	H16-3 野鳥	H16-4 野鳥	合計
	種別	骨数					
野鳥の骨	320	41	0	0	0	0	4
スズクビ	1	1	0	0	0	0	2
スズクビ	4	2	0	0	0	0	6
スズクビ	4	1	0	0	0	0	5
スズクビ	4	1	0	0	0	0	5
スズクビ	7	0	0	0	0	0	7
スズクビ	1	0	0	0	0	0	1
スズクビ	318	20	0	0	0	0	348
スズクビ	7	0	0	0	0	0	7
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	14	7	0	0	0	0	21
合計	942	86	3	1	1	2	755

種別	H16出土動物骨計		H16-1 野鳥	H16-2 野鳥	H16-3 野鳥	H16-4 野鳥	合計
	種別	骨数					
野鳥の骨	84	586	0	1	2	0	4
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	1	2	0	0	0	0	3
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	0	6	0	0	0	0	6
スズクビ	39	11	0	0	0	0	50
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	7	0	0	0	0	0	7
スズクビ	4	0	0	0	0	0	4
スズクビ	124	810	3	1	1	2	1,118

種別	H16出土動物骨計		H16-1 野鳥	H16-2 野鳥	H16-3 野鳥	H16-4 野鳥	合計
	種別	骨数					
野鳥の骨	3	332	0	6	1	0	348
スズクビ	0	3	0	0	0	0	3
スズクビ	3	2	0	0	0	0	5
スズクビ	3	0	0	0	0	0	3
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	0	4	0	0	0	0	4
スズクビ	31	413	0	1	2	0	425
スズクビ	1	1	0	0	0	0	2
スズクビ	0	2	0	0	0	0	2
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	10	33	1	0	0	0	45
スズクビ	0	0	0	0	0	0	0
合計	83	418	1	7	4	2	411

種別	H16出土動物骨計		H16-1 野鳥	H16-2 野鳥	H16-3 野鳥	H16-4 野鳥	合計
	種別	骨数					
野鳥の骨	202	47	0	0	0	0	47
スズクビ	144	67	0	0	0	0	211
スズクビ	1	0	1	0	0	0	2
スズクビ	7	1	4	0	0	0	12
スズクビ	2	0	0	0	0	0	2
スズクビ	1	5	0	0	0	0	6
スズクビ	16	23	2	1	0	0	42
スズクビ	2	1	2	0	0	0	5
スズクビ	2	0	0	1	0	0	3
スズクビ	0	0	0	0	0	0	0
スズクビ	150	27	18	1	0	0	195
スズクビ	732	133	172	23	17	2	1,118

種別	H16出土動物骨計		H16-1 野鳥	H16-2 野鳥	H16-3 野鳥	H16-4 野鳥	合計
	種別	骨数					
野鳥の骨	1547	751	492	64	0	0	2,364
スズクビ	2	0	0	0	0	0	2
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	0	1	0	0	0	0	1
スズクビ	5	0	0	0	0	0	5
スズクビ	2	2	1	0	0	0	5
スズクビ	6	7	0	1	0	0	14
スズクビ	7	5	1	0	0	0	13
スズクビ	129	24	38	1	2	3	177
スズクビ	9	1	3	0	0	0	13
スズクビ	4	1	0	1	0	0	6
スズクビ	4	1	1	0	0	0	6
スズクビ	7	2	0	0	0	0	9
スズクビ	237	155	27	28	1	0	453
スズクビ	2318	1102	339	212	7	14	4,030







## V 自然科学的分析

### 1. 館野6遺跡から出土した動物遺体

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

北海道北斗市館野に所在する館野6遺跡は、海岸から約200m、標高50~60mの海岸段丘上、下矢不來川左岸に位置する。ここでは、縄文時代前期後半の盛土遺構、竪穴住居、焼土から採取された動物遺体について同定結果を報告する。なお、海生哺乳類の同定にあたって国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生に、魚類の同定にあたって早稲田大学の橋泉岳二先生にご教示をいただいた。

#### 2. 試料と方法

試料は、試料袋60点である。

試料が採取されたのは、縄文時代前期後半(円筒下層式)の盛土遺構M2、M4、M6、竪穴住居H21、H24、H29、H39、焼土F66、F67、F68、F69、F70、F71、F72、F73、F75、F76、F77、F78の各遺構である。

各遺構から採取された土壌について、北海道埋蔵文化財センターにおいて水洗選別が行われ、0.425mm以上の動物遺体が選別された。

パレオ・ラボにおいて魚類、鳥類、哺乳類について同定可能な部位の抽出、同定、計数を行った。同定は、肉眼あるいは実体顕微鏡下で現生標本との比較により行った。魚類のうち、同定と計数の対象とした部位は、歯、前上顎骨、主上顎骨、歯骨、角骨、方骨、前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、椎骨(サケ科は破片、サケ科以外は椎体1/2以上残存)である。この他にも、特徴的な部位は同定と計数の対象とした。

#### 3. 結果

表1に同定された分類群一覧、表2に遺構別出土数量、表3に個別の記載を示す。

認められた分類群は、軟骨魚綱のエイ・サメ類(板鰓亜綱)、メジロザメ科、アオザメ?、ツノザメ目、硬骨魚綱のニシン、マイワシ、ニシン科、コイ科、サケ科、タラ科(マダラ or スケトウダラ)、カレイ科、フサカサゴ科、アイナメ属、アイナメ科、タイ科、ブリ属、サバ属、カツオ・マダラ類、鳥綱の一種、哺乳綱のヒト、イタチ科、オットセイ?である。

ほぼ全ての試料が焼けていた。タイ科やサメ類の歯は焼けているかどうか明確に判断できなかった。なお、焼けたことで細片化や変形した動物遺体も多く、網レベルの同定に留まる試料が多かった。

#### 4. 考察

魚類では、エイ類、サメ類、メジロザメ科といったエイ・サメ類の歯や椎骨が見られた。エイ・サメ類は、食用の他に歯や椎骨が骨角器の素材として利用された可能性が考えられる。

エイ・サメ類以外では、沿岸や大陸棚に生息するタラ科、回遊するニシン、マイワシ、ニシン科、ブリ属、サバ属、カツオ・マダラ類、沿岸や内湾に生息するカレイ科、フサカサゴ科、アイナメ属、アイナメ科、タイ科といった海に生息する分類群や、河川を遡上するサケ科、淡水に生息するコイ科が見られた。海から淡水域にかけての水域で漁労活動が行われていたと推定される。



鳥類は種類が同定できなかったが、ある程度の量が見られ、食用にされていた可能性がある。

哺乳類は種類が同定できない試料が多かった。海生哺乳類が比較的多く見られた一方、確実に陸生と判断される哺乳類はごくわずかであった。海生哺乳類の中には、おそらくオットセイと見られる椎骨、中手骨あるいは中足骨、指骨が含まれており、海岸あるいは海上で海獣狩猟が行われていたと考えられる。縄文時代前期後半の両館市八木A遺跡や伊達市北黄金貝塚でも海獣が多く出土しており、館野6遺跡に認められた傾向も同時期の北海道における傾向と共通する。一方、同時期の青森県の遺跡(三内丸山遺跡や東道ノ上(3)遺跡)では陸獣が主体である。

陸生哺乳類として同定できたのは、イタチ科であり、小型陸獣を対象とした狩猟が行われていたと考えられる。明らかに大型陸獣(シカなど)と見られる骨が無かった点も特徴的である。ただし、焼骨のみの同定により把握できる動物遺体の出土傾向は限定的であり(福井, 2008)、今回得られた哺乳類の出土傾向に関しても注意が必要である。

## 引用・参考文献

- 福井淳一(2008) 動物遺存体の出土状況。工藤研治ほか編「釧路町天寧1遺跡」, 北海道埋蔵文化財センター。
- 福井淳一(2010) 石倉1遺跡出土の動物遺存体。遠藤香澄ほか編「森町石倉1遺跡(2)」, 北海道埋蔵文化財センター。
- 西本豊弘(1993) 八木A遺跡出土の動物遺体。南茅部町埋蔵文化財調査団編「八木A遺跡・ハマナス野遺跡」, 南茅部町埋蔵文化財調査団。
- 西本豊弘(1998) 三内丸山遺跡第6鉄塔地区出土の鳥類・哺乳類遺体。青森県教育庁文化課編「三内丸山遺跡IX」, 青森県教育委員会。
- 西本豊弘(1999) 伊達市北黄金貝塚出土の動物遺体。伊達市教育委員会編「国指定史跡北黄金貝塚発掘調査報告書」, 伊達市教育委員会。
- 斉藤慶吏(2006) 動物遺存体。青森県埋蔵文化財調査センター編「東道ノ上(3)遺跡」, 青森県教育委員会。

表V-1-1 館野6遺跡出土動物遺体分類群一覧

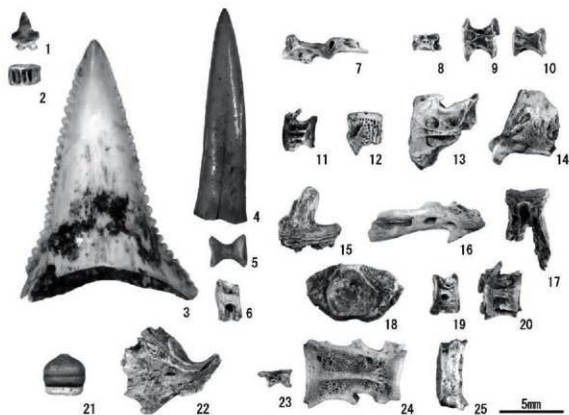
表1 館野6遺跡出土動物遺体分類群一覧	
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA	
軟骨魚綱 Class Elasmobranchii	
エイ・サメ類	Elasmobranchii ord. fam. gen. et sp. indet.
メジロサメ科	Garcharhinidae gen. et sp. indet.
アオザメ	<i>Isurus oxyrinchus?</i>
ツノサメ目	Squaliformes fam., gen. et sp. indet.
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	
ニシン	<i>Clupea pallasii</i>
マイワシ	<i>Sardinops sagax</i>
ニシン科	Clupeidae gen. et sp. indet.
コイ科	Cyprinidae gen. et sp. indet.
サケ科	Salmonidae gen. et sp. indet.
タラ科	Gadidae gen. et sp. indet.
カレイ科	Pleuronectidae gen. et sp. indet.
フサカサゴ科	Scorpaenidae gen. et sp. indet.
アイナメ属	<i>Hexagrammos</i> spp.
アイナメ科	Hexagrammidae gen. et sp. indet.
タイ科	Sparidae gen. et sp. indet.
ブリ属	<i>Seriola</i> sp.
サバ属	<i>Scomber</i> sp.
カツオ・マグロ類	Scombrinae gen. et sp. indet.
鳥綱 Class Aves	
鳥綱の一種	Aves ord. fam. gen. et sp. indet.
哺乳綱 Class Mammalia	
ヒト	<i>Homo sapiens</i>
イタチ科	Mustelidae gen. et sp. indet.
オットセイ?	<i>Callorhinus ursinus?</i>



遺構	図号番号	発掘区	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
M4	13	300	イイ部	礎礎	—	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	溝管	右	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	溝管	—	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	溝管	—	礎礎	3	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	14	300	溝管	溝管	—	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	15	300	鳥類	四肢骨	不詳	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	中室部・中室管	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	16	300	フィナノ瓦	溝管(母形)	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
17	300	鳥類	四肢骨	右	骨節	1	礎	
		鳥類	四肢骨	不詳	骨節	1	礎	
18	300	鳥類	四肢骨	不詳	礎礎	2	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
19	300	溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
M6	20	44a	イナノ瓦	下腹管	右	下腹管	1	礎
			フィナノ瓦	中室部・中室管	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	2	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	21	43a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	22	43a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	23	43a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
	24	43a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
25	44a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
26	44a	ニシン和	瓦上腹管	左	礎礎	1	礎	
		ニシン和	瓦上腹管	—	礎礎	1	礎	
27	44c	サカサ和	溝管	—	礎礎	+	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎	
28	44a	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
29	44c	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
H21	20	307	溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	2	礎
H21B-1	20	477	溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
H25	30	625	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
H26	31	82U	溝管	溝管	不詳	礎礎	2	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
F60	24	365	溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
F67	20	375	溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
F68	36	365	サマ和	溝管	—	礎礎	2	礎
			エイ・サマ和	溝管	—	礎礎	1	礎
			サマ和	溝管	—	礎礎	2	礎
			ニシン和	溝管	—	礎礎	13	礎
			ニシン和	溝管	—	礎礎	20	礎
			コサ和	溝管	—	礎礎	1	礎
			サカサ和	溝管	—	礎礎	6	礎
			フカカサ和	溝管	左	礎礎	1	礎
			フカカサ和	溝管	左	礎礎	1	礎
			フカカサ和	溝管	左	礎礎	1	礎
	37	807	フィナノ瓦	方管	—	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	基礎部分	—	礎礎	1	礎
			フィナノ瓦	溝管	—	礎礎	7	礎
			フィナノ瓦	溝管	—	礎礎	43	礎
			フィナノ瓦	溝管	—	礎礎	92	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	8	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	2	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
			溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎
38	807	サマ和	溝管	—	礎礎	1	礎	
		ニシン和	溝管	—	礎礎	1	礎	
		サマ和	溝管	—	礎礎	2	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	4	礎	
		鳥類	四肢骨	不詳	礎礎	1	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
		エイ部	溝管	—	礎礎	2	礎	
		サマ和	溝管	—	礎礎	2	礎	
		サマ和	溝管	—	礎礎	6	礎	
		サマ和	溝管	—	礎礎	1	礎	
39	807	溝管	溝管	不詳	礎礎	1	礎	
		鳥類	四肢骨	不詳	礎礎	1	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	
		エイ部	溝管	—	礎礎	2	礎	
		フナザマ和	溝管	—	礎礎	2	礎	
		ニシン和	溝管	—	礎礎	1	礎	
		ニシン和	溝管	—	礎礎	2	礎	
		サマ和	溝管	左	礎礎	1	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	2	礎	
		溝管	溝管	不詳	礎礎	+	礎	

通称	試料番号	検出法	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
F69	40	607	エーゼ	検査	—	液体	1	検
			ツルゲマ目	検査	—	液体	1	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	1	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	1	検
			キノコ目	菌	不詳	菌類	3	検?
			アノミ属	菌	左	菌類	1	検
			ヤマノ属	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			魚類	魚口骨	不詳	骨部	2	検
			鎌倉魚(魚?)	検査	不詳	中野村産	1	検
F70	41	395	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			エーゼ	魚	不詳	陸産資源	2	検
			メロウマ目	魚	不詳	部分	2	検
			ヤマノ属	菌類	—	液体	1	検
			カマオ・マツロ目	菌類(菌類?)	—	液体	2	検
			鎌倉魚類	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
			コイ科	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F71	42	385	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F72	43	343	スウケツスウケツマツラ	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
			コイ科	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F73	44	385	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			コイ科	菌類	—	液体	2	検
			コイ科	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
	45	385	魚類	魚口骨	左	陸産資源	1	検
			魚類	魚口骨	左	陸産資源	1	検
			魚類	魚口骨	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F70	46	805	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
	47	805	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F71	48	815	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
	49	575	鎌倉魚類(魚?)	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
			コイ科	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F72	50	385	ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
			アノミ属	菌類	左	菌類	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
	51	385	鎌倉魚(魚?)	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F73	53	385	鎌倉魚類(魚?)	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	4	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	5	検
			コイ科	菌類	—	液体	2	検
	54	385	鎌倉魚類	検査	不詳	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			エーゼ・ヤマノ属	検査	—	液体	1	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
F70	54	385	タイシ	魚	—	液体	1	検
			アノミ属	菌類	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			メロウマ目	魚	不詳	部分	1	検?
			鎌倉魚類	検査	—	液体	1	検
	57	815	鎌倉魚類	検査	—	液体	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			コイ	魚口骨	不詳	部分	1	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
F70	58	825	鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			エーゼ・ヤマノ属	検査	—	液体	2	検
			ヤマノ属	検査	—	液体	2	検
			ツルゲマ目	検査	—	液体	4	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	3	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	11	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	2	検
			キノコ目	魚	不詳	液体	2	検
			アノミ属	菌類	—	液体	1	検
F70	60	825	アノミ属	菌類	—	液体	1	検
			アノミ属	菌類	—	液体	1	検
			ニンシ科	菌類	—	液体	1	検
			コイ科	菌類	—	液体	1	検
			アノミ属	菌類	—	液体	1	検
			キノコ目	魚	不詳	部分	6	検?
			ヤマノ属	菌類	—	液体	2	検
			鎌倉魚類	検査	—	液体	2	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検
			鎌倉魚類	不詳	不詳	部分	+	検

\* 及び(計数せず)



図版V-1-1 館野6遺跡出土の動物遺体

1. エイ類歯(41) 2. エイ類椎骨(13) 3. メジロザメ科歯(56) 4. アオザメ?歯(2)  
 5. ツノザメ目椎骨(39) 6. サメ類椎骨(36) 7. ニシン主上顎骨L(26) 8. マイワシ第2椎骨(36)  
 9. ニシン科腹椎(36) 10. ニシン科尾椎(36) 11. コイ科尾椎(36) 12. サケ科椎骨(36)  
 13. スケトウダラorマダラ腹椎(43) 14. フサカサゴ科方骨L(36) 15. アイナメ属前上顎骨L(36)  
 16. アイナメ属歯骨R(13) 17. アイナメ属基後頭骨(36) 18. アイナメ属第1椎骨(36) 19. アイナメ科腹椎(36)  
 20. アイナメ属尾椎(36) 21. タイ科歯(38) 22. フリ属角骨L(40) 23. サバ属第1椎骨(38) 24. サバ属尾椎(31)  
 25. カツオ・マグロ類尾椎(41) 26. 烏網上顎骨R(8) 27. 烏網腔足椎骨R(45) 28. ヒト後臼歯(57)  
 29. イタチ科下顎骨R(19) 30. オットセイ?椎骨(5) 31. オットセイ?中手骨or中足骨(15) 32-33. オットセイ?指骨(16, 1)

表V-1-4 動物遺体分析依頼料一覧

動物種別	分析項目	分析部	検体	検出	検出物質	検出物質	検出物質	検出物質	検出物質	検出物質			検出物質
										検出物質	検出物質	検出物質	
1	遺体分析	KG 636	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.18	2070	4,700	KG030	1.0	0.6	0.2	3.2
2	遺体分析	KG 607	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.09.09	-	-	-	-	-	-	0.1
3	遺体分析	KG 605	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.07	20	9,020	KG030	-	0.0	3.7	1.0
4	遺体分析	KG 590	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.24	60	1,100	KG030	-	0.0	0.1	0.0
5	遺体分析	KG 595	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.20	70	5,000	KG030	-	0.0	0.7	0.0
6	遺体分析	KG 591	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.20	10	1,100	KG030	-	0.0	0.1	0.0
7	遺体分析	KG 588	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.20	30	5,440	KG030	-	0.0	0.1	0.0
8	遺体分析	KG 588	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.19	10	1,100	KG030	-	0.0	-	1.1
9	遺体分析	KG 588	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.14	10	1,100	KG030	-	-	-	1.5
10	遺体分析	KG 588	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.22	60	9,100	KG030	0.0	0.0	0.2	0.1
11	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.20	-	-	-	-	-	-	0.4
12	遺体分析	KG 596	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.29	170	3,200	KG030	0.0	0.0	2.3	1.0
13	遺体分析	KG 596	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.22	1040	7,700	KG030	0.7	0.4	2.1	4.3
14	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.27	340	3,200	KG030	0.1	0.1	0.9	1.7
15	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.28	140	2,200	KG030	0.0	0.0	1.1	1.1
16	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.21	20	3,300	KG030	0.0	0.0	1.1	1.1
17	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.24	100	1,500	KG030	0.0	0.0	2.0	2.3
18	遺体分析	KG 597	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.28	10	1,100	KG030	-	-	-	1.1
19	遺体分析	KG 598	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.23	20	5,500	KG030	0.0	0.0	4.7	4.4
20	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.04	1000	9,000	KG030	2.0	2.4	3.4	9.0
21	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.04	1500	12,700	KG030	1.8	1.6	4.0	5.5
22	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.04	1650	20,700	KG030	3.2	3.2	4.7	6.4
23	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.07	4540	17,000	KG030	4.0	1.1	2.4	5.6
24	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.07	-	-	-	-	-	-	1.0
25	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.07	4320	4,600	KG030	-	-	-	0.1
26	遺体分析	KG 654	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.08	1100	10,500	KG030	2.0	4.0	4.0	6.7
27	遺体分析	KG 642	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.20	20	2,440	KG030	-	-	-	0.4
28	遺体分析	KG 597	KG		骨灰が留置された検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.10.11	50	5,000	KG030	-	0.0	0.0	0.0
29	骨灰の採取	KG049	KG		骨灰の採取	2008.10.09	570	3,000	KG030	2.7	0.7	0.3	0.9
30	骨灰の採取	KG 625	KG		骨灰の採取	2008.10.11	910	3,000	KG030	0.0	0.0	0.2	1.2
31	骨灰の採取	KG 626	KG		骨灰の採取	2008.10.05	1080	2,400	KG030	7.3	0.0	0.6	0.7
32	骨灰の採取	KG 626	KG		骨灰の採取	2008.10.19	190	3,000	KG030	11.4	10.0	0.0	0.3
33	骨灰の採取	KG 627	KG		骨灰の採取	2008.10.24	10	3,000	KG030	-	0.0	3.4	3.4
34	獣産士への検体の取り上げ	F90 645	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.28	4330	6,000	KG030	3.8	5.1	0.1	0.1
35	獣産士への検体の取り上げ	F90 678	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.28	2040	9,000	KG030	1.3	34.8	0.1	0.1
36	獣産士への検体の取り上げ	F90 550	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.11.29	4400	10,200	KG030	24.5	44.1	0.0	2.1
37	HIV陽性者の遺物採取	F90 607	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2009.07.29	7040	9,500	KG030	41.2	41.1	229.9	3.7
38	HIV陽性者の遺物採取	F90 607	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2009.07.21	2810	4,000	KG030	27.0	26.0	148.2	0.3
39	HIV陽性者の遺物採取	F90 607	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2009.08.03	10400	25,900	KG030	45.3	127.4	40.1	4.7
40	HIV陽性者の遺物採取	F90 607	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2009.08.04	520	4,000	KG030	50.6	60.9	207.4	4.7
41	獣産士への検体の取り上げ	F70 580	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.07.20	10770	14,000	KG030	13.0	38.0	0.0	0.7
42	獣産士への検体の取り上げ	F70 585	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.07.20	9050	2,000	KG030	1.6	1.6	10.7	0.0
43	獣産士への検体の取り上げ	F70 540	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.03	950	1,000	KG030	2.9	2.5	0.4	0.9
44	獣産士への検体の取り上げ	F70 580	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.04	10400	13,500	KG030	10.3	22.0	10.0	2.4
45	獣産士への検体の取り上げ	F70 585	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.04	-	-	-	-	-	-	0.7
46	獣産士への検体の取り上げ	F70 600	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	4300	9,000	KG030	40.1	20.0	118.0	0.7
47	獣産士への検体の取り上げ	F70 600	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.04	4200	9,000	KG030	0.6	6.2	39.0	0.7
48	獣産士への検体の取り上げ	F70 610	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.04	2200	2,300	KG030	16.0	11.0	0.1	0.2
49	獣産士への検体の取り上げ	F77 670	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	1000	7,700	KG030	17.1	16.0	378.2	2.6
50	獣産士への検体の取り上げ	F77 585	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	7400	9,000	KG030	22.5	26.0	238.1	2.0
51	獣産士への検体の取り上げ	F77 585	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	1300	1,900	KG030	1.5	2.0	38.0	0.3
52	獣産士への検体の取り上げ	F77 580	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.08	12420	28,000	KG030	40.0	52.4	275.0	4.0
53	獣産士への検体の取り上げ	F77 585	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	10300	9,000	KG030	126.2	188.7	710.0	3.7
54	獣産士への検体の取り上げ	F77 586	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.08	4040	52,000	KG030	131.3	143.0	701.0	3.7
55	獣産士への検体の取り上げ	F77 600	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.08	2300	2,300	KG030	12.2	11.1	63.0	0.4
56	獣産士への検体の取り上げ	F70 600	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	-	-	-	-	-	-	0.2
57	獣産士への検体の取り上げ	F70 610	KG		獣産士への検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.08	2090	2,100	KG030	9.3	6.6	78.0	1.3
58	HIV陽性者の遺物採取	F70 620	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.08	3700	4,900	KG030	1.6	2.0	100.0	0.7
59	HIV陽性者の遺物採取	F70 620	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.09	2000	4,000	KG030	6.0	6.0	22.0	0.4
60	HIV陽性者の遺物採取	F70 620	KG		HIV陽性者の検体の取り上げの上遺体サンプル	2008.08.05	3800	4,000	KG030	4.8	6.2	24.1	0.4

## 2. 館野6遺跡出土の炭化種実

佐々木由香・バンダリ スタルジャン (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

館野6遺跡は北斗市館野に位置し、海岸から約200mの下矢不來川左岸の海岸段丘上、標高約50～60mの地点に立地する。ここでは円筒下層b式から下層d式期を中心とする縄文時代前期後半の盛土遺構および堅穴住居跡などから得られた種実の同定を行い、当時の植生や食用とされた種実に関する情報を得る。

### 2. 試料と方法

試料は、1試料あたり1点から数百点の炭化物を含む水洗済み試料である。試料の内訳を整理番号順に遺構名と試料数で示すと、盛土遺構であるM4(1試料)とM6(6試料)、堅穴住居跡であるH19、HF1(1試料)とH24、HF1(1試料)、堅穴住居覆土中廃棄のH39(2試料)、堅穴住居跡であるH52、HF1(1試料)、盛土遺構中の焼土であるF66(1試料)と、F67(1試料)、F68(1試料)、H21覆土への遺物廃棄に伴う焼土であるF69(4試料)、盛土遺構中の焼土であるF70(1試料)と、F77(1試料)、F72(1試料)、F73(1試料)、F75(2試料)、F76(1試料)、F77(7試料)、H29覆土への遺物廃棄に伴う焼土であるF78(3試料)、堅穴住居跡であるH32、HF1(1試料)とH54、HF1(1試料)、H57、HF1(1試料)の計39試料である。遺構の時期は、いずれも縄文時代前期後半で、各遺構の詳細な時期は不明だが、主体となる時期は円筒下層b式から下層d式期である。

堆積物の採取から水洗、抽出までの作業は、北海道埋蔵文化財センターによって行われた。水洗前の土壌重量は表を参照されたい。水洗は、最小0.425mmの篩を用いて、浮遊選別法と水洗選別法によって浮遊物と沈殿物双方が回収された。炭化種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は北海道埋蔵文化財センターに保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ炭化核と、クリ炭化子葉、キハダ炭化種子、トチノキ炭化種子、ニワトコ炭化核の5分類群が見いだされた(表1～3)。このほかに、科以下の同定ができなかった一群を不明炭化種実Aとし、微細な破片であるため科以下の識別点をもたない同定不能な一群を同定不能種実とした。種実以外では、炭化した虫えいと子囊菌が得られた。炭化材や骨片も得られたが検討の対象外とした。また、草本植物で未炭化のタニソバ果実とスギナ地下茎が得られた。遺跡の立地から判断して、当時の未炭化種実は残存しないと考えられるため、未炭化の種実は現生の種実として扱った。同定した総点数は、1149点であった。

以下に、遺構種類別の炭化種実の出土傾向を記載する(未炭化種実と、不明炭化種実、同定不能炭化種実、虫えい、子囊菌は除く)。

#### [盛土遺構]

M4：炭化種実が得られなかった。

M6：オニグルミが多数、クリとトチノキが少数、キハダがわずかに得られた。44aのM6-1層からはオニグルミの破片が67点得られたが、完形個体数に換算すると2～3個程度であった。ほかの地点でもオニグルミの破片数は多いが、完形個体数に換算すると、1個かそれ以下であった。

表V-2-1-1~3 館野6遺跡から出土した炭化種実

表1 館野6遺跡から出土した炭化種実(括弧は破片を示す)

遺構種類	盛土遺構										竪穴住居跡		竪穴住居覆土中廃棄		竪穴住居跡	
	M4		M5		M6		M7		M8		H19 HF-1		H24 HF-1		H39	
遺構名	309	44a	42a	42a	43x	44a	44Z	477	477	477	477	477	477	477	477	477
層位	M4-0	M6-1			M6-2			HF-1遺土層			住居覆土下部			HF-1遺土層		
整理番号	T6-1	T6-2	T6-3	T6-4	T6-5	T6-6	T6-7	T6-8	T6-9	T6-10	T6-11	T6-12				
試料通し番号	103	26	27	25	26	19	20	9	122	123	18					
分群群	オニグルミ	炭化種実	(8)	(11)	(17)	(9)	(8)	(48)	4,550	3,270	1,380	1,800	5,670			
オニグルミ	炭化種実															
クリ	炭化種実															(1)
キハダ	炭化種実		(1)													
トナリ	炭化種実								(7)							
ニワトコ	炭化種実															(3)
タニソバ	炭化種実															
不詳A	炭化種実															
不詳B	炭化種実		(20)		(1)		(17)	(1)	(1)	(1)						(3)
虫食い	炭化種実									(2)						
子実層	炭化種実															

表2 館野6遺跡から出土した炭化種実(括弧は破片を示す)

遺構種類	盛土遺構中の焼土										H21層土への遺物廃棄に伴う焼土										盛土遺構中の焼土	
	F68		F67		F66		F69		F70		F71		F72		F73		F75					
遺構名	945	975	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985	985				
層位	焼土層 SHレンテ					焼土層 AHレンテ					焼土層 SHレンテ					焼土層 SHレンテ						
掘り下げ範囲	5m×3回			5m×4回			5m×7回			5m×8回			5m×10回			5m×11回						
範囲×回数	T6-13	T6-14	T6-15	T6-16	T6-17	T6-18	T6-19	T6-20	T6-21	T6-22	T6-23	T6-24	T6-25									
整理番号	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	44	43									
試料通し番号	3,400	29,480	44,300	7,040	2,910	18,880	5,120	10,770	5,880	950	10,480	4,300	4,260									
分群群	オニグルミ	炭化種実	(1)	(6)	(32)	(20)	(2)	(47)	(7)	(8)	(4)	(22)										
オニグルミ	炭化種実																					
クリ	炭化種実		(4)	(23)	(1)	(2)	(1)	(1)				(4)										
ニワトコ	炭化種実																					
不詳A	炭化種実		(1)	(4)	(8)	(3)	(2)															
不詳B	炭化種実																					
虫食い	炭化種実																					
子実層	炭化種実																					

表3 館野6遺跡から出土した炭化種実(括弧は破片を示す)

遺構種類	盛土遺構中の焼土										H29層土への遺物廃棄に伴う焼土										竪穴住居跡	
	F76		F77		F78		F79		F80		F81		F82		F83		F84					
遺構名	815	815	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885	885					
層位	焼土層 AHレンテ					焼土層 SHレンテ					焼土層 AHレンテ					HF-1遺土層						
掘り下げ範囲	5m×11回			5m×11回			5m×11回			5m×11回			5m×11回			5m×11回						
範囲×回数	T6-26	T6-27	T6-28	T6-29	T6-30	T6-31	T6-32	T6-33	T6-34	T6-35	T6-36	T6-37	T6-38	T6-39	T6-40							
整理番号	45	47	48	50	49	51	52	53	54	55	31	10	18	21								
試料通し番号	2,230	7,400	1,300	21,420	38,580	41,440	2,130	2,090	3,760	2,830	3,880	4,160	5,430	880								
分群群	オニグルミ	炭化種実	(16)	(23)	(8)	(90)	(17)	(26)	(8)	(2)	(2)	(107)										
オニグルミ	炭化種実																					
クリ	炭化種実		(8)	(2)	(21)	(201)	(3)															
キハダ	炭化種実					(1)																
タニソバ	炭化種実																					
不詳A	炭化種実																					
不詳B	炭化種実																					
虫食い	炭化種実																					
子実層	炭化種実																					

## [竪穴住居跡]

H19、HF-1・H24、HF-1・H52、HF-1・H32、HF-1・H54、HF-1・H57、HF-1: 炭化種実が得られなかった。

## [竪穴住居覆土中廃棄]

H39: クリとニワトコがわずかに得られた。

## [盛土遺構中の焼土]

F66: オニグルミがわずかに得られた。

F67: オニグルミが多数とクリがわずかに得られた。オニグルミの完形個体換算数は1~2個程度であった。

F68: オニグルミが多数とクリが少数得られた。オニグルミの完形個体換算数は1~2個程度であった。クリの復元完形個体数は1個以上であった。

F70: オニグルミがわずかに得られた。

F72: オニグルミがわずかに得られた。

F73: オニグルミが少数とクリがわずかに得られた。オニグルミの完形個体換算数は1個程度であった。

F75: 炭化種実が得られなかった。



F76: オニグルミが少数得られた。オニグルミの完形個体換算数は1~2個程度であった。オニグルミには齧歯類の食痕をもつものが1点みられた。

F77: オニグルミとクリが多数とキハダがわずかに得られた。オニグルミとクリは59Sに多数みられ、オニグルミの完形個体換算数は4個程度、クリの完形個体換算数は12~13個程度であった。オニグルミは60Sでも多い傾向があり、完形個体換算数は1~2個程度であった。そのほかの試料では、オニグルミの完形個体換算数は1個未満であった。

[H21覆土への遺物廃棄に伴う焼土]

F69: オニグルミが多数とクリとニワトコがわずかに得られた。オニグルミはT6-18に多数みられ、完形個体換算数は1~2個程度であった。そのほかの試料では、オニグルミの完形個体換算数は1個未満であった。

[H29覆土への遺物廃棄に伴う焼土]

F78: オニグルミがわずかに得られた。

F78相当: オニグルミが多数得られた。完形個体換算数は1~2個程度であった。

以下に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科  
すべて1/2未満の破片である。完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は鋭角で光沢があり、角が尖るものが多い。最大で、残存長17.8mm、残存幅15.3mm。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化子葉 ブナ科

側面は広卵形。しわ状の浅い縦溝が一面にある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。最大で、長さ13.5mm、幅14.9mm。

(3) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 炭化種子 ミカン科

すべて破片である。完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は偏楕円形。表面にはやや大きく高さのほとんどない網目模様がある。壁はやや薄い。最大で、残存長3.5mm、残存幅1.6mm。

(4) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子 トチノキ科

すべて破片である。完形ならば楕円形で、下半部は褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色で光沢がややある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。種皮は3層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。最大で、残存長6.8mm、残存幅4.8mm。

(5) ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara 炭化核 スイカズラ科

上面観は扁平、側面観は楕円形で基部が尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.0mm、幅1.3mm程度。

(6) 不明A Unknown A 炭化種実

上面観は扁平、側面観はやや角がある倒卵形。形状はニワトコに似るが、表面には凹凸がみられない。長さ2.2mm、幅1.5mm。

(7) 虫えい Gall

楕円形で、片側中央部が凹む。表面は平滑。長さ2.0mm、幅2.7mm。

(8) 子囊菌 Ascomycota 炭化子囊

球形で、表面には微細な模様がある。長さ0.8mm、幅1.0mm程度。

#### 4. 考 察

縄文時代前期後半の遺構から出土した種実では、オニグルミや、クリ、トチノキといった食用可能な堅果類が多く、これらにキハダやニワトコといった食用可能な種実が伴っていた。これらのうち、トチノキは食用にあたってアク抜きが必要な種である。トチノキは盛土遺構の1ヵ所のみからしか得られていないが、縄文時代前期後半段階においてトチノキが利用されていた可能性を示唆している。オニグルミやトチノキは、食用にならない部位の出土が多いことから、利用されたものとするならば、加工時の残滓が炭化したと考えられる。キハダはすべて炭化した破片であり、加工時の何らかの状況を反映している可能性がある。

遺構種類別に出土傾向をみていくと、M6の盛土遺構からは、オニグルミとクリ、トチノキ、キハダが得られた。オニグルミは165点と多いがすべて破片で、完形個体換算数は5～6個程度であった。また、同定不能炭化種実も38点と多く、炭化材も含まれていた。同定可能な分類群はすべて食用可能な種実である点や炭化材が多い点から、盛土遺構内には生活残滓がかなり混在していたと考えられる。

竪穴住居からは同定可能な炭化種実が得られなかった。同定不能種実がわずかに得られたのみであり、元々種実が含まれていなかった可能性や、種実があったとしてもほとんどが灰または同定不能種実となり、同定可能な種実として遺存しなかった可能性や、水洗量が他の遺構と比べて少なかったために種実が得られなかった可能性などが考えられる。

竪穴住居覆土中に廃棄されたH39からは、クリとニワトコが得られた。盛土遺構中の焼土からは、9基中8基から同定可能な種実が得られ、オニグルミが8基、クリが4基、キハダが1基から得られた。H21覆土への遺物廃棄に伴う焼土であるF69からは、オニグルミとクリ、ニワトコが得られた。H29覆土への遺物廃棄に伴う焼土であるF78とF78相当からはオニグルミが得られた。これらは調理中、あるいは利用後の残滓が何らかの要因で炭化したか、火にくべられて炭化したなどの可能性が考えられる。オニグルミは他の種実と比べても残りやすいため、利用された比率については言及するのは難しいが、少なくとも複数の遺構から得られたオニグルミとクリ、キハダ、ニワトコについては、縄文時代前期後半の館野6遺跡で頻繁に利用されていたと考えられる。



スケール 1-4:5mm, 5-10:1mm

図版V-2-1 館野6遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核(T6-32)、2. オニグルミ炭化核(動物食痕、T6-33)、3. クリ炭化子葉(T6-31)、
4. クリ炭化子葉(T6-30)、5. キハダ炭化種子(T6-2)、6. トチノキ炭化種子(T6-7)、7. ニワトコ炭化核(T6-10)、
8. 不明A炭化種実(T6-11)、9. 虫えい(T6-38)、10. 子囊菌炭化子囊(T6-18)

表V-2-4 炭化種実分析依頼試料一覧

通称 種別	処理 番号	フローチ ンク資料 番号	採年月日 (2008)	通称種類	通称名	農研法	層位	水洗前 乾燥質量 (g)	水洗前 乾燥体積 (l)	作業日 数(2008)	浮遊物① (20mm) (g)	浮遊物② (0.425mm) (g)	残渣量 (g)	窒素 (%)	種子 (粒)	動物遺体 番号 と対応
T6-1	1	103	2009.10.27	腐土遺構	M6	59F	M6-6	240	0.300	6月29日	0.1	0.1	5.9	-	1	14
T6-2	2	26	11/6	腐土遺構	M6	44a	M6-1	10050	20.900	6月29日	28.1	28.4	604.3	1.6	-	20
T6-3	3	27	11/6	腐土遺構	M6	42a	M6-2	11650	13.700	6月29日	7.8	14.0	459.3	0.5	-	21
T6-4	4	25	11/6	腐土遺構	M6	43a	M6-2	24580	27.000	6月29日	30.2	30.2	877.5	1.0	-	22
T6-5	5	28	11/7	腐土遺構	M6	43a	M6-2	8040	7.000	6月29日	9.4	10.1	124.8	0.1	5	23
T6-6	6	19	10/21	腐土遺構	M6	43K	M6-2	900	1.000	6月24日	-	-	128.8	0.1	-	-
T6-7	7	30	11/6	腐土遺構	M6	44a	M6-2	11600	15.100	6月29日	20.4	23.1	447.6	2.2	-	26
T6-8	8	2	8/15	壁穴住居炉	H18.HF-1	-	竪土1層	4550	4.900	6月24日	3.1	6.4	679.0	-	2	-
T6-9	9	9	10/1	壁穴住居炉	H24.HF-1	-	竪土1層	3270	3.800	6月24日	2.7	6.7	97.6	-	1	29
T6-10	10	122	2009.10.15	壁穴住居竪土中継実	H29	-	竪土下部	1380	2.400	6月29日	7.3	10.5	56.0	-	3	31
T6-11	11	123	2009.10.19	壁穴住居竪土中継実	H29	-	竪土層	1890	3.100	6月29日	11.4	10.0	108.8	-	6	32
T6-12	12	16	10/28	壁穴住居炉	H32.HF-1	-	竪土層	3670	6.800	6月29日	27.5	11.8	138.2	1.6	-	-
T6-13	13	32	7/26	腐土遺構中の積土	F68	54S	積土層	3430	4.800	6月29日	3.8	5.1	97.8	0.1	-	34
T6-14	14	33	7/29	腐土遺構中の積土	F67	57S	積土層	29460	26.900	6月29日	18.3	24.8	761.9	1.1	-	35
T6-15	15	34	7/29	腐土遺構中の積土	F68	56S	積土層	44300	55.200	6月29日	24.5	64.1	1095.6	1.7	-	36
T6-16	16	35	7/29	腐土遺構中の積土	F69	60T	積土層	7040	9.300	6月29日	41.3	41.5	229.9	0.9	-	37
T6-17	17	36	7/31	腐土遺構中の積土	F69	60T	積土層	2910	4.000	6月24日	27.0	26.8	182.3	0.1	-	38
T6-18	18	37	8/3	腐土遺構中の積土	F69	60T	積土層	18880	25.900	6月29日	83.8	127.4	881.6	1.0	8	39
T6-19	19	38	8/4	腐土遺構中の積土	F69	60T	積土層	3120	6.800	6月29日	30.8	89.9	307.4	0.3	-	40
T6-20	20	39	7/30	腐土遺構中の積土	F70	88S	積土層	10770	14.100	6月29日	13.0	26.3	308.0	0.2	-	41
T6-21	21	46	8/5	腐土遺構中の積土	F77	57S	積土層	5880	7.700	6月24日	15.1	16.5	370.2	-	1	49
T6-22	22	41	8/2	腐土遺構中の積土	F72	54S	積土層	950	1.900	6月24日	2.9	2.5	72.4	0.2	-	43
T6-23	23	42	8/4	腐土遺構中の積土	F72	54S	積土層	10460	13.500	6月29日	10.0	22.4	120.6	0.7	-	44
T6-24	24	44	8/5	腐土遺構中の積土	F75	60S	積土層	4300	5.900	6月24日	48.1	30.8	116.8	0.1	2	46
T6-25	25	43	8/4	腐土遺構中の積土	F75	60S	積土層	4280	5.900	6月24日	8.0	8.2	79.8	-	1	47
T6-26	26	45	8/4	腐土遺構中の積土	F76	81S	積土層	2230	3.200	6月24日	16.0	11.1	71.4	0.8	-	48
T6-27	27	47	8/5	腐土遺構中の積土	F77	58S	積土層	7400	10.100	6月29日	22.5	28.9	238.1	0.5	-	50
T6-28	28	48	8/5	腐土遺構中の積土	F77	58S	積土層	1300	1.900	6月24日	1.5	2.1	88.0	0.1	-	51
T6-29	29	50	8/8	腐土遺構中の積土	F77	58S	積土層	21420	26.800	6月29日	45.0	52.4	279.9	0.5	9	52
T6-30	30	49	8/5	腐土遺構中の積土	F77	58S	積土層	38580	49.800	6月29日	126.2	188.7	710.5	2.8	4	53
T6-31	31	51	8/8	腐土遺構中の積土	F77	58S	積土層	41440	52.800	6月29日	131.5	143.8	780.5	3.8	37	54
T6-32	32	52	8/8	腐土遺構中の積土	F77	60S	積土層	2130	3.200	6月24日	12.3	11.1	63.3	1.3	-	55
T6-33	33	53	8/8	腐土遺構中の積土	F77	61S	積土層	2090	3.100	6月24日	8.3	8.8	78.4	0.5	-	57
T6-34	34	54	8/8	腐土遺構中の積土	F78	82S	積土層	2780	4.800	6月24日	1.6	2.9	105.9	0.1	-	58
T6-35	35	55	8/8	腐土遺構中の積土	F78	82S	積土層	2920	4.000	6月24日	0.3	0.6	322.0	0.1	-	59
T6-36	36	31	8/5	腐土遺構	F78階塔	82S	積土層	3860	4.800	6月24日	8.8	8.2	261.1	1.4	-	60
T6-37	37	10	10/4	壁穴住居炉	H32.HF-1	-	竪土層	4180	4.200	6月24日	15.0	7.9	221.2	-	3	-
T6-38	38	18	10/29	壁穴住居炉	H34.HF-1	-	竪土層	5430	6.000	6月29日	9.0	5.7	464.2	-	7	-
T6-39	39	21	11/2	壁穴住居炉	H37.HF-1	-	竪土1層	880	1.200	6月24日	5.2	5.5	29.0	-	3	-

### 3. 館野6遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子(パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

館野6遺跡は北斗市館野に所在する遺跡であり、縄文時代前期後半円筒下層式期の盛土遺構や竪穴住居跡が検出されている。ここでは、竪穴住居跡から出土した建築材と推定される炭化材の樹種同定結果を報告する。

#### 2. 試料と方法

試料は、縄文時代中期前半円筒上層式期の竪穴住居跡(調査時は前期後半と考えていた)である、H24の覆土4層下位から出土した炭化材10点(HT6-1~6、HT6-8~11)である。

試料の3断面(横断面・接線断面・放射断面)を、手あるいはカッターナイフを用いて割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定、銀ペーストを塗布した。乾燥後、金蒸着して走査型電子顕微鏡(日本電子製 JSM-5900LV型)を用いて樹種の同定を行った。

#### 3. 結果

広葉樹のクリとコナラ属コナラ節の2分類群が確認された。クリはすべて破片であったため、元の形状は不明である。コナラ属コナラ節は割れていたが、元は半割か丸木と思われる。結果の一覧を表1に示す。

表V-3-1 樹種同定結果

表1 樹種同定結果

試料番号	遺構	層位	重量(g)	樹種	形状(残存径、残存年輪数)
HT6-1	H24 竪穴住居	覆土3層中位	4.34	クリ	破片(1.7×2.0cm、6年輪)
HT6-2	H24 竪穴住居	覆土3層中位	1.58	クリ	破片(3.0×1.3cm、13年輪)
HT6-3	H24 竪穴住居	覆土3層中位	1.13	クリ	破片(0.8×2.1cm、22年輪)
HT6-4	H24 竪穴住居	覆土3層中位	2.69	クリ	破片(2.0×1.0cm、12年輪)
HT6-5	H24 竪穴住居	覆土3層中位	5	クリ	破片(1.3×1.6cm、17年輪)
HT6-6	H24 竪穴住居	覆土3層中位	2.5	クリ	破片(2.0×2.0cm、10年輪)
HT6-8	H24 竪穴住居	覆土3層中位	5.54	コナラ属コナラ節	半割?(直径:2.3cm、2年輪)
HT6-9	H24 竪穴住居	覆土3層中位	3.07	クリ	破片(不明)
HT6-10	H24 竪穴住居	覆土3層中位	11.1	クリ	破片(2.6×3.2cm、33年輪)
HT6-11	H24 竪穴住居	覆土3層中位	5.74	クリ	破片(2.3×2.5cm、12年輪)

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c(HT6-11)、2a(HT6-1)、3a(HT6-2)、4a(HT6-3)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。道管放射組織間壁孔は櫛状となる。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 5a-5c(HT6-8)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で加工困難である。

## 4. 考 察

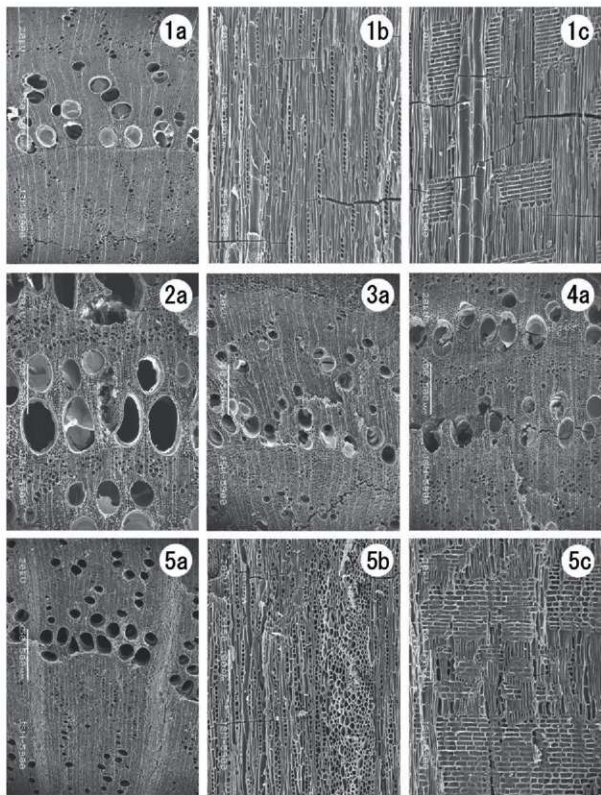
全試料の10点中9点がクリであり、1点のみコナラ属コナラ節が認められた。クリは破片となっていたため元の形状が不明であるが、コナラ属コナラ節は丸木の可能性があり直径が2cm程度であることから枝材と思われる。

木古内町の新道4遺跡で行われた花粉分析結果から、縄文時代前期末はコナラ亜属が優占し、ニレ属、シナノキ属、カバノキ属、ブナ属などを加えた落葉広葉樹林が広がっていたと推測されている(山田, 1986)。また、クリ属の花粉も検出されているため、当地域にはクリが身近に生育していたと考えられる。しかし、クリ以外にも住居構築材や燃料材として有用な樹木は多種類あったと考えられることから、クリを選択的に利用した可能性が高い。

近隣に位置する館野4遺跡では、縄文時代中期の住居跡から出土した建築材はすべてクリであり、燃料材でもクリとアサダが確認されている(植田, 2006)。また、上磯郡の木古内2遺跡では、縄文時代前期後半の住居跡と燃焼材でクリが多く確認されている(黒沼, 2011)。本遺跡でもクリが多用されていることから、当地域では縄文時代の住居構築材や燃料材でクリを多用する傾向があると考えられる。

## 引用文献

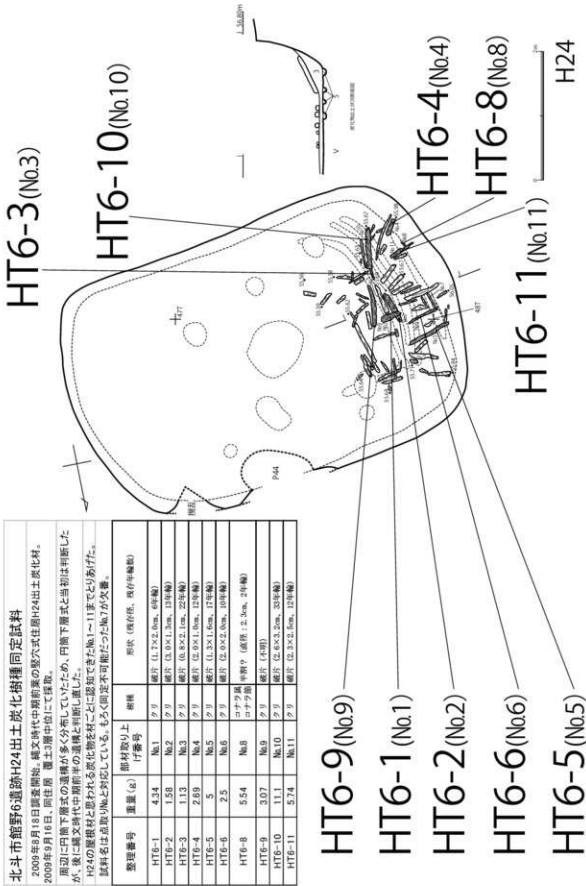
- 黒沼保子(2011) 木古内町木古内2遺跡出土炭化材の樹種同定。北海道埋蔵文化財センター編「木古内町 木古内2遺跡」: 63-65, 北海道埋蔵文化財センター。
- 植田弥生(2006) 館野4遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種同定。北海道埋蔵文化財センター編「北斗市 矢不來6遺跡・矢不來11遺跡・館野4遺跡」: 158-161, 北海道埋蔵文化財センター。
- 山田悟郎(1986) 新道4遺跡周辺の古植生と堅果について。北海道埋蔵文化財センター編「木古内町 建川1・新道4遺跡」: 465-474, 北海道埋蔵文化財センター。



図版V-3-1 館野6遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (HT6-11)、2a. クリ (HT6-1)、3a. クリ (HT6-2)、4a. クリ (HT6-3)、5a-5c. コナラ属コナラ節 (HT6-8)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面



表V-3-2 図V-3-1 樹種同定炭種試料一覧



## 4. 館野6遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

館野6遺跡は、北海道北斗市館野91ほか(北緯41°47'11"、東経140°37'16")に所在する。測定対象試料は、P-54底面出土木炭(HT6-1:IAAA-112193)、H-24覆土3層中位出土木炭(HT6-2:IAAA-112194~HT6-4:IAAA-112196)、M4-6層(盛土基底部焼土)出土木炭(HT6-5:IAAA-112197~HT6-10:IAAA-112202)の合計10点である(表1)。

### 2 測定の意義

P54出土試料の測定により、土坑の年代を確認し、調査範囲内にある他遺構との関係を推定する。H24出土試料の測定では、堅穴住居の建築部材と考えられる木炭群について3ヶ所の年代を測定して当住居と出土炭化材の関係を考察し、さらに周辺遺構との関係を考察する一助とする。M4出土試料の測定により、焼土の形成時期を考察する手がかりを得る。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}C$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、

下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

P54底面出土木炭HT6-1の $^{14}\text{C}$ 年代は $4850 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は $3658 \sim 3541\text{cal BC}$ の間に2つの範囲で示され、縄文時代前期後半頃に相当する。

H24覆土3層中位出土木炭の $^{14}\text{C}$ 年代は、HT6-2が $4500 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-3が $4430 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-4が $4510 \pm 30\text{yrBP}$ である。HT6-2とHT6-4の値は誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重なり、近い年代を示すが、HT6-3はこれらよりも若干新しい値となっている。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、HT6-2が $3336 \sim 3105\text{cal BC}$ 、HT6-3が $3263 \sim 2944\text{cal BC}$ 、HT6-4が $3338 \sim 3106\text{cal BC}$ の間に各々複数の範囲で示される。HT6-2とHT6-4が縄文時代中期前葉頃、HT6-3が中期中葉頃に相当すると見られ、住居の時期が前期後半と考えられていることと一致しない (編集者注: その後中期前半の住居と判断を訂正)。

M4-3およびM4-6 (盛土基底部焼土) 出土木炭の $^{14}\text{C}$ 年代は、HT6-5が $4950 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-6が $4810 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-7が $4980 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-8が $4800 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-9が $4730 \pm 30\text{yrBP}$ 、HT6-10が $4840 \pm 30\text{yrBP}$ である。HT6-5、HT6-7の2点、HT6-6、HT6-8、HT6-10の3点の値は、各々誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重なり、近い年代を示すが、6点の試料の間には年代差が認められる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、HT6-5が $3769 \sim 3699\text{cal BC}$ の範囲、HT6-6が $3645 \sim 3536\text{cal BC}$ の間に3つの範囲、HT6-7が $3784 \sim 3711\text{cal BC}$ の範囲、HT6-8が $3640 \sim 3534\text{cal BC}$ の間に2つの範囲、HT6-9が $3628 \sim 3382\text{cal BC}$ の間に3つの範囲、HT6-10が $3656 \sim 3541\text{cal BC}$ の間に2つの範囲で示される。この焼土層は、円筒下層式土器がまとまって出土したことから縄文時代前期後半と考えられており、6点の年代値はいずれもその時期に含まれるいくつかの土器型式に当たる年代幅となっている。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112193	HT6-1	P54 底面	木炭	AAA	-24.63 ± 0.39	4,850 ± 30	54.71 ± 0.20
IAAA-112194	HT6-2	H24 覆土3層中位	木炭	AAA	-24.41 ± 0.44	4,500 ± 30	57.10 ± 0.21
IAAA-112195	HT6-3	H24 覆土3層中位	木炭	AAA	-26.32 ± 0.41	4,430 ± 30	57.65 ± 0.21
IAAA-112196	HT6-4	H24 覆土3層中位	木炭	AAA	-27.02 ± 0.51	4,510 ± 30	57.07 ± 0.19
IAAA-112197	HT6-5	M4-3	木炭	AAA	-24.21 ± 0.42	4,950 ± 30	53.97 ± 0.18
IAAA-112198	HT6-6	M4-6 (盛土基底部焼土)	木炭	AAA	-30.08 ± 0.30	4,810 ± 30	54.93 ± 0.20
IAAA-112199	HT6-7	M4-6 (盛土基底部焼土)	木炭	AAA	-28.33 ± 0.38	4,980 ± 30	53.77 ± 0.20
IAAA-112200	HT6-8	M4-6 (盛土基底部焼土)	木炭	AAA	-24.48 ± 0.46	4,800 ± 30	55.01 ± 0.20
IAAA-112201	HT6-9	M4-3	木炭	AAA	-27.52 ± 0.43	4,730 ± 30	55.53 ± 0.20
IAAA-112202	HT6-10	M4-6 (盛土基底部焼土)	木炭	AAA	-27.63 ± 0.42	4,840 ± 30	54.72 ± 0.19

[44807]

表2 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112193	4,840 ± 30	54.75 ± 0.19	4,845 ± 29	3658calBC - 3634calBC (57.1%) 3552calBC - 3541calBC (11.1%)	3696calBC - 3631calBC (73.1%) 3579calBC - 3535calBC (22.3%)
IAAA-112194	4,490 ± 30	57.17 ± 0.20	4,501 ± 29	3336calBC - 3310calBC (11.5%) 3298calBC - 3283calBC ( 6.2%) 3276calBC - 3265calBC ( 4.8%) 3240calBC - 3209calBC (13.8%) 3192calBC - 3152calBC (17.7%) 3138calBC - 3105calBC (14.3%)	3348calBC - 3097calBC (95.4%)
IAAA-112195	4,450 ± 30	57.49 ± 0.20	4,425 ± 29	3263calBC - 3246calBC ( 6.4%) 3101calBC - 3011calBC (56.2%) 2978calBC - 2963calBC ( 4.1%) 2949calBC - 2944calBC ( 1.5%)	3323calBC - 3272calBC ( 6.6%) 3266calBC - 3236calBC ( 8.8%) 3172calBC - 3161calBC ( 1.1%) 3117calBC - 2923calBC (78.8%)
IAAA-112196	4,540 ± 30	56.83 ± 0.18	4,505 ± 27	3338calBC - 3312calBC (11.2%) 3295calBC - 3286calBC ( 3.3%) 3275calBC - 3265calBC ( 3.9%) 3239calBC - 3206calBC (14.2%) 3195calBC - 3106calBC (35.6%)	3349calBC - 3262calBC (32.8%) 3252calBC - 3098calBC (62.6%)

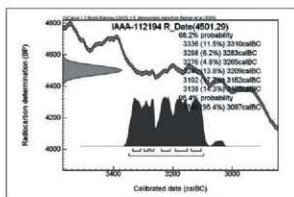
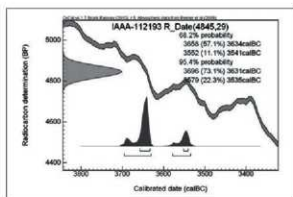
表 2 (2)

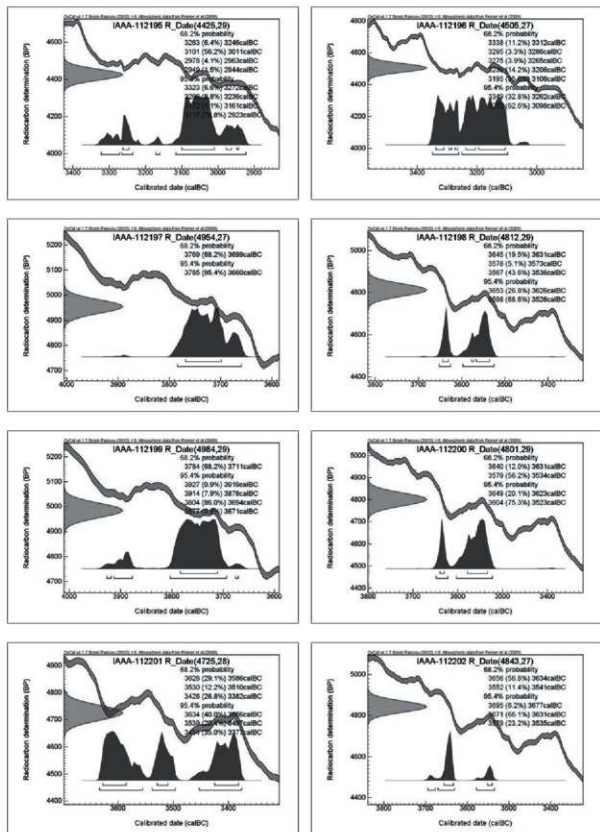
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112197	4,940 $\pm$ 30	54.06 $\pm$ 0.18	4,954 $\pm$ 27	3769calBC - 3699calBC (68.2%) 3645calBC - 3631calBC (19.5%)	3785calBC - 3660calBC (95.4%)
IAAA-112198	4,900 $\pm$ 30	54.36 $\pm$ 0.20	4,812 $\pm$ 29	3578calBC - 3573calBC ( 5.1%) 3567calBC - 3536calBC (43.6%)	3653calBC - 3626calBC (26.8%) 3598calBC - 3526calBC (68.6%)
IAAA-112199	5,040 $\pm$ 30	53.40 $\pm$ 0.19	4,984 $\pm$ 29	3784calBC - 3711calBC (68.2%)	3927calBC - 3919calBC ( 0.9%) 3914calBC - 3878calBC ( 7.9%) 3804calBC - 3694calBC (86.0%) 3677calBC - 3671calBC ( 0.6%)
IAAA-112200	4,790 $\pm$ 30	55.07 $\pm$ 0.19	4,801 $\pm$ 29	3640calBC - 3631calBC (12.0%) 3579calBC - 3534calBC (56.2%)	3649calBC - 3623calBC (20.1%) 3604calBC - 3523calBC (75.3%)
IAAA-112201	4,770 $\pm$ 30	55.25 $\pm$ 0.19	4,725 $\pm$ 28	3628calBC - 3586calBC (29.1%) 3530calBC - 3510calBC (12.2%) 3426calBC - 3382calBC (26.8%)	3634calBC - 3556calBC (40.0%) 3539calBC - 3497calBC (20.4%) 3454calBC - 3377calBC (35.0%)
IAAA-112202	4,890 $\pm$ 30	54.43 $\pm$ 0.18	4,843 $\pm$ 27	3656calBC - 3634calBC (56.8%) 3552calBC - 3541calBC (11.4%)	3695calBC - 3677calBC ( 6.2%) 3671calBC - 3631calBC (66.1%) 3579calBC - 3535calBC (23.2%)

[参考値]

## 文献

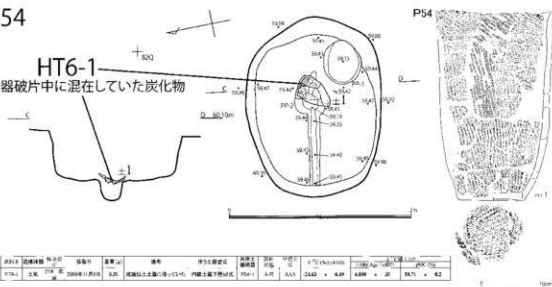
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150





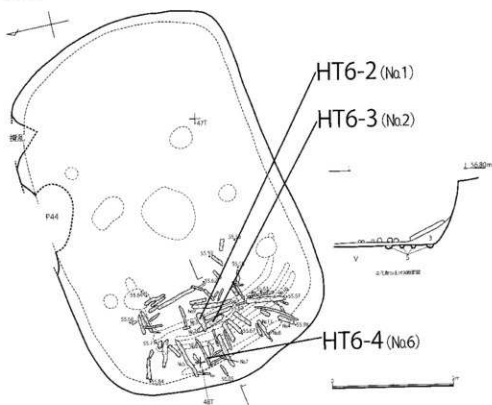
[参考] 暦年較正年代グラフ

P54

HT6-1  
土器破片中に混在していた炭化物

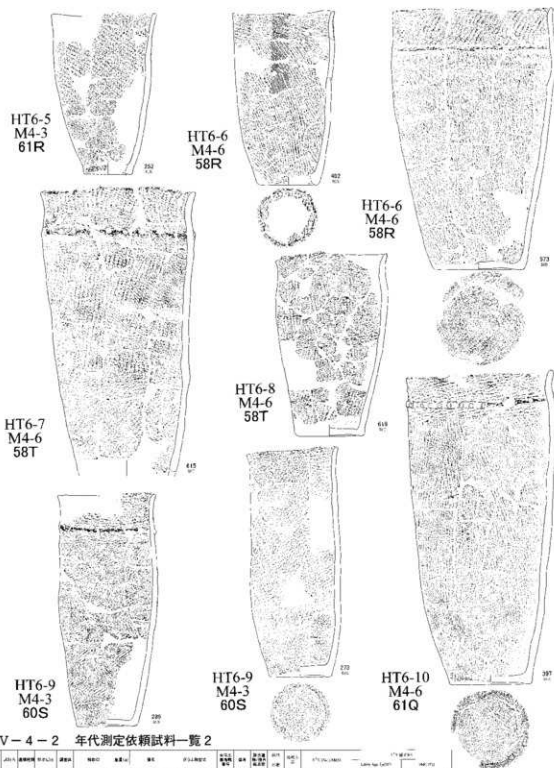
試料名	検出位置	検出層位	検出時期	検出量 (g)	検出物	検出位置詳細	検出層位	検出時期	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{15}N$ (‰)	測定機関	
AAA-1278	P54	土器破片	2008年11月10日	0.20	炭素	検出位置: 土器破片に混在していた炭化物	P54-1	0.10	AAA	24.62 ± 0.19	4.89 ± 0.20	9C71 ± 0.12

H24



試料名	検出位置	検出層位	検出時期	検出量 (g)	検出物	検出位置詳細	検出層位	検出時期	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{15}N$ (‰)	測定機関	
AAA-1279	H24	土器破片	2008年11月10日	0.10	炭素	検出位置: 土器破片に混在していた炭化物	H24-1	0.10	AAA	24.63 ± 0.14	4.90 ± 0.20	9C71 ± 0.12
AAA-1280	H24	土器破片	2008年11月10日	0.10	炭素	検出位置: 土器破片に混在していた炭化物	H24-2	0.10	AAA	26.12 ± 0.11	4.89 ± 0.20	9C71 ± 0.12
AAA-1281	H24	土器破片	2008年11月10日	0.10	炭素	検出位置: 土器破片に混在していた炭化物	H24-3	0.10	AAA	25.47 ± 0.18	4.89 ± 0.20	9C71 ± 0.12

表V-4-1 図V-4-1 年代測定依頼試料一覧1



表V-4-2 年代測定依頼試料一覧2

試料番号	土器	器種	部位	形状	用途	分析部位	試料量	年代測定		年代測定	
								測定値	標準誤差	測定値	標準誤差
HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5	HT6-5
HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6	HT6-6
HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7	HT6-7
HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8	HT6-8
HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9	HT6-9
HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10	HT6-10

図V-4-2 年代測定依頼試料一覧2

## 5. 北斗市館野6遺跡胎土分析 X線回折試験及び化学分析試験

（第四紀地質研究所 井上 巖）

目 次	図 表 目 次
1 実験条件	第1図 三角ダイヤグラム位置分類図
2 実験結果の取扱	第2図 菱形ダイヤグラム位置分類図
3 X線回折試験結果	第3図 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム
3-1 タイプ分類	第4図 Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム
3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について	第5図 Qt-Pl図 (茂辺地4遺跡)
3-3 石英(Qt)-滑石(Talc)の相関について	第6図 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図 (茂辺地4遺跡)
4 化学分析結果	第7図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図 (茂辺地4遺跡)
4-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について	第8図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図 (茂辺地4遺跡)
4-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ の相関について	第1表 胎土性状表
4-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について	第2表 化学分析表
5 組成分類	第3表 タイプ分類表
	第4表 組成分類表
	館層採取位置図 (巻末)
	館野6遺跡胎土分析試料一覧 (巻末)
	館野6遺跡土器と断面写真 (巻末)
	化学分析チャート (巻末)
	X線回折チャート (巻末)

## 編集者による前段

今回、館野6遺跡H21覆土から円筒下層d1式土器のまとまりが出土した。円筒下層d1式古段階とした一群である。これらのうち復元土器六個体について胎土分析を依頼した。破壊分析であるため、復元した土器と同時に検出したものの、復元時に接合せず、かつ同じ個体の可能性が高いもの（未接合資料）を分析用に提出した。館野6遺跡T-1～6である。

単純に、該当資料の化学組成の分析を行うのみではなく、同じ北海道南部、津軽海峡沿岸の試料との対比も行った（図V-5-11）。知内町において土壌サンプルとして採取した4種類（S-1～4）、福島町において土壌サンプルとして採取した2種類（S-5・6）、木古内町新道4遺跡出土土器から採取した試料（S-7）、（以上、図V-5-9参照）北斗市茂別遺跡から採取した試料（S-8）、北斗市の茂辺地4遺跡の試料（S-9・茂辺地と略称）（以上、図VI-4-1参照）、大平遺跡出土土器から採取した土器群である。大平遺跡1、大平遺跡2とあるが二回に分けて分析したための便宜上の番号であり、同じ土器群である。加えて、木古内町の露頭から採取した土壌も分析、対比した。

## 1 実験条件

## 1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料とし



て実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

### 1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

## 2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

### 2-1 組成分類

#### 1) Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont}/(\text{Mont}+\text{Mica}+\text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1～4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

#### 2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、

- 3成分以上含まれない、
- Mont, Chの2成分が含まれない、
- Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch\*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

### 3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>図、K<sub>2</sub>O-CaO図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

## 3 X線回折試験結果

### 3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には平成26年度の大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。第3表タイプ分類表に示すように土器と原土はA～Lの12タイプが検出された。

Aタイプ：Hb1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。(24個)

大平遺跡1と2が主体で、新道遺跡、茂辺地遺跡の土器が共存する。

Bタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。(9個)

大平遺跡1, 2が主体で、茂辺地遺跡の土器と木古内町の原土が共存する。

Cタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。(27個)

大平遺跡1と2が主体で、新道遺跡と茂辺地遺跡の土器が共存する。

Dタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。

Bタイプと組成は類似するが検出強度が異なる。(55個)

大平遺跡1と2が主体で、茂辺地遺跡と新道遺跡と館野6遺跡の土器が共存する。原土では木古内町の原土が主体で、知内町と茂辺地遺跡の原土が共存する。

Eタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。(38個)

組成的にはCタイプと類似するが、検出強度が異なる。

大平遺跡1と2が主体で、新道遺跡、茂辺地遺跡の土器が共存する。

Fタイプ：Mica1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。(10個)

大平遺跡の土器が主体で、木古内町の原土が共存する。

Gタイプ：Mont1成分を含み、Mica, Hb, Chの3成分に欠ける。(4個)

大平遺跡の土器が主体

Hタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分にかける。(8個)

大平遺跡の土器が主体

Iタイプ：Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Chの1成分にかける。(1個)

茂辺地遺跡の土器

Jタイプ：Mont, Micaの2成分を含み、Hb, Chの2成分にかける。(2個)

大平遺跡と茂辺地遺跡の土器が共存する。

Kタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分にかける。(2個)

館野6遺跡の土器

Lタイプ: Mica, Chの2成分を含み, Mont, Hbの2成分にかける。(9個)

館野6遺跡と新道遺跡の土器が共存する。木古内町と知内町の原土が共存する。

第3表に示すように大平遺跡の土器は多い順からDタイプの55個、次いでEタイプ、Cタイプ、Aタイプの土器が主体である。館野6遺跡の土器はKとLタイプが各2個、Dタイプが1個である。

### 3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

土器胎土に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第5図Qt-Pl図に示すように大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。Qtの強度が小の領域から大の領域にかけてQt-1~Qt-5の5グループに分類された。

Qt-1: Qtが570~1200、Plが50~200の領域に分布する。

Qt-2: Qtが1200~3300、Plが100~680の領域に分布する。

大平遺跡1と2の土器が集中し、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が共存している。分析した土器の多くはこの領域に集中し、関連性が窺われる。

Qt-3: Qtが1500~2900、Plが600~1200の領域に分布する。

大平遺跡1と2の土器が集中し、新道遺跡の土器が共存する。

Qt-4: Qtが1700~2800、Plが1400~2100の領域に分布する。

Plの強度が高く異質である。

Qt-5: Qtが5800~7800、Plが50~650の領域に分布する。

Qtの強度が高く、異質である。

“その他”新道遺跡の土器と原土が領域外にあり、これらを“その他”とした。

第5図Qt-Pl図に示すように、館野6遺跡の土器はその大半がQt-2の領域に集中する。この領域には大平遺跡1と2の土器が集中し、新道遺跡と茂辺地4遺跡の土器と原土も共存している。

## 4 化学分析結果

第2表化学分析表には大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。

分析結果に基づいて第6図SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図、第7図Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>図、第8図K<sub>2</sub>O-CaO図を作成した。

#### 4-1 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の相関について

第6図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図に示すように、大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。SiO<sub>2</sub>の小さい領域からI～VIの6タイプに分類された。

Iタイプ：SiO<sub>2</sub>が35～40%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が33～48%の領域に分布する。

大平遺跡、茂辺地4遺跡、新道遺跡の土器が共存する。

IIタイプ：SiO<sub>2</sub>が42～54%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が22～32%の領域に分布する。

大平遺跡の土器が集中する。

IIIタイプ：SiO<sub>2</sub>が49～60%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が23～33%の領域に分布する。

新道遺跡の土器が集中する。大平遺跡と原土が共存する。

IVタイプ：SiO<sub>2</sub>が53～66%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が20～30%の領域に分布する。

大平遺跡1と2の土器が集中する。茂辺地4遺跡と館野6遺跡、原土が共存する。

Vタイプ：SiO<sub>2</sub>が64～73%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が12～21%の領域に分布する。

大平遺跡1の土器が集中し、原土が共存する。

VIタイプ：SiO<sub>2</sub>が74～84%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が7～18%の領域に分布する。

大平遺跡1の土器が集中し、原土が共存する。

“その他” 8, 91, 55, 171の4個は近い領域に入るものとして判別した。

土器の大半はII、III、IVの3タイプの領域に集中する。館野6遺跡の土器はIVタイプの領域にある。第6図 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図に示すように土器と原土は各々の領域で集中し、土器と原土はおおむね同じ領域にあり、関連性が認められる。

#### 4-2 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>の相関について

第7図 Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>図に示すように、大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>はFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の1～5の5領域に分類される。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が5～12%、TiO<sub>2</sub>が0.7～2.1%の領域に分布する。

大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡の土器が集中する。原土が共存する。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-2：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が10～17%、TiO<sub>2</sub>が0.8～2.1%の領域に分布する。

大平遺跡1と2、新道遺跡の土器が集中する。茂辺地4遺跡、館野6遺跡の土器、原土が共存する。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-3：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が16～23%、TiO<sub>2</sub>が0.7～2.7%の領域に分布する。

大平遺跡1と2の土器が集中する。新道遺跡の土器と原土が共存する。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-4：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が3.3～6.6%、TiO<sub>2</sub>が0.3～0.9%の領域に分布する。

大平遺跡1と2の土器が集中し、新道遺跡の土器と原土が共存する。

Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-5：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が2.0～4.5%、TiO<sub>2</sub>が0.8～1.3%の領域に分布する。

大平遺跡1と新道遺跡の土器と原土が共存する。

第7図  $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図に示すように、大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡の土器と原土は $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-1}$ ~3の領域に集中し、館野6遺跡の土器は $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-1}$ と $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-2}$ の領域に分かれて分布する。

#### 4-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について

第8図  $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図に示すように、大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土が記載してある。 $\text{K}_2\text{O}_2$ の小さい領域から $\text{K}_2\text{O-1}$ ~4の4タイプに分類された。

$\text{K}_2\text{O-1}$ :  $\text{K}_2\text{O}$ が1.25~3.0%、 $\text{CaO}$ が0.4~1.3%の領域に分布する。

大平遺跡1と2、新道遺跡の土器が集中する。茂辺地4遺跡、館野6遺跡の土器と原土が共存する。

$\text{K}_2\text{O-2}$ :  $\text{K}_2\text{O}$ が2.0~4.5%、 $\text{CaO}$ が0~0.8%の領域に分布する。

大平遺跡1の土器が集中する。新道遺跡、茂辺地4遺跡の土器と原土が共存する。

$\text{K}_2\text{O-3}$ :  $\text{K}_2\text{O}$ が5.1~5.7%、 $\text{CaO}$ が0.4~0.8%の領域に分布する。

大平遺跡1の土器が集中する。

$\text{K}_2\text{O-4}$ :  $\text{K}_2\text{O}$ が1.1~1.9%、 $\text{CaO}$ が0.4~0.8%の領域に分布する。

新道遺跡、茂辺地4遺跡の土器が集中する。大平遺跡と館野6遺跡と原土が共存する。

## 5 組成分類

X線回折試験と蛍光X線分析結果に基づいて、大平遺跡1と2、新道遺跡、茂辺地4遺跡、館野6遺跡から出土した土器と周辺地域で採取した原土を第4表組成分類表に示すように分類した。第4表組成分類表に示すように、遺跡出土主要土器と少数・異質タイプに分類して表示した。遺跡出土土器は12タイプに分類され、組成的特徴により明確に分かれている。少数・異質タイプは主に周辺地域で採取された原土と異質土器である。

多く検出された組成のタイプ順に記述する。

- 1) 最も多く検出されたのは「Qt-2、Si-4、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-1}$ 」タイプで70個が該当する。主に大平遺跡1と2の土器・焼成粘土塊と茂辺地4遺跡の土器が集中し、館野6遺跡、新道遺跡の土器が共存する。原土としては知内町の牧場の原土が同じ組成をしており、土器との関連性が窺われる。
- 2) 「Qt-2、Si-2、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-2}$ 」タイプは18個が検出され、大平遺跡1と2の焼成粘土塊が集中し、土器が共存する。
- 3) 「Qt-2、Si-4、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-2}$ 」タイプは14個が検出され、大平遺跡1と2の土器と焼成粘土塊が集中し、館野6遺跡の土器、茂辺地4遺跡の土器と福島町の館層土壌サンプルが共存する。
- 4) 「Qt-2、Si-2、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-3}$ 」タイプは13個が検出され、大平遺跡1の焼成粘土塊が集中し、土器と木古内町の現場露頭の原土と共存する。
- 5) 「Qt-2、Si-3、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-2}$ 」タイプは13個が検出され、新道遺跡の土器が集中し、木古内町の現場露頭の原土と共存する。
- 6) 「Qt-3、Si-4、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-1}$ 」タイプは9個が検出され、大平遺跡1と2の土器と焼成粘土塊が集中し、茂辺地4遺跡の土器と福島町の館層土壌サンプルが共存する。

- 7) 「Qt-2, Si-3, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1」タイプは7個が検出され、新道遺跡の土器が集中し、茂辺地4遺跡の原土と大平遺跡1の土器が共存する。
- 8) 「Qt-2, Si-6, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-4」タイプは6個が検出され、木古内町の現場露頭の原土が集中し、福島町の館層の原土が共存する。
- 9) 「Qt-3, Si-4, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-2」タイプは5個が検出され、大平遺跡1の土器と焼成粘土塊が集中し、大平遺跡2の土器が共存する。
- 10) 「Qt-2, Si-2, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1」タイプは4個が検出され、大平遺跡1と2の土器が集中する。
- 11) 「Qt-2, Si-5, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1」タイプは4個が検出され、大平遺跡1の土器と木古内町の現場露頭の原土と共存する。
- 12) 「Qt-3, Si-2, Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-2」タイプは3個が検出され、大平遺跡1の土器と焼成粘土塊、大平遺跡2の土器が共存する。
- 13) 少数・異質タイプ

少数・異質タイプ								
Qt-1, Si-4 Fe-1 (2)								
1	4	1	T-66	大平-66	G	焼成粘土塊	炭化物付着?、タイ米状。海綿骨針・砂粒を含まない。骨めが細かい。	大平遺跡1
1	4	1	T-50	大平-50	A	焼成粘土塊	タイ米状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1
Qt-2, Si-3 Fe-5 (2)								
5	3	2	T-8	大平-8	F	土器片	多量の海綿骨針・繊維・砂粒を含む。内面淡色繊維	大平遺跡1
5	3	2	T-171	Ka-9	D	土壌サンプル	木古内・環溝土壌1	木古内環溝採取原土
Qt-2, Si-4 Fe-3 (1)								
3	4	2	T-109	S-11	A	環土	多量の繊維少量・骨針少量。中粒Qt	大平遺跡2
Qt-2, Si-5 Fe-1 (1)								
2	5	2	T-179	Ka-11	D	土壌サンプル	大平・木古内2階・原骨	木古内環溝採取原土
Qt-2, Si-5 Fe-4 (1)								
4	5	2	T-180	Ka-12	F	土壌サンプル	大平・並別遺溝・海岸	木古内環溝採取原土
Qt-3, Si-4 Fe-4 (1)								
4	4	3	T-125	S-27	C	環土	多量の繊維・骨針少量。種、顆粒Or多	大平遺跡2
Qt-3, Si-5 Fe-1 (2)								
1	5	3	T-77	大平-77	E	土器片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。	大平遺跡1
1	5	3	T-189	S5-9	D	土壌サンプル	細粒砂面・繊維。骨針なし	北斗市茂田地遺跡・沢野9
Qt-4, Si-4 Fe-1 (1)								
1	4	4	T-72	大平-72	E	土器片	多量繊維。少量の滑石の小破片を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡1
Qt-4, Si-5 Fe-1								
1	5	4	T-88	大平-88	H	土器片	砂粒多く。海綿状骨針は含まない。繊維は少ない 北陸系土器要素	大平遺跡1
Qt-5, Si-6 Fe-4 (3)								
4	6	5	T-87	大平-87	E	土壌サンプル	砂粒多い。	大平遺跡1
4	6	5	T-88	大平-88	D	土器内の砂	砂粒少ない。	大平遺跡1
4	6	5	T-89	大平-89	D	土壌サンプル	砂粒多い。	大平遺跡1
Qt-6, Si-4 Fe-1 (1)								
1	4	6	T-9	大平-9	B	土器片	厚手。多量の海綿骨針・繊維・砂粒を含む。内面淡色繊維	大平遺跡1
Qt-7, Si-3 Fe-5 (1)								
5	3	7	T-162	S-65	L	深鉢	砂粒・白色破片多い	木古内町・新道遺跡
Qt-7, Si-6 Fe-5 (1)								
5	6	7	T-187	S5-7	L	土壌サンプル	湖尻質粘土・繊維。骨針なし	木古内町・新道4遺跡?
Qt-1, Si-2 Fe-2 (1)								
2	3	1	T-24	大平-24	H	焼成粘土塊	米粒状。海綿骨針・砂粒を含まない。骨めが細かい。	大平遺跡1
Qt-1, Si-2 Fe-3 (1)								
3	2	1	T-49	大平-49	A	焼成粘土塊	タイ米状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1
Qt-2, Si-1 Fe-1 (1)								
1	3	2	T-142	S-44	D	土壌サンプル	湖尻質粘土	茂田地
Qt-2, Si-1 Fe-2 (1)								
2	1	2	T-142	S-45	B	土壌サンプル	湖尻質粘土	茂田地
Qt-2, Si-1 Fe-3 (1)								
3	3	2	T-148	S-50	A	深鉢	多量の繊維を含む砂粒・骨針を含む	木古内町・新道遺跡
Qt-2, Si-1 Fe-5 (1)								
6	1	2	T-47	大平-47	E	焼成粘土塊	米粒状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1

表に見られるようにこのタイプの多くは土壌サンプルである原土と異質土器である。異質土器は搬入土器である可能性が考えられる。焼成粘土塊系統は試料が小さく、また他の土との混合が考えられるのでわからない。

表V-5-1 胎土性状态

表1 胎土性状态

品名	规格	产地	分子式	组成分析				胎土性状态				备注			
				Meq-H <sub>2</sub> O	Meq-100g	Meq	100g	Or	Pr	Cryst.	Matrix		K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	Total
T-1	1	1	1	126	126	126	126	126	126	126	126	126	126	126	胎土性状态
T-2	2	2	2	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	127	胎土性状态
T-3	3	3	3	128	128	128	128	128	128	128	128	128	128	128	胎土性状态
T-4	4	4	4	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	129	胎土性状态
T-5	5	5	5	130	130	130	130	130	130	130	130	130	130	130	胎土性状态
T-6	6	6	6	131	131	131	131	131	131	131	131	131	131	131	胎土性状态
T-7	7	7	7	132	132	132	132	132	132	132	132	132	132	132	胎土性状态
T-8	8	8	8	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	胎土性状态
T-9	9	9	9	134	134	134	134	134	134	134	134	134	134	134	胎土性状态
T-10	10	10	10	135	135	135	135	135	135	135	135	135	135	135	胎土性状态
T-11	11	11	11	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136	136	胎土性状态
T-12	12	12	12	137	137	137	137	137	137	137	137	137	137	137	胎土性状态
T-13	13	13	13	138	138	138	138	138	138	138	138	138	138	138	胎土性状态
T-14	14	14	14	139	139	139	139	139	139	139	139	139	139	139	胎土性状态
T-15	15	15	15	140	140	140	140	140	140	140	140	140	140	140	胎土性状态
T-16	16	16	16	141	141	141	141	141	141	141	141	141	141	141	胎土性状态
T-17	17	17	17	142	142	142	142	142	142	142	142	142	142	142	胎土性状态
T-18	18	18	18	143	143	143	143	143	143	143	143	143	143	143	胎土性状态
T-19	19	19	19	144	144	144	144	144	144	144	144	144	144	144	胎土性状态
T-20	20	20	20	145	145	145	145	145	145	145	145	145	145	145	胎土性状态
T-21	21	21	21	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	胎土性状态
T-22	22	22	22	147	147	147	147	147	147	147	147	147	147	147	胎土性状态
T-23	23	23	23	148	148	148	148	148	148	148	148	148	148	148	胎土性状态
T-24	24	24	24	149	149	149	149	149	149	149	149	149	149	149	胎土性状态
T-25	25	25	25	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150	胎土性状态
T-26	26	26	26	151	151	151	151	151	151	151	151	151	151	151	胎土性状态
T-27	27	27	27	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	152	胎土性状态
T-28	28	28	28	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	胎土性状态
T-29	29	29	29	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	胎土性状态
T-30	30	30	30	155	155	155	155	155	155	155	155	155	155	155	胎土性状态
T-31	31	31	31	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	156	胎土性状态
T-32	32	32	32	157	157	157	157	157	157	157	157	157	157	157	胎土性状态
T-33	33	33	33	158	158	158	158	158	158	158	158	158	158	158	胎土性状态
T-34	34	34	34	159	159	159	159	159	159	159	159	159	159	159	胎土性状态
T-35	35	35	35	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	胎土性状态
T-36	36	36	36	161	161	161	161	161	161	161	161	161	161	161	胎土性状态
T-37	37	37	37	162	162	162	162	162	162	162	162	162	162	162	胎土性状态
T-38	38	38	38	163	163	163	163	163	163	163	163	163	163	163	胎土性状态
T-39	39	39	39	164	164	164	164	164	164	164	164	164	164	164	胎土性状态
T-40	40	40	40	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	165	胎土性状态
T-41	41	41	41	166	166	166	166	166	166	166	166	166	166	166	胎土性状态
T-42	42	42	42	167	167	167	167	167	167	167	167	167	167	167	胎土性状态
T-43	43	43	43	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168	胎土性状态
T-44	44	44	44	169	169	169	169	169	169	169	169	169	169	169	胎土性状态
T-45	45	45	45	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	胎土性状态
T-46	46	46	46	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171	胎土性状态
T-47	47	47	47	172	172	172	172	172	172	172	172	172	172	172	胎土性状态
T-48	48	48	48	173	173	173	173	173	173	173	173	173	173	173	胎土性状态
T-49	49	49	49	174	174	174	174	174	174	174	174	174	174	174	胎土性状态
T-50	50	50	50	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	胎土性状态
T-51	51	51	51	176	176	176	176	176	176	176	176	176	176	176	胎土性状态
T-52	52	52	52	177	177	177	177	177	177	177	177	177	177	177	胎土性状态
T-53	53	53	53	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178	178	胎土性状态
T-54	54	54	54	179	179	179	179	179	179	179	179	179	179	179	胎土性状态
T-55	55	55	55	180	180	180	180	180	180	180	180	180	180	180	胎土性状态
T-56	56	56	56	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	胎土性状态
T-57	57	57	57	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	182	胎土性状态
T-58	58	58	58	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	183	胎土性状态
T-59	59	59	59	184	184	184	184	184	184	184	184	184	184	184	胎土性状态
T-60	60	60	60	185	185	185	185	185	185	185	185	185	185	185	胎土性状态
T-61	61	61	61	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186	胎土性状态
T-62	62	62	62	187	187	187	187	187	187	187	187	187	187	187	胎土性状态
T-63	63	63	63	188	188	188	188	188	188	188	188	188	188	188	胎土性状态
T-64	64	64	64	189	189	189	189	189	189	189	189	189	189	189	胎土性状态
T-65	65	65	65	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	190	胎土性状态
T-66	66	66	66	191	191	191	191	191	191	191	191	191	191	191	胎土性状态











第2表 化学分析表

通、器類No	器類名	Mod	MdC	ANDJ	SOZ	KYO	CPD	T22	MAO	FaC33	NOJ	Total	備考
T-132	5-3	0.30	0.00	0.00	0.00	0.71	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	銅線(最少)・磁石
T-133	5-4	0.60	0.00	27.94	57.43	1.72	0.15	0.58	0.71	12.25	0.75	59.99	銅線(最少)・磁石
T-134	5-5	0.00	0.00	25.20	58.22	1.72	0.21	0.37	0.00	0.00	0.00	59.99	銅線(最少)・磁石
T-135	5-6	0.80	0.00	29.99	64.57	2.07	0.17	0.97	0.12	1.77	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-136	5-7	1.20	0.00	31.88	67.77	2.07	0.17	0.97	0.12	1.77	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-137	5-8	1.20	0.00	31.88	67.77	2.07	0.17	0.97	0.12	1.77	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-138	5-28	2.16	0.00	37.56	72.35	2.20	0.44	1.79	0.00	6.63	0.57	90.00	銅線(最少)・磁石
T-139	5-29	2.16	0.00	37.56	72.35	2.20	0.44	1.79	0.00	6.63	0.57	90.00	銅線(最少)・磁石
T-140	5-30	2.16	0.00	37.56	72.35	2.20	0.44	1.79	0.00	6.63	0.57	90.00	銅線(最少)・磁石
T-141	5-31	0.80	0.00	26.24	60.35	4.92	0.11	0.17	0.81	8.41	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-142	5-44	0.81	0.00	26.24	60.35	4.92	0.11	0.17	0.81	8.41	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-143	5-45	0.81	0.00	26.24	60.35	4.92	0.11	0.17	0.81	8.41	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-144	5-46	0.81	0.00	26.24	60.35	4.92	0.11	0.17	0.81	8.41	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-145	5-47	1.99	0.00	47.26	79.25	1.40	0.20	1.21	2.26	6.50	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石
T-146	5-48	0.81	0.00	26.24	60.35	4.92	0.11	0.17	0.81	8.41	0.00	62.01	銅線(最少)・磁石
T-147	5-49	1.99	0.00	47.26	79.25	1.40	0.20	1.21	2.26	6.50	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石
T-148	5-50	1.61	0.00	28.58	51.32	1.82	0.44	0.88	0.88	14.63	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-149	5-51	1.01	0.00	25.59	54.28	2.28	0.20	1.19	0.82	14.61	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石
T-150	5-52	0.58	0.00	27.63	55.15	1.47	0.24	1.27	0.52	12.72	0.52	99.99	銅線(最少)・磁石
T-151	5-53	1.21	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-152	5-54	1.21	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-153	5-25	1.21	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-154	5-26	1.47	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-155	5-27	1.11	0.00	27.76	52.28	1.16	0.22	1.20	1.04	15.25	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-156	5-28	1.47	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-157	5-29	1.47	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-158	5-31	1.67	0.00	28.47	59.82	1.64	0.44	1.11	0.98	8.75	0.04	100.00	銅線(最少)・磁石
T-159	5-40	0.76	0.00	27.96	56.31	1.42	0.24	1.20	0.14	11.26	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-160	5-41	1.21	0.00	31.48	62.35	1.37	0.17	1.46	0.20	14.13	0.78	99.99	銅線(最少)・磁石
T-161	5-43	1.24	0.00	31.67	51.31	1.42	0.21	0.99	0.94	12.23	0.50	100.00	銅線(最少)・磁石
T-162	5-84	0.56	0.00	27.59	61.26	1.91	0.26	0.95	0.02	2.29	0.32	99.99	銅線(最少)・磁石
T-163	5-85	0.56	0.00	27.59	61.26	1.91	0.26	0.95	0.02	2.29	0.32	99.99	銅線(最少)・磁石
T-164	5-10	1.26	0.00	27.26	55.24	2.22	0.31	1.52	0.00	11.31	0.58	100.00	銅線(最少)・磁石
T-165	5-2	0.78	0.00	20.00	52.15	1.43	0.09	1.15	0.86	12.09	0.64	100.00	銅線(最少)・磁石
T-166	5-3	1.08	0.00	28.55	58.44	1.89	0.29	1.25	0.88	10.20	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-167	5-4	1.08	0.00	28.55	58.44	1.89	0.29	1.25	0.88	10.20	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-168	5-1	1.03	0.00	29.01	53.92	1.74	0.24	1.12	0.90	14.75	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-169	5-2	0.89	0.00	28.11	56.66	1.81	0.20	1.04	0.70	11.20	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-170	5-5	0.89	0.00	28.11	56.66	1.81	0.20	1.04	0.70	11.20	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-171	5-5-3	0.62	0.00	33.11	59.94	1.31	0.20	1.08	0.00	3.45	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-172	5-5-4	0.77	0.00	31.61	63.94	3.01	0.23	1.41	0.50	13.99	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-173	5-5-5	0.77	0.00	31.61	63.94	3.01	0.23	1.41	0.50	13.99	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-174	5-5-6	0.31	0.00	37.73	48.24	3.00	0.23	1.77	1.59	16.53	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-175	5-7	0.61	0.00	32.72	62.80	2.43	0.26	1.38	0.23	4.63	0.68	100.00	銅線(最少)・磁石
T-176	5-8	0.61	0.00	32.72	62.80	2.43	0.26	1.38	0.23	4.63	0.68	100.00	銅線(最少)・磁石
T-177	5-9	0.53	1.08	9.34	79.56	2.66	0.41	0.77	4.60	0.37	99.99	銅線(最少)・磁石	
T-178	5-5-9	0.46	1.20	11.26	77.06	2.77	0.15	0.43	0.90	6.49	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-179	5-10	0.46	1.20	11.26	77.06	2.77	0.15	0.43	0.90	6.49	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-180	5-12	1.81	0.29	12.50	57.71	2.63	0.00	0.91	0.76	1.50	0.17	99.99	銅線(最少)・磁石
T-181	5-1	0.65	0.41	23.59	58.83	2.63	0.28	0.81	0.46	11.22	0.17	99.99	銅線(最少)・磁石
T-182	5-2	0.71	0.26	27.50	61.91	2.71	0.26	0.91	0.56	10.14	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-183	5-3	0.71	0.26	27.50	61.91	2.71	0.26	0.91	0.56	10.14	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-184	5-4	0.50	0.00	29.12	57.66	3.12	0.28	1.22	0.50	3.99	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石
T-185	5-5	0.37	0.17	32.15	48.27	3.00	0.26	1.54	0.00	10.94	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-186	5-6	0.37	0.17	32.15	48.27	3.00	0.26	1.54	0.00	10.94	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-187	5-7	0.15	0.00	17.26	76.56	2.64	0.21	0.85	0.80	2.74	0.00	100.00	銅線(最少)・磁石
T-188	5-8	0.80	0.00	31.00	53.02	2.89	0.18	1.09	0.30	10.31	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石
T-189	5-3	0.26	2.31	11.14	49.31	3.21	1.31	0.21	0.28	8.42	0.00	99.99	銅線(最少)・磁石

7/10館野6遺跡発掘調査報告書

表V-5-3 タイプ分類表

第3表 タイプ分類表

組成分類		試料		試料		タイプ		備 考	
Fe	Si	Qtz	通LNr	No	試料	タイプ	分類		
Aタイプ (24)									
1	4	2	7-5	大平-3	A	土層片	多量の海綿骨針・繊維・砂粒。内面調整繊維		大平遺跡1
2	4	2	7-18	大平-16	A	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針を含む。多孔質		大平遺跡1
1	4	2	7-26	大平-26	A	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
2	4	2	7-27	大平-27	A	焼成土塊	炭状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
1	4	2	7-28	大平-28	A	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
3	2	2	7-45	大平-45	A	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針。少量の砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
3	2	1	7-49	大平-49	A	焼成土塊	タイ米状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
1	4	1	7-50	大平-50	A	焼成土塊	タイ米状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
2	4	3	7-74	大平-74	A	土層片	薄平。砂粒・繊維を多量に含む。海綿状骨針は含まない。		大平遺跡1
1	4	3	7-76	大平-76	A	土層片	少量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
3	2	2	7-78	大平-78	A	土層片	多量の繊維を含む。海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
1	4	2	7-83	大平-83	A	土層片	多量の繊維・海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
1	4	2	7-84	大平-84	A	土層片	多量の繊維・海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
2	4	2	7-107	5-9	A	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
2	2	2	7-108	5-10	A	硬土	多量の繊維・骨針G/L。中粒Qtz		大平遺跡2
3	4	2	7-109	5-11	A	硬土	多量の繊維少量・骨針少量。中粒Qtz		大平遺跡2
1	4	2	7-139	5-41	A	PO-11層土	凝灰状粘土		高岡地
1	3	2	7-148	5-50	A	深緑	多量の繊維を含む砂粒・骨針を含む		本谷内町・新道遺跡
2	3	2	7-150	5-52	A	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
2	3	2	7-151	5-53	A	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
1	3	2	7-152	5-54	A	深緑	繊維を含む砂粒・白色泥片・骨針を含む		本谷内町・新道遺跡
2	3	2	7-155	5-57	A	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
1	3	2	7-156	5-58	A	深緑	多量の繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
2	3	2	7-157	5-59	A	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
Bタイプ (9)									
1	4	6	7-9	大平-9	B	土層片	薄平。多量の海綿骨針・繊維・砂粒を含む。内面調整繊維		大平遺跡1
2	2	2	7-35	大平-35	B	焼成土塊	タイ米状。多量の海綿骨針。少量の砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
1	4	2	7-70	大平-70	B	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
1	5	2	7-79	大平-79	B	土層片	多量繊維。少量の滑石の中核片を含む砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。		大平遺跡1
1	5	2	7-87	大平-87	B	粘土(家割)			大平遺跡1
1	4	2	7-118	5-19	B	硬土	多量の繊維・骨針少量。澱		大平遺跡2
1	4	2	7-140	5-42	B	土層サンプル	凝灰質粘土		高岡地
2	1	2	7-143	5-45	B	土層サンプル	凝灰質粘土		高岡地
1	5	2	7-169	Ke-1	B	土層サンプル	本谷内・野場土塊1		本谷内露頭採取地土
Cタイプ (27)									
6	2	2	7-6	大平-6	C	土層片	炭化物付着。多量の繊維・砂粒・海綿骨針少量。内面調整丁寧		大平遺跡1
3	2	2	7-13	大平-13	C	焼成土塊	タイ米状。非着色粒。少量に海綿骨針を含む		大平遺跡1
2	2	2	7-20	大平-20	C	焼成土塊	米粒状。海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。		大平遺跡1
3	2	2	7-32	大平-32	C	焼成土塊	タイ米状。海綿骨針・砂粒を含まない。炭粒。多孔質。		大平遺跡1
3	2	2	7-42	大平-42	C	焼成土塊	タイ米状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
2	4	2	7-48	大平-48	C	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
1	4	2	7-43	大平-43	C	土層片	少量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
1	4	3	7-64	大平-64	C	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。海綿状骨針を含まない。		大平遺跡1
1	4	3	7-66	大平-66	C	土層片	少量の砂粒。少量の繊維を含む。		大平遺跡1
1	4	2	7-69	大平-69	C	土層片	少量の砂粒。多量の繊維・海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
1	4	3	7-71	大平-71	C	土層片	薄平。砂粒・繊維を多量に含む。海綿状骨針は含まない。		大平遺跡1
1	4	2	7-82	大平-82	C	土層片	多量の繊維・海綿状骨針を含む。		大平遺跡1
2	4	2	7-89	5-1	C	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
2	4	2	7-101	5-3	C	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
2	4	3	7-105	5-7	C	硬土	多量の繊維・骨針G/L。繊維Qtz		大平遺跡2
1	4	2	7-114	5-16	C	硬土	多量の繊維少量・骨針少量。粗粒Qtz		大平遺跡2
2	4	2	7-115	5-17	C	硬土	繊維・海綿状骨針中。澱		大平遺跡2
1	4	2	7-117	5-19	C	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
2	2	2	7-119	5-21	C	硬土	多量の繊維少量・骨針少量。粗粒		大平遺跡2
1	4	2	7-122	5-24	C	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
1	4	2	7-123	5-25	C	硬土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。繊維		大平遺跡2
1	4	2	7-124	5-26	C	硬土	多量の繊維・骨針少量。澱		大平遺跡2
4	4	3	7-125	5-27	C	硬土	多量の繊維・骨針少量。澱。粗粒Qtz多		大平遺跡2
1	4	2	7-127	5-29	C	硬土	繊維中量・骨針中量。粗粒		大平遺跡2
1	4	2	7-130	5-32	C	PO-10層土	繊維少量・骨針少量。粗粒		高岡地
2	3	2	7-158	5-80	C	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
1	3	2	7-162	5-84	C	深緑	繊維を含むきめ細かい多量の骨針		本谷内町・新道遺跡
Dタイプ (55)									
1	4	2	7-3	大平-3	D	土層片	多量の繊維・砂粒・海綿骨針少量。内面調整粗雑		大平遺跡1
2	2	2	7-12	大平-12	D	焼成土塊	炭状 炭粒。少量の海綿骨針。砂粒が多い。		大平遺跡1
2	2	2	7-14	大平-14	D	焼成土塊	柿の種状。少量の海綿骨針・砂粒。炭化物(喰)を含む		大平遺跡1
2	2	2	7-15	大平-15	D	焼成土塊	米粒状。少量の海綿骨針・砂粒を含む。		大平遺跡1
2	4	3	7-17	大平-17	D	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針。少量の砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1
2	2	2	7-18	大平-18	D	焼成土塊	米粒状。海綿骨針なし。多量の砂粒を含む。きめが細かい。		大平遺跡1
2	2	2	7-19	大平-19	D	焼成土塊	米粒状。多量の海綿骨針。少量の砂粒を含む。多孔質		大平遺跡1

第 3 表 タイプ分類表

組成分類		試料		タイプ	備 考		
Fa	Gr	試料 通しNo	試料 No	分類			
3	2	27-21	大平-21	D	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針なし。少量の砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡 1
2	2	27-22	大平-22	D	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
2	2	27-23	大平-23	D	塊成粘土塊	タイ米状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
3	2	27-33	大平-33	D	塊成粘土塊	ハスカップ状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
1	2	27-38	大平-38	D	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
2	2	27-40	大平-40	D	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
3	2	27-41	大平-41	D	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
2	2	27-44	大平-44	D	塊成粘土塊	タイ米状、海綿骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
1	2	27-51	大平-51	D	粘土	フラスコ状(ワット、型、ローム上部 層厚 20cm)	大平遺跡 1
1	2	27-52	大平-52	D	粘土	フラスコ状(ワット、型、ローム下部 層厚 40~50cm)	大平遺跡 1
1	4	27-53	大平-53	D	粘土		大平遺跡 1
3	2	27-54	大平-54	D	粘土		大平遺跡 1
3	2	27-55	大平-55	D	粘土(泥削)		大平遺跡 1
3	2	27-56	大平-56	D	土層片	多量繊維・砂粒を含む。少量の礫石が認められる。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-57	大平-57	D	土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。5Bに類似。	大平遺跡 1
1	4	27-58	大平-58	D	土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。5Bに類似。	大平遺跡 1
1	4	27-67	大平-67	D	土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-81	大平-81	D	土層片	多量の繊維を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-86	大平-86	D	土層片	薄平。繊維を多量に含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
4	6	57-88	大平-88	D	土層内の砂	砂粒少ない。	大平遺跡 1
4	6	57-89	大平-89	D	土層サンプル	砂粒多い。	大平遺跡 1
2	2	27-93	大平-93	D	塊成粘土塊	少量の繊維・砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-94	大平-94	D	塊成粘土塊	少量の繊維・砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-103	S-5	D	礫土	多量の繊維・骨針なし。細粒Gr	大平遺跡 2
1	4	27-118	S-20	D	礫土	多量の繊維・海綿状骨針を多く含む。細粒	大平遺跡 2
2	4	27-128	S-28	D	礫土	繊維少量・骨針少量。少量Gr	大平遺跡 2
1	4	27-131	S-33	D	PO-10遺土	繊維少量・骨針少量。中粒	汲池地
1	4	27-132	S-34	D	PO-11遺土	繊維・骨針なし。細粒	汲池地
1	4	27-134	S-36	D	PO-12遺土	繊維・骨針なし。細粒	汲池地
1	4	27-136	S-38	D	泥	繊維・骨針なし。細粒	汲池地
1	4	27-137	S-39	D	PO-12遺土	繊維・骨針なし。細粒	汲池地
1	4	27-141	S-43	D	土層サンプル	凝灰質粘土	汲池地
1	1	27-142	S-44	D	土層サンプル	凝灰質粘土	汲池地
1	4	27-144	S-46	D	深銅	繊維を含むきめ細かい少量の骨針	本吉内町・新道遺跡
2	3	27-190	S-62	D	深銅	繊維を含むきめ細かい少量の骨針	本吉内町・新道遺跡
1	4	27-194	T-1	D	深銅	繊維・骨針多量。	野野 6 遺跡
1	5	27-130	Ka-2	D	土層サンプル	本吉内・塚場土層 2	本吉内調査採取土
5	3	27-171	Ka-3	D	土層サンプル	本吉内・塚場土層 3	本吉内調査採取土
2	3	27-173	Ka-5	D	土層サンプル	本吉内・塚場土層 5	本吉内調査採取土
3	2	27-134	Ka-6	D	土層サンプル	本吉内・塚場土層 6	本吉内調査採取土
4	6	27-175	Ka-7	D	土層サンプル	大平・本吉内・河口	本吉内調査採取土
4	6	27-177	Ka-8	D	土層サンプル	大平・本吉内・橋下	本吉内調査採取土
4	6	27-178	Ka-10	D	土層サンプル	大平・本吉内・橋下	本吉内調査採取土
2	5	27-179	Ka-11	D	土層サンプル	大平・本吉内 2 橋下・橋首	本吉内調査採取土
1	4	27-181	SS-7	D	土層サンプル	凝灰質砂岩・繊維。骨針なし	知内町・巻場 1
1	4	27-184	SS-4	D	土層サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	知内町・巻場 4
1	3	27-188	SS-8	D	土層サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	北谷市茂原遺跡・原土 8
1	3	27-189	SS-9	D	土層サンプル	凝灰質砂岩・繊維。骨針なし	北谷市茂原遺跡・浜野 9
E タイプ (38)							
1	4	27-2	大平-2	E	土層片	多量の海綿骨針・繊維。砂粒少ない。内面調整丁寧	大平遺跡 1
1	4	27-4	大平-4	E	土層片	多量の海綿骨針・繊維。砂粒少ない。内面調整丁寧	大平遺跡 1
1	4	27-7	大平-7	E	土層片	多量の海綿骨針・繊維。砂粒少ない。内面調整丁寧	大平遺跡 1
1	4	27-10	大平-10	E	土層片	多量の海綿骨針・繊維。砂粒少ない。内面調整精細	大平遺跡 1
2	4	27-11	大平-11	E	塊成粘土塊	角粒状、脆性。多量の海綿骨針。砂粒少ない	大平遺跡 1
1	4	27-34	大平-34	E	塊成粘土塊	米粒状、多量の海綿骨針。少量の砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡 1
2	2	27-38	大平-38	E	塊成粘土塊	米粒状、海綿骨針なし。少量の砂粒を含む。きめが細かい。	大平遺跡 1
2	4	27-36	大平-36	E	塊成粘土塊	タイ米状、少量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡 1
2	3	27-43	大平-43	E	塊成粘土塊	米粒状、細かな海綿骨針を少量含む。砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡 1
6	1	27-47	大平-47	E	塊成粘土塊	米粒状、多量の海綿骨針・砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡 1
1	4	27-58	大平-58	E	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1
2	4	27-60	大平-60	E	土層片	多量の繊維。少量の砂粒を含む。海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1
1	4	27-62	大平-62	E	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の礫石粒。海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1
1	4	27-65	大平-65	E	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1
1	4	27-68	大平-68	E	土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-73	大平-73	E	土層片	多量繊維。少量の礫石の小塊を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	5	27-77	大平-77	E	土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1
4	6	57-87	大平-87	E	土層サンプル	砂粒多い。	大平遺跡 1
3	2	27-90	大平-90	E	塊成粘土塊	少量の繊維・砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
2	2	27-91	大平-91	E	塊成粘土塊	少量の繊維・砂粒を含む。海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
2	2	27-92	大平-92	E	塊成粘土塊	繊維・砂粒・海綿状骨針は含まない。	大平遺跡 1
1	4	27-95	大平-95	E	塊成粘土塊	繊維・砂粒を含まない。少量の海綿状骨針を含む。	大平遺跡 1

第3表 タイプ分類表

組成分類		試料		タイプ	備 考			
Fe	Si	Qtz	試料 通しNo	No			分類	
1	4		27-98	大平-98	E	焼成粘土塊	繊維・砂粒・高純状骨針は含まない。	大平道跡1
1	4		27-100	S-2	E	硬土	多量の繊維・高純状骨針を多く含む。繊維、繊維のQを含む	大平道跡2
1	4		27-110	S-12	E	硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維	大平道跡2
1	4		27-111	S-13	E	硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維	大平道跡2
1	4		27-112	S-14	E	硬土	多量の繊維・高純状骨針を多く含む。繊維	大平道跡2
1	4		27-113	S-15	E	硬土以下	繊維少量・骨針少量。繊維Qtz	大平道跡2
1	4		27-121	S-23	E	硬土	繊維少量・骨針少量。高質	大平道跡2
1	4		27-129	S-31	E	PO-10層土	繊維・骨針少量。繊維-高質	茂辺地
1	4		27-138	S-40	E	PO-10層土	繊維・骨針なし。繊維	茂辺地
1	4		27-145	S-47	E	深鉢	繊維を含む砂粒多い。少量の白色岩片・骨針を含む	木古内町・新道道跡
2	3		27-146	S-48	E	深鉢	繊維を含む少量の砂粒・骨針を含む	木古内町・新道道跡
2	3		27-147	S-49	E	深鉢	繊維を含むきめ細かい多量の骨針	木古内町・新道道跡
2	3		27-149	S-51	E	深鉢	繊維を含む砂粒・骨針を含む	木古内町・新道道跡
2	3		27-153	S-55	E	深鉢	繊維を含むきめ細かい多量の骨針	木古内町・新道道跡
1	3		27-154	S-56	E	深鉢	繊維を含む砂粒・白色岩片・骨針を含む	木古内町・新道道跡
1	3		27-159	S-61	E	深鉢	繊維を含むきめ細かい多量の骨針	木古内町・新道道跡
Fタイプ(10)								
5	3		27-8	大平-8	F	土層片	多量の高純骨針・繊維・砂粒を含む。内面顕微鏡	大平道跡1
1	4		27-21	大平-31	F	焼成粘土塊	ハスカップ状。高純骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平道跡1
1	2		27-27	大平-37	F	焼成粘土塊	ハスカップ状。高純骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平道跡1
2	2		27-29	大平-39	F	焼成粘土塊	米粒状。高純骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平道跡1
1	3		27-75	大平-75	F	土層片	多量の繊維・白色の岩粒を含む。高純状針は含まない。	大平道跡1
1	4		27-80	大平-80	F	土層片	少量の繊維・砂粒を含む。高純状骨針は含まない。	大平道跡1
1	4		27-104	S-6	F	硬土	多量の繊維・骨針なし。繊維Qtz	大平道跡2
2	3		27-172	Ka-4	F	土壌サンプル	木古内・覆土層4	木古内露頭採取土
4	6		27-176	Ka-8	F	土壌サンプル	大平・木古内・橋下	木古内露頭採取土
4	5		27-180	Ka-12	F	土壌サンプル	大平・島形池原・海岸	木古内露頭採取土
Gタイプ(4)								
1	4		27-46	大平-46	G	焼成粘土塊	炭化物付着?。タイ痕跡。高純骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平道跡1
1	4		27-102	S-4	G	硬土	多量の繊維・繊維Tabを含む。骨針なし	大平道跡2
1	4		27-120	S-22	G	硬土	多量の繊維中層・骨針少量。繊維	大平道跡2
1	4		27-128	S-30	G	硬土	繊維・骨針少量。繊維	大平道跡2
Hタイプ(8)								
2	4		27-1	大平-1	H	土層片	繊維・砂粒多量を含む。高純骨針なし。内面顕微鏡	大平道跡1
2	2		27-24	大平-24	H	焼成粘土塊	米粒状。高純骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平道跡1
2	4		27-25	大平-25	H	焼成粘土塊	米粒状。多量の高純骨針・砂粒を含む。多孔質	大平道跡1
1	4		27-29	大平-29	H	焼成粘土塊	米粒状。多量の高純骨針・砂粒を含む。多孔質	大平道跡1
1	4		27-61	大平-61	H	土層片	多量の繊維を含む。多量の高純状骨針を含む。	大平道跡1
1	4		27-72	大平-72	H	土層片	多量の繊維・白色の岩粒を含む。高純状針は含まない。	大平道跡1
1	4		27-85	大平-85	H	土層片	薄手・砂粒・繊維を多量に含む。高純状骨針は含まない。	大平道跡1
1	5		47-98	大平-98	H	土層片	砂粒多量。高純状骨針は含まない。繊維は少ない 土層系土層重要	大平道跡1
Iタイプ(1)								
2	4		27-133	S-35	I	PO-11層土	繊維・骨針なし。繊維	茂辺地
Jタイプ(2)								
1	4		27-106	S-8	J	硬土	多量の繊維・骨針なし。Qtz多	大平道跡2
1	4		27-125	S-37	J	硬土	繊維・骨針なし。繊維	茂辺地
Kタイプ(2)								
1	4		27-187	T-4	K	深鉢	繊維少量・骨針少量。繊維	観野6道跡
2	4		27-188	T-5	K	深鉢	繊維少量・骨針少量。繊維	観野6道跡
Lタイプ(9)								
2	3		27-161	S-83	L	深鉢	繊維を含むきめ細かい多量の骨針	木古内町・新道道跡
2	3		27-162	S-85	L	深鉢	砂粒・白色岩片多い	木古内町・新道道跡
2	4		27-165	T-2	L	深鉢	繊維・骨針多量。繊維	観野6道跡
1	4		27-166	T-3	L	深鉢	繊維少量・骨針なし。繊維	観野6道跡
1	4		27-182	S5-2	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	知内町・牧場2
1	4		27-183	S5-3	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	知内町・牧場3
4	6		27-185	S5-5	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	福島町・牧場5
2	4		27-186	S5-6	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	福島町・福島風化土8
5	6		27-187	S5-7	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・繊維。骨針なし	木古内町・新道4道跡7



表V-5-4 組成分類表

第 4 表 組成分類表

組成分類		試料		試料	タイプ	備 考
Fe	Si	Qt	通過No	No	分類	
Qt-2、Si-2 Fe-1 (4)						
1	2	2	27-37	大平-37	F	焼成土塊 ハスカツ状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
1	2	2	27-38	大平-38	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
1	2	2	27-81	大平-81	D	粘土 フラスコ状(ツト)、壁、ローム上部 層厚30cm 大平遺跡 1
1	2	2	27-92	大平-92	D	粘土 フラスコ状(ツト)、壁、ローム下部 層厚40~50cm 大平遺跡 1
Qt-2、Si-2 Fe-2 (18)						
2	2	2	27-12	大平-12	D	焼成土塊 深灰 磨屑、少量の高純骨針、砂粒が多い 大平遺跡 1
2	2	2	27-14	大平-14	D	焼成土塊 綿の織状、少量の高純骨針、砂粒、炭化物を含む 大平遺跡 1
2	2	2	27-15	大平-15	D	焼成土塊 米粒状、少量の高純骨針、砂粒を含む。 大平遺跡 1
2	2	2	27-18	大平-18	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針なし、少量の砂粒を含む、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-19	大平-19	D	焼成土塊 炭粒状、多量の高純骨針、少量の砂粒を含む。 多孔隙。 大平遺跡 1
2	2	2	27-22	大平-22	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-23	大平-23	D	焼成土塊 タイ米状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-34	大平-34	E	焼成土塊 米粒状、高純骨針なし、少量の砂粒を含む、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-35	大平-35	B	焼成土塊 タイ米状、多量の高純骨針、少量の砂粒を含む。 大平遺跡 1
2	2	2	27-39	大平-39	F	焼成土塊 炭粒状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-40	大平-40	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-43	大平-43	E	焼成土塊 米粒状、細かな高純骨針を少量含む、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-44	大平-44	D	焼成土塊 タイ米状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
2	2	2	27-39	大平-39	A	土断片 多量の繊維を含む、高純骨針を含む。 大平遺跡 1
2	2	2	27-81	大平-81	E	焼成土塊 少量の繊維、砂粒を含む。高純骨針は含まない。 大平遺跡 1
2	2	2	27-82	大平-82	D	焼成土塊 少量の繊維、砂粒を含む。高純骨針は含まない。 大平遺跡 1
2	2	2	27-119	S-21	C	礫土 多量の繊維少量、骨針少量、綿粒 大平遺跡 2
Qt-2、Si-2 Fe-3 (13)						
3	2	2	27-13	大平-13	C	焼成土塊 タイ米状、赤褐色粒、少量の高純骨針を含む 大平遺跡 1
3	2	2	27-21	大平-21	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針なし、少量の砂粒を含む、多孔隙。 大平遺跡 1
3	2	2	27-32	大平-32	C	焼成土塊 タイ米状、高純骨針、砂粒を含まない、磨屑、多孔隙。 大平遺跡 1
3	2	2	27-33	大平-33	D	焼成土塊 ハスカツ状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
3	2	2	27-41	大平-41	D	焼成土塊 米粒状、高純骨針、砂粒を含まない、きめが細かい。 大平遺跡 1
3	2	2	27-42	大平-42	C	焼成土塊 タイ米状、多量の高純骨針、砂粒を含む。 多孔隙。 大平遺跡 1
3	2	2	27-45	大平-45	A	焼成土塊 米粒状、多量の高純骨針、少量の砂粒を含む。 多孔隙。 大平遺跡 1
3	2	2	27-64	大平-64	D	粘土 大平遺跡 1
3	2	2	27-95	大平-95	D	粘土(家割) 大平遺跡 1
3	2	2	27-98	大平-98	D	土断片 多量繊維、砂粒を含む。少量の滑石が認められる。高純骨針は含まない。 大平遺跡 1
3	2	2	27-99	大平-99	E	焼成土塊 少量の繊維、砂粒を含む。高純骨針は含まない。 大平遺跡 1
3	2	2	27-174	Ka-6	D	土壌サンプル 本宮内・環境土層 6 本宮内高純骨採取土 1
6	2	2	27-6	大平-6	C	土断片 炭化物付着。多量の繊維、砂粒、高純骨針少量、内面調整層 大平遺跡 1
Qt-2、Si-3 Fe-1 (7)						
1	3	2	27-75	大平-75	F	土断片 高純骨針、白色の筋状を含む。高純骨針は含まない。 大平遺跡 1
1	3	2	27-152	S-54	A	炭屑 繊維を含む砂粒、白色片、骨針を含む 本宮内・新遺跡 1
1	3	2	27-154	S-58	A	炭屑 繊維を含む砂粒、白色片、骨針を含む 本宮内・新遺跡 1
1	3	2	27-158	S-58	A	炭屑 多量の繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
1	3	2	27-159	S-61	C	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
1	3	2	27-162	S-64	C	炭屑 繊維を含む砂粒、骨針を含む 本宮内・新遺跡 1
1	3	2	27-188	S5-8	D	土壌サンプル 混状灰粘土、繊維、骨針なし。 本宮内高純骨採取土 1
Qt-2、Si-3 Fe-2 (13)						
2	3	2	27-148	S-48	E	炭屑 繊維を含む少量の砂粒、骨針を含む 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-147	S-49	E	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-149	S-51	E	炭屑 繊維を含む砂粒、骨針を含む 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-150	S-52	A	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-151	S-53	A	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-153	S-55	A	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-155	S-57	A	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-157	S-58	A	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-158	S-60	C	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-160	S-62	D	炭屑 繊維を含むきめ細かい少量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-181	S-63	L	炭屑 繊維を含むきめ細かい多量の骨針 本宮内・新遺跡 1
2	3	2	27-172	Ka-4	F	土壌サンプル 本宮内・環境土層 4 本宮内高純骨採取土 1
2	3	2	27-173	Ka-5	D	土壌サンプル 本宮内・環境土層 5 本宮内高純骨採取土 1
Qt-2、Si-4 Fe-1 (70)						
1	4	2	27-2	大平-2	E	土断片 多量の高純骨針、繊維、砂粒少ない。内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-3	大平-3	D	土断片 多量の繊維、砂粒、高純骨針少量、内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-4	大平-4	E	土断片 多量の高純骨針、繊維、砂粒少ない。内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-5	大平-5	A	土断片 多量の高純骨針、繊維、砂粒、内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-7	大平-7	E	土断片 多量の高純骨針、繊維、砂粒少ない。内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-10	大平-10	E	土断片 多量の高純骨針、繊維、砂粒少ない。内面調整層 大平遺跡 1
1	4	2	27-28	大平-28	A	焼成土塊 米粒状、多量の高純骨針、砂粒を含む。多孔隙。 大平遺跡 1
1	4	2	27-29	大平-29	A	焼成土塊 米粒状、多量の高純骨針、砂粒を含む。多孔隙。 大平遺跡 1
1	4	2	27-29	大平-29	H	焼成土塊 炭粒状、多量の高純骨針、砂粒を含む。多孔隙。 大平遺跡 1
1	4	2	27-39	大平-39	E	焼成土塊 米粒状、多量の高純骨針、少量の砂粒を含む。多孔隙。 大平遺跡 1
1	4	2	27-53	大平-53	D	粘土 大平遺跡 1
1	4	2	27-67	大平-67	D	土断片 多量繊維、少量の砂粒を含む。高純骨針は含まない。50に類似。 大平遺跡 1
1	4	2	27-68	大平-68	D	土断片 多量繊維、少量の砂粒を含む。高純骨針は含まない。50に類似。 大平遺跡 1
1	4	2	27-68	大平-68	E	土断片 多量の繊維、砂粒を含む。少量の高純骨針を含む。 大平遺跡 1
1	4	2	27-61	大平-61	H	土断片 多量の繊維を含む。多量の高純骨針を含む。 大平遺跡 1
1	4	2	27-62	大平-62	E	土断片 多量の繊維、砂粒を含む。少量の滑石粒、高純骨針を含む。 大平遺跡 1

第4表 組成分類表

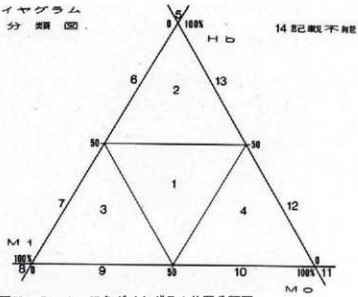
組成分類		試料		試料	タイプ	備 考
Fa	Si	Qc	試料No	No	分類	
1	4	2	7-63	大平-63	C 土層片	少量の繊維・砂粒を含む。少量の高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-65	大平-65	E 土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-67	大平-67	D 土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-68	大平-68	E 土層片	多量繊維。少量の砂粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-69	大平-69	C 土層片	少量の砂粒。多量の繊維。高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-70	大平-70	B 土層片	多量の繊維・砂粒を含む。少量の高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-71	大平-71	H 土層片	多量の繊維・白色の面粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-80	大平-80	F 土層片	少量の繊維・砂粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-82	大平-82	C 土層片	多量の繊維・高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-83	大平-83	A 土層片	多量の繊維・高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-84	大平-84	A 土層片	多量の繊維・高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-85	大平-85	H 土層片	薄平。砂粒。繊維を多量に含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-88	大平-88	D 土層片	薄平。繊維を多量に含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-84	大平-84	D 成成粘土塊	少量の繊維・砂粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-85	大平-85	E 成成粘土塊	繊維・砂粒を含む。少量の高隕状骨針を含む。
1	4	2	7-88	大平-88	E 成成粘土塊	繊維・砂粒・高隕状骨針は含まない。
1	4	2	7-100	S-3	E 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維。繊維のOを含む
1	4	2	7-102	S-4	G 硬土	多量の繊維・顆粒Tabを含む。骨針なし
1	4	2	7-103	S-5	D 硬土	多量の繊維・骨針なし。繊維Oh
1	4	2	7-104	S-6	F 硬土	多量の繊維・骨針なし。繊維Oh
1	4	2	7-106	S-8	J 硬土	多量の繊維・骨針なし。Or多
1	4	2	7-110	S-12	E 硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維
1	4	2	7-111	S-13	E 硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維
1	4	2	7-112	S-14	E 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
1	4	2	7-112	S-15	E 硬土以下	繊維少量・骨針少量。繊維Oh
1	4	2	7-114	S-16	C 硬土	多量の繊維少量・骨針少量。繊維Oh
1	4	2	7-116	S-18	B 硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維
1	4	2	7-117	S-19	C 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
1	4	2	7-118	S-20	D 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
1	4	2	7-120	S-22	G 硬土	多量の繊維中量・骨針少量。繊維
1	4	2	7-121	S-23	E 硬土	繊維少量・骨針少量。長質
1	4	2	7-122	S-24	C 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
1	4	2	7-123	S-25	C 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
1	4	2	7-124	S-26	C 硬土	多量の繊維・骨針少量。繊維
1	4	2	7-127	S-29	C 硬土	繊維中量・骨針中量。繊維
1	4	2	7-130	S-32	C PO-10層土	繊維少量・骨針少量。繊維
1	4	2	7-131	S-33	D PO-10層土	繊維少量・骨針少量。中粒
1	4	2	7-132	S-34	D PO-11層土	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-134	S-36	D PO-12層土	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-135	S-37	J 粘土	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-136	S-38	D 泥	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-137	S-39	D PO-13層土	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-138	S-41	E PO-10層土	繊維・骨針なし。繊維
1	4	2	7-139	S-41	A PO-11層土	泥炭質粘土
1	4	2	7-140	S-42	B 土壌サンプル	泥炭質粘土
1	4	2	7-141	S-43	D 土壌サンプル	泥炭質粘土
1	4	2	7-144	S-46	D 深耕	繊維を含むため細かい多量の骨針
1	4	2	7-154	T-1	D 深耕	繊維・骨針多量。繊維
1	4	2	7-186	T-3	L 深耕	繊維少量・骨針なし。繊維
1	4	2	7-187	T-4	K 深耕	繊維少量・骨針少量。繊維
1	4	2	7-187	S5-1	D 土壌サンプル	泥炭質砂粒・繊維。骨針なし
1	4	2	7-187	S5-2	L 土壌サンプル	泥炭質粘土・繊維。骨針なし
1	4	2	7-183	S5-3	L 土壌サンプル	泥炭質粘土・繊維。骨針なし
1	4	2	7-184	S5-4	D 土壌サンプル	泥炭質粘土・繊維。骨針なし
Q1-2. Si-4 Fe-2 (14)						
2	4	2	7-16	大平-16	A 成成粘土塊	米粒状。多量の高隕状骨針を含む。多孔質
2	4	2	7-25	大平-25	H 成成粘土塊	米粒状。多量の高隕状骨針・砂粒を含む。多孔質
2	4	2	7-27	大平-27	A 成成粘土塊	米粒状。多量の高隕状骨針・砂粒を含む。多孔質
2	4	2	7-48	大平-48	C 成成粘土塊	米粒状。多量の高隕状骨針・砂粒を含む。多孔質
2	4	2	7-60	大平-60	E 土層片	多量の繊維。少量の砂粒を含む。高隕状骨針を含む。
2	4	2	7-69	S-1	C 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
2	4	2	7-103	S-5	C 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
2	4	2	7-107	S-9	A 硬土	多量の繊維・高隕状骨針を多く含む。繊維
2	4	2	7-113	S-17	C 硬土	繊維。高隕状骨針中量。泥
2	4	2	7-126	S-26	D PO-11層土	繊維少量・骨針少量。少量Oh
2	4	2	7-133	S-35	I PO-11層土	繊維・骨針なし。繊維
2	4	2	7-165	T-2	L 深耕	繊維・骨針多量。繊維
2	4	2	7-188	T-5	K 深耕	繊維少量・骨針少量。繊維
2	4	2	7-186	S5-6	L 土壌サンプル	泥炭質粘土・繊維。骨針なし
Q1-2. Si-5 Fe-1 (4)						
1	5	2	7-79	大平-79	B 土層片	多量繊維。少量の薄石の小破片を含む砂粒を含む。高隕状骨針は含まない。
1	5	2	7-87	大平-87	B 粘土泥割	大平道跡 1
1	5	2	7-189	Ka-1	B 土壌サンプル	本古内。腐植土層 1
1	5	2	7-190	Ka-2	D 土壌サンプル	本古内。腐植土層 1
Q1-2. Si-6 Fe-4 (6)						
4	0	2	7-175	Ka-7	D 土壌サンプル	大平・本古内・河口
4	0	2	7-176	Ka-8	F 土壌サンプル	大平・本古内・橋下
4	0	2	7-177	Ka-9	D 土壌サンプル	大平・本古内・橋下
4	0	2	7-178	Ka-10	D 土壌サンプル	大平・本古内・橋下

第4表 組成分類表

組成分類		試料		試料		タイプ		備 考
Fa	Si	Qc	通過No	No	分類			
4	6	2	T-185	S5-5	L	土壌サンプル	細粒砂岩・凝結、骨針なし	稲島町・期間5
Qt-3, Si-2 Fe-2 (3)								
2	2	3	T-74	大平-74	A	土層片	薄平・砂結・凝結を多量に含む。凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
2	2	3	T-92	大平-92	E	焼成粘土塊	凝結・砂粒・凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
2	2	3	T-108	S-10	A	礫土	多量の凝結・骨針なし、中粒Qt	大平遺跡2
Qt-3, Si-4 Fe-1 (9)								
1	4	3	T-31	大平-31	F	焼成粘土塊	ハズカフ状、凝結骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡1
1	4	3	T-64	大平-64	C	土層片	多量の凝結・砂粒を含む。凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
1	4	3	T-68	大平-68	C	土層片	多量の砂粒、少量の凝結を含む。	大平遺跡1
1	4	3	T-71	大平-71	C	土層片	薄平・砂結・凝結を多量に含む。凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
1	4	3	T-76	大平-76	A	土層片	少量の凝結・砂粒を含む。少量の凝結状骨針を含む。	大平遺跡1
1	4	3	T-81	大平-81	D	土層片	多量の凝結を含む。凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
1	4	3	T-128	S-30	G	礫土	凝結・骨針少量。細粒・黄質	大平遺跡2
1	4	3	T-129	S-31	E	PO-10黄土	凝結・骨針少量。細粒・黄質	茂田地
1	4	3	T-145	S-47	E	深緑	凝結を含む砂粒多い。少量の白色砂片・骨針を含む	本吉内町・新道遺跡
Qt-3, Si-4 Fe-2 (5)								
2	4	3	T-1	大平-1	H	土層片	凝結・砂粒を含む。凝結骨針なし。内面調整凝結	大平遺跡1
2	4	3	T-11	大平-11	E	焼成粘土塊	内粒状・凝結。多量の凝結骨針・砂粒少ない	大平遺跡1
2	4	3	T-17	大平-17	D	焼成粘土塊	凝結状。多量の凝結骨針・少量の砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡1
2	4	3	T-26	大平-26	E	焼成粘土塊	タテ状。少量の凝結骨針・砂粒を含む。多孔質。	大平遺跡1
2	4	3	T-109	S-7	C	礫土	多量の凝結・骨針なし。凝結Qt	大平遺跡2

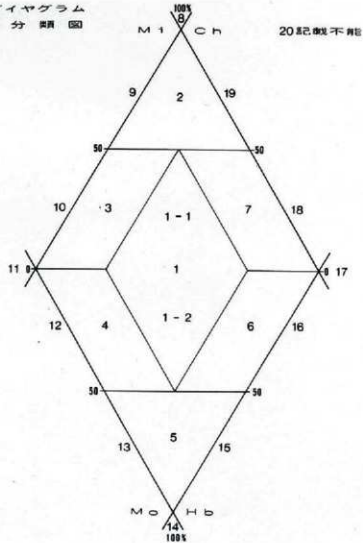
少数・異質タイプ								
Qt-1, Si-4 Fe-1 (2)								
1	4	1	T-46	大平-46	G	焼成粘土塊	炭化物けずク。タテ状。凝結骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡1
1	4	1	T-30	大平-30	A	焼成粘土塊	タテ状。多量の凝結骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1
Qt-2, Si-3 Fe-5 (2)								
5	3	2	T-8	大平-8	F	土層片	多量の凝結骨針・凝結・砂粒を含む。内面調整凝結	大平遺跡1
5	3	2	T-171	Ka-3	D	土壌サンプル	本吉内・礫堆積土	本吉内裏塚採取土
Qt-2, Si-4 Fe-3 (1)								
3	4	2	T-100	S-11	A	礫土	多量の凝結少量・骨針少量。中粒Qt	大平遺跡2
Qt-2, Si-5 Fe-1 (1)								
2	5	2	T-179	Ka-11	D	土壌サンプル	大平・本吉内町・茂田	本吉内裏塚採取土
Qt-2, Si-5 Fe-4 (1)								
4	5	2	T-180	Ka-12	F	土壌サンプル	大平・茂田遺跡・茂田	本吉内裏塚採取土
Qt-3, Si-4 Fe-4 (1)								
4	4	3	T-129	S-27	C	礫土	多量の凝結・骨針少量。凝・細粒Qt多	大平遺跡2
Qt-3, Si-5 Fe-1 (2)								
1	5	3	T-77	大平-77	E	土層片	多量の凝結・砂粒を含む。少量の凝結状骨針を含む。	大平遺跡1
1	5	3	T-189	S5-9	D	土壌サンプル	凝結砂岩・凝結。骨針なし	北山茂田地遺跡・真塚9
Qt-4, Si-4 Fe-1 (1)								
1	4	4	T-73	大平-73	E	土層片	多量凝結。少量の滑石の小結片を含む。凝結状骨針は含まない。	大平遺跡1
Qt-4, Si-5 Fe-1								
1	5	4	T-88	大平-88	H	土層片	砂粒多く。凝結状骨針は含まない。凝結は少ない 北塚黄土敷置	大平遺跡1
Qt-5, Si-6 Fe-4 (3)								
4	6	5	T-87	大平-87	E	土壌サンプル	砂粒多い。	大平遺跡1
4	6	5	T-88	大平-88	D	土層内の砂	砂粒少ない。	大平遺跡1
4	6	5	T-89	大平-89	D	土壌サンプル	砂粒多い。	大平遺跡1
Qt-6, Si-4 Fe-1 (1)								
1	4	6	T-9	大平-9	B	土層片	薄平。多量の凝結骨針・凝結・砂粒を含む。内面調整凝結	大平遺跡1
Qt-7, Si-3 Fe-5 (1)								
5	3	7	T-163	S-45	L	深緑	砂粒・白色砂片多い	本吉内町・新道遺跡
Qt-7, Si-6 Fe-5 (1)								
5	6	7	T-187	S5-7	L	土壌サンプル	凝灰質粘土・凝結。骨針なし	本吉内町・新道4遺跡?
Qt-1, Si-2 Fe-2 (1)								
2	2	1	T-24	大平-24	H	焼成粘土塊	炭粒状。凝結骨針・砂粒を含まない。きめが細かい。	大平遺跡1
Qt-1, Si-2 Fe-3 (1)								
3	2	1	T-49	大平-49	A	焼成粘土塊	タテ状。多量の凝結骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1
Qt-2, Si-1 Fe-1 (1)								
1	1	2	T-142	S-44	D	土壌サンプル	凝灰質粘土	茂田地
Qt-2, Si-1 Fe-2 (1)								
2	1	2	T-143	S-45	B	土壌サンプル	凝灰質粘土	茂田地
Qt-2, Si-1 Fe-3 (1)								
3	1	2	T-148	S-50	A	深緑	多量の凝結を含む砂粒・骨針を含む	本吉内町・新道遺跡
Qt-2, Si-1 Fe-5 (1)								
6	1	2	T-47	大平-47	E	焼成粘土塊	炭粒状。多量の凝結骨針・砂粒を含む。多孔質	大平遺跡1

第1図 三角ダイアグラム  
位置分類図

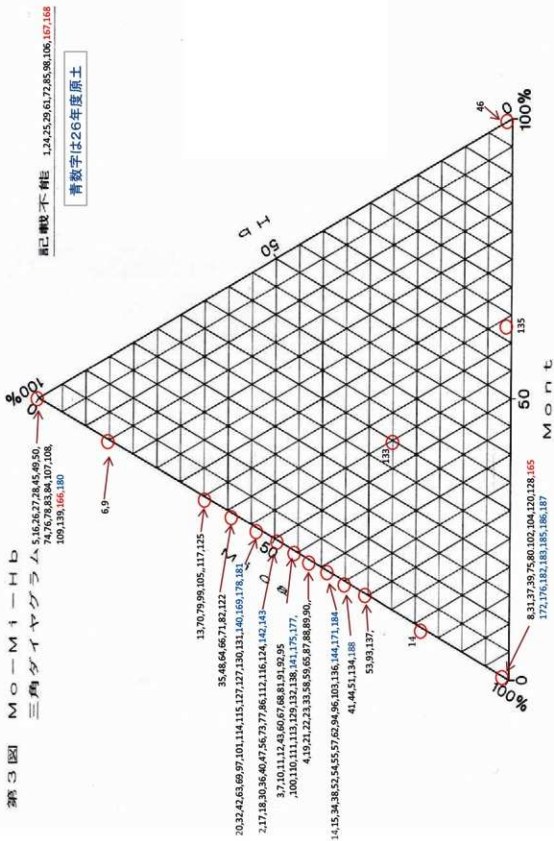


図V-5-1 三角ダイアグラム位置分類図

第2図 菱形ダイアグラム  
位置分類図

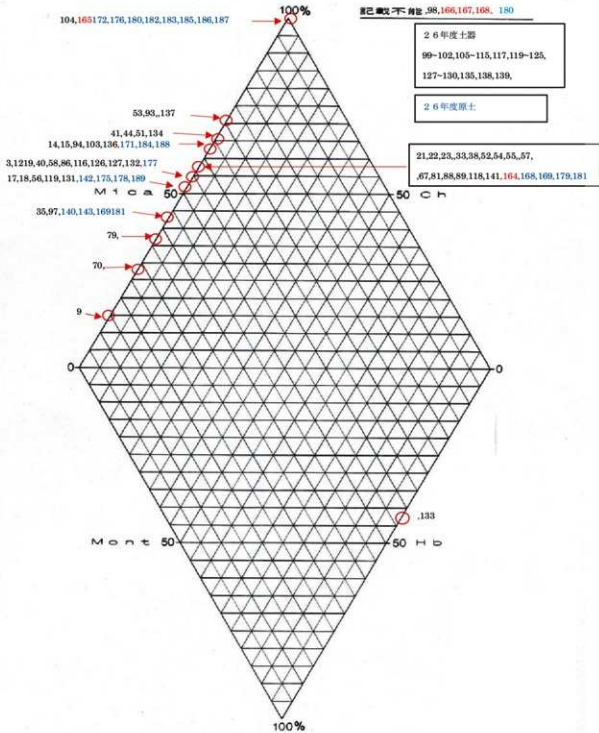


図V-5-2 菱形ダイアグラム位置分類図



図V-5-3 Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

第4図 Mo-Ch, Mi-Hb  
菱形ダイヤグラム



図V-5-4 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム

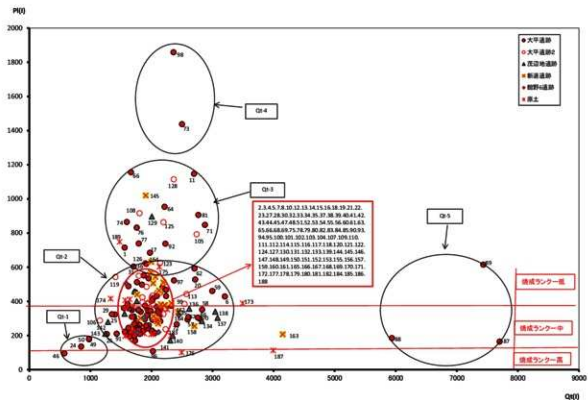


図 V-5-5 Qt-Pt 図

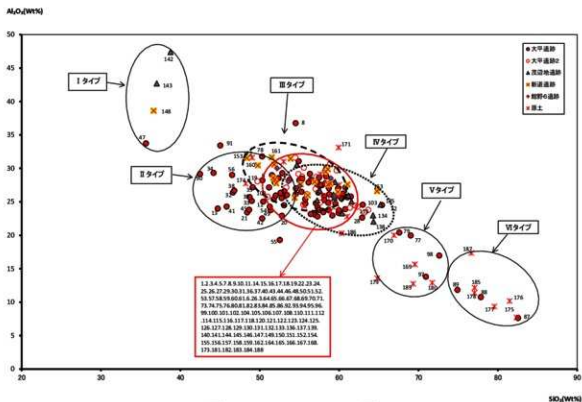
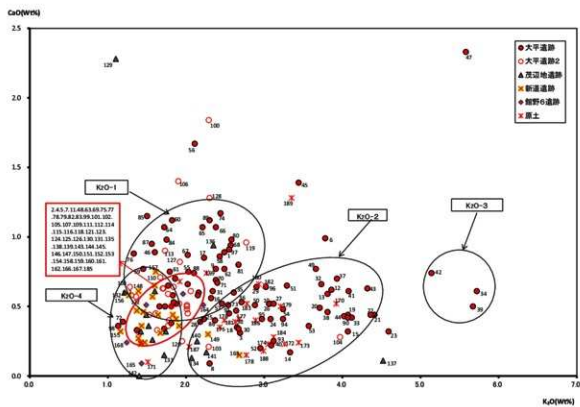
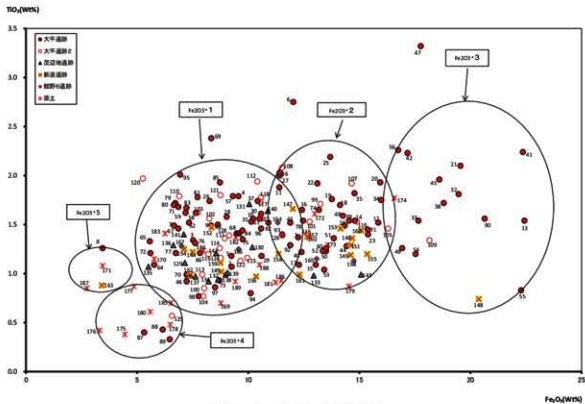
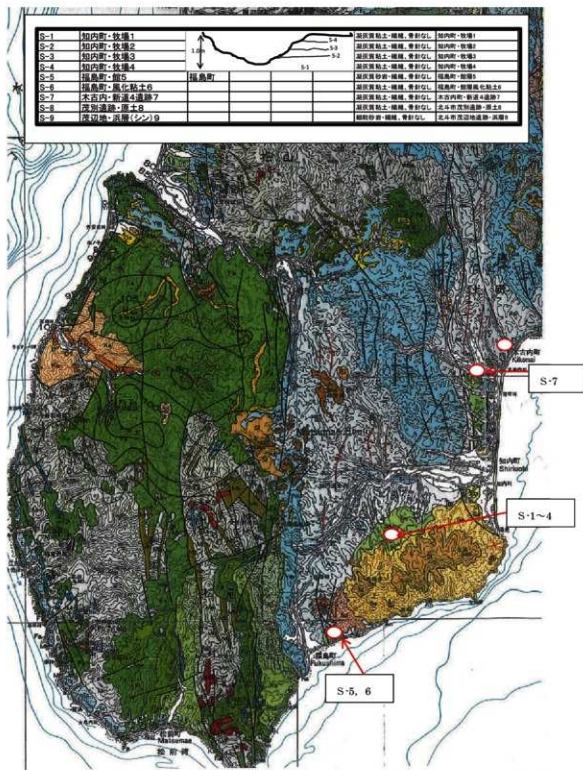


図 V-5-6 SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 図







「S-8 茂別遺跡」「S-9 茂辺地4遺跡（茂辺地と略称）」は 図VI-4-1を参照  
 「木古内町」の上の赤丸は「太平遺跡」

図V-5-9 館層採取位置図



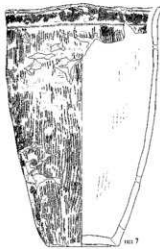
試料番号 T-1  
掲載番号 H21-10



試料番号 T-2  
掲載番号 H21-5



試料番号 T-3  
掲載番号 H21-6



試料番号 T-4  
掲載番号 H21-7



試料番号 T-5  
掲載番号 H21-11

表V-5-5 胎土分析依頼試料一覧

北斗市熊野6遺跡胎土分析 熊野6遺跡出土の試料一覧

試料番号	層位番号	掘削番号	試土名称	箇所	出土地点	取上げ日	検出品数(個)	検出品名(検出品名)	分析品数	分析品名	取上げ高さ	備考
T-1	119	H21-10	内層下部の試土採取層	溝跡	H21遺土(層位)	016	100	3.6gの3%一点(1.4g)	138	植物遺土	30	24
						017	100	3.6gの3%一点(1.4g)	138	植物遺土	115	
						018	100	3.6gの3%一点(1.4g)	138	植物遺土	177	
T-3	112	H21-5	内層下部の試土採取層	溝跡	H21遺土(層位)	011	110	6.6gの3%一点(2.4g)	124	植物遺土	658	
						012	110	6.6gの3%一点(2.4g)	124	植物遺土	658	
T-5	119	H21-7	内層下部の試土採取層	溝跡	H21遺土(層位)	016	100	3.6gの3%一点(1.4g)	203	植物遺土	30	24
						017	100	3.6gの3%一点(1.4g)	203	植物遺土	235	
T-4	114	H21-7	内層下部の試土採取層	溝跡	H21遺土(層位)	011	107	3.6gの3%一点(1.4g)	137	植物遺土	62	
						012	107	3.6gの3%一点(1.4g)	137	植物遺土	62	
						013	107	3.6gの3%一点(1.4g)	137	植物遺土	212	
						014	107	3.6gの3%一点(1.4g)	137	植物遺土	395	
T-5	181	H21-11	内層下部の試土採取層	溝跡	H21遺土(層位)	011	2		105	植物遺土	152	
						012	2		105	植物遺土	258	
						013	2		105	植物遺土	292	
						014	2		105	植物遺土	295	

○印は、同一層位の高層位と層位から試料を抽出する。各検出品数が示されています。

図V-5-10 胎土分析依頼試料一覧

## 館野6遺跡土器と断面写真



館野6遺跡土器-1 (T-1)



館野6遺跡断面-1 (T-1)



館野6遺跡土器-2 (T-2)



館野6遺跡断面-2 (T-2)



館野6遺跡土器-3 (T-3)



館野6遺跡断面-3 (T-3)



館野6遺跡土器-4 (T-4)



館野6遺跡断面-4 (T-4)

図版V-5-1 館野6遺跡分析土器断面写真(1)



館野6遺跡土器-5 (T-5)



館野6遺跡断面-5 (T-5)

図版V-5-2 館野6遺跡分析土器断面写真(2)

## 化学分析チャート

JEOL JED-2001  
SPRINT Ver. 2.18

試料名: 26 Tatenos 1

測定日時: 18年02月18日 16時29分20秒  
分析日時: 18年02月18日 16時40分42秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し角度: 20.32°  
照射時間: 120.94 秒 有効検出率: 100.00 %

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	検出率%	原子濃%	化合物	質量%	原子濃%
Na	E	1.22	0.16	Na2O	1.28	0.1113
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	E	14.48	11.48	Al2O3	27.38	2.8665
Si	K	52.79	19.19	SiO2	58.04	6.0468
K	E	1.84	1.01	K2O	2.22	0.4797
Ca	E	0.07	0.10	CaO	0.51	0.1008
Ti	E	0.01	0.41	TiO2	1.52	0.2401
Mn	E	0.07	0.03	MnO	0.05	0.0174
Fe	E	7.92	3.94	Fe2O3	11.32	2.1323
Ni	K	0.44	0.16	NiO	0.38	0.1180
O	-	47.22	52.14	NiO	0.38	0.1180
合計		100.00	100.00		100.00	

JEOL JED-2001  
SPRINT Ver. 2.18

試料名: 26 Tatenos 1

測定日時: 18年02月18日 16時42分46秒  
分析日時: 18年02月18日 16時45分48秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し角度: 20.32°  
照射時間: 120.28 秒 有効検出率: 100.00 %

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	検出率%	原子濃%	化合物	質量%	原子濃%
Na	E	5.58	0.74	Na2O	5.78	0.5877
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	E	18.87	11.60	Al2O3	20.00	2.6146
Si	K	24.39	18.07	SiO2	52.18	4.3158
K	E	1.18	0.60	K2O	1.43	0.2822
Ca	E	0.06	0.09	CaO	0.09	0.0181
Ti	E	0.89	0.21	TiO2	1.15	0.1888
Mn	E	0.21	0.00	MnO	0.46	0.1545
Fe	E	9.18	3.02	Fe2O3	12.08	1.2750
Ni	E	0.50	0.18	NiO	0.44	0.1288
O	-	41.06	52.22			
合計		100.00	100.00		100.00	

JEOL JED-2001  
SPRINT Ver. 2.18

試料名: 26 Tatenos 5

測定日時: 18年02月18日 16時47分11秒  
分析日時: 18年02月18日 16時49分42秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し角度: 20.32°  
照射時間: 120.89 秒 有効検出率: 100.00 %

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	検出率%	原子濃%	化合物	質量%	原子濃%
Na	E	0.65	0.81	Na2O	0.80	0.0802
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	E	12.07	10.74	Al2O3	18.84	2.0888
Si	E	37.79	19.05	SiO2	58.44	6.0589
K	E	1.62	0.86	K2O	2.00	0.4052
Ca	E	0.42	0.12	CaO	0.09	0.1837
Ti	E	0.71	0.39	TiO2	1.28	0.2146
Mn	E	0.35	0.13	MnO	0.45	0.0765
Fe	E	8.70	3.84	Fe2O3	9.97	1.9820
Ni	E	0.01	0.01	NiO	0.00	0.0000
O	-	48.03	52.52			
合計		100.00	100.00		100.00	

JEOL JED-2001  
SPRINT Ver. 2.18

試料名: 26 Tatenos 4

測定日時: 18年02月18日 16時51分20秒  
分析日時: 18年02月18日 16時53分48秒

--- 測定-ジオメトリ パラメータ ---

加速電圧: 15.00 kV 電子出し角度: 20.32°  
照射時間: 117.53 秒 有効検出率: 100.00 %

--- 分析 結果 ---

元素	分析線	検出率%	原子濃%	化合物	質量%	原子濃%
Na	E	0.50	0.73	Na2O	1.18	0.0948
Mg	K	0.00	0.00	MgO	0.00	0.0000
Al	E	18.10	11.79	Al2O3	18.12	2.1681
Si	E	27.88	20.61	SiO2	38.94	5.7247
K	E	1.24	0.60	K2O	1.48	0.2027
Ca	E	0.27	0.00	CaO	0.01	0.1050
Ti	E	0.77	0.24	TiO2	1.28	0.2109
Mn	E	0.48	0.26	MnO	0.88	0.1889
Fe	E	4.90	1.84	Fe2O3	7.00	1.3731
Ni	E	0.11	0.01	NiO	0.17	0.0398
O	-	48.28	52.52			
合計		100.00	100.00		100.00	

図V-5-11 化学分析チャート(1)

JEOI JSD-2001  
S P I N T vers. 2.18

試料名: 24 Tarent 5

測定日時: 18年02月18日 15時09分27秒  
分析日時: 18年02月18日 15時39分48秒

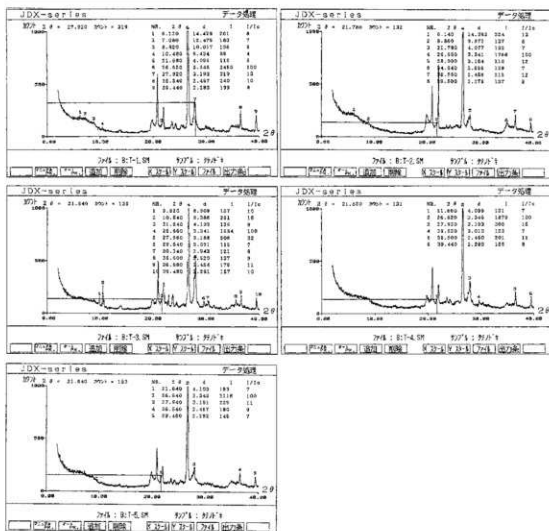
--- 測定 --- プラズマ方式 ---

加速電圧: 18.00 kV 取り出し電圧: 20.32 \*  
測定時間: 132.00 秒 変動時間: 100.00 秒

--- 分析結果 ---

元素	分析線	濃度%	標準濃度%	化合物	濃度%	K値シフト
Na	K	0.77	0.73	Na2O	1.03	0.0415
Mg	K	0.00	0.20	MgO	0.00	0.0000
Al	K	14.83	11.81	Al2O3	26.01	1.4830
Si	K	28.06	18.17	SiO2	58.80	3.3276
S	L	2.02	0.85	SO2	1.84	0.1291
Ca	K	0.17	0.08	CaO	0.24	0.0244
Ti	K	0.88	0.20	TiO2	1.19	0.0982
Mn	K	0.00	0.00	MnO	0.00	0.0000
Fe	K	10.32	0.87	Fe2O3	14.75	1.4537
Ni	Z	0.00	0.00	NiO	0.00	0.0000
合計		100.00	100.00		100.00	

## X線回折チャート



図V-5-12 化学分析チャート(2) X線回折チャート

## 6. 館野6遺跡出土土器付着試料の<sup>14</sup>C年代測定と較正年代

小林謙一（中央大学）

### 1. はじめに

館野6遺跡（北海道埋蔵文化財センター関連の年代測定用試料の略号をHDMBとした）出土土器付着物サンプルに対して、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定をおこなった。測定した試料は、図1に示す。試料は北海道埋蔵文化財センターにて小林謙一が2014年度に試料採取をおこない、2015年度に国立歴史民俗博物館年代実験室で小林がAAA処理をおこなった後、山形大学へ送付しAMS測定をおこなった。

### 2. 試料と方法

試料情報は下記の通りである。なお、HDMB-307・308・309ab（内面・外面）の3個体から4試料を採取したが、308および309aは炭素量が不足でAMS測定ができなかったため、以下には測定結果を得た2試料について記す。

HDMB-307は、H57住（円筒上層a式土器最古段階の住居）覆土中出土の縄紋中期円筒上層a式土器（復元番号235）の口縁外（口唇上）付着の吹きこぼれ状の炭化物である。

HDMB-309bは、盛土下層焼土層上（M4-3 59Q区）出土の縄紋前期円筒下層b式土器（復元番号214）の胴下部外面付着の煤状の炭化物である。

試料のAAAによる前処理は、国立歴史民俗博物館年代実験室で小林が以下の手順でおこなった。

アセトン中で5分間の超音波洗浄を行った後、クロロホルムとメタノールを容量2対1で混合した溶媒（CM混液）による30分間の還流を2回行った。次いで、アセトン中で5分間の超音波洗浄を2回行った。この操作で、油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では1Mの水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用いる。

前処理により、HDMB-307は70mgを前処理し37.2mgが回収された。うち24.95mgを炭素14年代測定用に、12.25mgを安定同位体比測定用に分取した。HDMB-309bは36mgを前処理し、10.05mgが回収された。うち6.64mgを炭素14年代測定用に、3.41mgを安定同位体比測定用に分取した。すべて年代測定に適した良好な状態であった。

以下の作業は山形大学へ委託した。それぞれの測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。この際のEA使用量（処理で使用した量）は、307が2.845mg、309bが2.897mgで、ガラスラインで回収した炭素量（回収したCO<sub>2</sub>量より計算）は、307が0.922mg、309bが0.892mgであった。その後、総合研究所1階に設置した加速器質量分析計（YU-AMS：NEC製1.5SDH）を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 3. 結果

(株)SIサイエンスに委託した質量分析計による炭素・窒素安定同位体比、炭素量、窒素量を下記に示す。

	$\delta^{13}\text{C-VPDB}\%$	$\delta^{15}\text{N-Air}\%$	TOTAL-N%	TOTAL-C%
HDMB-307	-23.1	11.7	5.76	47.0
HDMB-309b	-22.9	13.1	5.85	57.8

炭素13/炭素12比はともに-24‰より重く、海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性がある値である。窒素同位体比も高く、C/N比からも海産物の魚貝類に由来する魚げの可能性が考えられるが、309bについては外面の煤状の付着物であるため、海産物の煮魚げとは考えられず、なぜ $\delta^{13}\text{C}$ が重たいのか不明である。

以下に、サンプルの放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果を示す。各結果には、同位体分別効果の補正に用いる炭素安定同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうため記載した。

#### AMS-炭素14年代測定値

試料番号	測定機関番号	AMS- $\delta^{13}\text{C}$	$^{14}\text{C}$ YrBP	較正用	2 $\sigma$ 較正年代calBC
HDMB-307	YU-3930		-22.65 ± 0.41		4753 ± 23 4755 ± 25
HDMB-309b	YU-3931		-22.58 ± 0.36		5158 ± 23 5160 ± 25

#### 暦年較正年代確率分布 (IntCal13, OxCal2013)

試料番号	2 $\sigma$ 較正年代cal BC		
HDMB-307	3636~3515 (90.9%)	3411~3405 (0.9%)	3399~3384 (3.6%)
HDMB-309b	4039~4017 (7.8%)	3999~3945 (87.6%)	

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 $^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正には較正曲線データ(IntCal13)を使用し、OxCal4.2<sup>1)</sup>またはOxCal4.2.4を用いて算出した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す(図1)。

#### 4. 年代的考察

年代測定結果の較正年代であるが、2013年に較正曲線が水月湖の湖底堆積物などのデータにより後期旧石器時代5万年前までをカバーするIntCal13に更新された<sup>2)</sup>。特に1万2千年より以前の較正年代については、これまでに測定されてきた結果も含めてIntCal13を参照することが推奨されている。

縄文時代前期～中期はIntCalのバージョンによる大きな齟齬はないが、以下ではIntCal13による較正年代を $2\sigma$ の有効範囲で計算した結果による。

HDMB-307の炭素14年代測定結果および較正年代は、前期末葉に相当する年代である<sup>3)</sup>。しかし、上述のように $\delta^{13}\text{C}$ 値からみて、海洋リザーバー効果の影響を受けていることが想定され、円筒上層a2式が相当すると考えられる3300～3200calBCころ<sup>4)</sup>と比べ、数百年古い年代値となっていることも、海産物の煮魚げ由来の試料による海洋リザーバー効果の影響と考えることができる。

HDMB-309bの炭素14年代測定結果および較正年代は、4000～3945calBCの間に含まれる年代である可能性が高い。この年代は三内丸山遺跡出土円筒下層b式の年代の古い年代値に当たる<sup>5)</sup>が、やや古い年代である。上述のように $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-22\text{‰}$ と重たいため、外面付着物であるが、なんらかの理由でリザーバー効果の影響を受けている可能性も考えられる。

本稿で用いた年代測定は、日本学術振興会科学研究費助成基盤研究(B)「炭素14年代測定による縄文文化の枠組みの再構築—環境変動と文化変化の実年代体系化」(課題番号25284153, 研究代表小林謙一, 平成25～29年度)によるものである。グラフィット作成からAMS測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターに委託した。炭素回収率については、山形大学、較正年代の計算については国立歴史民俗博物館今村峯雄・坂本稔の教示を得た。

- 1) Bronk Ramsey, C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, vol.51, Nr-1, p. 337-360.

Christopher Bronk Ramsey, Sharen Lee. 2013. Recent and Planned Developments of the Program OxCal. *Radiocarbon*, Vol 55, No 2-3

- 2) Paula J Reimer • Edouard Bard • Alex Bayliss • J Warren Beck • Paul G Blackwell • Christopher Bronk Ramsey • Caitlin E Buck • Hai Cheng • R Lawrence Edwards • Michael Friedrich • Pieter M Grootes • Thomas P Guilderson • Hafliði Hafdísason • Irka Hajdas • Christine Hatté † • Timothy J Heaton • Dirk L Hoffmann • Alan G Hogg • Konrad A Hughen • K Felix Kaiser\* • Bernd Kromer • Sturt W Manning • Mu Niu • Ron W Reimer • David A Richards • E Marian Scott † • John R Southon • Richard A Staff • Christian S M Turney • Johannes van der Plicht, 2013 INTCAL13 AND MARINE13 RADIOCARBON AGE CALIBRATION CURVES 0-50,000 YEARS CAL BP, *RADIOCARBON*, Vol 55, Nr 4, p 1869-1887, the Arizona Board of Regents on behalf of the University of Arizona

- 3) 小林謙一・2008「縄文土器の年代(東日本)」『総覧縄文土器』小林達雄編, アムプロモーション

- 4) 八戸市笹ノ沢(3)遺跡の円筒上層a式中～新段階に比定されるSI35住・SI31住炭化柱材のウイグルマッチングでは、前者が3332～3085calBC(ベストマッチは3317calBC)、後者が3304～3122calBC(ベストマッチは3223calBC)ころの較正年代であった。

小林謙一・坂本稔・松崎浩之2004「第5章 自然科学的分析 第2節 青森県八戸市笹ノ沢(3)遺跡出土土器付着物の $^{14}\text{C}$ 年代測定」『笹ノ沢(3)遺跡IV—八戸環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書第372集、青森県教育委員会(中村哲也編)

- 5) 三内丸山遺跡円筒下層b式土器付着物AOMR-5725は複数回測定し $4880 \pm 40.4900 \pm 90^{14}\text{CyrBP}$ 較正年代で3715～3630(86.3%), 3945～3515calBC(95.1%)の年代であった。

小林謙一・坂本稔・西本豊弘・松崎浩之2008「三内丸山遺跡出土試料の $^{14}\text{C}$ 年代測定(2006年度)」特別史跡三内丸山遺跡年報11, 青森県教育委員会



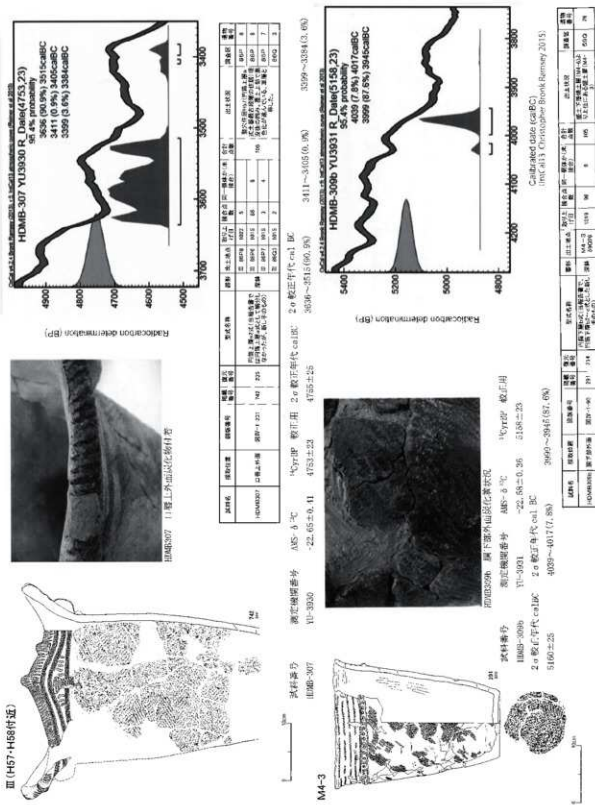


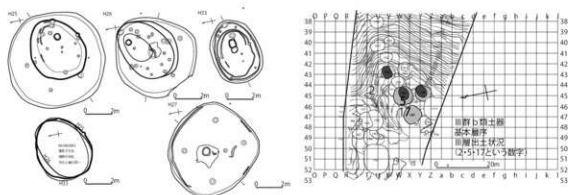
図 V-6-1 測定試料付着土器と校正年代確率分布

## VI 成果と問題点

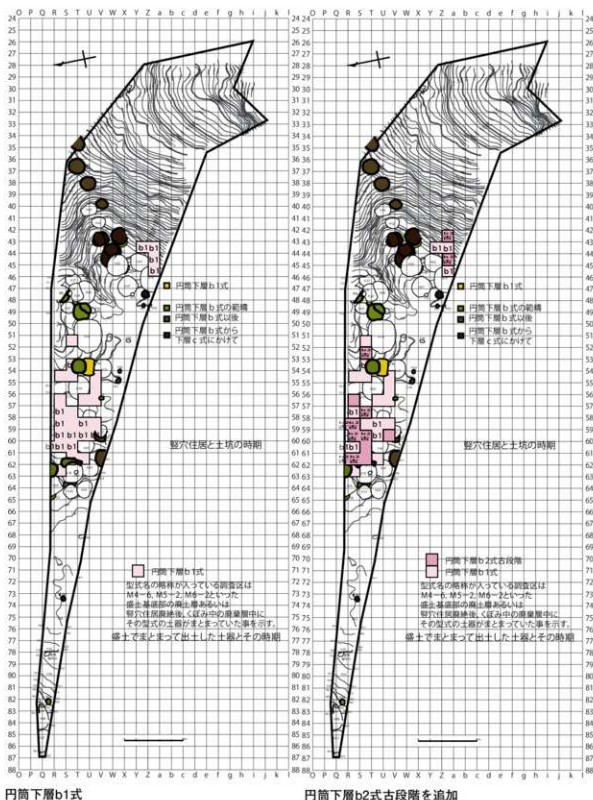
### 1 遺構

**盛土遺構の変遷**：当遺跡の盛土遺構は円筒下層b1式のころ形成が始まる。図VI-1-2～7に復元土器出土調査区と凹系遺構の時期を示した。調査区に「(円筒下層) b1 (式)」等、土器型式の略称を示したものは盛土基底部焼土層 (M4-6・M5-2・M6-2) からの出土であり、住居に「b1」等と示したものは住居廃絶後の窪みに廃棄層があったものでその型式名である。土器の廃棄が円筒下層b1式から型式をおうごとに、傾斜変換点から徐々に矢不來川側の斜面下方にのびていく様子がわかる。円筒下層b2～c式のころ、斜面の捨て場が飽和してきたためか、平坦面にある竪穴住居廃絶後の窪みに廃棄し始める。M4やM5・M6に竪穴住居を掘り始めるのもこの前後である。円筒下層d1新段階のころ60～63-R～T区の廃絶竪穴住居への廃棄が飽和してくる。窪みが埋まりきってくる。円筒下層d2式のころには土を盛り上げはじめてM2を形成する。図VI-1-2～7について、石囲炉を持つ住居については、縄文時代前期のものとして仮定して図化してある。

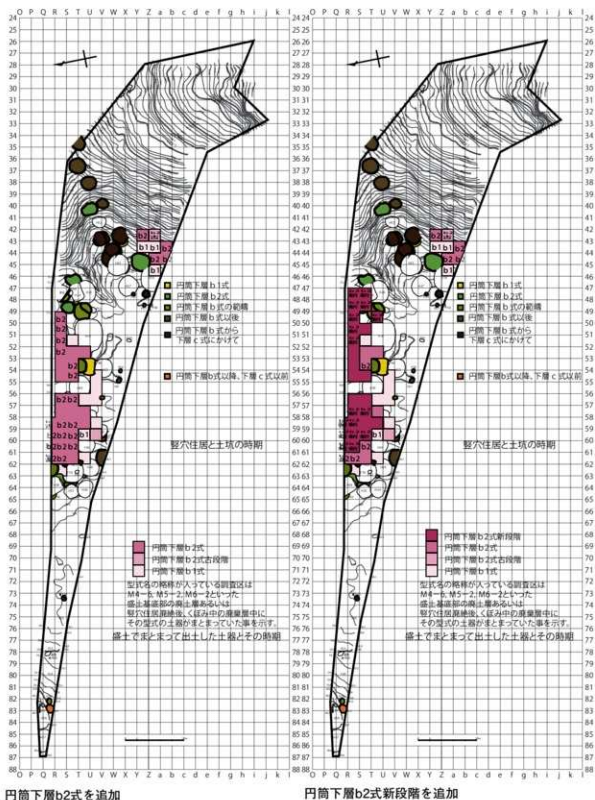
**石囲炉を持つ住居**：H25・H26・H27・H33は石囲炉を持つとした住居である。H27は、「石組と言えなくもない」検出状態で、平面形も典型的な縄文時代前期後半の竪穴住居のため、ここではH25・H26・H33の検討のみとする。3軒について、諸条件をもとに石囲炉に伴う住居平面形を推定した(図II-36・図VI-1-1)。H25はその内部施設、H26は残存する付属遺構、H33はその掘り込まれた形状を根拠とした。ただし、H26は土層断面図等、図面上では、石囲炉に伴う掘り込みの根拠が弱い。ただしH26覆土2層出土遺物の分布が石囲炉周辺に少ない事や、写真の再検証で平面形を示した(図III-1-50)。廃棄層を二枚持つ土層の認知が、現場では困難だったと思われる。これら3軒は立地、規模、想定できる長軸の方向が類似する。卵型に近い楕円形の平面形とその長軸上に石囲炉を持つ形状から、縄文時代中期後半Ⅲ群b3類土器の住居を思わせる。(2006館野遺跡 北埋調報237)。調査範囲内の中期後半Ⅲ群b類のⅢ層出土分布とも似る(図VI-1-1)。ただし、調査者の指摘どおり3軒とも遺構周辺・遺構そのものの遺物出土状況のみからでは縄文時代前期後半とも言える。ただ不確定ながら、本文中で述べた通り、石囲炉出土の掲載土器H25-9は胎土と形態から中期中葉サイベ沢Ⅶ式(Ⅲ群a類)の可能性もある。また、現場段階の情報で作成した図II-37ではH26は石囲炉から想定する住居平面形も含めて、前期後半のH19掘り上げ土とM6に覆われる。だが、H19掘り上げ土は不明瞭である事、H26の覆土2層廃棄同様、この住居について覆土上部や周辺土層の確認が現場では困難だったと思われる。(大泰司)



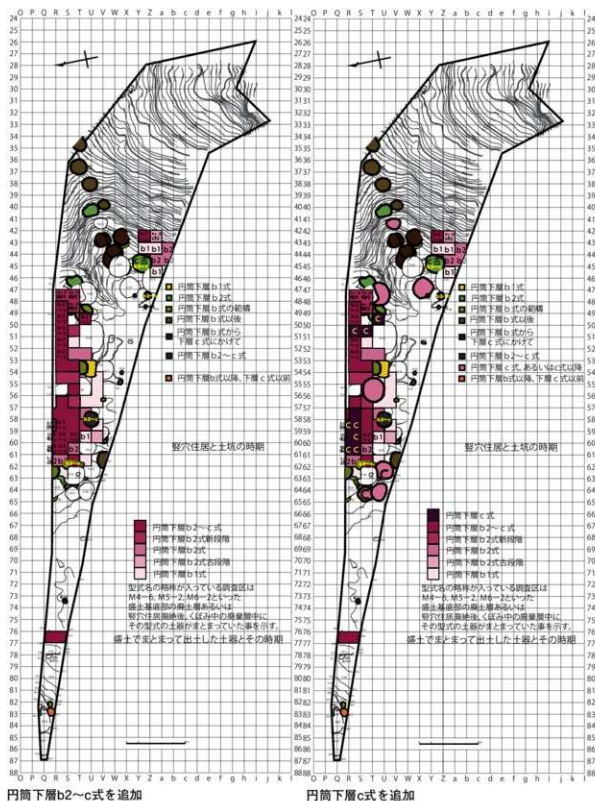
図VI-1-1 遺構1 石囲炉を持つ竪穴住居



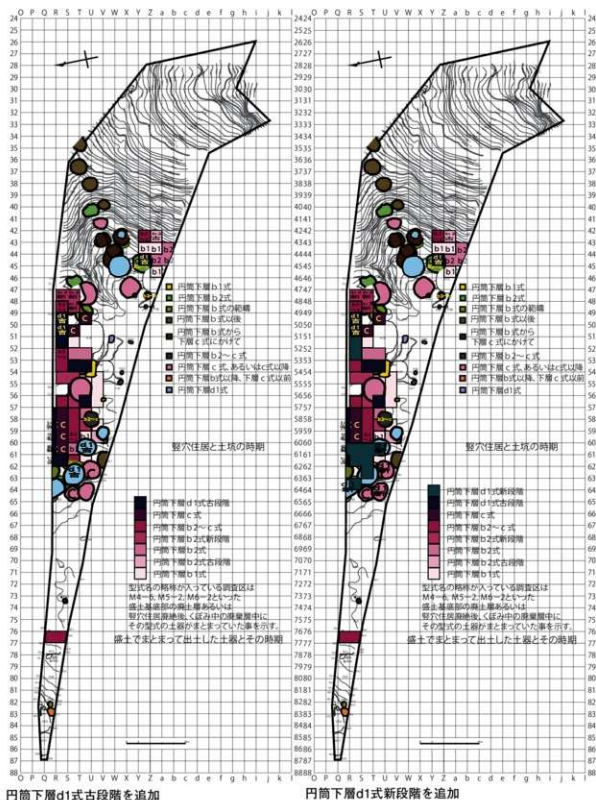
図VI-1-2 遺構2 遺構の時期変遷



図VI-1-3 遺構3 遺構の時期変遷

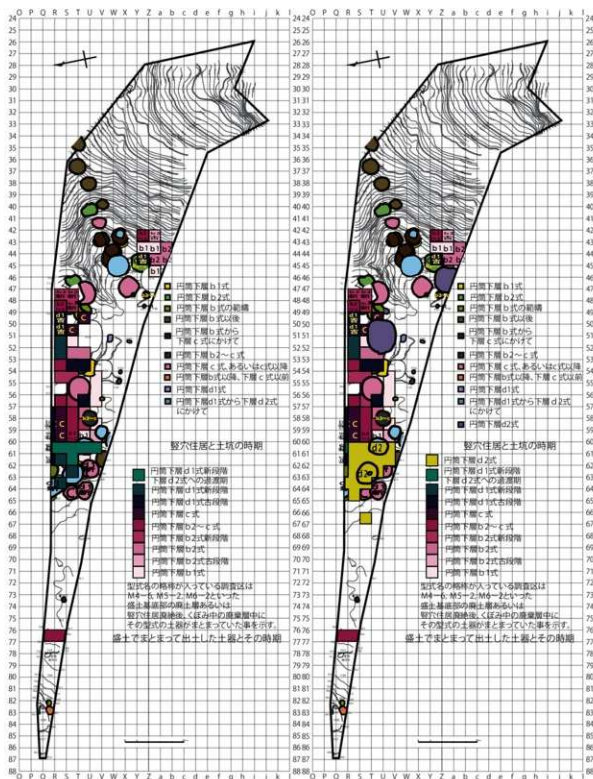


図VI-1-4 遺構4 遺構の時期変遷



図VI-1-5 遺構5 遺構の時期変遷

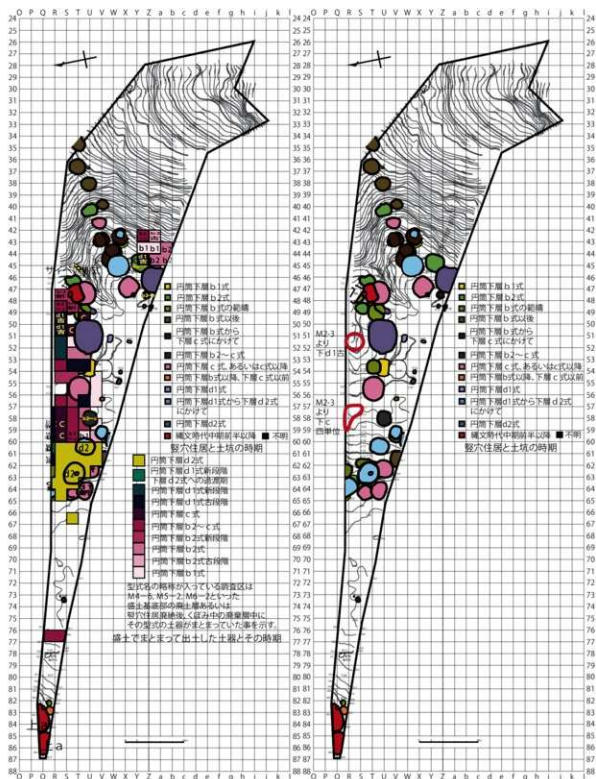




円筒下層d1式新段階でより円筒d2式に近いものを追加

円筒下層d2式を追加

図VI-1-6 遺構6 遺構の時期変遷



図VI-1-7 遺構7 遺構の時期変遷



## 2 土器

館野6遺跡の一括出土土器の前後関係を対比することで、型式的変遷を検討する。大きく二種類の一括出土状況があった。一つ目は、堅穴住居へのまとまった土器の廃棄、貝塚に例えるならば、「地点貝塚」の様相、そして二つ目は、盛土へ一括廃棄された土器群、特にM4-6、M5-2、M6-2といった盛土基底部焼土層からは土器がまとまって出土している。これらのまとまりを「」で示し、その特徴を例示した。

一つ目の出土状況、堅穴住居の埋没過程に一括廃棄された土器群を認定するにあたって注意点があった。それは、特にM4を掘り込んでいる住居H21、H39等にありがちであるが周囲の盛土からの流入した土器の判別である。文様要素を目安として、検討対象からこれらを取り除く操作が必要であった。一個体分の破片がほぼまとまって出土した、残存率の高い復元個体を選ぶ事で、作為的な操作を極力排除することに努めたが、検討の余地は残る。

また盛土調査における、土器のまとまりを検討するにあたり、「毎回盛土を5cmずつ掘り下げ、視覚的にまとまっている土器を個別に取り上げる。」という作業内容を利用した。取り上げた調査区と日付が同じものは出土した標高・層位が同じ可能性が高い。問題点として盛土表面の面を基準として掘り下げるため、最終的な地形の傾斜が強い調査区(例えばQ・Rライン)では、混在の可能性が高かった。場所によっては、木根等攪乱の影響もあるため、絶えず文様要素の確認をする必要があった。まとまり同士が示す傾向のうち、斉一性の高いものを同時期のまとまりとして「」で示した。

### 縄文時代中期中葉

サイベ沢Ⅷ式：F82沢地地形出土のサイベ沢Ⅷ式のまとまりを一括性の高い一群として挙げる事ができる。小型の深鉢が集中して出土した。円筒上層d式の大型の破片F82-12は意図的な打ち欠きと廃棄の可能性はある。

### 縄文時代中期前葉

円筒上層a式：堅穴住居H57とH58覆土中、埋没過程の廃棄層から円筒上層a式を主体とする中期前葉の土器がまとまって出土した。H58-1やH18-1については次段階、円筒上層b式から上層c式にかけての可能性を考えたが、口縁部文様帯が縦方向の区画が基調となっており、これが次段階の口縁部文様帯の装飾傾向と異なる。そしてH58-1が他の円筒上層a式の復元個体と出土状況が変わらないため、H58-2と同時期、円筒上層a式の最新段階として分類した。

### 縄文時代前期後半

円筒下層b1式、下層b2式、下層c式、下層d1式、下層d2式がM1～M6盛土中、そして堅穴住居覆土中、埋没過程の廃棄層から出土した。今回、土器の変遷を段階的に追うことができた。そのため円筒下層b2式から下層c式にかけての過渡期とも言える土器群がまとまって出土した。円筒下層式土器の場合、遺跡間で土器の差異が顕著であるため館野6遺跡独自の基準で「円筒下層b2～c式」の仮称で解説した。また円筒下層d1式から下層d2式にかけての過渡期とも言える土器群もまとまって出土した。これについては「円筒下層d1式新段階」と称する方が盛土の連続性を説明するに容易かったため円筒下層d1式を古段階と新段階にわけた。「円筒下層d1式古段階」においては秋田県萩ノ台Ⅱ遺跡(秋田県教育委員会1993)におけるⅢ群-d、Ⅲ群-eが含まれる。今回これらの土器群は、「円筒下層c式」

ではなく「円筒下層d1式古段階」と相伴したためである。

#### 円筒下層d2式 (図VI-2-1・2)

「多軸絡糸体回転地文」が復活する。これらは円筒下層b2式新段階に目立つ特徴で、円筒下層c式で徐々に無くなる傾向にあった。斜め回転が多く、口縁部横回転なども少量だがみられる円筒下層b2式前後に対して、下層d2式は縦回転がほとんどである。円筒下層d1式以来の「籠状地文」は無くなる傾向にあり、口縁部直下の結束第一種羽状縄文、あるいは胴部上半にのみ残るもの(18)がある。

円筒下層d1式新段階以来の「明瞭な肩部あるいは隆帯貼付によって口縁部文様帯を区画する器形」が普遍的になる。その中で口縁部文様帯部分そのものが肥厚するもの(19・80・81・126)、二段口縁風の口縁を持つもの(177)が出現する。全体的に器高に対して胴部径が大きくまた器壁も厚くなる。

当遺跡の特徴として、円筒下層d1式新段階以来の「縄による地文施文前にサルボウ条痕をほぼ全面に横走させる調整」は残るが、下層d1式に多かった自縄自巻縄文縦走との組み合わせは無くなる傾向にある。単軸絡糸体第1類縦回転地文の個体が目立つ。また単軸絡糸体第4類縦回転地文の破片は多く出土したが、一個体分の破片が揃ったものは無かった。

**円筒下層d2式の変遷** (図VI-2-1) 堅穴住居H29が掘り込まれている調査区62S区において層的な変遷を追ってみる。H29の窪みへの廃棄遺物とその外側の盛土出土遺物で対比を行う。

まず、H29覆土中、埋没途中に焚かれた焼土F78がM2盛土の基底部と考える(M4でいうところの基底部焼土層M4-6)。土器群は「F78より上(の面、より新しい時期)」と「F78と同一(検出面、ほぼ同時期)」に分ける事が出来る。現場段階でまず盛土基底部としたのはこのF78である。ところがこの下に土器の廃棄が続き、それに断片的な焼土層(図III-1-60)も伴っていた。そこで前者を盛土基底部A、後者を盛土基底部Bと調査段階で仮称した。Bの下位からM3を検出したため、便宜上盛土はこのM3までとした。Ⅲ章F78の項でこのA・Bの基底部について記した。

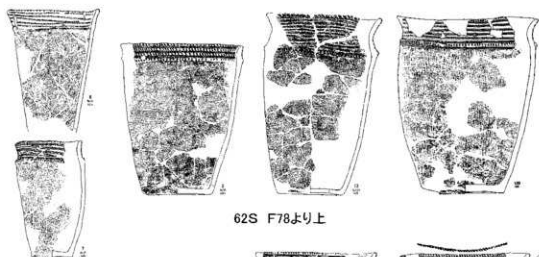
「F78より上」は2・7・8・13・120である。全体的に口縁部文様帯の幅が広い。器壁に厚みがある。平行線を基調とした縄線文、絡糸体圧痕文が口縁部に施される。

「F78と同一」はさらに、同一検出面出土の「同時期(旧盛土基底部A)」のものと、検出面直下である「その直前(旧盛土基底部B)」にわけた。と「F78と同一(同時期)」は9・11・14・15で、2も一部ここから出土している。「F78と同一(その直前)」は12・18・19である。「F78と同一(同時期)」、11・14は鋸歯状の文様を持つ。また、15は木目状撚糸文風の単軸絡糸体第1類を地文に持ち、口縁部文様帯の菱形文様に対応して穿孔されるものがある。「F78と同一(その直前)」F78直下出土のものには口縁部に菱形文様の連続を基調とした(12・18)や肥厚した口縁部に四単位の波頂部に対応した口縁部文様を持つ19がある。19に類似した土器に126がある。規格が19の三分の二ほどで、隣接する62T区から出土した。対向する縄線折り返し部分に特徴がある。126は波頂部が非線対称である。また一段階前の類似土器として387がある。胴部の籠状地紋からこちらは円筒下層d1式とした。口縁部文様帯は肥厚しない。

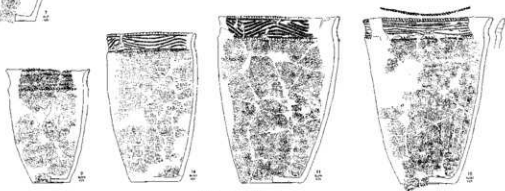
このように独特な文様構成で器の規格が相似する土器として、64R区M2-2出土80と63R区M2出土81がある。これらは円筒下層d2式で19とほぼ同時期と考えられる。規格的にも、81は80の三分の二ほどの規格である。

次に、同じ62S区について、H29の外側、盛土遺構調査での、土器のまとまりを検討する。

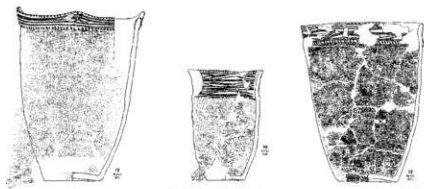
「62S区M2 9月2日取り上げ」は口縁部に波状文、菱形基調の文様を持つ114・121、あるいはそれに類する117、小型舟形容器119から成る。「62S区M2 9月25日取り上げ」は波頂部の形状に対応した縄線を平行に施す112・115や、後述する「短い縄線・縄圧痕を縄線区画内に充填する、円筒下層



62S F78より上



62S F78と同一



62S F78の直下



62T 19と類似土器

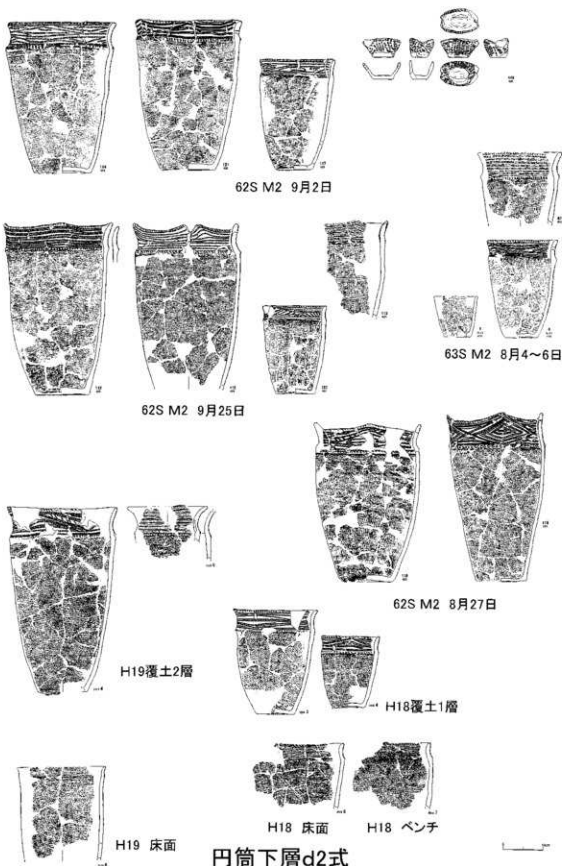


63・64R 類似土器



### 円筒下層d2式

図VI-2-1 土器1 円筒下層d2式



図VI-2-2 土器2 円筒下層d2式

d1式新段階以来の文様(図Ⅱ-3)」を口縁部に持ち、木目状燃糸文地の122、当遺跡ではサルボウ条痕を絡条体施文以前に施すのが通常だが、最後に施す事で、多段の帯風に仕上げる113から成る。「62S区M2 8月27日取り上げ」は四単位の波頂部と対応した変形文様を持つ116・118から成る。これらは、「F78と同一」と同じ時期と考える。

62S区に隣接する「63S区M2 8月4～6日取り上げ」は屈曲させた縄線を対向させ、条痕地文を持つ4、幅広い口縁部文様帯に、単軸絡条体第4類縦回転地文を持つ87、口縁部文様帯を持たない小型深鉢1から成る。「F78と同一」から「F78より上」の段階が混在している。

次に、凹形遺構62S区以外の出土遺物を検討する。まずは堅穴住居H18とH19からまとまって出土した遺物についてである。円筒下層d2式土器が「覆土」と「床面」から出土している。

「H18覆土1層」出土のものが二個体ある。いずれも口縁部には変形基調の縄線文を施し、結束第一種羽状縄文を縦走させる3、と多段の帯を持つ4から成り立つ。F78形成期の段階、地文を考慮するとより古い段階のものとする。

「H19覆土2層」は「短い縄線・縄圧痕を縄線区画内に充填する、円筒下層d1式新段階以来の文様」を口縁部に持つ4や、口縁部文様帯の幅が広い5がある。「F78と同一」から「F78より上」のものが混在している。

「H18 床面とベンチ」床面出土6とベンチ出土7に接点はないが同一個体と思われる。これらは口縁部文様帯の幅が狭いが器壁が相対的に厚く、内面調整が丁寧であることから、円筒下層d2式とした。層位的に前述のものより古い段階である。

「H19 床面」床面出土6もほぼ同じ段階と考える。口縁部文様帯直下の結束第一種羽状縄文と器壁が相対的に薄い事から、円筒下層d2式最古、あるいは円筒下層d1式最新段階と考える。

#### 円筒下層d1式

**円筒下層d1式新段階**(図Ⅵ-2-3・5) 刺突列が再び現れ、口縁部文様帯の縄線に交差する文様構成や縄線側面に刺突列のように押圧するようになる。H38やH39覆土上位出土遺物、H34覆土中廃棄層-1～3にまとまった出土がある。刺突列は円筒下層c式から円筒下層d1式古段階にかけて減少傾向にあった。個体が口縁部文様帯を肩部あるいは薄い隆帯で区画する。その結果、口縁部文様帯を持つ個体はそれが明瞭となる。ほかに自縄自巻縄文とサルボウ条痕横走の組み合わせ、多段化した帯残るなどの特徴を持つ。H21の覆土上部から検出したまとまり「60T区M2-2最下位9月1日取り上げ(172・180～187)」も典型例である。堅穴住居H21とH39の廃絶後、円筒下層d1式古段階から円筒下層d2式への変遷がみられる。

**円筒下層d1式新段階への変遷**(図Ⅵ-2-3・5) H21覆土の上に盛土が堆積している。「60T区M2-2～M2-2下位」である。ここから169・171・173・174・176・177・186が出土した。そのうち169・176・177・186は、円筒下層d2式で「F78と同一あるいは直下」段階である。171は小型深鉢で口縁部文様帯を持たず、サルボウ条痕が口縁部から胴部まで連続して施される。172と共通する要素を持つ土器であり、円筒下層d2式の項で解説した1にも類似する。173・174は「短い縄線・縄圧痕を縄線区画内に充填する、円筒下層d1式新段階以来の文様(図Ⅱ-3 円筒下層新段階を参照)」を口縁部文様帯に持つ一群である。円筒下層d1式新段階が混在したものとする。

これらの下位、つまり、H21廃絶後の窪みにおいて最上位、埋没過程の初期段階から「円筒下層d1式新段階」の一括資料が出土した。「60T区M2-2最下位9月1日取り上げ(172・180～185・187)」が円筒下層d1式新段階の一括土器と言える。変形基調、鋸歯状基調の縄線文を持ち、「短い縄線・縄圧痕を縄線区画内に充填する、円筒下層d1式新段階以来の文様」を付加、ないしは、絡条体側面圧

痕あるいは縄線を波状に押捺したものなど細かい鋸歯状をした押圧が口縁部に施されるようになる。地文としては横走するサルボウ条痕と縦走する自縄自巻の組み合わせにより碁盤の目を思わせる地文184や多段化した地文181が出現する。183も地文に多段の帯を持つ。172は小ぶりの深鉢で171に似る。サルボウ条痕が口縁部から胴部まで連続して施される。胴部には条痕の上に多輪結条体回転。当遺跡の円筒下層d1式において多輪結条体地紋はより円筒下層d2式に近い段階になるまで無い。小型なので特殊、あるいは混在の可能性がある。

同じ60T区H21廃絶後の土層中のさらに下位に、覆土中位相当に「F69」が広がる。この「F69」からも同様な土器群（67・72・73・75）が出土した。器形・文様構成から「M2-2最下位」とほぼ同時期と考える。組成の中に72・181のように連続刺突を肩部に有するものが混じっている。72は右方向へ押し引き気味である。これは円筒下層b1式の土器のうち隆帯上に、爪先を含めた指頭による連続刺突の形状を思わせる。

竪穴住居埋没過程の廃棄層で検出されたこの時期の一括土器群（図VI-2-3）がある。「H34覆土（1-3）（63-64T区）」「H38覆土上位（6-9）（63-64-Q-R区）」「H39覆土下位（49・50・52・53）覆土中位（51）（61-62-T-U区）」である。また円筒下層d2式への移行期を示すものとして同じく「H39覆土上位（27・32・34・35・48）」がある。

#### 「H39出土土器」（図VI-2-3）

「H39覆土上位」のうち円筒下層d2式相当（3・11・16・17・18・21・24・25・26・28）を対比の為に示した。文様構成等から、「F78と同一あるいは直下」段階のものが主体と考える。覆土上位出土で、層的にも時期差が明瞭である。28はサルボウ条痕横走後、木目状燃糸文。24は木目状燃糸文風地文。3・16は円筒下層d1式新段階で発生した口縁部文様。17はより下位の35と類似した地文。26は類似した口縁部文様帯を持つ。ただし35は胴部の最大径部分が影らまず、筒状である。円筒下層d1式的な器形である。H39の53は口縁部破片の1点がH21覆土7層の中央から出土、接合している。覆土7層はこの前段階である、円筒下層d1式古段階の一括土器が出土している。覆土中央は絶えず周囲より窺みがちな事から、後の時期に混在したものと考える。

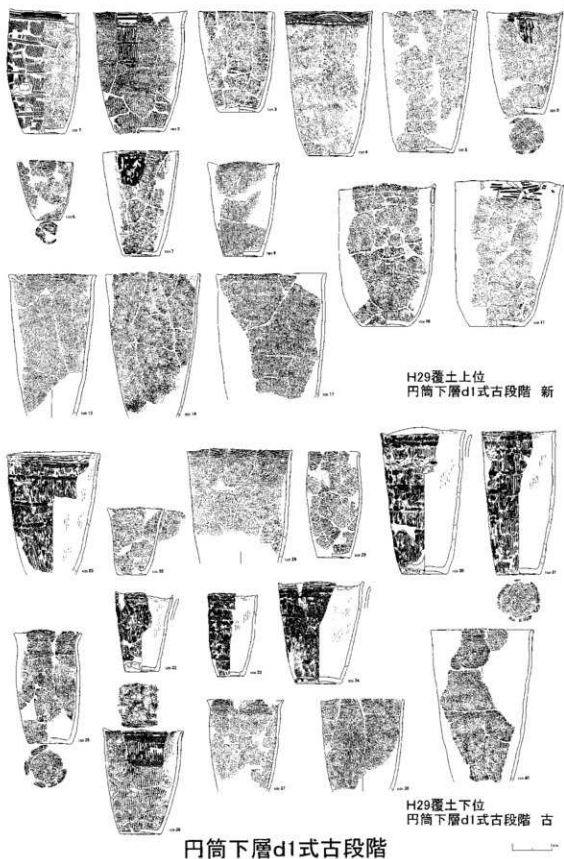
「H39覆土上位（27・32・34・35・48）」は円筒下層d2式への移行期を示す可能性がある。F69とほぼ同じ時期と思われる70はこの段階の可能性がある。より下層d2式色が強いものである。H39の35覆土2層直下の出土で、視覚的に覆土上位と判断した点取りNa14と接合している。エレベーション図に示した通り標高的には覆土下位の遺物と変わらない。しかし、比率的に器壁が厚く、口縁部文様帯を区画する肩部が明瞭等、円筒下層d2式的な要素を持つ。34も35同様、覆土2層直下出土遺物を主体とする復元個体だが、多段の帯を持ち比率的に細長い筒状器形といったように古い要素と、幅広い口縁部文様帯等、新しい要素が混在する土器である。35と接合した、点取りNa14の主たる構成要素であった27、同様の標高が低いが視覚上上位に位置したNa13の土器32、同じくNa15の48も円筒下層d1新段階の要素に下層d2式の要素を併せ持った土器である。一方覆土中位とした51は円筒下層d1式新段階の土器である。

**円筒下層d1式 古段階** 竪穴住居埋没過程の廃棄層からの一括土器出土例があった。「H29覆土上位」「H29覆土下位」（以上、図VI-2-4）「H28覆土」「H21覆土7層北側」「H21覆土7層」「H21覆土9層」「H21覆土7層南側」（以上、図VI-2-6）である。

口縁部文様帯の特徴として、円筒下層c式に比べて幅が狭くなる。最古段階としたものや「古段階古」としたものの一部から、幅広かった口縁部文様帯の一部の帯、口唇側の一連の文様が新しく口縁部文様帯として独立したためそのまま幅が狭くなった様子を観察できる。結束羽状縄文横回転によ



図VI-2-3 土器3 円筒下層d1式から下層d2式

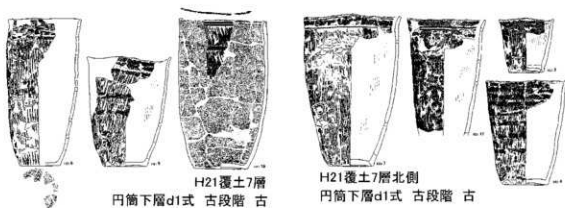


図VI-2-4 土器4 円筒下層d1式古段階



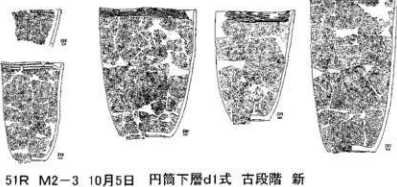


図VI-2-5 土器5 円筒下層d1式から下層d2式



H28覆土  
円筒下層d1式 古段階 古

52R M2-3 9月16日  
円筒下層d1式古段階 新



51R M2-3 10月5日

図VI-2-6 土器6 円筒下層d1式

て構成される文様帯、あるいはそれを縄線で区画したもの、また別に、矢羽根状ないしは単独の縄線を平行に押圧した幅の狭い口縁部文様帯から成る。地文では、自縄自巻縄文縦走地文出現。多段の帯の出現(H21覆土下位、H29覆土下位)を挙げる事が出来る。

また、円筒下層c式に比べて、寸胴に近い形状、すなわち、口縁部文様帯区画部と口唇部の屈曲部がゆるい、あるいは無くなる。胴部上半に最大径があり、口縁部にかけてゆるやかに外反、または筒状に真直ぐに立ち上がる。

**円筒下層d1式 古段階 の変遷**(図VI-2-4)さらにH29の「覆土上位(図III-1-60)」と「覆土下位(図III-1-61)」が現地では漠然と面にとらえることができた。それぞれ不整な炭化物集中を伴う。遺物整理後、それぞれ出土土器にわずかだが特徴に違いがあった(図III-1-59)。それを、層位的に「円筒下層d1式古段階 新」と「同古段階 古」とした。「新」として「H29覆土上位」出土遺物の特徴は、「口縁部文様帯区画に刺突列」そして「口縁部文様帯に、縄線押圧をX字状に交差させる文様構成の顕在化」の2点である。「口縁部文様帯」が「古段階 古」に比べて明瞭となる。出土状況から、「円筒下層d1式古段階 新」において「H29-2・6・7・10」「H29-4・5・8・17」は一括性が高い。

前段階「円筒下層c式」の四単位の波状口縁に伴う菱形文様の伝統を残す文様例は「古」である「H29覆土下位」28・38のように存在する。ただし割合としては少なく、他の「円筒下層d1式古段階 古」一括土器群に復元例は無い。

「新」である「H29覆土上位」においての4や14のように曲線的で波状の要素をもつ歯歯状のもの、11のように規則性に欠くものが出現する。これらの傾向は「円筒下層d1式新段階」の施文傾向につながる。

また「H29覆土下位」において35(点取りNo22)の幅広い口縁部文様帯は円筒下層c的な古い要素である。「H21覆土南側」に幅広い口縁部文様帯を持つ一括土器(1・2・5)がある。「H21覆土9層-8」も同様である。「H28覆土-1」や「H21覆土7層-6」のように縦区画が入るものは古い段階でも混在してくる可能性がある。

以上の傾向から、円筒下層d1式 古段階を三段階に分けるとすると「古段階 新」として「H29覆土上位」。「古段階 古」として、「H29覆土下位」「H28覆土」「H21覆土7層北側」「H21覆土7層」。「最古段階」として「H21覆土9層」「H21覆土7層南側」を挙げる事が出来る。

これらの一括資料を参照にして、円筒下層d式期の盛土M2から「円筒下層d1式古段階」を捉える事が可能だったのは、「51R区M2-3 10月5日取り上げ(220・222・223・226-228)」(図VI-2-6)である。この組成の中には刺突列を有する復元個体はなかったが、破片試料として226が口縁部文様帯をほとんど有しない代わりに、口唇に貼付された隆帯に刺突列を持つ。加えて隣接する調査区の同一層位「52R区M2-3 9月16日取り上げ」において、219の口縁部文様帯区画の隆帯に刺突列を施したような224が出土する。220・223・226・227は「円筒下層d1式 古段階 新」の範疇の可能性が高い。222・228は比較的、「古段階 新」の可能性があるとしか言えない。

一方、「円筒下層d1式古段階 古」として認められたのは「51R区M2-3 10月5日取り上げ(221・225)」のみである。堅穴住居覆土資料がなければ古と新の分離は根拠的に厳しい。

#### 円筒下層c式(図VI-2-7)

**円筒下層c式 新段階あるいは別系統**円筒下層c式の文様組成には、四単位の波頂部に対応する菱形基調の文様(図II-3、図VI-2-8)を持つ、あるいは平口縁だが類する菱形基調の口縁部文様を持つ一群がある。円筒下層d1式の口縁部文様の初現を思わせる。664などまさにその例である。

「57R区M2-3」からまとまった出土があった。ただし良好な接合結果は得られず、破片試料が主体である。200の様に菱形文様は持たないが、器形が典型的なものが復元できた。この57R区M2-3下位の層位M4-3から円筒下層b2～c式のまとまりが出土している。このうち347・348・350は鋸歯状文から「波頂部に対応する菱形基調の文様」成立過程を示す土器といえる。胴部上半のみの関連資料348は縄線による鋸歯状の構成で、沈線や縄線による菱形文様の確立直前と思われる、円形刺突を伴うことから、この円筒下層c式の前段階、円筒下層b2～c式とした。「57R区M4-1」232は中央に同心円を持つもので独特である。菱形文様から派生したものと判断し、円筒下層c式とした。232と348は時期差をつけたが、円形刺突列を持ち、地紋も類似し、口縁部文様も縄線による構成であることから近い時期のものとする。隣接する「58-Q～R区M4-3」からも類似(312・313・314)の出土がある。

**円筒下層c式「H35床面」「H39床面付近」**(図VI-2-7) 竪穴住居埋没過程の廃棄層および床面で、円筒下層c式の一括土器の組み合わせが確認できた。今回の調査で出土した、円筒下層c式の典型的な一括土器として「H35床面-1・2」「H39床面付近-56・63・64・65」がある。口縁部文様帯を区画する隆帯、刺突列、多軸絡条体回転地文および単軸絡条体回転地文が無くなる傾向にある。反り地文が目立つ。沈線、縄線によって口縁部文様帯を区画する。また口縁部文様帯区画部と口唇部の中央に強い屈曲部を持つ外反器形で胴部中央より上位に最大径を持つ、器形が普遍的となる。65は羽状縄文地文の口縁部文様帯に縦区画が入り、口唇にも縄線で縁取る。絡条体回転地文である56・63・64と異なってNo.38とNo.42および他数か所からの遺物が接合した点で、破片がほぼ一か所からまとまって出土したほかの三個体と出土状況が異なる。文様要素的にも古く、一段階古い可能性がある。

#### 円筒下層c式の変遷

**円筒下層c式 やや古段階「H56覆土上位」**(図VI-2-7) H35、H39の一括土器と時的に近しいものに「H56覆土上位-1・2・3・4・6」がある。4・6は刺突列ないしは押し引き、6は多軸絡条体地紋を持つことから古い様相を残す土器群である。このまとまりの直下から「H56覆土下位-5」が出土している。口縁部文様帯の区画に隆帯が用いられ、さらに縄線の押圧が施される。地文は単軸絡条体縦回転で、筒状の胴部を持つ。層位的にも、円筒下層c式より一段階古いものとする。器形が細長く、単軸絡条体地紋であることから円筒下層b2式新段階とした。盛土出土遺物では、376(新旧を決める要素が無く円筒下層b2式とした)274(縦区画があるため円筒下層b2～c式とした)317(円筒下層b2式新段階)を類似として挙げる。

**円筒下層c式古段階**(円筒下層b2～c式並行)「H26覆土2層」(図VI-2-7) 円筒下層c式土器の要素を持つ一括土器が「H26覆土2層-1～6」である。口縁部文様帯を隆帯で区画する2・3がある。3は上から指頭大の連続刺突を持ち、2は隆帯の直上直下に沈線文を施す。口縁部文様帯に、4は結節回転文、1は複数の縄線を鋸歯状風に互い違いに配する。3は縄線で鋸歯状文の一部を施す。3・4は単軸絡条体回転地文を持つ。器形的には円筒下層c式器形の確立段階にあるといえる。1・2に対し3・4・5はゆるく胴部中央から外反する筒形である。3・4が古い要素を持つのに対して、水平方向に走る複数の縄線を口縁部に押圧する5は新しい要素を持つが、むしろ一段階古い円筒下層b2～c式の要素である。全体を包括的にみると円筒下層c式の要素が色濃いが、時間軸的には円筒下層b2～c式段階と考える。円筒下層c式の文様要素の出現期を示す古段階のものとする。以上「直前段階反り地文が目立つ。多軸絡条体回転地文の減少。単軸絡条体第5類回転地文の消滅。T型・I型消滅。」を円筒下層c式の特徴として挙げる。

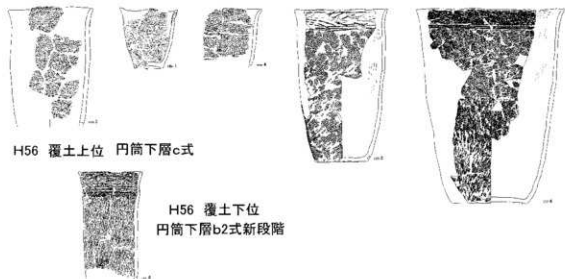
#### 円筒下層b2～c式

「H26覆土-1～6」を円筒下層c式古段階として、これと同時期と思われる円筒下層b2～c式に



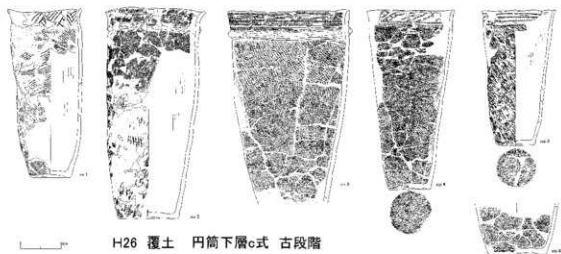
H39 床面に近い 円筒下層c式

H35 床面 円筒下層c式



H56 覆土上位 円筒下層c式

H56 覆土下位  
円筒下層b2式新段階



H26 覆土 円筒下層c式 古段階

図VI-2-7 土器7 円筒下層c式



図VI-2-8 土器 8 円筒下層b2新段階・b2~c式・c式

ついて検討する。一括資料として「H46覆土上位-1・2」「60R区M4-3 10月5日取り上げ」「H36覆土-1・2・5」(図VI-2-8)を挙げる。「H46覆土上位-1・2」について、連続刺突のある隆帯を持ち、口縁部文様帯に横走する条痕を持つ1は円筒下層b1式を思わせる文様構成であるが、器形が円筒下層c式のように細長い筒状である。H26-5・H46-2については口縁部文様帯が複数の縄線圧痕で構成されるタイプである。これは円筒下層b2～c式の組成中に多いものであるが、円筒下層b2式新段階から円筒下層c式にかけての深鉢の文様組成中に入ってくるものである。H26-5は直前段反転り回転地文、H46-2は絡条体回転地文である。後者は古い要素を持つ。ただしH46の遺物番号14と62が接合した結果二個体の土器H46-1と2として復元できたものである。文様要素の新旧はあっても出土状況から同時期、円筒下層b2～c式のまとまりと考える。

「60R区M4-3 10月5日取り上げ」において、この口縁部文様帯を複数の縄線で構成する深鉢がまとまって出土している。これを円筒下層b2～c式の一括土器として捉える。二単位の突起波頂部を持つ266、口縁部文様帯区画が隆帯で直上に円形刺突が並ぶ267、よく外反する口縁部を持ち口唇部に指頭圧痕が連続する264と形状が多岐にわたる。また縄線を施す口縁部文様帯部分の地文も胴部地文と異なる267、無文の212・223・263・264・266がある。胴部地文そのものも単軸絡条体回転の212・263・264・267、直前段反転り縄文回転の223、LR縄文横回転の266と多様である。円筒下層b2～c式の別系統の器種・文様組成の一群として「H36覆土1・2・5」をあげる事ができる。これら三個体について、同一原体による制作の可能性が。1と2は小型深鉢で六単位の波頂部を有する。3はH36出土土器と「58R区M4-6 10月16日取り上げ(この前後で円筒下層b2～c式が多く出土している)」の二か所から出土した大型破片どうしを接合した。接点は無かったが残存率が良く、器形を推定できた。隆帯を貼付しヘラによる刺突が連続する。口縁部文様帯には1・2の要素を併せ持つ。「円筒下層b2～c式」初現の検討。その要素。第VI章1項に述べたが、円筒下層b2式以前の時期は、堅穴住居廃絶後の望みに、地点貝塚的な廃棄がみられなかったため、盛土の基底部焼土層にまとまっていた土器の変遷から型式を解釈するほかなかった。そのため円筒下層b2式と考えた個体のうち、特徴的な文様要素や出土状況、を抽出して考察する必要があった。「口縁部文様帯の縦区画文様と対向する羽状縄文」「多軸絡条体回転地文」「意図的に打ち欠いた可能性がある大型の破片」「鋸歯状文」そして「M5点取り土器群」について検討し、円筒下層b2～c式と円筒下層b2式の境界を型式学的に検討した。以下(1)～(6)まで六項目設けた。

(1)「口縁部文様帯の縦区画文様と対向する羽状縄文」(図VI-2-9):円筒下層b2～c式を考察する上で縦区画文様が入る個体について検討する必要がある。縦区画の出現の要因のうちもっとも初現と思われるのは、結束第一種羽状縄文を対向させて菱形文様を作る文様と思われる。口縁部文様帯に結束第一種羽状縄文を横回転させ、「<」文を構成した段階で、原体上下反転して回転し「>」文を作り、対向させて「<>」菱形を形成する。この文様によっておのずと中央に正中線が発生、縦区画が現れる。

対向する羽状縄文の例をみる。型式名は総合的な判断で最終的に決めたものである。円筒下層b1式としたのは242・259・289・292・336・366・368である。289と336は胴部地文に結束第一種羽状縄文対向文を持つものである。259と366は器壁が厚く胴部中央に帯を持つ文様構成は円筒下層b1式である。帯部分に対向する結束第一種羽状縄文を対向させる。円筒下層b2式としたのは341・360・361・440・506・613、円筒下層b2～c式としたのは582、円筒下層c式としたのは233・399・404・407である。404・407は口縁部から底部際まで帯状に対向文様が連続する。399になると正中線が波頂部の中心にきて、連続刺突が対応している。399の様な発想が菱形文様と縦区画の組み合わせとなった可能性が

ある。類例として472・483がある。472から421、破片試料470・471のような文様が派生した可能性がある。また、472に水平方向の円形刺突連続と羽状の組み合わせを持つが、区画内に水平方向に連続する刺突列と42・295・296・419・484との時期的な関連性が考えられる。613は円筒下層b2式で、羽状縄文の上に鋸歯状文を施すが厳密な対応はしていない。

374は二本一組の縄線で縦区画を有するが、圧痕を観察すると、結束第一種羽状縄文の原体の可能性が高い。今回、対抗羽状縄文以外、縦区画が確立したものは円筒下層b2～c式にしがちであった。T型への加飾であり、縦区画以外の要素は新しいものではない。そこで円筒下層b2式の新段階とした。対向羽状縄文の原体は縦区画の縄線以外、器面のどこにも用いられていない。また網目状絡条体、単軸絡条体第5類横回転と縦区画との組み合わせる例651がある。単軸絡条体第1類と縦区画および鋸歯状的な文様との組み合わせ例として666がある。いずれも円筒下層b2～c式としたが、666はM5-2点取り遺物と器形および口縁部文様帯に幅が広い等の文様構成に類似点が多く、その胎土は繊維が目立ち、円筒下層b2式の古いものに類する。一段階古い円筒下層b2式新段階の可能性があったが、口縁部文様帯の縦区画を優先した。

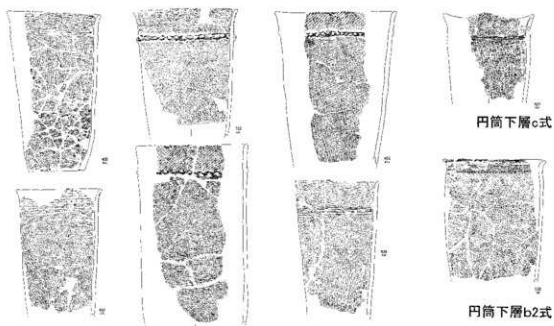
(2)「縦区画と鋸歯状文の変化(図VI-2-8・10)」また別系統のものとして、鋸歯状文と縦区画の融合あるいは派生という可能性も挙げられる。鋸歯状と縦区画の関連例として348・350(図VI-2-8)がある。菱形と鋸歯状文の融合形347と三個体とも同一調査区からの出土である。666と677・722・680・696といった鋸歯状文と連弧文と縦区画が融合した文様帯も存在する(図VI-2-10)。他は縦区画が確立していることから「円筒下層b2～c式」とした。単軸絡条体第5類回転文を持つ48R区666・51R区651、そして、口縁部文様に複数の縄線による鋸歯状風の文様を構成する器規格が相似の土器49R～50-R区M5-2出土の677・696は縦区画が確立していることから、円筒下層b2～c式段階とした。680は発達した隆帯と縦区画が確立していない。また680は722とよく似た個体で、単軸絡条体地紋に口縁部文様帯が発達していることから、「円筒下層b2式新段階」とした。

(3)「多軸絡条体回転地文」円筒下層b2式新段階では多軸絡条体回転地文が目立つ。623のように口縁部文様帯に横回転させるもの、545のように上から下まで縦回転地文のものは少数で多くは縦回転308・323・231、あるいはやや斜めの縦回転地文323・581・500・432である。円筒下層b1式新段階に特徴的な胴部中央からよく外反する深鉢323・667・689、筒状のもの500・545・681にみられる。

(4)「意図的に打ち欠いた可能性がある大型の破片」722(M6-2 44Y15)・700(M5-2 50R2)・405(M4-6 60Q28)・455(M4-6 59Q36)・267(M4-3 60R85)・538(M4-6 59R78)・452(M4-6 60R40)・536(M4-6 59R110)・537(M4-6 59R63):いずれも円筒下層b2式新段階(反振り地紋出現以降、斜行縄文地文段階の後・M5点取り段階の後)から、円筒下層b2式新段階、円筒下層b2～c式的大型破片である。722は口縁部文様帯において、連弧文が対向しており、別系統のものである。538はサルボウ貝殻条痕が口縁部に施される。537は反振り縦走地文とゆるやかな四単位の波頂部から円筒下層c式段階のものとした。455・700・538は多軸絡条体地紋である。加えて、廃絶堅穴住居の窪みから出土した、H29-14・25・28・38・40・H36-5・H38-8・10・11・14・15が顕著なものである。H38-16・17・18はH38-15を素材として作出されている。247にも可能性がある。これは他よりも一段階古いものである。H36と「58R区M4-6 10月16日取り上げ(この前後で円筒下層b2～c式が多く出土している)」の二か所に分断されて廃棄されていた大型破片どうしH36-5や、類する出土状況を持つH29-25のように残り半分が遺跡内のどこかにある可能性を持つ。調査範囲内では見つける事ができなかった。

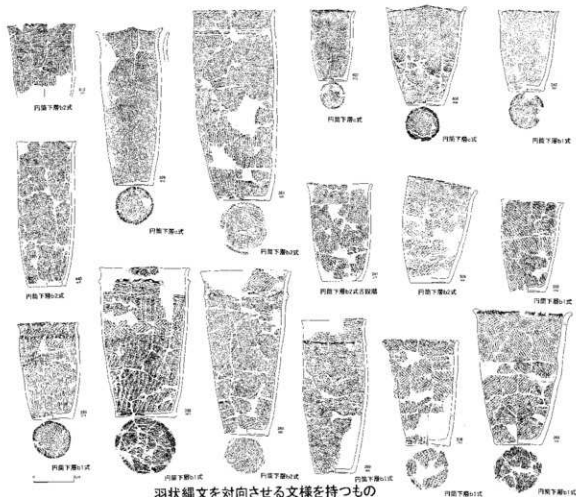
(5)「鋸歯状文」菱形文の検討の際たびたび出てきた鋸歯状文についてである。口縁部文様帯に、い





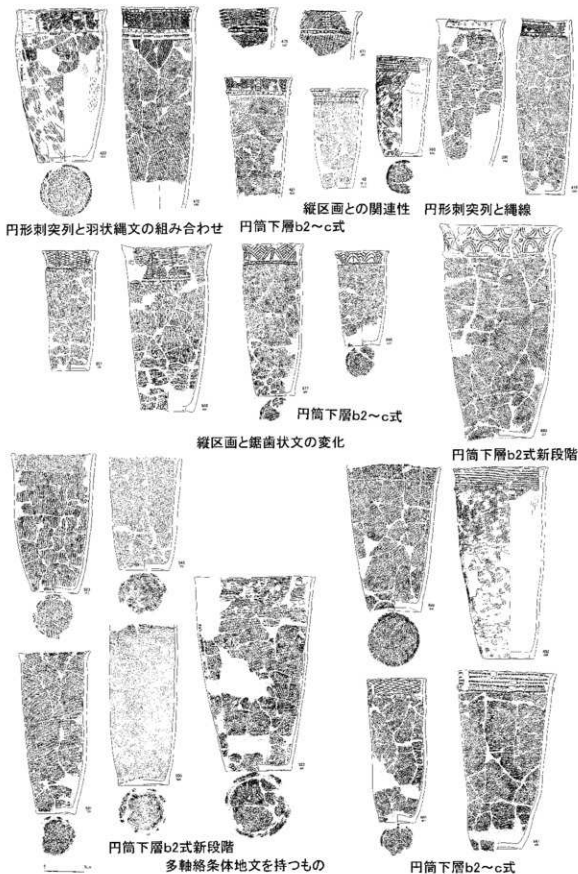
円筒下層b2式新段階

意図的に打ち欠いた可能性がある大型の破片

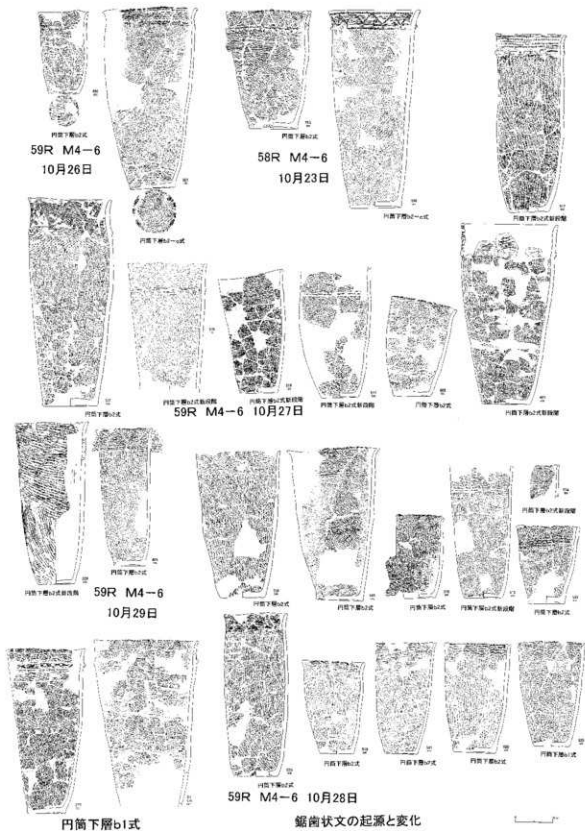


羽状縄文を対向させる文様を持つもの

図M-2-9 土器9 円筒下層式 意図的な打ち欠き 羽状縄文対向による菱形



図VI-2-10 土器10 円筒下層b2新段階・b2~c 円形刺突列 口縁部縦区画 多軸絡条体地紋



図M-2-11 土器11 円筒下層式 鋸歯状文の起源と変化

わゆる鋸歯状を、沈線あるいは縄線、絡条体側面圧痕で描く土器群は何時の段階に出現するのかその消長について検討する。盛土基底部焼土層M4-6に絞って、59R区の復元個体について取り上げ日ごとに集成、検証を試みたが、他の文様要素から判断、対比したところ同日取り上げの一群でも、円筒下層b2式古段階から円筒下層b2～c式にかけてのものが混在して出土していた。また、他の文様要素との組み合わせせして対比から、鋸歯状文を有する土器が円筒下層b2式の範疇で、新旧の目安とはならなかった。Rラインは斜度がつく遺物が下方へ動くことに加え、M4-6は一枚の土層にみえたが、複数回の成りで成り立つことがわかった。

「59R区M4-6 10月26・27・28・29日取り上げ」段階を取り上げ日ごとに並べてみると26日に縦区画を持つ円筒下層b2～c式とした501と円筒下層b2式の範疇とした496が同時に出土している。496は鋸歯状文の発展した菱形文を有する。新しい要素といえるのかもしれない。隣接する調査区「58R区M4-6 10月23日取り上げ」においても、円筒下層b2～c式期の鋸歯状文596と円筒下層b2式の範疇とした598が共存した。

「10月27日取り上げ」には円筒下層b2式新段階の土器群と共に、鋸歯状文を持つ531が出土する。531は「厚い器壁と口縁部文様帯直下に文様帯を持つ」など古い要素と同時に、「沈線による区画を持つ」など新しい要素も併せ持つ土器が共存している。口縁部文様帯を沈線で区画する511に加えて、516や土製品的な大型破片536といった円形刺突列を有する個体も共存している。「10月28日取り上げ」には円筒下層b2式に526・532・533といった鋸歯状文の土器が共存している。結節回転文を口縁部文様帯に持つ520・528・特に528は胴部に帯を持つ。528は縦走する縄文地文等古い要素を多く持つことから円筒下層b1式に分類したが、円筒下層b2式古段階の範疇という可能性もある。口縁部文様帯を沈線で区画する、514・515は27日出土のものと同個体である。518は「I型」、522は爪による連続刺突を持つ。円筒下層b2式でも古い要素が混在してきている。522は胎土・器形等むしろ下層b1式を思わせる。「10月29日取り上げ」は鋸歯状文の土器のみが復元できた。器上半と下半で地文を変化させる529。沈線間に円形刺突の連続を持つ（新しい要素）が口縁部文様帯は結節回転文（古い要素）の524がある。524は胴部下半で地文が変化する。鋸歯状文はないが10月27日取り上げ516が成形等に類似点がある。

鋸歯状文を持つより古い個体として盛土出土の61・377がある。円筒下層b1式としたが、沈線による縁取りや絡条体地紋など新しい要素を持つものである。山内清男の青森県八戸市是川一王子貝塚出土円筒下層a式土器写真（1996「画龍点睛」）にはすでにみられることなどから、大木式の影響を受けやすい地域にある他遺跡ではより古い段階がある可能性もあるが、今回は当調査区内に話を収めるものとする。鋸歯状文は円筒下層b1式の新しい時期に発生、円筒下層b2～c式にかけて存続した。

**(6)「M5-2盛土点取りの一群「点取り」と「点取り以外のまとまり」から新旧関係を探る」**「円筒下層b2～c式」直前とも言える「円筒下層b2式新段階」土器群として「盛土点取りM5-2出土の一群」653・654・655・656・658・660（以上47S区出土）、657・661（同48S区）・659・662・665（同48R区）である。665のように新しい要素のものもあるがほぼ同時期と考えられる。「筒下層b2式新段階」位置付けたい。これらは堅穴住居H45、H67の埋没過程において、覆土中に入り込んだM5-2出土土器群であり、「H67床面出土（H67-1）」円筒下層b2式土器よりは新しい。661のようにM5盛土から目立って出土した、上面観が顕著な楕円形の土器はこの時期に目立って出土する。土器焼成前段階で生乾きの時に口縁部を左右から押しつぶしたような形状の土器である。円筒下層c式あるいは下層d1式のように器壁が薄い土器にもまれに見受けられるが特に顕著なものである。684が典型的な例である。

**円筒下層b2新段階の確立** (1)～(6)を踏まえて M5出土遺物「円筒下層b2式新段階」との対比から、



図Ⅵ-2-12 土器12 円筒下層b2式新段階

「円筒下層b2～c式」を定義する。円形刺突が水平方向に連続するもの。縦区画があるものが挙げられる。古い要素の残存として「減少傾向」にあるものとして、単軸絡条体第5類回転、多軸絡条体回転、口縁部文様帯を肩部で区画する。等があり、新しい要素として円筒下層c式期に特徴的な正面縦線対称の深鉢が確立する点などがある。先述の「60R区M4-3 10月5日取り上げ(図VI-2-8)」に加えて、「図VI-2-10 円形刺突と羽状縄文の組み合わせ・縦区画との関連性 円形刺突と縄線」に集めた一群の土器がひとつの典型と考える。

**「円筒下層b2～c式」の定義** 以上から「円筒下層b2～c式」を定義するならば「縄線あるいは絡条体側面圧痕を多段に押圧する口縁部の出現。円形刺突連続の多用。T型・I型消滅傾向。」を挙げる事ができる。そして「対向羽状縄文以外の縦区画が確立、鋸歯状文から縦区画分離」とでもいうべきか。M5-2点取り段階の外反器形などの要素をもっと具体化できればより境界線が明瞭になると考える。

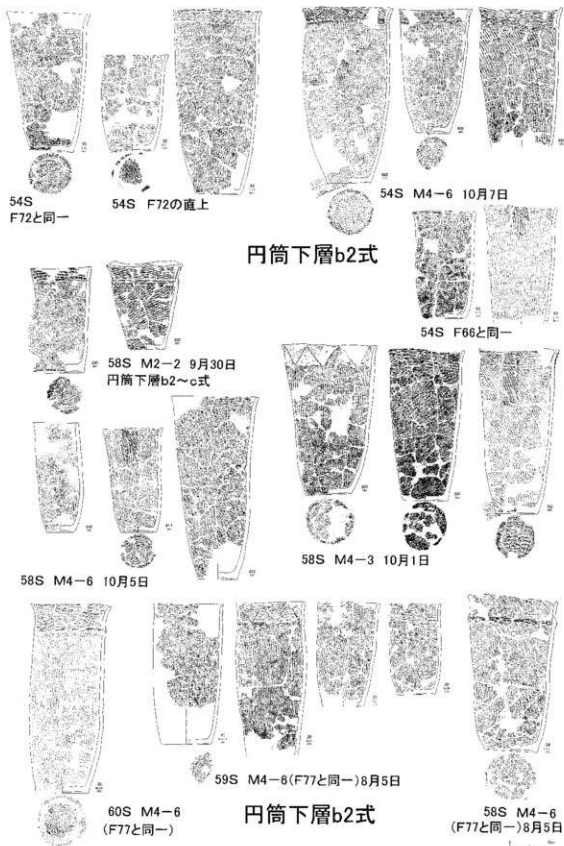
追加項目として、土器観察表(表Ⅲ-4・表Ⅳ-1)の内面調整の欄に「口縁上半形態外反の場合○」という項目がある。これは口唇部に近い、口縁部内面上端の狭い範囲のみ横方向にミガキ、その下は縦ミガキである。これは円筒下層b1式でも新しい要素を持つものには施される。そして円筒下層b2～c式で際立つ、一番目立つようになり、円筒下層d1式ではほとんど見られなくなる。円筒下層b1式では728のように口唇部内面を外側に向けて若干反らせる調整が丁寧なものにみられる。円筒下層b2～c式や下層c式では口唇部内面を外側に向けて若干反らせる調整が多い事が結果につながったと考える。

**「円筒下層b2～c式」「円筒下層b2式新段階」の分類の実際** 「51R区出土遺物」隆帯上に円形連続刺突を持ち、口縁部文様帯に絡条体側面圧痕や縄線を水平方向に並べる51R区M5-2出土701・48R区M5-2出土667は円筒下層b2～c式に分類した。「58R区M4-6 10月19日取り上げ(図Ⅳ-1-178～180)」の一群は572は縦区画と円形刺突の連続、574は縦区画と水平方向の縄線の連続、582は隆帯の直傾直下の縄線および隆帯上の押し引く刺突列、整った口唇部など新しい要素としたものを持つ個体とそれらを持たない573・575・57が混在して出土した。前者を円筒下層b2～c式、後者を円筒下層b2式新段階とした。582は口縁部文様帯の構成や、口唇部の調整から円筒下層c式にすべきか迷った。多軸絡条体地紋の円筒下層c式もあるためである。「58S区M2-2 9月30日取り上げ(図VI-2-13)」は隆帯上に円形刺突の連続を持つ。329と330口縁部文様帯に複数の縄線を施したものである。329の口縁部文様帯には単軸絡条体第5類を横回転する。330の地文は単軸絡条体第6A類を縦に近い斜め回転で施している。これらは円筒下層b2～c式とした。その流れで、58S区の遺物の上下関係で出土遺物のまとまりをとらえたところ、「58S区M4-3 10月1日取り上げ」、「58S区M4-6 10月5日取り上げ」がある。これらは円筒下層b2式のとまりである。層位的に331～333は下位のM4-6より新しい事になる。後者はT型・I型から構成される。34は同調査区のSライントレンチから出土したものだが、円筒下層b1式の要素をよく残すものである。

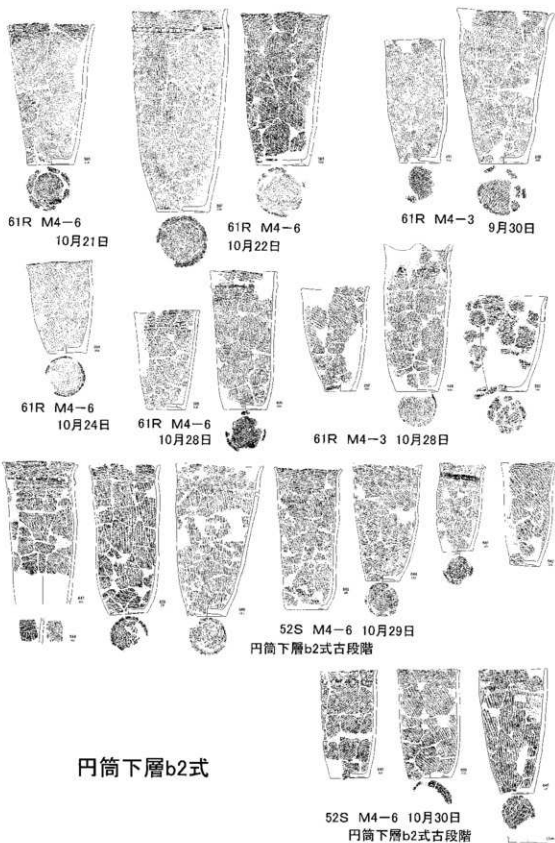
#### 円筒下層b2式 新旧の要素を持たないもの「中盤」とでもいうべき一群(図VI-2-12・13)

「円筒下層b2式」円筒下層b2式として分類した土器は、文様要素等から、古段階でも新段階でもないものである。要素が少なく決められない、あるいは実際に古段階と新段階の間のものである。円筒下層b2式の「新段階」と「古段階」の要素を述べることにより、円筒下層b2式の変遷を検討する。

「F72出土土器とその類例(図VI-2-13)」:「54S区M4-6 10月7日取り上げ」においてF72出土土器とよく似た土器が出土している。628・630である。単軸絡条体縦回転地文で、絡条体側面圧痕で口縁部文様帯を区画、施文する。頸部とよく窄まる胴部を持つ。「54S区トレンチ出土 F72直上」出土遺物について、沈線による口縁部文様区画、文様構成の深鉢54が出土した。同一面で50も出土し



図VI-2-13 土器13 円筒下層b2式



図VI-2-14 土器14 円筒下層b2式とその古段階



た。同じ54S区において検出された焼土F66と同一検出面において52は沈線あるいは絡糸体側面圧痕による加飾はないがよく似た文様構成の深鉢である。53もF66と同一検出面である。また55はF72と同一検出面であり、F77直上出土遺物と時期的な差は大きくないものと考えられる。隣接する調査区53S区M4-6の633においても類似が出土している。50・52・53・54・55・628・630・633は円筒下層b2式の中盤の様相を示すと考える。

「F77出土土器(図VI-2-13)」: F77と同一面でも検出された土器群について検討してみる。これはSライトレンジ内で検出された土器で、F77は便宜上つけた名称であり、トレンチ内で検出したM4-6の事である。M4盛土基底部焼土層からの出土である。33は60S区出土であり、F74より下位でもある。円筒下層b1式を思わせる口縁部の結節回転文、隆帯上に押し引き刺突が連続する。器形は次段階特有の筒型に近い深鉢で地文も単軸絡糸体縦回転である。37・38・39・40は59S区出土土器である。34は58S区出土土器である。口縁部文様帯を区画する隆帯と器形に、円筒下層b1式の影響がある。これらは多様性を持つが円筒下層b2式古段階までいかない円筒下層b2式中盤の一様相と考える。

「60Q区出土土器(図VII-2-12)」: 「60Q区M4-6 10月26日取り上げ」「60Q区M4-6 10月24日取り上げ」は口縁部文様帯区画について、前者は隆帯が無く、後者は隆帯がある。後者が日時的には先行するが、刺突が円形刺突的で、隆帯直上直下を沈線で縁取る。

**円筒下層b2式 古段階(図VI-2-14) 52S区出土土器**「52S区M4-6 10月29日取り上げ」「52S区M4-6 10月30日取り上げ」も60Q区M4-6と同様隆帯を持つものと持たないものが混在する。持たないものはT型である。647は横方向に二個一組の刺突が並ぶ。648は口縁部文様帯区画に貝殻縁圧痕が連続する。内面も貝殻条痕による調整である。640・641・647は器形と隆帯の位置関係が円筒下層b1式的である。638は胴部中央に粘土輪積み由来のくびれがある。円筒下層b1式では帯をつけて補強しがちな部分である。これらを持って、円筒下層b2式古段階としたい。

**円筒下層b2式土器の変遷** T型とした単軸絡糸体口縁部横回転胴部縦回転、I型とした単軸絡糸体口縁部から底部際まで縦回転の深鉢が円筒下層b2式の古段階から新段階に至るまで普遍的に存在する(図II-3)。口縁部文様帯と胴部地文を区画する文様を持たない。58S区M4-3の332のように肩部を持つものについてはT型の範疇に収めた。58S区M4-6において、613はT型、610・611・614は典型的なI型である。52S区M4-6の639・642・643・644・646はT型である。

以上、円筒下層b2式を概観する形となったが隆帯を持たないものはT型を基調として小型のものにはI型が混じる。隆帯を持つものについては刺突を伴うもの伴わないもの両者があるが、指頭圧痕が施文される率が下がり、新しい段階のものには円形刺突、あるいは直上直下に沈線による縁取りが残る。

円筒下層b2式について、下層b2式～c式直前の「新段階」と円筒下層b1式直後の「古段階」について様相を検討してきた。中盤というべき段階は多様性があり、「F77段階」や「F72段階」、と文様要素に新旧の特徴のないものが分類の文言上混在する結果となってしまった。後述する円筒下層b1式と円筒下層b2式古段階の連続性が高いことにも原因がある。

「円筒下層b2式 新段階」 多軸絡糸体地紋の多用。縦区画の初現。単軸絡糸体第6類あるいは6類風の第4類が出現。サルボウ条痕横走の出現。T型・I型がまだある。M5-2盛土点取りの一群。

「円筒下層b2式 中盤 中段階」 F72やF77に関連するとして示したもの。

「円筒下層b2式 古段階」 単軸絡糸体第5類がよく用いられる。T型・I型出現。鋸歯状文がよく用いられるようになる(60S区58R区59R区M4-6 出土遺物等)。館野6遺跡高規格道路本線部分(2013)で報告された、遺物集中4がこれに該当すると考える。394などは定義次第では円筒下層a式に分類できなくもないが、出土状況から円筒下層b2式古段階とした。

### 〔円筒下層b1式〕(図VI-2-15~17)

円筒下層b1式として盛土遺構各調査区においてまとまりを複数設定できた。S-Uラインの比較的平坦面、斜面際よりやや平坦面側に分布していた。そのため斜面Q・Rラインに分布するため同一調査区でもまとまりを認知しにくい、円筒下層b2式や円筒下層c式ほど、比較検討に悩まなかった。

〔60R区M4-6 10月26日27日取り上げ(図VI-2-16)〕444・436・449は円筒下層b1式とした。447は隆帯に二個一組の刺突が巡り、単軸絡条体第5類が口縁部に横回転、胴部地文に縦回転する。441、429は口縁部区画に隆帯を持たないものであり、442は粗雑であるが多軸絡条体地紋である。447と共に新しい要素の混在が組成の中の一要素か不明である。

〔60S区M4-3 9月22日取り上げ(図VI-2-16)〕272・273のような口縁部区画に隆帯を持たないものが文様組成の中でひとつの要素と考える。277のような器形は一定量見受けられる。272は口縁部と胴部帯に結節が巡る。これが後々T型になる可能性が高い。よく似た傾向は「51S区M4-5 10月19日取り上げ(図VI-2-16)」にもみられる。

〔60S区M4-3 9月23日取り上げ〕〔60S区M4-3 9月25日取り上げ〕(図VI-2-16)も加えて60S M4-3に円筒下層b1式の様相が見受けられる。

〔59T区M4-6 10月14日取り上げ(図VI-2-15)〕は557のような円筒下層b1式段階に加えて、559のように繩端による円形刺突風連続刺突を持ち、単軸絡条体地紋の新しい要素のものが混在する。また556は合惣地文、558は口縁部と胴部の帯に結節回転を持つ等古い要素がある。

〔58T区M4-6 10月6日取り上げ(図VI-2-15)〕は円筒下層b1式のまとまりと判断したが、614のようなI型が混在したり、615が口縁部文様帯と胴部地文が共通する縄文縦走で、口縁部文様帯直下の帯や胴部中央の帯が無かったり、円筒下層b2式段階の要素が多い一群である。

〔62R区M4-3 10月22日・27日・28日・29日取り上げ(図VI-2-17)〕についても、円筒下層b2式段階の要素が多い一群である。240・241口縁部文様帯と胴部地文が共通している。作りの似た247・248は胴部に帯、口縁部区画直下に文様帯を持つなど古い要素を持つ一方、器壁が薄く、単軸絡条体縦回転地紋である点が新しい。246も文様要素的には古い、文様帯を沈線で区画したり、地文が単軸絡条体であったり新しい要素を含む。

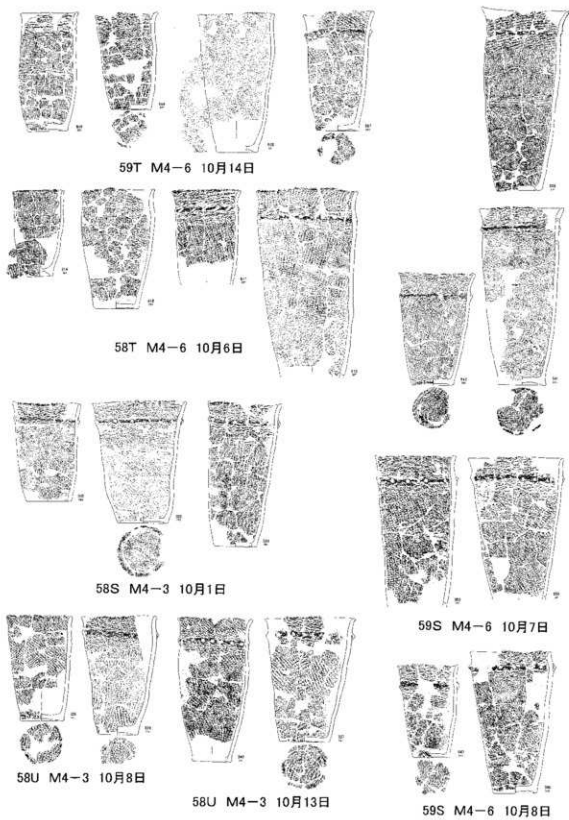
〔56T区M4-5 10月7日・8日取り上げ(図VI-2-17)〕は文様要素的に古い、器形について口縁部に最大径があり下窄まりな筒型という点が次の円筒下層b2式段階の組成に占める器形に似る。また555は胴部に帯、口縁部区画直下に文様帯を持つなど古い要素を持つ一方、帯が貝殻条痕の横走であったり、口縁部文様帯および直下の文様帯が単軸絡条体であったり、器壁が厚く混和剤に砂粒が多いなど、他の円筒下層b1式に比べて変わっている。

〔55U区M4-5下 Bトレンチ出土7月28日・29日取り上げおよび56U区M4-5(図VI-2-17)〕についても555・246のような、文様要素は古い、最大径が口縁部にありそのまま他個体に比べて直線的に底部にむけて窄まり、器壁が厚い土器が組成に混じる。

〔44Z M6-2 10月31日~11月4日取り上げ〕739はL R縄とR縄による付加条地文を持つ。胴部下半は単軸絡条体縦回転である。740・741の様に口縁部と胴部の地文が同じで器壁が比較的厚い。地文は反撚りで、新しい要素と言える。

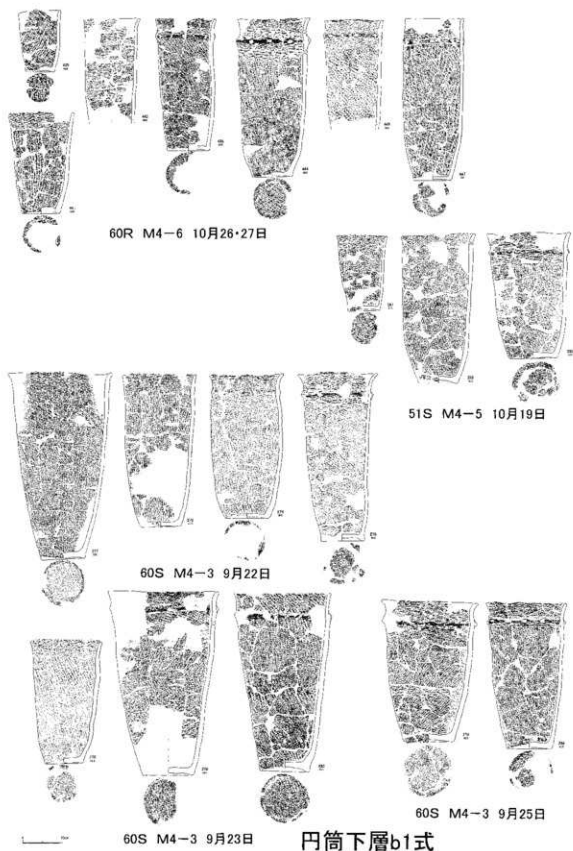
### 当調査範囲で典型的な円筒下層b1式とは

〔59S区M4-6 10月7日・8日取り上げ〕〔58S区M4-3 10月1日取り上げ〕〔58U区M4-3 10月8日・13日取り上げ〕を円筒下層b1式の典型的なものとして挙げる事ができる。〔58U区M4-3 10月13日取り上げ328〕は結束第一種羽状縄文地文である。59S区において548と552が破片上混在して出



円筒下層b1式

図VI-2-15 土器15 円筒下層b1式



図VI-2-16 土器16 円筒下層b1式



図VI-2-17 土器17 円筒下層b1式

土している。548を円筒下層b2式古段階、552を新しい要素を持つ円筒下層b1式としたが、現実的に分けきれない実態がある。例えば円筒下層b1式で新しい要素を持った土器を含む一群「59T区M4-6 10月14日」「58T区M4-6 10月6日」「60R区M4-6 10月26日・27日」と円筒下層b2式古段階とした「52S区M4-6 10月29日・30日」段階では円筒下層b1式的な隆帯を持たない土器で新しい要素を持つ土器の量比で新旧をわけたとも言える。

**円筒下層 a 式** 394・740・741等、可能性のあるものもあるが、断言できるものはない。ただし、今回、円筒下層b1式とした範疇に、穀川式が一部含まれているとも解釈しうる。

**放射性年代を測定した土器**：土器をとりあげた際混在していた炭化物を測定した。安全な共伴とは言いが試みた。HT6-1・P54-1は円筒下層b2式土器である4850年ほど前である。潰れた土器中の木炭を測定した。胎土は粗く、円筒下層b2式でも古い可能性があるが、文様要素的に言及できなかった。HT6-5～10は盛土遺構出土土器破片に混在する木炭を測定。その破片から復元できた個体を抽出した。HT6-6と7は該当する復元土器がなかった。同日同層位取り上げのものを選んだ。HT6-5・252は円筒下層b2式古段階。4950年ほど前である。HT6-1の結果より古い。HT6-6は4810年ほど前である。HT6-1の結果より新しい。492は円筒下層b2式である。HT6-1と文様は似るが、焼成が良く、新しく見える。573は円筒下層b2式新段階である。159点中128点が該当した。HT6-7は円筒下層b1式。4980年ほど前である。HT6-1より型式も年代も古い。HT6-8・616は円筒下層b1式とした。4800年ほど前である。HT6-1より型式は古いが年代は新しい。616には隆帯が無く、新しい要素を持つ、そして属する円筒下層b1式「58T区M4-6 10月6日段階」そのものも新しい要素を持つ。厳密には円筒下層b2古段階とすべきか。HT6-9は4730年ほど前である。HT6-1より大分新しい。289は円筒下層b1式、72点中59点が該当。273は円筒下層b2式、63点中16点のみ該当。同番号でも遺物に時期幅がある。木炭は273に近い時期である。HT6-10は4840年前である。397は125点中2点のみ該当、主体ではない。円筒下層b2式で、HT6-1より年代は若干新しいが型式は新しい。検討を要する。一方、土器付着炭化物は付着した土器の型式より古い年代がた。

**再生土製品**：土器破片を打ち欠いて成形したと思われるものである。円筒下層b2式の項で述べた「大型のもの」、「擦り切ったタブレット状のもの（H38-15～18）」も含めると、定義は難しい。ここではおおそ円形に整えた直径5cm以下のものについて述べるものとする。60-R～T区に分布の中心があり、周辺調査区に連続する。層位的には下位も含めたM2-2に多く分布（63点）する。平面的な分布の中心もこれと重なる。M1についても分布範囲からM2-2が黒色化した可能性が高い。M2は分布の中心が61S区にあり、M2-2とおおよそ同様な傾向にある。次にM4-3からの出土が30点と二番目に多い。M4盛土基底部の焼土層M4-6についても平面的な分布傾向はやや似ており、60R区と58Q区付近に分布の中心がある。H18～H22、H25、H29、H35、H36、H38、H39、H43、H45、P54、F82から出土がある。H20から中茶路式の再生土製品が床面のやや上の土層から出土している。円筒下層d2式古段階のH19の床面および付属遺構、円筒下層d1式か直前の時期のH25の付属遺構、円筒下層c式の時期のH35の床面、円筒下層b2式の頃のH43の付属遺構から出土しているほかは覆土から遺物が出土している。

H18、H19、H25、H43、H45、F82、P54は分布の中心から離れる。H20～22、H29、H35、H36、H38、H39は分布の中心に近い。実際分類してみてもかなり成形されて整ったもの以外は判別が難しい側面もある。

**舟形をした土器**：比較的大型の119、ミニチュアとも言えるサイズの165・756がある。756は焼成が悪い。共通点として楕円を基準とすると、上面観の長軸がゆがんでいる事である。楕円の長軸を想定すると、それが直線ではなく、ゆるやかな「く」の字である。

**異質な土器・特徴的な土器**：円筒下層b1式から下層b2式の範囲で、胎土が他個体よりきめが細かく、砂を少量含む土器がある。いずれも盛土遺構出土土器である。焼成もより良いものと思われる。最初すべてが同時期のものと考えたが、共伴関係から、236・531のように円筒下層b2式、57・246・366・377・555のように円筒下層b1式のものに分けた。236については隆帯の形状等から古段階である。隆帯上刺突の形状が57と似る。377は鋸歯状文が入る。円筒下層b1式としたが、沈線の縁取りや単軸絡条体地紋から新しい要素を持つものである。

また胎土がきめ細かく造形が際立って丁寧だった土器に、M4-3出土254とP45-1がある。P45-1は覆土中の一破片に加えて、63R区M2-2の土器破片を中心として接合した。器壁が薄く、焼成が良好である。層位、文様要素等を考慮し、円筒下層d2式段階のものとした。

146・147・204・205は条痕による施文を施す。146・147はM2-2、204・205はM2-3からの出土である。146は直線構成、147・204・205は曲線構成で施文を施す。146のように口縁部文様帯を横走する条痕で施文する例は見つけられなかったが、条痕によって曲線を描く類例は、秋田県協和町上ノ山II遺跡遺構外出土土器、秋田県杉沢台遺跡SKF44出土遺物にみられる。時期と文様的に近隣の土器型式である、大木6式の影響が考えられる。(大泰司)

**土器計測の結果**：館野6遺跡の復元土器のうち口縁部から底部まで連続して復元出来た深鉢について、型式別に容量に関する数値を計算し比較した。口縁部の直径、底部の直径、器高を観察表に掲載した。ここから、円錐台の容量を求める公式  $|V = 1/3 \cdot \pi (r_1^2 + r_1 \cdot r_2 + r_2^2) h|$  を用いて、正確ではないが、簡易的に体積を求めて比較した。それは以下の様になる。

[簡略化して求めた体積(容量のイメージのため) =  $1/3 \times \pi (3.14)$  を使用)  $\times \{(\text{口縁の直径} \times 1/2)^2 + (\text{口縁の直径} \times 1/2) \times (\text{底面の直径} \times 1/2) + (\text{底面の直径} \times 1/2)^2\} \times \text{器高}$

まずは各型式ごとに器高の度数分布を調べた(図VI-2-18左)。すると円筒下層b1式以外、35cm以上と以下にそれぞれピークがあることがわかった。円筒下層c式、下層d2式、上層a式には20cm以下の器高にも若干のピークがうかがえた。

次に各型式ごとに容量の度数分布を調べた(図VI-2-18中央)。円筒下層b1式、下層b2式古段階は6ℓのものが多い。そして下層b1なら14ℓ、下層b2式古段階なら10ℓにもうひとつのピークが存在する。下層b2式新段階、下層b2～c式、下層c式は4ℓのものが多くなり、下層d1式ではやはり6ℓのものが多くなる。これが下層d2式になると4ℓの器に加えて12ℓ以上の器にも次のピークが出現する。上層a式だと18ℓ以上の器がある。小型の深鉢ばかりが出土したサイベ沢Ⅶ式については2ℓ以下の器がほとんどである。繰り返すがこの容量は略測であり、目安である。

次に容量を縦軸、器高を横軸にした散布図を示す(図VI-2-18右)。この散布図によると円筒下層b1式においても35cmよりやや大きい値、40cmまでいかない数値でピークがわかれることがわかる。他の散布図についても35cmでピークがわかれている。またそれぞれの容量のピーク6ℓないしは4ℓでの器高をみると35cm以上以下を問わず容量が同じものがそれぞれ並んでいる。各型式ごとに4～6ℓより大きい容量にピークがあるものはやはり器高も高いものが分布している。円筒下層c式は器高が高い深鉢は径が細くなるため容量が他型式ほど大きくならない。しかし突出して25ℓ以上の容

量を持つ器が存在する。この予兆は円筒下層b2～c式にみられるが、この時期は器高が大きい深鉢に径が太いものが多いため、25ℓの容量が際立っているもの下層c式ほどではない。この際だって大きな深鉢は円筒下層d1式段階で無くなるが、円筒下層d2式、円筒上層a式でまた現れる。ただしこの2型式については器高の高いものはほぼ比例して径も大きくなるため25ℓの器が際立って大きいということはない。サイベ沢Ⅶ式については当調査範囲においてはやはり小型のものが際立ってままとまっている。

次に器形についての分布図を作成した(図Ⅵ-2-19左)。縦軸は器高を口径で割った値。横軸は底径を口径で割った値である。これはドットが左下にいくほどバケツ型(口径が大きく、尻すぼみ)右上にいくほど細長い筒型となる。円筒下層b1式から円筒下層b2～c式にかけてドットの分布をみると、縦軸2、横軸0.6のところにおよそ中心がくる。これは円筒下層b1式でいうと器高29cmの掲載番号369、器高43.5cmの掲載番号49がこの値に近い。円筒下層b1式にはばらつきがある。これが円筒下層b2式ではほぼまとまり、下層b2～c式にかけて細い筒型(右上方向)とバケツ型(左下方向)に分化していく。これと比べると円筒下層b1式は、多方向にばらついているため深鉢の器がバリエーションに富んでいるといえる。

円筒下層b2～c式が右上・左下にばらつくその傾向は、円筒下層c式になると一層顕著になる。ただし容量が一定になるのは先述の通りである。

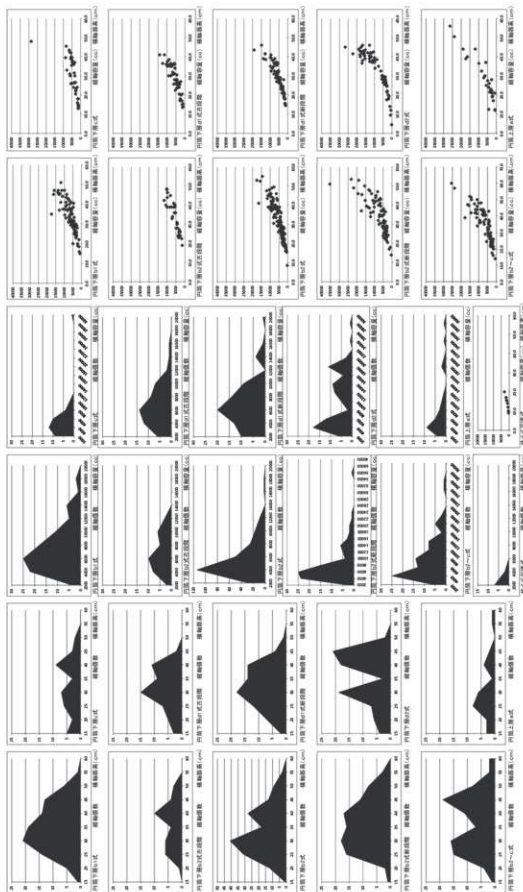
これが円筒下層d1式になると縦軸1.5、横軸0.55のところに中心が来てばらつきが少なくなる。H38-13がこの数値におおよそ該当する。この傾向は円筒下層d2式、円筒上層a式でも共通するが、この二型式ではドットのばらつきがおおよそ水平方向、ないしは右下方向に伸びる。これは、容量を縦軸、器高を横軸にした散布図で示された通り器高が高いものが径も太くなるためと考える。

以上、深鉢の型式別器形変化を追及してみた。気を付けなければならないのは、当調査において出土した縄文時代中期サイベ沢Ⅶ式が明らかに独特な出土状況、小型で特殊な器形がままとまって廃棄されているように、この変化は当調査区独自のものである。ただし円筒下層b1式から円筒上層a式にかけては器種を問わずままとまって廃棄された状況であるため、ある程度、縄文時代前期後半の型式別の器種組成を示している可能性が高い。

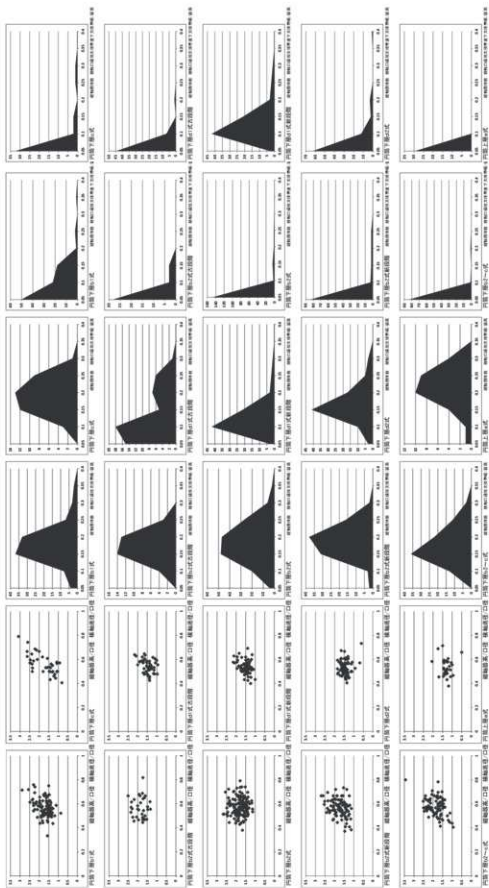
口縁部文様帯の幅の変化について度数分布図を示した(図Ⅵ-2-19中央)。器高に占める口縁部文様帯幅の割合で表現している。円筒下層b1式は15%をピークに20%も多い。これは円筒下層b2式についてもおよそその傾向がある。円筒下層b2式新段階についていうと20%をピークに15%から25%にかけて多い。数値上は幅広になったわけである。これが円筒下層b2～c式については15%の側にピークが戻り、c式についてまた20%がピークとなる。個体数に差があるため、この三型式に関しては、幅が広がったものとする。

ではここで、円筒下層b1式を例にとると、10%は279、15%は444、次に円筒下層b2式新段階を例にとると、20%は654・672、25%は212となる。ここで注意すべき点がある。具体例とした円筒下層b1式は器壁がまっすぐで、円筒下層b2式新段階は器壁が外反して傾いている事である。これは先述の器高/口径と底径/口径の分布図に立ち返るとたしかに円筒下層b2式新段階の方が下層b1式と比較してバケツ型にドットが傾いている。下層b2～c式、下層c式についても同じである。つまり口縁部文様帯幅と器高の割合で出した比率のため、底面から口唇の長さが同じであっても外反器形の方の器高が低くなるという点である。つまり文様帯幅が広い割合でやすい。ただし下層b2式新段階から下層c式にかけては細い筒型器形も増えるため包括的にみるとこの時期口縁部文様帯は幅広くなるものとする。これは出土深鉢全体を概観した際の印象とも合致する。





図V-2-18 土器18 土器計測結果グラフ1



図VI-2-19 土器19 土器計測結果グラフ2

これが円筒下層d1式になると10%前後に幅が狭くなるこれは幅広い円筒下層c式土器の口縁部文様帯の口唇側が口縁部文様帯となり、下側が多段化した帯となるためである。円筒下層d2式ではこの下層d1式の文様帯が15%程度に広がってくる。そして円筒上層a式で20%をピークに25%にかけて多い結果となる。そのまま幅広くなり続けたということである。

次に口縁部文様帯直下文様の幅と器高に対する割合の度数分布図を概観する(図VI-2-19右)。0.05の項目に「0」つまり直下文様無しが含まれる。概観すると口縁部文様帯直下文様は円筒下層b1式で出現し、円筒下層b2式古段階が古い文様要素として引き継ぎ、円筒下層b2式新段階に至る。円筒下層b2-c式・円筒下層c式にも若干残る。しかし円筒下層c式では多段の対向する結束羽状縄文なども含まれ、これは円筒下層d1式の多段の帯につながっていくいわば新しい系統のものと考えられる。この次に口縁部文様帯直下文様がピークを迎えるのは円筒下層d1式新段階である。これは円筒下層d1式に出現した先述の多段の帯に由来する結束部分の回転施文である。結束第二種羽状縄文あるいは結束部分を帯状に口縁部文様帯直下に施す。これは円筒下層d2式まで引き継がれるが、円筒上層a式ではなくなる。ただし当調査範囲には無いが、円筒上層a式成立の頃に口縁部文様帯直下に斜行縄文を帯状に施す場合がある。木古内町大平遺跡(2016)P-60の1函館市西桔梗1遺跡(1998)NH-6の1等である。(大泰司)

### 3 石器

今回出土した石器について、一括性の高いもの、遺跡の特徴を示していると考えられる器種を示す。またつまみ付きナイフ、石鎌、石槍又はナイフに分類したが、定義的にあいまいな点が発生した。とくに「つまみ」と呼ばれる装着部を持つ石器に多い。分類をまたいで共通項がある石器を示した。

**石鎌の一括資料**：P43から17点の石鎌がまとめて出土した(1~17)凸基有茎鎌(1)やそれに類した形状の五角形鎌(2)と柳葉形に近い尖基鎌(3~17)が共存する。北東北地方の慣例に従い、先細りに尖った方をすべて上にしたが、11~17のように作り出しが長いものについては基部の可能性もある。このような石鎌を集中して埋納した土坑については小笠原雅行(2010)に詳しい。類別として青森市石江遺跡DSK-4023・5079・5078・6088・6095・6106・6122・6123があり、6088・6123等形状の異なる石鎌が埋納されている場合もある。秋田県大館市池内遺跡SKS-208・386・387・394・408も類別であるが、208・386・394・408は土器を伴う。2014年に見学にいった青森県立郷土館には石江遺跡、秋田県立博物館には池内遺跡の上記の土坑に関連する展示があった。

**黒曜石製のつまみ付き石器**：全体の形状によって器種名を変えたが「つまみ」が特徴的である。つまみ付きナイフか石鎌か不明瞭なものがある。H39-5(覆土出土)、H60-2(覆土出土)、H62-4(覆土出土)には、明瞭な刃部の残存はなかったが、刺突部がないため、つまみ付きナイフとした。H41-3(覆土出土)はつまみ部分のみ作り出したRフレイクである。明瞭な刺突部を持ち、あるいは持っていたと思われる、おおよそ線対称な形状のものは石鎌、石槍またはナイフとした。小型の13・22・28・29は石鎌、やや大きめの105・106・109・120・121は石槍又はナイフとした。190~196・206・221・222・238~241は若干の刃部があったため、つまみ付きナイフとした。191以外は刺突部が無い。191は装着部の角度等、非線対称な形状なので石槍又はナイフとした。

**線対称で両面全面調整の刺突部分を持つもの**：相対的に厚さが薄く、振じれやそりが少ないものを石鏃46、あるいは石槍又はナイフ92とした。134・135・182は刺突部とつまみが明瞭であり、つまみ付きのドリルとした。136・143・145・154・156・171・179・181・185は比較的厚みがあったり振じれがあったり、刺突部が丸みを帯びたものであり、ドリルとした。136・145は石鏃の転用という可能性がある。

**反りのある比較的大型の刺突具**：比較的大型で、反りが著しい刺突具である。縁辺の表裏に調整がおよぶ68は線対称のため石槍又はナイフに分類した。他はドリルとして分類した。H37-5（床面出土）、178のように両面全面調整のもの。138・165・188は素材の形状をそのまま生かしている。188は船底型的だが、いずれも剥離は人為作用が加わる以前のもので、石核というより棒状素材を生かした結果のものである。

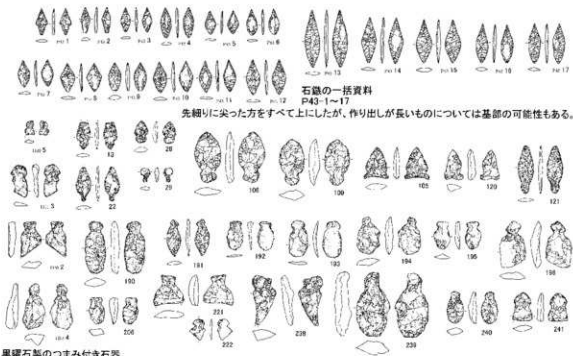
**頁岩以外の素材で作られた石槍型石器あるいはその未成品**：片岩石槍：板状剥離する素材を打ち欠いた石槍である。H31-4（床面出土）・H39-7（覆土出土）・H60-3（覆土出土）・H62-2（覆土出土）・74・78・93・94・95・97は石槍又はナイフに分類した。H62-2は先端を、680は全面を研磨によって整える。P56-2（覆土出土）・479は両面調整石器としたもので未成品の可能性がある。680はつまみを作りだし、石製品とした。先端は鋭くないが、黒曜石製のつまみ付き石器に類するものと考えられる。片岩石槍と形状・質感が類似するものとして、凝灰岩製の67・131、礫岩製の79、砂岩製の96・98、流紋岩製の132・133がある。

**線対称で両面全面調整の刺突具、装着部のくびれが比較的浅い**：石鏃、ないしは石槍又はナイフ、ドリルといった器種が想定できる。H38-3（覆土出土）・H43-1（床面出土）は刺突部を筒状に作り出し、厚みがあるものをドリルとした。刺突部が先端まで平たいものについて、比較的小型の23・44を石鏃。おおぶりの103・107を石槍又はナイフとした。

**49R区M5-2からまとまって出土した細長い刺突具**：エイの棘部をおもわせる119、際だって細長い118が目立つ。49R区M5-2から出土した。おおよそ類似した形状のもの、116・117・118・119がそれに該当する。117は先述の「線対称で両面全面調整の刺突具、装着部のくびれが比較的浅い」に類するとも言えるが、まとまりとして捉えた。周囲からは円筒下層b2式の新しい段階のものが復元されている。

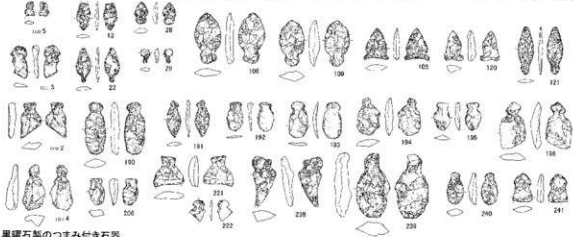
**明瞭な「つまみ」を持つ石槍又はナイフ**：線対称で、両面全面調整比較的厚みがない76・77・85・86・108・129・130をこれに当てはめた。円筒下層式の報告書においてありがちな分類であるため踏襲してみた。H29-5は（覆土上位出土）比較的厚みがあるためつまみ付きナイフとした。

**腹部中央側面に張り出し部を持つ刺突具**：いずれも近隣調査区同一層位からの出土である。まったく同時に出土する事例が二件あった。H18掘り上げ土出土1～3は縁辺のみの調整である。2と3は52S区で同時に出土した。形状に類似点がある。1については小型でつまみ部分を持つ。「つまみ」的装着部を有する89・90・91が57～61S区M4-3と比較的近隣調査区からまとまって出土した。線対称で、両面全面調整のため石槍又はナイフに分類した。89は先述の「線対称で両面全面調整の刺突具、装着

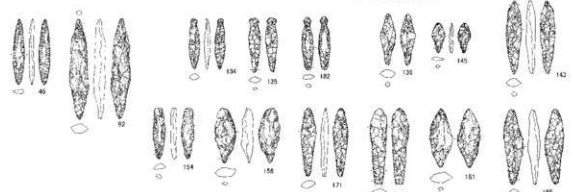


石鏃の一括資料  
P43-1~17

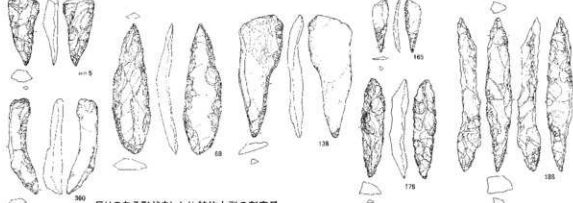
先細りに尖った方をすべて上にしたが、作り出しが長いものについては基部の可能性もある。



黒曜石製のつまみ付き石器  
形状によって器種を変えたが「つまみ」が特徴的である。つまみ付きナイフか石鏃か不明確なものがある。  
H39-5・H60-2・H62-4(つまみ付きナイフ) 13・22・28・29(石鏃) 105・108・109・120・121(石鏃又はナイフ)  
H41-3(Rフレイク つまみ部分を作出) 190~196・206・221・222・238~241(つまみ付きナイフ)



縁対称で両面全面研磨、先端部分を持つもの  
46(石鏃)92(石鏃又はナイフ)134・135・182(つまみ付きのドリル)  
136・143・145・154・156・171・179・181・185(ドリル 136・145は石鏃の転用か)



反りのある形状をした比較的大型の刺突具  
H37-5(石鏃又はナイフ)・68(石鏃又はナイフ)・260(スクレイパー)  
138・165・178・188(ドリル)・188は彫底的だが、石核というより棒状素材を生かしたもの。)



図Ⅴ-3-1 石器1 石鏃・石鏃又はナイフ・ドリル・スクレイパー

部のくびれが比較的浅い」に類するが張り出し部分が鈍角的に対応する。59T区M4-6から同時に出土した176・177は線対称で両面調整、先端および筒状のつまみ部分を持つ。全体に丸みを帯びたもの。ドリルに分類した。周囲からは円筒下層b1式の新しい段階のものが出土している。類例がまとまって出土している遺跡として函館市南茅部地区八木A遺跡（南茅部町1995）（図VI-3-11）がある。図上での対比では当遺跡と比較して厚さが薄くみえる。円筒下層a式の前後の頃と思われる。石の錐ではないが、伊達市北黄金貝塚A地点に骨角器刺突具で類例がある（伊達市2013）（図VI-3-11）。この貝塚は、円筒下層c式まで存続していたと考えられる。

**両面調整の石器**：H34-2、H39-9は素材の形状から距離が及ばない場所がある。88・101は上部に刺突部が正面観について丸みを帯びる。これ以外のものは両面全面調整で、全体の形状は丸みを帯びる。H31-1、H39-9は覆土出土。厚みがあり、裏面が甲板風のため、両面調整石器とした。H34-2と3は覆土東側出土で、裏面が平坦なため両面調整石器とした。88・101は比較的薄く、線対称の形状から石槍又はナイフとした。273・282・288・382・318・386・396・400・405・408はスクレイパーに分類した、両面全面調整の石器である。273・282・288・382は線対称で長楕円形の正面観を持ち筧状のものである。

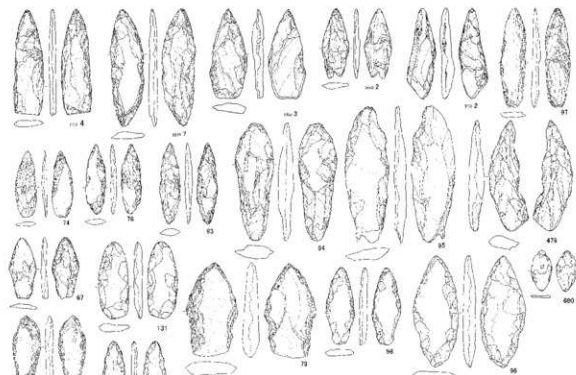
**装着部付き削器**：横長のつまみ付きナイフ、あるいは長軸の両端又は片端に装着部と思われる「挟り」を有するスクレイパーを集成した。H39-11は覆土出土で、唯一の両面全面調整。覆土出土のH58-2と322は装着部が「つまみ」に類似しており、顕著なため、つまみ部分を水平、横長にして図化した。269・304・317・336・407 上端、下端ともに「挟り」が明瞭。これを装着部と想定した。246・249・254・259・325「挟り」が片側のみ、あるいは不明瞭。322は二つのつまみが正面観に対して線対称であったため、石製品のだったが、スクレイパーとした。

**頁岩製石器に石錐的擦痕があるもの**：H67-1は床面出土、73は石槍又はナイフ、614は石錐に分類した。H67-1と73は「石槍又はナイフ」の両側縁に石錐の使用痕のような擦痕があるものである。木古内遺跡H12出土遺物103・104に類例がある。

**円筒下層式に特徴的な、儀式的要素を思わせる石槍又はナイフ（異形石槍）**：齊藤 岳（2010）によって異形石槍と称した石器の類例と考える。127は全体の形状から石槍又はナイフに分類した。651は異形石器の一部としたため石製品とした。しかし、掲載図の上下を反転すると127に類する石槍の基部の付け根という可能性がある。

**舟形をした石器**：H28-1は覆土2層出土、断面正方形で厚みがあるため石核に分類した。271・272は横刃だが搔器的な刃部を持つスクレイパーである。458・459・469・472は相対的に薄く正面観が線対称なため両面調整石器に分類した。458・459が出土した57R区M2-3はフレイクチップがまとまって出土したため周辺調査区内において接合作業を試みた。すると調査区内、同一層位、あるいは、層位、調査区をまたいでの接合例が見受けられた。

中でも良好な接合状況を示したのが459であった。三分の一スケールで459の図を再録した。459は実測図の展開を、接合図に合わせて甲板面を正面とした。459は接合状況の実測図で、459は接合した剥片の属性図である。57R区M2-3は円筒下層c式四単位の波頂部と対応する区画文様の土器がまと



頁岩以外の素材で作られた石槍型石器  
あるいはその未成品

凝灰岩石槍 67・131(石槍又はナイフ)  
砂岩石槍 96・98(石槍又はナイフ)  
流紋岩石槍 132・133(石槍又はナイフ)

片岩石槍  
H31-4・H39-7・H60-3・H62-2(磨製)・P56-2(未成品)  
74・78-93-94-95-97(石槍又はナイフ)880(石製品)479(両面調整石器)

礫岩石槍 79(石槍又はナイフ)



49R区M5-2から  
まとまって出土 細長い刺突具  
116-117-118-119(石槍又はナイフに分類)



縦対称で両面全面調整の刺突具、  
装着部のくびれが比較的浅い。  
H38-3・H43-1  
(鍔部分が明顯なのでドリルとした)  
103-107(石槍又はナイフ)  
23・44(石銃)

H20-5(覆土上位)  
比較的厚みがあるため「つまみ付きナイフ」とした



明確な「つまみ」を持つ石槍又はナイフ  
76・77・85・86・108・129・130  
(石槍又はナイフ)



側面に対応した張り出し部を持つ刺突具  
1~3はH18掘り上げ土出土  
2,23はS2S区で同時に出土した

「つまみ」的装着部を有する  
89・90・91(石槍又はナイフ)

59T区M4-6から同時に出土  
176・177(ドリル)

図M-3-2 石器2 石槍又はナイフ・ドリル・両面調整石器

まっていた。一概には言えないが分布の特徴が一致しているため、この土器の時期ないしはこの直後の時期という可能性もある。

接合状況から素材・原石のもととの形状がおおよそ舟形の素材と考えられる。類例として亀甲型風の石核435・439が挙げられる。舟形のものよりも長軸が短い、半球状のものと考えられる。

表VI-3-1 石器 接合資料一覧

掲載番号459と接合した

層位	調査区	遺物番号	点数	分類	備考	
M2-3	57R	65	1	両面調整石器	掲載番号459	9月14日
M1	57R	31	6	フレイク		9月8日
M1	57R	302	1	フレイク		9月8日
M2-3	57R	39	1	フレイク		9月25日
M2-3	57R	61	3	フレイク	うち2枚は甲板面の剥離。	9月14日
M2-3	57R	69	5	フレイク		9月15日

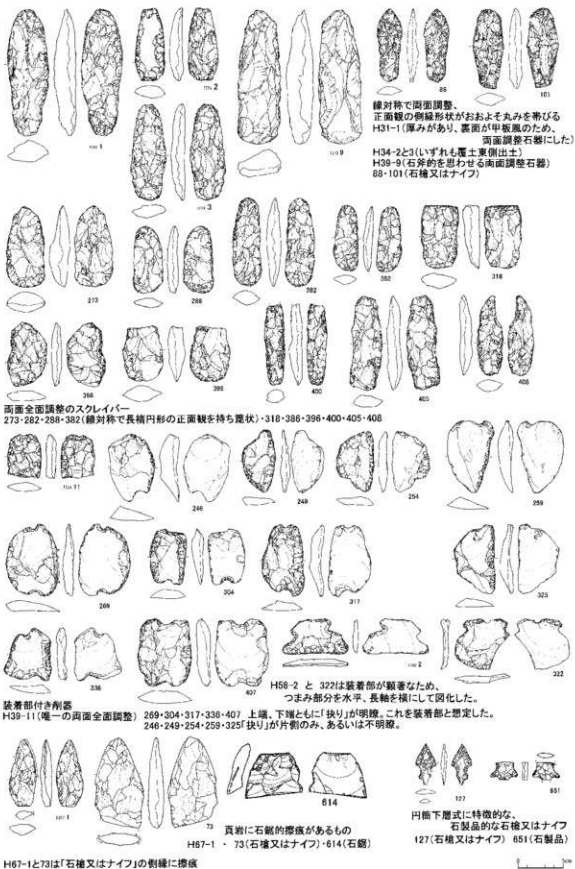
備考に記載のないものについては、甲板面から船底へ側面を打ち欠き

57Q～R区で接合した資料

資料名	層位	調査区	遺物番号	分類	打ち欠き順番	状況	取り上げ日	
a	a1	M4-1	57R	259	石核	石核	甲板面から船底への打ち欠き	10月5日
	a2	M4-3	57R	1	フレイク	1		10月1日
b	b1	M4-3	57R	1	フレイク	折れ	折れ	10月1日
	b2	M4-3	57Q	1	フレイク	折れ		10月1日
c	c1	M4-1	57R	48	フレイク	1	打ち欠き	9月28日
	c2	M1	57R	31	フレイク	2	c1と同じ側から打ち欠き	9月8日
	c3	M2-3	57R	39	フレイク	3	c1・c2と反対側から打ち欠き	9月25日
d	d1	M4-1	57R	79	フレイク	折れ	折れ	10月5日
	d2	M4-6	57R	93	フレイク	折れ		10月6日
e	e1	M4-1	57R	79	フレイク	折れ	折れ	10月5日
	e2	M4-6	57R	93	フレイク	折れ		10月6日
f	f1	M4-1	57Q	7	フレイク	1	すべて同じ向きからの、打ち欠き	9月31日
	f2	M4-3	57Q	1	フレイク	2		10月1日
g	g1	M2-3	57R	69	フレイク	1	すべて同じ向きからの、打ち欠き	9月15日
	g2	M2-3	57R	69	フレイク	2		9月15日
	g3	M4-5	57R	108	フレイク	3		10月29日

石斧の両端が潰れているもの：顕著なものを示した。H29-6、H33-4、H58-3は覆土出土遺物、盛土遺構出土の488・494、包含層出土の527である。H58-3・488・494は両端が丸みを帯びて面的に潰れており、最終的にたたき石として用いられたと考える。このような観察をすると、顕著なつぶれ痕跡があるもののうち、たたき石に分類可能なもの6点と、楔形石器のように両端が潰れたもの9点の二種類ある。出土点数が少ないせいしか調査範囲内にかたよった分布はない。盛土の基底部焼土層からの出土は49R区から両端が潰れたもの1点であり、ほかはその焼土層より上位からの出土である。出土点数そのものが10点と少ないため、「傾向」と明言し難いが、M2、M2-2、M2-3、Ⅲ層とそれに準ずるものの出土が目立つ。層位的に上位からの出土である。遺構ではH29、H33、H36、H58から出土





図Ⅴ-3-3 石器3 石槍又はナイフ・スクレイパー・石鏃・石製品

しているがいずれも覆土からの出土である。

**対応する擦り切り残片と石鋸**：49S区M5-1から、518（擦り切り残片）と613（石鋸）が同一日に取り上げられていた。試みに確認したところ、擦り切り痕と使用痕の寸法が対応した。石斧の未成品のうち、擦り切り痕が明瞭に残った、「擦り切り残片」はM5、M6に分布するほか、調査区中央部平坦面のM2-3、M4-5、Ⅲ層に準ずる、盛土基底部より上の土層から出土する。H41、H51の覆土あるいはH18掘り上げ土からも出土し、これも盛土出土のものと同傾向が合致する。

**全面研磨の石斧風な石器およびそれに準ずる作り、素材が粗いもの**：P56-5は覆土出土で、全面の研磨が著しい。H18の掘り上げ土からは4・5が出土している5は素材が軽石である。側縁に明瞭な擦痕がある4や500は、寸法から石斧未成品の可能性はある。H43-2は床面出土である。側縁の打ち欠きからスクレイパーとしてみたが、H25-3との対比から、長軸が長い楕円形の石製品という可能性がある。H25-3は覆土1層からの出土である。

**括れのある軽石製石製品**：H58-1は覆土出土で、北海道式石冠風の形状である。H29-8は覆土出土で、形状は浮子を思わせるが、発泡等の状況から軽石製としたものの、水に浮かばない。

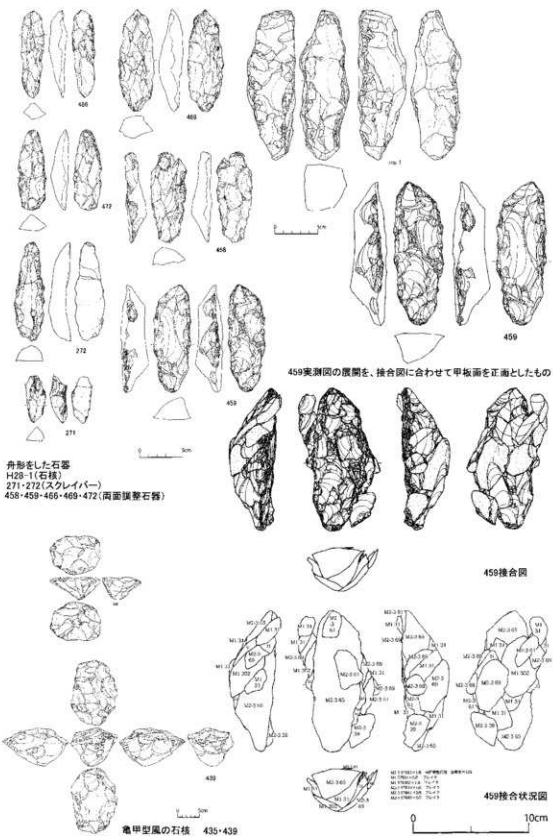
**石鋸に類した石製品**：673・674・675・676・677は全面に擦痕がある。側縁は石鋸を思わせる。全体の印象としてはメカジキの物の一部を思わせる。

**球状耳飾り**：H28-2・H57-3・660・661・662・663・664・665はいずれも片側のみの破片である。666は未成品である。H28-2は覆土出土で、覆土から円筒下層d1式が二個体復元できたが、住居は縄文時代中期の住居に切られている。H57-3は覆土出土で、周辺からは円筒下層d2式から上層a式にかけての出土が目立つ。666はその近くからの出土である。660・661・662・663・664・665はM1・M2・M2-2・Ⅲ層の出土で円筒下層d2式が多く出土している調査区・層位である。いずれも滑石製である。659の玉も同一素材で666と出土状況が似る。肉眼観察では松前町産の滑石とよく似ている。

**線刻礫**：H51-2は覆土出土である。H67-9はHF-1覆土出土である。H51-2は磨減した礫片であり、楕円礫と想定すると、正中線に複数の線刻の可能性はある。H67-9・682・683・685は正中線を意識したと考えられる線刻礫である。684は両面に凹部を持ち、上に擦痕がある。斜面、表土近くからの出土であり、実用品か、線刻礫といわれるものか、判然としない。木古内遺跡H9出土遺物85に類例がある。

**石冠 烏帽子型石器的なものか**：H23-1は覆土出土である。後面観に凹部がある。H24-4は覆土2層出土である。裏面図側を底面とすると凹部がある。縁辺の打ち欠きが、H43-2・H25-3に類するもの可能性がある。

**石棒**：H18-7は覆土1層出土である。H18-7と686は円筒形基調だが胴部中央がやや膨らむ。叩打調整後に、全面を研磨する。681は石棒が被熱後に、破損した破片という可能性がある。



舟形をした石器  
H28-1(石核)  
271・272(スクレイパー)  
458・459・466・469・472(両面調整石器)

459実測図の展開を、接合図に合わせて平板面を正面としたもの

459接合図

459接合状況図

亀甲型風の石核 435・439

図Ⅴ-3-4 石器4 スクレイパー・石核・両面調整石器・接合資料

**石棒に類するもの**：H23-5は柱状節理を意識的に採取してきたものとする。H54-4は床面出土の棒状礫。P56-18と19は底面から出土した礫。楕円礫の長軸が長いもの

**もろい凝灰岩（クサレ凝灰岩）**：H27石皿（点取りNo64）、H31台石（点取りNo30）、H43台石（点取りNo25）は「もろい凝灰岩製」で図化できなかった。

H29-15も同質の凝灰岩製であった。これは取り上げ時にすでにかなり崩れそうな状態であったため、大き目のナイロン袋にそっと押し込み、動かないように固定した。そしてその状態で顕著な機能面の稜線のみを表現したものである。図の墨入れ後に袋からとりだし、ヤマトノリで応急処置をして、写真撮影を行った。後に、バラロイドB-72で硬化に努めた。このもろい凝灰岩は水分を含みやすく、それが急激に乾燥した際にこわれるものとする。しかし、疑問に思うのは縄文時代前期後半の出土石器に、この凝灰岩による石皿が出土することである。磨滅がひどく断言出来ないが、扁平打製石器だったのではないと思われるものも出土する。当時は硬く、「臼と杵」の様な使用ができたと思われる。水分を含みやすく、その上、凍結と解凍も繰り返され、このように脆弱で磨滅した状態で出土すると思われる。

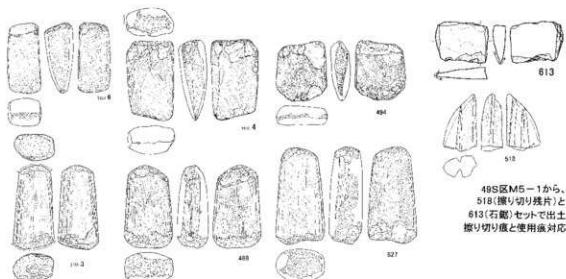
**凹み石**：円筒上層a式の出土量が多い場所によく分布する。83ライン前後を含めたⅢ層からの出土が多い。Ⅲ層以外でも、M4-3、M4-5、M5-1といった土層、つまりM4-6、M5-2、M6-2といった焼土層より上位からの出土が目立つ。平面的な分布で出土が比較的多いのは、「42-46-Y～a区のM6-1～2」、「55-62-R～T区のM4-6からⅢ層にかけて」である。

遺構出土の凹み石は41-43-V～W区のH52とH54、45-46-S区のF82とH37、49-52-S～V区のH18やH18掘り上げ土、54V区のH23、63-64-R区のH38から出土した。円筒下層d2式の住居H18のみ付属遺構出土である。他のものは、覆土、焼土層、掘り上げ土出土である。

**扁平打製石器**：形状から細分（図VI-3-9）を行った。形状ごとにと出土の分布状況（図VI-3-8～10）、出土層位（表VI-3-2）と対比して傾向の有無を調べた。細分について再録すると、Aは長楕円礫の長軸に平行な一箇縁に機能部を持つもの。Bは縁辺を成形することによって半円形の形状で両端が鋭角的に尖るもの。ABは素材の形状から縁辺を成形して両端がBほど鋭角的にはならず全体が半円形を呈するもの。Cは両端が打ち欠きや叩打などによって抉りを呈するもの。Dは両端を打ち欠きや叩打によって直線的に成形されるもの。CDは片方が抉り、片方が直線的に成形されたもの。加えて-2としたものは機能部の厚さ（幅）が1.5cm以上のもの-3としたものは長軸に平行な縁辺について上下縁に機能部を持つもの。-4は機能部の正面観が丸みを帯びるものである。

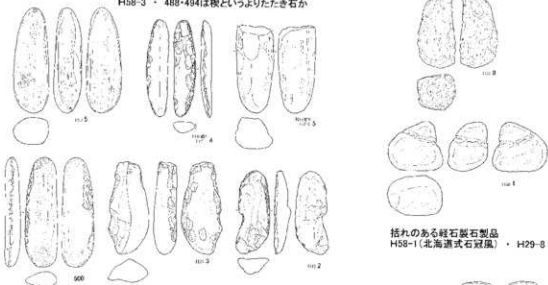
-2（機能部の幅が広い）は閃緑岩素材のものが多い。これは北海道式石冠の素材が安山岩に次いで閃緑岩が多いのに似ている。北海道式石冠の機能部は扁平打製石器の機能部が幅広になったかのである。中期初頭にはない。-3（上下に機能部）と-4（円刃）についても中期初頭の廃棄場所にはなかった。

全体的に多い形状はCとDである。Aはその次である。結果A・AB・Bといった半円状のものが少なかったということとなる。Aの素材選択からいきなり機能部を使い始めるものは出土状況からは、全時期にわたってある。中期にもあるし、中期初頭の廃棄場所になかった-3（上下に機能部）、A3もある。Bは少ない。重量的に軽くなるため、擦り+たたき石として威力にかけるためであろうか。円筒下層d1式以降の廃棄が多い場所に目立つ。しかし円筒下層b式が廃棄される古い土層のから



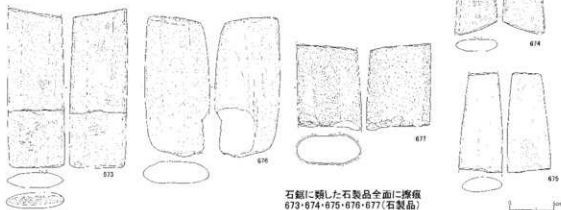
49S区M5-1から、  
518(振り切り残片)と  
613(石鏃)セットで出土  
振り切り痕と使用痕対応

石斧の面縁が潰れているもの  
H29-6・H33-4・H58-3・488・494・527  
H58-3・488・494は根というよりたき石か



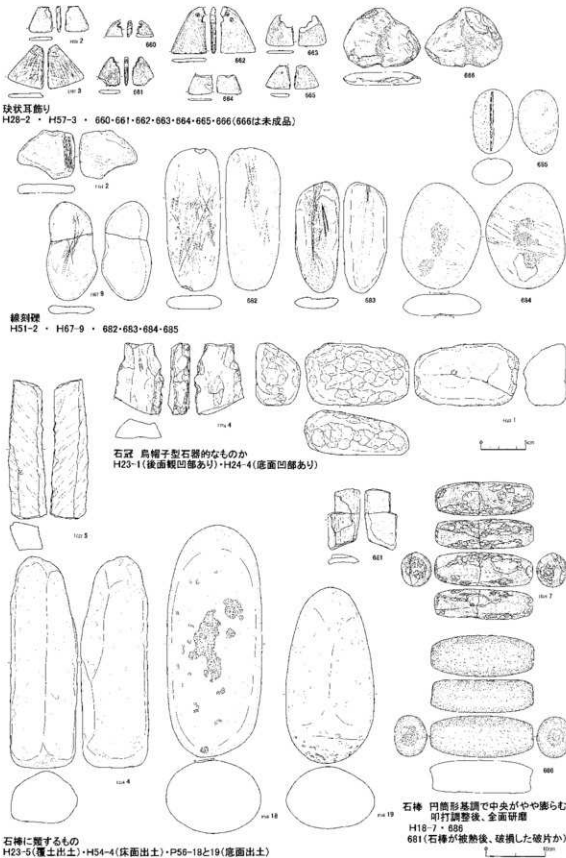
括れのある軽石製石製品  
H58-1(北海道式石鏃風)・H29-8

全面研磨の石斧風な石器、およびそれに準ずる、作りと素材が異なるもの。  
P56-5(研磨量多い)・H18掘り上げ土-4・5(5は素材が軽石)・500  
H43-2(スクレイパーとしてみたが、長軸が長い楕円形の石製品の可能性)・H25-3



石鏃に類した石製品全面に磨痕  
673-674-675-676-677(石製品)

図Ⅵ-3-5 石器5 石斧・石鏃・石製品



図VI-3-6 石器6 石製品

表VI-3-2 細分可能扁平打製石器出土点数一覧

細分できた 889点	A	AB	ABC	ABD	AC	AD	B	BC	C	CD	D	合計
竪穴住居	24	17	2	1	2	7	2		36	15	67	173
焼土	2	1										3
土坑		3							1	1	2	7
掘り上げ土	2	4				1			7	2	5	21
盛土・包含層	105	74	9	11	21	35	11	2	167	48	202	685
合計	133	99	11	12	23	43	13	2	211	66	276	889

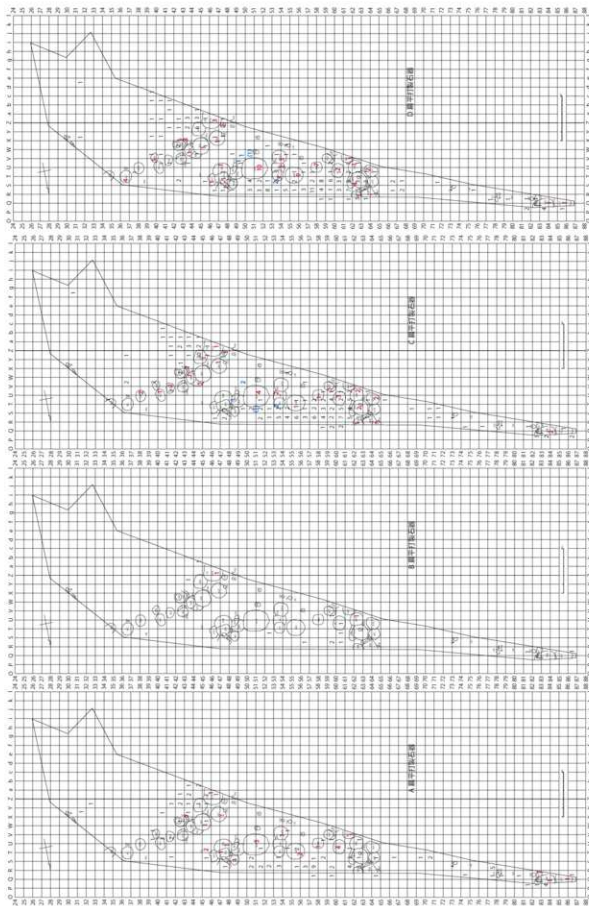
上記のうち 小型	A小型	AB 小型	ABC 小型	ABD 小型	AC 小型	AD 小型	B 小型	BC 小型	C 小型	CD 小型	D 小型	合計
竪穴住居	3	2	1			2	1		2	1	1	13
焼土		1										1
盛土・包含層	8	2			4	2	2		(C4)1	1	1	21
合計	11	5	1		4	4	3		3	2	2	35

上記のうち-2	A2	AB2	ABC2	ABD2	AC2	AD2	B2	BC2	C2	CD2	D2	合計
竪穴住居									6		8	14
掘り上げ土	2	1							3			6
盛土・包含層	6	3	1		2	1			24	3	13	53
合計	8	4	1		2	1			33	3	21	73

上記のうち-23	A	AB	ABC	ABD	AC	AD	B	BC23	C	CD	D	合計
掘り上げ土						1			1			2
盛土・包含層									2	1		3
合計						1			3	1		5

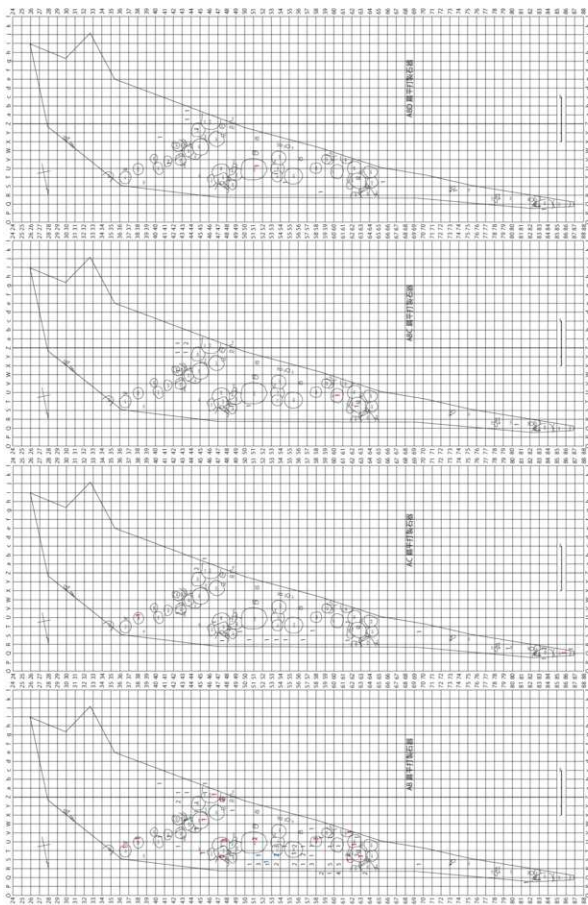
上記のうち-3	A3	AB3	ABC3	ABD3	AC3	AD3	B3	BC3	C3	CD3	D3	合計
竪穴住居									2	2	3	7
掘り上げ土											2	2
盛土・包含層	6								3	2	9	20
合計	6								5	4	14	29

上記のうち-4	A4	AB4	ABC4	ABD4	AC4	AD4	B4	BC4	C4	CD4	D4	合計
土坑		1										1
盛土・包含層						1			1			2
合計		1				1			1			3



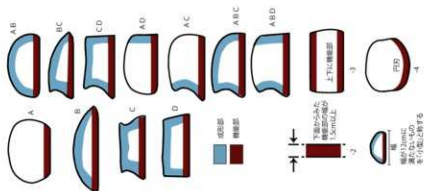
図VI-3-7 石器7 属分可能属平打石器分布図





図Ⅳ-3-8 石器8 部分可能属平打製石器分布図

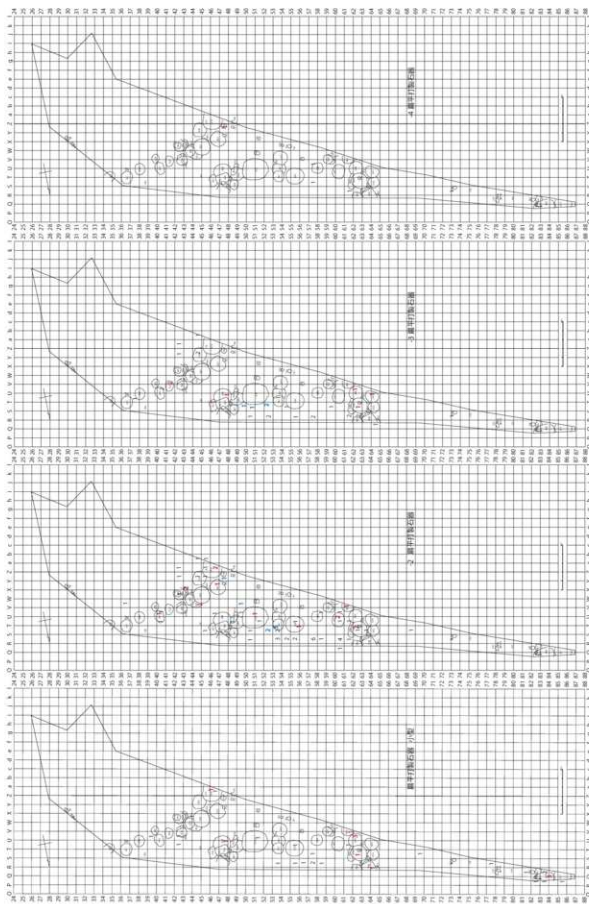
遺物分布図において  
 黒字は「盛土・高台層出土遺物」  
 赤字は「遺構出土遺物」  
 青字は「掘り上げ土出土遺物」



扁平打製石器形態分類



図VI-3-9 石器9 細分可能扁平打製石器分布図・扁平打製石器細分模式図



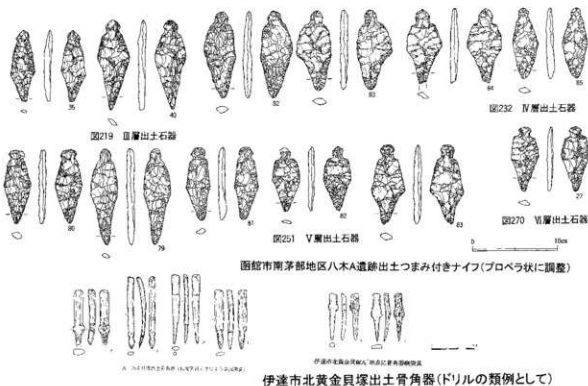
圖VI-3-10 石器10 横分可能扁平打製石器分布図

も出土する。出土量が多い、C（両側が挟れるもの）やD（直方体や台型に近い）といった縁辺を成形するものについては円筒下層b式～円筒下層c式～円筒下層d1式～中期初頭と継続して出土する。

ABの「半円状」に成形したものについては調査範囲内および土層の上下を問わず、まんべんなく存在する。中期初頭の廃棄場所において、AC・AD・ABC・ABD・CDといった正面観が非線対称のものほど多くはない。AC・ABD以外は円筒下層d1式の廃棄場所からも目立つ。新しい傾向か。

「小型」はさまざまな形状にあるものである。円筒下層c式以降の廃棄場所に多くみられ、中期初頭の廃棄場所に顕著にある。土層的にも上位からの出土が多い。

円筒下層b式から円筒上層a式にかけて、当調査範囲内では、扁平打製石器は、「厚みがある閃緑岩製で北海道式石冠に類するもの。正面観が線対称のもの」が主体だったが、「小型のものが多く混じり、正面観が非線対称のもの」が主体となる。（大森司）



図VI-3-11 函館市南茅部地区八木A遺跡出土つまみ付きナイフ（プロペラ状に調整）  
伊達市北黄金貝塚出土骨角器（ドリルの類例として）

## 4 館野～矢不來地区の遺跡

北斗市には、百六か所の遺跡が周知されている。これらの遺跡は主として海成段丘上に分布するが、海浜砂丘上、川沿いの丘陵地、また石灰岩の洞窟にも分布している。時代は旧石器時代から縄文全期間、統縄文時代の遺跡に加え、中世の茂別館や、箱館戦争の戦地である富川土塁跡、旧大野町台場山遺跡もある。縄文時代草創期～早期前半に相当する遺跡はないものの、旧石器時代よりはほぼ途切れることなく人類の生活痕跡が認められている地域である。

館野6遺跡の位置する館野～矢不來地域の段丘上には、これら百六か所のうち二十八か所の遺跡が存在している。このうち発掘調査が行われ、現在報告書が刊行済みの遺跡は十八か所である。表1は、その出土土器の時期と簡単な調査結果について記したものである。つづく文章は、平成23年度に北斗市館野2遺跡A・B地区の報告にあたり作成した北斗市の遺跡の概要である。報告書刊行以後の内容を加え、館野～矢不來地区にあたる遺跡名を**太字**にした。なお押上1遺跡の検出土器数など訂正した部分がある。

表VI-4-1 館野～矢不來地区の遺跡一覧

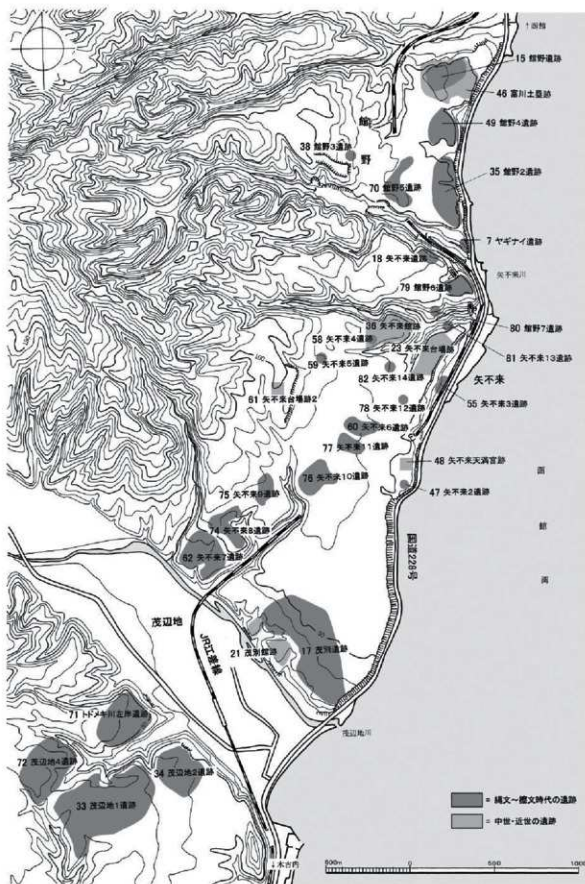
遺跡名	縄文時代										縄文式	前期	中期	後期	弥生	古墳	その他	備考	
	中世	早期			中期			後期											物産
		前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	後期									
館野(1)	○	○	○			●	●	●			○						○	○●=住居跡 ◎=社会集落(遺構)跡以上 ○=調査開始前の小・中世、近代は数輪出土	
館野(2)	○								●	●	●	●						○	
高川庭園跡	○																	○	
館野4	○					●	●	●	●	●	●							○	
館野2	○		○			●	●	●	●	●	●							○	
館野2A/B	○		○			●	●	●	●	●	●							○	
館野2B	○		○			●	●	●	●	●	●							○	
館野3	○		○			●	●	●	●	●	●							○	
館野(1)	○		○			●	●	●	●	●	●							○	
ヤマトイ			○								●							○	
矢不來天宮			○															○	
矢不來水田跡			○															○	
矢不來船跡			○															○	
矢不來館跡			○															○	
矢不來2			○															○	
矢不來3			○															○	
矢不來4	○		○															○	
矢不來5(1)	○		○															○	
矢不來7	○		○															○	
矢不來8			○															○	
矢不來9			○															○	
矢不來10			○															○	
矢不來11			○															○	
矢不來11(2)			○															○	
笠原			○															○	

### 旧石器時代

館野2遺跡A地区の調査において、石刃素材の彫器をはじめ、搔器、削器、石刃、細石刃からなる13点の出土資料が得られている。

### 縄文時代早期

早期中葉に位置づけられる遺構の検出は今のところないが、遺物はいくつかの遺跡で確認されている。館野遺跡の調査においては日計式、ムシリI式、アルトリ式などが出土している。矢不來7遺跡ではノダップI式とみられる爪型文の付く尖底土器が出土している。茂別館跡では、根崎式、ムシリI式のややまとまった資料が出土している。このほか点数は少ないが館野4遺跡、館野6遺跡、三ツ石2遺跡、当別2、当別4遺跡、大野地区の向野E遺跡でも貝殻文の土器が出土・採集されている。



図VI-4-1 北斗市館野～矢不來にかけての遺跡分布

早期後半に相当するものは、**茂別遺跡**で確認されている。住居1軒(H-7)、土坑1基(P-17)にその可能性があるほか、粘土探掘穴状土坑群とした、51基からなる切りあう土坑群が確認されており、これからは中茶路式土器二個体が得られている。

また**館野6遺跡**本線部分の調査において、土坑の内2基が、早期後半に属する可能性があると考えられている。

## 縄文時代前期

前期前半は2遺跡で遺構が確認されている。三ツ石遺跡では、出土遺物のうち多くが当時期のものとみられ、確認されている遺構土坑5基、焼土四か所もその可能性があるものである。また**茂別遺跡**では、住居跡1軒(H-6)が当該期のものであるほか、P-4、6とした土坑墓からは、春日町式もしくは椋法華式に相当するとみられる土器が各一個体出土している。また、P-15からは縄文式の個体が出土している。

後半になると、遺跡数は増加する。遺物のみ出土、採集されている遺跡は多いが、円筒下層式の住居が確認できた遺跡としては、**矢不來6遺跡**で4軒、**矢不來2遺跡**で1軒、水無遺跡において1軒である。またフコマ野遺跡において、石器製作跡とされた竅穴が確認されている。**茂別遺跡**では、住居跡は確認されていないものの、円筒下層b～c式に相当する若干の出土があるほか、円筒下層a式(P-40)、大木2b～3式(P-63)に相当する土坑墓が検出されている。**館野6遺跡**は2008年度に調査された本線部分についての報告書が刊行された。この部分では円筒下層b～c式に相当する住居跡8軒からなる集落跡である。集落は遺物集中域を伴うほか、43基検出された土坑の中には、フラスコピットを転用したとみられる土坑墓(P-14)がある。またこれ以外にも完形土器と石器等を伴い、埋戻し状の堆積を呈する3基(P-23、24、33)はその可能性が高いものとみられる。西側隣接地にあたる2009年度調査の保障道路部分が本報告である。

## 縄文時代中期

中期前半の円筒上層式に相当するものは、松前藩戸切地陣屋跡の1986年の調査で、円筒上層a～b式に相当するベンチ構造を持つ全長15.7mの大型住居が1軒検出されている。後続するサイベ沢Ⅶ～見晴町式の住居跡は増加し、7遺跡で複数の検出例がある。内訳は茂辺地4遺跡で6軒、**矢不來9遺跡**で3軒、**館野遺跡**では6軒、**館野2遺跡B地区**では5軒、**館野4遺跡**で6軒、**館野6遺跡**本線道路部分では5軒が検出されている。各遺跡5～6軒の住居で構成されているが、**館野2遺跡B地区**を典型とし若干の時期差があるものとみられ、同時存在は1～2軒程度であった可能性がある。

**館野2遺跡C地区**は中期前半から後半にかけての上記の時期を含む拠点的な集落跡である。住居跡は総数で90軒が検出されている。その立地は中期前半期と後半期で大きく分かれ、円筒上層b～サイベ沢Ⅶ式までの前半期には調査区の南側半分に分布する。見晴町式の時期には両端に住居跡が分布するものの、榎林式以降の後半期には北側に移動する様子が認められる。1980年の調査で確認された中期の住居5軒のうち、3軒は中期後半の時期で、平成19年調査の北側延長上に位置するものとみられる。また、未報告であるが、村前ノ沢遺跡では、調査区外から流れ込んだとみられる円筒上層式の遺物が多く出土している。

**館野遺跡**においては、盛土形成以前の中期中葉から後葉、榎林式～大安在B式にかけての住居跡が33軒検出されている。函館市大船C遺跡で確認された住居形態の変化を追跡し、石組炉は円形→方形→方形装飾付きへ、平面形は楕円形→卵型→舟形へと変化している。

このほか、大安在B式の住居跡は、**茂別遺跡**で住居1軒(H-14)のほかいくつかその可能性のあるものがある。**矢不來8遺跡**でも1軒確認されている。

## 縄文時代後期

後期前葉の遺物は、発掘調査が行なわれたほぼ全ての遺跡で出土しているが、特に直前にあたる中期末様の煉瓦台式から天祐寺式にかけての資料が近年増加し、後期前葉の盛土遺構が検出された**館野遺跡**の報告書も刊行されたことにより当期の詳細な様相が明らかとなってきた。後続する涌元、トリサキ式を含めた調査成果について時期を追ってやや詳しく見る。

**茂別遺跡**では、「塚」とされた盛土遺構が検出されている。これは幅約10mの溝を作り、その両側に土を盛り上げた形のもので、発掘調査時の観察と空中写真判読の推定によると、両側溝に突出した段丘先端部を弧状に区画しており、長さ300m以上となるものである。調査区内の「塚」で区画された段丘先端部からは、平面形が楕円形～円形を呈する煉瓦台式～天祐寺式の住居跡5軒を検出している。このうちの1軒(H-10)は盛土で埋まるものである。盛土の堆積下位からは煉瓦台式～天祐寺式の土器が出土しており、盛土形成の下限とされる。上限は出土遺物からは判然としませんが、可能性が高いものとして涌元I式と指摘されている。

押上1遺跡は、上磯町教育委員会による函館江差自動車道の調査と、当センターによる北海道新幹線に係る調査が行われている。教育委員会による調査は、住居跡14軒、土坑32基、フラスコピット19基などとなっている。特筆すべき出土品として、フラスコピットP-170から出土した、赤色漆塗り飾り弓の塗膜とみられるものがある。周囲は涌元式のフラスコピットがややまとまっており、当期のものと思われる。住居跡は南北に分かれて検出されており、北側が中期後半ノグップⅡ～煉瓦台式、南側が天祐寺～涌元式の古い段階のものである。

当センターの調査は、最も遺構の集中するAB地区において、煉瓦台式から涌元式に相当する34軒の住居跡が検出された。これらは、炉の形状に着目すると4つに区分できる。①方形の石組炉で長軸に沿って作り変えられ、最後に壁際付近に定着しているもの(OH-19b、37、39)②隅丸方形の石組炉で、比較的大きな礎を使用するもの。炉の重複はまれで複式炉前庭部に似た付属施設を持つ場合がある(OH-14、31、33、36)。③円形に近い形状でやや小型の石組炉。配石(袖石)を伴わないもの(OH-21、23、19a、30)④明瞭な円形の石組炉で、時に装飾性に富み、配石(袖石)を伴うもの(OH-12、15、22)の四種である。炉石の焼成痕跡が検出状況と整合しない例があることから、古い住居の石を抜き取り新しい石組炉を作っていたとみられる。この点に着目すると炉石を抜かれずに完形を保つものが④にしかないことから、これが出土遺物の中で最も新しいステージの涌元式のものであるのは疑いない。出土遺物についても示唆される。典型的な涌元式の個体、2段の連続山形文に渦巻文や垂下する蛇行沈線を描かれるものは、OH-15から出土している。

層位の状況から①と②間、③と④間の先後は明らかであるが、②、③は重複しておらず不明である。遺跡からは大木10式の中段階とみられる磨消縄文の土器も出土しており、最古に相当する①は煉瓦台式とせざるを得ないであろう。後続する②、③は天祐寺式、④は涌元式となる。①、②類の住居が検出面まで埋められているのに対し、③、④となるに従い黒色土の明瞭なレンズ状の堆積がみられ、この順序と整合する。①～③の住居を埋めた土は、改築の際の排土であり炉跡の焼土を含むことになる。盛土遺構とされるものはほぼこの土である。総括で述べられるように、比較的深度中期末様の住居を埋め、さらに最大厚30cm以上馬の背状に盛られたとするには、③、④の住居は浅すぎ、検出された住居以外の客土供給地を他に求めなければならないだろう。



茂辺地4遺跡の調査は、平成22年から平成26年まで、初年度のみ当センターが、以降は北斗市教育委員会が中心となり調査を行った。検出遺構は通算で住居跡20軒、土坑83基、焼土五十か所、Tピット5基等となっている。住居跡は多くが後期前葉の天祐寺式のものである。調査者の時田太郎は、余市系土器と大木10式併行もしくは後続する土器の混雑状況が、住居跡の複式炉と中央ピットの混在状況と関連するものとして考察している。

**館野遺跡**は後期前葉涌元式期の造成跡が検出されている。中央広場とする南東—北西方向に伸びる削平部分を軸とし、北東側と南西側に盛土を行うものである。広場と盛土の境界には配石がなされ、フラスコピットや小柱穴が多数重複している。盛土遺構からは涌元式〜トリサキ式の遺物が出土しており、これら一連の造成はその期間と想定されている。

石倉野遺跡において当期の可能性のあるロームのマウンドや土坑、焼土が確認されている。中心となる時期は涌元1式とみられる。このほか大野地区の向野G遺跡では、北海道教育大学函館校の学術調査が行われ、後期初頭の土坑墓、焼土が検出されている（北斗市2006）。

このほか当期の住居跡は**ヤギナイ遺跡**(1)、三ツ石2遺跡(1)、**矢不來9遺跡**(1)、**館野4遺跡**(3)において確認されている。( )内の数字は軒数。

後期中葉の資料は、石倉野3遺跡、三ツ石2遺跡において手稲式が若干出土している。

後期後半には、**矢不來7遺跡**において堅穴住居跡13軒からなる集落跡が調査されている。平面形が楕円形を呈し、短軸一端に出入口とみられる張り出し状の部分をも有する典型的なものである。住居跡は密集して検出されるものの重複が見られないが、炭素年代の結果や構造から新旧を想定している。**ヤギナイ遺跡**において、堂林期の住居2軒(HP-1、2)が確認されている。

後期の最終末に相当するものとして、**茂別遺跡**における落合計策氏の採集資料が挙げられる。重要文化財である「人形装飾付異形注口土器」を始め、貼縮文、爪形文、三叉文などの特色をもつ後期最終末から晩期初頭にかけての良好な資料である（国立歴史民俗博物館 2001）。

## 縄文時代晩期

晩期前葉の資料は、**矢不來8遺跡**で出土しており、土坑1基と焼土二か所の遺構も検出されている。

詳細は不明であるが、久根別A遺跡から大洞BC式の破片が出土しているといわれている。

晩期中葉の資料は、**矢不來8遺跡**、**ヤギナイ遺跡**で出土している。**矢不來8遺跡**は埋設土器と、土坑1基、焼土一か所が確認されている。**ヤギナイ遺跡**では、石組炉と埋設土器が検出されている。埋設土器のうちKP-2とされたものは、鹿の上顎骨が納められていた。

晩期後半に相当するものは、添山遺跡があげられる。添山遺跡は落合氏の多数の完形土器を初めてする採集資料がある。遺跡は1979年に調査され、三か所の焼土と、聖山Ⅱ式に相当するまとまった資料が得られている。

## 統縄文時代

**茂別遺跡**は恵山式期の大規模な遺跡である。6軒の住居跡と38基の土坑墓が検出されている。土坑墓のなかには、完形土器や管玉、石斧、魚形石器、石鏃、環石などの石器を副葬するものが多くある。平面形は長軸1m内外の円形ないし楕円形を呈するが、瓢箪型や2mを超えるもの、1mに満たない小型の浅い墓もあり、副葬品の内容や上面の配石の有無など、やや多様なあり方を呈している。

下添山遺跡では、やや古手の二枚橋式に相当するものも含めた恵山式土器、魚形石器が採集されている。1979～1980年に吉崎昌一によって調査されており、同時期の資料が得られたほか、ソバの栽培

培の可能性が指摘されている。このほか、恵山式の土器の集中域は、**矢不來6遺跡**、三ツ石2遺跡、**矢不來8遺跡**、**館野6遺跡**本線部分においても確認されている。

## 擦文文化期

**矢不來3遺跡**において、擦文前期の住居跡2軒が検出されている。住居は北方向にカマドを持ち、底部にヘラケズリのみられる土器など伴う遺物が出土している。

東浜遺跡、および旧久根別川の対岸にあたる一本木1遺跡は、擦文文化期の遺跡として古くから知られているものである。東浜遺跡では、昭和38(1963)年に調査が行なわれ、五所川原産の須恵器のほか、内黒土師器、擦文土器など8世紀から10世紀ごろのものとみられる遺物が出土している。一本木1遺跡では、同様な時期とみられる須恵器甕の破片が昭和8(1933)年、落合氏により発見されている。

## 中世

**茂別館**、**矢不來館**がある。**茂別館**は享徳三(1445)年、安東氏による築城といわれ、中核をなす大館と、砦としての小館から成り立つとされている。近年、表面調査により大小の館の間に「中館」を想定し、さらに大規模な遺構であったとする説もある(市村2000)。

**矢不來館**は、町教委により範囲確認調査が1999、2000年の二年にわたって行なわれた。調査は遺跡周辺の地形測量と百四十三か所の試掘調査である。その結果15～16世紀のものとみられる陶磁器類が出土し、館の後方に空壕3本と土塁2本、館内部にも土塁と柵列が確認されている。最も規模の大きな西側の空壕は、上幅約9m、底幅約0.5m、深さ約3.6mの薬研堀であり、1間半幅の土橋があることがわかった(森2002)。2008年には**茂別館跡**と**矢不來館跡**を結ぶ旧道(馬道)の確認調査と、**矢不來館跡**の空壕の測量調査が行われている(野村・石井・塚田2009)。2010、11年の二か年にわたり**矢不來館**において弘前大学と愛知学院大学により発掘調査が行われている。土塁1基、柵木列1条のほか、墓坑2基が確認され、15世紀後半から16世紀初頭にあたる陶磁器等が出土している。

このほか、北斗市大野地区市渡の畑で採集され、郷土資料館に保管されている越前焼播鉢がある。15世紀前半～中頃のもので、出土状態から墓に副葬されたものではないかとされている(三上・越田2004)。

## 近世・近代

松前藩戸切地陣屋跡、**矢不來台場跡**、**富川土塁跡**、**矢不來天満宮跡**がある。国指定史跡である松前藩戸切地陣屋跡は、安政元(1854)年の神奈川条約締結後、箱館港の開港に伴って北方防備のため、安政2(1855)年に構築された。工事は洋式築城法により設計され、四稜の陣屋本体と南東部に突出した砲台部分から成り立っている。明治元(1868)年の箱館戦争で焼失している。昭和54(1979)年より、記念物保存修理(環境整備事業)を行い、平成12(2000)年に調査を完了し、平成14(2002)年に整備を終え、現在では桜の名所として地域に親しまれる史跡公園となっている。

**矢不來台場跡**は、**矢不來館**とともに町教委により範囲確認調査がなされ、二か所の砲台と火薬庫の位置、規模が確認されている。

**富川土塁跡**は、箱館戦争時の砲台跡とされていたが、昭和62(1987)年に行なわれた調査では、明治40年ごろと推測される煉瓦窯跡が検出されている。その後2009～2011年にかけて、西脇材名夫を代表とする「富川の皇陵」調査会により、この煉瓦窯より西側の部分について測量調査が行われている。

自然地形と整合しない高まりを確認し、それが大規模な土塁であること、壕とみられるものや、いくつかの平坦面が存在しているとし、これらが松前藩以前の城館址の痕跡である可能性を指摘している（「富川の塁址」調査会2012）。

**矢不來天満宮跡**は、昭和62年に調査が行なわれ、18世紀後半から大正期までの遺物と、三期にわたる建物跡を検出している。

箱館戦争は旧暦明治元（1868）年10月20日、森町鷲ノ木に榎本武揚が上陸したことに端を発し、同年12月15日の選挙による政府の樹立を経て、明治二（1869）年5月18日の新政府軍の反撃による五稜郭陥落までの期間である。北斗市は松前と函館を結ぶ地点となっており、茂辺地～矢不來までの地域、旧大野町台場山場跡は特に激戦地として知られている。

台場山遺跡跡は新撰組副長、土方歳三が江差から進軍する新政府軍を迎え撃つために台場山山頂周囲に築いた砲台と塹壕である。台場山、村山に残る焙硝倉の沢の名称はこの時に由来するものである。4月13日の戦闘で使用された銃弾は三万五千発といわれている。一方木古内の旧幕府軍は、4月21日には制海権を失い矢不來まで退却する。4月24日～29日まで、海上と陸上において茂辺地、矢不來での戦闘が行われ、29日には新政府軍に制圧されている。

**茂別遺跡**において、調査区の先端に当たる段丘先端部に屈曲する塹壕を検出している。出土遺物から判断すると、この旧幕府軍の施設の可能性もあるものである。また、**矢不來9遺跡**において、幕末から明治期にかけての平地式住居が1軒確認されている。

なお箱館戦争時のものとみられる銃弾は、富川から茂別に至る段丘上で多く出土している。報告されているだけでも、**矢不來天満宮3点**、**矢不來10遺跡7点**、**矢不來11遺跡1点**、**矢不來6遺跡2点**、**茂別遺跡1点**と計14点であり、未報告であるが館野遺跡で出土した数は十数点にのぼる。当地が箱館戦争時の激戦地であることを示す証拠の一つといえよう。

## 近年の調査動向について

**館野2遺跡A・B地区**の報告以降、市内では**同C地区**、**館野遺跡**の盛土遺構部分、押上1遺跡、茂辺地4遺跡の報告が刊行された。中期後半大安在B式～後期前葉涌元・トリサキ式までの資料は顕著に多くなっている。なかでも中期末様から後期前葉の時期は重要である。当期は遠く関東地方では加曾利EⅣ～称名寺I式の「遺跡数の減少期」にあたる（今村1977）。同じくして函館市南茅部地域では遺跡の断絶が認められ（福田2014）、その直前には道央北の土器型式であるトコロ6類の道南地域での出土が散見される時期となっている（北埋調報314）。

北斗市の当地域と函館湾周辺の津軽海峡沿岸は、石倉、戸井、湯川の3つの貝塚、北斗市**館野**、**矢不來2**、知内町湯の里1遺跡等多くの同時期の遺跡があり、道内でも有数の遺跡集中域である。後期前葉での遺跡様相の変化は、当期の寒冷化による何らかの影響であることは可能性の高いことだろうが、炭素年代を元にした環境考古学の成果だけに頼るのではなく、詳細な土器の検討を踏まえた上で遺構、遺物の変化をとらえていくべきであろう。その基礎資料は当地においてほぼ整ってきたとみられる。

（立田 理）

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1974 「中の平遺跡発掘調査報告書」
- 青森県教育委員会 1977 「熊沢遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告38集
- 青森県教育委員会 1996 「畑内遺跡Ⅲ」 青森県埋蔵文化財調査報告187集
- 青森県教育委員会 1997 「畑内遺跡Ⅳ」 青森県埋蔵文化財調査報告211集
- 青森県教育委員会 1999 「畑内遺跡Ⅴ」 青森県埋蔵文化財調査報告262集
- 青森県教育委員会 2000 「畑内遺跡Ⅵ」 青森県埋蔵文化財調査報告276集
- 青森県教育委員会 2001 「畑内遺跡Ⅶ」 青森県埋蔵文化財調査報告308集
- 青森県教育委員会 2002 「畑内遺跡Ⅷ」 青森県埋蔵文化財調査報告326集
- 青森県教育委員会 1997 「三内丸山遺跡Ⅷ」 青森県埋蔵文化財調査報告230集
- 青森県教育委員会 1998 「三内丸山遺跡Ⅸ」 青森県埋蔵文化財調査報告249集
- 青森県教育委員会 2008 「石江遺跡・三内沢部(3)遺跡Ⅲ」 青森県埋蔵文化財調査報告458集
- 青森県史編さん自然部会 2001 「青森県史自然編 地学」
- 青森県史編さん考古部会 2002 「青森県史別編 三内丸山遺跡」
- 青森県史編さん民俗部会 2014 「青森県史民俗編 資料津軽」
- 青森市史編集委員会 2006 「新青森市史 資料編1 考古」
- 青森市教育委員会 2001 「稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森市教育委員会 2002 「稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第62集
- 青森市教育委員会 2003 「稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 青森市教育委員会 2004 「稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第71集
- 青森市教育委員会 2004 「稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第72集
- 青森市教育委員会 2008 「新町野遺跡発掘調査報告書Ⅳ」 青森市埋蔵文化財調査報告書第98集
- 秋田県教育委員会 1981 「杉沢台遺跡 竹生遺跡 発掘調査報告書」 秋田県埋蔵文化財報告書83集
- 秋田県教育委員会 1988 「東北横断自動車道発掘調査報告書-Ⅱ上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡-」 秋田県埋蔵文化財報告書166集
- 秋田県教育委員会 1990 「はりま館遺跡発掘調査報告書」 秋田県埋蔵文化財報告書192集
- 秋田県教育委員会 1993 「萩ノ台Ⅱ遺跡」 秋田県埋蔵文化財報告書236集
- 秋田県教育委員会 1997 「池内遺跡 遺構編」 秋田県埋蔵文化財報告書268集
- 秋田県教育委員会 1999 「池内遺跡 遺物・資料編」 秋田県埋蔵文化財報告書282集
- 阿部 千春 1993 「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺」 『考古学ジャーナル』 6月号No.362
- 石岡 憲雄 1999 「東北地方 前期(円筒下層式)」 『縄文時代』 10号
- 市村 高男 2000 「茂別館跡についての考察-調査の中間報告-」 地域史研究『はこだて』 32
- 岩国市立ミクロ生物館 2013 「日本の海産プランクトン図鑑 第2版」 共立出版株式会社
- 岩内町教育委員会 1958 「東山遺跡」 『岩内遺跡』
- 岩手県立博物館 2005 「縄文北緯40°～前・中期の北東北～」 岩手県立博物館第54回企画展図録
- 今村 啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(下)」 『考古学雑誌』 第63巻 第2号
- 江坂 輝弥 編 1970 「石神遺跡」 ニュー・サイエンス社

- 榎森 進 2011 「激動の北の中世」【新版 北海道の歴史 上】北海道新聞社
- 大館市教育委員会 2008 「男神遺跡発掘調査報告書」
- 大川 清・工業普通・鈴木公雄編1996「日本土器事典」雄山閣
- 太田 陽子・佐藤 賢・渡島半島活断層研究グループ1994 「函館平野とその周辺地形—とくに西縁の活断層に関連して—」【第四紀研究33】
- 大泰司 統 2004 「縄文文化 前・中期」【北海道考古学】第40輯
- 大沼 忠春 1981 「道央部の前期縄文土器群の編年について」【北海道考古学】第17輯
- 大沼 忠春 1984 「道南の前期縄文土器群の編年について」【北海道考古学】第20輯
- 大沼 忠春 1985 「魚骨文の新例について」【北海道考古学】第21輯
- 大沼 忠春 1986 「道南の前期縄文土器群の編年について(Ⅱ)」【北海道考古学】22輯
- 大沼 忠春 1993 「北海道東部の円筒土器文化」【考古学ジャーナル】6月号No.362
- 小笠原 雅行2010 「円筒下層式期の嘉制—青森市内の例から—」【青森県考古学】第18号
- 尾田 多良・佐藤 時幸 2013 「新版 微化石研究マニュアル」朝倉書房
- 乙部町教育委員会 1976 「元和」
- 海峡土器編年研究会 2005 「東北・北海道の縄文時代前期末葉—中期初頭土器の課題—資料集—」
- 上磯町 1997 「上磯町史」
- 上磯町教育委員会・北海道文化財保護協会 1981 「館野2遺跡」
- 上磯町教育委員会 1988 「富川砲壘跡」
- 上磯町教育委員会 1990 「矢不來3遺跡」
- 上磯町教育委員会 2001 「町内遺跡発掘調査事業報告—平成11・12年度発掘調査概要報告—」
- 上磯町市史編纂委員会 編 1917 「茂別郷土史」上磯町史資料集第2集
- 上磯町市史編纂委員会 編 1983 「添山」
- 上條信彦 2014 「アイヌ民族の豎臼と整枠、桶、手杵—形態・使用痕観察と残存デンプン粒分析から—」【東アジア古文化論攷 1】
- 上條信彦2014 「『扁平石器』の形態的分布からみた円筒土器文化圏の動態—半円状扁平打製石器、挟入扁平打製石器、挟入扁平磨製石器を中心に—」【青森県考古学】第22号
- 上條信彦 2015 「縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究」
- 亀田町教育委員会・市立函館博物館 1967 「サイベ沢B遺跡調査報告」
- 木古内町 1982 「木古内町史」
- 木古内町教育委員会 1974 「札苅遺跡」
- 木古内町教育委員会 1989 「鶴岡2遺跡Ⅰ」
- 木古内町教育委員会 1990 「鶴岡2遺跡Ⅱ」
- 木古内町教育委員会 1991 「釜谷4遺跡」
- 木古内町教育委員会 1992 「釜谷遺跡 概報」
- 木古内町教育委員会 1993 「釜谷遺跡概報」
- 木古内町教育委員会 1995 「釜谷遺跡概報」
- 木古内町教育委員会 1995 「釜谷5遺跡」
- 木古内町教育委員会 1996 「釜谷遺跡 概報」
- 木古内町教育委員会 1996 「亀川2遺跡・亀川3遺跡 概報」
- 木古内町教育委員会 1997 「亀川2遺跡Ⅱ・亀川3遺跡Ⅱ・泉沢3遺跡 概報」
- 木古内町教育委員会 1997 「新道3遺跡」
- 木古内町教育委員会 1998 「亀川2遺跡」
- 木古内町教育委員会 1998 「亀川3遺跡」
- 木古内町教育委員会 1998 「泉沢3遺跡」
- 木古内町教育委員会 1999 「釜谷遺跡」
- 木古内町教育委員会 1999 「新道2遺跡」
- 木古内町教育委員会 2001 「蛇内遺跡」
- 木古内町教育委員会 2002 「大釜谷3遺跡 概報」
- 木古内町教育委員会 2003 「大釜谷3遺跡」
- 木古内町教育委員会 2003 「泉沢2遺跡(B地点)」
- 木古内町教育委員会 2003 「泉沢2遺跡 A地点」
- 木古内町教育委員会 2003 「新道2遺跡Ⅱ北地点」
- 木古内町教育委員会 2004 「泉沢2遺跡 C地点」
- 木古内町教育委員会 2004 「蛇内遺跡」
- 久保 泰 1984 「原始・古代の松前」【松前町史 通説編第一巻上】
- 熊野 喜藏 他 1974 「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器」【北海道考古学】第10輯

クレア ミルソム・スー リグビー・監訳 小  
島郁生 2005 『ひとめでわかる化石のみか  
た』朝倉書店  
小崎 尚・野上 道男・小野 有五・平川 一  
臣 2003 『日本の地形2 北海道』  
国立歴史民俗博物館 2001『落合計策縄文時代  
遺物コレクション』国立歴史民俗博物館資料  
図録1  
小杉 正人『珪藻』第四紀学会編『第四紀  
試料分析法 2 研究対象別分析法』東京大  
学出版会  
小林 達雄 編 2008『総覧 縄文土器』(叻  
アム・プロモーション  
小山 正忠・竹原 秀雄 2004『新版標準土  
色帖』日本色研事業株式会社  
財北海道埋蔵文化財センター 2008 調査年報  
21  
財北海道埋蔵文化財センター 2009 調査年報  
22  
財北海道埋蔵文化財センター 1984『知内町  
湯の里遺跡群』北埋調報18  
財北海道埋蔵文化財センター 1985『知内町  
湯の里3遺跡』北埋調報32  
財北海道埋蔵文化財センター 1985『木古内  
町 建川1・新道4遺跡』北埋調報33  
財北海道埋蔵文化財センター 1985『札苺遺  
跡』北埋調報34  
財北海道埋蔵文化財センター 1986『上磯町  
矢不來2遺跡』北埋調報37  
財北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内  
町 建川2・新道4遺跡』北埋調報43  
財北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市  
石川1遺跡』北埋調報45  
財北海道埋蔵文化財センター 1987『函館市  
桔梗2遺跡』北埋調報46  
財北海道埋蔵文化財センター 1987『上磯町  
矢不來天満宮跡』北埋調報47  
財北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内  
町 新道4遺跡』北埋調報52  
財北海道埋蔵文化財センター 1997『千歳市  
キウス5遺跡』北埋調報116  
財北海道埋蔵文化財センター 1997『上磯町  
茂別遺跡』北埋調報121  
財北海道埋蔵文化財センター 1998『函館市  
西桔梗1遺跡(2)』北埋調報122

財北海道埋蔵文化財センター 1999『長万部  
町 花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139  
財北海道埋蔵文化財センター 1999『八雲町  
シラリカ2遺跡』北埋調報142  
財北海道埋蔵文化財センター 2003『森町  
倉知川右岸遺跡』北埋調報196  
財北海道埋蔵文化財センター 2006『北斗市  
館野遺跡(1)』北埋調報237  
財北海道埋蔵文化財センター 2006『古冠村  
古冠原野1遺跡』北埋調報239  
財北海道埋蔵文化財センター 2007『森町  
石倉1遺跡』北埋調報247  
財北海道埋蔵文化財センター 2009『白老町  
虎杖浜2遺跡(5)・ボンアヨロ4遺跡(2)』北  
埋調報262  
財北海道埋蔵文化財センター 2009『千歳市  
梅川4遺跡(2)』北埋調報269  
財北海道埋蔵文化財センター 2009『北斗市  
矢不來8遺跡(3)・矢不來9遺跡(2)・矢不來10  
遺跡(2)・矢不來11遺跡(3)』北埋調報272  
財北海道埋蔵文化財センター 2010『木古内町  
木古内2遺跡』北埋調報278  
財北海道埋蔵文化財センター 2010『木古内町  
大平遺跡・大平4遺跡』北埋調報280  
財北海道埋蔵文化財センター 2011『木古内町  
蛇内2遺跡』北埋調報281  
財北海道埋蔵文化財センター 2011『北斗市 館  
野遺跡(2)』北埋調報282  
財北海道埋蔵文化財センター 2011『北斗市 館  
野2遺跡A地区・B地区』北埋調報283  
財北海道埋蔵文化財センター 2011『木古内町  
大平4遺跡(2)・蛇内2遺跡(2)』北埋調報292  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『木古  
内町 木古内2遺跡(2)』北埋調報293  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『木古  
内町 札苺5遺跡』北埋調報294  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012『北斗  
市 館野6遺跡(1)』北埋調報295  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『木古  
内町 札苺6遺跡』北埋調報301  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『北斗  
市 館野2遺跡C地区』北埋調報303  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『木古  
内町 木古内遺跡』北埋調報304  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2013『木古

- 内町 釜谷 8 遺跡」北理調報305  
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 「せたな町 都遺跡」北理調報314  
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 「本古内町大平遺跡」北理調報321
- 斉藤 岳 2002 「青森県における石器の石材の研究について」『青森県考古学』第13号  
 青森県考古学会30周年記念論集
- 斉藤 岳 2010 「青森県内出土例を中心とした異形石楡について」『青森県考古学』第18号
- 佐々木 繁善 1997 「東北地方の黒曜石」『岩手考古学』第9号
- 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 一瀬 諭・若林 徹哉 2011 「普及版 やさしい日本の淡水プランクトン図解ハンドブック改訂版」合同出版株式会社
- 知内町教育委員会 1975 『森越』  
 市立函館博物館 1972 『サイベ沢遺跡-函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘調査報告書-』  
 瀬川 秀良 1959 「松前半島東岸の海岸段丘について」『東北地理』11
- 関根 達人 2010 「平成22年度北海道北斗市矢不來館発掘調査概要」第31回 南北海道考古学情報交換会 発表資料
- 関根 達人 2011 「北斗市矢不來館跡」第32回 南北海道考古学情報交換会 発表資料
- 関根 達人 2012 「北海道晩期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』第48輯
- 高橋 哲 2012 「円筒下層式期の土坑出土石器の研究」『北海道考古学』第48輯
- 高橋 哲 2014 「縄文時代の石器用途・機能研究の学史」『青森県考古学』第22号
- 高橋 正勝・小笠原 忠久 1976 「縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』みやま書房
- 高橋 正勝 1981 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 伊達市噴火湾文化研究所 2013 『KITAKO GANE』
- 戸井町教育委員会 1992 「戸井貝塚Ⅰ」  
 戸井町教育委員会 1993 「戸井貝塚Ⅱ」  
 戸井町教育委員会 1993 「戸井貝塚Ⅲ」  
 戸井町教育委員会 1994 「戸井貝塚Ⅳ」  
 戸井町教育委員会 1996 「戸井貝塚Ⅴ」
- 戸沢充則編1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 「土偶とその情報」研究会 1994 『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2 秋田大会 資料集
- 「富川の埴土」調査会 2012 「北斗市「富川の埴土」の地形図作成」『北海道考古学』第48輯 北海道考古学会
- 永田 方正 1984 『北海道蝦夷語地名解』草風館
- 日本植生史学会 2006 『三内丸山遺跡の生態系史』植生史研究 特別第2号
- 日本ペトロロジー学会 編 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社
- 日本の地質1『北海道地方』編集委員会 1990 『日本の地質1 北海道地方』共立出版株式会社
- 野村 崇 1985 『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
- 野村 祐一・石井 淳平・塚田 直哉 2008 「下国館跡 茂別館跡・矢不來館跡の基礎的研究」第29回 南北海道考古学情報交換会 発表資料Vol. 2
- 野村 祐一・石井 淳平・塚田 直哉 2009 「下之国館跡茂別館跡・矢不來館跡の基礎的研究」
- 名取 武光・峰山 巖 1954 『伊達町北黄金遺跡発掘調査報告』
- 名取 武光・峰山 巖 1957 「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯
- 名取 武光・峰山 巖 1963 「茶呑場遺跡付伊達町北黄金遺跡群」『北方文化研究報告』第18輯
- 新渡戸 隆・鈴木 克彦 1983 「日本海七里長浜の黒曜石原石採取踏査」『考古風土記』第8号
- 函館圏開発事業団 1974 『西桔梗』
- 函館市教育委員会 1977 「函館空港第4地点・中野遺跡」
- 函館市教育委員会 1979 「見晴町B遺跡発掘調査報告書」
- 函館市教育委員会 1981 「権現台場遺跡発掘調査報告書」
- 平取町 2015 『AOTORA=アオトラ石の不思議-そのⅡ』第三回シシリムカ文化大学講座

資料集

- 福島町教育委員会 1985 『館崎遺跡-円筒土器文化における「土器塚」の調査-』
- 福田裕二 2014 『円筒土器文化以降における集落と盛土遺構の変遷-垣ノ島遺跡の盛土遺構の調査から-』『日本考古学協会2014年伊達大会 研究発表資料集』
- 藤本 英夫 編 1980 『日本城郭体系1 北海道・沖縄』 新人物往来社
- 弘前大学人文学部文化財論研究室 2012 『北海道渡島半島における戦国城館跡の研究-北斗市矢不來館跡の発掘調査報告-』
- 北斗市大野町史編纂委員会 2006 『新大野町史』
- 北斗市教育委員会 2009 『北斗市 ヤギナイ遺跡』
- 北斗市教育委員会・函館市埋蔵文化財事業団 2012 『北斗市 茂辺地4遺跡』
- 北斗市教育委員会・函館市埋蔵文化財事業団 2013 『北斗市 茂辺地4遺跡』
- 北斗市教育委員会 2015 『北斗市 茂辺地4遺跡』
- 北斗市教育委員会 2015 『北斗市 村前ノ沢遺跡』
- 北海道文化財保護協会 編 1981 『館野2遺跡』
- 前川寛和 2006 『三内丸山遺跡出土の磨製石斧の岩石学的特徴と石材鑑定の可能性について』『史跡三内丸山遺跡 年報10』
- 松浦 武四郎 1856 『渡島日誌 其の巻』
- 秋葉 實 解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター
- 松浦 武四郎 1859 『東西蝦夷山川地理取調図二』
- 山田 秀三 監修/佐々木 利和 編 1988 『アイヌ語地名集成』<別冊>東西蝦夷山川地理取調図 草風館
- 松前町教育委員会 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1974 『松前町高野遺跡発掘報告』
- 松前町教育委員会 1984 『松前町郷土資料館調査報告』
- 松前町教育委員会 1983 『白坂』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1993 『八木A遺

跡・ハマナス野遺跡』

- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1995 『八木A遺跡II・ハマナス野遺跡』
- 南茅部町教育委員会 2002 『大船C遺跡 ハマナス野遺跡Vol.XVII』
- 南北海道考古学情報交換会 編 1995 『円筒土器下層式図録集』 南北海道考古学情報交換会
- 南北海道考古学情報交換会 編 1995 『円筒土器下層式図録集II』 南北海道考古学情報交換会
- 南北海道考古学情報交換会 『情報交換2 渡島半島における縄文時代中期末から後期初頭の土器様相』第23回 南北海道考古学情報交換会資料
- 三上 敏一・越田 賢一郎 2004 『大野町出土の越前播鉢について』『土・酒・海・山-故 石本省三氏追悼論集-』
- 三宅 徹也 1981 『円筒土器』『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 三宅 徹也 1989 『円筒土器下層様式』・『円筒土器上層様式』『縄文土器大観』1 小学館
- 宮内 崇裕・八木 浩司 1984 『松前半島東岸の海成段丘と第4期地殻変動』『地学雑誌』93-5
- 村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』雄山閣考古学選書10
- 村越 潔 2007 『円筒土器文化の研究史』『村越 潔先生 喜寿記念論集』弘前大学教育学部考古学研究室OB会
- 森町教育委員会 1982 『森川A遺跡』
- 森 靖裕 2002 『北海道・上磯町の中世館跡と近世台場跡』『日本歴史』2002年5月号 吉川弘文館
- 森 勇一 2003 『珪藻』松井 章 編集 『環境考古学マニュアル』同成社
- 八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡』
- 山内先生没後25年記念編集刊行会 1996 『画龍点睛-山内清男没後25年記念論集-』
- 若山誠治 2011 『上野尻遺跡G地区における縄文時代前期後葉-末葉の住居跡について』『青森県考古学』第19号



## 報告書抄録

ふりがな	ほくとし たてのろくいせきかっこに							
書名	北斗市 館野6遺跡(2)							
副書名	高規格幹線道路両館江差自動車道両館茂辺地道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	二巻目 補償道路地区							
シリーズ名	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第327集							
編者名	大泰司統							
著者・撮影者名	大泰司統・村田 大・佐川俊一・佐藤 剛・袖岡 淳子・吉田裕史洋・立田 理・中山昭大							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2016年10月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° . ° . °	東経 ° . ° . °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館野6遺跡	北海道北斗市 館野 北斗市館野91 ほか	01236	B-06-79	41 47 12	140 37 18	20090608 ～20091113	5,763	高規格幹線道路両館江差自動車道両館茂辺地道路工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
館野6遺跡	集落跡	縄文時代早期	盛土遺構	縄文土器	縄文時代前期後半の盛土と、同時期の集落を検出した。削平が行われたと思われる場所から墓坑を検出した。縄文時代中期前葉の竪穴住居・廃棄場所を確認した。近世(～近代)の陶器が出土した。対岸の矢不來砲台と同時期。			
		縄文時代前期	住居跡 50軒	コックロ式・中茶路式・東銅路Ⅳ式・円筒土器下層式・円筒土器上層式・サイベ沢Ⅴ式・見晴町式・大安在B式・榎林式・島崎式・大洞式(以上並行するものも含む)				
		縄文時代中期	土坑 18基					
		縄文時代後期	焼土 20ヶ所					
		近世	Tピット 1基					
			遺物集中 1ヶ所					
			集石 2ヶ所					
				近世陶器				
				土製品				
				石器等				
			石鏃・石槍又はナイフ・ドリル・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石核・両面調整石器・フレイク・石斧・たたき石・すり石・扁平打製石器・北海道式石冠・石刷・砥石・石皿・台石・加工痕のある礫・焼成礫など					
			石製品					

---

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第327集

北斗市

**館野6遺跡(2)** 補償道路地区

- 高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成28年9月30日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地1  
TEL (011)386-3231(代表) FAX (011)386-3238

印刷 柏楊印刷株式会社  
〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号  
TEL (011)789-2377 FAX (011)789-2376  
E-mail : info@hakuyo-print.jp <http://hakuyo-print.jp/>

---

